

魔弾使いのTS少女

黄金馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TSという物と異世界転移と呼ばれる物に同時に出会ってから一年近い時間を生きてきた元男の隻腕少女、暁ひなた。科学力もそれなりに発達した魔法と剣の異世界で一年の間に色々な事があつたけど、今は元気に色んな所を旅しています。

——けれども、その一年で起きたことは誰にも話せない。その間に穢れた存在を認めてくれる陽だまりが出来たのなら、それに依存し全霊でそれを守ろう。穢れた牙を使っても。

第十四魔弾、第十七魔弾に挿絵を投稿してあります

目次

第一魔弹	1
第二魔弹	7
第三魔弹	15
第四魔弹	24
第五魔弹	30
第六魔弹	42
第七魔弹	51
第八魔弹	58
第九魔弹	67
第十魔弹	76
第十一魔弹	87
第十二魔弹	94
第十三魔弹	99
第十四魔弹	109
第十五魔弹	118
第十六魔弹	128
第十七魔弹	137
第十八魔弹	146
第十九魔弹	154
第二十魔弹	160
第二十一魔弹	165
第二十二魔弹	172
第二十三魔弹	179
第二十四魔弹	185

第四十八魔弹	402
第四十七魔弹	394
第四十六魔弹	390
第四十五魔弹	380
第四十四魔弹	371
第四十三魔弹	365
第四十二魔弹	357
第四十一魔弹	347
番外	332
第四十魔弹	321
第三十九魔弹	310
第三十八魔弹	303
第三十七魔弹	295
第三十六魔弹	286
第三十五魔弹	273
第三十四魔弹	267
第三十三魔弹	257
第三十二魔弹	250
第三十一魔弹	245
第三十魔弹	237
第二十九魔弹	228
第二十八魔弹	221
第二十七魔弹	210
第二十六魔弹	201
第二十五魔弹	194

第七十魔弹	608
第六十九魔弹	601
第六十八魔弹	589
第六十七魔弹	583
第六十六魔弹	576
第六十五魔弹	569
第六十四魔弹	561
第六十三魔弹	554
第六十二魔弹	543
番外4 ひにやた	534
番外3	526
番外2	519
第六十一魔弹	509
第六十魔弹	500
第五十九魔弹	493
第五十八魔弹	484
第五十七魔弹	471
第五十六魔弹	463
第五十五魔弹	458
第五十四魔弹	448
第五十三魔弹	442
第五十二魔弹	437
第五十一魔弹	430
第五十魔弹	420
第四十九魔弹	410

第七十一魔弾	617
第七十二魔弾	623
第七十三魔弾	628
第七十四魔弾	638
第七十五魔弾	645
最終魔弾	651
あとがき	659
真・最終魔弾	661
After 第一魔弾	668
After 第二魔弾	678
Another エンド ルナ生存√	685
ミラ前日譚	698

第一魔弾

炎に囲まれた道を歩く。

その行為がどれだけ苦痛であり、襲ってくる眠気に負けて瞳を閉じてしまえばその炎に吞まれ死んでしまうという可能性を孕んだ自殺的とも思える行為かは、それこそ子供であって分かるだろう。

そんな自殺行為とも思える行動をしているのは一人の少女と思える外見をした一人の人間だった。

右手で左手の肩の部分を抑え、返り血なのか少女自身の血なのか、それともペンキなのか絵具なのか炎の中では分からない赤色の液体で全身を濡らし、息を切らして足を引き摺るようにして炎に囲まれて歩いている。彼女を濡らしている赤色の液体。それが何なのかを把握するに事足りる材料となるのは彼女が右手で抑えている左肩だった。

彼女は長袖の服を着ている。しかし、左肩。いや、左肩そのものを含めた左手全体を包んでいた筈の袖はそこには無く、そこに通っていた筈の左手も存在しない。彼女の服と体は左側がより赤く染まっており、抑えている左肩があつたであろう場所からは血が今も止まることなく流れている。元々は銀髪であつたのであろう、膝下まで伸ばしていた髪も殆どが赤に染まってしまったている。他にも、脇腹は抉れたように不自然に凹んで露出していたり、胸元も服が一直線に切られて血に染まった肌が露出している。他にも、手や足、見える範囲の場所に傷がない場所はなく、全身を濡らす赤は大半が彼女自身の血だという事が分かった。

満身創痍。その様子が正しい彼女は焦点の合わない目でただ灼熱の中を歩く。木造の家が、畑の作物が、辺り一帯の植物が、燃える物全てが燃えて酸素を消費している中で歩く彼女を助ける手はなく、おぼつかない足取りで己の目指す場所へと歩く。

そして、不意に彼女を囲んでいた炎が途切れる。それは消火された訳ではなく、周りに燃える物が無くなっただけの事だった。焦げ臭い地面には雑草であつたのであろう、灰のような物が敷き詰められてお

り、そこに座り込めば灰に汚れる事は確実なものにも関わらず、彼女は膝を付いた。

息を荒げ、右手だけを地面に付き、四つん這いのような格好で酸素を求めらる。

新鮮とも言えない酸素が己の中に入り、しかし灼熱に揉まれた空気が程熱くない空気は少しの安らぎを与えてくれる。が、その表情は暗く、辛そうで、苦痛に満ちたまま。その表情のまま、彼女はもう一度立ち上がり、後ろを向いた。

灼熱に吞まれた場所。それは、彼女の記憶の中では村と呼べる程度の方が数百人集まった現代と比べれば比較的小さな村だった。それが、燃えている。彼女の思い出を過去の物とすべく燃える。が、それを止める手立てはない。止める道理もない。もう、この村の生き残りはいないのだから。もう、この村の近辺に人間の形をした生き物は彼女一人しかいないのだから。

『……………どうして』

呟いた。誰に向けてでもなく、自分に向けてでもなく。ただ、彼女の内心が自然と口を割らせる。歯を食いしばり、右手で左肩があつた場所を抑え、翡翠の瞳に涙を浮かべながら血に塗れ、意識は朦朧として……………だからこそ。だからこそ、言葉が出てしまう。

思い出と恩人と彼女の全てを焼却する炎を、この災害を引き起こした元凶を思い出し、憎み、恨み、無力感に苛まれ、それに対する怒りも込めて自然と口が開く。

『……………どうして、こんな……………あの人達に罪なんてないのに……………』

彼女の脳裏に過るのは、何人かの人の笑う顔と、最後の表情。全てを諦めたような笑い顔、この世全てを憎まんとする程の表情、訪れた災厄に絶望した表情。様々な、最後。それを思い出し、思い出してしまい涙を流しながらこの村で過ごした時間を、温かさを思い出し、それをもう二度と味わえない幸福として噛み締め泣きながら、口にする。

『……………たった一人のボクを助けてくれたのに』

この村の近辺の森で目を覚まし、天涯孤独で金も住む場所もない彼

女を助け、家族として迎え入れてくれた老夫婦と、そんな老夫婦に拾われた彼女を様々な方法で笑顔にしてくれた村の人々を思い出す。

ああ、なんでこんな事になったんだっけ。そう考えるが、分からない。全ては偶然だったのかもしれない。全ては計画された事だったのかも。この災害を引き起こした災厄が何を考えていたのかなんて分かるわけがないが、それでも、転生という奇妙な因果に踊らされ見知らぬ世界に、異なる性別で訪れた彼女を救ってくれた優しい人達が死んでいい道理なんて考えつく訳なく、そして有り得る筈がなく。

恩返しとして災厄に戦い、まるで赤子の手を捻るかのようなお氣楽さで彼女の体に消えぬ傷を刻み、腕を斬り飛ばした災厄を憎み恨みを募らせ、しかし叶わないであろう復讐心に歯噛みし、心が黒に染められていくのを受け入れながら歯を食いしばる。

だが、もう限界だった。

痛みと全身に負った火傷のせいで尽きた体力を補っていた気力も尽き、灰の上に受け身も取れずに倒れる。

もう、思い出すことすら億劫だった。

あの老夫婦の最後の言葉は何だっけ。そんな思考が頭を巡り、視界が黒に染まっていく。血を流しながら涙を流し倒れた彼女を助ける手は無く、そのまま意識が持っていかれる。

『ぜったい……ころ、す……』

最後に恨みの籠った言葉を乗せた呪詛のような物を吐き、そのまま彼女の意識は闇へと消えていった――

――それが、約一年前の話だ。

結論から言えば、彼女は生きていた。致死量に近い血を流しながらもしかし彼女は意識を取り戻し生きながらえた。その代償は左手そのものと全身に負った傷だった。

幸いにも顔や首の傷、その他服の合間から露出している部分にあった傷跡全ては消えたため見てくれは美少女な彼女は今も服を着れば美少女のままだ。だが、その服を脱げば全身の火傷跡や斬られた跡はしっかりと刻み込まれており、右の脇腹には何かに抉られたような痕

跡が未だに残り、左側と比べると右の脇腹は若干凹んでいるように見えてしまう。

服を脱げば醜い裸体。そして、肩すら無くなった左手。それが彼女が生き残った代償として払った物の一部だった。

「……TS転生、ねえ」

彼女は歩きながら呟いた。

自分の体を顔すら隠すように羽織った茶色のローブの下でそう呟いた際の表情は、とても明るい物ではなかった。

「昔は憧れたけど、こうして自分の身で味わってみると……ああ、とても嫌な物だ」

道行く人に聞こえない程度の小ささで彼女は呟きながら街の中を歩く。

彼女の呟きは、決して彼女の妄言、妄執、妄想の類ではなく、現実を起こった非現実的な現象であった。

転生。輪廻転生とはまた違う、記憶を保持したままの転生はかなりイレギュラーな事態を引き起こしながら彼女の身に降り注いだ。いや、当時は彼女、ではなく彼……つまりは男だった。彼は転生をどこの誰か、神なのか悪魔なのか魔法使いなのか、はたまた何かしらの自然現象のせいなのか分からないが、その身で受けさせられ、一般的には異世界と呼ばれる日本、いや、二十一世紀の地球ではない何処かへと飛ばされた。それをすぐに判断できたのは、所謂魔法という物、そして魔獣と呼ばれる魔力だけで構成された獣に出会ったからだっただ。

転生させられた際に彼の肉体は何があつたのか分からないが、黒髪黒目の一般的な日本人の大学生だった肉体は銀髪碧眼の少女の肉体へと生まれ変わっていた。俗にいうトランスセクシャルを、彼は自分の意志を確認される事なく無断でされ、身寄りも無ければ金も家も服も何もない異世界へと飛ばされた。

身長は百四十後半にギリギリ届くか届かないか程度で、銀色の綺麗な髪の毛は当時は膝下まで、今は腰まで伸ばされている。そして、綺麗な碧眼と整った顔立ちで彼女は十分に美少女と言える年齢だった。

体が成長しないため、恐らくこの世界に来る前の年齢である十八歳からスタートし、今は二十歳になったため一般的な女性と比べたら小柄としか言えない体系だが。女性特有の膨らみも、殆ど皆無だったりする。

そんな身体で一年近くとある村で生き、そして全てを災厄によって失い、何も無い状態から始めた一年は復讐のためだけに存在して、その間に路銀を稼ぐために行ったのは手荒い事だった。それを共にした相棒は今も彼女の右足に巻き付けられたホルスターに収まっていた。

閑話休題。

彼女は言葉の通り、昔は転生という物に憧れていた。だが、そうして転生させられ待っていた物は理不尽としか言えない蹂躪であり、それによって彼女は現実を見た。

日本という国がどれだけ平和で、剣を握り魔法を飛ばすこの世界が物騒で、悲しくて、恨み辛みが籠った世界かを把握した。

ファンタジー世界に夢も希望もない。あるのは弱肉強食という自然界のルールだった。

「……まあ、戦える力があるのは幸いだけど」

それと共に触られるのは、彼女の相棒である、ホルスターに収められた銃だった。

起爆銃。そう呼ばれる彼女の髪色と同じ銀色のボディを持った今や旧式のリボルバー式の拳銃は魔弾と呼ばれる物を撃ち出すのに使われ専用の道具だ。己で魔弾と呼ばれる魔法を内蔵した弾丸を作り出し、起爆銃でそれを起爆させ、魔法を発動する。それ故に、起爆銃と呼ばれる。

そんな起爆銃と魔弾が、彼女の唯一の戦うための力だった。

「それはどうでもいいとして……」

そんな呟きは今はバツサリと斬り捨て、彼女は腰に着けたポーチに手を突っ込み、片手でも開ける折り畳み式の財布を取り出すと、もう一度ポーチの中に手を突っ込んでとあるカードを取り出した。

「仕舞っておかないと。落とすそうだし」

それは彼女が所属するある団体の一員である、という証明証であり、それと同時に彼女の身分証でもあった。そこには、勿論彼女の名前も書かれていた。

暁ひなた。この世界の文字で、書かれていた名前は、日本風に言い換え書き直すとそうなっていた。

彼女……ひなた自身が決めた名前であり、実は男の頃と名前は変わっていない。男の時の名前は暁陽太。陽太という漢字をひらがなに直しただけの名前だったが、ひなた自身それが一番しっくりと来た。恐らく、何らかの要因で日本に帰ったとしても、ひなたは男に戻っていない限り、この名前を使っていくだろう。この世界では名前は外国風で名前の後に苗字が来るため、基本的に自己紹介はヒナタ・アカツキで行うが。

そんなこの体での名前が刻まれたカードを器用に片手で財布のカード入れに入れると、財布に用が無くなったのかポーチに財布を突っ込んだ。

「それに、カードだけスられたら面倒だしね」

ひなたはポーチを一回叩いてポーチがカード入れを入れた拍子に落ちていないかを確認してからさして、と呟いた。

目指す先はもう少し先だ。

第二魔弾

ひなたは辿り着いた場所、人の住む街としては荒廃が進んでとてもルールや情が存在しないような汚れて寂れた場所だった。居るだけで悪い空気に体を汚染されているのではないかと思ってしまうほどの環境の悪さ。その名は。

「ほんつと、スラムに作るのは止めてほしかったよ……」

スラム。つまりはスラム街の事だが、この世界のスラムは基本的に街はずれの人が住んでいない場所にポツポツと小さな町のように家が建っている場所だ。そこがスラムかを判断する材料は明らかに空気が淀んでいる事、そして街から外れてすぐにこの先スラム、と書かれた看板がある事。意外と簡単に判断できる。

この世界は日本ほど優しくない。義務教育なんて無ければ孤児院なんて数える程度しかなく、知恵も無ければひなたのように戦う事も出来ない人間が行き先を失い辿り着く場所。底辺に比較的近い人生を送ってきた人間達の住処。それがスラムだ。ひなたはそこへ足を踏み入れた。

スラムに居るのは、法なんて気にしないような荒くれ者の男、体を差し出して食い物を恵んでもらう女、生き残るため様々な場所から盗みを行いその日を凌ぐ子供。生きるために様々な事をしている底辺街道驀進中の人間達。勿論、その中には子供や女を攫いそれを売って金を稼ぐ裏の人間もいる。

つまり、ひなたは目的地を探すために歩き回る中でそういう馬鹿共に絡まれるの可能性がある、という事だ。スラムに入ったのだから仕方のない事だと言えるが。

ならば何故、そんな可能性がある場所に一人で入っていくかという、このスラムにはとある商売をしている人間がいる。

表から裏まで、様々な情報を商品とし売買を行う人間、通称、情報屋だ。ひなたはその情報屋から情報を買うために今、こうしてスラムに入っている。様々なスラムに入っては情報屋を回ってきた日々を送ってきたひなたにとって、最早スラムはそこまで怖い場所ではな

かった。

端的に言えば慣れた。男共の下衆な視線に晒される事も、何か値踏みをするような目で見ている人間にも、少年と勘違いしているのか獣のような視線を送る女にも、荷物をどうひったくろうか考えている子供の視線にも、何もかもに、だ。

「……けど、やっぱウザい」

そんな視線がひなたをイライラさせる。まるで見世物小屋の見世物に成り下がった気分だからだ。

だが、そんな視線もワザとらしく足のホルスターと、それに収まっている起爆銃を見せればその視線たちの大半は明後日の方を向く。

起爆銃を使い戦う人間、通称魔弾使いは数が少なく、基本的にはあまり強くない。魔弾という物に魔法を加工して起爆銃にそれを込めて放つ、というアクションを行うよりも少し詠唱して魔法を使ったほうが圧倒的に早いし、わざわざ魔力で出来た薬莢に魔法と魔力を詰めて弾丸にして放つ、なんていう非効率な事をしなくても済む。それに、魔弾に込められる魔法には上限があり、魔弾を使った戦い方を極めるなら魔法を極めたほうが魔法の威力も範囲も魔弾の何歩も先を行くからだ。

では、何故それを見せただけでスラムの人間の視線が逸れるのか。それは、魔弾使いはよくわからないから、だ。

数が少ないがためにそれを極めた人間は数少なく、その人間たちは全員がバラバラな戦い方をする。それ故に、魔弾使いの基本的な戦い方を理解している人間は少なく、分からない分らないと言っている間に何をされるか分かったものじゃなく、なるべく敵に回したくない、と思うからだ。

要するに先に立つよく分からない戦い方をする変態共の恩恵だ。ひなたはそれにあやかっているだけだった。変態の光を背に受けて威張り散らす、というよりも威嚇するのは虎の威を借りる狐状態だが、身の安全が確保できれば何だっていい。躊躇したら食われるのがこの世界だ。

「よし、これで鬱陶しいのは——あだっ!!?」

そうして鬱陶しい視線を拭い、気を取り直して情報屋がいる場所を探そうと適当な建物が建っている道の角を曲がった時。自分の体が何かに当たり、吹き飛ばされた。そして体から地面に着地し、すぐに頭を打った。それは幾ら荒事を性分としている故に鍛えているからといって痛くない訳がなかった。

だが、痛みには慣れている。すぐに頭を抑えながら立ち上がり当たった物の無事を確認する。何故無事を確認するかと言うと、ぶつかった時に彼女の女らしくない声と同時に声が聞こえたからだ。

「きゃっ!？」

そんな女の子らしい悲鳴と共に少女が尻餅をついた。どうやら、ひなたにぶつかった衝撃はたたらを踏んでなんとかバランスを取る猶豫を与えてくれなかったらしい。

この衝撃は、多分全力疾走でぶつかって来やがったな、とひなたは軽く内心で毒付きながらも頭を抑えていた右手を素早く自分のポーチと起爆銃を収めたホルスターにやり、何も盗られていないのを確認する。どうやら、完全な事故らしい。が、それはそれで何となくムカつく。

下衆な視線に晒されるのは存外ストレスになるらしく、そのストレスを解放して少女に怒鳴り散らしたい気分だったが、それをグツと堪える。一言謝ってくれれば見逃そう、と思いい手を差し伸ばそうとする。

が、尻餅をついた少女はひなたに視線を投げる事すらなく、すぐに立ち上がりながらひなたの横を通ってそのままひなたが来た道を走って去ろうとした。

「おっと」

それを反射的に手を掴んで止める。止められた少女はいきなり手を掴まれた事に驚きながらも手を振り払って逃走しようとする。その力は荒事を性分とするひなた以上で、すぐに振り払われそうになるがそれを全力で耐える。

「一言謝罪があつてもいいんじゃないかな？　ボク、思いっきり頭打ったんだけど」

「は、離して!!」

どうやら、かなり必死なようでひなたの手から逃れようと全力で手を振り払おうと今も手を振っている。

だが、ひなたとてぶつかられて文句一つ言わない聖人なんかではない。イライラを体現するかののように額に青筋を浮かべながらさてどうしてやろうか、と考えた直後、ひなたは違和感を感じた。

視線を感じる。それも、この建物の角を背にさせるかのように周りに続々と人間が集ってきている。

「……あー、君さ、もしかしてファンから逃げてるアイドルとかそういう有名人だったりする? 周り、囲まれているんだだけだよ」

「え……?」

少女の抵抗が軽く収まった。そして、すぐに周りを見た。

ひなたと少女は、何やら怪しい風貌をした男たちに囲まれていた。その男達は何か相談しているが、家の角を壁にしてひなた達と距離をジリジリと詰めていた。

これは何か訳有りか。なるべく腕がないと悟らせないために体を動かしながらホルスターから何時でも起爆銃を抜けるように手をかけながら戦闘の準備に入る。一方、この男達に追われていたであろう少女に関しては顔色が真っ青になっている。どうやら、この状況下に絶望をしているようだ。

涼しい顔をしているように見せているひなたもちよつとマズい、と思ってしまう。数の暴力というのは個人の暴力を軽く超えてくる。それが分かっている以上、多勢に無勢は冷や汗物だ。

「えつと、その小汚い男達は何が目的かな? 場合によっては正当防衛に入るけど?」

だが、手札は見せない。一度シリンダーを開き、手触りで何の魔弾が込められているかを確認し、再びシリンダーを閉じる。男の達の数は十人。少し、ひなたでは苦戦する人数だった。だが、まだ相手が素手なら勝機はある。それを今装填されている弾丸で確認してから、完全に意識を男たちへ向ける。

——その瞬間、男達は懐から黒光りする何かを取り出した。それ

は、ひなたの今握っている物と形だけは同じのリボルバー拳銃だった。

「ッ!? 伏せて!!」

空撃ちしながら一瞬にして起爆銃を構え、目的の弾丸が撃てる状態になった瞬間、空撃ちを止めてその魔弾を放つ。

魔弾は放たれた瞬間、砕け散り、内包されていた魔力を開放し、ひなたと頭を抑えながらしゃがみこんだ少女を守る壁となった。その後、魔力の壁に弾丸が当たり、音を立て始めた。壁に当たった跡を見てみると、どうやら弾は二人の足や手を狙っていたようだった。どうも、殺す気はないらしい。こちらには殺意しかないが。

一先ずは防御、シールドを張れた事にホツとしながらも、次の一手を考える。もし、この魔弾が広域防御型ではなくひなただけを真正面から守る物だったら死んでいた隣で蹲っている少女が死んでいたかもしれない。

「二応、使っておこうかな」

再びひなたは空撃ちを高速で数回してから己の胸に銃口を当てて魔弾を放つ。その魔弾はひなた本人に当たると、ひなたにダメージを与えずに砕け、ひなたを魔力によって強化する。

それは、五感の強化。無いよりはマシ程度の強化にしかならないが、少なくとも素手での格闘戦で有利を作れるくらいには強化をもたらしてくれる。そして、この時点で次の六発の魔弾の作成に入っておく。

「な、なんだアイツ! 魔弾使いか!」

「おい誰だよ! 埋め合わせにあのガキも攫うとか言った馬鹿は!」

「何か訳あり? まあ、でもボクには関係ないかな」

何か訳有りでひなたも襲ったのかもしれないが、銃口を向けてきた時点で敵だ。抹殺対象だ。壁の内側から飛び出し、すぐに狙いを定めて魔弾を放つ。

今度の魔弾は撃ち放たれても砕ける事無く突き進んでいき、一人の男の腹に食い込み、そのまま吹き飛ばした。

「魔弾使いなんてどうすんだよ! 対処法なんて知らねえぞ!!」

「知らないまま倒れてどうぞ」

そして叫んだ男に向かって魔弾を放ち、ヒットさせる。男も吹き飛んで気絶した。残り、八人。

魔弾使いは珍しき故に、対処方法を知らない、という人間が多い。魔弾使いからしたら、銃を跳ね飛ばされたら出来ることは限られたり、近づかれたらやりにくい事この上ないしリロードを狙われたらどうしようも無いのだが、それを知るのはい部の人間と魔弾使いだけだ。

残り二発も困惑しながらリロードしている二人に向かって放ち、勿論命中させる。魔弾は反動がない上に風で弾の軌道がブレる事も無いのが普通の拳銃とは違ったメリツトの一つだろう。

「おい、あいつ六発撃ちきったぞ！」

「今の内に撃つちまえ！」

「あっちゃあ。数えてる人がいたかつと」

既にさつき撃った魔弾の壁は消えている。ひなたは残り六人の銃撃に晒される事になる。が、丁度この時に魔弾の作成は終了する。

ひなたから少し離れた場所に六発の銃弾が生み出され、空中に浮いている。ひなたは銃撃が始まるであろう循環に走り出し、シリンダーを開いてその銃弾とシリンダーの位置を合わせる。そして、銃撃が始された瞬間、ひなたは銃弾をシリンダーに突っ込み、体を回転させながらシリンダーを閉じる。

その時、ローブを弾丸が貫いた。

「あ、当たった！」

弾丸は確かにローブを貫いた。だが、ひなたは全く表情を歪めない。い。

何故なら、その位置は、既にある腕の位置だから。

「残念、そっちは無いんだよね」

そして、お返しに魔弾を撃ち込む。これで残り五人。

だが、その五人はリボルバーのリロードに入っている。流石に三十六発の弾丸の雨の中に晒されるのはヒヤッとしたが、一発も当たらなかったのは正しく奇跡だろう。五感の強化で多少の弾は避けていた

のと、相手がリボルバーに不慣れなのか殆どの弾が明後日の方向に行っていたのもあるが。

後は隠れもせずにリロードする馬鹿共に魔弾を撃ち込んで終わり。シリンダーが空になると同時に相手は全員地に伏した。誰もスピードローダーを使わなかったのは全く意味が分からなかったが。何かしらの縛りプレイだったのだろうか。

相手が全員地に伏せて動かないのを確認してから魔弾の作成に入りつつ、未だに伏せている少女の元へと行く。

「全員倒したからもういいよ」

少女の前に立ち、そう告げると、少女はちよつと顔を動かして周りを見た。

そして、ひなた以外には立っている人間が居ないのを確認し、少女は顔を上げた。どうやら、一応は助かったのだと理解したらしい。

「……あ、あの」

「お礼ならいいよ。ただの正当防衛だし」

そして、作成し終わった魔弾をひなたは目の前に浮かべると、シリンダーを開いて腕を振るうことで魔弾をシリンダー内に突っ込み、シリンダーを閉じるとローブの中のホルスターにそれを仕舞った。

着いてそうそうの修羅場だったが、何とかくぐり抜ける事が出来たようだ。内心では冷や汗ダラダラだったのだが、何とかなつてよかった。もしも相手が全員拳で殴り掛かってきたら数発は拳を貰っていた。相手が魔弾使いを相手にした事が無くてよかった。

「はあ……魔弾使いには一対多は向いてないのに……」

と、言うのも、それは単純にリロードにかなりの手間がかかるからだ。魔弾は普通の弾丸とは違い、魔弾使いの魔力と魔法を弾丸に加工した物であり、それをこの起爆銃と呼ばれるリボルバー型の魔弾撃ち出し機で効力を増幅させて放っている。そのため、魔弾一発一発に魔法一回分の手間に加えて弾丸に加工するという手間がかかってしまうため、リロードがかなり面倒な代物になっている。しかもひなたはスピードローダーが使えないため、弾を作り置きしておいてスピードローダーに予め付けておく、というのも出来ない。

そして、魔弾使いは魔法と魔力を内包した魔弾を作成する、という魔法とは異なった適正も必要なため、かなり珍しい存在になってしまっている。ひなたは魔法が使えず、魔弾を作成する才能だけがあったため、魔弾使いとなった、かなり特異な例だが。

それに、起爆銃というのなかなか値段が張り、需要も供給も少ないため売ってる場所すらこの世界にチラホラとしかない。魔法と魔力が加工された弾をこの起爆銃で起爆し、魔法を発動させるというかなり特殊な造りのため、供給がかなり少ないのだ。それに、魔弾を作れる人間なら普通は魔法も使えるため、わざわざ起爆銃を使う事もない。ひなたの起爆銃はお古なので実質タダで貰った物だが。

「まあ、何とか買ってよかった。ほら、立てる？」

「は、はい……その、ありがとうございます」

「いいっていいって」

起爆銃をホルスターに仕舞い、ひなたは少女に手を伸ばして少女を立てせた。

改めて見て分かる。彼女はかなりの美少女だ。誰の手つきでもないので意外でしかないが、それなりの修羅場という物を潜ってきたのだろう。結構走ってきた筈なのに、汗もかいていないし息も少ししか乱れていない。

だが、戦えはしないのだろう。彼女からは他人の血の臭いがしない。それに、手も柔らかい。人を殴ったことがない手だ。

「それじゃあ、何で追われていたのか教えてもらおうかな」

立たせた彼女に怖がらせないように笑顔でそう聞いた。

が、少女は少し困った様子でひなたの問いに言葉を返した。

「……いい、言わなきゃ駄目ですか？」

その言葉には勿論、としか返さなかった。場合によってはこれはひなたにも被害が来る。そうなる前に入る杭を打てるのなら打っておきたい。そう考えた結果だった。

初日から本当に変なことに絡まれた、とひなたは笑顔の裏で溜め息を吐くしか出来なかった。

第三魔弾

「はあ？ 分からない？」

「う、うん……」

思わず間拔けな声をひなたは上げてしまったが、そんな声を上げてしまうのは無理がなかった。

あの場からいそいそと抜け出した二人は適当な座れる場所へ行き、今回の騒動についての話を聞いた。が、帰ってきた言葉は一つ。何でこうなったのか分からない。ただそれだけだった。

思わずひなたが片腕ともう無いもう片方の腕で頭を抱えようとしたのは悪くないだろう。あんなに殺意丸出しで追われたのにも関わらず、その理由が分からないなんて。予想外と言えば予想外だが、溜め息ものの予想外が出てきてしまった。

あの男達が麻酔弾やスタンガンではなく、リボルバー。本物の拳銃で実弾を撃ってきた理由。それが分からない。攫うのなら、体目的の筈なら、リボルバーなんて使わない筈だ。それに、あの男達はリボルバーの命中精度はかなり悪かった。リボルバーで相手を殺さずに攫う、という事に慣れているとは思わなかった。そうになると、本当に分からない。あの男達の目的が。

それに男達は埋め合わせにひなたを攫うと言った。その理由は分からないが、ひなたのような貧相でちんちくりんな女でも埋め合わせが出来るという事は、あの男達はただのロリコン、という事に落ち着くかもしれないのだが。

「……えっと、シャーレイ、だったかな？ 取り敢えず、何があつて追われ始めたのか、聞いてもいいかな？」

少女の名前はシャーレイと言った。シャーレイ・ランフォード。少女らしい、可愛らしい名前だとは思ったが、それに関しての感想は口にはしなかった。彼女のひなたに対する言葉は、徐々に警戒が解かれていったのか、敬語からタメ口に変わっていた。外見から年下と判断したのだろう。ちなみに、ひなたも自己紹介はした。その結果、ひなたちゃんと呼ばれるようになった。

なお、この世界では性が後ろに、名前が前に来るため、ひなたは自分の名前を名乗るときはヒナタ・アカツキと名乗っている。

それはさておき、もしかしたらシャーレイが何か知らぬうちにやらかしたのかもしれない、と推理を軽く組み立てながら、怖がらせないように聞いた。ひなたの外見で相手を怖がらせる事はまずないとは思うが。

肉体年齢でも精神年齢でも共に二十歳になったひなただが、身長は百四十前半。胸はほぼ絶壁で顔も完全に童顔。十代前半の子供です、と元気に言っても誰も疑わないレベルの合法ロリとなってしまうたひなただが、この外見のお陰で人には警戒されれないし、怖がらせる事もない。無いのだが、折角TSしたのだから、胸くらいは欲しかったとは思ってしまう。

TSして男としての意識を持っているのにこう思ってしまうのは肉体故なのかは分からないが、少なくともひなたはまだ心は男のつもりだ。男と付き合うなんて考えたくもないしその先の事なんて絶対に嫌だ。性転換出来なかつたら一生処女でいい。そう思ってしまう。童貞は捨てたかったが。

「……………うん、いいよ」

シャーレイはかなり悩んでいたが、何とか頷いた。ちよつと後ろめたい事があつたのだろうか、スラムの人間に後ろめたい事が無いことの方が少ない。

それを頭の中に留め、彼女を無意識のうちに軽蔑しないように自分の中で注意してから彼女の話を聞く。

「えつと……………今日は一緒にいたシャロンちゃんと一緒に食べ物を盗んだ所まではいつも通りで……………」

いきなり犯罪のカミングアウトだったが、その程度はやっているだろうとは思っていたため、何も言わなかった。スラムにいる子供なんて金がないのが当然だ。盗みの一つ、やっていない訳がない。手を汚さないスラムの子供は餓死していくだけだ。シャロンという子はシャーレイと一緒に捨てられたか、スラムでの生き方を教えたか、そのどちらかの、シャーレイにとっては家族同然の子なのだろう。

それで？ とひなたは言葉を返した。

「それで……隠れて盗んできた食べ物食べていた所で、いきなりあの男の人達が私達を囲んだの……」

「……いきなり？」

「うん……私、結構人の顔は覚えてるんだけど、その人達は少なくとも私の知っている人じゃなかった。スラムの人でもなかった」

「……分からないなあ」

と、なるとあの男達は目に付いたからシャーレイを攫いに来たのかもしれない。本当に、何の理由もなく。

だが、何の理由もない、なんて事はない。何の理由もなく人に害を与える人間は、ただの狂人だ。ひなたもそういう人間は知っているが、あの男達はそんな狂人には見えなかった。それに、狂人という物は徒党を組むような存在でもない。徒党を組む狂人というのは少なくとも数時間で仲間殺しを始める存在だからだ。

本当に真相が読めない。こればかりは、もう関係が無いから忘れよう、と彼女に告げてここを去るのが一番かもしれない。スラムに關わり過ぎたらロクな事にならない。ひなたも自衛力は高くはないため、スラムの下半身に脳みそが付いている阿呆共に襲われたら抵抗虚しく犯されるかもしれない。それだけは絶対に避けたい。だから、情報屋に会ってとつととおさらばしたい。

そう思い、別れの言葉だけ告げようと思ったが、ふと気になったことがあったため、聞いてみることにした。

「そういえば、そのお友達……シャロン、だっけ。その子はどこになるべく早く合流したほうがいいんじゃないかな？」

その子も追われているのなら、もう手遅れかもしれないが、助けられるのなら乗りかかった船ということで助けたいのだが、シャーレイの顔は暗い。

まさか、と思った時にはそれが地雷だと気づいてしまった。

「……あの人達に囲まれた時に、私を逃がして……それで、逆上したあの人達に撃たれて……」

死んだんだらう。死んでいなくても、攫われて好き勝手されてその

まま死ぬだろう。少なくとも、助からない。

シャーレイの瞳には涙が浮かんでいた。シャーレイ本人にもそれは分かっているのだろう。ひなたには踏んだ地雷をどうにかする言葉が見つからなかった。このままそそくさと離れていくのも有りと言えは有りなのだが、ひなたの内心にある良心が痛む。

だが、ここは離れないと。スラムで良心に突き動かされた結果、男達の玩具にされました、なんてまだ完全に女になっていないひなたにとってには自殺物だ。別に女でも自殺物かもしれないが。自決手段だけは簡単に取れるひなたにとっては本当に笑えない話でしか無いのだが。

「そ、そっかー……じゃあ、ボクは自分の用事があるからさー……」

良心は痛むが離れなくては。そそくさと去ろうとしたひなただったが、やはりというべきかローブを掴まれた。そして首が締まった。気管が圧迫される。息ができない。死ぬ。

「ま、待ってー！」

「おうっふあ?！」

女としてはどうなのかという声を上げながらひなたの体が逆方向に引つ張られる。そのせいで首が締まる締まる。

「お、お願い、ひなたちゃん！ 私を一人にしないで！」

「く、くびい……くび、しまっ……」

隻腕のせいで首に食い込むローブ。しかし、彼女は離さない。何故なら、ひなたの抗議の声は見事に聞こえていないから。掠れた声しか出なくなっていたのだから。後ろに下がればいいのだが、混乱してそれすら出来ない。段々と脳に送られる酸素が少なくなっていき、思考回路すら麻痺してきた。

そのせいで思わずついてしまった尻餅が、ローブによる首の拘束を緩めてくれた。数秒ぶりに吸う空気はスラム特有の淀んだ物でマズかった。

「わ、私……ずっとシャロンちゃんと一緒にいたから、一人だどうすればいいのかわからなくて……多分、盗みも上手くないし……」
「げっほげほ……あのさあ、何でそれをボクに言うかなあ」

ようやく吸えた酸素を脳に供給しながら俯くシャーレイにそう言葉を返した。ひなたがシャーレイに頼み事をしてシャーレイがそれに答えるのならまだ分かる。だが、シャーレイの願いをひなたが聞く義理は一切合切ない。

「言っておくけど、ボクはこう見えても魔弾使い。稼ぎ口があるんだよ。だから、君に付き合う気はない。ボクは稼いだお金でとっととスラムでの用事を済ませて宿に泊まるの。今回の事は運が悪かったね、ご愁傷さま。これからは一人で頑張つてね」

残酷な事を言っているように聞こえるかもしれないが、これがこの世界の普通だ。善意だけで生きていけるような優しい世界ではない。この世界は弱肉強食の地獄のような世界だ。

それに、ひなたにとつても誰かと一緒に過ごす、というのは得策ではない。もしも、秘密がバレて軽蔑されたら自殺レベルではないが、傷つくかもしれない。

——もしかしたら、彼女を始末しなくてはならないかもしれない。流石にそれは嫌だから、とひなたは彼女の言葉を正論で突き崩すことよつて断りにかかった。

だが。

「お、お願い！ 私に出来ることなら何でもするから!!」

「ん？ 今何でもつて……じゃなくて!」

美少女に何でもすると言われるとエロい妄想を思わずしてしまう。ひなたは今女なので百合の華が咲き乱れそうな光景が生まれそうではあるものの、中身がまだ青年ハートなひなたにとつて、その言葉はかなり魅力的に感じてしまう言葉だ。

何でもすると言つたのだから服を脱がしてあんな事やこんな事を……なんて考えた辺りで思考回路を中断させた。ここで押し負けたら流石にひなたにも貞操の危機が訪れる可能性が出てきてしまう。一緒に安宿に泊まればいいのだが、それはそれで金が無くなってしまふ。ひなたの路銀は一人分の安宿をどうにか確保出来る程度でしかない。

「この話はいいでおしまい！ じゃあね!」

無理矢理に話を切ってひなたは立ち上がり、歩き出す。が、再びローブを掴まれそうになるので、体を動かして腕を掴ませるように歩く。

そして、シャーレイはひなたの腕を掴んだほうがいいと咄嗟に判断し、ひなたの腕がありそうな場所を掴んだ。しかし、シャーレイの手は空振り、思わずバランスを崩してしまった。

何故なら、ひなたは無いほうの腕を掴もうとして空振りさせようと立ち回ったから。無いものは掴めない。シャーレイはかなり困惑した様子でひなたの手を掴んだはずの手を見ていた。

「悪いね。そっちはもう無いんだよ」

もう片方の腕でローブを少し翻して左手が無いのを見せると、ひなたはそのまま走ってシャーレイから距離をとる。ここまで拒否されたら、もうシャーレイも追ってこないだろうと思い、後ろをチラリと見た。

が、シャーレイはひなたを追いかけてきていた。どれだけ固執するんだ、とひなたは呆れながらも起爆銃を抜くと、止まりながら振り返り、そのまま発砲した。

放たれた魔弾はシャーレイの顔の真横を通り、そのまま後ろへと抜けていった。まさか、撃たれるとは思っていなかったのだろうシャーレイは茫然としていた。

「ボクはハッキリと拒絶したよね？　悪いけど、ボクは困ってる人を見捨てられない正義の味方じゃないし、君が気に入った訳じゃない。こんな治安悪い場所に居たらいつ襲われるか分かったものじゃないしね」

起爆銃を構えながらゆっくりとシャーレイに向かって歩いていく。これは最後の警告だ、と言わんばかりに。

「ボクが魔弾使いでそこそこ強いとか思ってるのかな？　ボクなら君を守ってこれから先生きていけると。生憎だけど、ボクはスラムで生きていく物好きでもなければ強い訳でもない。魔弾使いの中じゃ下の上位なんだよ。だから、ボクはとっととここを抜け出す。安宿に泊まって駆除連合で路銀だけ稼ぐ。だから、ついて来ないでくれるか

な。はつきり言つて迷惑だ」

シャーレイの額に起爆銃の銃口を付け、脅す。これ以上、彼女に情を移すわけにはいかない。これ以上移してしまつては、ひなた自身の破滅に繋がつてしまうかもしれない以上、彼女はここで突き放すしかない。とつと突き放してひなたは情報を買つて路銀を集めてここを出る。

ひなたは強くない。分からん殺しが出来るだけの魔弾使いだ。弱点が割ればそれをどうにかする術を持たない。だが、きつとシャーレイはそう思つていないのだろう。ひなたなら、暴漢程度どうにだつて出来ると思つてしまつているのだろう。

ひと昔前のひなたなら、受け入れたのだろう。だが、今のひなたはそれを受け入れられない。この世界の理不尽さを知つてしまつたのだから。

「二人で生きていけないのならご愁傷さま。男達の雌奴隷として飼われるなりしたらいい。これ以上は、ボクの管轄外でしかないからね」銃口を離し、使つた一発の魔弾を補充してからホルスターに起爆銃を仕舞う。後ろを見れば、シャーレイは俯いてへたれ込んでいる。もう、追つてくることはないだろう。

良心が痛むのを感じながら、適当な角を曲がつてシャーレイがもう見えないように移動する。もう、彼女とは会うことは無いだろう。あんな事を言つておいてどの口が言う、というレベルだが、せめて彼女のこれからの人生に幸せがありますように、と願う。

さて、ここからは本来の目的通り情報屋で情報を買つてから宿を取り、駆除連合を覗く。それで今日は終わりだ。もう彼女の事は忘れよう。そう思い、干し肉を新しく取り出して齧ろうとする。

「いやあああああ！ 離して！ 離してえ!!」

シャーレイの声が聞こえた。かなり必死な声だった。

助けて、と言わない辺り、スラムにはそんな物好きはいないと知っているのだろうが、何でこんなタイミングよく変な目に合うかな、と溜め息を吐きながら、ひなたは起爆銃を抜いて振り向きざまに一発、

魔弾を放った。

放たれた魔弾は後ろから迫ってきていた男達の腹に当たり、吹き飛ばした。

「だから嫌なんだよ、スラムはさ……こんなクソみたいな男達しかないから」

更に二発の魔弾をひなたに乱暴を働こうとした二人の男の股間に打ち込み、ひなたはさつき曲がったばかりの角を引き返した。

そこではへたれ込んでいたシャーレイが男二人がかりで押し倒され、服を脱がされかけていた。いや、脱がす、というよりも破く、と言ったほうが正しいか。襟元から服が裂かれ、身長割には大きな胸が下着と共に露わになってしまっている。

舌打ちをして、リロード。数秒の作成時間を置いて作成した魔弾をシリンダーに詰め、新たにもう一つ作った魔弾を……ただの魔力だけを圧縮させた魔弾を口で啜える。

「面倒。一発で終わらせる」

バキツ。そんな音を立てて魔弾が砕けた。

砕かれた魔弾はそのまま消えていき、ひなたの体から白銀の何かが噴き出す。それをどうする事もなく、ひなたは起爆銃を構えた。それだけで、噴き出していたそれは起爆銃の銃口に集まっていき、白銀の球体を作り出した。

そこでようやくひなたが何かやろうとしていると気が付いたのか、男達は背中を向けて逃げ出す。対してシャーレイはうつ伏せになって頭を抱えて伏せていた。ナイスだ、一言呟き、ひなたはその魔弾の名前を、切り札の一つである魔弾の名前を口にした。

「ジエノサイドバスター」

トリガーを、何の躊躇もなく引いた。その瞬間、白銀の閃光が一瞬にして男達の体を呑み込み、そのまま吹き飛ばした。

簡単に言えば、起爆銃からビームが発射され、そのビームが男達を吹っ飛ばした。

ジエノサイドバスター。それはひなたが今、使える魔弾の中で最高レベルの威力を持った魔弾。魔弾を噛み砕く事によって己の魔力を

再び取り込み、自身の魔力を軽く暴走させる事によって疑似的に魔力を放出している状態を作り出し、魔弾作成の技術を応用して魔弾の威力を数倍に増強させる膜のような物を暴走させた魔力に指向性を持たせる事によって銃口の前に作り出し、魔弾を放つ。その結果が、あのビームだ。

勿論、噛み砕く魔弾の量を増やせば暴走する魔力は増え、威力は増すがひなた自身がそれに指向性を持たせられなくなり、体内で破裂してしまう。なので、噛み砕ける魔弾は一発だけ。無茶をして二発。それがひなたの限界だった。

若干の無茶をした切り札な上に魔弾を普段よりもかなりの量作つたため、ちよつとクラクラしてしまうが、何とか意識を繋ぎ止め、胸元を抑えながら立ち上がったシャーレイの前に立つ。

「……流石に助けたその日に犯されるのは釈然としないからね。あと、胸はこれで隠しておいて」

そう言うと、ひなたは己のローブを脱いでシャーレイに渡した。

「でも、それ一つしか無いからさ。借りパクでもされたら嫌だし同じ寝床で泊まるよ」

そう言い、ひなたは背中を向けて歩き始めた。シャーレイは何が何やらと言った顔をしている。

ひなたはついて来ないシャーレイの方を見ると、再び声をかけた。

「ほら、ついて来ないの？ 宿代くらい、奢ってあげるから」

「え？ じゃ、じゃあ！」

「はあ……ボクは結構なお人好しだったって事にしといて」

隻腕を隠すことなく、ひなたは歩き始めた。その後ろをシャーレイがついて来る。

まあ、こういう偽善も、たまには良いだろう。そんな気まぐれを起こしながら、ひなたは笑顔でついて来るシャーレイを見て笑顔を零した。

第四魔弾

安宿は、案外近くに見つかった。

スラムから出て、少し歩いた場所に、少し寂れたような宿があり、朝夜の飯がついてるのにも関わらず、かなり安い値段で部屋を借りることが出来た。ひなたは態々ツインベットの部屋を借りるのも無駄に金がかかるため、食事だけ二人分を頼んで一人部屋を二人で使うことにした。

部屋はかなり狭いかと思ったが、結構広く、二人でもそんなに窮屈な思いをせずに過ごせそうだった。それに、ベッドもひなたがかなり小柄である事から、枕が一つでも狭すぎて枕の争奪戦になる、という事は無いだろうと予想もできた。中々いい宿を見つけることが出来た。

「シャーレイ、後で服を買いに行くよ。流石に下着丸出しはマズいから」

主に、ひなたの理性的な問題で。

シャーレイは女同士なんだし、気にすることはないんじゃない、といった顔をしていうるが、ひなたの心はまだ男のままだ。いつ発情してシャーレイを押し倒しにかかるか分からない。

「でも……ひなたちゃんに服まで買ってもらうのは……」

「駄目、買うの。どうせ、迷惑だから盗んでくるとか言うんでしょ？」
今、シャーレイに盗みを働かれたら、ひなたまでしよっぴかれる可能性が出てきてしまう。やっていなくても保護したのなら、責任を持つと説教をされる可能性がかなり高いため、彼女の生活費もひなたが出さなくてはならない。実に面倒だし金がかかるが。

だが、拾ってきてしまったものは仕方がない。彼女の身の回りの世話と衣食住の確保はひなたがやらなくてはならないだろう。そう思うと、情報屋に行くための金が発んでしまうのが実に勿体なかった。

情報屋から情報を買うための金は馬鹿にはならない。それこそ、ちよつと贅沢な生活を一週間送れる位には金が飛んでいく。しかも、ひなたが求めている情報なら、きつと郊外に家が建つ位は必要かもし

れない。今のひなたの全財産は丁度それくらい。情報屋に行ったらお財布がすつからかんになる可能性が高い。そこから安物の服やらの代金を差つ引いても雀の涙程度しか減らないが、そこからひなたは旅の路銀等も稼がなくてはならない。そして、宿にも五日以上泊まるのなら追加料金も払わなくてはならない。それに、昼食代も出さなくてはならない。これでは駆除にかなり力を入れないと情報屋のための金がガリガリ削れて行ってしまう。

魔力をかなり使った後遺症故かかなり思考回路が纏まっていながら、ひなたは情報屋へ持ち込む予定だった金を詰め込んだ袋から金を幾らか取り出し、個人用の財布にそれらをつつ込むと、それをシャーレイに投げ渡した。

「えっ、えっ?」

「それ使つて必要な物買ってきて。ボクは一旦寝て魔力回復させるから。あ、髪を軽く結つてくれない?」

シャーレイの前で眠るのは少し不用心すぎる気がしなくてもないが、荷物を盗まれたらジェノサイドバスターでお仕置きをするだけのことだ。戦闘能力がないシャーレイに対して警戒なんて殆どしない。

無駄に伸びてきた銀色の髪をシャーレイに頼んで軽く結んでもらい、ひなたは色々と入った鞆をベッドの脇に置いた。

「うん、いい感じに纏まつてる。じゃ、シャーレイはお風呂にでも入ってきてから服買ってきてね。寝間着も含めて」

「な、なんか凄い申し訳ないんだけど……」

それでも、ひなた本人が言つて居るのだから、シャーレイが口を挟む事は出来なかった。もうひなたは魔力不足から来る眠気でもかなり意識が朦朧としているらしく、シャーレイがいるのにも関わらず着替えを始める程だった。太腿に着けた起爆銃の収められたホルスターまで外している始末だ。

シャーレイは少し困惑してからひなたの財布を片手に部屋の外へとタオル片手に出て行った。

目が覚めたひなただが、かなりマズい状態だった。

腕の断面を隠すことなく、上半身を隠すことなく起き上がらせ、片手で頭を抱えるひなたの現状は傍から見たら勘違いされても全く可笑しくないという状況だった。

「な、何これ……朝チュンならぬ夕チュン？ いやいや、まさかそんな……いや、魔力不足の状態で本能的に動いた可能性がワンチャン？ いやいやいや……」

その状況は、正しくひなたの言った通りだった。これが朝なら朝チュンと言われるような状況。

ひなたが全裸でベッドに潜り込んでおり、その隣ではシャーレイが寝ている。それも、全裸で。どういう状況かと言われれば、最早事後としか言いようがない。ひなたの体は結構汗で気持ち悪い事になっているが、それがひなただけの汗かと言われると確固たる自信を持って返せない。

よく少し前の事を思い返してみると、ひなたはシャーレイが外に出て行ったあと、着替えるのすら面倒になり適当に服を脱ぎ散らかして寝たのを覚えている。が、それだけしか覚えていない。確かに、服を脱いだ時に下着も纏めて脱いだ気がしないでもないが、よく覚えていない。

己の恥部に手を当ててみたが、濡れた感触はない。が、乾いたと言われればもうそれまでなのだが。

取り敢えずどうすべきか。この状況をどうやって切り抜けるべきか。どうやったら切り抜けるのか。

「まず服を着ます」

そう、ここからだ。まずは服を着ることから始めないといけない。隣に寝る少女に視線を落とし、一瞬ドキツとしてからベッドから降りる。やはり、まだ男としての意思は残っている。しかし、立ち上がって下を見ると足元までをストレートに見える自分の体に何となくの虚しさを覚えてしまう。

貧乳回避出来るからいいもん、と自分に言い聞かせてから脱ぎ散ら

かされた服を拾うため、しゃがみこむ——ところで後ろで全裸のシャーレイが目を覚まし、上半身を起こした。

「ふああ……あれ、ひなたちゃん？」

「え、えっと……」

ヤバい、もう隠ぺいが不可能だ、となってしまう、ひなたは急いで手探りで下着だけを探し出すと、目を擦っているシャーレイの隙をついてちやちやつと下着を身に着け、ついでに太腿にホルスターも着け、緩いシャツも着た。

「あ、あのさ……な、何で全裸で寝てるのかな？」

「……ひなたちゃんが裸で寝てたから、そっちの方がいいのかなって」

「あ、ああ……そう……ボクが暴走した訳じゃないんだね」

安心した。間違いを犯していなかった事に。濃厚な百合の花が咲き乱れていないことに。

それに、よく見れば椅子の上にシャーレイのであろう服がキチンと畳まれて置かれている。ひなたが無理矢理脱がせたのなら、もっと酷い状態で服が散乱しているはずである。よく考えれば分かった事なのに錯乱してしまったのは朝チュンへの耐性の無さ故か。

改めて部屋の中を見てみると、シャーレイが買ってきたのであろう服が壁際に寄せてあり、一旦外に出て服を買ってきたのは明白だった。昼前にこの宿に入り、今が夕方なのでひなたは数時間ぐっすりとして寝ていたことになる。きつと、シャーレイもひなたが起きるのを待っていたら眠くなってしまい、そのまま寝てしまったのだろう。ひなたの真似をして全裸で。

「……取り敢えず、全裸で寝るのは止めよう？　これはボクがボーっとして全裸になっちゃっただけだからさ……」

「うん……？」

寝起きはかなり弱いのか、シャーレイはかなり眠そうだ。

その姿を見ると、ドキツとしてしまう。それに、上半身を上げたことによって曝け出されてしまったシャーレイの双丘が目に入ってしまい、心臓がかなり早く動き始める。きつと、ひなたの顔は真っ赤になっっているだろう。シャーレイの畳まれた服の中から下着を探し出

してポイツとシャーレイに投げた。

「わぷ」

下着を投げられたシャーレイはそれが何かを理解すると、モソモソとそれを着け始めた。全く、理性に悪い。

ひなたも自分の鞆の中からシャツとショートパンツを取り出すと、それを着て完全にリラックスモードになった。いつもローブの下はもう少し動きやすい白色の服を着ているのだが、その時もショートパンツを着ているため、何気にスカートはそんなに履かないのがひなただった。というか、ホルスターを太腿に着けるスタイルで起爆銃を携帯している以上、ショートパンツかスカートの二択になってしまうている。

スカートなら起爆銃を隠す事も出来るが、男としての最低限のラインがスカートは履かないという事と決めていたため、スカートは履かずにショートパンツを履いている。スカートを履いたら、男としての何かが終わわりそうだ。生足をかなり晒すショートパンツも恥ずかしい事には恥ずかしいが。

「そんなに無警戒だとボクの理性が外れるかもしれないからやめてね……」

鞆の中からとある物を取り出してひなたはそうシャーレイに忠告した。が、シャーレイはそれを聞いてもきよんとした顔を浮かべるままだった。

そして、シャーレイが爆弾を投げつけた。

「私はひなたの言うことなら何でもするって言ったし、何されても文句言わないよ?」

「げっふおっ!」

思わず咽た。ゲホゲホと気管に入った異物を取り除くために咳を何回かしてから、ひなたは手に持っていたそれを改めて口に啜えた。

「あー……ホントに理性持つかなあ、これ」

啜えた物にライターで火をつける。そして口の中に入ってくる煙を味わいながら、肺に溜まった煙を溜め息を吐くかのように吐き出す。

そう、ひなたが鞆から取り出して火を付けたのは、日本でもよく見た紙で包んだ煙草だった。気持ちを落ち着けたい時に吸うそれだが、何やかんやで煙草の煙を吸うと落ち着くのは確かだった。

「……煙草？」

「んー？ ああ、つい数か月前からね。吸い始めたの」

煙草の煙を肺に入れる事がかなり心を落ち着けてくれる。だが、視界の端に写るシャーレイが少し慌てているような気がする。

「ふう……何？」

「え、えつと……子供が煙草吸うのは流石に……」

「あー、ボクこれでも二十歳だから。成人してんだよね」

「ええ!？」

息を吐くとともに煙が口から吐き出される。煙草を吹かしているだけでかなりストレスを忘れる事ができる。この世界の煙草はそこまで高くはないため、結構気軽に手を出すことが出来た。日本に帰れた場合、この煙草の味を忘れられるのか、禁煙出来るのかは不明だが、今は今だ。煙草を吸って吐くことでそんなマイナスな事を忘れる。

そんな癒しタイムに浸っていると、やはりシャーレイの視線が気になった。服はちゃんと着ているが、やはり外見はシャーレイよりも年下なひなたが煙草を吸っているのは、やはり違和感があるようだ。

教育的にも悪いから吸うのを止めろ、と言われるのかも知れないが、知ったことか。煙草は嗜好品だ。

「……驚いた？ こう見えても合法なんだよ？」

「う、うん……年上だったんだ……」

「身長低いし胸も無いからね。まあ、ボクも名前しか明かしてなかったし、勘違いしても仕方ないよ」

そんな身体的コンプレックスによる自虐すら簡単にしてしまうほど煙草を吸うのは気分は良かった。

結局、その日は何時もは一本しか吸わない煙草を二本も吸ってしまった。

第五魔弾

隻腕である、という事は隻腕の人間と暮らした事がない人間からしたら、かなり不自由に見えてしまうらしい。というのも、シャーレイと共に夕飯を食べている中、シャーレイはかなり心配そうにひなたの事を見てきたからだ。その目に心配の二文字があるのは嫌にでも分かった。

が、ひなたも隻腕の生活は長くないとはいえ慣れた物。パンにバターを塗る時等は少し苦戦するが、それでも基本的な事は全部片手で出来る。髪の毛を結ぶ事だつて少し下手だが出来ないことはない。シャーレイに結んでもらったのは面倒だったただけだ。

それを何度か言っているのにも関わらず、シャーレイはかなり心配そうにひなたを見てくる。というか、手が通つてないため、ひなたの体の動きに合わせて揺れる袖に、だ。

「……シャーレイ。そんなに見られると食べにくいんだけど？」
「え、あ、ごめんね……？」

今まで何度も隻腕であることを心配されてきた時はあったが、その度にこうして不自由なく日常生活を送れることを示してきた。シャーレイも数日の内にこんな視線は送らないようになるだろう、と適当なことを考えながらバターを塗ったパンを頬張る。バターを均等に塗り切れてなかったのか、凄いバターの味がしたがもう慣れたことだ。

魔法が存在するこの世界でも、隻腕……手足の欠損は治すことが出来ない。それに、義手義足も開発されていないため、腕を失った人間は隻腕のまま。足を失った人間は車いすが松葉杖での生活を強要される。ひなたのような身寄りもなく自身の身分を証明出来ない人間が足を失ったら人生が大分詰みかけるが、隻腕なら駆除で稼ぐ事が出来る。そう思えば、片手を失ったのはまだマシな方だ。それも、利き手ではない左腕を。

失った経緯は……ひなたの頭の中に根強く残っている。いや、きつと日本に戻ってもこの記憶は無くなる事はない。これは今のひなた

を構築する要素の中でもかなり大きい物であり、ひなたがこうして生きている原因にもなっている事だから。忘れれば、暁ひなたという人間は別の誰かに変貌してしまう位にまで、その記憶は忌々しく残っているのだから。

あの時の記憶をなるべくこの場で思い出さないように食べる事に集中し、シャーレイの視線を無視していると、シャーレイの食事を食べる手が止まっているのが分かった。

「……食べないの？」

「あ、そんな訳じゃ……」

「遠慮……というか、申し訳なきを感じているんならそれは違うよ。ボクは好きで君の世話をしているんだから。それに、服も買って寝床も用意して……今更食事なんて安い物でしょ？」

「それは……」

「それに、一緒にいてほしいって言ったのは君だよ？ なら遠慮なんてしないでよ。何時までの付き合いになるかは分からないけど」

少なくとも、ひなたはここで永住する気はない。目的を果たした後、性転換も出来ずに日本にも帰れないと分かったのならここで枯草のように生きるのも悪くはないが、それがまだ達成できるのか分からない以上、ひなたはここを拠点とする気は一切切ない。

ここを離れる時はシャーレイとの別れの時。それまでにシャーレイの下宿先でも探しておくのもいいかもしれない。そうしたら、シャーレイもひなたからは離れるだろう——ひなたの秘密を曝け出せば、ひなたと一緒に居てほしいと願っても離れていくだろうが。だが……もし、ひなたの秘密を知りながらも共に居てくれるという物好きが彼女なら……もしかしたら、彼女に依存してしまうかもしれない。もう、ひなたは人と親密になつて生きていく事は不可能に近いと考えてしまっているから。

そんな暗い事を考えながら夕飯を食べていると、気が付いたら皿の中は空になっており、無意識の内に完食していたのを理解した。対してシャーレイも結構遅くはあるが、ちゃんと食べている。

「……ごめん、ちよつと煙草吸つていいかな」

「え？ あ、うん」

そんな暗い事を考えていたからか。ひなたは無性に煙草を吸いたくなった。

この食堂は喫煙が許されているし、灰皿もテーブルに用意してあるため、ひなたは灰皿を手元まで寄せると煙草のフィルターを下向きにして何回かフィルターをテーブルに優しく、軽く叩きつけてから火を付けた。

息を吸いながらでないで煙草は火が付かない。葉っぱを詰めてから吸うと美味しく長く吸える。そんな知識はこの世界で初めて煙草を触ってから数日後に、煙草を売ってもらった人から聞いたことだ。優しく息を吸いながら火をつけ、肺に煙を送り込む。そして肺が煙で満たされると、何だか先ほどまでの暗い気持ちが無くなっていく……ような気がした。

多分、腕を失わなかったらこうして煙草を吸うことは無かっただろう。煙草に手を出したことに後悔しているかと言われれば後悔しているが、簡単に気分を高揚させてくれるからか、手放す事は出来ない。きつと早死にするんだろうな、と思うと暗い気持ちにはならず、小さな笑いが出てくる位には、気分転換に成功した。

「……煙草って、そんなにいい物なの？」

ふと、単純に気になったのか、シャーレイがそんな事を聞いてきた。やはり、子供というのは煙草が気になるのだろう。ひなたも小学生、中学生の頃は煙草がどんな物なのか、喫煙者を見ると時々気になったものだ。

ひなたはその質問を聞いて笑いながら答えた。

「いい物じゃないよ。健康に悪いし、お金は無駄に飛んでいくし」

「じゃあ、何で吸ってるの？」

何で吸っているの、か。それは色々もある。

だが、今のひなたが言える事は一つだけだ。

「悪いことを忘れられるから、かな」

「悪いこと？」

「そう。これを吸ってる時だけは、嫌な事も悪い事も忘れる事が出来

るの。考えられなくなるって言ったほうが良いのかな？」

悪い事を、嫌な事を考えたくないから煙草を吸う。その頻度が増えていくと、何れ一日に一箱くらい吸ってしまう状態になってしまうのだろう。

だが、それで嫌な事を思い出さなくなるのなら。こうして笑顔で自虐が出来るようになるのなら、煙草も悪い物ではない。最近は何か含んでないと落ち着かない、という状態になりかけているが、それもこうして笑える対価になるのなら、決して悪いことでは無いと思う。マズい干し肉を消費する理由にもなる。

「まあ、憧れてるんなら止めた方がいいよ。これは、そんなにいい物じゃないからさ」

灰皿に灰を落とし、再び煙草を口に咥えると、もう煙草がかなり短くなっていった。最後の煙を吐き出すと、短くなった煙草を灰皿に擦り付けて火を消した。そして、流れるようにもう一本咥え、火をつけようとした所で、ひなたは動きを止めた。

どうにも、先程二本続けて吸った時から煙草に対するリミッターが甘くなっている。ライターの火を消して煙草を箱の中に戻すと、まだ食事をしているシャーレイの観察に入った。

「吸わないの？」

「そんなにポンポン吸うものじゃないしね」

テーブルに肘を突き、自虐気味ににへら、と笑いながら答えた。それに、未成年の前で吸うのも何だか申し訳ないという物だ。あんな汚い環境下で生きてきたシャーレイにとっては煙草の煙くらい、全く気にしないのだろうけども、これはひなた自身の気持ちの問題だった。

「……あ、そういえば、ひなたちゃん」

「ん？ 何かな？」

「さつき、下着を買い忘れちゃったんだけど……後で行ってきていいかな？」

「あ、そうなの？ なら明日にする？」

「じゃあそうするね。最近、胸がまた大きくなってきちゃって、スラムの隠れ家に置いておいた下着も合わなくなってきたちゃってさ

……あれ？ ひなたちゃん？ 何で煙草の箱を思いつき握りこんでるの？ 中の煙草折れちゃうよ？ あ、折れたやつは吸うんだ……」

やはり、煙草は嫌な事を忘れるのに最適だ。
もげろ。

シャーレイから見て、ひなたという少女は不思議な少女だった。

外見は、かなり綺麗で、まるで絵本の中から出てきたかのような少女だった。

シャーレイより背は小さく、体は細く、なのに力強い。もう成人しているからかもしれないが、外見に似合わない大人っぽさも感じる程だった。

最初は、ただただ一緒にいてほしかった。シャロンが撃たれた時、シャーレイは見ていた。彼女の左胸を弾丸が貫いていたのを。そして、地面におびただしい量の血液を流して倒れる彼女は、もう長くない。助からないと本能的に察していた。彼女を見て逃げる中、振り向いた先では、倒れたシャロンに向かって弾を打ち込む男の姿も見た。だから、シャロンが心配だから一旦あの場に戻るという選択肢はなかった。行ったところで、彼女の死体を目撃するか、血痕のみを目撃するかは二択だったから。

だから、誰か一緒にいてほしいと思った。いや、助けしてくれたひなたと一緒にいてほしかった。

ハッキリと拒絶された時、シャーレイはこの世に絶望まで感じていた。スラムでの生き方を一から教えてくれたシャロンがいなくなつて。そしてひなたにも拒絶されたら、シャロンの遺言すらもう忘れてしまつて何で生きているのかが分からなくなつて。生きていく意味が感じられなくなつて。一人ぼっちというのは凄く寂しい事なんだとその時、初めて分かった。

ひなたが言ったことは尤もだった。こんな薄汚れた身寄りも金も

地位も何もない子供と共にスラムで暮らすなんて、正気の沙汰ではないから。だから、あの時。ひなたが去った直後に息を荒げた男達に押し倒された時、もう体なんてどうでもいいとまで思ってしまった。

だが、その男達がひなたの方に向かうのを見た時、咄嗟に声を出した。離して、と。それが、ひなたを追う何者かがいると気づかせる材料になれば、と。あの親切な少女を助ける手立てになれば、と。

その結果、ひなたはシャーレイの元まで戻ってきてきて男達を一瞬で蹴散らし、助けてくれた。そして、裂かれた服を隠すためのローブまで貸してくれた。それだけでシャーレイは満足だった。ここまで親切にしてもらったのだから、これ以上を期待するのは、愚かだと。だけど、彼女はついて来いと言ってくれた。何かに呆れたような表情をした彼女はシャーレイを拾ってくれた。それに感謝と申し訳なさを感じ、シャーレイは彼女に拾われた。

その後、宿へと連れてきてくれた彼女は、すぐに寝付いてしまった。宿の温泉で体の汚れを落としたシャーレイは一度、部屋に戻った。そして、見てしまった。彼女の体を。

左手は鋭利な何かに切断されたかのような綺麗な断面だった。だが、本来服の中に隠れている細く、白い体はシャーレイの想像を超えていた。

背中と胸、そして腹には、火傷のような跡と何かに斬られたような大きな斬り傷があり、横っ腹は抉られたのか、左右非対称になっていた。その時に無理矢理回復魔法で治したのだろう。本来ならこんな事にならない筈なのに。

手と足は入念に回復魔法をかけたのだろう。だが、体の見えない場所に関しては手が回らなかつた。もしくは、わざと残してあるか。そのどちらかなのだろうか。だが、よく見れば足も、ニーソックスとブーツで隠されている場所に関しては細かな傷は沢山あった。

きっと、かなりの修羅場を潜ってきたのだろう。彼女は、文字通り傷だらけだった。

「……どうしたのさ。そんなにボクの方を見て。まだ煙草が気になる？」

「え？ あ、ううん。そんな事はないけど……」

きつと、あの傷が生まれた原因を忘れるために、煙草を吸っているのだろう。ひなたは先程己の手で折った煙草の後始末のためにすばすば煙草を吸っていた。

既にシャーレイは夕飯を食べ終わり、二人して部屋に戻ってきた訳だが、ひなたは折った煙草が勿体ないのか、無事な煙草は仕舞ったまま折れた数本の煙草を吸うのに追われていた。別に、明日吸えばいいのに、と思ったがひなたの決めた事だ。口出しはしない。

本人は部屋で吸う用にしたらいいと気付いていないため、シャーレイが言えばすぐに吸うのを止めたのだが。

「あー畜生……勿体ないしこれから吸う量増えるかも……」

今まで一日一本、多くて一日二本しか吸わなかったひなたにとつては五本目になるこの煙草は大分キツイ物があった。シャーレイはよく分からないが、ひなたがこの状況を好ましく思っていないのだけはよく分かった。

もう煙草は飽き飽きなのか、まだ半分ほど残った煙草を灰皿に叩き付けるように押し付けて消火すると、ひなたはタオルを手を取った。「この部屋、シャワーあったっけ……あ、ユニットバスか。ボクはちよつとシャワー浴びるから」

どうやら、温泉に行くつもりだったらしいが、シャワーがあるのを発見すると、ひなたは踵を返してそう告げ、鞆の中から着替えを取り出し、自分の物らしいバスタオルを取り出した。

「あ、うん」

「はあ……ヤニ臭くなつてなきやいいけど……」

ひなたはそう愚痴を零しながら、脱衣所に入らずその場で服を脱ぎ始めた。

そして、下着まで脱いだ所で、ひなたのあの傷だらけの体が晒された。シャーレイは思わず彼女の体を凝視してしまった。

その視線に気が付いたのか、ひなたはシャーレイの方を向いた。

「あ、しまった………まあいいか。気になる？ ボクの体」

ひなたは自分の体を隠していたかったのだろう。ちよつとやって

しまったという表情を作った後、自虐気味の笑顔を浮かべて自分の体を指さした。

気になる、と言われれば気になる。が、それに関して追及するのは野暮という物だろう。シャーレイはその言葉に対して首を横に振った。それを見たくないから隠せ、とでも曲解解釈したのか、ひなたは自虐気味の笑顔のまま言葉を紡いだ。

「まあ、そうか。こんな傷、見たくもないよね。ごめんごめん」

「あ、そういう訳じゃ無いんだけど……」

別に、ひなたの体を見たくない訳ではない。

見たいわけでもないが。

だが、彼女の体が気味悪いから見たくない、等という事ではない。ひなたはその意味を含めたシャーレイの言葉を聞き、一瞬きよとんとしていたが、その言葉にありがと。と一言だけ返した。

ひなた自身、その傷に関してはいいたくないだろうし、腕がないことにもきつと繋がるだろう。これ以上の追及するのはひなたの心を抉ってしまうかもしれない、と考え、お礼の言葉にうん。とだけ返した。

ひなたがシャワーを浴びている間、シャーレイは寝間着に着替え、ボーっと暇な時間を過ごす。その間に今日あった事を色々と思いついていた。

昨日までの自分に言ったら、有り得ないと一蹴されるんだろうな、という考えと、シャロンを亡くした事への悲しき。これらを感じ、泣きそうになっていると、ひなたがシャワーを浴び終えたのか、髪をタオルで拭きながら全裸で出てきた。

「男のままだったらタダの変態だよー……」

何かボソツと呟いていたが、シャーレイには聞こえなかった。

彼女は髪を片手で器用に拭き、タオルを頭の上に乗せながら下着を身に着け、寝間着に身を包んだ。

「シャーレイ。髪乾かすの手伝ってくれない？ あと、髪の毛結うのも」

「あ、うん。任せて」

これくらい、文句も言わずにやらなければ恩は返せない。ひなたの言葉に即答で返して部屋に備え付けのドライヤーと、ひなたのヘアゴムを手首に着けてからひなたの長い髪の毛を乾かす。

ひなたの髪の毛はかなりサラサラで、同性であるシャーレイが羨ましいと思う銀髪だった。銀髪という珍しい髪色が、ひなたという少女の不思議さを駆り立て、綺麗さも同様に駆り立てているのかもしれない。シャーレイの短い金髪とは大違いだった。

他人にやつてもらおうのが気持ちいいのか、ひなたはちよつと眠そうに目を半分閉じていた。

「……眠い？」

「うん……やつぱ魔力使いすぎたのが結構響いてるっぽい。あれだけ寝たのにまだ眠いや」

魔法が使えない、というよりも魔力が殆どないシャーレイには分からない事だが、魔力切れは結構辛いのだろう。髪を丁寧に乾かしている中、ひなたは大分うつらうつらと船を漕いでいた。

数分かかって髪の毛を乾かし終わり、髪が痛まないように軽く結つた時にはひなたは大分眠いのか、半分くらい寝ていた。

「はい、終わったよ」

「んー……ありがと、シャーレイ」

「どういたしまして。じゃあ、歯を磨いたら寝よつか」

「そうする……」

二人で買ってきたばかりの歯ブラシで歯を磨くと、ひなたはすぐにベッドに潜り込み、枕を半分くらい使ってそのまま眠りについた。

早つ。とシャーレイが驚いたが、シャーレイも今日、色んな事があつたせいか、ひなたが眠りについてからすぐに眠気が来た。なら、すぐに寝ようとシャーレイもすぐにひなたの横で寝転がった。

真近でみるひなたの顔は、かなり綺麗に纏まっており、童顔だからか、眠る顔はシャーレイよりも年下にしか見えなかった。これで二十歳を超えているのだから、この世は不思議だ。何となく、眠るひなたの髪の毛を撫でてあげると、ひなたの顔が若干笑顔になった気がした。

それを見て、シャーレイも眠りについた。これでこの日は終わり、次の日になる——かと思った。

シャーレイは真夜中に目が覚めた。それは、トイレに行きたかったから、とか理由もなく目が覚めたのではない。ひなたの声で目が覚めたのだ。それも、その声は単純にシャーレイを起こす声ではない。「うっ……ぐうう……あっ……！」

何かに悶え苦しむような。それを無理矢理抑えたような、苦痛に喘ぐ声だった。

その声に起こされたシャーレイはすぐに上半身を起こし、左手の断面を抑えて悶えるひなたに声をかけた。

「だ、大丈夫!? 何があったの!？」

「シャー、レイ……っ！ お、おこしちゃった……？」

「そ、そうだけど……ど、どうしちゃったの!？」

「た、ただの幻肢っ……痛だから……！」

幻肢痛。それが何なのかはシャーレイは分からなかったが、とにかく何とかしないと、と思った。

が、ひなたが抑えているのは無い筈の左手の断面。見えた断面は完全に塞がっていたため、傷があるとは思えない。本当に何が起こっているのがシャーレイには分からなかった。立って濡れタオルでも、と思ったシャーレイだが、ひなたが立ち上がろうとするシャーレイの手を掴んだ。

「なにもっ……しなくう、ていいからっ……！」

「で、でもー！」

こんなに苦しそうで、脂汗も吹き出ている。どう見ても大丈夫ではなかった。だが、ひなたは首を横に振っていた。

「そ、それでも、何かしたいからー！」

その言葉を聞き、ひなたは少し悩むように表情を歪めた。

そして、かなり悩んだ挙句、口を開いた。

「すこ、し……いたい、よっ……!!」

その言葉を聞き、シャーレイは頷いた。それを見た瞬間、ひなたは一瞬でシャーレイに馬乗りになると、そのままシャーレイを力づくで

押し倒した。

それに驚愕するシャーレイだが、それ以上にひなたの様子に驚いたり、痛みに喘がされながらも、ひなたはしっかりと目でシャーレイを見ていた。その目は翠色の筈なのに、真っ赤に輝いていた。

「ひな、たちちゃん？」

「ごめん……！」

そのままひなたはシャーレイに抱きつく。抱きついて痛みを忘れる気なのかな？ とシャーレイはひなたを抱きしめた——瞬間、シャーレイは首筋に鋭い痛みを感じた。

思わず声が出てしまう程の痛み。だが、その痛みは段々と快樂のようなものに変わってくる。

顔と視線でなんとか横を見てみると、ひなたは必死な形相でシャーレイの首筋に噛み付いていた。いや、それどころか噛んだ場所から血を吸っている。まるで、吸血鬼のように。

「ふーっ……！ ふーっ……！」

息を荒げながらもただただ血を吸い続けるひなた。それは吸血、というよりもただ気を紛らわすためにしているようにしか見えなかった。

シャーレイはその痛みなのか快樂なのか分からない物に身を委ねながらひなたの頭をゆっくりと撫でていく。

「大丈夫。大丈夫だから……」

ちよつとずつ血を吸われていくが、貧血になるような量ではない。本当に、切り傷をした時のようにゆっくり、ゆっくりと吸血されていく。

それを受け入れてひなたが落ち着くのを待つこと十分程。落ち着いたのか、彼女はシャーレイの首筋から口をゆっくりと離した。唾液と血が混ざった赤い液体がひなたの口とシャーレイの首筋で糸を引き、ひなたが扇情的な雰囲気を出す。

「はあ……はあ……」

ひなたはそれからすぐに退こうとしたのか手を動かしたが、ひなた

はバランスを崩してそのままシャーレイの胸元に顔を埋めた。

「……何で目が赤いのか、とか血を吸ったのか、とかは聞かないよ」

「あり、がと……」

そのままひなたは限界が来たのか、シャーレイの胸の上で眠りについた。

もう痛みはないのか、安らかに眠りについた彼女をゆっくりと撫でてシャーレイ自身も落ち着く。吸血されてからの体の火照りを深呼吸で収めながらシャーレイも何とか眠りについた。

第六魔弾

それは、唐突に訪れた。

平和だった村。ひなたの口調の矯正も完璧に行われ、男としての言葉が出なくなつた頃。魔弾使いとしてそここの腕を披露し、村の中ではよくさせてもらっていた頃。これから、この村を拠点に日本に戻る方法を、性転換して男に戻る方法を探そうと本格的に動き出そうとしたその時だった。

——空が、紅に染まった。

『お前だけは……お前だけはあ!!』

魔弾が空気を切り裂き、その先にいる男の体を貫く。しかし、体を貫かれたのにも関わらず、男は涼しい顔をしたまま、風穴の空いた腹を一撫でした。

それだけでその傷は完全に塞がり、魔弾を完全に無効化した。

『なるほど……油断していたとは言え、私に一発当てるか……面白い小娘だ』

『黙れ! 黙れ黙れ黙れエ!! お前だけは絶対に殺す!! ボクの恩人達を殺してその肉体まで侮辱したお前だけは絶対に殺す!!』

魔弾を生み出し、『左手』でそれを全て掴み口に放り込む。それを乱雑に噛み砕き、魔力を完全な暴走状態にする。それをなお完全な指向性を持たせて起爆銃の先端に集中させる。

それを見た男は興味深そうにそれを見つめる。両手で照準を完全に合わせ、塵一つ残さず相手を消し飛ばす、今持てる中でも最強の威力を秘めた魔弾を、男にぶつけるため、暴れる魔力を完璧に制御して見せる。

『流石に防御手段も無しに当たれば痛くはあるが……』

『消し飛べエエエエエツ!!』

そして、トリガーを引くと同時に魔弾は通常の威力の数十倍。もしかしたら数百倍の威力を持って放たれた。最早砲撃、ビームと化したそれは地を抉りながら男に迫り、呑み込んだ。

暴れる魔弾の制御を行い、数十秒の照射の後に魔弾は完全に消え

去った。魔弾が貫いた場所は地面が抉れている。正しく、魔力による暴力が行われていた。人間ならまず生きていないと思われるその光景を見て、起爆銃を下してしまう。やったのではないか。この惨状の仇を取れたのではないかと。思わず安心感と共に起爆銃を下してしまう。

その瞬間。

『面白いぞ、気に入った。お前は殺さずに生かしてやろう』
『なっ……!?!』

その声は後ろから聞こえた。そんな、消し飛んだ筈じゃ。そんな恐怖にも似た焦りを感じながらも左手で起爆銃を持って振り返ったが、何故か起爆銃が振り返り、すぐそこにいる筈の男の眉間に照準を合わせない。と、言うよりも左手が言うことを聞いてくれない。

『だが、我に逆らった罪だ。左手は貫つていこう』
『……………はっ』

男は、剣らしき物を振り下ろしていた。いや、正確には振り下ろし終わっていた。

それが指す事は、何かが、ひなたの身体の何かが斬られたという事に、それが、男の言った通りの物なのだとしたら。ヤケに生暖かい左手に、視線が向いてしまう。

向けてしまった。

『あ、ああ……? あああああああああああ!!?』

左手のあった所からは、真っ赤な液体が、まるで噴水のように噴き出していた。

それが綺麗だとは思わなかった。何故なら、それが腕の代わりに噴き出しているのだと分かったから。起爆銃を……唯一の武器を持った左手は、地面に無様に転がっているのだから。

『う、腕がああああああ!!? ひ、左手が、き、斬られて!!? 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!?』

錯乱。腕を斬られたという現実を認識し、認めてしまったその瞬間、左手を失ったという恐れと恐怖。そして、尋常ではない痛みが襲い掛かる。

それをさも当然のように受け入れる事は出来ない。目の前にいる脅威を排除するという事が考えられなくなり、文字通り本当に何も考えられなくなってしまう。

『耳障りだ』

悲鳴を聞き、単純に耳障りだと思ったのか。男は首を掴むと、無理矢理気管を圧迫して黙らせた。

脳に酸素が送られなくなった所で、更にパニックが襲う。どうしたらいい。どうしたら生き残れる。どうしたら無事でいられる。そんな意味のない葛藤が頭の中を巡り、痛みがそれを次から次へと蝕んで消去していく。

『余計な事をした罪だ……少し、痛めつけてやろう』

刹那。体が一瞬の浮遊感を得て、直後に腹にまるでトラックがぶつかったかのような衝撃が走り、視界が急激に男から離れていく。そして、背中に固いものが当たり、勢いが完全に殺される。が、ぶつかった物が燃える家屋だと理解した時には既に遅く、体を……着ている服を既に炎が包んでいた。そして、胸元から流れる血が一瞬にして意識を飛ばしにかかる。

『あ、あああ………』

燃え盛る家屋の中、己の体を包む炎に声すら焼かれ、何時の間にか斬られていた胸元からはおびただしい量の血が流れ、痛みにも喚き叫ぶ事すら不可能になってしまう。

が、それだけでは終わらなかつた。終わらせてくれなかつた。

体が、打ち上げられた。横っ腹を抉るように下から、何の脈絡もなく突き出された槍が突き出し、体を打ち上げる。直後、地面から無数の槍が突き出され、体に刺さらない程度に肌に傷を付け、完全に体を固定した。その直後、上空から真っ赤な液体が全身に降り注ぐ。

『我が血をくれてやった。これで貴様は我等の仲間入りだ』

真っ赤な液体で消火されたが、意識は依然朦朧としている。男は何の原理か分からないが、飛んで真上に陣取ると、胸に人差し指を置くと、そのまま大きく胸元を切り裂かれた傷口に指の第一関節程までを突っ込んだ。最早、死ぬ寸前で意識も感覚も薄れているため、傷口を

挟られようと何も感じなかった。

だが、男の声だけは、鮮明に聞こえた。

『だが、放っておけば死にかねないのでな。少し細工をしてやろう。貴様はこの後も外見も中身も普通の人間だ。我等寄りの、な。故に、我等の弱点は受けぬ。だが、貴様の本来の力の大半は制限をかけよう。でなければ面白くないからな。この制限を解除するには……そうだな。我等と同じ食事をする事。そして、もう一つは——だ。どうだ、面白いだろう……ぬ？　だがこれではタダの……まあよい。これも面白いだろう』

胸の傷から指が抜かれると同時に、体の上に魔法陣のような物が浮かび上がり、それはゆつくりと体の中に入り込んでいくと、その姿を消した。

男は満足したのか、地面から出現した槍を己の手で叩き折ると、手を掴んでそのまま壊れた玩具を扱うかのように放り投げた。最早、抵抗する事すら出来ずに全身から血を流しながら地面をボロ雑巾のように転がる。

『貴様がどんな苦悩を抱え生きてきたのかを拝見するのが楽しみだ。なあに、我が自ら作った玩具だ。それがどんな事をしたとしても、それを我自らの手では壊しはせぬ。精々、苦しみ抜きこの世に絶望し孤独に蝕まれながら生きるがよい』

ああ、これじゃあもう、誰かと一緒になんて、生きられないな。この世界でたった一人で生きていかなきゃならないんだな。そう思った。だって、もう、この体は。

怪物そのものに、変貌してしまったのだから。

この体は、人に害なす物であり、人に受け入れられず、人を辞め、光を受けられない体なのだから。

そして、意識は完全にシャットダウンされた。

これがひなたの。暁ひなたの身に数か月前に起こった事件の一端であり、その日までの充実した生活が。異世界での生活が一瞬にして崩壊した、たった数時間の間での出来事だった。

シャーレイと出会ってから次の日。ひなたにとってはかなり憂鬱な朝となった。と、言うのも前日の夜中。ひなたはシャーレイの首筋に噛み付き吸血した。それはひなたの幾つかある誰にも話せない秘密の一つだった。

吸血をする時、もしくはそれに対する枷が外れた時、ひなたは目が赤くなる。これはひなたが腕を失った事にも直結する事であり、誰にも言えない事だ。

幻肢痛は何時もなら声を抑えて耐えていた。が、今日は魔力切れで気力が大分きれかけていたのもあった。痛みを堪えきる程の気力が無かった。だから、シャーレイを起こしてしまい彼女の血を吸って気持ちを落ち着け幻肢痛を乗り切る事になってしまった。それ以上の事をしてしまいそうになったが、何とか理性で乗り切れた。

ひなたの吸血には他人を害する効果はない。精々多少発情する程度だ。だが、それでも十分に他人に気持ち悪がられる。軽蔑されるラインを超えてしまった。きっと、シャーレイもひなたの事を軽蔑するだろう。汗に濡れた寝間着を脱ぎ、私服に着替えた。

それから約十数分後にシャーレイは目を覚ました。

「……ひなたちゃん？」

「おはよう、シャーレイ」

シャーレイは寝ぼけてるのか目を擦っている。だが、すぐに表情を歪めて首筋に手を当てた。

やっぱり、軽くだろうけども痛むのだろう。昨日は痛みを堪えるあまり結構強くシャーレイの事を噛んでしまった。結構痛むだろう。ひなたはすぐに消毒液とガーゼとテープを用意すると、首筋を治療するためにシャーレイに近寄った。

「あ、大丈夫だからいいよ」

「そ、そう？」

だが、シャーレイにそれは拒否された。少し傷付きながらもひなた

はそれ等を鞄の中に適当に放り込んだ。

一緒にいればいずれバレるのは分かっていたが、やはりこうして現実になるのはキツイものがある。もし、彼女が誰かにこれをチクろうとしたのなら、ひなたは最悪の場合はシャーレイを始末しなくてはならない。でなければ、ひなたは駆除連合の駆除対象になるかもしれない。

ひなたは死にたくない。死ねない。死ぬわけにはいかない。そのためには何だつてすると決めた。それが、ひなたの心を壊すことだろうと。人間を止めることに繋がろうと。

どうにかしてシャーレイとの会話のネタを捻り出そうと考え込んだ時、シャーレイから言葉が飛んできた。

「ひなたちゃん、昨日の……ゲンシツウ？　は大丈夫なの？」

「え？　……ああ、うん。十数分で止まるものだし」

昔は日に五、六回あったが最近は夜中に一回のペースにまで落ち着いてきている。かなり落ち着いたと言える。

だが、気になるのはそこじゃない。そこは決して重要ではない。そこは大して重要でも無ければ話題にする事ではない。その後起こったことが。幻肢痛の最中の、あの行為が重要なのだ。

「……ボクの事は、気にならないの？」
「え？」

そう、馬乗りになり、押し倒してまで血を吸ったあの時を。

気力と体力の限界の中、とうとう理性が崩壊し、吸血を行ってしまった、あの時の事を。あの十数分の出来事を。

「吸血したんだよ、君を。馬乗りになって、君の首筋から血を吸ったんだよ!？」

まるで、吸血鬼のように。怪物であり、人間の敵とも言える、あの吸血鬼のように。押し倒して無理矢理、その首筋から。傷一つない綺麗な首筋に二つの穴をあけ、そこそこの量の血を吸った。いきなり、何の忠告もなく、痛いよ。の一言だけを告げ、穴をあけた。

だが、シャーレイは何も言わない。それどころか、キョトンとしている。一体何が変なの？　と言わんばかりの表情だ。

「……それがどうかしたの?」

「ど、どうかしたのって……気持ち悪くとか、ないの?」

「別に?」

「怪物みたいだ、とか人間じゃない、とか!」

「全然?」

ひなたが思わず唾然とする。

この子は一体何を考えているんだ。それとも、何も考えてないのか? 脳天気の化身か何かなのか? 思わず皮肉や罵倒じみた感想が頭の中を巡ってしまう。

だが、シャーレイはその理由をすぐに口にした。

「ひなたちゃんがそれで痛みを紛らわせれるんなら、私は血なんて幾らでもあげるよ?」

その言葉に再び唾然とする。彼女は、それを本気で言っているのか。血程度、どれだけでも吸っていいと。本気で言っているのか。

だが、それは理由にならない。血を吸ってもいいという心情とひなたに対する思いは決してイコールではない。それはまた別の事だ。また別の話だ。それが気にならない訳がない。目の色が一瞬にして変わる人間を気持ち悪いと思わない訳がない。

ひなたはそれを口に出す。ただ、心の中の気持ちを全部ぶつける。

「そんなの……ボクを軽蔑しない理由にはならないだろ!」

「なるよ。だって、ひなたちゃんは私を拾ってくれたから……こんな私と一緒に居てくれるって言ったから。だから、私はひなたちゃんが怪物だとしても、私を助けてくれたひなたちゃんは偽物じゃないって信じているから。私はひなたちゃんを軽蔑なんてしないし、隠している事を探ろうともしないよ」

開いた口が閉じなかった。

たったあれだけで。その日に起こった事だけをひなたの人格そのものだと思い込み、ひなたは悪い人間ではないと。人に害を成す怪物ではないと、そう断言した。

その言葉に返す言葉が見つからなかった。そうだとしても、ひなたの秘密は尋常ではない。ひなたの体は、最早人が受け入れられる許容

た。

シャーレイも、それに応え、少し困惑したような表情をしてから、笑い返した。

きつと、ここから。ここから、変えていける。

そして、きつと。全ての元凶たるあの男を、抹殺出来る。仇を取ることが出来ると。そんな根拠のない自身が、ひなたの胸の内であつと沸いてきた。

第七魔弾

駆除、というのはそこそこ大変だがかなり金になる物だ。一般人では対処しきれない害獣、魔獣は様々な事への障害となる上にこの世からその姿を減らす事がない。特に、魔獣はこの世に満ちる魔力を使い生まれるため、その存在は無敵と言っても過言ではないだろう。

殺しても体が霧散してしまうため得られる利益がなく、ただ人間の邪魔をする。そんな目障りな存在。まだ殺したら肉やら毛皮やらが剥ぎ取れる害獣の方がよっぽどマシだ。だが、殺さなくては味を占めた魔獣が人間の妨害をし続けてしまう。それを防ぐため。せめて魔獣の数をこれ以上増やさず今の状態を保つため、減らしていくために報酬を用意して魔法が使える人間、荒事が得意な人間に狩ってもらう、世界のバランスをなるべく人間に有利なように作っていく組織。そのついでと言わなければかりに用心棒やらの護衛仕事やらも受け付け、最近では何でも屋になりかけている。

それが、害獣・魔獣駆除連合。この世界にある全ての国からの援助と許可を得て成り立つこの世界で一番の組織だ。

駆除の依頼を受けるのに特別な資格はいらない。ただ、戦える力がある事。それだけを証明する事によって、駆除の依頼を受ける資格を手にする事が出来る。ひなたは隻腕になってからそれを受け、資格を得た。そのため、全国にある駆除連合の支部で駆除の依頼を受けることが出来る。

これがひなたの唯一の資金源にして、まともに誇れる業績だ。決して尽きる事のない魔獣を狩り、己の力に見合った報酬を手に入れる事が出来る。この世界のいい所とも言えるだろう。ドラゴン等の強大な魔獣を倒せば、一か月は遊んで暮らせるレベルの大金を得ることが出来る、リスクもリターンも大きい職業。ひなたはそこまで強くはない。精々下の上程度の強さでしかないひなただが、小さな少女二人が安宿に泊まり、食事を取り、日用品を買っていく程度の金なら、一回の依頼で一週間分は稼げる。

元々戦える人間がそこそこ多くないこの世界。下の下、下の中が戦

える人間の八割近くを担っている現状、その上に立てるひなたなら、それくらい稼げて当然と言えた。

腕を失う前なら中の下から中の中程度はあつたと自負はしているが。

シャーレイが戦えない以上、ひなたが稼ぎ頭となつて駆除をしに街の外に行かなければならない。そのため、ひなたとシャーレイは役割を分担して一日を過ごす事にした。

ひなたは三日に一度、駆除に朝、昼を使い金を稼ぎ、シャーレイは生活に必要な物を探しに買い物へ。二人一緒の時はスラムへ行つてシャーレイの隠れ家から荷物を回収してくる。そんな生活をしようと、シャーレイと出会つた次の日にひなたは決めた。シャーレイは最初、ひなたが駆除に行くことを心底心配していたが、ひなたがそれなりに戦える事を知っているため、首を縦に振つた。

そんな、稼ぎ頭と化したひなたは街の駆除連合の支部へ向かい、依頼の張られている掲示板を背伸びしながら見ていた。

「うーん……結構遠い場所での依頼が多いなあ……」

そんな事を呟きながら、横と縦に無駄に広い掲示板に目を通す。目を通した掲示板には結構遠出になつてしまうような依頼ばかりであり、夕方までには帰つてこられないような依頼ばかりだった。

他の街ではもう少しマシな依頼があつたのだが、こつとも大きい街だと流石に周辺の魔獣は逐一狩られているらしい。そんな事を思いながら一つずつ依頼を見てみると、横に結構背が大きく、屈強な男が立った。

「嬢ちゃんのような子が駆除か。珍しいものだ」

「それでもしないと生きられないからねー……お、これ近いしい感じ」

「それもそうか……俺はこれにするか」

軽い世間話をしながら二人同時に依頼の張り紙を破り取つた。駆除連合の依頼で金を稼いでいる者がこの場での喧嘩は禁止されているため、煽り合いからの殴り合いは基本的に起こらない。そして、戦える人間とその人の外見は必ずしもイコールではない、というのがこ

の世界の基本的な考え方のため、ひなたのような外見が子供の少女でも怒らせたらとんでもない事になる可能性があるため、ひなたの外見を馬鹿にして煽るような真似をする人間は基本的にいなかった。

一か月程前にそれを知らないのか忘れていたのかタダの馬鹿だったのかは分からないが、ひなたを存分に煽って煽って煽ってくれた上に胸やら尻やらを触ろうとしてきた阿呆がいたため、ジエノサイドバスターを零距离でぶちかましてやった事はあったが。その時は周りの証言からひなたは無罪放免で阿呆は二か月間依頼を受けられない処罰を受けていたが。

ひなたは破り取った依頼書を受付に持っていき、財布の中からひなたが駆除連合で駆除を行える資格を持った人間だという証明であるカードを見せた。

「では、少しお待ちくださいね」

受付の女性はそのカードと依頼書を確認すると、カウンターの下の収納スペースに置いてあるらしい紙とカードを一枚ずつ取り出すと、それをひなたの前に置いた。

「こちらが誓約書と、チエツカーです。サインをお願いします」

「わかりました」

誓約書には、あまり重要な事は書かれていない。あるのは、器物破損を起こしたら罰金は壊した本人に行くこと、死んでも死体を回収は行わないということ、依頼を受け三日経ったらこの契約は破棄されて再び依頼が掲示板に貼られること、駆除中のいざこぎに関してはあまり駆除連合の名前を出すな、という事。それ以外にも細かいことはあるが、大体はこんな感じだった。

ひなたはもう何度もそれを見ているため、受け取ってすぐに誓約書を受け、チエツカーと呼ばれるカードを受け取った。

チエツカーは霧散した魔獣の魔力を場所毎に記録するカードの事で、一枚のチエツカーで百体までの魔獣の情報、倒された場所を記録してもらう事が出来る。これがないと、魔獣を殺しても証明出来る物がないため、依頼の成否が分からなくなる。

昔、魔獣を他の場所からトレインしてきて指定の場所で殺す事で以

来の成否を誤魔化すというズルをした人間がいたため、依頼者の動きを簡易的に記録する装置まで付けたかなりハイテクなカードだ。なお、これは使い捨てではなくリセットをしては使いまわされている駆除連合の備品なので、無くすと依頼が達成出来ない上に弁償までさせられる。しかもかなり高い。ただ、かなり頑丈なので壊れる事は無い。

それを無造作に鞆に突っ込んだ所で、受付も手続きが終わったのか、ひなたに証明カードを返した。

「では、死なない程度に頑張ってくださいね」

「はい。じゃあ、失礼します」

駆除が出来る人間が次々と死んでいったら困るのは駆除連合の方だ。この組織は国民や国から渡された報酬の何割かを引いて駆除をした人間に渡し、残りを利益にして得ることによって経営している。なので、駆除が可能な人間が減るという事は利益が減るという事に繋がる。

だから、こうして口で注意するのはもうお約束だ。ひなたはそのお約束に返事を返してから駆除連合の支部を出た。きっと今、シャーレイは必要最低限の生活必需編やら何やらを買いに行っている。そして、服の洗濯やら昼食を買いに行ったりやらに行っている筈だ。最初はひなただけが荒事での金稼ぎに行くことは反対していたが、こうでもしないとひなたはまともに金を稼げないし、シャーレイには荒事は無理なため、ひなたは金を稼ぎ、シャーレイが家事をする、といった役割分担になった。

「えつと、場所は北の森。熊型の魔獣が五体……何やかんやで面倒だなあ……」

魔獣は見つかつたらすぐに狩るために依頼が飛んでくる。その魔獣が何かした、という訳ではないが魔獣は害しかない。見つけたら即狩らなければ誰かが犠牲になる。それを防ぐのも駆除連合の仕事であり、そこで依頼を受けるひなたのような人間の仕事だ。

出会ったら狩る相手を金を貰って自ら狩る。こつちの方がやる気は出るしやりやすい。

依頼書の内容を口に出して再確認したところで街の北の方へ向かってえつちらおつちらと走り始める。街自体の半径が数キロ程あり、北の森はそこからさらに一キロ程離れているため、行くだけでも結構面倒くさい上に疲れるし時間がかかる。

しかし、魔獣は人間の臭いを嗅ぎつけると襲ってくる習性を持つ。それ故に、適当に森の中をブラブラ歩いていたら相手の方から罠にかかってくれる。そこだけは面倒ではないし害獣駆除よりも楽な点だ。そして、そういう馬鹿な習性を持つ獣相手には、魔弾使いだけが使える戦法がかなり有利に働いてくれる。

魔弾を作っては腰のポーチに仕舞ってを繰り返しながら走ることに十分。ひなたは件の森にたどり着いた。何だかおどろおどろしい雰囲気の中に入ってから数分歩いた場所。森の中に作られた道から少し離れた場所でひなたは軽く陣取り、ポーチの中に手を突っ込んだ。

「えつと……エクスプロージョンの魔弾とシールドの魔弾……それからついでにシューターの魔弾。あとは……バインドの魔弾にライトニングの魔弾も使おうかな」

ジャラジャラとポーチの中から魔弾を取り出し、自分に影響が及ばない範囲をしっかりと確認してからそれらをばら蒔いた。そう、撃つことなく、ばら撒いた。

魔弾という物は、単体ではどうにも出来ないタダの銃弾だ。そして、普通の拳銃でも起爆する事が出来ない。

しかし、魔弾自体はかなり脆い物であり、人が簡単に噛み砕けるレベルの物だ。そして、その魔弾は魔法そのものが圧縮されたもの。つまり、それが破壊されると、それは何の指向性もなく暴発する事になる。

起爆銃という制御装置をなくした状態で砕かれた魔弾は魔法がその場で暴発。内包された魔法と同じ魔法が砕いた本人に向かって突っ込んでいく。

中には意図的に砕いて魔法を飛ばす変態もいるらしいが、ひなたはそれが出来ないためこうして地雷としてばら撒いた。ちなみに、これ

がひなたの持つ自決手段の一つだったりする。シールドをかみ砕いたら恐らく、下あごと上あごがさきようならする。魔弾だったら頭が飛ぶ。エクスプロージョンだったら吹っ飛ぶ。

ちなみに、エクスプロージョンの魔弾を普通に使うと銃口の先端が爆発するためこういう時にしか使えない。バインドは何故かひなたに向かつて飛んでいき、ライトニングはひなたも痺れるため、まともに使えるのがシューターとシールド位しかないという悲しみ。

ひなたは魔弾の使い道の少なさにめそめそ泣きながら自分の周りに魔弾を撒いていく。畑に肥料を撒いているような感覚がしてしまふが、気にしたら負けだ。

「さて……本でも読もうかな」

そして魔弾を撒いたら後はその中心で本を読むだけ。恐らく、五十発位満遍なく撒いた。前からある程度は作っていたが、ここまで来る最中に十発近く追加で作ったため若干魔力切れで息切れがする。

魔法使いとしては比較的燃費が良い方に位置する魔弾使のだが、やはり十二発も作れば魔力も切れかける。

片手で器用に本を読みながら待つこと数分。急に近くで爆発音が鳴り響き、直後に鎖の音やらシューターの音やらが鳴り響き、最後に何かが地面に落ちた音がした。

「おっ、一匹終わった？」

本から顔を上げると、生き物だった何かがひなたの撒いた魔弾の外側に落ちて血を噴出していた。どうやら、エクスプロージョンで足が吹き飛んだ後に色んな魔法に引っかかり、最終的にシールドで空高く打ち上げられ地面に頭から落ちたらしい。南無。

チェツカーを確認すると、そこには確かに熊型魔獣という名前と討伐された場所が書かれていた。それも二体。どうやら、二体が巻き込まれて死んだらしい。ラツキー、と呟くと再び魔弾が爆発したのかひなたを一瞬影が覆い、数秒後に再び覆われ、肉が潰れる音が響いた。振り返れば、また熊型の魔獣だったものが落ちている。チェツカーを再び確認すると三体目の記述があった。この世に生まれた不幸を呪うといい。

そのままボーッと待っていると、再びひなたの背後から電撃の音と爆発音が響いた。それで四匹目が死んだのを確認し、五匹目もすぐに爆発と共に死んだ。アーメン。

「よし、お仕事終了。帰ろっと」

五体の魔獣を本を読んでいるだけで倒したひなたは落ちている魔弾を適当に回収して帰るために道に戻ろうとした。

が、魔弾が転がっていた場所に足を踏み入れた瞬間、何かを踏み碎いた感触と共に己の体が鎖に縛られた。

「……やっちゃった」

どうやら、バインドの魔弾を踏んでしまったらしい。そのままバインドに芋虫状態にされたひなたはどうしようかと思んだ末、バインドの効力が切れるまで寝て過ごす事にした。

結果、夕方まで寝てしまい、シャーレイを大いに心配させたのは言うまでもない。ちなみに、ばら撒かれたままの魔弾は一日二日経てば自然消滅するのでこのまま放置だった。

第八魔弾

魔獣駆除から帰った翌日。シャーレイには泣き付かれてしまったが、その日の幻肢痛も枕を噛んで乗り切った。三日に一度、一週間分の生活費を稼いで二週間近くが経ったその日、ひなたの財布は結構潤っていた。情報屋に貢ぐ用の金は別にあるが、二人の生活費としての金はそこから切り取っていかなくてもいいようになってきた。なので、ひなたはこの日、再びスラムへ一人で向かい、情報屋へと情報を買いに行くことにした。

とは言っても、もう大体の位置は割れている。ひなたがここに来た初日、そして次の日辺りにスラムの地理はある程度頭の中に突っ込んだ。その中でまだ何があるのか分からない部分。そこがひなたの目的である情報屋のある場所だ。一人では心配だ、とシャーレイは言っていたが、シャーレイがいる方が足手まといになる。シャーレイを人質に取られたら逆に迷惑になる。なるべく冷静にそう告げると、シャーレイは渋々だが、それに同意した。流石に自分が原因で今の生活が壊れる、というのが耐えられなかったのだろう。本当に子供なら、それでも拒否するのだろうか。シャーレイはそこら辺はちゃんとしているらしい。シャロン、という子がシャーレイにそう言った事を教えたのか、シャーレイ自身が学んだのか。

だが、シャーレイはまだ十四歳の子供だ。最初、年齢を聞いて、体付きが十四歳じゃないと驚きはしたものの、それなら一人で生きていく事に不安を覚えるのは仕方のない事だと思った。ひなたでさえ、十九歳でここに来て不安しか無かったから、今まで二人で生きてきたシャーレイなら、それも仕方のないことだと。だからと言って彼女を拾ったひなたはかなりのお人好しと馬鹿にされる位だが。

何時でも起爆銃を抜けるように構えていると、やはり周りの視線が気になってしまう。ローブで顔や髪を隠しているとはいえ、ひなたのローブの上からでも分かる小柄な体系を見たら女じゃなくても金品を力づくで奪えるかも、と思ってしまう。元男のひなただからこそ、こんな腐った場所で生活している中で小奇麗な女が来たらもしかし

たら、という思考を抱える気持ちは分かる。その対象にされた方はたまった物じゃないと学んだが。

基本的にスラムにいる男は戦える力がなく、しかし体はある程度鍛えて自分に酔っている馬鹿な男か、戦える力がなくこつそり生きている男か、ずる賢く生きている男、の三択に入る。戦える力の集まる場所、駆除連合で戦い、その中でも下の上位の力があるひなたがそんなスラムの男達に後れを取る筈がなかった。

「とは言っても、近づかれたらホントにマズいけど……嫌だなあ、犯されるのは。本当に」

ボソツと独り言を呟いた。犯されるのは誰も嫌だろう。だが、元男という立場である以上、男に犯されるといっなのは考えただけでも鳥肌が立つ。そうなったら確実にエクスプロージョンの魔弾を噛み砕いて自分の頭を吹き飛ばして自決する。

せめて普通に魔法が使えたなら、近距離戦もある程度は立ち回れたが、起爆銃が必要不可欠な立ち回りを強いられる以上、もし起爆銃を弾かれたらひなたは一般人よりも非力な存在に成り下がる。一応、嗜む程度に護身術は学んだが、片手ではやれる事なんてタカが知れている。

女という身が嫌になるのは何時もこういう時だ。非力で、小さくて、男共の欲望の捌け口になる。それ以外の面では得している部分もあるが、デメリットも大きい。早く男に戻りたいと切に思う。

溜め息を零しながらスラムの不味い空気を吸っていると、後ろで何かがコソコソしている気配がした。やはり、性欲を溜め込んだ腰を振りたい猿が狙っているらしい。体の動かし方もロクに知らない男が動く気配を察知するなんて、魔獣の奇襲を気配だけで察知するよりも容易い。魔力だけを固めた魔弾を一つ噛み砕き、魔力を暴走させ体外に放出させたひなたは振り返り、起爆銃を構えた。

「ジエノサイドバスター・マルチレイド」

魔法名を呟き、引き金を引く。シューターの魔弾が過剰な魔力によってビームに変化し、それが何十にも分裂して後ろから迫っていた男共を掠めて後ろへ抜けていく。それだけで男達は腰を抜かしてへ

たれ込んだ。

男の数は五人。大体一人一人が足や手を掴んで拘束し、残り一人が好き勝手に……という魂胆だったのだろう。馬鹿め、こっちは駆除連合で金を稼ぐ魔弾使いだ。シャーレイのような無力な少女ではない。

「うざいんだよ、お前ら。玉潰されたいか」

「ひい!？」

「いやまあ、分かるけどさ。性欲溜まる辛さ。けど、うざいモンはうざいから、とつとどつか行ってくれない？ 本当に玉潰すよ？」

威嚇にもう一発、魔弾を撃ち込んでやれば男達は這って逃げていった。ジエノサイドバスター・マルチレイドに人を気絶させるな威力は無い、見せかけの魔法だと見破れない時点でひなたを組み伏せるなんて夢のまた夢だ。一発で人を気絶させるのが精一杯なシューターを増幅させてビームにしても、それが何十分の一になっている時点でそれがシューター一発よりも威力の低い散弾なのは明確だ。強い人間はそれを見ただけで見せかけだと判断してくるため、マルチレイドは目眩ましにもならない。

考えてて悲しくなる威力だが、現状、ジエノサイドバスターのバリエーションの一つでしか人を一撃で殺せない以上、ひなたは弱い部類にどうしても入ってしまう。魔弾を人の首やら頭やらに何十発も連続してぶつければ殺せないこともないが。後はエクスプロージョンの魔弾での神風特攻。

慣れた事とはいえ、己の非力さに泣きたくなってきてしまう。そんな溜め息を吐き、ふと横を見ると、スラムの中でも一際細い脇道のような場所から、一人が入ってそうな、モゾモゾと動いている麻袋を持った男が出てきた。最初はそれを見て、何だ、人攫いかと思ったが、すぐにその考えを改めた。

その男達は、このスラムに初めて足を踏み入れた時にシャーレイを追っていた目的も所属も不明な男達だった。このスラムに出入りする以上、危険因子になるかもしれないあの男達に釘を刺したかったが刺せなかったため、なんやかんやで流れてしまった事だが、丁度いい。あの男達が攫ったのは変わらずに女の子だろう。ひなたは不敵に笑

い、起爆銃を構えた。

「はーい、検問だー。止まらないと撃つぞー」

やる気のない声でそう言った後、ばーん。と言いながら魔弾を放った。放たれた魔弾は動いている麻袋を持っていた男に当たり、男は吹き飛ばされた。

「な、何だ!?!」

「だ、誰だ!?!」

「やーやー。クソみたいな事を企む男の敵で一応は女の子の味方でーす」

フードを外しながら二発の魔弾を作り出しリロードしたひなたは起爆銃を構えて男達に近寄りながらそう言った。最初はフードを被っていたため分かっていなかった男達だが、隻腕銀髪の魔弾使いという情報から、ひなたの事を思い出したらしい。男達は冷や汗を掻き始めた。

「や、やべえ……!?!」

「あの時の魔弾使い!?! 何で今日に限っているんだよ!?!」

「んー? そんなの巡り合わせが悪かったねとしか。まあ、お前らの顔、見るだけで不愉快だからストレス解消に潰すんで。答えは聞いてないから」

そう言い、五発の魔弾の連射で残り八人の男の内、五人を一瞬で戦闘不能にした。

一切合切の容赦なしに撃ったひなたに対してドン引きしたのか唾然としたのか、男達は動こうとしない。その間、麻袋に入れられていた少女が自力で袋の中から脱出し、ひなたに礼をしながら逃げていった。それを笑顔で起爆銃を持った手を振って見送ると、残りの四人の対処をする事にした。

シールドを張って安全圏内で弾を作る。が、それを見ている男の一人が口を開いた。

「じゃ、邪魔をしたのが命取りだな、魔弾使い!?!」

「あー?」

やる気無さげにひなたは男の遠吠えを聞くことにした。魔弾作成

には少なくとも五秒以上かかる。まだ魔弾は半分も出来ていない。

「俺等はボスから助っ人を借りてきたんだ！ お前なんて一瞬で潰されるぜ!!」

正しく負け犬の遠吠え。ひなたはそれを聞きながら魔弾の作成に集中し、シューター五発、シールド一発の作榮を急いでいた。シールドは次の魔弾が作れる五秒の内、四秒しか持つてくれない。そこに攻撃が加われば更に時間は減っていく。それ故に、シールドが切れた瞬間の隙を無くすため、さっさと魔弾を作る時間の短縮のために集中する。

「ふーん。ほー。負け犬の遠吠えって聞いていると哀れ……?!」

だが、その集中を解かざるを得ない状態になった。

背後から、何か来る。それも、ヤバい奴が。かつて戦った、ヤバい奴が。

前のシールドが切れた瞬間に前へ転がり込み、シリンダーを開いて何時でも魔弾を装填可能な状態にしてから振り返る。その瞬間、先程までひなたがいた場所に何かが降り、地面が一瞬陥没。直後、土煙が巻き上がった。やっぱり、と思う間もなく土煙を巻き上げた怪物はひなたへと煙を切り裂き突っ込んでくる。

それを避け、再び振り返りながら魔弾をリロード。起爆銃を構えながら襲ってきた下手人を視界に収めた。

——そして、思考回路の硬直の後、相手の正体が分かった。その正体は、ひなたの追い求めていた物であり、今この場所で確実に滅ぼさなければならぬ存在だった——

「どうやら、情報は買うまでもなく大当たりみたいだね……っ!」

襲ってきたのは、シャレーイよりも少し年上な少女だった。

人の力を超越したその身体能力は馬鹿にはならず、ひなたへの突撃を外した少女は勢い余って男達の内一人を巻き込み、新たな関節を大量に生み出した。それ位、あの突進は馬鹿にならない威力を誇っていた。きつと、巻き込まれた男は死んだか重症か。少なくとも、ひなた

が手を出すより酷い状態になったのは変わりないだろう。

大当たりだ。眩きながら立ち上がり、体勢を整えながら思考回路の幾つかを魔弾作成に割り振り、何時でも魔弾をリロード出来るように備えておきながら銃を構える。

「だ、誰を狙ってるんだ、このクソアママ!!」

「ア、タマ……ボット、する……ヨクワカ、ラない……」

「そりやそうだろうね……一度死んで蘇ったゾンビなんだからさ……！」

ゾンビ。それは日本人が想像する物で間違っていない。

一度死に、その死体がなんの意思もなく動き出した、空想上の産物。つまりは死人。よくあるゲームでは薬品やウイルスによって作り出されていたりしていたが、このゾンビは違う。

正真正銘、死体が動き出した物であり、元の人間の人格は限りなく薄くなっている操り人形のような物。しかし、脳のリミッターの殆どが外されており、身体能力は馬鹿にならない。ひなたが真正面から攻撃を受けたら、そのまま死ぬまで殴られ続けるだろう。

だが、ひなたはこのゾンビと戦うのを待っていた。見つけるのを待っていた。

何故なら、ひなたは一度、このゾンビと戦ったことがある。数か月前。その日までのひなたの終わりであり、今のひなたの始まりとなった、あの忌々しい日。あの時、左腕を失い、怪物となる前のひなたが戦った、元村人達。元、恩人。彼等はゾンビとなり、ひなたに襲いかかった。

その黒幕。最後にひなたが破れ、全てを失う原因となったあの男。あの男が作り出す軍団。

それこそが、目の前にいるゾンビ。人道も何もない手段によって作られた、意のままに動く死体の兵。ひなたが情報屋に足しげく通つてまで欲しかった情報の一つであり、あの男が近くに存在する、という証明である存在。

思い出す。震える体で銃を構え、ただ撃ちたくないと叫んでいるのに、迫ってくる元村人を。逃げ込んだ先でゾンビ化し、ただ一言。殺

してくれと呟いた恩人を。それを泣きながら撃ち貫いたあの時を、あの瞬間を。

だが、もう手は震えない。涙は出ない。殺すことこそが、彼女に唯一出来る事だから。安らかに眠らせる事しか、もう方法は無いのだから。

「待っていたよ、お前を……あの男に近づいたためのパーツであるお前を」

全ては復讐のため。

あの男を抹殺するため。そのための、キーパーツの一つ。だが、それを保護しようとはしない。話を聞こうとはしない。こうして対峙した以上、戦わざるを得ない。

「だけど、お前は……お前の存在はボクが許さない。この場で消滅させてやる！」

「ジャマモノ……コロス……クウ!!」

見られただけで十分だ。見つけただけで十分だ。

だから、精一杯の慈悲をかけて。ひなたの中に残る僅かな良心にかけて、この少女は、この生きながら死ぬ地獄から解放しなければならぬ。

ひなたの目が碧から紅に染まり、ゾンビの少女の紅の目がひなたを貫く。

直後、ひなたの首に衝撃が走った。

「がっは……!?!」

一瞬意識が飛んだ後に自分の体が宙に浮いているのが分かった。

息が詰まり、一瞬で体力の半分以上が持っていられる。そして、首に徐々に何か食い込んでくる。

一瞬で肉薄され、首を掴まれたと分かったのは、息が詰まり呼吸が完全に出来なくなると理解した時だった。思わずその息苦しさに足掻こうとしたが、ゾンビには力比べは通用しない。それを思い出し、混乱する頭で魔弾を作成。それを足で蹴り潰しながらゾンビの腹にぶつける。

そして砕かれた魔弾から魔力の壁が生まれ、ゾンビを吹き飛ばし

た。シールドの魔弾は零距离で放った場合、魔弾の外側にいる相手を問答無用で吹き飛ばす効果がある。それを応用し、ゾンビを吹き飛ばした。その時、ひなたの首から手は外れ、足は地に着いた。

「げっほがはっ……いー あ网速さ……人を食った後だなー！」

ゾンビとて、常に全力で動けるわけではない。全力を出す条件の一つが、人肉を食らうこと。それでゾンビはゾンビとしての本来のスベックを発揮する事が出来る。そして、あ网速さ。人間の動体視力を超えた速さは明らかに人間を食った後。しかも、その直後だろう。

面倒なゾンビが来たものだ。まだ人を食っていないゾンビなら食わないように立ち回ればいいが、食ったゾンビとなると今のひなたではキツイ物がある。

——そして、シールドも一撃で破壊される。

「ガアア!!」

吹き飛ばされたゾンビの一瞬での肉薄。シールドがただの一回のパンチで砕かれた。それに驚きもせず、もう一枚を起爆銃で放って展開する。直後、ひなたはゾンビへ向かって走った。

一撃で再び破壊されるシールド。だが、拳を一回放った直後の硬直。それを狙い、ひなたがゾンビに組み付いた。

「グウウ!!」

組み付かれた事に困惑するゾンビ。だが、ゾンビの力なら簡単に振り切ることが出来る。

それを知っているからこそ、起爆銃を持った手をゾンビの顔に押し付け、視界を遮った状態にし、なるべく時間を稼げるようにする。そして——

「ラア!!」

ゾンビの首筋に、噛み付いた。直後、肉を食いちぎり飲み込み、嘔き出した血を口を近づけて飲む。ひたすらに飲む。振りほどかれるまで、飲む。だが、一秒と少しの時間が経った時にはひなたは振りほどかれ、手を掴まれ、投げ飛ばされた。しかし、ひなたも空中で何とか体勢を整えて受け身をとった。

そして、可能な限り全力で立ち上がり、起爆銃のシリンダーを開い

た。

「ふう……クソマズい血、ごっそーさん」

口についた血を袖で拭き取り、たったの二秒で次の六発の弾丸を作り出し、腕を振るってシリンドラーに弾を収める。

「さあ、第二ラウンドだ、ゾンビ娘……ッ！」

戦いは、ここからだ。

第九魔弾

ひなたに掛けられた制約。それは計二つの事を成す事によって一時的に解くことが出来る。

その内の一つが、先ほどもやった行為、『人間の血を吸うこと』だ。ゾンビが人間にカウントされるのかどうかは微妙だったが、こうして血を吸った事により、十分の一以下にまでなっていた自分の力が半分ほど戻ってきたのを感じる事から、人間としてカウントされているらしい。これによって魔弾の作成時間は二秒程までに縮まり、魔力も倍近くにまで増幅した。これで魔弾を使った戦いで魔力切れはほぼ有り得ないだろう。この力の解放が終わる頃には戦いは終了しているし、そんな時まで魔弾を作り続けたら本来の力を取り戻しても魔力切れはしてしまう。

血を吸った事による気持ちが高ぶり、首にずっとしがみついていた鈍痛が徐々に晴れていく。更に自分に魔弾を撃ち込み、五感と自身の反応速度も強化する。これが血を吸った事による恩恵、魔弾の強化。シューターの威力も強化され、シールドも強度が増し、その他の魔弾も効果が強化される。これによって、ゾンビ相手でもそこそこ戦えるようになる。

空いた弾倉に新しくシューターの魔弾を装填し、先手必勝でシューターを五発発射する。が、それは全て見切られ、ゾンビは一瞬で肉薄してくる。が、反応しきれない程ではない。すぐにシールドを放つて己とゾンビを遮断し、魔弾の作成に入る。

ゾンビはパンチをシールドに当たったが、強度が増したシールドに驚き、硬直する。そして、二発目を放ったと同時に七発の魔弾の作成が完了し、リロードと同時に一発の魔弾を自分の口に弾き飛ばす。それが口に入った瞬間にかみ砕き、硬直するゾンビへ向けて銃口を向ける。

「ジエノサイドバスターアアツ!!」

叫び、ジエノサイドバスターを放つ。前よりも遥かにその威力は増し、当たればタダでは済まない程になったビームだが、それが当たる

寸前、ゾンビは一瞬で跳躍し、それを躲していた。それに舌打ちしながら落ちてくるゾンビを見てジェノサイドバスターのコントロールを全て破棄し、己に五秒だけ身体能力を強化する魔弾を撃ち込んでから後ろへ向かって跳躍した。

直後、目の前にゾンビが降り、その衝撃で地面が陥没し、ひなたの体も更に後方に飛ばされる。その衝撃を上手い事利用して空中で回転し、地面に一度手を付く。そして、衝撃の力と己の腕力で更に後ろへ向かって飛ぶ。その際に魔弾を何発かゾンビの降った場所へ撃ち込んでおくのは忘れない。

足が地面に付き、完全に衝撃を殺した所で魔弾の作成に入り、シールドを放ってからリロード。その直後にゾンビが一瞬で肉薄してきてシールドを割り砕く。それに合わせてシューターの魔弾を五発放つ。ゾンビは対応出来ずに全弾当たって吹き飛ぶが、どうやらダメーシは無いようで、すぐに起き上がった。

「やっぱり殺さないと……頭を消滅させないとダメ、か」
ゾンビを殺す方法。それは、一つしかない。

頭を胴体と切り離す事。それだけだ。穴を空けるだけじゃ足りない。消滅。文字通り、消し飛ばさないとゾンビは無限の体力で襲い掛かってくる。リロードしながら、それを再び頭の中で思い出し、舌打ちをしながら再び起爆銃を構える。

やはり、人肉を食った直後のゾンビは一筋縄ではない。そう易々と倒せるような存在じゃない。

——それに、腹が減ってくる。

「コイツ……ヘン、ナニオイ」
「変な臭いか……そんなのは知らないね」

こっちは全ての攻撃に注意を払わないと火力負けする。と、いうか一撃でもくらったらそのまま戦闘不能まである。最初の攻防で殴られなかった時点で幸運だった。あれで死んでいても可笑しくはなかった。それを噛み締めながらも相手を睨む。もう一つの制約が解除されていないのは感覚で分かる。だが、それでも半分の力でここまで苦戦するのは、予想外もいい所だった。

このゾンビ、明らかに過去に戦ったゾンビよりも性能がいい。いや、判断能力が高いと言うべきか。ここまで人間らしく……当たる攻撃を避け、確実に殺すために急所を狙ってくるゾンビは初めてだ。普通のゾンビは相手を動けない状態、もしくは殺害してから食いにかかると。だが、このゾンビは完全にこつちを殺す事しか頭にない。そして、それを成すために最適な行動を繰り返して襲ってくる。

魔弾を一つ生み出し、それを噛み砕く。それは回復魔法を詰めた魔弾だったため、首に僅かに残っていた鈍痛がそれで治っていく。が、それでも完全に回復したという訳ではなく、もう一回掴まれば、確実に首をへし折られる。ひなたが近距離での対処方法を知っているというのを学んだゾンビが、また首を掴んで悠長にしているとは考えられない。

「ヨクワカラない……ケド殺ス!!」

「こ、言葉が……!?!」

一瞬、ゾンビが流暢に言葉を発した気がした。だが、それを確認する前にゾンビはひなたへ……ひなたの顔面へ向けて飛びかかる。獣のような飛びかかりを見てからすぐ、ひなたも前に走り出し、体が交差する寸前にスライディングをしてゾンビの真下を抜けていく。そして、すぐに手を付いて上半身を起こし、振り返りながら魔弾を三発放つ。が、ゾンビはそれを手で消し飛ばし、今度は体勢を低くして突進を仕掛けてくる。

それを後ろに飛びながら魔弾を二発撃ち迎撃するが、止まらない。それに舌打ちしながら足元にシールドの魔弾を生み出し、それを踏み砕く事でシールドを作り出し、上空へ向けて跳ねる。そして、空中に飛びながら六発の魔弾を作成し、空中でリロード。自然落下に身を任せ、下を見る。ゾンビが自分を追って飛んできているのを確認してからリロードしなかった残り一発の魔弾を起爆銃から魔弾を撃ち出し砕くことで魔法を発動。己の腕にバインドのチェーンが巻き付き、腕に物凄い衝撃がかかると同時に腕を支えに体が止まる。そして、少し体を揺らしてゾンビが自分の真ん前を素通りするのを確認してから再び魔力だけを詰めた魔弾を作成し、噛み砕き、チェーンで固定され

た腕で何とか照準を空中のゾンビに合わせる。

「撃ち抜け!!」

叫び、ジェノサイドバスターを放つ。しかし、ジェノサイドバスターは空中で身を振ったゾンビに避けられ、空へと無意味に昇って行った。それに舌打ちをしながらバインドを魔弾で打ち砕き、自由落下に身を任せ、途中でシールドを撃って緩衝材にしてから地面に降りる。

それと同時にゾンビも少し離れた場所に勢い良く降りてくる。どうやら、落下ダメージは無いらしい。

「はあ……はあ……これでもまだ倒せないか」

若干の魔力切れから来る息切れに予想以上の苦戦を強いられているのを確認してから目の前のゾンビを睨む。半分の力を発揮しても中の下程度の力しかないひなたには、あれだけの無茶な行動をさせられたら流石に魔力が切れかける。

魔弾をリロードしてから構え、ジリジリと後退していく。

ここは逃げたほうがいい。ここまで強いゾンビを相手取るのは今は不可能だ。ゾンビの性能が落ちた所で狙わないと……

だが、相手がそれを許さない。再び肉薄し、拳を振るってくる。

「ぐう!!」

それを辛うじて避ける。が、ゾンビは伸ばした手を曲げ、ひなたの首裏を掴むと、そのままひなたの体を寄せ、頭突きを繰り出した。それにひなたは声にならない悲鳴を上げる。

額が完全に割れ、血が噴き出す。しかし、ゾンビはそれを無視して離れようとするひなたの体と頭を無理矢理寄せ、口を開いた。

「おマエ……ソノ匂いハダレノモノだ……」

「う、ぐあ……し、るか、よ!!」

額からズキズキと響いてくる痛みにも喘ぎながらも拒否の言葉を放ち、零距离で魔弾を放つ。それによってゾンビの体がくの字に曲がるが、ゾンビはひなたから手を放すと、拳をひなたの顔面に繰り出した。が、ひなたはそれを避け、ゾンビの額に起爆銃の照準を合わせるが、それを外側から叩かれ、照準が明後日の方向を向く。

その隙を突いた拳が襲い掛かるが、それを首の動きで避け、再び照準を額に合わせる。しかし、それも内側から叩かれ、意味を成さない。

ガンカタ対徒手空拳。五感が強化されたひなただからこそ、ギリギリ反応の出来る速さで繰り返される拳と銃の応酬は完全に互角……いや、額が割れ、その痛みによる意識の混濁と流れる血による視界の遮りのせいでひなたの方が完全に不利だった。それでも、ガンカタをし続けたのは、相手が本能で行動する故の動きの読みやすさと今まで戦ってきた経験故だった。

しかし、万全の状態ならまだしも、手負いのひなたではそれもタカが知れている。すぐにひなたは首を掴まれ右手を抑えられ、押し倒された。そして、馬乗りになられ、完全にマウントと優位を取られてしまった。

「答エロ……お前カラ匂ウもうヒトリの人間のニオイ……ダレの物ダ」

「もう、一人……？ シャー、レイの事か……？」

小さく喘ぎながらもひなたは打開の策を考え、時間稼ぎくらいにはなるだろうと、ゾンビの質問に答えた。その答えにゾンビは何か思い出したのか、首を拘束する力が弱まった。

それでも抜け出すことは出来ないが。

「シャー、レイ……」

「ス、ラムに住ん……でた。シャロンってえ……はあ、女の子と、一緒に！」

「シャロン……？ シャロン……」

そして、完全に拘束が緩まった。その瞬間、ひなたは腕を振り払い、自分の口に魔弾を作成し、噛み砕き、銃口をゾンビの右腕……未だ首を掴んで離さない手の付け根である肩に向けた。

「ジェノサイドバスター・ペネトレートオ!!」

そして放たれたジェノサイドバスターは何時もよりもビームが小さかったが、一瞬でビームを全て放出し、ゾンビの右手を型から完全に焼き切った。

ジェノサイドバスターのバリエーションの一つ、貫通力に重点を乗

せたビーム、ジェノサイドバスター・ペネトレート。今のひなたなら人体を切断する程度は簡単だった。

「ウウ!？」

「飛べ!!」

そして、腕が自分の近くに落ちたのを確認し、すぐにゾンビの眉間に照準を合わせてシユーターを放ち、ゾンビを吹き飛ばした。そして、焼き切った手を起爆銃を持った手で掴み、立ち上がる。その時には、既にゾンビは立ち上がっていた。

だが、様子が変だった。ゾンビは頭を残った左手で抱えながら呻いている。

「……な、何だ?」

朦朧とする頭でひなたはその行動に疑問を持つ。

が、その答えはすぐにゾンビの口から放たれた。

『シャロン』ハ……………『私』、だ!! 『シャーレイ』は、『家族』ダ!!」
「え…………?」

その言葉にひなたの思考回路が完全にショートした。

目の前のゾンビは今、何と言った? シャロンは、自分だと?

シャーレイと共に生きてきた少女、シャロンは自分だと…………? まさか、そんな訳があるか。シャーレイ・ランフオードと共に生きてきたシャロンという少女は拳銃で殺されたんだ。決して、あの男に殺された訳ではない。

なのに、自分をシャロンだと言っている。

まさか、そんな訳が。そんな事があってたまるか。

だとすると、あの男達は…………ボコるだけボコって放置しようとしたあの男達は。

——全ての元凶たるあの男に繋がっている事になるんだぞ。

そんな事が。そんな残酷な事があってたまるか。

シャーレイまでもが、あの男の毒牙にかかっていた…………あの男の齎した災厄の被害者であった。

正気を取り戻したゾンビが、シャーレイの身内だったなんて……そんなの、残酷すぎる。どうして、彼女はシャーレイを守ってなお、こんな残酷な事をさせられているんだ。

「ウウウ………アアアアアアアアアア!!」

直後、ゾンビは……シャーロンは、己の持てる全ての力で飛び、近くの建物の屋根に飛び移ると、そのまま何処かへと去っていった。

「あつー… 待て!!」

そう口にしたはいいものの、ひなたにはシャーロンを追う手立てがない。そのため、シャーロンを追うことが出来ず……しかも、額からの出血が目まいを覚え、焼き切った手を持った手で自分の額を抑えた。

出血がひどい。何処かで治療しないと。せめて、この制約が解除されている状態で回復魔法を使って出血はどうにかしないと、何処かで気絶してしまう。すぐに回復の魔弾の作成に入り、手を片手にフラフラと近くの細い路地へ向かって歩みを進める――が。

「オラア!!」

「あがつ……!?!」

直後、後頭部に物凄い衝撃が走り、前のめりで倒れてしまう。

何でかシャーロンの腕だけは抱えるように持つており、ひなた自身の意識はもう一割も残っていなかった。

「はあ……はあ……や、やった?」

「ど、どうやら限界だったみたいだな……」

ひなたを倒したのは、シャーロンを呼んだ男達だった。既にその数を半分近くはまだ減らした男達だったが、ひなたとシャーロンの戦いに巻き込まれ、逃げるにも逃げれずにつと縮こまっていたのだ。そして、シャーロンが去ったのを見て男は近くに落ちていた石でひなたの後頭部を思いつきり殴りつけた。

その結果、もう限界の限界であったひなたは倒れた。腕を抱えて倒れたひなたは小さく動いてはいるものの、額を後頭部からの出血でもうマトモに動けないのは一目瞭然だった。

「……こいつ、どうするっ!」

「ボスの所に運んでもいいが……コイツのせいで俺達はド叱られたん

だ。何したっていいだろ」

「犯すか？」

「幼女趣味はねえが……溜まってるし犯してやろうぜ。で、犯し尽くしたらそこら辺の野郎に売ればいい」

「いいねえ、そうするか」

ひなたは先程よりもモゾモゾと動いていたが、そんなのお構いなしに男達はうつ伏せで倒れているひなたを蹴って仰向けにした。ひなたは自分の顔にシャロンの腕を押し付けていたが、それが不幸にも己の体を晒してしまう格好になっていた。

「おい、ナイフねえか。服を裂くぞ」

「持ってねえな……他は？ ……ちっ、持ってねえってさ」

「んだよ、使えねえな……もういい、まずはローブから剥いじまうぞ」
そして、いとも簡単にローブは剥ぎ取られ、投げ捨てられた。ひなたはそれでも動かない。ずっと、シャロンの腕を顔に押し付けている。

「ん？ 何だコイツの服。ヤケにすっかりとしてんな……」

「どうする？ もう下だけ使いりや十分だし下だけ脱がせるか？」

「そうするか」

そして、男の手がひなたのショートパンツにかけられる。

このままひなたは男達の思い通りに好き勝手に体を弄ばれ——かと思われた。が、ひなたを囲んでいた男の一人が異常に気が付いた。それが何なのかを完全に理解すると、悲鳴を上げながら腰を抜かした。

「ひいひい!!? こ、このガキ……や、やべえぞ!!?」

「おいおい、どうしたんだ？」

「あ、あれ……あれ見ろ!!」

男が指を指す。それは、ひなたの顔……正確には、口元だった。

それが最初は何なのか分からなかったが、それが理解できた人間からひなたから一気に距離を取った。

コイツはヤバイ。近づいちゃいけない。いや、もう触っちゃいけない。真っ先に逃げないと、もしかしたら殺される。それを最後の一人

が気が付いた瞬間。

「死ね、クソ野郎」

ひなたはシャロンの腕を投げ捨て、右手の起爆銃の照準を男の眉間に合わせる、そのまま引き金を引いた。

——それだけで、男の眉間を魔弾が貫き、男は一瞬で絶命した。

「こ、こいつ、簡単に人を殺しやがった!？」

「うっせえ……お前らもやった事だろ……今更びじるなよ。股間に玉付いてんのか……?」

ゆつくりとひなたは立ち上がった。その瞳は今までよりも色鮮やかな、しかしドス黒い紅に染まっており、まるで発光しているかのよう綺麗に見えた。

「くくっ、はははは……もうさあ、頭ぐわんぐわんしてなーんにも考えられないんだわ。けど、お前らを殺せば多少は気が晴れるっただけは分かるの」

ひなたの目の前に一瞬で魔弾が作成され、リロードされた。完全に弾が込められた起爆銃を向けられた男達は悲鳴を上げながら逃げようとする。その姿を見ながらひなたは呟いた。

「さあ……極刑の時間だよ?」

直後、鮮血が舞った。

第十魔弾

夜。シャーレイは帰ってこないひなたの事を心配し、しかしスラムまで行ったらひなたに怒られるのは分かっていたため、迎えに行きたくても迎えに行けない。そんな気持ちに心を悩まされひたすらに宿の部屋の中をウロチョロしていた。やはり、ひなたがいない時間というのは落ち着かない。それ故に宿をウロチョロして何とかその気を紛らわせようと必死だった。

だが、よく考えてみると、ひなたがスラムから帰ってこなかった場合、スラムに来ちゃいけないなんて一度も言われていない。ただ、ひなた本人がスラムから帰ってこれない可能性を考えてなかっただけ、というのもあるのだろうが、それでも言われていないならやつてもいいかもしれない。ひなたに叱られてもそんな事言われていない、の知らぬ存ぜぬで通しきれるかもしれない。何やかんやで優しいひなたの事だ。きつと許してくれるかもしれない。

「そうと決まればー！」

シャーレイはすぐに自分の上着を羽織り、外に出るためにドアノブを掴みかけた。

が、そのドアノブは勝手に捻られ、すぐにドアが独りでに開いた。内開きなので、徐々に迫ってくるドアを後ろに下がりながら避けると、ドアの向こうから見慣れた小柄な少女が現れた。

「ヒッ!? ……って、ひなたちゃん!？」

「シャーレイ……！」

ひなたの様子は、かなり可笑しかった。ローブすら羽織らず、服も体も汚れっぱなしだ。

だが、それ以上に可笑しい部分が沢山あった。

ひなたの顔の八割以上が血で濡れていた。髪の毛も、後頭部から首筋にかけての場所が真っ赤に染まっており、いつもサラサラだった髪はベツトリと血に濡れ張り付いている。そして、顔も血に濡れていない場所を探すのが難しい程には血に塗れていた。特に、口に閉めては血を吐いたのか分からないが、チラリと見えた歯すら真っ赤に染ま

り、口回りは特に血が酷かった。

体に關しても、服が殆ど血に濡れ、ひなたの体からは血が出てはいないが、返り血にしてはその血は多すぎた。

目も、前に吸血された時よりもかなり鮮やかに紅に染まっており、真つ暗な場所に放置したら光のない場所で赤く光って見えるのでは、と思えてしまうほどだった。

ほぼ全身を赤に染めたひなたは、一瞬誰かと思ってしまう程だった。ここまで歩いてくる中、すれ違った人はかなり驚いたことだろう。

「……ごめん」

ひなたはゆっくりとシャーレイに近づき、そのまま倒れるようにシャーレイに抱き着いた。

この数秒の情報過多な出来事に脳がパンク寸前だったが、抱き着いてきたひなたを抱きしめ返す位には脳が働いた。だが、どこかひなたの様子が可笑しい、と思い、ひなたに対して言葉を返すことが出来なかった。

だが、ひなたは数秒ほど苦しそうに喘ぎ、再び口を開いた。

「血を……飲ませて……」

「血を？」

ひなたがこうして自ら吸血させてくれと頼むことはあの日以来無かった。

こうして血を望むという事は再び幻肢痛が起きたのか、それともスラムで何か、血が飲みたくなる出来事があったのかは分からないが、ひなたはかなり苦しそうにそう言った。

なら、シャーレイに断る理由はない。ひなたが望むのなら、その程度は容易い事だ。

「うん、いいよ」

「あり、がと……っ」

シャーレイはひなたを抱きしめたままベッドまで移動し、腰かけるとひなたを膝の上に乗せた。

ひなたと顔が向き合うように乗せ、暫し二人で顔を見合った後、ひ

あなたはゆつくりとシャーレイの肩に顔を乗せ、そのままシャーレイの首筋に牙を立てた。

一瞬の痛みの後にそれを上回る快楽が襲ってくる。それを抑えながらゆつくりとひなたの頭を撫でる。

「んっ……あ……」

「ん……ちゅ……くっ……」

ゆつくり、ゆつくりと血を吸っていくひなた。前のような、何かを我慢しながらの吸血ではなく、単純に血液を飲みたいがための吸血。

自分の体の中から暖かい物が徐々に抜けていき、若干の寒気を覚えながらもゆつくり、ゆつくりとひなたの頭を撫でる。赤子を慰めるかのようにゆつくり、ゆつくりと。

それが十数分経っただろうか。体が寒気を覚え始めた辺りでひなたは吸血を止め、首筋から口を離れた。そして、数回シャーレイの傷口を舐めると、そのまま顔を離れた。唾液が赤い糸を引き、ゆつくりと途切れていく。

「今日は、長かったね」

「……ごめんね」

二人で向き合い、言葉を交わす。

そして、ひなたがそのまま目を閉じ、シャーレイの額に己の額を合わせた。シャーレイはそれに驚いたが、きつと物凄い疲れてどうしようも無かったのだろう。

「もう……シャワー浴びないと、血が酷いよ？」

それに、臭いも。

血と肉が混ざったようなその異臭はひなたの元の臭いを完全に打ち消していた。だが、ひなたは酷く弱い力でシャーレイを抱きしめる行為だけでそれを拒んだ。余程な事に巻き込まれてしまったのだろう。こんな返り血に塗れて、それでも生きて帰ってきたのだろう。

そう考えると、今にでも休ませてあげたいが、それでもシャワーくらはいは浴びないと返り血も取れないし異臭が明日まで残ってしまう。優しく抱きしめ返してそれを逆に拒否する。

「私が洗ってあげるから。ね？ 女の子なんだし入んなきゃだめだ

よ」

「……………ん」

ひなたはかなり渋々だったが、その言葉を聞いて一言だけ呟き頷いた。ゆっくりと彼女はシャーレイの膝の上から降り、そのまま服を雑に脱ぎ始めた。せめて脱衣所で脱いでほしかったな、と思い、ひなたの脱ぎ散らかした地濡れの服を全て拾って洗濯物を入れる籠に入れた。

「あ、ありがと……」

「いいよ。ほら、先に入ってきて」

シャーレイもここで脱いじゃえ、と思いながら自分の服に手をかけた。

が、何故かひなたの視線を感じたため、脱ぐのは中断してひなたに声をかけた。

「どうしたの？ ひなたちゃん？」

「う、ううん。何でもないよ」

顔色が返り血で完全に不明なため、タダの挙動不審な状態になっていたひなただが、ボーツとしていたため、シャーレイの着替えをガン見していた。何とかシャーレイの言葉で我に返ったが、もし声をかけられなかったら脱ぎ終わるまでガン見していたかもしれない。

そそくさとひなたはユニットバスに入っていく、暫くして服を脱ぎ終わったシャーレイが二人分のタオルを手にその後を追った。

浴槽の中でうつらうつらとしていたひなたを見てちよつと笑ったシャーレイはすぐにシャワーでひなたの返り血を落とし始めた。だが、髪に関しては結構べつたりとこびり付いており、数回シャンプーを使って髪を洗わないと落ちない程だった。

が、数回洗えばしつかりと落ち、何時もの綺麗な銀髪に戻った。

「……………シャーレイ」

「なに？」

髪の前まで丁寧に泡を落としていると、ひなたがふと口を開いた。

「……………この傷、どう思うかな」

「どう、って？」

「消したほうがいいかなって……この傷、実は消せるから」

そう言い、ひなたは自身の胸元に大きく残っている傷跡を撫でた。ひなたにとって、その傷跡は決意の印でもあった。絶対に、あの男を抹殺する、という。もう、他人と密接な関係にはなれないのだから、これをその印として残しておいてもいい、と思っていた。

が、こうしてシャーレイと密接な関係になった以上……自分の全てを肯定してくれるかもしれない女の子に出会ってしまった以上、その決意は印ではなく想いとして己の中に残し、改めて己の人生を始めるために。

復讐のためだけではなく、シャーレイを守るという事も含めた人生を始めるために。

「……ひなたちゃんが消したい、って思ったなら消したらいいんじゃないかな。消せるのに、どうして残しているのかは私には分からないけど、ひなたちゃんの中でそういう踏ん切りがあったなら、消せばいいと思う」

「……そっか」

シャーレイにとっては、こんな自分より小さな年上の女の子がどんな壮絶な人生を送ってきたのかはわからない。が、それでもこの傷は、きつと名誉ではなく何か別の物を忘れないための証明としているのだと何となくだが察していた。

だから、それを消すのがひなたにとってとはどんな気持ちなのかは分からなかった。分からなかったからこそ、この傷はひなた本人が消したいと思ったら消せばいい。そうとしか思えなかった。

「……じゃあさ、ボクの秘密が知られたら消すよ」

「秘密？　まだあるの？」

「うん。とっておきが」

吸血とは格が違う、とっておきの秘密が。

それを知って、シャーレイがひなたの元を離れることなく一緒に居てくれるのか。それは分からないが、もし一緒に居てくれるという物好きになってくれるなら。彼女と共に生きるため、この傷を消そう。

きつと、あの人達も……あの惨劇の中、ひなたが手にかけて恩人達

も、こうしてひなたが復讐だけを生きがいと戦い続ける事は望んでいないと思うから。

「……分かった」

「……後は明日話すね。今日あった事は、ちよつと今日は話したくないから」

「いいよ。そう一言だけ言い、ひなたの髪を洗い終わった。」

もう上がっていいよ、と言うと、ひなたはシャーレイの持ってきたタオルで最低限、自分の体を拭くとユニットバスから出て行った。シャーレイも急いでシャワーを浴びると、すぐに体を拭いてユニットバスから出た。ひなたは髪も乾かし、下着だけ身に着けベッドで寝ていた。

こういう所は子供っぽいんだから、とシャーレイは笑いを零しながら寝間着に着替えてひなたの隣に潜り込んだ。シャーレイには、ひなたが今日、どんな修羅場を送ってきたのかは到底予想はできない。だが、今日、こうやって帰ってきてくれた。それだけでもシャーレイは嬉しかった。

きつと、ひなたの言う秘密という物は、シャーレイには予想もつかないような事なのだろう。だけれども、シャーレイにはひなたがどんな秘密を持っているても受け入れる準備は出来ている。彼女に許されるのなら、例え全世界が敵に回っても彼女の側に居続ける覚悟だってある。

二十歳には見えない幼い寝顔を正面にして、シャーレイは眠りについた。きつと、明日もこうして一緒に寝ることが出来ると信じて。

目が覚めると、シャーレイの目の前にひなたは居なかった。体を起こして少し周りを見渡せば、ひなたは椅子に座って椅子の肘掛けに肘を立て、手で顔を支えながら煙草を吸っていた。

瞳は片方しか見えないが、既に紅から翠に戻っており、服もちゃんとして着ている。今日は何時もの半袖の部屋着ではなく、長袖の部屋着を

着ているため、左腕に袖が入っておらず、ひなたの細かい体の動きで袖が独りで揺れている。

「……ああ、おはよう、シャーレイ」
「ん……」

朝に弱いシャーレイは寝惚け目を擦りながら現状を把握する。

まず、ひなたは確実にシャーレイよりも早く起きて煙草を吸って時間を潰していたのは分かる。だが、よく見てみると、昨日洗濯していなかった服が窓際に掛けられ干されていた。その中には昨日、返り血で真っ赤になっていたひなたの何時もの戦闘服兼外出着も掛けられており、ひなたが一人でそれを行ったのは明白だった。

それを頭の中で長時間かけて把握していると、ひなたがその視線に気が付き煙草を咥えたまま現状の説明をした。

「明け方に幻肢痛で目が覚めちゃってね。そのまま寝付けないから洗濯でもしようかな、って思ってた。それに、ボクの服は血塗れだったから、シャーレイにやらせるのは気が引けるしね」

数時間前に目が覚めたひなたは二人分の洗濯物の選択をした後、一人で一時間以上血を落としていた。隻腕でやりにくかったためかなり時間がかかったが、戦闘服兼外出着は一張羅であると同時に頑丈で高いため、何が何でも血を落とそうとユニットバスで一人格闘していた。

その結果、血は綺麗に落とすことが出来たが、いつもの半袖の部屋着とズボンが濡れたため、もう一着の長袖の部屋着とショートパンツでこうして一人煙草を吸っていた。

「……私がやったのに」

「あはは、ごめんごめん。じゃあさ、後でいいから煙草をカートンで買ってきてくれないかな。無くなっちゃってさ」

そう言いながらひなたは空になった煙草の箱を見せる。

ようやく目が覚めてきたシャーレイだったが、灰皿を見て自分の目を疑った。

毎日灰皿は嫌でも目に付くが、今日の吸い殻は何時もよりも大量にあった。それこそ、一箱分一気に吸ったんじゃないか、と思ってしまう

うくらい灰皿に吸い殻が刺さっていた。

「ひなたちゃん、流石に吸いすぎ……」

「ん？ ああ、もう一箱分吸っちゃったからね」

「えっ!? それ、この間封を切ったばかりじゃなかったっけ!」

「あはは……実は、起きてから吸血衝動が収まらなくてさ」

そう言いながらひなたはもう短くなった煙草を灰皿に押し付けてシャーレイの方を見た。

ひなたの瞳は、片方は翠だった。だが、もう片方が紅に染まったままだった。

「ひ、ひなたちゃん……目が……」

「オッドアイだって？ 分かってる分かってる。多分、今日一日はこのままだろうから」

今日一日、目が紅のまま。

ひなたの目がこうして紅に染まる時は血を吸いたいと思ってしまっている時だ。こうして片目だけが紅の状態は見たことがないが、少なくともひなたは今日一日中、血を吸いたいと思いつけてしまおうだろう。

「別に、私のだったら吸ってもいいのに……」

「いや、そういう問題じゃなくて……多分、このままシャーレイの血を吸い続けたら戻れなくなるから」

「戻れなくなる?」

「うん。まあ、簡単に言うはずと血を吸いたって思いながら生きていくことになるって事。しかも、吸う量も多くなるから、きつとシャーレイの全身の血を吸っても足りないくらいには衝動が激しくなる」

それは嫌だから。とひなたは呟き、再び煙草の箱から新しい煙草を出そうとしたが、もう空なのを思い出してそれを握りつぶしてゴミ箱に投げ入れた。

「……新しいの買ってくる。多分、お店開いてるから」

「わ、私が行くよ!」

立ち上がったひなただが、シャーレイがすぐにベッドから降りてひ

あなたの肩を押して椅子に座らせた。

予想以上にひなたの力は弱く、押されるがままに後退していき椅子に腰を下ろした。

「じゃあ、着替えたらすぐに行つてくるね。カートン……取り敢えず沢山だっけ?」

「あ、うん。一カートンって言えば店員が分かってくれるから。お金は勝手に持つて行って」

「はい。銘柄は?」

「同じので」

すぐに寝間着から着替えた着替えたシャーレイは財布を片手に走つて外に出て行つた。なるべく早く買って帰らないとひなたも吸血の衝動で苦しいだろう、と思い、全力ではないものの走つて近くの店へと走つていった。

この世界にはコンビニは無いが、結構遅い深夜帯までやって朝早くからやっている、食料から衣類、娯楽品まで色々と売っている小さな店が結構な店舗ある。シャーレイはそこに走つて入っていき、レジでひなたが吸う銘柄の煙草をカートンで買うと、それを抱えて宿まで戻ってきた。

大体、十分もかかっている位で息を切らしてシャーレイは戻ってきた。

「ひなたちゃん、買ってきたよ!」

「はやっ……ありがと、シャーレイ」

そう言つて出迎えたひなたの目は既に両目が紅に染まっていた。どうやら、今日の吸血衝動は余程手ごわいらしい。礼を言つて煙草を受け取つたひなたはすぐに一箱を取り出すと、すぐに火を付けて吸い始めた。

ひなたが一本吸い終わると、目は再び翠と紅のオッドアイに戻つていた。それにホツとしていると、落ち着いたらしいひなたがシャーレイに口を開いた。

「いやあ、こうしていると中毒者みたいで笑つちやうな」

「あはは……」

その言葉にシャーレイは否定の言葉を返す事は出来なかった。

これは明日から本数減らすの大変だぞ、と笑いながらひなたは眩いたが、シャーレイにとってはどっちにしろひなたの事が心配だった。煙草を吸う量もだが、それ以上にひなたの吸血衝動が。片目が紅であり続けるというのは、ずっと血が吸いたい、という気持ちを抑え続けているという事なのだろう。それはとても辛いし厳しい物なんじゃないか、と思ってしまう。

それなら、少しくらい吸ってもいいんじゃないか、とも。

「……心配してくれてる？」

「うん」

ひなたの言葉に即答で返した。ひなたはその言葉に一言、ありがとう。と返して灰を灰皿に落とした。

すぐにシャーレイが灰皿の灰をゴミ箱に落とし、灰皿を綺麗にする。それに対してもすぐにひなたは礼を言い、綺麗になった灰皿に灰を落とした。

そして、暫く無言の時間が続いた。そして、ひなたが三本目の煙草を啜え、火をつけた後に煙草を啜えながらひなたが口を開いた。

「……昨日起こったこと。全部は言えないけどシャーレイにとっては重要な事もあるから、今話しちゃうね」

「私に……？」

シャーレイにとってはそれが皆目検討がつかなかった。隠れ家が崩壊していましたが、とか乗っ取られていました、とかなら全然問題は無いんだが。どうせ引き払う予定だった場所だ。乗っ取られていても文句は言えど取返しにはいかない。精々、あそこにまだ少しだけ置いてあるシャーレイの私物をとってくる程度だろうか。

シャーレイは気軽にそう思ったが、ひなたはシャーレイから視線を外し、壁を見ながら煙を吸い込んで吐き出してから、何とか重い口を開いた。

「……シャロンと、会ったんだ」

「……え？」

「君を逃がすために撃たれた、シャロンと……会ったんだ」

重々しく告げられたその言葉に、シャーレイは言葉を失った。
ひなたはその様子を見ずに、ただ煙を口から吐いた。その煙は、こ
の空気の重さの中、ふわふわと舞って消えていった。

第十一 魔弾

シャロンと出会った。その言葉はシャーレイには出来の悪い冗談にしか聞こえなかった。

シャーレイは見た。あの日あの時、確かに撃たれて倒れ伏し、その状態で更に撃たれた家族同然だった少女を。スラムでの生き方を教えてくれたあの優しくも強い少女の最期を。

だと言うのに、ひなたは出会ったという。シャロンに。

「シャロンちゃん……生きて……？」

「死んでたよ。残念ながら」

その言葉にシャーレイの思考回路が一旦止まった。死んでいる人間に会った。それがどういうシチュエーションなのか、どういう事なのか、それがシャーレイの頭では理解できなかった。

ひなたの表情は見えない。そっぽを向いて淡々と話す彼女の表情はどうなっているのかは分からないが、それでも無表情に近い表情だという事は声色から何となくだが想像できた。

「……ボクはそれをゾンビって呼んでる」

「ゾンビ……」

「死にながら生きる人間……生きる屍。動く死体さ」

ゾンビ。その存在を簡潔に説明されたが、それがいまいち呑み込めなかった。

死体が動く。そんなのあつてたまるか。有り得るものか。死体は動かないもの。人は死んだら生き返らないし動くこともない。そんな当たり前を崩すような存在をシャーレイは想像出来なかった。しかし、ひなたはその言葉を冗談だと一蹴する事はなかった。ひなたの表情は分からないままだが、自分の表情は何となくだが分かった。

恐怖と怒りと悲しみが混じったような顔をしているだろう。何とも言えない顔をしているだろう。

その表情を見られたくなくて俯いた。が、ひなたはそのまま言葉を続けた。

「殺されかけたよ。急に出てきたシャロンに襲われてね」

「シャロンちゃんはそんな事しない!!」

思わず叫んでしまった。その声にひなたは何の言葉も返さなかった。

シャーレイにとってシャロンは最も大切だった少女だ。今はこうしてひなたと生きているが、彼女が死んだという事実はシャーレイにとって癒えぬ傷になっている。だけれども、引き摺っては彼女は悲しんでしまう。だからその傷を時の流れに任せて生きていこうと思っただ。

だと言うのに、この冗談は笑えない。死体のまま動いてひなたを殺しかけた。そんなの、シャロンがやる筈がない。シャロンの事は十年以上一緒に生きてきたシャーレイが一番知っている。だから、そんな事はない、と断言できた。

だが、ひなたはその言葉を否定はしなかった。だが、代わりの言葉を紡いだ。

「シャロンは正気じゃない。もう、君の知っているシャロンじゃないんだ」

「正気じゃない……?」

何時の間にか、ひなたはシャーレイを見ていた。彼女は啜っていた筈の煙草を灰皿に押し付け火を消し、真面目な表情でシャーレイを見ている。持っていない。持っていない。

その眼には一切の陰りを感じなかった。彼女が本当の事を言っているのだと、心の中で理由のない納得が出来る位にその瞳は陰りを持っていない。

「ゾンビになった人はもう二度と元には戻らない。そして……人を、食い続ける怪物になる」

「ひ、人を……?」

ひなたは淡々と事実を口にした。

もう頭の中がショート寸前なのにも関わらず、ひなたは事実を次々と口にしていく。その全ての口調が事実のようにはか思えないほど真剣であり、しっかりとシャーレイの目を見ながらの言葉だったため、嘘だと一蹴することを理性が拒んだ。だが、感情はそれが嘘だと

信じたがっていた。

「嘘だと思ってもらってもいいよ」

だが、ひなたのこの言葉で、今までの言葉が嘘なのではないという確信が出来てしまった。ここまで言われてしまうとそれが嘘だと一蹴出来ない。感情が否定しても理性が受け入れてしまう。この言葉を叫んで拒みたい程混乱してしまったが、ひなたはシャーレイを翠と紅の視線で貫いている。

「ただ、これだけは君に伝えたかった。彼女は一瞬だけ正気を取り戻したんだ。そして、言ってた。君の事が家族だつて」

「家族……」

「君がどう思っているのか分からない。けど、これだけは君に伝えておくよ」

ひなたはシャーレイの目を見たまま、口を開いた。

——ボクは、シャロンを殺す。

その言葉を聞き、シャーレイは自分の中の感情を完全に表に出し、立ち上がった。が、立ち上がるだけだった。ここから取るべき行動が分からなかったから。

シャロンを殺す、とハッキリと言われ、ふぎけるなど叫びたい。だが、彼女はもう死んでいる。もう訳が分からない。頭の中がゴチャゴチャしてどうしたらいいのか分からない。

ゾンビとか言われても分からない。正気を失っているとか分からない。殺すとか言われても実感が湧かない。何も考えられない。だが、分かるのは一つだけ。『ひなたは事実しか口にしていない』。ただこれだけだった。だが、だからこそ分からなかった。全てがわからなかった。もうどうしたいのか、どうしてほしいのか、何もかもが。

「……それだけ。近いうちにボクはシャロンを殺すよ」

「……なんで？」

「シャロンにとっても、これは苦しい事なんだよ。自分が死んだあと、体をいいように使われて人を食わされ人殺しをさせられ、また人を食

う。この繰り返しをするのは」

確かに、嫌だ。そんないいように体を使われるのなんて。そんな、怪物に体を仕立て上げられていいように使われるのは。だとしたら、いつそ殺してほしい。そんな悪夢を終わらせるために殺してほしいと思うだろう。だけど、シャロンが死体になっても生きているのなら、正気を一瞬でも取り戻したのなら。

また、一緒に生きていけるかもしれない。そこにひなたも加えて、三人で生きていけるかもしれない。そう考えてしまう。

だが、ひなたの視線がそれを否定する。馬鹿な事を考えるなど視線が訴えている。

「……ひなたちゃんに何が分かるの」

それは、シャロンの事ではなく、自分の事だった。

こうして目の前で残酷な事を告げられ、家族同然の少女のその後をこうして淡々と話され、最後に一瞬希望を与えられたのにも関わらず殺すと告げられた気持ちだ。

ひなたに分かるわけがない。そう思っ

「……分かるよ」

「分からない!」

「分かる」

「分かるわけない!!」

「分かる。ボクはゾンビになった恩人を手にかけてた事があるから」

「え……?」

隠そうともせずひなたはそう告げた。

自虐気に笑い出したひなたは煙草を啜えながら呟き始めた。

「昨日のように思い出すよ。とある男のせいで街がゾンビだらけになってね……ボクはゾンビ化しなかったんだ。だけど、皆がボクに向かって歩いてきながら言うんだよ。食わせろ、殺してくれ、腕一本だけでも、死なせてくれ、生き血を飲ませろ、眠らせてくれ……けどさ、中には正気を保ってる人がいたんだよ。涙を流しながら、ゾンビ化していない人を食って殺して食って殺して……その人がさ、ボクを見て言うんだよ。殺してくれ。もう人を食いたくないって。ボク

はそれが精一杯出来る事だと思って殺したよ。でもさ、ボクを助けてくれた恩人もさ、ゾンビ化していたんだ。その人は、自分の奥さんを食い殺して絶望していた。泣いていた。嘆いていた。殺してくれて叫び続けていたんだ。でも、ボクは引き金が引けなかった。けど、あの人はこう言ったんだ。時には、殺すことが救いになるって。そう言って、あの人はボクに引き金を引かせたんだ。最後の理性で、笑いながらボクの頭を撫でてから、そつと起爆銃を掴んで、自分の眉間に照準を合わせて、ボクの指の上から、引き金を引かせたんだ」

こう、バーンって。涙を流しながら仕草を加え告げられた事は、とても残酷な事だった。

知り合いが、恩人が皆ゾンビになるか食い殺され、ゾンビ化した人をその手にかけて。正気を保っていた人達に向かって引き金を引いた。

ゾンビの中で正気が残っているのはかなりのレアケースだと言う。ひなたも正気を保ちながらゾンビ化したのは三人しか知らないらしい。だが、ひなたはその三人に対して引導を渡した。それが、一番の救いになると信じて。それが、唯一の手向けになると信じて。

「……ボクは、ゾンビを探していた。それが、その人達の敵討ちに繋がる手がかりになるから。そんな、手遅れな人達を救う手段を、ボクはもう簡単に取りつてあげられるから」

ひなたが色んな街を流浪していた真実。それが、これだった。

ゾンビに自らが引導を渡す。殺す事こそが唯一の救いになると知っているから。それを私情抜きで行えるから。そのの、被害者であるから。

「でもさ……人知れず死んじゃうのって、寂しいじゃん？ たった一人の家族に知られる事なく死んじゃうのは、寂しいじゃん？ だからさ……せめて、君にだけは……シャロンの家族であるシャーレイにだけは、教えておきたかったんだ。罪はボクが全部背負う。だから、君はシャロンの思い出を……ゾンビになっても、正気を殆ど失っても たった一人の家族を忘れなかった優しい女の子の事を、忘れずに覚えていてほしいんだ。それが、ゾンビになっちゃった人への……精一杯

の、手向けだから」

ひなたは、悩んでいた。シャロンの事を話すかどうか。シャーレイにこの残酷な事実を教えるかどうか。

だが、教える事にした。シャーレイには酷な事だが、シャロンの事を覚えていてほしかったから。

罪はひなたが引き受ける。だが、それ以外を。それ以外のいい部分は、シャーレイが覚えていてほしかった。それが、シャロンに出来る唯一の救済だと、ひなたは信じているから。思ったから。

「……そんなの、ひど過ぎるよ」

「知ってる」

「シャロンちゃんがかわいそうだよ……」

「分かってる」

「……でも、このまま放っておく方が、きつと辛いんだよね」

「……そうだね」

「……だったら、お願い。シャロンちゃんを、休ませてあげて」

「約束する」

きつと、このまま放っておく方が、シャロンにとっては苦しいのだと理解したから。

だから、頼む。ひなたに。力のあるひなたに。

「……でも、一つだけ、お願いしていいかな」

「何かな？」

「シャロンちゃんの亡骸は……私が埋めてあげたい。だから、なるべく近くまで私も連れて行って」

「……危険だよ？」

「分かってる。けど、危険なのはひなたたちちゃんもなんでしょ？」

ひなたが血みどろで帰ってきた理由。それにシャロンが深く関わっているのは、この一連の会話から把握した。だから、一番危険なのはひなただと言うのは把握していた。

だから、ひなた以上には近づかないから、せめて近くに居させてくれ。それだけ出来ればいいと。ひなたに告げた。シャーレイの真っ直ぐな視線に彼女は新しい煙草に火を付け、苦笑した。

「今回だけね？」

「うん」

ひなたにとっても、今回の戦いは厳しいものになる。だから、シャーレイは遠ざけておきたかった。

が、こんな真つ直ぐな目で見られたら、断れなかった。

そして、絶対にシャロンの遺体を抱えて彼女に引き渡そうと。そう決意してしまった。

「……明後日。ボクは情報屋に行つてシャロンの情報を買ってくる。そして、三日後の夜。ボクはシャロンを殺しに行つてくる」

「うん、分かった」

「……絶対に、シャロンは取り返してくるから。約束する」

「うん」

シャーレイは瞳に涙を浮かべながら頷いた。

ひなたも、その涙に約束した。絶対に死なずに帰ってくる。シャロンを、シャーレイの手で土に還すと。

そのために、シャロンを殺す。この手で。魔弾で。

ひなたにとって、ゾンビは通過点の一つだ。その先に繋がる敵を殺すための。だが、その考えは今捨てる。今は、目の前で泣く少女の家族を眠らせるために、ゾンビを殺す。

第十二魔弾

二日後。ひなたは煙草を吸いながらスラムのとある建物の前に立っていた。

ペンキのような物が玄関にぶちまけられた家。その家を前に携帯灰皿に片手で器用に灰を落としてから魔力だけを込めた魔弾を取り出し、地面に落としてから踏みつけた。

そして割れた魔弾から溢れた魔力がペンキのような物に触れると、ペンキが銀色に光りだした。これがこの家が情報屋のアジトであるという証拠と同時に、客が来たという合図になる。ペンキが光ってから大体一分ほどが経ち、ドアが開けられ、そこから男が姿を現した。

「入りな」

「邪魔するよ」

そのまま家の中に消えていった男の後を追って家の中に入る。

中はかなり汚れており、一見はただの廃墟にしか見えない。が、情報屋は知る人ぞ知る闇の商人という立場なため、自分の持つ情報というのを隠す隠れ家は廃墟としてカモフラージュしないと情報を全部盗まれて商売が出来なくなる、という可能性がある。

情報屋同士のコミュニケーションはあるが、他人の持つ極秘の情報には絶対に手を出さないという規定が情報屋にある以上、敵は身内ではなく外部になる。その外部をあざむくためのカモフラージュが、先ほどのペンキとこの廃墟にしか見えない隠れ家だ。

ひなたは一階の隠れ部屋のような場所に案内された。そこは廃墟にしか見えなかった建物からは予想が出来ない程綺麗に纏まっていた。応接間と言うには申し分のない位に纏まっていた。

「さて、ビジネスの話をしようか。予算は？」

「ざっとこれくらい」

二人でテーブルを挟んだ状態で向き合って座り、ひなたが予算を入れた袋を取り出し、中身をぶちまける。

それを見た情報屋は満足気に頷いた。どうやら、お気に召す額だったらしい。

「了解だ。どんな情報が欲しい？」

情報屋が埃を被っていた灰皿をひなたの前に置きながら聞いてくる。こうしてサービスをしてくれる、という事は彼の持つ情報の大半はこの金で買える、という事だ。流石に普通に家が建つレベルの金には満足してくれたらしい。が、ここから買った情報の質によつて取られる金は変わってくる。

この情報が高値なのか安値なのかは分からないが、それでもこの金は捨ててもいいという覚悟で来た。灰皿に灰を落として口を開く。

「つい二日前。ボクが化け物と戦ったつていう事は知ってるかな？」

「ああ、勿論だ」

やはり、情報屋の網は馬鹿にできない。が、あれだけ派手にやらかせば情報屋ならその情報を握つていても可笑しくないだろう。

だが、それなら話は早い。再び煙草を啜え、そのまま言葉を続けた。

「その怪物が根付いたアジト、それから、それを裏から操っている人間の情報が知りたい」

「……なるほど。だが、それは俺も半分しか知らねえな」

情報屋ですら全容を知りえない。それは、この件は相当な手練れが引き起こしている、という事に他ならない。

黒幕がいればそいつも暗殺し、シャロンを救うつもりだったが、そうなつてしまつてはかなりキツイ物がある。ここはシャロンだけを救う算段に変更する。

「その半分は？」

「怪物の根付いた場所さ。それだけなら、教えることは出来る」
「十分」

それなら、当初の予定は完遂出来る。情報屋は商談成立と受け取り、積まれた金銭の山の四分の一を切り取つて自分の方に寄せた。

「……随分と安上がりな情報だね」

「そうでもない。客の期待に応えられなかった迷惑料とこちらからの依頼料を差っ引いただけさ」

「へえ……依頼、ねえ」

「ああ。奴さん、スラムの人間を見つけ次第食らつて帰つていくもん

でな。いつ俺が食われるか分かったもんじゃない。だから、そいつを殺してくれっていう依頼さ」

「なら、Win—Winだ。これが解決したら報告には来るよ」
「そうしてくれ。それも情報になる」

どうやら、この情報屋はかなり甘い人間らしい。人から金を筆り取り続ける事を考えるのではなく、客との信頼関係を作って次の商談を持ち込ませようとしている。金を取るのは結果的に同じだが、その間に商売を挟むことで客の信用をつかみ取って顧客にしようとしている。

「なら、怪物の情報……正体に関しては、情報になるかな？」

「……まさか、知っているのか？」

「ここからは金銭のやり取り、でしょ？」

二人が不適な笑みを浮かべながら互いの顔を見やる。

情報屋はゆっくりと自分の方に寄せた金を返した。まさか、知らないとは思わなかったが、それならこれはこれで金になる。ひなたは情報を口にした。

「アイツ等に名称は無いけど……ボクはゾンビって呼んでる。アイツ等は、とある男に作られた動く死体さ」

ひなたは煙草の灰を時々灰皿に落としながらゾンビの情報を口にした。

情報屋は真剣な表情でそれを白紙の紙にメモしている。やはり、そこまで浸透していない情報だったのだろう。その表情は必至だ。

今までひなたも数々の情報屋を巡ってきたが、ゾンビの情報、黒幕の情報を買おうとしても誰も知らぬ存ぜぬだった。が、この情報が他に流れてくれたら、もしかしたらその黒幕の情報も流通が始まるかもしれない。そんな期待を込めてひなたはゾンビの情報を口にし終えた。

「……なるほど。コイツは厄介だな」

「じゃあ、さつきも言った黒幕の男……このゾンビを作れる男の名前に聞き覚えは？」

ひなたの左腕を斬り、体に無数の傷を生み、制約を体に埋め込んだ、

あの男の名前。その名前についての情報を聞いたが、情報屋は首を横に振った。やはり、知らないらしい。

あの男、やはりそう簡単には首を出さない。分かっていた事だが、ゾンビが出現した街ですら情報が集まらないとなると一生かかっても見つからない可能性すら出てきてしまう。ひなたは一言礼を言い、煙を吹かし、短くなった煙草を灰皿に押し付けた。

「じゃあ、この街に出たゾンビの情報、買わせてもらおうかな」

「ああ、分かった。こっちはそれ以上の情報を買わせてもらったからな。コイツはサービスにしておく」

「そりゃありがたい」

かけられる情けとサービスは最大限受け取っておく。情報屋は金に触ることなく一旦席を立つと、後ろにある大量の引き出しの中から一枚の紙を取り出すと、それをひなたの前に置いた。

それに目を通していると、情報屋がこの情報を説明し始めた。

「あの怪物……ああ、ゾンビか。ゾンビは北の森を抜けてすぐの洞窟付近にいるらしい。駆除連合から依頼を受けた奴が偶々そこを通り過ぎた時、ゾンビに殺されていた」

「駆除連合から被害者が……？」

「どうも初心者だったのと、遠征から帰ってきたばかりだったらしい。駆除連合はこれが新たな魔獣の仕業と睨んでいるようだが、俺はそれを見ちまってね。デッサンは裏に書いてある」

紙の裏を見てみると、確かにそこには二日前殺し合いをしたシャロンの顔が書いてあった。間違いない。この街にいるゾンビはシャロンだけだ。

彼女を殺せば、様々な悲しみの連鎖が止まる。

「そんなモンか。ただ、黒幕が本当に分かっているか。けど、いる事は確かだ」

「ボクもそれはわかってる。ありがとね、助かったよ」

「貴重なお客様だ。もてなすのは当然だ」

金を一割だけ置いてひなたはこの部屋から出て行った。金を置いて行ったのは良質な情報をくれた礼の代わりだ。それは情報屋も分

かっているのか、無言でひなたを見送った。

これでシャロンの情報は手に入った。後は明日の夜、彼女を殺しに行くだけだ。

シャロンは恐らく人を食い続けている。それ故に先日戦った時同様の力を持っているか、それ以上の力を持っているに違いない。ひなたにはこれ以上己を強化する術は無いが、本能で動くゾンビとは違い、知性と理性を持っている。それで力で勝るシャロンの頭を消し飛ばすしかない。

左手があれば、まだ幾分かは戦いようがあるが、無い物強請りはしてられない。今、考えられる物の全てを使ってシャロンを殺すしかない。

だが、最悪の場合は。どうしても勝てないと悟った場合は。相打ち覚悟で玉碎するしかないだろう。運が良ければ、死にはしない。

第十三魔弾

翌日の夜。ひなたとシャーレイは二人で宿を抜け街を出た。

向かうのは北の森を抜けた場所。二人はなるべくコソコソと物音を立てないように森を歩いていた。

そして、森を数分で抜けれる場所に来た時、ずっと黙っていたシャーレイが口を開いた。

「……ひなたちゃん」

「何かな？」

既に起爆銃を抜き、魔獣や害獣、その他の奇襲に備えながら歩くひなたにシャーレイが声をかけた。その声にひなたは無視することなく答え、起爆銃を下してからシャーレイの方を向いた。

シャーレイの顔は不安と心配。この二色で塗りつぶされていた。無理もないだろう。ひなたの話したゾンビという存在は化け物中の化け物。聞いている限りではとてもじゃないが人間じゃ太刀打ちできないような相手ではない。それにたった一人で戦いを挑むひなたをシャーレイが心配しない訳がなかった。それが顔に出ていたのか、ひなたは小さく笑ってから起爆銃をホルスターに仕舞い、シャーレイの顔に手を当てた。

「大丈夫。ボクは死なない」

「でも……」

「シャーレイみたいな薄幸そうな子を残して死ねないよ」

「薄幸って……」

そんな事はないと言いたかったが、まずスラムで体の危機を感じながら生きていた時点でもう薄幸とも言えた。

言いよどむシャーレイを見てひなたは小さく笑ってからゆつくりとシャーレイの頬を撫で、彼女を安心させようとする。だが、それでもシャーレイの不安は晴れないのか、ひなたの手を両手で包みこんだ。

ひなたの手から伝わる確かな生きているという温かみを感じ、ひなたは何とか不安を落ち着けようとする。が、それでもシャーレイの胸

の内に残る不安はどうしても拭い去る事が出来なかった。が、ひなたはそれを知ってか知らないでか、手をシャーレイに預けたまま小さく微笑み、口を開いた。

「シャーレイ。これが終わったら家を買おう」

「え？ 家？」

急なひなたの言葉にシャーレイは困惑した。だが、ひなたはそれでも微笑みながらシャーレイの手を片手だけで握り返し、そのまま言葉が続けた。

「二人でそこに住もう。多分、外れの場所にある家しか買えないけど……安宿じゃなくて、二人の家を買って、そこで一緒に生きていこう」それは、ひなたの決心とも言えた。復讐だけではなく、シャーレイのためにも生きていく。この、二度と手に入らないだろう温かな陽だまりと共に生きていく、そんな決心。

彼女を守り生きていく。彼女と共に生きていく。彼女に依存して生きていく。彼女に認められながら生きていく。そのための区切り。完全な気持ちの切り替えの儀式として、ひなたは今日、この日の戦いを選んだ。かつて、シャーレイと共に生きていた少女を殺し、自分がその後を受け継ぐ。

それを成すのが、今日だ。

「ひなた……でも、お金とか……」

「全部ボクに任せて」

金ならある。昨日の情報屋から情報を買った際に残った残り九割の金。これだけの金があれば街外れにある家を一軒買ってもおつりが来る。それで生活必需品を買い、二人で一緒に手を取り合いながら生きていく。

ひなたはそれを自ら望んだ。シャーレイと生きることを。

お節介で彼女と共に生きていくのではなく、自らの意志でシャーレイと生きていく事を。

「……私でいいの？」

「君じゃなきや駄目だ」

「本当に……？」

「うん。もう、ボクは君がいなきや生きていけない」

自分を認めてくれるたった一人の少女が居てくれないと、もうひなたは生きることなんて出来ない。こんな、暖かな陽だまりにまた身を落としてしまったら、自らそれを手放す事なんて出来ない。

だから、彼女と共に生きるために、彼女に依存できるように、提案をする。彼女と共に生きていくための提案を。その提案にシャーレイは吃驚していたが、困惑になった表情は徐々に明るくなり、晴れていった。

「その……ひなたちゃんが良いって言うんなら。私、ひなたちゃんと一緒にいたい」

その言葉にひなたは満足気に頷いた。

これが終われば、暫くは安心して毎日を平和に生きていける。復讐だけではなく、暁ひなたとしての人生を改めて始めることが出来る。それが嬉しく、ひなたは笑った。それに釣られ、シャーレイも笑った。「じゃあ……行ってくる。シャロンを止めるために」

もう、森は晴れ、シャロンがいるであろう場所に辿り着く。そこは見晴らしがいい。それ故に、生身の人間であり、戦う術を持たないシャーレイではこれ以上進むのは危険だった。

だから、ここで一旦のお別れだ。「でも、ちよつと血を吸わせてくれないかな。そうしないと、多分勝てないから」

「うん、いいよ」

だが、その前に。戦闘の最中にまた吸血出来るとは限らない。それに、今の素の状態ではシャロンにはすぐに殺されてしまうかもしれない。だから、シャーレイの血を吸って予め自分を強化しておいてからシャロンとの戦いに挑む。

シャーレイは深い訳を聞かずにひなたの言葉を受け入れ、地面に膝をついてから首筋を肌蹴させた。

ひなたはそれに吸い込まれるように覆いかぶさり、そのままシャーレイの首筋に牙を立てた。

「んっ……」

「あむ…………ちゅっ…………」

シャーレイの小さな喘ぎ声が夜の帳に消えていく。優しく噛み付き、息を漏らしながら血を噛み付いた所から飲み込んでいく。

温かな血が口の中に吸い込まれていき、喉を潤していく。その温かさど鉄の匂い、血の新鮮さと濃厚さがひなたの中の吸血衝動を高めていく。もつと吸いたい。ずっと飲んでいたい。そんな衝動を隠そうともせずに牙を突き立てた場所からシャーレイの血を飲んでいく。二人の少女の喘ぎ声と漏らした息の音が優しく森に響いて闇の帳に消えていく。

そして、血を吸い始めてから大体三分程か。ひなたはゆっくりと、名残惜しそうに一度シャーレイの首筋の傷を舐めてからシャーレイの首筋から口を話した。

「はあ…………ふう…………ありがとう、シャーレイ」

「ん…………」

二人で抱き合いながら耳元で囁き合う。二人はゆっくりと離れ、後ろに向かって歩き距離を取った。

ひなたはこれから死線へと向かい、死闘を繰り広げてくる。対してシャーレイはそんなひなたがシャロンの亡骸を抱えて帰ってくるのを待つ。それぞれがやる事は別だが、最後は共に笑うために、戦う。

「…………行ってくるね」

「…………うん。ここで待ってるから」

「…………か。じゃあ、お守りがてら罨は張っておこうかな。魔獣除けにね」

ひなたは一旦魔弾を全部地面に落とす、新しい魔弾を六発作り出すとそれをリロード。シャーレイを囲むように地面に魔弾を撃った。

「罨の魔法。シャーレイにはひっかからないようにしておいたから大丈夫だよ」

「ありがとう、ひなたちゃん」

「ん。じゃあ、絶対にシャロンを連れて戻ってくる」

そう言うひなたは紅に染まった瞳でシャロンがいるであろう場所の方を向き、走っていった。

シャーレイは手を合わせ、ひなたが無事に帰ってくる事を神に祈るしかなかった。

その数分後。前方から爆発に似た音が聞こえてきた。

だが、それでもシャーレイは待つしかない。ただ、手を合わせ祈るしかなかった。

「お願い……頑張って……！」

「ほう？　じゃあ、どうせなら間近で観戦でもするか？」

「……え？」

暫く歩いた先。森が開け、木々がその姿を閑散とさせた場所にそれはいた。

眠るように目を閉じ、全身を脱力させた状態で立つ一人の少女。ひなたと同じ隻腕となったゾンビ、シャロン。彼女はひなたに気が付くと目を開け、その眼光を隠すことなくひなたにぶつけた。

両者紅の瞳をぶつけあい、シャロンは拳を構える。ひなたはローブを脱ぎ去り起爆銃を構える。

「……お願いだ……殺してくれ……」

シャロンは表情を固めたまま弱弱しくひなたに声を投げかけた。

それにひなたは驚きながらも起爆銃を下ろさず、警戒も解かない。ゾンビがその人の意思に関係なく攻撃してくる事を知っているから。

「……正気が戻ったんだ。そんなパターンは君が初めてだよ、シャロン」

最初から正気を保ちながらも人を食い、精神を壊していくパターンは見たことがある。だが、それでも後から正気を取り戻してしまったパターンは知らない。ひなたはそれに素直な感想を口にしながら自分の中の闘争本能が目覚めていくのを感じる。

「……お前は、シャーレイと一緒にいるのか？」

恐らく、今は限りある理性で動き出しそうな体を抑えているのだろう。手が今にも動き出そうと小さく揺れている。これは、後一分もし

ない内にシャロンの方から攻撃をしてくる。

それを冷静に判断しながらその声に答える。

「……ああ」

「じゃあ……頼む。私を殺してシャーレイと一緒に居てやってくれ」

「言われなくても」

「そうか……安心した。あの子は寂しがりやなんだ。お前みたいな強い奴が一緒なら、心配はない」

どこまでも、シャーレイの事を大切に思ってきたのだろう。彼女は一瞬安心した表情を作った。

それにひなたも安心しかけた——直後、シャロンは一瞬と呼べる速さでひなたへと肉薄した。安心したせいで理性が途切れたか。目の前に出現したシャロンを見てからシールドを放ち、シャロンの拳を防ぐ。

間一髪。シールドは甲高い音を立ててシャロンの腕を防いだ。だが、直後にローキックがシールドを一瞬にして蹴りぬいた。だが、蹴りは威力が高い反面、一瞬だけだが動けなくなる。それを狙い、後ろに飛びながら魔弾を四発放ち、己に強化の魔弾を打ち込んでからリロードに入る。

だが、撃った魔弾は四発とも腕で弾かれた。

「生憎、ボクはあんまり強くないんでね！ お空の上から不安一杯で見せてほしいかな!!」

「もう、意識が保てない……後は頼んだ……」

その言葉に答える余裕は無かった。後から理性を取り戻してもこれか、とひなたは舌打ちをしかけたが、それをする暇を全て戦闘に費やす。

六発の魔弾をリロード。更に一発の魔弾を噛み砕き、すぐさま起爆銃を構える。

「フルパワーシールド!!」

ジェノサイドバスターの魔弾をシューターではなくシールドに置き換えたシールドの強化魔法。その強度は通常のシールドの十倍近くになる。が、この魔法は魔力を放つだけのジェノサイドバスターと

は違い、魔力の精密なコントロールが必要なため、一回使うとそれなりのインターバルがない限りジェノサイドバスターとフルパワーードシールドが使えなくなる。

が、それでも今は手数を稼がねばならない。一度起爆銃をホルスターに仕舞い、ポーチから掴めるだけの魔弾を掴んでばら撒く。地雷の代わりだ。そして、それを撒いた直後、一瞬でフルパワーードシールドに肉薄したシャロンがそれらを踏み抜く。

その直後、爆発。エクスプロージョンの魔弾が爆発し、それに誘爆して様々な魔法が同時に炸裂しあう。ひなたはそれらを全てフルパワーードシールドで防いだが、シャロンは直撃だ。少なくとも、足の一本や二本は取れただろう。爆炎が晴れ、視界が開けると、そこにはシャロンはいなかった。

「い、いない!？」

まさかエクスプロージョンで消し飛ぶ筈がない。あれは足の一本を消し飛ばせても人間一人を消し飛ばすような威力は持ち合わせてはいない。

じゃあ、どこに。パニックになりながら周りを見るが、どこにもシャロンが見当たらない。

マズい。非常にマズい。地雷作戦が完全に裏目に出た。一対一の戦いで相手を見失うのは一番マズい状態だ。この状態だと一対一の状況で闇討ちという相手の必勝パターンが完成してしまう。

何処だ。何処に行った。

もうフルパワーードシールドは時間切れで消えた。しかも、あれは全方位ガードではない上にまだ二発目は撃てない。そうになると、奇襲されたら確実に当たる。負ける。

「うエダ!!」

だが、直後に上空から声が聞こえた。

それを聞き、空に視線を投げると、そこには手を構えた状態で降ってくるシャロンの姿があった。それを見た瞬間、バックステップで後ろに飛び、シャロンから距離をとる。その一秒もしない後にシャロンはひなたのいた場所に着地し、土煙をまき散らした。

ひなたはその衝撃に吹き飛ばされ、地面に上手く着地する事が出来ず、そのままゴロゴロと地面を無様に転がる。だが、これならまだ巻き返せる。すぐに立ち上がり、ホルスターに仕舞ったままだった起爆銃に手をかけた瞬間——目の前にシャロンが再び現れた。

「マズッ——」

直後、ひなたの視界に赤色の液体が舞った。

それが上へ向けて振るわれたシャロンの左手がひなたの右わき腹から左肩までを一直線に爪で引き裂いたからだ。

「あ……………」

死んだ。そんな言葉は己の鮮血を見た瞬間に悟ることが出来た。

己の中の血液が一瞬にして持つていかれ、意識が失われかける。そして、その視界の中に映ったのはひなたの腹を蹴り抜こうとするシャロンの右足だった。

ゾンビの蹴りをまともに受けたらどうなるか？ そんなのは決まっている。

体が上下真つ二つになって死ぬ。単純で簡単な事だった。

「ヤメロオオオオオオオオ!!」

——だが、天運はひなたに味方した。

確かに足は振り抜かれ、ひなたはシャロンに蹴り飛ばされた。

そう、蹴り飛ばされた。つまりは体は上下真つ二つになっていない。途轍もない力で蹴られたのには変わりないが、それでも一気に後ろへ飛んでいく視界でひなたはまだ生きているという事が信じられなかった。

だが、すぐに何故かが分かった。再び正気を失いかけていたのであろうシャロンが己の理性を最大限に働かせ、即死級の一撃を致命傷レベルにまで下げた。これによってまだひなたは生きている。が、それでも致命傷レベルには繋がってしまう。空中を飛び、そのまま地面を何バウンドもしたひなたは背中から木にぶつかった。

「がっは……………!?!」

体から鳴り響く骨と肉と皮の悲鳴。そして、内臓の痛みと喉の奥からこみ上げる血液。

木に当たった直後に一度血を吐き、そのまま地面に倒れた時も再び血を吐いた。

「ふっ……げはっ……」

胃と背骨、そして地面に最初にバウンドした時にあばらも逝ってそのまま肺に刺さっている。致命傷どころか死んでも可笑しくはなかったが、ひなたは奇跡的に一命を取り留めた。だが、吐血が止まらない。一瞬にして地面が血の池へと変貌していく。

そんな状況下で薄くなっていく意識の中、ひなたは手一杯に己の作れる最高レベルの回復魔法を詰めた魔弾を作り出し、震える手でそれを口に運び、喉奥からこみ上げる血を何とか我慢しながら魔弾を噛み砕いた。手一杯の回復魔法は徐々に体を致命傷の部分から癒していき、肺からは骨が抜け、傷口が塞がり、背骨を何とか元通りに直し、胃もどうにか治った。

が、それはあくまでも回復魔法での応急措置。魔力で無理矢理結合され、修復されただけ。本来ならここから定期的に魔法で回復をしながら一か月は絶対安静にしていなければならぬ状況だ。だが、それでもひなたは立ち上がる。全身から鳴り響く悲鳴を聞き、引き裂かれた体から血を流し地面に血の水たまりを作りながらも立ち上がる。こんな所で死んでいられない。シャーレイと約束した。シャロンと約束した。シャロンの亡骸を連れて帰ると。シャーレイと一緒に居ると。だから、死ねない。暁ひなたという一人の人間として、この約束を破るなんて真似は、絶対に出来ない。

男の意地と女の意地とシャーレイの笑顔とシャロンの安らかな眠りのために、絶対に負ける訳にはいかない。死ぬわけにはいかない。

「ぜえ……ひゅー……」

息切れの音すら可笑しくなり、視界がぼやけ始める。だが、それでも足に力を入れ、起爆銃を握る。

狙うのは、物凄い勢いで迫ってくるシャーレイ。更に回復魔法の魔弾を貪り、無理矢理己の体に喝を入れ視界を無理矢理クリアにする。

たった一手で瀕死になった所で、まだ負けていない。まだ死んでいない。なら勝利はある。

ジエノサイドバスターで頭を消し飛ばす。出来るはずだ。いや、やれる。やる。そして勝つ。全ては自分のため、シャレーイのため、シャロンのため。三人の安らぎのため、絶対に負けない。

第十四魔弾

シャーレイにとってシャロンという少女はたった一人の家族であり、恩人だった。

シャーレイは物心が付いた時にはシャロンと共にいた。だが、物心が付く前に少しだけ。ほんの少しだけ覚えていた事がある。それは、薄暗いスラムの街を泣きながら歩いていた時だった。親に捨てられたとも知らずに瞳に涙を浮かべて親を探し続けるシャーレイはスラムの人間からしたら格好の的だった。人身売買としても使える。娼婦として育てるもよし、自分の雌奴隷として育ててもいい。とにかく、攫ったら攫ったで己の欲をぶつけるのには最適であり、誰にも咎められない的だった。

それ故に幼いシャーレイには嫌な視線が突き刺さり、それがまだ子供故、人の悪意を己の精神全てで感じられるシャーレイを泣かせる要因になってしまっていた。だが、その中でシャーレイの前に少し年上の、まだ幼女と呼べる外見の少女が現れた。その子は全身を汚し、服もどこか解れて靴もボロボロ。髪の毛も手入れがされていないからかガシガシだったが、シャーレイにとってはその少女が唯一の救いしか見えなかった。

「……おまえ、親は？」

「……」

「すてられたのか？」

「……」

シャーレイは己が捨てられた事が分からなかった。親がここに居ないのは無言の肯定で返すだけだった。その無言に含まれた意図に少女はすぐに気が付き、シャーレイの頭を撫でた。それが、乱暴でシャーレイの首ごと揺らす物だったとしても、それがシャーレイの心を癒すのは変わらなかつた。

そして、目の前の少女は視線をシャーレイに合わせて笑顔で囁いた。

「そうだな……おまえの親がむかえに来るまでわたしのウチであそば

ないか？」

「……いいの？」

「ああ。むかえに来るまで、ずっとな……」

もう迎えに来ることがない親を待ち続ける。それは、一緒に生きていかないか。二人で、一緒の場所で一緒に生きていかないか、という彼女の優しさから出てきた言葉だった。

シャーレイにとって、その言葉は救いだっただ。自分と一緒に遊んでくれる年上の友達が出来た。一緒に親を待つてくれている。それが嬉しくてシャーレイは自然と笑顔になった。彼女もシャーレイの笑顔を見て一緒に笑った。スラムという街に捨てられた小奇麗な少女の笑顔に彼女は自然と笑顔になっていた。

言葉は少し乱暴だった。だが、心の中、自分でも理解していない部分ではもう親は迎えに来てくれないと悟っていたシャーレイはその言葉を笑顔で迎え入れていた。

それから彼女はシャーレイを抱きかかえてスラムの複雑な道を走り回り、シャーレイ狙いで襲ってきた男達を何とか振り切り、それから十年近く共に暮らす事になる隠れ家に転がり込んだ。彼女はすぐに大人達が追ってきていないかを確認すると一息付き、シャーレイをポロポロのソファに座らせ、彼女もその隣に座った。

「……わたしはシャロン。名字はすてた。おまえは？」

「………シャーレイ。シャーレイ・ランフォード」

その名を聞き、少女シャロンは少し顔を俯かせたが、いい名前だな、と返した。

その言葉にどんな意味が込められていたのかはシャーレイは分からなかったが、その言葉はシャーレイを笑顔にするに事足りた。

一度笑顔になればシャーレイはシャロンに心を許した。子供故に細かい事は考えられず、ただシャロンと言う少女が好きになったシャーレイはその日はずっとシャロンと話していた。途中、シャロンが水や食べ物を分けてくれた。それが盗品だという事を知ったのは、それから五年も後の事だった。

生きるために盗み、食い、寝る。その内の盗みという一番汚い部分

をシャロンは一手に担ってくれた。まだ幼いシャーレイに悪い手癖が付かないようにと、シャロンは午前中を盗みに費やし、シャーレイの分の食料も盗んできて共に食べる。当時、まだ七歳だったシャロンはスラムという過酷な空間で養われた歳不相応の精神力でひたすらにシャーレイを笑顔にするため。無垢な少女のまままでいさせるために努力してきた。その間、色々と二人の間にはあったが、それでも二人は仲良く生きてきた。スラムという過酷な環境で、たった二人で。シャーレイはシャロンの盗んできた食べ物や服で救われた。シャロンはシャーレイが見せる笑顔に救われてきた。シャロンが気まぐれで起こしたお人好しは彼女を救うまでに至った。

シャーレイはそれを……シャロンが食べ物を買ってきたのではなく、盗んできたのを五年後に知り、二年間体力を作り十歳の頃にシャロンの盗みを手伝うようになった。最初はシャロンは手伝いを拒否したが、最後は折れた。そして、共に盗みを行い、四年間。生きてきた。

だが、それが終わったのは唐突だった。

二人が盗んできた食べ物を胃の中に納めていた時。二人は銃を持った怪しい男に囲まれた。

「……何だよ、オッサン達」

シャロンは十年以上の時の中で幼少期から歳不相応の精神を更に不相応にしていた。同年代の少女から比べてもシャロンは皮剥けたような精神を持っていた。対して、シャーレイは違った。彼女に依存し、彼女と共に生きていたため、彼女のような精神は持ち合わせておらず歳相応に近い精神しか持ち合わせていなかった。

故に、シャーレイはシャロンが言葉を発している中、一言も話せずには震えていた。盗んできた食べ物を地面に落とし、ただ震えていた。囲んだ男の内、一人が。リーダー格であろう男がへらへらと笑いながら口を開いた。

「嬢ちゃん達……悪いけどさ、俺達と一緒に来てもらうぜ？」

「断る」

「だろっとなあ……けどよお」

男は拳銃を懐から取り出すと、シャロンに向けて発砲した。

それはシャロンの顔の真横をすり抜け、そのまま後ろへと消えていった。その発砲音はシャーレイの心を挫きかけるには十分だった。しかし、シャロンは顔つきを変えなかった。

「クライアントには殺してもいいから十代前半か後半っぽい女を攫つて来いって言われてんのよ。勿論、生きていた方が報酬は高く積まれるがな」

「殺してでも連れていくってか？」

「そうそう。物分かりがいいじゃねえか。クライアントが死体好きの変態なのかタダのロリコンなのかは知らんが、黙って着いて来たら後数時間は二人仲良く一緒に居られるぜ？ それに、俺はこんな玩具使うのは初めてなんでね……断られたら即死させられずに鬨つちまいそうだぜ？」

断ったら痛めつけて殺す。着いて来たらその先は知らないが多分死ぬ。そう男は告げた。

つまり、二人に道は殆ど残されていなかった。少なくとも、二人同時に生き残る道は、無かった。

シャロンはシャーレイの背中を叩いた。何か策があるのか、とシャーレイは折れかけた心でシャロンを見た。だが、シャロンは何かを覚悟した表情で小さくシャーレイに呟いた。

「時間を稼ぐから逃げろ」

「……え？」

それは、シャロンが一人死ぬ事でシャーレイを生かす、という意味だった。

彼女の表情はもう死を悟っていた。これから来る苦痛を耐えきる覚悟をした顔だった。

「……強く生きろよ、シャーレイ」

その言葉を小さく呟くと、シャロンはその場で背中を向け、後ろを囲っていた男に向かって叫びながら突っ込んだ。

この反抗は予想外だったようで、男達の反応は遅れた。それがシャーレイを逃がす隙になった。

「行け、シャーレイ!!」

「で、でも!!」

「行けよ!! 行ってくれよ!!」

既に囲んでいた男達の銃の照準はシャロンに合っていた。だが、シャロンが男に振りほどかれずしがみ付く事によって誤射を恐れた男達はシャロンを撃てずにいた。

だが、一人だけ。リーダー格の男だけはそれを気にせず、シャロンに向けて銃弾を放った。

鳴り響く銃声。それとほぼ同時にシャロンの背中に穴が空き、血が噴き出す。だが、シャロンは力を緩めない。ただひたすらに、苦痛に耐えながらシャーレイの逃げる時間を作っている。

「私を無駄死にさせるな!! 私の命を、お前が継げッ!!」

「シャロンちゃん……!」

命を、継ぐ。シャロンの命を継ぎ、生き残る。

一人では生きていく術を知らないシャーレイにそれを言う。だが、シャロンはそれを望んだ。それを果たせなければ、シャロンからは死んだ後で見捨てられる。

それは嫌だ。死んだ後でも、シャロンには見捨てられたくない。だから、シャーレイは走った。シャロンの作った逃走路を全力で、盗みに使う足を、生き残るために使った。

「何していやがる! あっちのガキを撃て!!」

直後。銃声が鳴り響いた。

しかし、それは全てシャーレイには届かなかった。代わりに、逃走路を塞ぐ形で立ちはだかったシャロンがその弾丸をその身一つで全て受け止めていたからだ。

走りながら、振り返る。そこには、笑いながら、血を吐きながらシャーレイを笑顔で見送るシャロンの姿があった。その口は、僅かにだが、数回だけ動いた。

「じゃあな」

左胸から血を流しながらシャーレイは倒れた。地面に血の水たまりを作りながら彼女はその場で倒れた。

「ああクソ!! おい、あのガキを追え! なるべく殺さず連れてこい!!」

「こ、殺さずですか?」

「アア!? 俺達のおまんま食うための金がどうなってもいいのかア!? お前を間引いて食費減らしてもいいんだぞこのアホが!!」

「す、すいません!!」

「後、途中でいい感じのガキがいたら攫って来い、埋め合わせだ!!」
「分かりました!!」

そして、数回の銃声が聞こえた。

最後にシャーレイが振り返ると、倒れたシャロンを踏みながらリーダー格の男は銃弾をシャロンに撃ち込んでいた。

撃たれる度に痙攣するシャロンはもう助からない。そんな確信を持ってしまい、涙に霞む視界を拭ったシャーレイはそのまま走った。後先の事を考えずに。今は生き残るために。

そして、何分も走って逃げ、後ろから聞こえてくる銃声に背筋を凍らせながらも走り、角を曲がり……人にぶつかった。けど、謝る間もなく逃げた。じゃないと、シャロンの死が無駄になるから。

だが、走って逃げる前に手を掴まれた。

「おっと。一言謝罪があつてもいいんじゃないかな? ボク、思いつきり頭打ったんだけど」

そして、ひなたと出会った。

シャロンの一撃。それは十分に人間を戦闘不能にするレベルの攻撃だった。

しかし、ひなたはその一撃を受けてなお、血を流し過ぎた頭で必死にシャロンの行動を先読みしながら彼女と近接戦を行っていた。

近づく前に仕留められなかった。それはもうひなたの敗北を意味するレベルだったが、回復魔法で無理矢理体を動く状態にして戦うひなたはしぶとく生き残り続けた。

回復魔法には増血作用もある。血を増やしては流しを繰り返し、ただひたすらに反撃の機を伺う。今の状態で腹に穴でも空けられたら詰みだが、もし再びシャロンの腕を吹き飛ばす事が出来たのなら。それでシャロンが怯んでくれたのなら、例え腹に穴を空けられても回復魔法で一時的に穴と傷を塞ぐことは出来る。その後はベッドの上で絶対安静には変わりないが。

だが、魔力がもう切れそうだ。回復魔法による増血効果はまだ続くが、その前に手のひら一杯の回復魔法の魔弾を噛み砕くという荒業をしたためか、もう魔力がジェノサイドバスター一発分しか残されていない。そして、今起爆銃の中にある魔弾はシューターが四発だけ。シールドももう使い切ってしまう、シューターすらもう四発だけ。これを撃ちきってしまうともう勝つ手立てがない。ポーチの中にはシューターやシールドがあるが、隻腕というのがそれをを使う事を許可しない。もう地面に撒いてもシャロンはそれを踏まないだろう。

ジェノサイドバスター用の魔力だけを詰めた魔弾もない。その魔弾を作れるのは後一発だけ。シューターやシールドは六発だけなら生成できるが、それではシャロンの頭を吹き飛ばせない。

つまり、ひなたに残された手段は、三発のシューターで足止めを行い、残り一発をジェノサイドバスターに変換し、シャロンの頭を吹っ飛ばす。それだけだ。そして、増血効果が続くのは残り五分。五分を過ぎれば、ひなたは出血多量で死ぬ。ジェノサイドバスターを外しても死ぬ。攻撃に一発でも当たれば死ぬ。

「グウウ!!」

「ふっ……はっ……」

浅く息を吐きながら完全に正気を失ったシャロンの攻撃を避ける。蹴られた時はシャロンが何とか威力を死なない程度に押し留めてくれた。だが、二回目はない。あつたとしても回復魔法で修復された場所が再び破裂し、先ほどと全く同じ威力の蹴りでも即死する。それ以下でも死ぬ。今シャーレイに蹴られても死ぬ。近所のガキに軽く殴られても死ぬ。自分で殴つても死ぬ。正に虫の息。

だが、諦めない。勝つ事を、生きる事を。何としても諦める訳には

いかない。

人一人の希望を背負ったこの背中を絶対に見せる訳にはいかない。この腕を地につけるわけにはいかない。この体には、ひなたと、シャレーレイと——そしてシャロンの願いが込められているのだから。

「シネエエエエエ!!」

「いっぱつ……いっ！」

痺れを切らしたのであろうシャロンの一撃を避け、カウンターで右目へ。魔弾を放つ。

完全なカウンターで、完全な零距离で放たれたそれはシャロンの右目を、その付近の肉と骨ごと打ち砕き、粉碎する。肉が飛び散り、骨が砕け散る。血が噴き出し、急に視界を奪われたシャロンが右目を抑えて後退する。

「グアアアアアアアアア!!」

視界を失ったことによる動揺。しかし、それはシャロンを仕留めるまでに至らない。頭部の……脳の完全な破壊を行わない限りゾンビは止まらない。例えば、脳が半分残っていてもゾンビは動き続ける。完全に破壊しなければ、ゾンビは止まらない。そんな常識を超えた存在がゾンビだ。

「……にはっ」

そして、二発目を左目に放つ。

これで両目を潰す。そして、最後に片足を潰し、最後にジェノサイドバスターで確実に頭を消し飛ばす。これで勝ち。たった一つ見えた勝ち筋だ。

当たった。内心で微笑みながら三発目のシューターを放つ用意をする。

——だが、時は何時でも残酷だ。

偶々困惑故にシャロンが横を向いた瞬間にシューターは目に当たらず掠って後ろへと通り抜けていった。

「まずっ……」

急いで三発目の照準をシャロンに合わせる。

しかし、その瞬間にシャロンは再び闘争心を取り戻し、一瞬にしてひなたに肉薄し、伸ばした腕の内側に潜り込まれる。

それと同時に三発目のシューターを放つ指が引かれ、完全な無駄弾に変わってしまう。そして、最後の四発目が撃たれる前にシャロンが動いた。

「あつ……」

小さくひなたが声を漏らした瞬間。シャロンの腕が振るわれた。

その腕はひなたの腹に食い込み、そのまま突き破った。

拳が貫通し、内臓が、骨が、一瞬にして潰され砕かれ血と共に背中から噴き出す。

それと同時に、ひなたの目からは生気が一瞬にして失われた。

全身の力が抜ける。体が折れ、シャロンの手にもたれかかる。何となく、あと一矢、あと一矢だけでも報いろうとするが、体が力を使う事を拒否し、腕で体を起こそうとしても腕が折れ、そのままシャロンの手にもたれかかる。命の鼓動が弱まっていく。目が紅から翠へと戻る。起爆銃を持った右手が力を失ったことよって垂れる。

——ひなたは敗北した。

第十五魔弾

シャーレイは見ていた。シャロンの拳に腹を貫かれ、全身の力が完全に抜けてしまったひなたを。奮闘虚しくシャロンに敗れ、打つ手も生きる術も無くしたひなたの姿を。

両手を縛られ、担がれた状態で連れてこられた二人の決戦の場所で二人の戦いを。致命傷を負いながらも逃げる事を臆はず戦い続け、負けたひなたの姿を。その呆気なくも悲惨で痛烈な最後をその眼に焼き付け、涙していた。

——あの後。ひなたが戦いに出向きシャーレイはひなたの勝利を祈っていた時。彼女に声をかけた人物がいた。

その男は、あの時。シャロンと共にいた時、二人を囲んだ男の中の一人。

「おいおい、そんなに怖がなくてもいいんじゃないやねえの?」

その中で、他の男達に命令を出し、倒れ伏すシャロンに止めを刺したりリーダー格の男。その男が急に現れ、ひなたの張った魔弾の罠を全て避け、力でねじ伏せ、無力なシャーレイの両手を縛り担ぐとそのまま運び始めた。

「冥途の土産程度には教えてやる。俺ア、ヴォルグつつー流れ者だ。適当な徒党を組んで街を行ったり来たりする悪党さ」

ヴォルグの力は強く、そしてこうして軽口を叩ける程の余裕を持っていた。シャーレイでは何をしてもしも逃げる事は出来なかった。気が付き、逃げようとした時にはヴォルグは既にシャーレイの手を掴み、そのまま力づくでシャーレイを抑えつけて腕を縛った。時既に遅し、という奴だった。シャーレイには抵抗する術は無く、そのまま捕まった。

そして、ニヤけるヴォルグに担がれ連れてこられたのはひなたとシャロンの決戦の舞台。そこで常に劣勢に立たされていたひなただった。ヴォルグはひなたの元に駆け付けようとするシャーレイを離そうとせず、ひなたが敗れるその瞬間をその眼に焼き付けさせた。「まあ、人一人の人生なんてそんなモンだ。人の死の九割は呆気ない

モンだ。残りの一割は壮絶だ。あそこの嬢ちゃんは前者だったみてえだな」

「ひなた、ちゃん……」

呆気なく。たった一手の攻撃を受けただけで死んだ。漫画や小説のように攻撃を劣勢で耐えながら相手の攻撃を耐え続け、ボロボロになりながらも逆転の一手を打ち倒す。そんな展開は、この世界には存在しなかった。ひなたは終始シャロンという怪物に押され続け、そのまま逆転の一手を打ち切る事が出来ず死んだ。

シャロンはその手で貫いたひなたをまるで己の勝利の旗と言わんばかりに持ち上げ掲げた。そして、ひなたから滴る血を呑み嗤う。腕の根元まで貫通し、ひなたは痙攣こそしているが表情は見えず今すぐにこの痙攣が収まっても可笑しくは無かった。

「お前さんもあそこの化け物みたいになる。あの嬢ちゃんもな」
「……」

「なあに。死んでも死体は三人一緒に使ってやら。安心して死ね」

最早どうでもよかった。

ひなたが死に、シャロンが勝った。もう、シャーレイがその身を寄せる場所はこの時点で消えていた。そして、ヴォルグに捕まった時点でシャロンの最後の言葉を全うできない。

例え、ここで暴れて逃走しても男はシャーレイの足を斬り捨ててでも攫って行くだろう。それをするための両刃の片手剣のような物をヴォルグは腰に差していた。あの時、ヴォルグはリボルバーは使い慣れていないと言っていた。それは冗談でも脅し文句でもなく事実であり、本来は剣を使ったインファイトが主流なのだろう。

それを冷静に判断出来てしまう程、シャーレイの胸にはポツカリと穴が空いたような気分になっていた。この一か月にも満たない間に大切な人を失い、また出来て、失った。それはまだ齢十四の少女には辛すぎる現実だった。後悔してもおそい。もし、たら、ればを考えてもどうしようもならない。もう、全てが手遅れであり、シャーレイもシャロンのような化け物に生まれ変わってしまうのだろう。

ヴォルグが歩きシャロンへと近づく。使ってやる、とヴォルグは

言った。つまり、シャロンを操っているのはヴォルグであり、シャロンはヴォルグの言う事を聞いているのだろう。

三人纏めてこの男の言いなりになる。もう、それでもいいかな、とすら思えてしまう。三人一緒なら。死んでも、三人一緒なら。

「——まだ、だ……」
パキ。

小さな音が聞こえた。それは、ひなたから聞こえてきた。

ひなたの物に思える、掠れた小さな声が響き、シャロンの表情が一変する。貫き殺した筈の死体が白銀の魔力を放出している。それが異常であり、何でこうなっているのかが分からなかったからだ。腹を貫かれ、死んだ筈の死体から何故魔力が放出されているのか。

その答えが、まだ虫の息程度だが、ひなたの心臓が、脳が、動くことを止めていないからだと知ったのはひなたが笑いを浮かべながら起爆銃の銃口をシャロンに向けたからだだった。

瞳孔が開ききった眼でここ一番の笑いを見せ、吐いた血が下顎を真っ赤に染めていながらも、ひなたは勝利を確信した笑いを浮かべ、腕に貫かれた状態で銃口をシャロンへと向けた。

——ジャックポット。

小さくひなたが呟いた気がした。

直後、ひなたの体から腕を引き抜き投げ捨てようとしたが、その前にひなたがトリガーを引いた。

起爆銃のシリンダーにある最後の魔弾をハンマーが叩き、魔力の起爆と同時に魔法が発動する。シューターの魔法は銃口の前に作られた魔力のスフィアを撃ち抜き、威力を数倍に増幅させ、シャロンの頭をビームとして呑み込んだ。

ジェノサイドバスター。

ひなたの持つ最強の魔法。それがシャロンの頭を包み込み、言葉を言い放つ前に完全に焼き尽くしこの世から消滅させる。ひなたの今持てる魔力を全て使ったその魔法はその役目を果たし、数秒の照射を

終え、そのまま消えていった。そして、頭を無くしたシャロンはもう動くことなく背中から倒れ、ひなたもその上に覆いかぶさるように倒れた。

「……おいおい、あの状況で相打ちにまで持つていくのかよ」

ヴォルグは素直に驚いていた。

腹を腕で貫かれ、シヨック死すら有り得る痛みを感じながらも魔法を発動し、シャロンを倒した。その前にも致命傷を負っていた筈なのに、その痛みに勝って化け物の討伐を果たした。駆除連合で仕事を受けたのなら、中の中のレベルに至れるヴォルグですら、痛みというのは消す事も打ちのめす事も出来ない物だ。剣で体を斬られるだけでもパニックになって気力を一気に持つていかれるのに、ひなたはそれに打ち勝つてシャロンを殺した。

唾然としない訳がない。あんなガッツをあの小さい体の何処に持つていたのかすら疑問に思う。

だが、死んだ。流石にあんな状態で大技を使ったのならもう即死だろう。シャーレイもそれを見て驚愕に目を見開いていたが、二人が倒れ伏したのを見て顔を伏せた。

その驚愕の週末にヴォルグは思わずたっぷり一分も呆然としていた。その間に力を失ったシャロンの手は何時の間にかひなたの体から抜けており、ひなたは手が抜けた衝撃でか、少しだけ動いていた。

だが、どちらも起き上がる様子はない。地面に血の池を作つて倒れている。

「……………はっ!? お、思わず呆然としちゃった。まあ、珍しいモンが見れた程度に思つておくか」

肉を切らせて骨を断つ。最早骨を切らせて骨を断つレベルの攻撃だったが、ヴォルグにとつてそれはただの珍しい事例に過ぎなかった。

シャーレイはもう二人の惨状を見たくないのか俯いて黙り込んでしまっている。ヴォルグはそれに溜め息を吐き面白くねえ、と一言だけ漏らすとひなたの死体の回収のために歩き出した。

ひなたのような魔力を持ち、戦える人間の死体なら多少の報酬も上

乗せしてくれるだろう、と。失ったシャロンという駒の代わりにひなたを補充すれば少なくとも報酬の減額は避けられるだろう、と軽く考えてひなたに近寄った。

異音が聞こえたのはその時だった。

「……何だ、この音は」

ぴちや、ぴちや。ぐちやぐちや。ぶちぶちぶち、ねちや。

そんな、今までで聞いたことの無い音がヴォルグの耳に入ってきた。それはシャーレイも同じようで、その音を聞いて顔を上げた。

この音は、ひなたとシャロンの方から聞こえてくる。

ヴォルグはその音の正体を確かめるため、ゆっくりとひなたに近寄った。ゆっくり、ゆっくりと。

そして、音の正体が分かった瞬間、足を止めた。そして、吐き気を催し口を手で押さえた。シャーレイも目の前の出来事が信じられないように小さく声を漏らしながら目を見開いていた。

「こ、こいつ……このガキ!？」

その間も、聞こえてくる。異音が聞こえてくる。

それは、有り得ない事だった。許されない事だった。あつてはならない事だった。この世にあってはいけけない光景だった。

それをする人間なんていないから。それをしたら、人間ではないから。それは、禁忌とも言える行為の一つだから。自然界の掟にすら反するような行為だったからだ。

ひなたが立ち上がる。ゆっくりと、ゆっくりと。

それを手に持ち、ゆっくりと。

向こう側が見えていた筈の腹は、背骨のような物が何故か繋がっており、その周りには僅かだが肉があった。立つための背骨が、復活していた。

ヴォルグは距離を取る。余りの気持ち悪さに退く。抱えていたシャーレイすら落とし、腰の片手剣の柄に手を当て、何時でも抜刀できるようにしていた。

「ああ……美味しいけどなあ……シャーレイとの約束、破る事になっちゃったなあ……」

ぐちやぐちや。ばき、べき、ぶちぶちつ。シャロンの体を片手で掴んだまま立ち上がったひなたはそんな異音を立てながら何もかもを諦めたような表情を作る。

死んだはずのひなたが、だ。

「お、お前……ッ!? な、なにしてんのか分かってるのか!?!」

「ああ……五月蠅いな……分かってるよ。ボクは今、シャロンを食ってる」

ぐちやぐちや、と音を立てながら。

ひなたは、シャロンの二の腕に噛み付き、肉を引きちぎりそのまま咀嚼し、飲み込む。

そして、回復魔法を詰めた魔弾を何十発も一瞬で作成すると、それをシャロンの腕と共に口の中に入れ、そのまま噛み砕き、飲み込む。そして、ひなたの腹を紅色の膜のような物が包み、皮膚が、肉が復活する。

先ほどよりも高位の回復魔法による、仮の肉と皮膚、内臓を作成し、細胞分裂を促して失われた内臓と肉を数日で復活させる。腕のような、無くても生きられる部分は再生しないが、回復魔法の効果を何十倍にも高め、それを全く同時に使った結果、本来は最上級の回復魔法でなければ回復させる事が出来ない傷すらも回復する。

「ははは……嫌になるよ。本来の力を解放するための力が」

——『食人』なんてさあ。

シャロンの肉を食らい、飲み込む。瞳は吸血の時よりも鮮やかな紅になり、夜中だと言うのによく見える。そして、魔力の色は銀色から紅に変わり、吸血するために尖っていた犬歯は更に伸び、鋭くなっている。その歯で人の肉を引き裂き、飲み込む。

先日も、シャロンの腕を食った。そして、窮地を脱した。

だが、その際に食人衝動はかなりの物になり、シャーレイの血を自ら強請ってしまった。

人の肉が食いたいという衝動を抱え続け、吸血する事でそれを押し

留め生きてきた。だけど、生きるためには食わねばならなかった。生きるために、人を、シャロンを食わなければならなかった。

ひなたは、己の命の惜しさにシャロンを食う事を選んだ。

覆いかぶさるように倒れ、消えゆく意識の中、ただひたすらに目の前にあつたシャロンの肉体に齧り付き、胸を、肩を食らい、腕を食らっている。

もつと。もつと。もつともつともつともつともつともつともつともつと。もつと、食べたい。

「美味しいなあ……人の肉って、美味しい……」

「ば、化け物……ッ！」

ヴォルグが震える手で片手剣を構え、呟いた。ひなたはその言葉に反応し、シャロンの腕の肉を食らい尽してから口を開いた。

「化け物……？ ああ、そうだね。その通りだ。だけどき、ボクみたいなものにはもつと別の呼称があると思うんだよ……シャーレイ、分かる？」

何もかもを諦めた笑いでシャーレイに問いかけた。

シャーレイは首を横に振った。

「分からないかあ……じゃあさ、教えてあげるよ。ボクのような化け物はさあ……人を食う人間はさあ——『食人鬼』って言うんだよ」

「食人鬼……」

食人鬼。それが、あの時、あの男によって押し付けられた特性だった。

人の肉を食わねば己の全力を解放できない。そして、人の肉を常に求め続ける食人衝動を与えられた。

それと葛藤し続け、生きてきた。せめて、シャーレイの前では食人はしない。彼女にこんな穢れた秘密は見せられない。そう思ってきた。

だけど、もう手遅れだ。こうして食人を見られた以上、全て終わった。シャーレイからは軽蔑され、化け物と呼ばれこの街を去る事になる。分かっていた事だ。涙は出ない。代わりに乾いた笑いと抑えられない食人衝動が沸いてくる。

「シャロン……ごめん、ごめん……でも、美味しいんだよ……君の体は、とてもとても……どんな肉よりも、どんな物よりも美味しいんだ……美味しいんだよ……」

謝りながら、食べる。

美味しい。人の肉が。腕の肉が、胸の肉が、肩の肉が、腹の肉が。とてもとても美味しくくて。骨にまで味があつて。内臓が美味しくくて。心臓が美味しくくて。美味しくくて、美味しくくて美味しくくて美味しくくて仕方ない。止められない。歯止めが効かない。こんな美味しい死体を口にしてしまったら、止まらない。止められない。

腕を一本だけじゃ、もう歯止めが効かない。足も、背中も、全身を食べたくて仕方ない。いや、食べる。もう手遅れだ。全身を味わいたい。小骨をかみ砕いて飲み込みたい。爪を剥がして噛み砕きたい。血管を引きちぎりながらその食感を楽しみたい。血に濡れた内臓を血と一緒に飲み込みたい。

もう腕一本と肩、そして右の胸を食らい尽したのにも関わらず、空腹が続く。もつと食べたいと胃が叫ぶ。涙を流しながらもシャロンを食らう。シャーレイに見られながら。彼女の恩人を食らう。

食人をする自分に嫌悪しながらも。美味しいから、美味しくくて止まらない。美味しくすぎて。人の肉が、シャロンの肉が、年頃の少女の肉が美味しくすぎて。新鮮な血と共に食い、飲み干すのが止まらない。喉の渇きも血を飲んでいられるのにも関わらず潤う事が無い。

「……そこのお前さあ。何でかシャーレイを担いでいたよねえ？」

「ッ!？」

片手剣を携えたまま硬直していたヴォルグは声をかけられ、体を震わせた。

その眼は、明らかに得物を見る目だった。食料を見る目だった。それに恐怖する。殺される、ではなく食われる、という別種の恐怖がヴォルグの全身を貫く。

こんな小娘に食われるという恐怖が全身を貫き、震えが止まらない。

「……お前、この一連の騒動の黒幕？」

「…………だ、だとしたら何だ!!」

だと言うのに、何故強がってしまう。こんな化け物に、食人鬼に。何で今すぐに逃走しようとしないう。

「だつたらさあ……………『ブラッドフォード伯爵』って知らないかなあ」

ブラッドフォード伯爵。

その名に聞き覚えは——

「…………お、教えねえって言ったら？」

その言葉が聞いたことがある。知っているけど話さない、という意味を持つている事にヴォルグは気づかなかった。

だが、当たりだ。ひなたはヴォルグの質問に答える。

「…………頭だけ食う予定を全身食う予定に変更かなあ…………シャロンの頭、無くなっちゃったから脳みそが食べたくて食べてくて…………」

「ど、どつちにしろ食うつもりかよ…………」

こいつ、これが素なのか正気を失っている状態なのか分からない。ただ言えるのは。殺意ではなく、食欲をぶつけられるこの感覚が、恐怖を掻き立てているという事だった。

「脳みそと眼球…………ああ、プリプリして美味しいんだろなあ…………

ああ、美味しそう…………美味しそう…………」

「こ、この狂人があ!!」

最早、恐怖の歯止めが効かなかった。

なのに、逃げるといふ行為では無く、ひなたを排除しようとその剣を振り上げ走った。

それを見た瞬間、ひなたはシャロンから手を離し、一瞬で魔弾を作成しリロード。そして三発の魔弾を別に作成すると、それを啣えて噛み砕いた。

「死ねえええええええええええええええええええええええ——」

ひなたの体から紅の魔力があふれ出す。

だが、構うものか。撃たれる前に殺す。殺す殺す。殺して連れて行って金にして生きてこれから先も自由に生きて人の幸せを踏み躪る快樂を得続けて勝ち組として——

「ジエノサイドブレイカー」

そんな、ヴォルグの願いを打ち消す言葉が響いた。ひなたが全ての制約を解き放った時限定の、文字通りの最強魔法。人一人なら跡形もなく消滅させるビーム。ひなたの本来の全力。

それが放たれた直後、ヴォルグの視界は紅一色に染まり、その一瞬の後にヴォルグの姿は跡形もなく消滅した。

食われる事無く、食料としてではなく人として生を終えた。

「ああ……やっちゃったよ……脳みそも目玉も食べられない………
まあいいや。多分、シャロンの方が美味しいから」

理性を完全に食人衝動に支配されたひなたはただただ食らう。全身を紅に染めながら、ただただ。無我夢中にシャロンの体を食べる。

ひなたはこの時、人としてではなく、食人鬼としての思考しか持ち得ていなかった。

そして、それを見て。シャーレイは……彼女が例え何者だろうと信じるといったシャーレイは……

第十六魔弾

ただただ食らう。人の肉を。死肉を。シャロンの肉を。彼女の死体を地面に置き、その上から覆いかぶさるように位置取り、食らう。

死して伏した彼女の肉をただただ本能のまま、衝動のままに食らう。涙を流しながらその甘美とも取れる肉の美味さに、内臓の味に、血の匂いに酔い、止まることなく。止めれる訳もなく口の中に入れた肉を胃の中に押し込み飲み込む。胃が満たされてもその食欲は止まることなく食べる部分を食らい尽し、血の滴る場所を啜り、服を裂き皮膚を噛み千切り肉を食らう。

最早食べる事しか考えられない。食べて食べて食べて……その先の事なんて考えず、獣のように目の前にある絶好の食料を涙を流し食べつくす。

最初に見た時から。彼女が既に死んでいて、だけど肉が新鮮なまま動いているという状況を目の当たりにした時、ひなたは理性で食人衝動を押し留め続けた。だけど、駄目だ。生きるため、シャーレイとの約束を守るためと自分に嘘を吐いて大義名分を無理無理に作ってあの美味しそうな体に牙を立てている。それがシャロンという人への侮辱になると知っていても。彼女の体を無下に扱い、彼女の最後が人としてではなく食料として終わってしまうという事実には涙し、人を食う自分を嫌悪し、だけど止められないその食人はその美味しさ故に涙を流し。シャーレイが見ているという事すら忘れて食らう。

両手も、両足も、文字通り全身を紅一色に染め、シャロンという人間を九割食べつくしたひなたはその満足感と満腹感と絶望感を感じ尽しながら立ち上がった。

全身を紅に染めたひなたの眼がシャーレイを見る。紅よりも紅な瞳は絶望を孕み、涙を流していた。

「……シャーレイ、ごめんね」

出たのは、謝罪の言葉だった。

「シャロンを、ちゃんと連れて帰るって言ったのに……無様に負けて、シャロンの体を食べ……」

そして、何よりも。

言いたい事は他にあつた。

「君が信じてくれた人が……こんな、化け物で」
騙っていた。

秘密はあると何度か言つた記憶はある。だけど、その秘密の正体はこれだ。吸血なんか可愛く思える程の行為である食人を行う人間。完璧で完全に嫌悪されて迫害される食人鬼。

そんな人間を信じていたシャーレイが、可哀想で。そんな子を騙し続けてきた自分がとても愚かで。彼女の大切な人を目の前で食らつて。それを、謝りたかつた。一言だけ。謝りたかつた。

もう、彼女はこんな人間を……人間じゃないナニかを受け入れてくれない。こんな血と穢れに満ちた生物を迎え入れてくれる人間なんてこの世にはいない。だから、終わりだ。あの優しくも楽しくて嬉しかった時間は。だって、彼女の眼は恐怖一色に染まっているから。ただ、目の前にいる血に塗れたひなたの事を怖い、と。そう思っている目をしているのだから。

やっぱり、受け入れてくれなかった。何処か心の中で期待していた自分がいたが……よく考えれば分かる事だ。吸血はギリギリ許せても食人を許せる人間なんてこの世に存在する訳がない。だから、これでおしまいだ。全部。この数日間に築いた物全部。これで、おしまい。

「……じゃあね。楽しかったよ」

背中を向けて、歩く。

目的地なんてない。この先に歩いて、歩いて歩いて。近くに川があつたらそこに入って返り血を落として、適当なボロ布で体を隠して、復讐だけに生きる。それだけだ。

つまりは、前と同じ生活だ。また、孤独に戻るだけだ。

きっと、シャーレイに会つた直後のひなたなら、シャーレイを始末して目撃者を消してから去つたのだろう。だが、今のひなたにはそれが出来ない。シャーレイを己の手にかける事なんて出来ない。出来る訳がない。こんな……こんな、最愛の少女に、銃口を向けるなんて

真似は、出来る訳がない。だから、何もせずに行く。

暫くはこの虚無感と絶望感に心を押し潰され続けるのだろう。だけど、じきににそれも慣れる。だって、前もそうだったから。あの男……ブラッドフォード伯爵に全てを壊されたあの時も、そうだったから。どうせ、一か月もしたらシャーレイという少女がいた、という事だけを記憶に留めるだけになる。孤独に苛まれ、ただ復讐のためだけに生きる事になる。

涙が溢れるが、もう戻れない。後戻りなんて、出来ない。

後ろをみたいが、見れない。きつと、シャーレイが軽蔑の眼で睨みつけていたら、ひなたは立ち直れないから。だから、潔く去ってまた前みたいに――

「待って!!」

止められた。

必死の叫びに、ひなたの足が止まった。

止まるつもりなんて一切なかったのに、それがこの言葉だけで止められた。

「……何処に、行くの?」

震える声でそう言った。

そんなの、ひなたにも分からない。そして、シャーレイに言う事じゃない。

「……君には関係ない」

「何で」

「……関係ないだろ。放っておいてくれよ」

「関係ある」

「ない。これ以上、ボクを虐めないで……」

これ以上話していたら、心が折れそうだ。

たった一人。寄り縋れる場所を失った今、ひなたの心は少しの衝撃で完全に粉碎されそうなのに。

「ひなたちゃん」

「嫌だ」

「ねえ」

「聞きたくない!!」

彼女から拒絶の言葉なんて、聞きたくない。

聞きたくないんだ。見たくないんだ。食人という禁忌を犯した人間に向ける言葉なんて。態度なんて。怖くて怖くて。ただひたすらに怖いから見たくない。だから、ここを去りたい。

逃げ出したい。

なのに、足は動かない。彼女の言葉が心を支配しているから。待つて、という言葉が、ひなたの足を完全に止めているから。

「どうせボクを迫害するんだろ!? 責めて罵って手折るんだろ!!? ボクは……ボクは嫌なんだよ!! 君みたいな優しい子に……君のような陽だまりに存在を否定されるのが!!」

だから、行かせてくれ。

ただ一言。じゃあねの一言でひなたの足を動くようにしてほしい。じゃないと、心が折れてそのまま死んでしまいそうに——

「——なんで、そんな事しなくちゃならないの?」

「……………え?」

帰ってきたのは、意外な言葉だった。その言葉に思わず振り返った。

振り返った先には、座り込んで恐怖を瞳に孕んだままだが……ひなたを心配する表情を浮かべたシャーレイがいた。

なんで、そんな表情が出来る……なんで、人間を見る目でまだ見れている。

「そんなに血を浴びたままだと、病気になっちゃうかもしれないよ?」

「え、あ……」

「それに、お腹にも穴が空いてたんだし、休まない」と

「な、なん……」

何で。何で何で。

何で、そんな、化け物を心配する言葉が出てくる。何で、そんな事が言える。

「シャロンちゃんの骨も拾って、埋めてあげないと……」

「ま、まっ……」

「だから、ひなたちゃん」

「待ってよ!!」

思わず、シャーレイの言葉を遮った。

何でだ。何で、彼女はそんな事が言える。何で、何で……

「何で、ボクを心配しているんだよ!! ボクは……ボクは、食人鬼なんだよ!? 人の肉を食って生きる真正正銘の化け物なんだよ!? 受け入れられる筈がないのに、何でそんな事がすらすらと!!」

「そんな事ないよ。だって、ひなたちゃんはひなたちゃんだから」

ひなたは、ひなただから。

今日この日まで……短い間だが、一緒に生きてきたひなたは偽物ではないと分かるから。例えば、偽物だったとしても、ひなたの事を軽蔑せず、共に在り続けると決めたから。だから、シャーレイはひなたの事を怖がりたりはしない。笑顔を浮かべて彼女を受け入れる事は出来ても軽蔑する事なんて、出来る訳がない。

食人という禁忌を見た直後でも、それは変わりない。例えばひなたがこの世界を滅ぼそうとする災厄の怪物だとしても、シャーレイはひなたの後をついていく。

それが、シャーレイに残された道だから。それしか、道が残されていないから。ひなたと生きる生活に依存してしまっているのだから。それを自ら手放すなんて選択肢は彼女の脳内には絶対に浮かんでこない。

「じゃ、じゃあ何を怖がって……」

「流石に目の前でアレはキツかったから……」

そりやそうだと納得してしまった。ひなただって目の前で人体解体ショーが行われたら、それをやっているのがシャーレイであっても流石に怖い。

だが、そうだとしても。彼女はこんな血に穢れた自分を受け入れてくれるのか。

「……本当に、ボクを軽蔑しない?」

「うん、しないよ」

「……なら」

ひなたはゆつくりとシャーレイに近づき、手の拘束を解いた。

そして、再び背中を向けて距離を取ると、シャーレイに聞こえるように、呟いた。

「ボクを抱きしめてよ。こんな、血まみれのボクを抱きしめられるのなら、力一杯に——」

「はい。これでいい？」

言い切る前に、背中から抱きしめられた。

すぐに駆け寄り力の限り、優しくひなたを抱きしめた。自分に血が付くのを躊躇せず抱きしめる。その力強さに嘘偽りは無く。言われたとおりに、ひなたを手元に寄せるように力強く。

だから、涙が止まらなかった。

こんな、罪と穢れに満ちた禁忌の権化のような存在を、全くの躊躇もなく抱きしめるシャーレイという存在が暖かすぎて、優しすぎて。

「シャー、レイ……」

「うん、なあに？」

もう救われないと思っていた。

もう、人と一緒に生きていけないと思っていた。

一生孤独で、理解者が生まれることなくたった一人、孤独に生きていくものだと思っていた。あの日あの時。食人鬼としての宿命を突きつけられた時から、普通の人とはもう一緒に生きる事は出来ないのだと思っていた。例え、出来たとしてもそれは泡沫であり、すぐに孤独に帰る物だと。

「……ちよつと、泣いてもいいかな」

「うん、いいよ」

「……うん」

だと言うのに、こんなに優しく認めてくれる存在が現れるなんて。こんな、誰にでも陽の光を届ける太陽のような子がいるなんて。心の中にある男としての精神が、シャーレイ一色に堕ちる。離したくない、ずっと居たいと思ってしまう。こんな罪深い女男を受け入れてくれる少女に、惚れこんでしまう。

男だとか女だとか、そんなの関係なく、彼女に完全に依存して、全

てを彼女に捧げたくなる。振り向き、覗き見た彼女の表情は正しく聖母のような全てを受け止め許してくれる表情だった。そんな子が現れたという事実が、涙を流させる。

足から力が抜け、座り込み、泣く。

この嬉しさに。喜びに。こんな自分を受け入れてくれる存在が現れたという現実には。

「……………うう、ああああ……………」

「うん。私はひなたちゃん全部は分からないけど……………寂しかったよね」

「さみし、かった！　だれ、も……………ひつ、うけいれ、てっ……………くれないって、おもって!!」

「大丈夫だよ。私はひなたちゃんを受け入れるから。ひなたちゃんが何であろうと、私だけは絶対にひなたちゃんの側を離れないから」

「しゃー、れいれい……………しゃーれいれいれい!」

「泣いていいよ。いっぱい、いっぱい。今までの分、全部」

涙に濡れた顔を隠そうとせず、振り返り正面からシャーレイの胸元に顔をうずめ、ただひたすらに泣く。

一度決壊してしまうと止まらない。今までの分。あの日、全てを失ってから頑張ってきた分が、強がってきた部分が一気に崩壊して、シャーレイという少女を抛り所にしてしまう。

きっと、もうひなたはシャーレイから離れられない。もう一人は嫌だから、怖いから。辛いから。寂しいから。とてもとても、寂しいから。こんな、自分の汚い所を認めてくれる少女が出来てしまったのだから。

片手で必死に抱き寄せ、泣きじゃくる。シャーレイはそれをただ黙って受け入れる。ひなたの頭を撫で、赤子を慰めるように。

ありがとう、と呟き続けながら泣き続け、大丈夫だよ、と言いながら頭を撫でる。

そんな二人を邪魔する存在は、この場にはいなかった。

この場にいるのは、依存しあう事では生きていけない二人の少女だけだった。

二人は、手を繋いで来た道をゆっくり、ゆっくりと歩いていた。

シャロンは人目につかない場所まで連れて行って、そこに埋めた。石を立て、二人にしか分からないように墓を作って。もう、死体が誰の目にもつかないように、ゆっくりと休ませてあげるために。

そして、二人は月明りに照らされながら、一緒に街へ向かって歩く。泣いて泣いて泣きじゃくったひなたと、それを慰め続けたシャーレイ。回収したローブのフードで顔を隠したひなたの顔は真つ赤だった。顔に付いた血液的にも、恥ずかしさ的にも。

幸いにもシャーレイにはバレていないが、こんな歳になって年端もいかない少女に抱き着いて泣きじゃくるなんて思いもしなかった。最も、この一年は思いもしなかった事ばかりだったが。

だが、何よりも。シャーレイの顔をまともに見られない。シャーレイの綺麗な横顔を見る度に心臓が高鳴ってしまい、顔が熱くなってしまう。

(何だろう、この感覚。シャーレイと手を繋いでるだけで、凄い幸せ……………)

顔が真つ赤になっている理由の一つだった。

こうして二人で誰にも邪魔されずに歩いているだけで幸せになってくる。

ローブでなるべく顔を隠すようにしないと、ちよつとニヤけているのがバレそうになる。そして、何よりもシャーレイの全てが愛おしく、綺麗に思ってしまう。そして、一度シャーレイを見てしまうとそのままずっとシャーレイの事を見ていてしまう。

この感情の名前が何なのかは分からないが、少なくとも昨日まではこんな感情は沸いてこなかった。そして、日本に居た頃もこんな感情を覚えた試しは無かった。それを考えながら、だけれども幸せな気持ちで歩く。

だが、それはシャーレイも同じだった。

(かっこよかったな……戦うひなたちゃん……)

終始ボロボロだったが、それでも諦めずに戦うひなた。そんなひなたの事を思い出すと、思わずぽけーつとしてしまう。そして、その後に泣きじやくったひなた。

(可愛かったなあ……普通じゃ見ないからかもしれないけど……)

泣きながら、上目遣いで見てくるひなた。何時もとのギャップに、女同士なのにドキドキしてしまった。

ひなたの事をかっこよく感じた。可愛らしく感じた。食人をした事は、怖かったけどそれはあくまでも人間解体ショーのような物を見てしまったがためで、ひなた自身を怖く思ったことは一切なかった。シャロンを食べていたのは、少し悲しく思ってしまったが、涙を流しながら自分に言い訳をして謝りながら食べていたからか、ひなたは悪くない。これは仕方のない事だと割り切れた。

ひなたも食べたくなかった。これがすぐに分かったから、シャレーイはひなたの食人を一切怖いと思わなかった。悲しい事だと思えた。約束を……シャロンを連れて帰るという約束を覚えていてくれたから、ひなたを怖いと思わなかった。それに、自分を助けるために、全てを投げ捨てる覚悟で食人をしたという事に軽くときめいた位だ。すぐに人間解体ショーにそんな余裕を持っていかれたが。

だけど、そんな、かっこよかったひなたが見せた弱さに思わず心を打たれてしまったのは変わりない。

ただ、その詳細が分からないままひなたの隣を歩いていく。

両者の関係は変わる事は無かったが、それでも二人の持つ気持ちはちよつとだけ変わり、きつと平和な時間が流れるのだろう。

第十七魔弾

気が付くと、シャーレイは真つ白な空間に居た。

本当に気が付くと、真つ白な空間に立っていたとしか言えない状況だった。だが、それが夢だと気が付いたのはひなたを抱き枕にして眠ったのを思い出したからだ。だから、これは夢に違いないと。そう思った。

「……シャーレイ」

後ろから、声をかけられた。

その声は、とても聞き覚えのある声で、今のシャーレイがこうして存在している理由だった。

「……シャロンちゃん？」

後ろに立っていたのは、シャロンだった。

そして、確信した。これは夢だと。

何故なら、シャロンは死んだから。あの日、ヴォルグに撃たれ死んだ。死体は昨日埋めた。だから、シャロンがこうして肉体を持って話しかけているなんて有り得ない事だからだ。

「もう私無しでも生きられるか？」

シャロンは笑顔で問いかけた。

それは、何かを喜んでいるような表情だった。

「……うん。一人じゃ無理だけど、ひなたちゃんと一緒なら」

「そうか。なら良かった」

シャロンはその言葉を聞き、満足気に呟いた。

シャーレイはシャロンに近寄ろうとしなかった。近づけない、と本能的に察せたから。もう、シャロンには触れられないと分かっているから。

「……私、泣かないよ。悲しいけど、私は過去を乗り越えるから」

だから、安心させるためにシャロンに告げた。

シャロンの死を、泣きやしない。泣いたら、シャロンが心配してしまうから。もう休んでいるのに、心配させてしまうかもしれないから。だから、泣かない。

シャロンの死を乗り越え、未来を見続ける。時々振り返るかもしれないけれども……それでも、未来だけを見て生き続ける。ひなたと共に。

「……うん、安心した」

「だから、ゆつくり休んで。私も、もう少ししたら会いに行くから」

「そうだな。それまでは、天国のVIPルームでシャーレイが羨むような生活しててやる」

「そうしてて。私は、もっと悩んで悲しんで苦労してから、そんな生活をしているシャロンをひっぱたきに行くから」

「ひっでえ」

シャロンは笑ったままだった。

シャーレイも泣きそうになるが、笑う。

もう生きている内には会えないが……きつと、また会えるから。

「……あのひなたって子。結構泣き虫だから支えてやれよ」

「うん。二人で手を取り合って、生きていくよ」

「そうか。なら、もう行つてこい。もし、どうしても無くなつたら自分がどうしたいか、何をしたいかを優先して動け。後悔しないように、自分の中の道を往け」

「……シャロンちゃんもそうしたの？」

「ああ。死んじまつたけど、シャーレイが命を継いでくれた。それだけで満足だ」

「そっか……分かった。私は私の道を往くよ」

「私は天国でその土産話、待ってるからな」

「うん。何十年先になるか分からないけど、待ってて」

シャロンはそれに頷いた。

シャーレイはシャロンの満足した笑顔を見てから、背を向けた。ここから先は、困難だらけの道なのだろう。だけれども、進む。真つすぐ、ひなたと共に。

シャロンの命を継いで。シャロンの分まで生きるために。

翌日の朝という物は、実に気分が良かった。

血を落として綺麗さっぱり。二人抱き合って寝たからか、ひなたの朝の目覚めはかなり良く、特に寝ぼける事無くベッドから降りてシャーレイが起きるのを待っていた。しかし、昨日シャロンを食ってしまったからか食人衝動は前回ののように大きくなっており、シャーレイを愛おしく思うと同時に美味しそうとも思ってしまう。

そんな自分の頭を一回壁に打ち付け、すぐに煙草を手にとって火を付けた。その状態で鏡を見てみると、また眼は吸血をした後のように紅に染まっており、煙草を吸っても片目だけが翠に戻るといふ事は無かった。やはり、人一人食ったのは煙草だけではどうしようも出来ないらしい。

食人衝動は大分落ち着くが、吸血衝動の方は余りよくなる。吸血はあくまでも食人のオマケ的な物だが、衝動が無い訳ではない。行儀が悪いと分かりながらも貧乏揺すりをして衝動を誤魔化す。吐いた煙が消えていき、煙草の臭いが蔓延する。もし、シャーレイが煙草嫌いだったらこの時間は地獄のような時間になっていたかもしれない、と苦笑いしながら妄想し、再び煙草を吹かす。そして、ふと思いつく。ひなたが食人鬼になった原因の男……ブラッドフォード伯爵の事を。

「……勝てないんだろうなあ」

呟いた。

自分の力に関しては、どれだけの物かは自覚している。だが、ひなたは一人だったから、全盛期の状態でも手も足も出なかったブラッドフォード伯爵に己が牙を突き立てようとしてきた。

しかし、今のひなたはゾンビにすら手も足も出ない状態だ。回復魔法で回復こそ出来るが、戦闘から数時間経った今でも、もしシャーレイに思いつきり殴られたら腹に穴が空く。人肉を食う事で多少の体の再生こそ出来るが、それは充てにならない。今のひなたが人肉を毎日食っても完治までは恐らく一か月以上はかかる。食っていない今なら、一か月半だろうか。それまでは激しい運動はせずに絶対安静でな

ければコロツと逝つてしまふかもしれない。

ゾンビ相手にこの大怪我だ。その親玉であるブラッドフォード伯爵に今の状態で勝てる訳がない。

何故なら、ブラッドフォード伯爵はひなたを遙かに上回る化け物だからだ。

「……『真祖ブラッドフォード』。吸血鬼の中の王、か」

それが、ひなたの追うブラッドフォード伯爵の真の名前。そして、如何にブラッドフォード伯爵が化け物かを表す名前。

あの時、村を滅ぼしたのは、真祖だった。急にやってきたと思つたら何時の間にか村は壊滅し、一部の人間はゾンビとなった。そして、ひなたは真祖ブラッドフォードの血を浴び、吸血鬼となる筈だった。しかし、真祖ブラッドフォードはそれを許さず、ひなたから吸血鬼としての弱点を消し去り、吸血鬼としての特性も吸血と再生能力以外を消して新たな属性を付与した。

それが、食人。

人を食わなければ本来の力と吸血鬼の再生能力を行使する事が出来ず、普段は本来の力の十分の一しか解放できない。吸血では半分しか解放する事が出来ず、再生能力も破れた毛細血管に薄い膜が張られる程度。そして、人肉を食つた時は多少の怪我と骨折なら治す事が出来る。そのため、ひなたは腹を貫かれ、シャロンを食つた時、背骨とその周りの肉を再生し立ち上がり、残りを回復魔法で回復させた。

だが、それが精一杯だ。真祖ブラッドフォードが椅子に座つて片手だけで相手をすると言つたとしても勝てない。吸血鬼としての弱点が完全に消え、吸血鬼としての力を数倍に高めて振るう真祖には、ひなたでは勝てない。いや、人間の中でも勝てる人間はいないとも言える。それ位に真祖ブラッドフォードは強い。

「……ねえ、みんな。ボクさ、疲れちゃったよ」

空にいる恩人とかつて共に笑いあつた友人達に届けるために、声を出す。

その声は疲れ果てた声だった。

勝ち目のない相手への復讐。数か月の旅で尻尾の先端しか掴めず、

見つけ出したとしても勝てない相手への復讐心を抱き続ける事に、疲れってしまった。

「……休んでも、いいよね？　ボク、シャーレイっていう大切な子を見つけたんだ」

あの人達は復讐は望んでいないだろう。

少なくとも、共に生き、笑いあつたひなたには生きていてほしいと言うだろう。中には復讐を願う者も居るだろう。だが、あの人達だけは。それを望まないだろう。幸せに生きてほしいと願うだろう。

「バーニーさん、エリザさん……貴方達の命を吸つて、ボクは生きるよ」

女になって狂乱したひなたを拾い、育ててくれたバーニーという男性とエリザという女性。初老に近い二人は子供がいなかった。だから、たった一人だったひなたを保護して短い間だったが、家族として迎え入れてくれた。

バーニーはこの世界で生きる術を……魔弾の使い方を見せてくれた。起爆銃も譲ってくれた。エリザはひなたが元男だと知りながらも女としての行儀やら言葉使いやらをみっちり叩き込んでくれた。そして、最後はゾンビと化したバーニーがエリザを食い、ひなたに自分を殺させた。

壮絶な最後だった。悲痛な最後だった。しかし、最後にバーニーは笑ってひなたの頭を撫でた。

「確か……最後の言葉は、何だっけ」

ずっと、忘れていた気がする。最後に聞いた言葉を。

……ああ、そうだ。思い出した。

『俺達の間まで生きてくれ。幸せにな』……だっけ」

そうだ。ずっと忘れていた。

復讐心という炎がその言葉を焼き尽くしていた。

違っていたとしても、それに近い事を言っていなければ笑顔で頭を撫でやしないだろう。バーニー、エリザ夫妻はひなたが……娘として扱った少女が自分達の間まで生きて、最後には幸せだったと言える人生を送ってほしいと願ったんだ。親として、バーニーがその願いを託

したんだ。

じゃあ、休もう。今は、シャーレイと共に。傷ついた心を癒しあつて、舐めあつて生きていこう。それが、この禁忌に穢れた体でも育むことの出来る幸せだから。

「……けど、復讐は諦めない。いつか、ブラッドフォード伯爵を殺して、あの世の皆の前で土下座させる。いつになるかは分からないけど」

それまでは、休憩。

椅子に深く腰を落とし、目を閉じ煙を味わう。

今は、この煙と共に復讐心を吐き出す。いつもと同じ筈なのに、ちよつと美味しくなった煙を吸い、吐き出す。この工程が気持ちと心を落ち着けてくれる。

過去を一旦切り離すと、心がより落ち着いた気がした。それに安らぎを覚え、二本目の煙草に火を付け、何回か煙を吸ったところでベッドの方からゴソゴソと音がした。目を開けそつちを見ると、シャーレイが小さく声を上げながら上半身を起こしていた。その仕草が何処か色っぽく感じ、思わず目を背ける。

「……ごめん、バーニーさん、エリザさん。二人から見たらアブノーマルな方向に進むかも」

主に、百合の花が咲き乱れる的な意味で。

昨日からシャーレイが凄く可愛く思えるし色っぽく思えてしまう。近いうちに彼女を押し倒してしまふかもしれない。未遂で済ませれば許してくれるだろうけども、最後までやったら流石に許してもらえないかもしれないから我慢こそするが、確実に外面はアブノーマルな方向にこれから進んでいく事だろう。

若干の顔の火照りを感じながらひなたは比較的穏やかな表情と声色でシャーレイに声を投げた。

「おはよう、シャーレイ。よく眠れた？」

「……うん」

なら良かった。とひなたは呟いた。

「……夢の中でシャロンちゃんと会ったよ」

急にシャーレイは呟いた。

その言葉を聞き、ひなたは黙った。沈黙でそれに相槌を打った。

「シャロンちゃん、笑ってた。後悔はない。私は、私の道を往けっ」
「……」

「それに、ひなたちゃんは泣き虫だから支えてあげてっ」

「……可笑しいなあ。まともに会話した事なんてないんだけどなあ」

ひなたは苦笑いしながら煙草の煙を吐いた。

シャーレイの言葉から感じるのは、その夢は悪夢ではなかったという事だ。シャロンは、シャーレイに命を託したのだろう。だから、後悔無く逝った。シャーレイに言葉を託して。

魂だとか幽霊だとかは信じないが、それでもシャロンは、死んでなおシャーレイに言葉を届けたのだろう。己の遺言とも言える言葉を。それを受け取ったシャーレイの表情はとても晴れやかで、過去には縛られてはいなかった。その表情は、ひなたを安心させた。

「……ひなたちゃん、何かあった？」

起き抜けのシャーレイがそんな事を聞いてきた。

が、ひなたは特に何もしていない。強いて言うならば煙草を吸っていた位だ。

「ん？ 何もしていないけど？」

「そう？ なんか、憑き物が取れたような感じがして……」

「……憑き物、ねえ。そりゃ気のせいだよ、気のせい。寝ぼけてるんだよ」

「そこまで否定しなくても……」

ここでさつきまでの事を話すのは、何だか恥ずかしい。

煙草を吸いながら気のせいだと言い続け、ちよつと感じた恥ずかしさを煙草を灰皿に押し付ける事で紛らわす。幸いにも、カートンで買ってきた煙草には余裕がある。今日明日では無くならないだろう。

「……そうだ、シャーレイ。今日、不動産屋に行かない？」

「不動産……？」

「家を買うんだよ。二人で暮らす家を」

約束したでしょ？ と言うとシャーレイはちよつときよんとし

ていたが、すぐに笑顔で頷いた。

金ならある。足りなかつたらまた稼いできたらいいだけだ。魔獣を倒すだけなら地雷を撒いて本を読んでいたら半自動的に終わる。それに、ひなたが望んだんだ。シャーレイと共に生きる事を。そのためなら、金も惜しくはない。

もう、彼女がいない生活なんて考えられない位にひなたはシャーレイに依存していた。自分の禁忌を許してくれる陽だまりのような存在がひなたを予想以上に依存させている。

「じゃあ、お昼になったら行こうか。多分、ちよつと街の外れにある家なら一括で買えるから」

「へえ………っていうか、結構お金持ってるんだね」

「駆除連合の依頼って、結構報酬がいいんだよ」

一日で一週間分以上の生活費全般を支払える位稼げるのだから、駆除連合での仕事は止められない。

それに、情報屋から情報を買うためにひたすらに金を稼いでいた時期もあった。しかも、知っていれば危ないレベルにまで入るブラッドフォード伯爵の情報を。

だから、家一軒買える位の金は常に持っている。それをぱーっと使って家を買う位にひなたは心に余裕を持っていた。

これから、何年も二人で生きていくのだろう。お人好しから始まった関係は、共依存へと変わって、もう二度と自らは離れられない関係になって。だけど、構わない。

今日から人生は、きつと復讐だけを考えていた時よりも明るく、楽しい物になる筈だから。

「………これからもよろしく、シャーレイ」

「急にどうしたの？」

「別に。そんな気分だっただけ」

少し歪だけど。二人の道は重なって、ゆっくりゆっくりと、二人で手を取り合って歩いていく。

二人一緒でなければ生きられないけど、二人一緒なら、この人生は楽しい物になってくれると、そんな確信があったから。

それから間もなくして、ひなたの体からはかつての傷跡は、綺麗さっぱり消えた。

第十八魔弾

ひなたの訪れたあの街。あの街はかなり広い方であり、結構街の中央から離れた場所にも人はそこそこ住んでいる。しかし、近くには店という店がなく、何かを買いたい時は少し遠出をしなくてはならない。そのため、外れの方に暮らすというのはちよつとだけ面倒が生じる。

そのためか、街の外れにある家というのは街の中央にある家よりも結構安めに売られている場合が多い。豪邸等はそれでもいい値段するが、誰かが売った家なら全然かなり安く買う事が出来る。

ひなたはその数ある物件の中でも狭くもなく広くもない家を購入し、残った金で家具やら生活必需品やらを揃え、シャーレイと共に暮らし始めた。

と、言うのも一か月前の話であり、ひなたとシャーレイは新しい住処に既に適応し、ひなたは金を稼ぎ、シャーレイが家事をするという分担で日々を送っていた。

「ひなたちゃん、洗濯物もうないー?」
「ないよー」

傷の大半が回復魔法と自然治癒と薬のチャンポンによって既に回復し、もうある程度の戦闘なら問題が無くなったひなたは魔獣狩りを行わない日は基本的にニートと似たような生活を送っており、今日この日も、とつくに来月分までの生活費を稼いでいたため、居間にあるソファでごろ寝していた。そんなひなたにシャーレイは何も言うことなくせつせと家事をしていた。

料理もひなたのために覚え、その他の家事もひなたのために覚えた。その結果、メイドや家政婦のようになっていたが、それはシャーレイが望んだ事であり、今までそういう事をやる機会が無かった分、家事全般が新鮮に思えて楽しくなっていた。ひなたも何度か手伝おうとしたが、その時には既にシャーレイは家事を殆どマスターしており、片手しか使えないひなたでは逆に足を引つ張ってしまっていた。その時にはひなたが外働きでシャーレイが主婦のような関係になっ

てしまっていた。

そのため、もうそれなら家事全般は完全にシャーレイに任せようと決意したひなたは翌日から金稼ぎの時以外はニートのような生活を送るようになった。それでも、庭で体が鈍らないように鍛えたりはしているが。

シャーレイが洗濯機を回してからひなたのごろ寝しているソファにまでやってくる。それを見たひなたはすぐに起き上がって普通に座り、ソファの前に置いた机の上に無造作に置いてあった煙草の箱と灰皿を手元に寄せると煙草を口に咥え、火を付けようとした。が、その前にシャーレイがライターをひなたの口元に近づけていた。

「はい」

「あ、ありがと」

好意に甘えて煙草に火を付けてもらい、煙を吸う。

何で車は無いのにライターはあるんだろうなあ、とどうでもいい事を考えながら天井を向いて煙を吐く。もうシャーレイに甘え尽くしである。まるでひなたが駄目亭主でシャーレイが働き者の主婦みただ。煙草もシャロンを食ってから吸う本数が一日一本だった物が一日に十本近く吸うようになってしまったし家事だって一切していない。だけど金はちゃん和家庭には入れている。

もう立派な喫煙者になってしまったひなたに対して一切嫌な顔をせずに家事をしたりしてくれているシャーレイには本当に頭が上がらない。

「……禁煙したくても出来ないのが辛い」

「色々と抑えるためなんだし仕方ないよ」

禁煙したくても、人を食ってから食人衝動が以前よりもかなり肥大化し、時々シャーレイの腕に噛み付きそうにすらなってしまう。吸血に関して吸いたいという頻度が増えてしまい、一日に一回、寝る前にシャーレイの血を少し吸わせてもらっているのが現状だ。

ひなたはいつもそこで煙草を一本吸ってから寝るが、時々シャーレイがゴソゴソと何かしていたりトイレに駆け込んでいたりして、吸っているのを知っている。吸血したせいで体調に変化が出てしまったのか、

と思つて翌朝とかに聞いているが、シャーレイは特に体調を崩してはおらず、それどころかスツキリした顔をしている時がある。一体何をしているのかはサツパリ分からない。

話は逸れたが、そこまで肥大化してしまった衝動を抑えるのは理性だけではほぼ不可能となつてしまい、こうして煙草を吸わないと抑える事が出来ない。ひなた自身も煙草代が馬鹿には出来ない事は知つているため、禁煙はしたいとは思っているのだが、煙草がないとシャーレイを食いかねないので金を犠牲に安全を確保するしかなくなつた。煙草の代わりにガムを噛んでみたりグミを食つてみたりしたのだが、ガムに関しては効果が無く、グミは太りそうだったので却下だつた。代わりの物となると後は薬とかが思いついたが、煙草よりもロクな事にならないのが目に見えたため止めた。

「はあ……時々本当にシャーレイが美味しそうに見えちゃう時があるし本当に困るよ……」

「……別に、ひなたちゃんにだつたら食べられても」
「それボクが後悔で自殺するヤツだから死んでも嫌なんだけど……」

もしも衝動に負けてシャーレイを食べたとしたら、その日の内にひなたは崖から空へと飛び立つだろう。もう、シャーレイのいない生活が想像も出来ない位までにひなたはシャーレイに依存していた。

煙草を一本吸い終わり、吸い殻を灰皿に押し付けてから隣に座るシャーレイの膝の上に頭を乗せる。それにちよつと吃驚したシャーレイは小さく声を上げたが、すぐに困つたような笑顔を浮かべて膝の上のひなたの頭を撫で始めた。こうしていると、あのシャロンとの戦いが嘘のように思えた。

余りにも急に訪れた平和は二人の元を離れようとはせず、ただただ二人の傷跡を癒していた。このままグダグダと毎日を生きていくのもいいかもしれない。そんな風に思えてしまう位には、ひなたの脳内は平和ボケしていた。少なくとも、地球で、日本で勉強やら就職やらに縛られて生きていくよりもこうしてシャーレイと二人、やりたいようにやって生きていくのが一番ひなたの性格には合っていた。手に職付けていないが、金を稼ぐ充てはある。そして女の子と同棲。これ

以上満たされた時間は他には存在しないだろう。

全世界の負け組共にやーいやーいと言いたくなる気持ちを軽く押さえ、シャーレイにされるがままで撫でられる。これだとどっちが年上か分かった物じゃない。

「あー、幸せ……」

電子機器、というよりも電気を使った娯楽品という物が数少ないこの世界では暇な時間はこうしてゴロゴロとしているか本を読むか外ではしゃぐしか選択肢がなくなる。何で洗濯機やら冷蔵庫は日本の物と性能が殆ど変わらないのに娯楽品だけは存在しないんだ、と思わなくもないが、無い物は仕方ない。だが、新聞はある。シャーレイはひなたを一通り撫で終わると、テーブルの上の新聞に目を通し始めた。

学ぶ場所が無かったスラムで生きてきたシャーレイだが、どうやらシャロンが独学で文字を覚えた後にシャーレイにも教えていたらしく、シャーレイは普通に本や新聞を読める。少なくとも、つい一年前に叩き込まれたばかりのひなたよりもすらすらと読めている。

本当に暇で眠気がやってきた時、ふとシャーレイが言葉を漏らした。

「温泉、かあ……」

「え、なにになに？」

温泉。確かにそう聞こえた。

この世界にも温泉はあるっちゃあるが、温泉が湧き出る場所はかなり少なく、この街からは馬車でも丸一日と数時間かかる位に遠い。そんな場所にシャーレイが興味を示したのが若干もの珍しく、ひなたが一体何事かと聞いた。

シャーレイは何でもない、と言おうとしたが、別に言ってもいいか。と思考を変え、新聞にあった内容を口に出した。

「なんか、今日から一か月間、温泉宿の宿泊費が割引されてるんだって。馬車も定期的に出てる連絡用の馬車に乗せてもらえるから、何時もよりもお安くなってますよーって」

「へえ……」

あまり馬車という物に乗った事がないひなたはパツと頭の中にイメージが沸いてこなかったが、きつと観光バスのような物が出ているのだろうと自分の中で無理矢理シャーレイの言葉を納得させた。

シャーレイ自身も馬車に乗った事なんて一回も無かったが、一般常識として一応一通りの事は知っている。馬車の発着場のような場所も知ってはいる。知っているだけだが。

「まあ、私達には関係無い話だよな」

シャーレイはそう言うと、新聞をすぐに閉じた。やはり、そんな事に使う金はない、と思い込んでしまっているらしい。確かに、ついこの間駄目になった戦闘服に似たような頑丈な服を買ってきたため金が軽く溶けたが、その分も既に取り返してプラスになっている。

ひなたが新聞を取ってその記事を見つけ読んでみるが、一週間程毎日依頼を受けていたらこのくらい余裕で行く事は可能だ。生活費も軽く削れば五日間程度で温泉宿があるという温泉街で温泉に浸かる位の金は確実に用意できる。もう一人分余計に用意だって出来るだろう。予約は街の役所から、だそうだが。

この街の住民票をシャーレイの分とひなたの分で作りに行ってきたとき、確かにそんな窓口があったような無かったような。

「……行きたい？」

思わず口に出した程なんだし、行きたいんじゃないか。そう思い、下からシャーレイに聞いた。

シャーレイは一瞬動きを止め、だがすぐに視線を逸らしてひなたの頭を撫でた。

「そ、そんな事は無いけど……」

嘘だ。だって表情が行きたいと言っている。行けるのなら行ってみたいと言ってしまったっている。こういう贅沢もしてみたいと思っっている顔をしている。

ひなたとしてはシャーレイが本当にどうでもいいのなら行かない、という選択肢を取ったが、ここまで露骨な感じで行きたいと言われるとじゃあこの話は終わりで、とは言えなくなる。それに、ひなた自身も久しぶりに温泉に行ってみたいという気持ちはある。この世界に

来てから風呂はあったが、温泉に入った事なんて無かった。というか、あの村に居た頃は温泉の話聞いたことも無かったため、知つてすらいなかった。

なら行くしかないか。とひなたは上半身を起こした。

「シャーレイ、バレバレだよ」

「うっ……」

「全く……遠慮なんてしなくてもいいよ。こう見えてもそこそこ稼いでるんだから、温泉に行く程度造作もないって」

「ホント!?!」

ひなたが遠回しに行こう、と誘うとシャーレイは歳相応の笑顔で食いついてきた。というか、掴みかかりそうな勢いで顔を近づけてきた。その近さにドキッと心臓が躍ったが、自分の気持ちに落ち着きも入れる目的でどうどうと言いなからシャーレイの額に手を当てて彼女の体を押し戻した。

この子はやっぱり色々と警戒心が薄すぎる。それか、ひなたには心を許し切ってるのか。何度寝起きにシャーレイの顔や寝間着から除く谷間を見て興奮しかけた事か。シャーレイはひなたに対して好意は持っているし女の子同士であんな事やこんな事されてもいいと本気で思っているが、ひなたはそれに気が付いていない。少なくともシャーレイは自分に対して好意を持っているというのは大体予想がついているが、それがLikeの好きなのかLoveの好きなのかは分からない。

「じゃあ再来週に行こっか」

「再来週?」

「うん」

「何で?」

何でか? そう言われると少し言い淀みたくなってしまうのだが、まあ女同士だしと思つてぶっちゃける。

「もうちょっと経ったらあの日だから、ちよつと動けない……:というか動きたくない」

「……あれ、もう一か月経つてたっけ?」

まあ、つまりはそういう事である。ひなたは結構重い方だからか流石に動く気にもなれなければ温泉に入る気にもなれない。シャーレイは一月前、大体家を買う前辺りでひなたがその日の痛みでもだえ苦しんでいる所を見たため、何とも言えない気持ちになると同時にご愁傷さま、という気持ちが出てきてしまう。ちなみにシャーレイは結構軽い方だ。

「ははは……憂鬱だよ、本当に。辛かったらありやしない」「私は軽いからなあ……」

痛みでほぼ一日中寝込んでしまっているため、その日は何にも出来ない。それから数日もイライラとか軽い痛みで何かをやる気が失せる。

「まあ、そういう訳であの日が終わってからお金を稼いで準備して予約して……で、ようやくかな。大丈夫、絶対に行けるから」

「……でも、本当にいいの?」「家も買ったのに何を今さら」

本当にいいの、とは本当に温泉へ連れて行ってもらってもいいの? という意味だったが、それ以上に高価な家やら生活費全般を支払っている以上、金の問題は今さら過ぎる。

それに、シャーレイにはそれ以外の部分で頑張ってもらっているのだから、本当に今さら過ぎる問題だ。

「それを言われると何とも言えないよ……」「まあ、ボクも行きたい訳だし、一緒に行こうよ」

「……うん、じゃあ思いつきり楽しむ」「それでいいよ」

それに、シャーレイの喜ぶ顔がひなたにとっての活力にもなる。好きな子の笑顔というのは一番の活力になる。それを最近になって学んだ気がする。

「……でも、あの日になるまでは休憩ねー」
だが、今は何もせずにボーっと、だ。

本日二本目の煙草を啜えて火を付ける。これは暫く忙しくなると思うと、自然と笑みが浮かんだ。その先にあるシャーレイの笑顔を想

像すると、この程度苦痛でも何でもない。
何時も吸っている煙草が、この瞬間だけは妙に美味しく感じた。

第十九魔弾

結局、ひなたのあの日は特に問題なく終わった。強いて言うならば腹の痛みと幻肢痛のダブルパンチで夜は死にかけていたが、それも些細な事だ。流石にその日は寝る前の吸血に加えてもう一回シャーレイから吸血してしまい、シャーレイの顔が真っ青になっていた。次の日にレバーやら肉やら野菜やらをたらふく買ってこさせて食べさせたからきつと大丈夫だと信じたい。

どうにも痛みには負けると吸血衝動が抑えられなくなってしまったのがこの同居生活ではキツイ部分だが、治せない物はどうしようもない。その内閣ルートで輸血パックでも仕入れてこようかと思ってしまう。

そんな痛みと付き合って数日を過ごし、まだ腹に違和感を抱えた状態でひなたは駆除連合の支部へとやってきた。今日は駆除連合で依頼を受けてから生活費を使って先に予約をしてから駆除へと向かうつもりだ。ついでに、北の森の付近での狩りならシャロンの墓参りにも行こうかとも思っている。きつとシャーレイの元気な写真でもお供え物にしておけば喜ぶと思ったが、流石にこの世界では気軽に写真は撮れない。

撮れる事には撮れるが、明治時代等と同じで一回の撮影に時間がかかるし金もかかる。デジカメなんて万能な物も無ければフィルムを使うカメラなんて物も勿論ない。写真を撮るには写真屋だ。

ここまで技術体系がバラバラだと違和感しか覚えないが、そういう世界も存在しても可笑しくないだろうとひなたは割り切った。その結果、墓参りの品はシャロンの好物で揃えておいた。一番安パイだし喜んでくれる物だろう。

「さてつと……依頼はどこかにやーン」

自分で言うとおいて寒気がした。自分の外見はそこそこ美少女だとは自覚しているが、それでも流石に歳を考えると痛いどころの話ではない。それに、目付きも外見相応とは言えず、歳相応とも言えないような感じなため、きつと凄くアンバランスだ。

誰にも聞かれてなかったよね？ と周りを確認し、誰も白い目を向けていなかった事に安堵を覚えてから依頼をその目で確認する。

やはり、魔獣駆除の依頼は結構多い。が、近くの魔獣駆除依頼は基本的に早い者勝ちな上に報酬がいい物も中にはあるからか、そこまで量が無い。ここから数時間離れた場所の依頼は結構残っているが、この付近、歩いて一時間も経たない場所での依頼は本当に少ない。中には交通費支給の護衛依頼等もあるが、それは流石に受けられない。

適当に依頼に目を通し、北の森での魔獣駆除依頼を見つけた。またか、と苦笑いでその紙を破いてカウンターに持っていき、さつさと受け付けをしてもらおう。その間、ボーっとして話を聞き流していると、後ろの方から気になる話が聞こえてきた。

「なあ、聞いたか。ここの近くの温泉街で変なモンが発見されたんだってよ」

「変な物……？ なんだそりゃ」

「どうやら、何かの噂らしい。が、ヤケに気になる。」

何時もならスルーしている所だが、これは安全にも関わる事かもしれない。すぐにチェッカーを受け取ってから話をしている男達の近くに立つ。

「何でも、まるで内側から爆ぜたように死んだ人間、だってよ」

「内側から？ 爆弾でも飲んだのか？」

「いや、そこまで詳しくは無いんだが……」

「じゃあ、ただの眉唾じゃねえのか？」

「さあな。けど、今は腕の立つ二人組がそれについて調べてるって言うぜ」

「腕の立つ二人組……？」

「温泉街付近じゃ、トップレベルだとか」

「じゃあ、暫く近寄るのは止めておくか。死にたくねえし」
「同感だ」

「どうやら、温泉街付近で軽く物騒な事件が起こったらしい。ひなたは一瞬、ゾンビや吸血鬼の仕業なのでは、と考えたがそれは違う。ゾンビは相手を内側から破裂させる術なんて持っていないし、吸血鬼

だってそんな事はしない。どちらから見ても、人間は餌だ。それを食うのではなくたった一人を破裂させて遊ぶなんて真似はしない。やるのなら、村一つの規模でやる。

だから、ひなたが出る幕ではない。それに、今回は温泉に行つてシャーレイと二人でゆつくりするのが目的だ。態々命の危険に足を踏み入れるような真似なんてしない。

それに、温泉街でトツプクラスなら、全盛期のひなたよりも強い筈だ。ゾンビ程度になら遅れは取らないし吸血鬼ならもつと大きく話題になつている筈だ。ひなたが行くよりも犠牲者は少なくなるだろう。真祖ブラッドフォードならトツプクラスが束にならなければキツイだろうけども。

ゾンビや吸血鬼の事を考えるとどうにもイライラしてくる。ひなたはポーチから煙草を取り出して口に啣えた。結局、気持ちを落ち着けるのはこれに限る。携帯灰皿を手に持ちながら役所へと向かう。次は温泉街行きの馬車の予約だ。

煙草の先端を携帯灰皿の淵に軽く乗せて口で煙草を動かして灰を器用に灰皿の中に落とす。やはり外で煙草を吸うのはちよつと大変だ。けど、吸う本数が多くなつてしまつた以上、慣れるしかない。温泉街に行くときも、きつと携帯灰皿にはお世話になる。

歩いている内に一本吸い終わつてしまい、吸い殻を灰皿の中に入れて片手で蓋をする。そうしたら後は中で火は消える。

もう一本吸おうと思つたが、流石に役所の中で喫煙は何か言われるかもしれない、と取り出しかけた煙草を携帯灰皿と共にポーチに戻す。それと同時に吸血衝動と食人衝動が襲つてくるが、耐えられない程ではない。衝動を抑えながら数分歩き、件の役所へとようやく到達する。中に入り、他の場所には目もくれずさつきと予約に歩く。

「すみません、温泉街行きの馬車と宿の予約したいんですけど、ここで合ってますか？」

「あ、はい。合ってますよ」

受け付けは女性だった。やはり、こういう所の受け付けは男性よりも女性が多い。男は力仕事、女は接待。この世界はそんな感じで回つ

ている。勿論、その限りではないが。

「えっと、ご予約ですね。連絡の都合で予約は一週間先からになりますけど、大丈夫ですか？」

「はい。再来週に予約したいんですけど」

「再来週ですね。では、こちらの書類を書いてください」

と言って渡された紙は結構シンプルな物で、何日から何日までの予定か、予約人数は何人か、名前と歳、性別、連絡先等。必要最低限度の欄しかなかった。

ひなたはすぐその紙に必要な事項を書いていく。勿論、この世界の言語で、だ。

名前もちゃんとヒナタ・アカツキと書き、何回か見直ししてから書き漏れが無いのを確認し、紙を返した。

「えっと……アカツキ様とランフォード様の二名でよろしいですか？」

「はい」

「宿泊は二泊で、宿と馬車はこちらの方で決めさせて頂く、という事で大丈夫ですか？」

「お願いします」

「では、お煙草を吸うようですので喫煙可能な馬車を用意させていただきますね」

「あはは……臭いで分かっちゃったか……」

温泉街には宿が沢山あり、どれもがチェーン店のようになっているため、基本的にどの宿もサービスや部屋の質は同じだ。勿論、例外で高級宿もあるが、おまかせにしておけばそれは選ばれないし、普通な宿を取ってくれる。街一つが温泉宿を営んでいるような物だから出来るサービスとも言えるだろう。

ちなみに、馬車は火気厳禁の馬車もあるため、喫煙可能の馬車と禁煙の馬車が存在する。ひなたは先程まで煙草を吸っていたのが臭いで分かったらしく、受け付けの女性は気を利かせてくれた。

「では、代金のお支払いですが、今この場ですか当日、馬車に乗る際にするかが選べますが、どうしますか？」

「あ、もう払っちゃいます」

「分かりました。えっと、馬車代と宿泊費で……代金はこちらになります」

「おっ、結構安い」

呟いてからポーチを一つ外して中から財布を取りだす。片手で器用に中から金を抜き取って受け付けの女性に渡すと、女性は紙幣と硬貨の枚数を数えて代金ピッタリだという事を確認すると、それを売り上げを入れる袋に入れた。

「丁度、受け取りました。では、来週以降にこちらのプレートを持ってお越しく下さい。その時に詳しい説明を行いますね」

と、言われ差し出されたプレートを受け取る。木製のプレートなので、万が一にも割れないように煙草の入ったもう一つのポーチの中にそれを仕舞い、財布の入ったポーチを再び腰に着けた。

「じゃあ、親切にありがとうございます」

これで予約は終わった。後は……北の森へ、だ。

役所から出て北の森へ向かって歩いていく。その道中、シャーレイから聞いたシャロンの好物を買って行く。向かうのは、北の森の奥にある、シャロンの墓だ。

北の森を一旦抜けて暫く歩いていく。シャロンと戦った場所は一か月前の惨状がまだ少し残っていた。抉れた地面や砕けた岩やら何やらがああの時の戦いの激しさを物語っているようだった。ひなたが撒き散らかした血の跡やは完全に消えていたが、それでも血生臭さが残っているように感じ、吸血衝動が高まっていくような気がした。

それを感じながら煙草を啜えて無理矢理に吸血衝動を抑えに行く。しかし、それでも吸血衝動は完全に抑えられることは無かった。だが、無いよりはマシだと煙草の煙を肺の中に押し込んでいく。

衝動と戦いながらひなたは一人、シャロンの墓に辿り着く。シャロンの墓は誰にも荒らされた様子は無く、小奇麗に小さいままだった。そこに買ってきたシャロンの好物を……柔らかく美味しいパンと幾つかの甘い果物を袋ごと置く。

喜んでくれるかはさておき、この程度はしておくべきだろう。ひな

たが引導を渡した相手なのだから。せめて、こうして供養するのが義理とも言えるだろう。せめて、これから安らかに眠れるように。

「……シャロン。ボクは君の事をあまり知らないけど、こうして君の墓参りに来る程度の義理はあるよね」

線香なんて物はこの世界にはない。だから、煙の代わりに今啜えている煙草で勘弁してほしい。手を合わせ、シャロンの安らかな眠りを願う。

こんな小さくて立派でもない墓だけど、一人でゆっくりと寝てほしい。

煙草を携帯灰皿に落としてから新しい煙草を啜える。

「じゃあね、シャロン。その内シャーレイと一緒に来るよ」

一度墓石代わりの石を撫でてから、ひなたは墓に背を向けた。

さて、ここからは仕事の時間だ。煙草を啜えながらのんびりで行こう。

第二十魔弾

金稼ぎは一週間ほどほぼ毎日行い、かなりの金額を稼いだ。偶々この街の近くでの駆除依頼が害獣と魔獣含めて毎日舞い込んでいたため、毎日しっかりと依頼をこなして金を稼ぐ事ができた。

この結果にはひなたも満足気で、温泉に行く際の必需品等を買って予約も無事に全行程を終わらせて、温泉街へ向かうのは次の日にまでなつた。その日の夜は買い忘れている物は無いか、忘れ物は無いかをちゃんと何回も確認してから二人で床に就いた。

だが、シャーレイは明日が楽しみなのか眠れないらしく、ベッドの中でソワソワしていた。ひなたは最近働きっぱなしだったため、すぐに寝ようとしていたが、シャーレイのソワソワが気になって寝る事が出来なかった。

「……シャーレイ、いい加減寝ようよ」

「ご、ごめんね？ でも、寝れなくて……」

幾ら今まで野宿のような事も経験してきたひなたでも隣にいる人がソワソワしている状態では眠った事がないし、きつとこれからも慣れる事なんてない。

イライラはしないが、苦笑いした状態でシャーレイの頭を撫でて落ち着かせようとするが、シャーレイはそれでもソワソワが落ち着かない。余程楽しみなのだろう。初めての馬車と温泉が。確かに、ひなたもこの世界の温泉は入った事がないため、楽しみではあるが眠れない程ではない。歳のせいだろうか。

ひなたは眠れないため一旦起き上がり、ベッドから降りた。

「ひなたちゃん？」

「ちよつと煙草とお酒飲んでくる。吸血代わりにね」

酒は今までガツツリ飲んだことは無かったが、普通に飲めるしこの家の冷蔵庫にもひなた用の酒が置いてある。結構弱いため、アルコール度は低めの甘い果実酒だが、ちよつとでも酔えば寝やすくなるだろう。少なくとも、シャーレイがソワソワしていても気にならなく

はなるだろう。

煙草に関してはシャーレイから吸血しないためだ。今日吸血した結果、シャーレイが明日貧血状態になりました、なんて申し訳無さすぎる。だから、それを防ぐためにシャーレイからは吸血はせずに煙草で済ませる事にした。

「あ、じゃあ付き合う」

「いいよいいよ。おつまみもあるし、偶には一人で月見酒つてのも乙なものだから」

日本酒のような物は無いが、果実酒片手におつまみ食らって締めには煙草、という物もいい物だ。一瞬、これって駄目な大人っぽい？ と思ってしまったが、この程度なら十分に許されるだろう。

シャーレイを寝室に置いてひなたは台所へ向かって冷蔵庫の中から果実酒を取り出すとコップをその瓶の上に乗せて口におつまみ……ジャッキーを啜って居間へ向かい、煙草を取ってくるとソファに座ってコップに酒を注ぐ。窓から入ってくる月明りがその液体を照らし、幻想的に魅せてくれる。

それを少し口の中に流し込んで一息吐く。甘味の中に混ざる苦味が程よく美味しく、アルコールが喉を通る感覚が心地いい。そこに少し辛いジャッキーを食べ、口の中のジャッキーが無くなった所で再び酒を飲む。

「くあー……」

思わず、そんなマヌケな声が出てしまうが、今は一人だ。別に聞いている人はいないのだから声なんて大きくなければ無遠慮に出す。

そんな晩酌を暫く続けていると、徐々に顔が熱くなってくる。それがアルコールが回ってきたという自覚が徐々に迫ってくる。それに変な心地よさを覚えながら再び酒を口にする。あまり強くないのに酒は好きなため、すぐに限界が来てしまうが、それでも構わずに酒を飲む。

そしてまたコップに酒を注ごうとしたが、手が思うように動かず、そろそろアルコールが体に回ってきたな、と自覚する。これ以上飲むと明日に関わるかもしれない、とすぐに酒を飲むのを止め、煙草を口

に啜えて火を付ける。

「……こりゃ長生きしないかもね」

煙草に酒に戦闘に。そして可愛い女の子。勝ち組に思えるかもしれないが、早死にする原因は見事に揃ってしまったている。寿命も短くなってしまうっているかもしれない。

そんな事実にはケラケラ笑いながら煙草の煙を肺に送り込み、灰を灰皿に落とす。少なくとも男にモテるような女ではないが、元々男にモテる気なんて一切ない。性欲はあるがそれで男を求める様な精神はしていない。女は求めるけども。

このままシャーレイと両想いになればただそれだけ幸せな事かと考えてしまうが、シャーレイはひなたと同じように心の中は男だったりレズだったりはしない訳で、この想いは一方通行のままだという事は嫌にも分かる。

「はあ……辛いなあ……」

ひなたはシャーレイに依存している。シャーレイもひなたに依存している。が、二人の依存の仕方は少し違う。

ひなたはシャーレイという陽だまりに依存している。だけど、シャーレイが依存しているのは一緒に生きてくれる人。一緒に居てくれる人だ。

シャーレイからしたら、ひなたがこの場から去ったとしても、また新しく一緒に居てくれる人が出来たのなら、ひなたの事は忘れようと思っ生きていくに違いない。だが、ひなたはもうシャーレイが居ないと生きていけない。もう、孤独を味わいたくない。シャーレイという子がいないと生きていく意味すら見出す事も出来ない。

それに、ひなたはシャーレイが好きだ。恋愛対象として見てしまっている。

寝ているシャーレイにキスもしたいし吸血した時の、少し色っぽいシャーレイのマウントをそのまま取って性的に襲いたい。そんな思いを煙草と吸血で隠して一緒に生きていく。それがどうしようもなく辛い。

酒の勢いに任せて思いをそのままぶつけてしまいたいと思うが、そ

れでシャーレイが離れて行ってしまったら元も子も無い。そんなのは嫌だ。

そんなマイナスな事を考えると煙草を吸う気にもなれず、まだ半分程残っている煙草を真ん中から折ると灰皿に突きつけて火を消した。

「……シャーレイ、好きだ」

この一言すら、性別という壁が邪魔をする。

TSという性転換がひなたの本心を打ち明ける事を許さない。

これが元の男のままだったら。女ではなく男のまま抱いた感情だったなら、この想いを酒に任せて素直にぶちまけていた事だろう。だが、女という性別が男のままだったら出来た事を許してくれない。

「……そんな事考える柄じゃないだろ」

頭に手を当ててそんな思考をすぐに頭から排除する。酔った勢いで色々と考えてしまったら手遅れな事をしてしまうかもしれない。すぐに頭を振って何も考えないようにしてから窓から月を一回見ながらジャークーキーを口に全部突っ込んでから酒瓶とコップを回収してフラフラしながらもコップを軽く洗ってから飲みかけの酒を仕舞い、酔いにフラフラしながら寝室へと向かう。

ほんのり赤くなつた顔で寝室に入ると、シャーレイは布団を抱えた状態でひなたの寝る場所に背を向けて眠っていた。規則正しい寝息は寝室に入るとすぐに聞こえてきた。

何処となく香るシャーレイの匂いにドキツとしながらもひなたもシャーレイの隣に腰を下ろし、横になる。シャーレイの後姿は酔いのせいか色っぽく感じ、思わず片手で抱き着いた。少し腕を動かすと、柔らかい物が手に当たったりすると同時にシャーレイが小さく喘ぐ。それにどうしようもない愛らしさを感じながらも片方の手が無い事を悔やむ。

両手があれば、シャーレイを抱きしめる事が出来たのに。ぎゅつと力強く抱きしめる事が出来るのに。そんな気持ちを隠しながら片手だけでシャーレイを抱き寄せる。

「……シャーレイ、好きだよ。これからも、ずっと」

寝ているシャーレイに酔い故か本心を呟いてからひなたは瞳を閉

じた。

明日からの温泉旅行が、シャレーイにとって忘れられないいい日になりますようにと願いながら。

第二十一 魔弾

温泉街へと向かう朝は、結構手短に訪れた。ひなたが先に余裕をもつて目を覚まし、多少の眠気を覚えながら着替え、顔を洗って目を覚ましてから本来起きる時間にシャーレイを起こした。

「シャーレイ、朝だよ。起きて」

「むう……ううん……」

シャーレイは朝に弱い。それを見越して起きる時間はかなり早めにしていたが、それは正解だったようだ。シャーレイは上半身を起こして目を擦って何度も瞬きをしながらひなたの方を見ている。

何を考えているのかは分からないが……或いは何も考えていないのかもしれないが、それでも起き抜けの顔が可愛らしくて小さく笑ってしまう。何で笑われたのか分からないシャーレイは首を傾げていたが、目が完全に覚めていないシャーレイは理解できないままひなたは笑うのを止めた。

「ほら、今日は温泉街に行く日だよ。顔洗って、着替えよ」

「うん……」

優しくシャーレイに言うと、シャーレイはベッドから降りてその場で服を脱ぎ始めた。が、これは何時もの事なので気にせずひなたは部屋から出ていく。着替えに関してはこの部屋のタンスの中に全部仕舞ってあるから特に気にせずひなたもひなたで忘れ物が無いかの最終チェックに入る。

そして、完全に忘れ物が無いかを確認してからソファに座って煙草を啜えてライターで火を付ける。煙草に関しても事前にカートンで買って鞆の中にぶち込んであるから宿で煙草切れでシャーレイの血を吸う事はまず無いだろう。特に馬車の中で吸血をする訳にはいかない。誰か見ていたらひなたの色んな物が一気に終わる可能性がある。それに、ひなたがヘビースモーカーだという事を見れば自ら近寄ろうとする人間は少なくなるだろう。

シャーレイは美少女だ。そして、ひなたも見てくれは美少女だ。腕が無いが、一部の特殊な性癖を持った男性には魅力的な体をしてい

るっちゃやしている。そんな二人組に近寄ろうとする輩が出てこないとも限らない。その内の一人が物凄く柄が悪い上に煙草まで吸っていたら近寄ろうとする気も失せるだろう。ひなたは関わろうとはしない。面倒な事になりそうだから。

暫し煙を堪能していると、居間にシャーレイが入ってきた。余所行き用の可愛らしい服を着ている。

「あ、ひなたちゃん、またそんな可愛くない服着てる」

「いや、そう言われましても……」

言われ、自分の服を再確認する。確かに、何時も通りの戦闘用の服に身を包んでいるし、太腿にはホルスター、腰にはポーチ。誰がどう見ても可愛くないと思える服装に誰がどう見てもこれから戦闘に行きますと言わんばかりの服装だ。

だが、その何がいけないのか。何時もの事じゃないか。

「もう……偶にはスカートとか履いたら？」

「絶対嫌。あんな防御力皆無のヒラヒラ」

流石に知らない男とかに下着を見られても恥ずかしくないとはいえない程度の羞恥心は持っているからこそ、スカートは嫌だ。何であんな寒そうだし下着まで見られる布切れを履くのがひなたには分からない。

それに、戦闘の邪魔になる。ズボンの方が変にフワフワしないから気にしなくてもいいし、下着を見られる心配もない。長袖は邪魔じゃないのか、と言われると邪魔でしかないが、これは戦闘用に耐えられるようにデザインされた服だし、何よりも見た目以上に動きやすい。

話は逸れたが、そういった理由に加えて元男という抵抗があるため、スカートだけは絶対に履きたく無かった。素材は良いと自負はしているから似合うのだろうけども、絶対に嫌だ。

「ひなたちゃん、可愛いから絶対に似合うのに」

「ボーイッシュで十分ですよ」

スパー、と煙を吐いて大分短くなったのに気が付いて灰皿に煙草を押し付ける。

この後は朝食を食べてから馬車の停留所へと向かい、馬車に乗って

一日ちよつとの移動を経て温泉街へ。日本なら車で数時間程度の距離を馬車を使って日単位で向かう。こうして異世界に來ると日本の移動方法がどれだけ凄かったかが分かる。これも魔法が無い故に科学力に偏った結果だろうか。

「まあ、趣味趣向は人それぞれで事で」

と言いながら二本目の煙草を啜えて火を付ける。そして煙を吸って息を吐く。

が、その時後ろに何時の間にか回り込んでいたシャーレイがひなたの煙草を奪い取る。油断していたひなたは抵抗できずに煙草を持つていかれた。

「あっ!？」

「もうちよつとお洒落とかにも興味持ったら？ 煙草に首つたけになるんじゃないかって」

と言いながらシャーレイがひなたに反論させる間もなく煙草を啜えて息を思いつきり吸った。

その結果、喉に送り込まれる熱い煙によってむせてしまい、シャーレイは苦しそうに煙を無理矢理吐き出した。

「えほっ、えほ……な、なにこれえ……」

「そりや最初だしそうなるよ……」

「うう……胸の奥に何か詰まってる感じがするう……」

シャーレイの人差し指と中指に挟まれている煙草を奪い取って啜えてからシャーレイの背中を擦る。

ひなたも最初はこうだったが、何日も吸っている内に慣れていった。それなのにシャーレイがすぐに吸えるようになるわけがない。そもそもシャーレイはまだ十四歳だから法律的にも吸っちゃいけない。

「それに、これ初心者向けでも何でもないし」

ひなたが吸っているのは結構重い煙草だ。将来は肺がボロボロになるんだろうなあ、と恐怖しながら吸っているが、吸わなければやっていけないからついつい吸ってしまう。

「……知ってるんだよ。ひなたちゃん、最近煙草の銘柄を頻繁に変え

「てるでしょ」

「うっ……そ、それが？」

「聞いてみたら、今吸ってるやつ、初めて会った時に吸ってたやつよりも体に悪いやつなんでしょ」

「は、ははは……知らないなあ……」

「言えない。最近昔吸っていた銘柄では物足りなくなってきたしまったから色々な銘柄を試しているとは。その結果行き着いたこの煙草は最初に吸っていたやつよりも遥かに重い物だという事は。」

最近、趣味の欄に煙草と迷いなく書けそうになっている事は。

「……ヘビースモーカー」

「否定できません……」

ジト目で言われても反論が出来ない。

その情熱をお洒落に使ったらどうだ、というシャーレイの言外の圧力に屈して目を逸らして煙を吹かす。煙草を啜えたまま口から煙を吐いた結果、視界が煙で染まる。

「もう……健康に悪いんだよ？ 吸血なんて気にせずしてくれればいいのに」

「い、いやー……こう見えてボクも良識とかはありましたね？ 流石に毎日毎時吸血してたらシャーレイの負担がヤバいなあって……」

「いつつちロチロチロ飲むくせに」

「そ、そうでもないけど……」

「最初の時よりも遥かに飲む量少なくして煙草で紛らわせてるくせに」

「な、何のことかなあ……」

「私がオ……ね、眠れずにモゾモゾしている時にいつつも吸血し足りないから煙草で紛らわせてるの知ってるからね？」

バレてる。実は本当に少ししか飲まずに後は煙草で我慢しているのがバレている。

毎日吸っているから、という事で少ししか飲まなくなった結果、吸血し足りずにいた結果、煙草を吸う量が増えた事がバレてる。

シャーレイがゴソゴソしていた時に吸っていたが、シャーレイが見

ていなかっただめさつきと吸っていたが、それでもバレていたらしい。しかも、その理由まで。確かに血を吸われた方が吸われる量が少なくなっている事は分かるのはよく考えれば明白だった。

「……それでも、貧血寸前で止めてたら体にも悪いだろうし。この間だってガッツリ吸血したら貧血になりかけてたし」

「だとしても。少しは我慢しようよ。長生き出来ないよ?」

「そう言われると何も言い返せない……」

だが、少しは喫煙量を控えないと本当に早死にしてしまうかもしれない。回復魔法で肺をどうにか出来るのでは、と思われるかもしれないが、この世界の回復魔法はそこまで便利ではない。自然治癒能力を極限まで高めて傷をその間魔力で作り上げた脆くもしつかりと役割を果たす代わりの器官や肌で死なないように延命させる、という代物だ。だから、再生させながら煙草を吸ってもどうにもならない。ただの魔力の無駄に過ぎない。

そのせいで回復魔法を使った状態で動き回ると傷が開くし腹に穴が空いた状態で魔法を使ってる状態で腹パンされたら軽く穴が空く。

流星に早死にはしたくないし煙草を吸ってばかりだと少し運動しただけで息が荒くなりそうだし、少しは控えた方がいいだろう。

「少しは控えようとしてよね?」

「頑張ります……」

なお、出来るとは言っていない。

「じゃあ、朝ご飯作ってくるから。トーストとベーコンエッグでいい?」

「うん、大丈夫。ありがとう」

もうシャーレイがひなたのお母さんとか嫁さんみたいになってしまっている。ひなた的には嫁さんになってほしいのだが。

流星にこの外見でシャーレイが好きと言ったらガチレズと思われるて引かれるかもしれないから言わない。もし受け入れられたら嬉しい事には嬉しいが。

「……精神的には普通なのに外見的には異常ってキツいなあ」

この世界に来たばかりの頃はそんなに気にならなかった。むしろ、

そんな事を考える前にとつと元の世界に帰る手段を見つけようと思っていた。それに、恋愛感情なんてそう簡単に抱くとも思わなかった。

だが、こうして恋愛感情を抱くとこれがどれだけキツイ物かが分かる。思わず強めに煙草を灰皿に押し付けてしまう。

「片思いの同性愛者ってこんなに辛いのかあ……今までニュースとかでは軽く受け流していたけど、結構辛いのか……」

流石にこうして当事者になると溜め息が出てしまう。思わず口にも出てしまう。

体だけの関係なら押し切れればどうにでもなる。だが、心まではどうしようもない。

「……シャーレイと恋人関係、かあ」

想像してしまう。何時もは余り変わらないが、夜は一緒の布団でキスしたり裸でくんずほずれず……

「……やっべ、ムラムラしてきた」

想像したらムラムラしてきた。この世界に来てからこの方、下の事……つまりはナニをナニしたらもう男として終わるかもと思っってしまったがためにしていない。それに、村が壊滅してからそういった事を全く考えずに復讐のためだけに生きてきたため、そんな事をする暇があつたら自分の安全確保とかに費やしていた。そして忘れようとしていた。

だが、こうして平和に身を置いたがためにそういう事を考えてしまう。今までは吸血で場を凌いでいたが、どうしても欲求不満感は考えってしまうと沸いてきてしまう。

男の時のようにやらないと死ぬかもしれないレベルではないが、それでも一年近くご無沙汰なのだからどうしてもムラムラしてしまう。

「……温泉、一緒のお湯に入って我慢出来るかなあ……多分、バレはしないだろうけども」

男の時のように股間にナニが無いからバレる事はきつと無いのかもしれない。

だが、もしかしたらシャーレイの裸体に我慢できずに押し倒してし

まうかも……

白くて傷の無い肌と歳相応とは少し言えない胸と――

「……ボクあ欲求不満じゃない!!」

考えて壁に頭を打ち付ける。何度か見てしまっているから想像が容易になつてしまっているのも何だかなあ、と思つてしまう。

軽く荒れた息を収めながら気持ちいを落ち着ける。

「……ひ、ひなたちゃん？ 何か凄い音が聞こえたけど」

「な、何でもない……何でもないんだ……」

心配して見に来たシャーレイに何でもないと何度も言つて追い払う。

この温泉旅行は体は休まるかもしれないが、心は休まらないかもしれない。荒れた息を収めながらひなたはそんな事を思っていた。

第二十二魔弾

煩惱退散と頭を打ち続けたひなただったが、結局数時間後になんとか頭の中の煩惱を退散させて額を赤くしたままシャーレイの作った朝食を口に運んだ。その日の朝食も美味しかったが、直前まであんな事を考えてしまっていたからか、余計にシャーレイの事を意識してしまっていた。

そのせいか胸や下半身に目線が集中してしまっていた気がする。女同士だからそこまで気にはされていないかもしれないが、それでも多少不審だったかもしれない。挙動不審の領域にまでなっていたかもしれない。

こんな状態で馬車には乗りたくなかったが、それに関してはどうしようもない。気持ちを切り替えなければ。

もう一回、最後に忘れ物が無いかを確認してからひなたはローブを纏って二人揃って家を出る。シャーレイはウキウキランランと言った感じで時々スキップをしている。ひなたはその際に服の内側で揺れているであろう双丘を思い浮かべるとちよつと視線が吸い寄せられたり顔が赤くなったりしていたかもしれない。

そんな感じで二人別々の事を考えながら馬車の停留所へと向かった。

馬車の停留所はそれなりに人が居て、そこにそれなりの数の馬車が置かれていた。そして、客を乗せるための馬車は看板のような物が置いてあり、そこに予約した人の名前が書かれていた。勿論、少し探せばひなたとシャーレイの名がある看板を見つける事が出来た。シャーレイを先導してその馬車へと向かう。

「すみません、予約していた暁ですけど」

「ん？ ああ、アカツキさんとランフォードさんかい？　じゃあ、プレート貰えるかな」

「どうぞ」

プレート、と言うのはこの間予約した際に受け取った物に似ている。あれから一週間後にもう一度あの場に行った際に受け取った馬

車に乗る際の引換券のような物だ。

木製で出来たそれを馬車の御者らしい男性に渡すとそれを確認し、すぐにひなたとシャーレイの名がある看板を撤去した。

「じゃあ、お二人さんはこの馬車に乗ってくれ。今日の客はお二人さんだけだから、準備ができ次第出発だ」

馬車は雨風も凌げるようなタイプで、後方から乗り込むタイプだった。簡単に言えば、日本の国民的ゲームの竜の名前が使われているヤツに出てくるようなタイプだった。

「え？ ボク達だけなんですか？」

「そうなんだよ。ほら、最近よく温泉街近くで変死体が見つかるだろ？ そのせいで客が居なくなっちゃってな」

何時もは二組位は来る筈なんだがなあ、と男性は呟いていた。

確かに、ひなたも変死体が見つかったのは二週間前に聞いたが、最近よく、と言ったという事は、その変死体の発見情報は後を絶つていない、という事だろう。中々嫌な時期に予約してしまった物だ。

だが、そんな事件に巻き込まれるのなんてまず無いだろう。ひなたはそうなんですか、大変ですね。とありきたりな言葉を言った後にシャーレイを連れて馬車に乗り込んだ。馬車の中はちよつと木箱やらが乗っているだけで他には何も乗っておらず、二人なら寝転がれるレベルだった。その馬車の中に鞆を乗せて持ち込んでおいたクツシオンを座る予定の場所に敷いてから外で色々と準備している御者に声をかけた。

「こっちは大丈夫です」

「あいよー。じゃあ、すぐに出発するから中で待つてくれ」

馬車は一つだけ。御者の男性とひなた、シャーレイの三人旅だ。

護衛は無いのか、と聞かれると無い、と答えられる。山賊のような人間はまずいない。基本的に人は街の中、もしくはスラムに住んで生きているため、街の外で盗みをして生きている人間なんてまずいない。もしも居たとしてもすぐにバレるため、即座に討伐され檻の中に入るか魔獣と害獣に食われて終わりだ。

そんな、害獣と魔獣に関して心配はいらない。馬車には馬車一つ

と少しのスペースを包み込む小型の結界発生装置が積んであるため、襲われない。この小型結界発生装置は役所等で登録された人が結構面倒な手順を踏んで一日だけ作動できるというかなり面倒な仕様になっていて、事も山賊が居なくなった要因になっている。登録された人間に関しても一か月毎に一回は更新しに行かないといけない他、働きの上司の証明書等、様々な面倒な手順が必要なため家と働きの金がない人間がこれを更新する事は出来ない。ひなたが家一つ買える金があったのに馬車を買わなかった理由もこれだ。

そんな訳で護衛はいらぬ。馬車の護衛は基本的に小型結界発生装置を持たない個人で馬車を持っている人間の依頼だ。企業の馬車には基本的に護衛がつかない。

「ち、ちよつとドキドキするね」

「そうかな？ ボクは一日以上この馬車で揺れるのが若干不満なんだけど」

車じゃないのだから趣味に合わせた音楽も流せなければ暇つぶしの道具もない。本当に一日以上この馬車で寝ているかボーっとしているか。馬車の移動には二択しかない。スケジュールに関しては頭に叩き込んであるが、何時間かに一度、馬の交代と御者の交代があるだけ。夜中も動いてくれるのはありがたいが、馬車の揺れ次第では中々寝付けない可能性がある。ちなみに、食事に関しては持ち込みで馬車の中で済ませる事になる。

「何が不満なの？」

「暇。あと、お尻が痛くなりそう」

「寝てればすぐだと思っけど……」

「今寝たら夜中寝れなくなるし、どっちにしる暇だよ」

「あ、そっか……でも、お話してればそうでも無いと思うよ？」

「そうかもしれないけど……まあ、時間は適当に消費しようか」

と、言いながら煙草を取り出して火を付ける。この馬車は喫煙可能との事なので煙草を吸うのに遠慮はしない。ちよつとシャレーイが膨れっ面になった気がするが、なるべく視界に入れないようにして煙を吐く。

馬車の中が軽く煙で満たされた所で御者の男が顔を見せた。

「じゃあ、今から出発するが、本当に準備はいいな？」

「ああ、はい。お願いします」

「あいよ。後、嬢ちゃん。未成年なのに大っぴらに煙草は吸うモンじゃないぞ？」

「これでも成人してるんですが」

「……マジ？」

「えらくマジ」

やはり、歳相応には見られないらしい。主に胸と身長のせいで。思わず人差し指と中指で挟んだ煙草を潰しかけてしまうが、シャーレイが何とか落ち着けてくれた。

困った笑顔を見せた男は何時の間にかそつとフェードアウトしていった。そして、御者台に御者の男が乗った後、すぐに客と御者を仕切るカーテンのような物が敷かれた。そして、暫く経ってからすぐに馬車は振動と共に動き出した。

「わわ、動いた」

「……結構揺れるね」

車と比べれば、だが。

馬車は思った以上に振動が少なかったが、それでも車等の近代的な乗り物に比べると十分に揺れる方だった。クツションが無いと確実に尻を痛めていただろう。外から聞こえる車輪が回る音と小さな蹄の音を聞きながらひなたは煙草を吸う。

が、しかし、途中で一回大きく揺れ、灰が落ちてひなたの足に落ちた。しかも、運が悪い事に生足に。

「あつつあ!!？」

「だ、大丈夫!？」

パニックになりながらもすぐに灰を払って回復魔法の魔弾を押し付けて割った。

その結果、すぐに回復魔法を使ったことで跡にはならなかったが、それでも結構熱かった。熱いを通り越して最早痛かった。激痛だった。全身を焼かれた事もあったがそれはそれ、これはこれで普通に熱

かった。

「……畜生」

「火傷跡にならなくてよかった」

「……ローブ敷いて吸わなきゃ」

ひなたにとつてはちよつと散々な目に合いそうな温泉旅行だった。

ひなたが苦楽を共にしてきたローブは頑丈であり、煙草の灰が落ちても少し跡が付くだけで、ひなたの柔肌に傷を付ける事は無かった。これによつてひなたは安全な喫煙を確保する事が出来た。

そして、シャーレイに関して最初ははしゃいでいたが、三十分も経てば飽きたのか大人しくなり、一時間もすると暇で眠くなったのかひなたの元左肩、現断面に体重をかけて眠りについていた。最初はどぎまぎしたが、それに関しても三十分程で慣れてひなたは持ち込んでいた読みかけの本を読みふけていた。BGMは馬車の動く音と蹄の音、それから風の音のエンドレスリピートだ。

だが、本を読むのならそれ位が心地いい。左側からかかる重みを感じながら穏やかな気持ちで本を読む。が、それも一時間近く経つとそれに疲れて一旦本を閉じた。ひなたの読書はこの世界の文字を一旦日本語に直してから理解しているため、スラスラと読むことが出来ない。そんな読み方をしているせいで一回の読書にかなりの疲労が伴ってしまう。

「はふう……疲れた……」

一人眩き、首を回すとコキコキツ、と小さくも心地いい音が鳴る。それに若干の爽快感と心地よさを覚えながら改めて左側にいるシャーレイに視線を投げる。

ひなたよりも背が大きいからか、肩に頭を乗せるのではなく、全体的にひなた側に体を寄せているだけになっているが、ひなたからシャーレイの様子は見て取れた。結構揺れるのに気持ちよく寝ている。規則正しい寝息と可愛らしい表情に思わず胸が高鳴る。そして、

視線はゆつくりとシャーレイの唇へと移動していた。

「……」

思わず見惚れてしまう。惚れた相手だからだろうか。どうしても下心のままに視線が向いてしまう気がする。この唇に口づけをしたらどんな感触なのだろうか、とかシャーレイの胸はどんな揉み心地なんでしょうか、とかこのまま押し倒してシャーレイが寝ている間に事を済ませたらバレないんじゃないか、とか。

そんな煩惱を何とか打ち払い、シャーレイの胸を触りたいのは自分に無い物を触りたいだけだ、と自分に言い聞かせて長く息を煩惱と共に吐いて何とか気持ちを切り替えようとするが、やはり視線と思考はシャーレイの方へと向いてしまう。

「……シャーレイ、可愛いなあ」

眩き、ジツと見つめてしまう。

このままキスをしてしまえば。せめて、キスだけでもできれば。

唇に唇を合わせるだけでも、と思ってしまう。が、もしもその最中に起きてしまったら、突き離されてしまうのでは、と悪い想像が働くとそれが行動へのストッパーとなる。

だが、してみたい。一回だけでも、少しだけでも、キスだけでもしてみたい。そんな願望と欲望が入り乱れて混ざり合った願いがひなたの理性を打ち砕いていく。

一か月以上、同じ屋根の下、同じベッドの上で生きてきた片思いの子。彼女にはひなたの恋心はきつとわかっていない。だが、分かっているから辛いというのもあるし分かっているから安心できるといふのがある。もし、キスしたのがバレれば確実にひなたの思いはバレるだろう。そうしたらどうなるかは分からない。受け入れられるか、突き離されるか。どちらか二択だろう。

それでも、見ている我慢は出来ない。こんな無防備な姿を晒されると、ひなたの中の男が据え膳食わぬ云々と言ってくる。

「……ごめんね、我慢、出来ないや」

そんな思いとシャーレイの無防備な姿が理性を壊す。理性のダムに穴を空けて水を、欲望を少しだけ漏らす。

シャーレイの体がそのまま倒れないように右手で支えながら、シャーレイの前に陣取る。そして、顔を向き合わせる。

駄目だ、我慢できない。もうここまで来たら後戻りは出来ない。そんな思いに突き動かされ、ゆっくりとシャーレイに顔を近づけていく。近づくと共に徐々に心音が大きくなっていく。心臓が大きく跳ねる。緊張と焦りとその他諸々が混ざり合って複雑な思いを胸中に生み出しながらも、ひなたの顔はしっかりとシャーレイへと向かっていく。

それが何秒か経った時。我慢できないと欲望に従ってから数秒経った時。ひなたの唇に柔らかい物が触れた。

「ん……」

キスした。してしまった。

そんな達成感と罪悪感とが混ざり合ったような気持ちを抱きながらも唇を離そうとはしない。卑怯な真似だろうけど、こうしてキス一つ出来て、ひなたの心は満たされている。

小鳥が優しく啄むようなキス。ディープな物ではなく、唇を合わせるだけのキスだが、そんなキス一つで心が満たされていく。息の続く限り唇を合わせ、その心地よさをただ噛みしめる。惚れた女の子との生涯初めてのキス。それが心地よくて気持ちよくて、だけどちよつと申し訳なくて。

「ちゅ……ん……」

ただ、それ以上に嬉しくて。どうしようもなく嬉しくて。罪悪感よりも興奮と幸福感が勝り、もう自分でも止められない。理性の壁は中々直る事は無かった。

結局、止め時も分からなければ細かいやり方も分からずに、息の吸い方も分からず体が酸素を求めた所で唇を離れた。

「はぁ……はぁ……シャーレイ、ごめんね……」

息を荒くしながらもシャーレイに謝る。だけど、もう一回、もう一回だけ、とひなたはシャーレイとの距離をゼロにした。

ファーストキスとセカンドキスの味は、覚えていないけども満足感と幸福感と罪悪感が混ざり合ったような物だったと覚えている。

第二十三魔弾

あの寝込みを襲うキスから十数分経った時。馬車は今までよりも大きく揺れてシャーレイの体が大きく揺れた。それがシャーレイを夢の世界から引き戻す決定打のような物になり、シャーレイは目を覚ました。口の中が若干変な味だったが、それもすぐに忘れて少し煙草臭い馬車の中でシャーレイは起きてすぐにひなたを探した。

その結果、ひなたはすぐに見つかった。ひなたにもたれかかって寝ていたのだから肩の感触ですぐに分かった。が、シャーレイはひなたの様子を見て目を白黒させていた。

「……あ、ああ、シャーレイ、目が覚めたんだね」

ひなたは何かに怯えるように震えていた。その理由が何なのかは分からないが、それ以上にひなたの様子が可笑しいと決めつけられる要素が一つあった。

ひなたの啞えた煙草。それが異常をシャーレイに突きつけていた。

「……ひ、ひなたちゃん？ 何で二本同時に吸ってるの？」

「な、何でもないから……我慢だから、我慢……」

ひなたは、二本の煙草を同時に吸っていた。そのせいで何時もより余計に煙が立ち上っている。というか、口の両端に一本ずつ啞えている物だからもう何かの芸をやっているのかといっそ疑ってしまうレベルだ。ひなたはシャーレイの顔を見ないようにして煙草を一本ずつ持って灰を携帯灰皿に落としているが、件の携帯灰皿には灰と吸い殻がもう酷い位に盛られていた。馬車の設置してある灰皿にも灰と吸い殻が盛られている。

もう誰がどう見ても異常だし挙動不審だった。シャーレイの思考回路が寝起きと目の前の惨状のダブルパンチで完全にフリーズする位にはひなたの様子は可笑しかった。というか煙草二本吸いにドン引きだった。

ひなたはそれに気づかず短くなった二本の煙草を携帯灰皿に落とすと今度は三本も煙草を取り出して啞えた。ガタガタと震えながら、それを見て何をしようとしているか理解した瞬間、シャーレイは言葉

を発する前に煙草を二本回収していた。

「だ、駄目だよ！ 何考えてるの!?!」

本当に何を考えているのか分からない。文字通り意味不明だ。

「は、はは……何考えてるの、か……本当に何考えてるんだろうね……」

ひなたはよく分からない事を口走ると、再び箱から煙草を取り出した。が、それもシャーレイが箱ごと煙草を回収する事によって三本吸いとか四本吸いは回避出来た。

「ほんつとうに何してるの!?! 流石に意味不明過ぎてビックリだよ!!」

「ぎ、罪悪感に押しつぶされそうで……」

「何の!?!」

「ナニのだよ!!」

「だから何の!?!」

ひなたがいつも以上に情緒不安定過ぎる。というか、ライターを握る手が若干震えている。

もう何が何なのか分からないが、取り敢えずひなたにこのまま好き勝手させておくとロクな眼にならないのは分かる。すぐに理由を問いただしてこの奇行を止めさせなければならぬ。

「ひなたちゃん、本当に何があつたの?」

「……いい、言えない。こればかりは」

まさか寝込みを襲ってキスしました、なんて言ったら軽蔑されるに決まっている。だから、こればかりは頼まれても懇願されても言えない。告白されたら言える。

煙草の煙に任せて現実逃避していたが、それでも限界は来てしまう。だが、どうしてもこればかりは言えない。けれども、こんな自分でも分かる位に挙動不審になつていたらシャーレイが感づいてしまうかもしれない。だから、ここは一旦冷静になればいい。

息を吐いて落着き、何とか平静を装う。まだバレたら色んな物が終わるといふ恐怖とかシャーレイへの罪悪感やらが押し寄せてきて手が震える。

「て、手がふるえるう……」

「ほ、本当に何が……ま、まさか、煙草の中毒に!」

「大丈夫、それはないから」

そんな中毒になるまで吸った覚えは……無い事はないが、それでも煙草が無ければ落ち着かないとかではない。

「まあ、錯乱しちゃったのは本当にごめん。本当に何でもないから」
そうだ。バレなければいいんだ。ひなたが口を滑らせなければ絶対にバレることは無い。それに、御者もずっと前を見ているからひなたの犯した過ちを見てもいなければ気づいてもいない。だから、真実を知るのはひなただけだ。

だが、新しくライターで煙草に火を付けた瞬間、手が横から伸びてきて煙草を引ったくった。あつ、と声を出したが気を緩めていたひなたは煙草を死守する事は出来なかった。

「あんなに吸ってるんだからもう禁止!」

と言つてそのままシャーレイは煙草を口で啣えた。そして盛大に咽た。学ばない子だ。

「げっほえっほ!」

「あーもう。これ一本だけにしておくから返して。流星に吸い過ぎなのは分かってるし」

「う、うん……」

シャーレイから煙草を返してもらつて煙草を口に啣え、一息つく。

そして、気が付いた。これ、間接キスなんじやと。

そう思つた瞬間、顔に熱がこもってくるのが分かつてしまい、恥ずかしさから顔を背けてしまった。そして、シャーレイはそんなひなたを見て小首を傾げ、ふと考えた。

(あれ、さっきの煙草の味、起きた時に残ってた味と同じなような……)

そんな事を考えていたが、そんな思考はひなたの吹かす煙草の煙を見ていると煙のように儂く消えていった。

既に時刻は夕方。夕焼けに染まった外を二人で眺め、ゆっくりと流れていく景色と雲を暇つぶしがてらに眺める。二人、既に話せる事は話し切ってしまう、もう暇をつぶすためには空を眺めるしかなかった。

何をしようにも何もする事が思い浮かばず、二人で並んで外を眺めているだけだった。こんな時間を後数時間は潰さなければならぬ。まだまだ温泉街は遠い。まだ街を出てから十二時間も経っていないのだから、半分もまだ来ていないのだろう。既に何回か馬と御者の交代を済ませており、次の交代は後一、二時間は先だ。

「……平和、だね」

「……うん」

何かのフラグになるかもしれないが、それでもその平和はなんとなくだが口にして噛みしめたくなってきた。

こうして平和を噛みしめる事なんて二十年の生涯の中、無かった。日本なんていう平和ボケした国で生きた時は平和なんて当たり前だと思っていた。だが、この世界に来てからその平和がこの世界では一般的ではないと思ひ知らされて、真つ黒な感情に支配されて一人復讐のためだと生きてきて。だけど、シャーレイと出会って全てが変わって。

この世界で、自分の手で勝ち取った平和なのだからそれを噛みしめても罰は受けないだろう。これから復讐を目指すのかは分からないが、それでも今はシャーレイと共にこうして平和な日常を過ごすのが第一優先だ。この陽だまりを離さないために。

「この間の事、嘘みたいだね」

「うん……あんな事があったのに、こうして馬車に乗ってるなんて、夢みたい」

「……そうだね」

シャーレイにとっても、今まで生きてきたスラムで、一緒に生きてきた家族同様の少女を理不尽に殺されて……だけど、偶々通りがかったひなたに拾われて、こうして一緒に生きるようになって。

本当なら、あの男達に殺されて、ゾンビにされる所だった。ひなたが気まぐれを起こさなければ男たちの性奴隷にされていても全くおかしくなかった。なのに、そんな可能性を全て跳ね除けて、こうしてすれ違っただけの関係から始まった共依存の関係は平和に維持できている。

それが、夢みたいで。こうして一緒に旅行に行っている事が夢みたいで。

「……夕暮れ、綺麗だね」

「……うん、凄く綺麗」

言う事が無くて二人でまた黙って外を見る。

そうして数分間待っていると、ふと眠気が襲って来て欠伸が漏れてしまう。その欠伸が移ったのか、シャーレイも小さく欠伸をした。そんな欠伸の伝染が少しおかしくて二人で顔を合わせて笑ってしまう。

「あはは、ちよつと眠いね」

「ふふ、うん。ちよつとだけ」

だけど、眠気がやってきたのは事実。寝ようか、と提案するとうんと答える声があった。

二人はクッションを枕代わりにして馬車の中で隣り合って寝転がった。が、ひなたは寝れなかった。何故なら、馬車の振動で体が揺れたり変に体が動いたり衝撃でやってきた眠気が何処かへ行ってしまう。

「……馬車の振動で眠れない」

「……………」

「……シャーレイ？」

「……………」

「うっそーん」

なのにシャーレイは寝ていた。

スラムで生きてきたから多少環境が悪くてもぐつすり眠る術を得たのだろう。ひなたも野宿は経験した事はあるが、流石に揺れる場所で寝た事はない。というか、野宿すら結構眠るのが辛かったのに馬車で眠るのにすぐに適応して寝るなんて出来ない。

「……しゃーれーい。ひまだよー。おきてー」

「くう……くう……」

「うっそやろ……」

しかも起きない。この子、朝は普通に起こせば起きるのに一度寝たら暫く起きないなんて知らなかった。

「……いいもん。ボクだけ座って寝るから」

結局、ひなたが寝るまでに約一時間の時間を要した。

第二十四魔弾

ひなたが目を覚ますと、外はまだ暗く、しかし少し明るくなっていく事から明け方前。完全に夜が明ける一時間前位だと把握できた。だが、夕方からこの時間まで寝たという事は十時間以上寝ていたという事になる。予想以上に寝ていた事にビックリしながらも、馬車に乗っているのが予想以上に疲れたのだろうと自己完結して目を擦りながら眠気を覚ます。

シャーレイは既に起きていたのか、ジーツと外を見ていた。どうやら、明け方の空が珍しいらしい。ひなたにとってはそこまで珍しい物でもないが、きつと普通の生活リズムで生きてきたシャーレイにとってはそこまで見た事のない光景なのだろう。馬車の中で揺れる電気式のランタンの明かりを直視し、小さく唸りながらも眠気が殆ど飛んだのを自覚しながら声を出す。

「……おはよう、シャーレイ」

「あ、おはよう、ひなたちゃん」

ひなたの言葉にシャーレイはすぐに気が付き、視線を空からこちらに向ける。シャーレイがこうしてハキハキと言葉を喋っているという事は起きてからそれなりに時間が経っているのだろう。もしかしたら、ひなたが起きるよりも一時間前位には起きていたかもしれない。

だが、それは余り気にならない事だ。馬車の後部からひなたの横まで移動してきたシャーレイをそのまま迎え入れて無言で馬車に揺られる。

「……起きたはいいけど暇だね」

「そうだね……」

ゲームとかがあればもう少し楽しくこの時間を過ごせたのかもしれないが、暇つぶしの道具を本だけにしておいたのは本当に失敗だった。しかも、一冊だけ。

この世界にないSF小説等があればシャーレイも少しは新鮮味を感じて楽しめたかもしれないが、生憎、ひなたは色んな街を回った物

のそれを見つける事は敵わず、シャーレイに今まで買った本を勧めたこともあったが、やはり子供だからか、文だけの小説には少し抵抗があるようだった。

「お腹空かない？」

「……そういえば、お昼食べてから食べてなかったっけ？」

「うん。夜は寝て過ごしちゃったし」

聞かれて答えると、腹の虫が鳴きそうになる。おやつは時々食べていたが、夕食を食わぬままに寝てしまったがため、腹が減った。シャーレイが鞆の中から食事を取り出して渡してくれたのでそれを受け取る。が、それはひなたが買っておいした保存食のような物とパンではなく、買った覚えのないパンだった。

「……どしたの、これ」

こんなの買った覚えないんだけど、と言うとシャーレイは首を傾げる。

「途中で街に寄ったからその時に買ったよ？ ひなたちゃんに何か買ってくる？ って聞いたらうんって言ったから一応買ってきたんだけど」

「……ボク、その時寝惚けてたかも。ううん、寝惚けてた。確実に」

そういえば、夜に街に寄って御者と馬の交代をする時間があつたよ
うな気がする。恐らく、ひなたはその時一回起きて揺れない床に満足して再び寝たのだろう。そんな記憶が湧いてくる。

と、なるとシャーレイは夜中からこの時間まで起きていた事になる。もう生活リズムが崩れまくっている。

「何食べる？」

と言いながら既にシャーレイは焼きそばパンに齧り付いている。既に自分の食べたい物は決めていたようだ。

「マフィンをお願い」

「ふぁーい」

パンを啜えながら包装で包まれたマフィンを渡してもらう。頬が膨らんでいるシャーレイの顔に少し笑いながら包装を手と歯を使って器用に剥がしていく。

包装の中からはバターを付けて焼かれたマフィンが二つ出てきた。冷めているが、十分に美味しそうだ。それに齧り付きバターとマフィンの味を楽しむ。

「包み紙、私が剥がした方がよかった？」

「ん？ 別に大丈夫だよ。片手でやるのも慣れたし」

片手になって数か月も経てば基本的な事は全部片手でやれるようになった。だから、包装程度は苦も無く剥がせる。

焼きそばパンをもふもふと頬張るシャーレイを横目で見ながらひなたは鞆から水筒を取ってきて蓋を開ける。

「なんかパン食べてると口の中の水分取られるよね」

「だねえ」

そう言つて水筒を口につける。そして口の中に入ってくる水を喉に流し込み――

「あぶねえ!!!」

「ぶふえ」

「ひなたちゃん!?!」

御者の声が響いて急に馬車が止まり、その衝撃で水筒の中の水が半分程ひなたの顔にかかった。

「……外、出てみようか」

「う、うん……一応、髪の毛結んであげるね。ゴム探すから先に行つて」

「お願い……」

一気にテンションが下がった。変な声出たし。

外に出て何で馬車が急停止したのかランタンを片手に聞きに行くと、御者は馬車から既に降りており、馬車の進行先には何かが倒れていた。

「すみません、何かあつたんですか？」

「あ、ああ。すまんな、お客さん。この子が急に飛び出して来て倒れちまつてよ……」

「この子？ それを疑問に思い、御者の男の視線の先を見ると、そこには小さな子供が倒れていた。そう、子供だ。」

「……子供？　こんな時間に、こんな場所で？」

「ああ……ライトがあつたからギリギリ気付いたが……」

歳は、大体十歳前後だろうか。汚れてはいるものの、最近付いたよ
うな土汚れや葉っぱのようなものが大半であり、肌や髪もちゃんと手
入れされているため、スラムの子ではないとは思えるが、それでもこ
んな子が街の中ではなくこんな道の真ん中で倒れているなんて異常
極まる光景だ。

「……親らしき人もいねえしな」

「どうします？　ここに置いて行きますか？」

「いや、流石に保護したいが……お客さんが良ければ同じ場所に乗っ
けさせてもいいか？」

「それは構いませんけど……こんな子を放置するなんてできません
し」

食人鬼であれどひなたとて人の子。こんな子をこんな道端で放置
しようなんて思えない。シャーレイの時のようにひなた自身に余計
な羽振りが来るわけではないし、御者が良いと言うのならこちらが否
定する理由なんて一切ない。

ひなたがシャーレイに運んでもらおうとすぐにシャーレイを呼ぼ
うとした時、ひなたの心臓が高鳴った。

何か、来る。

「させない」

「だ、誰だ!!」

起爆銃を抜こうとしたが、ランタンで手が塞がっているため、光を
向けるだけになった。が、それだけで声を出した人物はすぐに分かっ
た。

それは、女……いや、少女だった。まだ成人はしていないように見
えたが、しかし纏っている霧囲気が違う。まるで、刃のような鋭い霧
囲気はそこにいるだけでひなたを圧倒し、腕の差を分からせる。

「……その子、私達の得物」

「だったら、その物騒な霧囲気をどうにかしてくれないかなあ……」
ゆつくりとランタンを地面に置いて起爆銃に手をかける。

この子、強い。少なくとも、食人をしたひなたの数倍は強い。それが雰囲気だけで分かる。

ここは時間を稼いで撤退の準備をしないと。そう結論付け、起爆銃を抜こうとした瞬間、目の前を銀の閃光が走った。それにひなたは言葉を発することが出来ずに止まる。

「おい、ミラ。先行し過ぎだ」

「…………ごめん」

「も、もう一人…………!?!」

それは男だった。真後ろにいるためどんな男かは分からないが、くたびれたような声から少なくとも同年代ではなく年上の男だと理解できる。

そんな男が、一切合切の気配を察知させず、ひなたの首に剣を付けている。少しでも動けば斬ると言わんばかりに、剣はひなたの首に付けられている。

「だが、こいつあ驚いた。ミラの手伝いをしてやったらこんなのが付いてくるなんてなあ」

「っ…………」

流石に首を斬られては死ぬ。食人をして再生能力が上がっていたとしても、だ。

前にはひなた以上に強い少女。そして後ろにはそれすら悟らせない男。正直に言えばシャロンの時よりも質が悪い。何故なら、少なくともこの二人はシャロンを単独で撃破出来る位の腕はあるからだ。

「おい、お前さんよお…………ちよつと気配は違うが、アイツ等の仲間だろ？ 正直に言やあ、苦しまずに葬ってやらあ」

「アイツ等…………?」

男の方が声をかけてきた。前の少女が何も言わないのが不気味で仕方ないが、それでも今は後ろの男だ。こいつをどうにかしない限りひなたが最初に殺される。

「惚けんな。お前の臭い…………それがあのクソツタレ共と同類だと分からせるんだよ。その血の臭いがな」

「血の…………? 悪いけど、最近煙草しか吸ってなくてね。ヤニ臭い

と思うなら離れてくれないかな？ 禁煙する気は皆無だから」

クソツタレ。その意味は分からない。が、どうにかして。どうにか口先でこの腕を退けないとどうしようも出来ない。この剣がシャーレイに向かないようにしないと、死んでも死にきれない。

「さっさと言わねえと拷問してでも情報を吐かせるぞ。この剣は不死殺しだ。お前らの再生能力は無効になる」

「再生能力？ ……本当にどういう——」

「ひなたちゃん、ヘアゴム見つかったよー」

どういう事だと聞こうとした時、シャーレイが馬車から出てきてしまう。それを聞いて男は何を思ったのか少し剣を上へとずらしてひなたの顎を剣の腹に乗せる。

「なるほど……あの子が食料って訳か」

「食料、だと……？」

その一言がひなたの何かの線を切った。

「懐柔し食い殺すか……やっぱクソみてえな思考回路だな、お前ら」

「……おい、シャーレイが食料ってどういう事だ」

「そんなの、お前が一番知ってることだろうが」

「黙れ」

少しだけ手を広げた。そして、その下に魔弾を作成し悟られぬ内に握りつぶし、すぐに開くことによつてシューターを目的の方向……男の腕の内側に当て、腕と共に剣を首の外側へと打ち上げる。

「魔弾だど!？」

「ジェノサイドッ!」

直後、小さい体を利用してしゃがみ込み、魔弾を噛んで割ってから起爆銃を抜いて男の顔に照準を合わせる。

「バスターッ!!」

そして全くの容赦なくジェノサイドバスターを放つ。ほぼ零距离の砲撃。取った、とひなたはにやける。

銀色の砲撃が男の顔へと迫る。この攻撃は避けられまいと完璧に確信した。

「——甘い」

——が、男はそれを避けた。紙一重で砲撃をかすらせながら顔を砲撃範囲内から退け、足を振るった。

その一撃がひなたの胸に突き刺さり、胸からアバラが数本折れる音と痛みが走る。

「ガアア!!?」

獣のような悲鳴を上げながら玩具のように吹き飛ぶ。数メートル吹き飛び転がり、男とミラと呼ばれた少女の中間辺りまで転がる。

「こ、の……かはっ、ぐっふっ」

立ち上がろうとするが、折れたアバラの何本かが肺に刺さったらしく、声と息と共に血が吐き出される。致命傷だ。

「……脆い、だど?」

「こ、ろす……げふっ!?!」

声を放つと共に夥しい量の血がひなたの口から吐き出され、一瞬にして血の水たまりが完成する。

「さっさと治せ。不意打ちを貰う趣味は無い」

「ふ、ぎげ……げはっ!?!」

吐き出される血の量が尋常じゃない。一気に意識が血と共に持っていかれそうになる。が、それを理性で何とか押し留め、立とうとする。が、力が入らず体を起こすことが出来ない。

「……治さないだど? しかも、隻腕なのか。魔弾使いだつてのに」

「そ、れが……どうした!」

「……いや、臭いは同じだ。だが、脆さに強さ、それに目の色も魔力の色も可笑しい……それに、あの子は何度も吸われている筈なのに生きている……?」

咳と共に血を吐き出し荒く変な息をしながらも立つために力を入れる。が、立つことは敵わない。

このままじゃ、シャーレイが。シャーレイを守れない。

力が抜け、血の水たまりの上に体が倒れる。だが、それでもシャーレイに手を伸ばす。口を抑え、腰を抜かしたのか動けないシャーレイ

を守るために。

「……まさか、お前……吸血鬼じゃないのか」

「そ、れに……いんねん、が……ある……」

「……いや、もしかしてコイツは……ブラッドフォードの方が作った？ それなら人間味を残していても可笑しくないしむしろ納得できる」

「ぶらつど、ふおーど……」

意識が朦朧としてきた。駄目だ、このままじゃ死ぬ。胸の痛みも尋常じゃない。回復魔法の魔弾を作る余裕すらない。

だが、それでもシャーレイを守らなければという意思だけで体を動かそうとする。全てはシャーレイのため……シャーレイを守るため……

「……ヴラド。ヴラド・ヴァルコラキの名前に聞き覚えはあるか？」

「……………ない」

「ブラッドフォードの名は」

「こ、ろす……」

「つて事は……」

もう意識がもたない。このままじゃ死ぬ。けれど、抗えない。

こんな所で。あっさりと死ぬ。シャーレイも守れぬまま。ずっと、一緒だと約束したばかりなのに。

「クソつ、やっちゃまった!! ミラ、薬を飲ませてやれ！ 死んじまう!!」

「……………もう遅い」

「秘薬の方だ！ あれなら生きてりや何とかなる！」

「……………それなら」

意識の殆どが闇に沈んだ時、ひなたの体がひっくりかえされ、仰向けになった。そして、口の中に何かを流し込まれ、無理矢理飲まされる。

それに抵抗できず、胃の中に液体を流し込むと、自然と胸の痛みと苦しさが和らいできた。

「ブラッドフォードの方か……アイツは眷属は作っても時々吸血鬼と

しての力は与えないってのを忘れていた……」

「……パパの馬鹿」

「うっ……」

徐々に呼吸も安定してきて意識も徐々に戻ってくる。少なくともこのまま眠って死ぬような事は無いだろう。

「……って事はあの壊滅した村の生き残りか。情報屋で聞いた時は眉唾かと思っただが……外見の情報も一致してる」

男は何か喋っているが、ひなたの頭はボーっとしていてよく分からない。

「……ミラ、約束通りあの子を見つかる手伝いはしたからここからは俺は元の生活に戻る」

「……元気で」

「そつちもな。そこのブラッドフォードの眷属には謝っておいてくれ」

「……もう会わない」

「出来たらでいい」

そう言い、男の方はそのまま空気に溶け込むように消えていった。嵐のように現れて消えていったが、少なくとも彼がひなたの同類……吸血鬼に近い存在、またはそれ自体に深い恨みを持っているのはひなたに対する容赦のなさでハッキリと分かった。

男はこの場を荒らすだけ荒らして何処かへと去っていった。だが、まだ脅威は終わらない。

ここには、まだミラがいる。

第二十五魔弾

ミラと呼ばれた少女は男が消えていった後、数秒経ってから御者の男が抱きかかえている子供を感情の読めない目で見つめた。

「……その子」

「な、何だ……」

シャーレイは目の前で起こった事に顔を真っ青にしてへたれ込んでいる。そして、ひなたはまだ完全に回復しきっていない。まだ荒い息で時々血を吐いているが、徐々に顔色は良くなっている。

つまり、この場で動けるのは御者の男とミラの二人だけ。戦う能力があるのは、ミラだけ。

その彼女が口を開いた。

「……渡して。殺すから」

と、淡泊に。理由を飛ばして目的だけを、男へと告げた。

邪魔するなら容赦はしないと言っても言いたいのか、腰の剣を鞘ごと抜いて男へと見せつける。その剣は先程の男が握っていた銀色の剣とは違い、真っ黒な剣だった。鞘の中心辺りには縦に長い紫色の水晶のような物がはめられており、ぼんやりと発光しているようにも見える。幻想的な剣だったが、その性能が見せかけだけではないというのは素人目でも分かる程だった。

男は保身へと走ろうとしたが、子供を抱きしめた手が動かない。恐怖の余り体が言う事を聞いてくれない。

「こ、殺すって……!?!」

「……必要な事」

飽く迄もミラは理由を話さないらしい。こんな時でも完全な無表情なのがその恐怖を際立たせる。

だが、無表情でありながらもその態度には若干の焦りが見えた気がした。そして、邪魔ならば斬り捨てればいいだけの男に対して納刀した剣を突きつけて脅すだけで斬ろうとはしない。それに違和感があったが、男は体を動かすことが出来ない。

「……早く」

「い、嫌だつて言ったら……？」

こんな子供を見捨てて殺させるなんて理性が許さない。ミラはそれを聞いて剣を突きつけるだけで答えを示した。

断れば、斬る。そう言っているようだった。

御者の男には戦闘能力は無い。だからこうして馬車の御者なんてやっている訳だが、ここで子供を手放せばきつと彼女は客であるひなたとシャーレイを含めて自分を見逃してくれるだろう。少なくとも、自分が死ななくてもいい。

「……わ、分かった。だけど、俺と客の二人には手を出さないって約束してくれ」

「……元からそのつもり」

男は震える手で抱きかかえた子供を手放そうとする。が、その手が震えて上手く動かない。それを見て痺れを切らしたのか、ミラは男の近寄り、片手で抱えられた子供の襟首を掴むため、手を伸ばした。

「——ジエノサイドバスター」

だが、後ろから聞こえた声にミラは一瞬で反応した。

一秒にも満たない時間で振り返り、剣を抜いた。その剣が暗闇に消えるように残像を残して振るわれ、後ろから迫っていた銀色の閃光を一太刀にて切り裂いた。切り裂かれた閃光は霧散し消えていった。

「……まだ動いちゃ駄目」

「うるさい。これでもまだ人間の部分は残しているつもりなんだよ、ボクは」

子供が目の前で何の理由も告げられずに殺される。それがとても胸糞が悪い事だと言うのは嫌でも分かる。顔を袖で拭い再び起爆銃を構える。

自分の吐いた血を飲んだが、それは吸血としてカウントされない。その状態でジエノサイドバスター二発を放ったため、魔力はもう残り少ない。後一発ジエノサイドバスターを撃てば魔力はすっからかんになるだろう。なのに、相手は確実にひなたよりも格上。全盛期の時であろうと勝てない相手。

だが、抗って見せる。小さな命を摘ませないために。

「……貴女じゃ勝てない」

その眼には同情のような物が写っていた。だが、ひなたはそれを見ても歯を食いしばって起爆銃を向ける。

「だとしても、だ」

「……恨まないで」

ミラはひなたにそう告げた。

次の瞬間、ミラはひなたの目の前に現れ、剣を振るった。

本当に一瞬の攻撃。それを見て思わず体が硬直し、右肩に鞘に納刀された剣がぶつかる。

「ぐうう!？」

激痛。そして、肩から骨の悲鳴が鳴り響き、一瞬でひなたの体が再び地面に叩きつけられる。

反応すら許されない一瞬の攻撃。シャロンよりも速いその一撃は明らかに人間を辞めているとしか思えない動きだった。だが、それでも起爆銃は落とさない。地に伏し、下から顔へ向けてシューターを放つ。が、それすら届かない。

剣を握っていない手で魔弾を掴み、力づくで握りつぶした。その顔に苦痛は全くなく、まるで羽虫を落とすかのような涼しい顔でひなたの魔弾を無力化した。

「……弱い」

「だとしてもオ!!」

予め生成に入っていたシールドの魔弾を一発、ミラの足元に生み出し、それをシューターで割る。ひなたの謎にしか見えない行動にミラは呆然としていたが、その視界が一瞬で上空に移った瞬間に何が起こったのかを察した。

魔弾を使った魔弾の起動。しかも、シールドという、その場にある物を押しのける性質を使った相手の強制打ち上げ。魔弾使いの中でも比較的珍しい戦術に入る戦術。

「……無駄」

だが、例え上空十数メートルだろうと無駄。ミラは何とか体勢を整え、馬車の方へと走っているひなたを視界に納め、剣を構えながら急

降下していく。そして、地上にぶつかる寸前に剣を力の限り振るいきり、衝撃波を生み出すとそれで落下の勢いをほぼ相殺し、五点着地で安全に着地した。

「……うっそーん」

それを見てひなたの表情が固まる。そんな人外みたいな着地する人間がいるなんて、と。

脳のリミッター外しているんじゃないかと思ってしまう。

「……魔弾使いは弱い」

「知っているとも」

魔弾使いは珍しさから相手を初見殺しで殺せる可能性を秘めているが、相手が魔弾使いの性質を完全に理解しているのであれば、魔弾使いは普通の魔法使いよりも弱い。特に、一対一なら最弱とも言える。

そして、ミラの言葉は魔弾使いと嘗て戦ったことがあると言わんばかりの言葉だった。それはお前は勝てない、と一方的に事実を突きつけているも同じだった。

だが、それはひなたが一番わかっている。相手はあんな人外のような作戦を取れる化け物で、ひなたよりも地力は圧倒的に高いから、勝てないと分かっている。

そうだとしても、男には戦わなければいけない時がある。戦わねば後悔してしまう時がある。それが、きつと今だ。

せめて、時間稼ぎ位はしよう。あの子を助けるために。

「仕事は時間稼ぎだ……倒す事じゃない」

起爆銃を構えて相手の動きを見る……前にシューターを放つ。先手必勝。無言で放たれた魔弾はかなりの速度でミラへ向けて飛んでいくが、ミラはそれを剣で斬り捨てた。それを見てから魔弾をリロードしておく。だが、その瞬間が魔弾使いの決定的な隙。それを見逃さうとせずにミラは一瞬で接近し、剣の柄をひなたの鳩尾へと振るう。が、それを本当にギリギリで避け、起爆銃をミラの体に接触させる。そして、トリガーを引く。

それと同時に放たれたのは何時ものシューター……ではなく、ライ

トニング。電撃の魔法。それが零距离で銃口を突きつけられたミラとひなたの体を駆け巡り、電気が体を走るといふ慣れない痛みを発生させる。

「いぎッー！」

「ッ……!?!」

その一撃を受けて初めてミラの表情が歪んだが、所詮はひなたの魔法使いよりも未熟なライトニング。すぐに銃口を手で払って電撃を止めさせる。が、ひなたはすぐに自分とミラの間にはバインドの魔弾を作成し、シューターで撃ち抜いた。

撃ち抜かれたバインドの魔弾から鎖が飛び出し、一番近くのミラへ向けて飛んでいき、一瞬にしてミラの体を縛る。腕と足を縛り、それを補強するように鎖の上から鎖を巻き付け、体や首、胸元や股間に鎖を通して雁字搦めにしてミラを拘束する。

「今のうちに!!」

ひなたが叫んで合図を送ると、猛スピードで馬車がひなたとミラの横を通り過ぎていった。ひなたはそれを音と気配で察し、魔弾を三発放り投げてから真横を通る辺りですぐに振り返ると、伸ばされた御者の男の手を掴んだ。手が先ほどの肩への一撃のダメージもあり、碎けて外れそうな錯覚に襲われるが、それでも耐えて何とか御者台に乗り込み、魔力だけを込めた魔弾を噛み砕きながらシャーレイと子供の乗る馬車本体の方へ移動する。

「これで終わりー！」

そして馬車から軽く身を乗り出して小さくなっていくミラの近く、魔弾を置いた場所をジェノサイドバスターを一秒にも満たない間照射して吹き飛ばす。それによって砕かれた魔弾……合計三発のバインドの魔弾は八割方拘束を力づくで解除していたミラの体を更に縛り上げる。

そしてミラが拘束を通り越して鎖で素巻きのような状態になったのを確認し、倒れてジタバタしている事からもう追われないと察して馬車の壁に腰を下ろした。

「何とか、上手くいった……」

魔力切れで出てくる脂汗と動悸、苦しさを感じながらひなたはやっと一息つく。

ミラを上空に打ち上げてから降りてくるまでの数秒。その間にひなたは御者の男に作戦とも言えない作戦を叫んでいた。

ひなたが時間を稼ぎ、御者の男はシャーレイと子供を馬車の中に放り投げて置いて何時でも全力でこの場を切り抜けるようにしておく。そして、後はひなたがライトニングとバインド……近くにいる人間に向かって効果が発動する魔弾を一気に使い、悟られないように時間を稼いでから、後は馬車で離脱。これがミラから逃げるための算段だった。

だが、あんな短時間でバインドを力づくで壊して追跡しようとしていたのはかなり驚いた。あれは魔法が自然に解けるのを待つか力づくで解除するかの二択しかない。シャロン戦で空中に留まるために使った時は鎖が一本だけの、ひなたの腕力で十分に破壊できる代物だったが、今回は全力で作り上げたバインドで、人間なら分単位で拘束が出来ると思っていたのに、それを十秒も経たないうちに八割も千切られていた。やはり、トップクラスの戦闘力を持つ人間はもう人外と言っても過言ではない。念のために三発も使って正解だった。

「ひなたちゃん！」

荒い息を吐きながら座り込んだひなただが、すぐにシャーレイがひなたに突進をかまして抱き着いてきた。その際、なんか胸からまた骨が折れた音が聞こえた気がした。凄く痛い。

「あひい!？」

「よかった……よかったよお……」

「し、しゃーれ……し、しぬ……」

そして全力で抱きしめる物だから胸からはまだ骨が折れる様な音が聞こえるし肩からも同じような音が聞こえてきた。

「あんなに血を吐いて……死んじゃったかと思つてえ……」

「ま、またしぬ……」

床をタップするがシャーレイは気が付いてくれない。そのまま力の限り抱きしめてくる。

秘薬とやらを飲まされたが、あれが回復魔法と同じような効果を人体にもたらす事は身をもって分かっている。だからこそ、現状胸を圧迫されるとすぐに骨が折れる。ミラが何故胸を狙わずに腹や腕を狙ったのは殺さないためだったのかもしれないが、今はそんなのを考えている暇はない。マジで死ぬ五秒前。

「しゃ、れい……し、しんぱいかけて、ごめん、ね？」

だから、安心して離してもらえるようにタツプしていた手をゆつくりとシャーレイの背中に回して子供をあやすように撫でた。

その結果……

「ひなたちやあん!!」

更に強く抱きしめられた。

結果、ベギイ！ と人体から鳴ってはいけない音が鳴ってしまった。

「ひぎい!!?」

結果、ひなたは意識を手放した。選択肢間違えた、と思ったがもう遅い。ひなたの意識は完全に闇に沈んだ。

「……あれ、ひなたちや……白目剥いて泡吹いてる!!? ちよ、な、なんで……どうしよう!!?」

その後、修羅場があったそうなの。

第二十六魔弾

ひなたは現世からさようならした筈だったが、気が付いたら現世に復帰していた。肉体に戻ってきた意識で体を動かして目を開けると、心配をそのまま表したような表情を作ってシャーレイが寝ているひなたを覗き込んでいた。一瞬天使かな？　なんて思ってしまったが、すぐに正気を取り戻した。

「…………おはよう、シャーレイ」

「よ、よかったあ…………生きてた…………」

八割くらい死にかけてたけどね、と言いかけたがシャーレイの安心のために黙っておくことにした。

が、何で生きているのかは自分でも不思議だった。シャーレイに抱きしめられアバラが全滅した筈なのにこうしてまた生きている。しかもアバラが再生しているなんて有り得ないとしか言えなかったが、ミラと呼ばれた少女が飲ませた秘薬と呼ばれる薬の効果なのでは、と考えると一応この状況に説明が見ついた。

あの秘薬はリジエ効果を持っているのではないかと。回復魔法はその時点で負った怪我だけを治す魔法だが、もしもあの秘薬が再生効果を一定時間付与するリジエ効果を持っているのだとしたら、この状況にも納得がいく。

これに関しては感謝しなくてはならないかもしれないが、現状ミラは敵でしかない。秘薬を飲ませてくれた事には感謝しなければならぬのかもしれないが、素直に礼を言う事は無いだろう。

「そう簡単には死なないよ。それで、今朝保護した子は…………」

聞きながら周りを一通り見ると、馬車の壁際で寝かされている子供を発見した。胸が上下に起伏している事からちゃんとして生きているのは分かる。が、あの様子だと一回も目が覚めていないだろう。相当疲れていたのか眠かったのか。そのどちらかだ。

「あの子、ちよつと甦られて…………お母さん、お母さんって何度も呟いてて」

「親とはぐれた？　それとも、さっきの二人組に…………」

殺されたのかな。その言葉は口から出る事は無かったが、シャーレイには伝わった。

そうかもしれない。あんな歳で、親を失い一人で逃げてきたのかと思うと、同情や哀れみを覚えてしまう。が、まずはこの子から色々聞いてみない事には始まらない。これから先はあの子が目覚めてからだ。

シャーレイがひなたの元から離れて子供の元へ向かい、眠っている子供の頭を持ち上げて自分の膝の上に乗せた。それがヤケに様になつていたのは謎だが、ひなたは死の淵から生還したばかりなので移動するのも怠く、馬車の壁を背にしてシャーレイと子供の反対側に座った。

「……この子の持ち物を漁ってみたら財布があつたんだ。それで、失礼だったけど中を見たら、名前と歳だけは分かつたんだ」

「親の名前とかは？」

「分かんなかった」

「本人の情報だけか……」

「うん。名前はルナ・スプラウト。歳は九歳で女の子だつて」

「九歳……」

そんな歳で命を狙われている。一体どんな人生を送ってきたのか皆目見当がつかない。が、分かるのはこの子……ルナが何かしら人は変わっている特殊な人間だという事。もしくは、何かの秘密を握つてしまった子だという事だ。

親とははぐれたのかそれとも死別してしまったのかは不明だが、なるべくすぐに親の元に届けなければ親も心配しているだろう。だが、もし死別してしまっているのだとしたら、どうすればいいのかひなたとシャーレイには分からない。少なくとも温泉街から帰るまでは保護はしておいてその間に母親が見つからなかったり情報が集められなかった場合は公的機関のお世話になるしかない。

「取り敢えずは起きるのを待とう。ボク達に出来る事は今は少ないから」

「うん、そうだね……」

子供を見捨てるなんて出来ない、という人としての良心がルナを保護するという結論を導き出しているが、守れるという保証はない。

またミラが襲ってきた場合は多分、守り切れない。彼女が少し本気になれば吸血した時のひなたであろうと秒殺してルナを殺すという事を簡単に成せる。そう考えると彼女を公的機関に預けるのが一番いいのかもしれないが、もしもミラが公的機関が相手だろうと容赦をしない人間だったらルナは確実に殺される。そうになると、温泉街から出ていくまでの間だが、時間を稼げるひなたとシャーレイの元の方に居た方がまだ余計な被害が広がらなければ逃げ切れる可能性もある。またひなたが死にかけるのが確定するが。

それでも血を吸っていれば多少は人よりも頑丈になるし回復魔法も使える。少なくともまたアバラが全滅してもまだ生き残る事は出来る。最近アバラがよく折れるなあ、なんて遠い目をしながらルナが目覚めるのを待つ。

ルナを拾ってミラと戦闘をしたのが明け方で、今は太陽が半分程上っている。時間的には九時か十時辺りだろう。そう考えるとひなたは結構寝ていたという事が分かった。そうすると、もうすぐルナは目覚める筈だ。胸に違和感があるが、ひなたはそれを気にせずに煙草を啜えて火を付ける。肺に落ちていく煙がこれまた気持ちいい。

「あ、そういうえば。御者さん、この子の事をお願いって言ってた」

「あー、交代したの？　っていうか、お願いする位なら自分で保護を……いや、流星にあんな事があつた直後じゃ仕方ないか」

ミラが襲ってくる可能性があるのにルナを保護するなんて戦闘能力がない人間では難しい事は考えたらすぐに分かった。ひなただって同じ状況なら戦える人間にルナを任せてその場から逃げる。だから、あの御者の男を恨んだりする事はなく、仕方ないの一言で済ませた。

煙を吐いてボーっとしながらも外を見て時間を潰す。

そんな時間が流れていき、煙草を一本吸い終わって数分のインターバルを挟んでもう一本の煙草を啜え火を付けた所でルナが小さく唸った。

「う……………うん……………」

「あ、ひなたちゃん！」

「目が覚めたかな？」

シャーレイが小さく唸ったルナの頭を撫で、ひなたは特に何もせず
にルナの目覚めを待つ。

ルナが頭を撫でられてから数秒後。彼女はすぐに自ら目を開けた。

「……………どこ？」

小さく呟いた。どうやら、気が付いたら馬車の中にいたのに疑問を
持っているらしい。そして、寝ぼけているのかボーっとしながら不安
げにルナの顔を覗き込んでいるシャーレイを見て知っている人間で
はないとようやく認識したらしい。

「誰？」

目が覚めたら知らない人間がそこに居た、というのはある種の恐怖
になるやもしれなかったが、ルナは寝ぼけ眼を擦りながら起き上が
り、そう端的に聞くだけだった。

どうやら、必要以上の警戒はされていないらしい。これならすぐに
彼女の信用を得られそうだとホッとした。ひなたは立ち上がってか
らルナの近くで腰を下ろしてルナと視線を合わせる。こうする事で
なるべく無意識下の警戒等を解こうと考えていた。

「ボク達は道端で倒れていた君を見つけて助けたんだ」

「倒れてた……………あっ」

言われてから思い出したのか、ルナは小さく声を上げた。そして、
すぐに表情を暗くした。やはり、倒れる前後に何か悲しい事があつた
のだろう。それを思い出させてしまったのは少し申し訳ないが、自分
の現状を彼女自身に把握させる事はしなくてはならないので仕方の
無い事だ。

多少心が痛んだが、致し方なし。ルナの頭を撫でながら優しく諭す
ようにルナからミラに狙われていた理由を推測するための情報を聞
き出そうとする。

「思い出した？」

「うん……………」

「じゃあ、何であんな道端に倒れちゃったのか、教えてくれるかな？」
不安にさせないように、なるべく笑顔で。ルナの頭を撫でながら聞く。しかし、ルナはひなたの質問を聞いても黙りこくったままだ。やはり、何処か言いにくさがあるのだろう。それか、何かがトラウマになって彼女が話す事を拒んでいるか。どちらにしろ、話したくないのなら話さなくても構わない。ひなただって未だにシャーレイには一年前のあの日の全容は全て話していないのだから。

言い淀んでとても申し訳なさそうな顔をしているルナの頭を撫でながら大丈夫だよ、と言って彼女を安心させる。警戒心を解いていけばその内話してくれるかもしれない。だから、今はこうして安心させてあげる。

「大丈夫。嫌なら話さなくてもいいよ」

「…………ごめんなさい」

「謝らなくてもいいって」

申し訳なさそうに顔を俯かせるルナの頭を撫でてから片手でルナを抱きしめる。そうすると、人肌が恋しかったのかルナはひなたを抱きしめ返した。が、すぐにルナはひなたの体が人とは少し違う事に気が付いたのかひなたの左手があった場所を触った。

そして腕の断面を触ってビックリした顔をひなたに向けた。どうやら、左腕が無いというのは結構ショッキングだったらしい。

「ああ。左手？ 実は去年に取れちゃってね」

「と、取れて…………？」

「そう。ポロって」

冗談だが。笑いながらそう言うと、自分にもそんな事が起こるかもしれないと思ったのかビクビクと震えた。

流石に簡単には取れないよー、と笑いながらルナを抱きしめるようにして撫でていると、先ほどよりも強くひなたを抱きしめ返した。

よしよし、とルナを撫でているとシャーレイが何かにビックリしたのか目を丸くしてひなたの方を見ていた。

「…………おばあちゃんみたいな顔してる」

「表出て殴り合う？」

遠回しに老けていると言われたと思って若干ムカついたひなただった。シャーレイ的には凄く優しい顔している、という意味だったが。

それから数分後。ひなたに若干心を許したのか、ルナは馬車の中でひなたの横に座ってひなたが買っておいた干し肉を齧っていた。ルナは腹ペコだったのか、シャーレイが買っておいたパン類の半分を一人で食べてしまい、朝食が途中で終わってしまったひなたは余り食べる事が出来なかった。

そして反対側にはシャーレイがもたれかかってボーっとしている。正に両手に花。幸せな気持ちでルナの事をよしよしと撫でていた。

シャーレイはルナにばかり気を向けているひなたが何となく気に入らないように構ってと時々ひなたの体にかける重さを増やしたりしてみたが、そこそこ鍛えているひなたには誤差程度にしか感じないようであまり効果は無かった。左手があれば変わったのになあ、と思わなくもなかった。

どっちにしろ、今のひなたはルナが警戒心を解いてくれるようにしてくれている真っ最中だ。手は離せられないだろう。シャーレイとしてもこんなに大きくなったのに人に甘えている所を見られるのは少し恥ずかしいしみつともないと思ってしまう。普段なら確実に甘えに行くのだろうけども。

「えっと、ルナちゃんだったかな」

「う、うん……」

ひなたが急にルナに向かって言葉を放った。優しい声色だったので怖がられて何も言葉を返されないという事は無かったが、ルナはどこかビクビクしていた。

「ルナちゃんのお母さんかお父さんってどこに住んでるのかな？」

親が居るのなら、ひなたとシャーレイが送っていく事も出来る。先程までは一人であんな所で倒れていたためか、親等はいなくて彼女自

身に何か暗い物があるのではないかと思ひ込んでいたが、もしもミラが何かをやらかしてしまい、それを見てしまったスプラウト親子が散り散りで逃げているのだとしたら、この子は役所ではなく衛兵に任せ方がよい。

それか、スプラウト親子ではなく、ルナだけが見てしまったというのなら、一人で逃げていたのもある程度は納得が出来る。その場合は親にルナを届けて衛兵の元に二人を連れていけばいい。

ルナはひなたの質問を聞いて表情を暗くして俯いた。

「……居た、けど」

居た。つまり過去形。

それが示すのは、親はもういない、という事だった。それを聞いたひなたはすぐにルナの頭を撫でた。

「ご、ごめんね。変な事聞いちゃって」

辛い事を思い出させてしまったかもしれない。そう思い、すぐにルナの頭を撫でると、ルナは少し泣いていたがうん。と呟いて目を拭いた。どうやら、親に関しては触れない方がいいかもしれない。

だが、こうなるとルナの親はミラに殺されたのでは、と思ってしまう。ルナの体は汚れているが、かつてスラムで生きていた時代のシャーレイ程ではない。スラム特有の悪臭は感じる事が出来ず、代わりに感じるのは泥の臭いや土、葉の臭い。そして、ひなたのような吸血鬼、それに近い種族にしか分からないが、濃い血の臭い。ルナの服はワンピースだけだが、襟元やスカートの一部には赤いシミのような物がある。きつと、血を被った後に川に飛び込んでそれを洗い落としたのだろう。泥や葉の臭いはその後にすぐ逃げた際についた物だろう。

ひなたはルナを慰める振りをしてローブをルナに着せた。

「……ルナちゃんさ、これからボク達はこの先の街……あー、温泉が沢山ある街に行くんだけど、住んでいた街っそこかな？ それとも、他の街？」

ここから一番近い街は温泉街だ。だから、そこに住んでいたのだと思うが、一応聞いておく。

「温泉の街……？ わたし、そこに住んでたよ？」

「そっか。なら良かった」

親は既に亡き人に。だが住んでいた場所はちゃんとあった。としたら、ミラはそこで張っている可能性がある。彼女の足なら、もしかしたら馬車よりも速く温泉街に着いている可能性がある。

なら、彼女を家に近づけるのは危険だ。宿で共に泊まるしかない。もしものために余分に金を稼いでおいて正解だった。

「ならば、お姉ちゃん達と一緒に宿でお泊りしないかな？ 明後日には帰っちゃうけど、その間だけでもさ」

「お泊り……？ いいの？」

「うん。その後は大人の人にルナちゃんの事は任せちゃうけど、いいかな」

「うん！ お泊りしたい！」

大人に任せるとかはよく分かっていないっぽいけど、これで確実にルナを保護する事は出来る。予約制なのに当日で一人増えちゃったけど追加料金で何とかなるかなあ、とちよつと後先考えない提案に後悔しながらもはしゃぐルナの頭を撫でる。

いつもこうやって時々後先考えない事をするのはひなたの悪い癖かもしれない。若干のこれからの不安について煙草を取り出して吸ってしまう。

「煙草？」

「うん、煙草。ごめんね、嫌だったかな」

嫌だったら今日明日の禁煙生活のスタートが無慈悲にも切られてしまうが、ルナは首を横に振った。

「煙草、大人しか吸っちゃ駄目なんだよ？ 何で吸ってるの？」

「……これでも大人だからね、ボクは」

「嘘ついちゃ駄目なんだよ？」

「嘘じゃないんだな、これが」

「えー。でも、おっぱい無いし背も凄くちっちゃいじゃん」

「流石に泣くぞ!!？」

「ひっ」

「あ、ちよ、ごめんって。いきなり大声だしたボクが悪かったから」

子供というのはズバズバと物事を言ってくる。流石にコンプレックスを指摘されて泣きかけたが、ルナが怯えてしまったため、ひなたはすぐに冷静になってルナの頭を撫でた。

「……じゃあ、何でお姉ちゃんは自分の事をボクって呼んでるの？
男の子なの？」

「女の子だよ。これは癖っていうか……自分で引けないラインだからさ」

「あ、ホントに女の子だ」

「だからと言って人の股間を触るのは止めようか」

「凄い男の子っぽいのに」

「それ、ボクの目が外見相応じゃないって言いたいのかな？ それとも半分死んだ目をしてるって言いたいのかな？ それとも煙草のせいかかな？ それともマジで胸がぺったんこだからかな？ Aカップもないからかな？」

「全部」

「きつちい……」

修羅場経験した合法ロリなんてこんなモンだよ、とへこんだ。そしてそれを聞いて一人笑っていたシャーレイにはかなり弱めの魔弾を一発お尻に撃ち込んだ。

だが、男っぽいと言われて悪い気はしなかった。こんな外見でも少しは男っぽいのなら元男で精神は今も男であるひなたにとってこそまで悪口と感ずる事は無かった。

せめて胸が欲しかった。

第二十七魔弾

ルナが目覚めてイロイロとあった訳だが、最終的には少し顔を赤めたひなたとそれを見て視線を逸らして顔を赤くしているシャーレイときよとんとしているルナが残った。ルナは悪気は無かったわけだが、色々と間等が悪かった。ルナは一切そういう事に知識は無く、完全な事故というか悪ふざけだった訳でひなたもルナの事を叱ろうとは思わなかったが、一応そういう事はあまりしちやいけないと赤くなった顔と荒くなった息で説明した。

ルナにイロイロとされて体が火照ってしまった上に多分御者の方にも声が聞かれていたかもしれないが、それに関してはもう気にしない事にした。気にしたら死にたくなってしまう。

そしてそんな事件のような何かを起こしたルナ本人は結構ひなたに心を許したらしく、ひなたの膝を椅子にして座っていた。シャーレイの方に関しては心のある程度は許しているが、一番ひなたに懐いているようだった。

「……ひなたお姉ちゃん。何かお股湿って——」
「気のせいだから!!」

子供と言うのは恐ろしい物だと感じたのはどうでもいい事だろう。干し肉を笑顔で齧りながらひなたがルナの頭を撫でる。シャーレイはそれにムスツとしながらひなたの肩に頭を乗せている。ひなたはその様子に小さく笑顔を浮かべながら一旦ルナの頭を撫でるのを止めてシャーレイの頭を撫でた。

「ひやつ」

「可愛いなあ、シャーレイは」

「ひ、ひなたちゃん……ルナちゃん見てるし恥ずかしいよ……」

「そうかな？ 可愛いよね、ルナ」

「うん！」

「う、うう……」

何やかんやでひなたにとってはシャーレイが一番な訳で。ちよつと顔を赤くしてそっぽを向いているシャーレイだったが、横顔から少

しにやけているのを見て思わず撫でる力を強くしてしまったのは悪くない。

ワシャワシャとシャーレイの髪の毛を撫でながらひなたは口が寂しくなったのでルナの食べかけの干し肉を貰う。ルナが膝の上に居る以上、煙草を吸ってしまつて頭の上にあつた灰を落としてしまつたとなると色々マズい。様々な面でマズい。だから、煙草を吸いたいのを我慢して干し肉を食べる。何やかんやでガムみたいに噛んでいるとちよつと煙草を吸いたいという欲求を我慢する事が出来る。この干し肉に初めて感謝した瞬間だつた。

体の火照りに関しては……後々処理するしかないだろう。初めてのコトだしそれを知つてから男に戻ると言う決心が揺るがないか心配だが、一年間溜めていたのだから体の方がいう事を聞いてくれる。い。

昨日、シャーレイの唇を欲望に負けて奪つてしまつたが、このまま溜めておくとそれ以上の事をシャーレイが寝ている内にしかねない。それに、二十歳のいい大人が女の子を我慢できずに襲つちやいました、なんて自分の心象的にもマズい。

そんな事を考えていると段々と身体の火照りが強くなってくる。端的に言えばムラムラする。

「……食べちゃいたいなあ」

なんて思っていたら気が付いたら余計な言葉が口から出ていた。

その言葉を聞いたシャーレイが思わず目を白黒とさせる。シャーレイ的には今すぐ腕の一本か二本を食べたいと言われると思つてしまい、思わず聞き返した。

「え？ 今なんて……？」

「いや、シャーレイが可愛すぎてさ……食べちゃいたい」

ジーザス。聞き間違いじゃなかった。

「え、つと……腕の肉とか？」

「性的に」

「性的!?!」

だが、帰ってきたのは予想だにしていなかった事で、真顔でそんな

事を言うひなたに思わず驚いてしまう。本当に一切合切考えていなかった言葉だからか、シャーレイの頭の中で困惑がグルグルと渦巻く。流石に性的に食べたいと言われても、はいどうぞ、なんて流石に言えない。

「正直ムラムラします」

「ナニをカミングアウトしてるの!？」

更なる追撃にシャーレイの困惑は加速する。

いきなり頭を撫でられて、可愛いと言われたと思ったたら食人宣言されたと思つてビクビクしたと思つたら性的に食べたいと言われた。全く持つて訳が分からない。

ルナはひなたの言葉を疑問に思ったのか、性的につて何? と聞いているが、ひなたは大人になつたら分かるよ、と言つてルナの頭を撫でるだけで終わる。

「い、いや、その……ひなたちゃんはしたいのなら私はいいんだけど

……ルナちゃんがいるし……」

「え、二人きりならいいの?」

「……………」

別にひなたに何をされてもいいと思つているのだから押し倒されても拒むつもりはないし、男に襲われるよりもひなたに襲われた方が万倍マシだしそっちの方が嬉しいと思う。

シャーレイが自分の口から出た言葉に顔を赤め、ひなたも顔を真っ赤にしてシャーレイの顔を見ている。

「二人とも顔真っ赤だよ?」

「……………ルナ、ちよつと退いてくれるかな」

ひなたはルナにそう言い、一旦上から退いてもらう。ルナが首を傾げながらひなたの膝の上から退いてすぐにひなたは煙草を取り出して口に啜えて火を付ける。

が、そのままその煙草を吸う事は無かった。それを指で搦んで口から離し、ショートパンツとニーソックスの間の自分の足の部分に火のついた部分をロックオンする。

後は、察しの良い人なら分かるだろう。

「煩惱退散ッ!!」

煩惱退散、と名を打った根性焼きだ。

煙草の火と灰が足の肌に当たり、肉が焼けるような音がしてひなたの顔が歪む。

「あつつああああああああああああ!!?」

『きやあああ!!?』

一瞬にして浮ついた感情は消え去った。が、代わりに脳内を痛覚が刺激して悲鳴を上げさせる。そして、そんな奇行を目の当たりにしたシャーレイとルナから悲鳴が上がる。

「な、何してるのお!!?」

「ぼ、煩惱退散……」

シャーレイの焦った声を聞いてひなたはすぐに回復魔法の魔弾を六発生み出して起爆銃にリロードし、それを零距离で根性焼きの火傷跡に撃つ。それで火傷跡は完全に消えたが、それでも痛みと熱さで煩惱と下心を一旦収める事が出来た。

「ひ、ひなたおねーちゃん……?」

「だ、大丈夫だから。もう痛くないから泣かないで、ね?」

そしてそんな物を目の当たりにしたルナは泣きそうな顔でひなたの事を見ていた。若干ダメージはあるが、それでも傷は消えたし跡も消す事が出来た。というか消せなければこんな無茶はやっていない。起爆銃に魔弾をリロードしながら慰める。

「ほ、本当に何考えてるの!? 私心配するしルナちゃんにも要らないトラウマ植え付けちゃうでしょ!!?」

「そうだけど……」

シャーレイが凄い剣幕で掴みかかってくる。というか、怒っている。一か月一緒に暮らしてきて初めて怒っている。確かに、怒るのは分かるしひなたに非があるのだから全面的に反省するしかない。

シャーレイのお説教を正座で聞きながら反省する。煩惱退散には痛みが一番いいだろうと思つての事だったが、確かに奇行過ぎたしルナには刺激が強すぎただろう。現にルナは怯えてシャーレイにしがみついている。流石に壁に頭を打ち付けるとかシャーレイにビンタ

してもらおうとかしてもらえばよかった。

そう考えながらお説教を聞いていたが、一個異常事態が発生した。

「ほんつとうにもうやらないですよ!？」

「は、はい……………」

「もう……………ひなたちゃんに傷つくのは嫌なんだから……………」

「肝に銘じておきます……………後さ、シャーレイ」

「……………なあに?」

「……………お説教で興奮しちゃったんだけどどうしよう」

「流石に欲求不満過ぎないかな!!？」

もうシャーレイの顔を見て声を聞くだけでヤバイ、という事だった。ひなたは齡二十歳で変な扉を開いてしまった。これも性欲が悪い。

ひなたが発情期を迎えた犬並みに興奮するという事件はあったが、それはひなたが煙草を吸いまくる事によつて一時的に解決する事ができた。だが、近いうちに発散しないとマズい、というのはどうしようもならない事実な訳で、ひなたとシャーレイの間には何処か気まずい雰囲気の流れていた。

だが、それから数時間の移動の後、御者の男性がひなた達にカーテン越しに声をかけた。

「お客さん、もう温泉街が見えましたぜ」

若干その声に気まずさがあったのは気のせいだと信じたい。

ひなたはそれにやつとか、と息を吐き、シャーレイは本当ですか!?! とはしゃいでカーテンを開いて前を見た。馬車の前方には小さく建物がポツポツと並んでおり、更にその奥を見てみると、確かに家のような物や店のような物が点在し始めていた。もう数分も経たない内に温泉街には入る事が出来るだろう。

若干の硫黄の臭いを感じながら気まずさを忘れてはしやぎ始めるシャーレイの頭を撫でて落ちつける。

が、ひなたにとって気がかりなのが一つだけあった。

(……ルナ、一気に暗くなった。嫌な事でも思い出したのかな)

ルナの表情が一気に暗くなった事だ。先ほどまで気まずさに苦笑いを浮かべていたルナだったが、御者の声を聞いてからルナの表情が一気に暗くなった。

きっと、あの街で色々とあり、馬車で数時間もかかるあの場所まで一人で逃げてきたのだろう。恐らく、子供の足だから、一日と少しかけて。親が居た、という事はきっとあの街で親は死んだのだろう。その原因が多かれ少なかれミラにあるというのはミラの態度から明らかだったが、詳しい事情に関しては、本当に調べてみないと分からない。

特に、ミラに関しては探りを入れなければならぬだろう。あれだけの凄腕剣士、きっと温泉街ではかなり有名な筈だ。情報の一つや二つ、簡単に見つけられるかもしれない。

だが、ミラからルナを守る。これはもう決めた事だ。暗い表情をしているルナの頭を撫でる。

「大丈夫。大丈夫だから」

「……う、ん」

だが、それでも暗い表情は戻らない。それにもどかしさを感じながらルナを片手で抱きしめ、馬車が停留所に着くまで待つ。

停留所は街の中心近くにあり、それから十分程かかって到着した。広げた私物を既に片付けていた三人は馬車が止まってからすぐに荷物を持った。

「着きましたぜ、お客さん」

カーテンを開けて到着を知らせる御者の男。それを聞いてからすぐに三人は馬車から降り、御者の元へと向かう。

「長い時間ありがとうございます。交代した人達にもそう伝えてください」

「ああ、分かった。今度会ったら知らせておこう。じゃあ、嬢ちゃん達は温泉にでも浸かってゆつくりとしていきな。道は分かるか？」

「予め地図は貰っておいたので。では、本当にありがとうございます」

た」

年長者のひなたが代表して礼を言つて頭を下げたからシャーレイとルナを連れて停留所から離れる。

地図を取り出し、太陽の位置と地図を見て自分たちのいる位置を確認してから宿が何処かを割り出して頭の中に叩き込む。地図を二人が覗き込んできたため、苦笑しながら二人に地図を渡す。

二人はどうやって見るのか分からないのか、地図をクルクルと回しながら首を傾げている。それを何となく可笑しく思いながら停留所を完全に出て記憶の中の地図の通りに道を曲がる。

とつと荷物置いて疲れた体を癒したいと思い一度空を仰いでから再び前を見て――

「ッ!？」

――体が固まった。

シャーレイとルナがひなたが急に止まったため、ぶつからないようにすぐに足を止めたが、シャーレイは目の前の光景を見て顔を青ざめた。ルナは、一瞬で暗い表情へと変わった。

「……待ってた」

そこに居たのは……

「ミ、ラ……ッ!」

今朝、ルナを殺すためにひなた達の前に現れた少女、ミラだった。彼女は今は剣を抜いていないが、その冷酷なまでの目と表情がひなたの警戒心を一瞬にして剥き出しにし、手が自然と起爆銃にかかる。それでも、ひなた程度は障害にならないと考えているのか、剣の柄に手をかけようともしない。

「……その子」

「……ルナが、どうした」

「……こつちへ」

「ふざけるな!」

そんな言葉、拒否するに決まっている。最早我慢の限界に達し、起爆銃を抜いてミラに向ける。

だが、それでもミラは手を動かさない。それに悔しさと焦りと怒り

を感じるが、早まったらこちらが一瞬にして手玉に取られる可能性がある。シャーレイにルナを連れて逃げるように言おうと思ったが、ミラの速さの前ではシャーレイなんて遅すぎて数秒も経たない内に捕まるだろう。だったら、まだひなたがすぐに反応できるこの場に居させた方がいい。

「……その子が一番わかってる」

「何がだ」

「……死ぬ理由？」

「罪もない子供が殺されていい理由なんてこの世にあるモンかよ!!」
一人の琴線に触れるような言い方をする。それが余計にひなたの理性の糸を切ろうとしてくる。

「……もしかして、知らない？」

「何がだよ」

「……その子が死ぬ理由」

その瞬間、ひなたの起爆銃のトリガーにかけられた指が引かれた。銃口から放たれる魔弾。しかし、それはミラの手であつさりと受け止められ、握りつぶされた。やはり、素のスペックが違い過ぎる。

だが、引いてたまるか。引けるものか。

「御託は良い。来いよ」

もう、我慢の限界だった。こんな罪のない子を冷酷な眼と表情で殺そうとする目の前の少女が、途轍もなくひなたの癪に障った。

力でねじ伏せる。話はそれからだ。

「……戦いたくない」

だと言うのに、目の前の少女はそれを拒む。それどころか、戦いたくないと言う。仕掛けてきたのは、そっちからなのに。

「何を今さら!!」

「……事実」

信じられるか。そんな無表情で言われても、それが嘘じゃなく本当の事だなんて、今この場で信じる事なんて出来てたまるか。

この少女は敵だ。ひなたとは絶対に意見の合わない、敵でしかない。なら、方法は一つだ。

「……だったら、一方的に蹴って蹂躪して拷問して全て吐かせる!!」
ルナを殺そうとする理由。それを全て吐かせる。

もう嫌だと言われても拷問し続け蹴り続け蹂躪し続け人としての尊厳を奪ってでも全て吐かせる。

「……無理」

「やらずに分かってたまるかよ!!」

魔力だけを込めた魔弾を作り出し、啞える。例えシューターが効かなかったとしても、ジエノサイドバスターまでを素手でどうにか出来る訳がない。

だから、この一撃で大きなダメージを与えて後は一方的に――

「止めて、ひなたお姉ちゃん!!」

蹴るつもりだった。

だが、ひなたを止める声は、予想外にも後ろから……ルナ本人から聞こえてきた。

思わず啞えた魔弾を落としそうになる。だが、それをなんとか堪えて口の中に含んでから振り返る。

「……ルナ?」

「いいの……本当は、わたしがあの人の所に行かないといけないから」「な、なんで……」

「わたしは……これ以上生きてちゃ駄目だから。死ななきゃ、駄目だから」

なんで、なんでそんな事を。

なんで、そんな生を諦めた目で、笑いかけてくる。こんな子供が……たった九歳の子供が、なんでこんな事を笑いながら言ってくるんだ。なんで、それがさも当然のように言っているんだ。

「……言っていない?」

「……言えないよ。こんな事」

「……言う?」

「うん。言ったら、悲しんじゃうから」

「……分かった」

「うん。逃げて、ごめんなさい」

「……構わない」

「それと。嫌な役を任せちゃって、本当にごめんなさい」

「……決意した事」

トントン拍子に話が進んでいく。

待て、待ってくれ。何で、そんな信頼し合った仲のように言葉を紡ぐ事が出来る。片方は殺そうとして、片方は殺されようとしているのに、何でこんなに会話を弾ませる事が出来るんだ。

訳が分からない。分かる訳がない。理由も分からなければ背景も分からなくて心情も読み取れなくて何があったのか推測もできなくて。だと言うのにルナは自ら殺されようとしていて、ミラはそれをさも当然と言える言葉ではなく、ルナを慰めるような言葉をかけている。

ルナがゆっくりとミラの方へ向けて歩いていく。その眼には涙が浮かんでいるのに、どこか晴れやかな顔をしていて。今から死に行くと言うのにもう後悔はないと言わんばかりの顔をしていて。

——そんなの、認められるわけがない。

「……駄目」

シャーレイが、それを止める。

ルナの手を掴んで、死刑執行人の元へ向かおうとする足を止める。

「そんなの、私が許さない。絶対に!!」

もう、親密な仲になった人を目の前で殺されたくなんてない。そんな思いを込めた目で、シャーレイはルナの手を掴んで離さなかった。それを見て、ひなたもすぐに動いた。

シャーレイが動いたんだ。ボーっとしてなんて居られる訳がない。

「ジェノサイドバスター!」

口の中の魔弾を噛み砕き、ジェノサイドバスターの発射条件を満たす。

そして、その銃口を一度ミラに向け……すぐに足元に照準を移す。

「マルチレイドツ!!」

地面に向けて、分裂したジェノサイドバスターを放つ。地面に当たったジェノサイドバスターは土煙を起こして視界を一時的に攪乱

させる。

ひなたからもミラの様子は見えないが、ミラからも見えていない。そう信じてミラに背中を向けてシャーレイの手を掴んで後ろへ向けて走り出す。

「逃げるよ!!」

「うん!」

「ひ、ひなたお姉ちゃん、本当にもういいから!!」

「そればかりは聞けない!!」

ルナの抗議の声を無視して後ろへ向かって全力疾走で走る。ミラは見えないから警戒しているのか、追ってこない。すぐ近くの曲がり角を曲がってなるべく早く土煙の中から逃げ出してミラの追撃の可能性を消す。

例えルナが死ぬ事を許容していても、こつちがそんなのは許容できない。せめて、理由を全て一から聞いてからでないとこんなには首を縦に振れるわけがない。住んでいた村の人間の命が全て散っていくのを見たひなただからこそ、十年以上も一緒に居た親友を理不尽に殺されたシャーレイだからこそ、こんな子供が死ぬのを許容する事なんて出来る訳が無かった。

ひたすら走る。現在地が分からなくても、生き残るために。全力で。

「……もう、時間無い」

——理不尽は、もう迫ってきているのに。

第二十八魔弾

逃げたひなた、シャーレイ、ルナは適当なベンチに座り込んで荒くなった息を収めていた。特に、子供のルナは喋れない位に疲労していた。

結局、ミラが追ってくることはなく、どうにか撒けたと判断すると、一気に疲労感が襲って来て三人並んで適当なベンチで息を整えていた。その中で一番早く回復したのは、やはり職業柄よく体を動かすひなただった。結構な距離を全力疾走した筈だが、ひなたは持ち前の体力や自然と身に着けた体の動かし方のおかげでどうにかこうにか早めに体力を回復させることが出来た。

もう話せるまで体力を回復させたひなたはまだ息が荒いルナを見て声をかけた。

「ねえ、ルナ。何で、あんな事を……自ら殺されようとしたの？」

「はあ……はあ………言えない」

「……そっか」

複雑な事情があるのだろう。それは分かっていたが、こうも情報が少ないと推測する事すら出来ない。が、理由を知った所でミラにルナを受け渡す事はないだろう。

最初は軽い気持ちで……子供が目の前で殺されるのが後味悪くて助けただけだったが、ここまで深く関わってしまうとどうしても助けたいと思ってしまう。この子が殺されるといふ事実を受け入れたくなくなってしまう。だから、無理矢理聞き出そうとはせずに安心させるためにルナの頭を撫でる。どちらにしろ、この子は守ると決めてしまったんだ。今さら理由なんてどうでもいい。

「……ミラが追ってこない内に宿に行こう。建物の中ならミラも余り大きく出れない筈だから」

「な、なんで？」

まだ若干息の切れているシャーレイが少しどもりながらも聞いてくる。

「宿とか、公共の場で殺人宣言なんて出来ると思う？ 誘拐もね」

「……あ、なるほど」

ミラは見た所、恨み役のような物を買うつもりだったようだが、お尋ね者になるなんて真つ平御免だと予想出来る。もし、お尋ね者になるうと容赦なしでルナを殺す気ならひなた達の前に出てくる前に殺せている筈だし、ひなた達に回収された時もひなた達を殺して馬車を破壊してでもルナを殺していただろう。

だが、それをしていない。ああして待ち伏せして交渉して荒事に発展させる気が無いように見せている。この時点で大きく事を起こす気はないと推測は出来た。じゃなければ、停留所という一般人があまり寄り付かないような場所で待ち伏せなんてせずに暗殺している筈だ。

だから、公共の建物の中に入って手出しが出来ないようにする。そうしたら、暗殺でもされない限りあちらからは手を出してこない……筈だ。ひなたが思いつく以外の事を実行されたらその時点で詰みになるとも言える危ない作戦の一つでもあるが、ミラがひなたとシャーレイを殺す気はないという行動で示した心情を利用した作戦だ。きつと、成功するはずだ。ルナが一人で外に出ない限りは、きつと上手いくはずだ。

「じゃあ、急いで移動しようか。ルナ、歩ける？」

「はあ、はあ……無理、かも……」

「分かった。じゃあ、ボクが抱えるから移動するよ」

よく考えれば、ルナは少なくとも数時間、極限状態で逃げ続けてきた。だから、休んだとはいえその後すぐに全力疾走なんてしたら足が生まれたての仔馬のようになって歩くことも困難だったとしても全くおかしくはない。

ひなたは荷物をシャーレイに任せ、魔弾を一つ握り割って体を少し強化してからルナを片手で抱っこする。おんぶしようと考えたが、片手ではずり落ちる可能性があったため、抱っこになった。

まだ息の荒いルナを抱っこしてシャーレイに地図を持ってもらい、現在地を確認してから方向もちやんと確認し、なるべく急いで移動を始める。この状態でミラと遭遇したら次も逃げられる可能性なんて限

りなく低い。だから、今もひなた達を探しているであろうミラに見つかる前に宿へと移動しなければならぬ。

シャーレイは二人分の荷物を抱えて背負ってと見るからに重そうだったが、全然苦になっっていないようにルナを抱えたひなたの方が歩くスピードが遅い位だった。

「……シャーレイ、案外力あるんだね」

「そんなに強くないよ。昔から重い物を持ち上げてたっただけで」

「重い物……？ 岩とか瓦礫とか？」

「それもあるけど、捨てられてたベッドとかタンスを拾って来る時とか、木を取ってきて机とか椅子にしたりとかしてたから」

「ああ……そういえばあの隠れ家、結構住み心地良さそうになってたもんね」

と、言っと思い出すのはシャーレイとシャロンの隠れ家。

捨てられた家を改造して作られた二人の家は案外住み心地は良さそうだった。捨てられていたものではあるがベッドやタンスもしっかりと置いてあり、テーブルや椅子は捨てられた物じゃない物が置いてあった。それが作った物だと知ったのは今さっきだが。

どうやら、スラム時代は結構遅く生きていたらしい。だが、そこまで掃除されていなかったため、そこまで手が回らなかったのか単純に面倒だったのか偽装工作だったのかは分からなかった。だが、それは過去の事で今のシャーレイは家事を完璧にマスターした誰の嫁にも出したくない。むしろ嫁な少女だ。そんな彼女が力仕事も家具の作成も出来ると知った今、もう絶対に手放したくないと改めて思った。むしろこのまま嫁になつて。

ひなたの立場が完全にATM化しそうだが、それでもいいから家事をして養ってほしい。むしろ一緒に爛れた生活を――

(……ボク、マジで欲求不満だなあ)

なんて考えた辺りですぐに思考回路を打ち切った。どうやら恋心と欲求不満は思考回路を乱してくるようだ。

ずり落ちそうになっているルナを片手の力と体の動きでルナの体を抱え直して目的地を目指して歩く。

そのまま特に何事もなく何とかひなたとシャーレイは宿の前までたどり着いた。地図を再確認し、宿の名前を確認してここがひなたとシャーレイが泊まる宿だと確認してからひなたはやっと一息ついた。「着いた……」

ただの慰安目的の温泉旅行が何故だかまた事件的な物に巻き込まれた温泉旅行になっているが、ようやく当初の予定通り温泉宿に辿り着く事が出来た。これでようやく一息つけた。

息も整ったルナを降ろしてからひなたは自分が持っていた荷物をシャーレイから受け取って宿の中に入る。

「……あれ、結構和風だ」

そして、入って驚いた。この世界は基本的に洋風で日本と同じ点なんて家に入るときには靴を脱ぐ程度だったのに温泉宿は結構和風の造りをしていた。木製の床や柱、それから温泉特有の硫黄の匂い何となく懐かしさを思い出させてくれる。だが、この入ってすぐの玄関で靴を脱ぐ、という訳ではないためそのまま土足で中に入る。日本に居た頃はホテルしか使っていなかったため、こうして温泉宿に入るのは何気に初めてだったりする。

「いらっしやいませ。本日はどのようなご用件でしょうか」

受け付けの女性が頭を下げてからそう聞いてくる。ひなたはそういえば一人増えたんだよなあ、と思いながらも用件を、予約した事を口にする。

「えっと……予約していた曉なんですけど」

「はい。では、少しお待ちください」

と、言つて受け付けの女性はファイルのような物を開いてそこに書かれている物を確認していく。が、途中でちよつと何かが引っかかったのか困ったような表情を作って口を開いた。

「その……ヒナタ・アカツキ様とシャーレイ・ランフォード様、でしよ
うか？」

「はい、そうですけど……」

「あの……こちらだと二名様になってまして、三名とはなっていない
ようです……」

「あぁつと……その事なんですけど……」

やはり、ルナの事が原因だったか、とひなたも若干困った顔を作ってから口を開いた。

「実は、所用で今朝、この子が付いてくる事になっちゃいまして……その、部屋や布団は同じでいいので食事とかそこら辺、この子の分も用意してもらおう事って出来ないでしょうか。勿論、お金も払いますから」

「……少々お待ちください」

ただの受け付けでは判断しかねないと思ったのか、受け付けの女性は難しい表情を作ると奥へ消えていった。やはり、色々は無茶苦茶だったか、と思いながら若干の気まずさ等を感じながら受け付けの女性が戻ってくるのを待つ。シャーレイとルナはあまり詳しい事が分かっていないのか、首を傾げていたり小さく欠伸をしていたりしている。何か呑気な二人だなあ、と思いながらもひなたは気が気でない様子でただ待ち続ける。

そして、たつぷり十分近くが経過した時、やっと先ほどの受け付けの女性が戻ってきた。

「すみません、お待たせしました」

「いえ、元はこちらの不手際と身勝手なので……それで、どうでしょうか?」

「確認してみた所、お部屋は用意できませんが、同じ部屋にお子様が一
人増える程度なら大丈夫との事でした。お代金はお子様の料金が加
算されますが、大丈夫でしょうか?」

「あ、はい。全然大丈夫です。本当にありがとうございます」

よかった。追い返されずに済んだ。

ひなたは笑顔で受け付けの女性の言葉に頷いて予め払っておいた料金に加えてルナの分のお金もその場で払った。お金を多めに持つてきてよかった、と過去の自分の行動を褒めてから、シャーレイに向かつて小さくガッツポーズをしてから受け付けの女性に再び視線をやる。

「では、こちらがお部屋の鍵になっています。お部屋に関してはあち

らに歩いて行けば表示がありますので、そちらを参考にしてください」

そうして受け取った鍵には大きな長方形の木製のプレートが付いており、そこには部屋の番号が書かれていた。これなら無くす事はまずないだろうし、落としてもすぐに気づく。携帯には少々邪魔だが。

「お食事等に関してはお部屋の方に案内の紙が置いてありますのでそちらを参考にしてください。それと、温泉は午前五時から午前二時までしかご利用できませんが、お部屋のお風呂は二十四時間使用可能ですので、午前二時から午前五時の間はそちらをご利用ください」

「え、部屋にもお風呂あるんですか？」

「はい、勿論ございますよ」

和風の温泉宿なんて泊まった事が無いから知らなかった。が、そうなる現実風呂に二十四時間入れる事になるのでひなた的には嬉しい。

欲求不満を解消するスペースも最初はトイレの予定だったし、色々便利になる。

「凄いなあ……じゃあ、色々が無茶振りをどうかしてくれてありがとうございます」

ひなたは改めて礼を言って頭を下げながら立ったまま寝そうなシャーレイの柔らかいほつぺたを少し引つ張って起こしてフラフラと何処かへ行こうとしていたルナの手を掴んでいなくなる前に確保してから再び頭を下げてから示された方向へ進んだ。

向かう最中に売店などを見かけ、その中に二十四時間営業のコンビニのような物を見かけ、宿の中にもそういうのがあるんだ、と物珍しい物を見た気分になってから表示に従って部屋を目指す。

宿の中は完全に和風で、部屋の前に着いたひなたは部屋を見てええ……と声を漏らした。

部屋はまず、鍵の付いた引き戸のような物があった。それはマジックミラーのようになっており、中の様子を見る事が出来ない。改めてそれに鍵をさして引き戸を引くとその中には簡易的な玄関のような物があり、下駄箱の他にスリッパがあった。そして、その正面には襖

があり、ひなたが靴を脱いでスリッパに履き替えてからそれを開けると、中はよくアニメ等で見る和風の宿泊部屋の光景が広がっていた。

「……可笑しいなあ、この世界って日本だけか」

流石に床はまんま畳、という訳では無かったが、畳っぽい色のカーペットが敷いてあり、明らかにこの世界とは噛み合わない状態部屋だった。

シャーレイもこういう部屋は初めて見たのか、部屋の中を見てぼけーつとしている。が、ルナはこの街で済んでいたという事もあったのか、特に驚く事無く部屋に入ると布団も敷いていないマットの上に寝転がってコロコロと転がり始めた。

「……まさかここまで和風だとは」

「ワフウ？ わんちゃんのこと？」

「いや、違うんだ……忘れてくれていいよ」

ひなたは何となくファンタジー世界に抱いていた色々な物を打ち碎かれる感覚をこの世界に来て初めて感じながら額に手を当てた。

ファンタジーな世界とは言え、そんなゲームや漫画のような世界じゃないんだから、こういうのがあっても可笑しくないのだと無理矢理自分に納得させてからひなたも部屋の中に入った。

第二十九魔弾

結局、温泉宿が何で和風なのかという理由に関してはよく分からなかったが、ルナが言うには少なくともこの街ではこういう感じの部屋は普通にあるとの事。どうやら、馬車で一日程度の距離だが、それでも文化は軽く違うらしい。それに対して今さらツツコミを入れるような真似はしないが、逆にこういう和風な部屋というのは日本人としては心が安らぐ物。洋風ばかりで日本が結構前から恋しくなっていたひなたとしてはありがたかった。

荷物を投げ出して部屋の隅に寝転がる。座椅子やそれに合わせた机があったがそんなのいらねえと言わんばかりに床で寝転がる。日本だと偶に気楽にやっていたそれがこうして出来るのはなんだか気分がいい。

「あ、床で寝ちゃ駄目だよ」

「いいのいいの。別に汚くないしルナもゴロゴロ転がってるし」

そう言いながら目を閉じると少しだけ眠気が襲ってくるが、それに身を任せたら絶対にそのまま寝てしまっただけで色々は無駄になってしまうので何とか意識を保って一旦起き上がり、机の上を目をやる。

そこにはお茶菓子のような物と電子ケトルがあり、ついでにクリアファイルのような物に挟まった紙を見つけた。それを見るために片手両足で移動して手に取ってそれに目を通すと、そこには先程聞いた通り、食事等について書かれていた。

どうやら、食事は時間になるとどこまで持ってきてくれるらしく、基本的には朝と夜。昼はフロント近くのレストランで鍵を見せれば食べられるらしい。布団は自分たちで敷いてくれ、との事と泊まった次の日の昼から部屋の掃除を行いに来てくれるらしい。それをキャンセルするには下駄箱の中に入っている立て札のような物を引き戸の前に立てておくらしい。それと、タオルは普通のタオルとバスタオルが予備含めて四つあるらしく、それもフロントに言えば交換してくれるらしい。着替えはなんと浴衣が用意されているらしく、タオルと共に押入れの中にあるとか。

それ以外にも色々書いてあったが、それに全て目を通してひなたは座椅子に座る。

「シャーレイも目を通しておいたら？」

「あ、じゃあそうするね」

紙をシャーレイに渡し、お茶菓子を手に取って封を切って口に運ぶ。丁度いい甘さが口の中を支配して何となく緑茶が欲しい気分にさせてくれる。

胡坐をかきながら座椅子に背を任せてシャーレイが紙に目を通すのを待っていると、ルナが転がってきてそのままの勢いでひなたの膝の上に座った。身長的にちよつとひなたの顔が隠れるが、まあ気にしない事にする。

「……何ていうか、珍しいね」

紙を見終わったシャーレイがそれを机の上に置きながら

「そうだね。ボクも久しぶり……じゃなくて初めて見たよ」

「久しぶり……？」

「何でもない。ちよつと強がっただけ」

適当であやふやな言い訳だったが、そうなの？ とシャーレイはその場で納得してくれた。深く聞こうとしなかったただけなのか優しきで追及を止めてくれたのかは分からないがそれに感謝しながらもルナを降ろしてからケトルに水を汲むために脱衣所にある蛇口に向かう。

そして蛇口で水を汲もうとしたが、ふとこの先には内風呂があるというのを思い出して軽く覗いてみた。

内風呂はひなたの家とは違ってしつかりとした造りになっており、小さな温泉がそこにあるような感じだった。軽く香る硫黄の臭いがこれも温泉なのだと分らせてくれる。それに心を軽く躍らせながら水道で水を汲んで部屋に戻り、ケトルでお湯を沸かす。

「……なんか、さつきまでのゴタゴタが嘘みたいだね」

「そうだね……」

宿に着いてから、先ほどまで張り詰めていた気持ちを一気に解いたからか心地いい疲労感が襲ってくる。それを甘んじて受け入れなが

ら三人でゆったりとした時間を過ごす。

ひなたはティーパックの緑茶を口に含み、久々の緑茶に満足しながらお茶菓子を食べる。シャーレイは初めて飲む緑茶に物珍しさを覚え、ルナは水を自分で汲んできて冷茶を一人で作ってひなたと座椅子を半分ずつで共有しながら飲んでいた。

久しぶりに緑茶を飲んだ人間と初めて飲んだ人間と何時も通り飲んでる人間の三パターンが同時に存在しているという物珍しい空間が出来上がったが、それもまたいい安らぎとなる。

「あ、温泉、いつ入る?」

そういえば、温泉宿で温泉には入りたい放題なのに温泉に入るのを忘れていた。和風の部屋という懐かしさを覚える部屋で子事を落ち着けるのは本来の目的ではない。

だが、ひなたとしては出来るなら人のいない時間帯に入りたいと思っではいる。別に心が男だからやましい気持ちで見ってしまう、という訳ではなく、斬られた腕の断面を見て心地よく思う人はいないと思うからだ。シャーレイには見せた事があるから何とも思わないが、それでもルナは何かしらショックを受けてしまう可能性があるからなるべく見せたくはないと思う。

が、そんな我儘に二人を付き合わせたくはないし、ひなたとしても温泉には入りたい。だから、ここはルナに任せる事にした。

「そうだね……ルナ、いつ入りたい?」

「いつでもいいよー」

「いつでも、か……」

結局、一番困る解答が出てきてしまった。こうなるとはてさて、どうした物か。

折角の入り放題の温泉に一日一回しか入らないというのは勿体ないしこの時間は暇だから何かして時間を潰したい。それに、昨日は風呂に入っていないから風呂に入りたい。外に出る時はローブで隠してきたが、服には黴しいまでの血が付着している。もちろん、肌にも。だから、それを洗い流したいというのがある。きつと、血の臭いも凄い事になっているだろう。

「……じゃあ、今から入りに行こうか」

「今から？」

「昨日、お風呂入ってないしね。それに、ルナもそこそこ汚れてるから」

ルナの体は泥だらけでとてもじゃないが綺麗とは言えない。少しは払い落したが、それでも細かい汚れは付着したままでどちらかと言えば汚いという印象が付いてしまう。というか、この三人の中で一番普通なのがシャーレイしかない。

だから、今のうちにサッパリしてしまおう、と思っただが故の提案だった。

「あー……うん、そうだね。そうしよっか」

「じゃあ、決まりで。シャーレイ、ちよつと申し訳ないけどボクの着替えとタオルを取ってくれないかな。片手だと落としそうで」

「はい」

隻腕という弊害はシャーレイに頼む事で解決する。やはりこういうちよつと不安な時に頼れる子がいるというのは気持ちが良い。シャーレイもそれは分かっているので文句言わず、不満も抱かずにひなたの分とルナの分も着替えとタオルを取り出す。

着替えは浴衣が三着。元々備えてある物に子供用の浴衣もあったため、ルナでも問題なく着れそうであった。ひなたに関しては丁度いいサイズがないため、ちよつと裾がダボダボになってしまうが、きつとひなたなら自分で何とかできるだろうと思っただけでひなたにタオルと浴衣を渡す。

「はい、ひなたちゃん」

「おつとつと……よし。ありがと、シャーレイ」

ひなたは片手で受け取ったそれを落としそうになるがそれを耐えて片手でそれを抱える。ルナにも着替えとタオルを渡してシャーレイも自分の着替えとタオルを用意する。

それで準備は完了。ひなたが年長という事で鍵を預かり、しっかりと部屋を出て鍵を閉めてから温泉に向かう。こういうのはちゃんと予防してないと何が起こるか分からないからしっかりと鍵を閉め

ておく。ちなみに、部屋から出た際に靴は脱いでスリッパに履き替えておいた。

部屋を出てからは表示通りに道を進んで何事もなく脱衣所の前に到着する。赤色の暖簾と青色の暖簾、それぞれこの世界の文字で女湯と男湯と書かれた暖簾の内、女湯と書かれた方を潜って脱衣所に入る。何だか若干の罪悪感やら何やらを感じたが、今は体はちゃんと女だ。入った所で誰もひなたを通報したりなんかしない。完全な合法だ。

「えつと……あ、籠に脱いだ服を入れてね。着替えも」

「あ、これだね。分かった」

ルナは色々と分かっているのか一人で黙々と服を脱いでいる。ひなたもすぐにローブを脱いで自分の服に手をかける。シャーレイもだ。

数分も経たない内に生まれたままの姿になったひなたとシャーレイは一応タオルで体を隠しながらすっぽんぽんの状態で湯船の方に突撃しに行っているルナを追う。

脱衣所と湯船を仕切るドアを開けると、そこにはひなたが想像したのと八割方同じな温泉が広がっていた。かけ湯に体を洗う場所、そして室内の大きな温泉と露天風呂へ行くためのドア。ネットの写真で見たことのあるような温泉が目の前には広がっていた。

「うわ、ひろーい」

シャーレイがそんな声を漏らした。確かに、ひなたから見ても普通の広い部類に入る温泉だった。そんな中、走って湯船に飛び込もうとするルナをひなたが確保する。

「入る前に体洗うよ」

「えー……」

「このまま入ったらお湯が汚くなっちゃうでしょ？ 最低限のマナーだよ」

「……はーい」

よく見ればかけ湯がある部分にそんな事が書かれたパネルもある。どうやら、そこら辺のマナーなどは日本と変わりはないらしい。

見た所この時間に入っている人はいないらしく、少しは五月蠅くしても誰かに迷惑になる事はなさそうだった。貸し切り状態とは少し気分が上がる。が、一応は年長なのでなるべく平静を装ってルナを片手で抱えてシャワーレイと共に洗い場に体と髪を洗いに行く。

「あ、シャワーレイ。後で髪の毛纏めてくれないかな」

「纏める……って、ゴムとか持ってきてきてないよ？」

「タオルで巻いてくれればいいから」

身体を隠していたタオルを使って髪の毛を上げればいい。バスタオルはちゃんと別に持ってきているからタオルは髪の毛を纏めつつ水気を落とすために使う。

幸いにもスポンジはあるようで、タオルは濡れていない状態で髪を巻けそうだった。

「ほら、ボクが洗ってあげるからちやっちやと洗っちゃおうか」

「うんー」

親以外と温泉に行くのは初めてなのか、洗ってあげると言っただけだとルナはちよつと嬉しそうだった。片手だとやりにくいのは確かだが、やれないことは無い。まずは適当に髪の毛から洗うか、とシャワーからお湯を出しながら考え、シャワーを壁にかけて位置を調整し、ルナの頭にシャワーが当たるようにしてからルナの髪の毛を濡らす。

「わぷっ」

「目は閉じてね」

お湯ならいいけどシャンプーが入ったら可哀想だ。シャンプーハットがあればそういう心配も無いのかもしれないが、流石にそんな物はこの場には無い。だが、何でだろうか。自分の頭にシャンプーハットを被せても違和感が無いかもしれないと思ってしまうのは。

そんな雑念を持ちながらルナの髪を十分に濡らしていると、シャワーから出るお湯が自然と止まった。後は片手でシャンプーを器用に泡立ててルナの髪を頭皮や髪そのものが痛まないように優しく洗い、優しく洗い流してから念のためにもう一度洗い、リンスやコンディショナーでちゃんと手入れをする。それだけでちよつと薄汚れ

ていたルナの髪は綺麗になった。

「じゃあ、後はルナが自分で体は洗って。ボクは背中洗ってあげるから」

「はい」

流石に前もひなたが洗うのは犯罪臭がマツハなのでルナに任せる。備えつけのスポンジを二つ持ってきてルナの背中をボディソープで洗う。ルナも背中以外を自分で洗う。その際に後ろから色々と見えてしまっていたが、ロリコンではないひなたはルナの裸に興奮する等は無かった。流石にこれで興奮していたら欲求不満が極まり過ぎている。

「はい、背中も洗ってあげたから後は自分でね」

背中を洗い終わってからひなたはスポンジの泡を落としてルナの右隣に座って自分の髪の毛を洗い始める。流石にこのままやっていたら風邪を引きそうだった。

ひなたが自分の無駄に長い髪に悪戦苦闘しながらも丁寧に洗っていると、ふとルナの視線が気になった。髪が泡だらけで余り目を開けられないが、薄く目を開けてルナを確認すると、ルナはどうやら左手の断面が気になっている様子だった。物珍しさを感じているのか、それとも別の事を考えているのかは分からないが、ひなたは一応聞いてみる事にした。

「気になる?」

「え、あ、別に気にならないよ?」

「にしては結構ジーツと見てるよね」

「気付いてたの?」

「これでも視線や気配には鋭いからね」

魔獣や害獣を駆除して生きてきたのだから、視線の一つや二つは感じ取る術を覚えている。それを凄いと思ったのか、ルナは小さく歓声を上げていた。

「で、どうして気になったのかな? ちょっと気持ち悪かった?」

ひなたの体は健康者からしたら異常そのものだ。腕が斬られた傷跡なんて見る機会は無い物だから、不快感や気持ち悪さを覚えるのは

仕方のない事だ。ひなただつて傷が塞がってすぐに見た時は自分の体の歪さに若干の不快感を覚えてしまったほどだ。

気持ち悪いのならルナから離れる気だったが、ルナの言葉は予想外の物だった。

「その……痛くないのかな、つて」

痛くないのか。まさかそんな事を聞かれるとは思っていなかったため、ひなたは一瞬きよんとしてしまつたが、すぐにルナの言葉を理解して小さく笑つた。

「大丈夫。痛くないよ」

「……ホント？」

「本当だとも。何なら、触ってみる？」

「い、いいの？ 痛くないの？」

「痛くなんてないさ。もう傷は塞がってるしね。くすぐりたいけど」

自分でも体を洗うときは触ってはいるが、やはり元腕のあった場所を触るといふのは変な違和感を覚えてしまう。それに、脇も肩と腕に守られる事無く剥き出しになっているため、触られるとやはりくすぐりたいという感覚は出てきてしまう。

髪の毛の泡を毛先から落としてみると、ルナがそーつとひなたの左手の断面を触つた。

「ひゃんっ」

余りにもゆつくりと、そーつと慎重に障られたためか、こそばゆさどくすぐつたさで思わず変な声が出てしまった。

「ひなたお姉ちゃんの声、可愛いね」

「か、からかわないですよ……」

変な声が出てしまったのは不覚だった。ちよつと顔を赤くしながら髪の毛の泡を落として何度も洗い残しが無いかを確認してからリンスとコンディショナーを付けて洗い流す。その間もルナはずつとひなたの腕の断面を興味深く触っていた。

ペタペタ、スリスリと小さな手が断面を擦り、くすぐつたさで変な声が出そうになるが何とか抑えながらスポンジに新しくボディーソープを垂らして泡立て、自分の体を洗う。血に関しては髪を洗つて

いる内にお湯で流れていったため、スポンジが赤く染まる事は無かった。

「あ、ひなたお姉ちゃん！ 背中洗ってあげる！」

「そう？ じゃあお願いしようかな。けど、その前にシャーレイ」

「んー？」

全身泡だらけで少し離れた所で体を洗っているシャーレイに声をかける。

「髪の毛まとめてくれないかな。背中洗うのに邪魔だからさ」

「ちよつと待っててねー」

シャーレイはひなたの言葉を聞いて体の泡を洗い流すとひなたの元まで歩いてきた。その際に歳の割には大きい胸が歩く度に揺れていたが、なるべく考えないようにした。直視もしないようにした。多分、直視したら色々と抑えられなくなる。

シャーレイにタオルを渡して髪の毛を纏めてもらった所でルナがスポンジを片手にひなたの背中を洗い始めた。

「じゃあ、私は先にお風呂に入ってるね」

「ボクもすぐルナと行くから」

「はーい」

シャーレイが自分のタオル片手に湯船に向かっていくのを確認してからひなたは自分の体をとつと洗う事にした。もしもこれが傷だらけの体のままならルナが怖がって近寄ってくれなかったんだろうなあ、なんて思いながらひなたは徐々に全身を泡でコーティングしていくのだった。

第三十魔弾

再びルナの手でイロイロとあったが、少し欲求不満を解消出来た……させられたひなたは何かを悟ったような表情でルナを抱えながらシャーレイの使っている湯船へと向かった。一応、ルナにはもう人の胸は揉んじゃ駄目だと言っておいたが、何だか物寂しさを感じてしまったのは気のせいだと信じたい。

「ひなたお姉ちゃん、降ろしてよー」

「またナニかされそうだから嫌」

「ごーめーんーなーさーいー」

「適当な謝罪だなおい」

「てへっ」

「くそ、可愛いから許してしまう自分がいる」

「お姉ちゃん、可愛いは正義だよ」

「待て、それは誰から聞いた」

「お母さん」

「君のお母さんは君に何をさせようとしていたんだよ……」

何だかルナの育った環境に不安が募っていくが、今さら考えた所で何も変わりはない。頭を抱えながらも抱えたルナを降ろしてからひなたも湯船につかる。若干熱い位のお湯が体の疲れを癒してくれる。

口から何かが出ていきそうな快感を覚えながらシャーレイの隣に移動する。シャーレイも温泉が気持ちいいようでかなりだらしない顔をしている。

「あぁ……」

「疲れが取れてく……」

だが、それはひなたも同じで一年ぶりの温泉に思わず顔がだらしなくなる。ルナは時々入っているから新鮮味が無いのか、単純にそう思わないだけなのか分からないが、よく分からないと言った感じの顔をしながらひなたの膝の上に乗ってひなたの胸板に背を預けた。だと言うのに普通の座椅子と変わらない感じで座られているという事実

がちよつと心を抉ってくる。

先ほどのルナにイロイロとされて洗い場の床に倒れかけたがなんとか耐える事が出来た。が、体力を思った以上に消費させられたのは変わらないため、背中を浴槽の淵に預ける。

「温泉って凄いい気持ちいいね〜」

「それな〜……」

思わず日本に居た頃の感じで返事をしてしまったが、シャーレイは特に気にしていないようだった。チラツとシャーレイの方を見れば、シャーレイは目を閉じて完全にリラックスした状態でお湯に浸かっている。その様子にエロスを感じないかと言われればそんな事はなとは言えるが、欲求不満を若干解消する事が出来たため、理性の糸がプツツリと切れる事は無かった。

が、多少はムラムラするのでそれを我慢しながらも今は温泉に自らの身を任せる。が、その途中でルナがひなたの膝の上から降りてひなたの手をひっぱる。

「どうかした?」

「お外行こう?」

その言葉を聞いて一瞬露出プレイか何かかと思ってしまったが、すぐにその言葉が露天風呂の方に行こう、という言葉だと言うのは理解できた。が、一瞬でもそんな事を考えてしまう辺り性欲の問題は結構深刻なようだ。

ちよつと火照ってきた体を冷ますのも目的に入れてシャーレイにも言つて露天風呂と室内風呂を仕切る扉に手をかけて開く。露天風呂は幾つかに分けられた温泉があつて、男湯であろう場所とは壁で仕切られていた。

「おー、広い広い」

「いっぱい温泉があるね……」

「効能とか違うんでしょ」

こう見えても煙草を吸って酒を飲んでいる以外は基本的に健康体のひなたにとっては効能なんて二の次レベルだが、体の疲労がよく取れる効能を持つている温泉があるのなら入りたい。一人でテンショ

ンを上げながら適当な温泉に向かうルナをシャーレイに一時的に任せてひなたは温泉を見て回る。

大きな壺のような浴槽の温泉だったり電気風呂だったり普通の温泉だったりサウナだったり水風呂だったりと色々温泉はあったが、その中で特に目を引いたのはとある効能を持った温泉を見つけた。

「……成長促進と疲労回復」

疲労回復は特に入りたかった物だが、もう一つの効能に心が引かれた。

成長促進。つまり、この胸と身長をもっと増やす事が出来るかもしれない温泉。下を見れば見える絶壁を山に変えられるかもしれない温泉。

魔法なんて物があるのだからもしかしたら胸が大きくなったり身長が伸びたりするかもしれない。ワンチャン。ワンチャンある。これは期待ではなくこの効能が本物なのかを確かめるかの実験なのであり、決して我欲で入るわけではなくて……

「……すぐには大きくなるまい」

「うっひゃあ!!?」

なんて考えて効能が書かれた看板をガン見していたら後ろからかけられた声にびっくりして足を滑らせかけた。

「だ、だれ!?!」

混乱して何度も転びかけながらも起爆銃を抜くために足に手をやる。が、そこにあるのは素肌だけで愛銃の姿はそこにはない。しまった、と思いつながら魔弾をすぐに生み出せるように魔力を魔弾の作成に割り当てながら声をかけてきた下手人を見る。

そして、そこにいたのは……

「……話をしに来た」

「ミ、ミラ……」

ひなたが敵対していた筈のミラだった。

ミラは攻撃する素振りどころか敵対している意思すら見せない。それがどうしてなのかは分からないが、ひなた如き何時でも殺せるのだと思われていての行動ならとても屈辱的だし惨めだった。

そんな彼女と同じ温泉に浸かっている。裸の付き合いとかそんなのを考えている暇はなかった。

話をしに来たと言ったのにそのあと何も話すことなくひなたの手を引っ張って温泉に入るミラに困惑と敵対心を抱きながらも同じ温泉に浸かり、今に至る。

隣には全裸のミラ。服を取っ払って見る彼女の裸は胸がひなた同様可哀想な状態だったが、身長はそこそこあるため、ひなたのような幼児体系ではなくスレンダーな美人、という印象だった。一本に纏められていた綺麗な髪の毛はお湯に浸からないように綺麗に纏められていた。そんな少女を真横に若干の興奮を覚えながらも警戒だけは解かない。

そうしていると、ミラが口を開いた。

「……………私、敵対する気はない」

「……………」

「……………パパの事は、あやまる」

「……………意味が分からないんだけど」

本当に、意味が分からない。

こっちは殺されかけたし保護した子を殺すために引き渡せと言われるし。これで敵対する気はないと言われても全く信用なんて出来ない。しかも表情筋が死んでいるのか知らないが、殆ど表情が変わっていない。だから表情や目の動きから何を考えているかなんて予想も出来ないのが彼女に対する警戒心や敵対心を増長させる。

「……………上手く、言えない」

「……………」

もしかしたら、この子はただの口下手なのでは、なんて思ってしまったがルナを殺そうとするキチガイの仲間の一人だということにすぐに思い出して警戒心と敵対心を取り戻す。

何故こちらから攻撃を仕掛けないのか、と思われるかもしれない

が、ここまで近づかれていた時点でひなたには何もする事ができない。それどころか魔弾使いなのに起爆銃を持っていない時点で戦う力がないような物なのに、こうも近づかれたらこっちが何か仕掛けられた途端に殺される可能性がある。だから、迂闊に手を出せない。

今朝のようにシューターを手の中で碎いて放てばいいじゃないかと思われるかもしれないが、あれは碎いた瞬間に手の中で魔弾が暴れる上に細かい制御も出来ない。だから下手すると手が暫く動かなくなってしまう可能性もある。だから、あれは最終手段の一つであり、そう安々と使えるようなものではない。だから、大人しくしているしかなかった。

「……あの子」

「あの子……ルナのこと？」

呟いたため聞いてみると、ミラは頷いた。

もしかして、まだ引き渡せと言う気なのか。そう身構えているとミラはそれに近いが、意味合いは違う事を話し始めた。

「……明後日までに、死ぬ」

「……は？」

思わず聞き返す。が、ミラは何も話さない。

明後日に、ルナが死ぬ？ それは明後日にルナを全力で殺しにかかるという意味合いなのか？ と思ったがミラが次に口にしたことはそれを否定する事だった。

「……魔獣が殺す」

「魔獣？ まさか、街中に魔獣がすでにいて、ソイツがルナを殺すって言うの？」

「……合ってる」

「くだらない冗談は止せよ」

ふざけて言った言葉を肯定され、舌打ちをしながらも呟いてしまう。

この街中に魔獣が既にいる？ 冗談じゃない。この街は結界がちゃんと張られている。だから、決して魔獣が入るなんてことはない。だというのに、もう魔獣はこの街にいるという。全くもって意味

の分からない夢物語であれば根拠のない与太話だ。

無表情故に本気で言っているように思ってしまうが、それでもミラは前言を撤回しようとしなさい。

「……………あの子、殺さない」と

「……………」

「……………もつと死ぬ」

ルナを殺さない、もつと人が死ぬ？ そんな馬鹿などその言葉を一蹴しようとしたが、脳内をとある言葉が過ぎる。

『何でも、まるで内側から爆ぜたように死んだ人間、だつてよ』

『内側から？ 爆弾でも飲んだのか？』

『いや、そこまで詳しくは無いんだが……………』

『じゃあ、ただの眉唾じゃねえのか？』

『さあな。けど、今は腕の立つ二人組がそれについて調べてるって言うぜ』

『腕の立つ二人組……………？』

『温泉街付近じゃ、トップレベルだとか』

確か、そんな言葉を駆除連合で聞いた気がする。

内側から爆ぜる。もしも、それが魔獣の仕業だとするとミラの言葉を肯定出来てしまうかもしれない。もしも、ひなたが今考え付いた可能性の一つ……………人間の体内に潜み、最後に宿主を殺す魔獣が居るのなら、それは何となくだが理解できてしまう。

人間から人間へ。人間を殺しながら人間の間を移動していく魔獣。そんなのが居たとしたら、ミラの行動にも納得がいってしまう。

ミラは、これ以上の被害を無くすためにルナを殺そうとしている。そして、ルナは自分がそれを分かっていたのに……………分かっていたから死の恐怖から逃げてしまったが、ひなた達に拾われ懐いてしまった事で、ひなた達を殺させたくないと考え、ミラに殺されようとした。少し自意識が過剰かもしれないが、何故だろうか。そう考えると納得ができてしまう。

極め付けには温泉街のトップレベルの二人組。これがもし、ミラともう一人の男だとしたら……………邪魔をしているのはひなた達の方だ。

出なくてもいい犠牲を出そうとしているのはひなた達の方だ。けど、ミラ口下手過ぎて誤解され続けているが、優しい人だから何とかひなた達、無関係な人を傷付けないようにして対話しようとしている。この予想が全て本当なら……

「……馬鹿馬鹿しい」

いや、そんな訳がない。そんな都合のいい話、ある訳がない。

人に寄生する魔獣？ そんな物、魔獣について調べたこともあつたが見たことも聞いたこともない。先ほどの想像はもしもそんな魔獣が居たとしたらという過程からの結果なのだから、前提条件である魔獣が居なければこの想像はすべて崩れ去る。

「嘘を吐くのなら、もっとマトモな事を考えたら？」

「……嘘じゃない」

「証拠は」

「……」

「なら信じられない」

言われた事を全て信じてしまっていたらこの世界では生きていけない。そう知っているからミラの事は信用できない。

「……明日の昼」

「ん？」

「……あの子、血を吐く」

「……」

「……それから、半日以上」

「半日以上……経つと、どうなる」

「……体、破裂する。死ぬ」

何か、冷たいものが背中を走ったような気がした。

『何でも、まるで内側から爆ぜたように死んだ人間、だってよ』
体が、破裂する。

『まるで内側から爆ぜたように死んだ人間』

内側から、爆ぜて死ぬ。

『内側から爆ぜたように死んだ』

それは、もしかしたら本当に魔獣が寄生して——

「そんな事、信じられるか!!」

そんな夢物語、あるものか。そんな残酷で残酷で仕方がないそんな事実が存在してたまるか。

あんな子供が既に死の運命を悟っていて、それを受け入れているなんて信じられるものか。信じてたまるものか。絶対に。

「……死ぬ直前。凄い苦痛」

「……」

「……楽に、してあげたいから」

そう言うと、ミラは立ち上がった。共に巻き上げられたお湯がひなたの顔を濡らす。

「……明日、尋ねる」

額に手を当て表情を見られないようにしているひなただが、顔から滴る水滴が先ほど巻き上げられたお湯なのか涙なのかは、他人からは分からなかった。

第三十一 魔弾

ひなたはシャーレイ達に一言だけ告げると、一人温泉から出てきた。どうもミラからあの話を聞いてから温泉で体を休める気になれず、軽くのぼせ気味だったのもあつてひなたはすぐに温泉から出た。自分の体を片手で器用に拭きながらもひなたはルナの事を……ミラの事を考える。

もしも、ミラの言葉が真実なのだとしたら、ルナは明日の昼頃、血を吐く。そして、それが起こってしまった場合はミラが言っていた事は全て正しく、ひなた達はルナに苦痛を与える時間を作ってしまったと言える。何となくの感性から起こした偽善は、ルナを苦しめるだけに終わるかもしれないと思うと、どうにも気分が上がることなく下がっていく一方だった。

ミラは一足先に温泉から出てどこかへ行ってしまった。その眼は無表情のままだったのにも関わらず、ひなたに対して同情しているようにも感じさせた。それに何となく腹が立つて握りこぶしを作っていた。

彼女は無知であつた事を責めない。だが、ひなた自身が自分が無知だという事を責めてくる。それも握りこぶしの原因だった。

体を拭き終わり浴衣を羽織り、ふと下着を持つてくるのを忘れたと気が付いたが部屋に帰るまでなら別にいいかと下着を着ずに浴衣で体を隠す。

浴衣だけを羽織つて濡れた髪の毛を洗面台のような場所にあつたドライヤーで乾かしながら自分の力のなさを、自分の理解力のなさを嘆く。もしも、ひなたが万能であつたなら、ミラの言葉をあの場で確かめられたかもしれないのに。物語の主人公のようにTS転移してきたというのに力の方は別段強くもなく、今は弱いまでである。そんな自分に腹が立つ。

ドライヤーで髪の毛を乾かし、ドライヤーを置いた所でそれに我慢できなくなり、洗面台に拳を叩き付ける。重い音が響き、拳が徐々に痛みと熱さを伴ってくる。そして、ふと鏡で自分の顔を見た。

「……ひどい顔」

自分でも整っていると思える顔は、酷く歪んでいた。復讐の事だけを考えて生きてきた時と同じような顔。しかし、そこには無力感等も交じり、悔しさも伴っていた。その顔に手を当て、自分の前髪をぐしゃつと握りつぶしながら自分の顔に爪を立てる。

無力だ。ああ、無力だ。

一年前の村でも、シャロンの時も。そして、今でも。

無力で無力で無力で。無力すぎて反吐が出る。だと言うのに、もう自分は成長限界が来てしまっている。魔力量も、使える魔法も、体も。何もかも。何もかもがもう限界だ。それを超える事なんて試し続けたが超えることなんて出来なかった。

才能も無く、知恵も無く、力も無く、権力も無く。何もかもが無い。

「……ボクは、無力だ」

魔弾使いなどという魔法使いの劣化版でしかない戦い方だけを身に着け、けれど幸せだった……なのに、全てを失って、守りたい者も守れなくて。全部、全部。両手で掬い上げていた物は片手が無くなっただことで全てボロボロと落ちていき。

新たに掬った物を落とさないようにするだけで精一杯で、その中でふとした思い付きで掬った物は今にも落ちそうになって。

ひなたには、掬った物を保持するための力も知恵も、何もない。

「……誰か、助けてよ」

顔を洗面台に押し付け、無力感をただただ噛み締める。どうにも出来ないそれを、噛み締める。

「誰か……ルナを助けてよ……」

頼れる存在なんてない。

すべて、すべて自分でなんとかしなくちゃいけない。

だというのに、それを成す力がない。掬った物を落とさないようにするための力も腕も。誰も、それを助けようとしなない。たった一人で抱え込んで、それを一緒に抱えてくれる人が、いない。

「だれか……ぼくをたすけてよお……」

助けてほしかった。

無力さを感じさせないほど、助けてほしかった。
ブラッドフォードの時も。シャロンの時も。そして、今。ルナの時
も。

ブラッドフォードを撃退して自分を含めた皆を助けてほしかった。
シャロンをゾンビから人間に戻してほしかった。ルナの中に巢食う
何かをルナの体から追い出してほしい。ひなたには、そんな力なんて
ないから。

人を食らった所で、ひなたには何かを壊すしか、出来ないのだから。
壊して救うしかできないのだから、優しさで救える救世主が欲しかっ
た。自分がなれないそれになってくれる人に、助けてほしかった。助
けてほしいのに、誰も助けてくれない。

「なにをしたんだよ……ぼくが……しゃーれいが……るなが、なにし
たんだよ……」

悪いことなんてしていないのに。

悪いことなんてせずに笑顔でいたかっただけなのに。

「なんで……ぜんぶこわしていくんだよ……」

真祖が、私欲に負けた人間が、魔獣が。全て、全て奪っていく。
涙を流そうともそれを直してくれる人なんていない。ただ理不尽
に流されて流されて。その理不尽に抗うための力がないから――

「うう……あ、ああ……」

ただ、泣くしかできなかった。

理不尽に巻かれて、泣くしかなかった。

一通り泣いても現実是不変わらない。

目を赤く晴らしたひなたは部屋に戻り、床に寝転がった。

何もする気が起きなかった。煙草を吸う気にもなれず、酒を飲む気
にもなれず、ただ何もしたくなかった。机の上に置いたホルスターか
ら除く銀の銃がこちらを見ているが、触る気にもなれなかった。

魔弾使いになって、最初は最新型の起爆銃を譲り受けて使ってい

た。

最新型の起爆銃はオートマチックピストルの形と性能をしており、マガジンを使つてリロードをするタイプだった。それをあの日。ブラッドフォードの襲撃の日に失くし、代わりにバーニーが俺はこれでいいと言いながら使つていた旧式の……今の起爆銃をお守り代わりに貰つていった。それは今思えば正解だったのかもしれないが、あの銃は今見ると無力の象徴のような感じがしてとてもじゃないが今は触る気にはなれなかった。

誰かが見れば卑屈と言うのだろう。それは自覚していたが、どうしても気持ちを整えることなんてできない。改めて思い知った無力感という物は体を動かすこともプラス方面に物事を考える事も封じてくる。もう八方ふさがりのような気持ちにさせてくれる。

「……つらい」

ひなたは、主人公ではない。

土壇場で眠れる力が覚醒したり、実は凄い力を持っていたり、有名な家の出だったり、何かに極端に性能が寄っていたり、神様から力を授かっていたり。そんなのは一切ない。

あるのは神隠し代わりに受けたTS転移だけ。小説の主人公が持っているような凄い力も凄い魔力も何も持っていない。それが分かっているからこそ、辛かった。現状をどうにか出来ないと無力感が思い知らせてくれるから、辛かった。

ルナを助ける事は、もう出来ない。公共の機関に託した所で彼女が明日、血を吐いたなら死ぬのだろう。もし、死ぬというのが嘘だったとしても、血を吐いたルナを無理に連れ出せば彼女にどんな被害が出るかわからない。そして、ミラが嘘がバレたと気付いてひなた達と戦闘に入っても勝てない。どうしようも無く、詰んでいた。それが分かったから、やる気なんて一切合切起きない。何もかもを投げ出して逃げ出してしまいたい。そうとすら思ってしまう。

が、逃げた先に何かがある？

自分を認めてくれた唯一の陽だまりを捨てて、偽善で助けた命を無責任に放り投げて、逃げて。逃げて、逃げて、逃げて逃げて逃げて逃

げて。最終的に何が残る？

後悔と無力感だ。

時には逃げるのが最適だ。だが、最適ではない時だって勿論ある。それは今であり、今ではない。

後悔と無力感を背負って再び復讐に身を任せることも出来るだろう。だが、それはひなたという人間を押し殺す可能性がある。だから、逃げ出せない。背中を向けても足は前に出ず、どうかしたのと言われたら何でもない泣きながら笑顔で返すしか出来ない。

こんな事なら、あの時……一年前に死んでおいた方が楽だったかもしれない。今なら、死んだ後の世界を極楽浄土と言うのも分かるかもしれない。

両手で守り切れなかったものを片手で守り切れる訳がないのに。

「……ああ、愚かだなあ。愚かで惨めで……誰よりも、どんな人よりも、惨めだ……」

落とさない自信なんて無いのに、落としたら壊れる物を掌で掬っていく。その結果落とした物に対して泣きじゃくり……でも、そんなの落としても全然可笑しくなかった。無理してたのに。

それが愚かで惨めで滑稽じゃなければ何になる。

「……なにも、できない」

ただ、今は時間が過ぎるのを指を咥えて見ているしかない。

無力なのだから。

第三十二魔弾

シャーレイとルナはそれから十分ちよつと経つた辺りで部屋に戻つてきた。二人とも若干顔が赤いのは単純にのぼせかけたのか下着を身に着けていない故の恥ずかしさからか。どちらにしろ、二人とも若干視線が左右に泳いでいたり浴衣の裾を抑えていたりして可愛いと思つてしまう。

こうして、シャーレイを見ていると先ほどまでの卑屈な考えを押し込められる。彼女の前でだったら、強い暁ひなたとしていられる。ただの強がりだが、今、それは有り難い事だった。悪いことを忘れることが出来るから。

「おかえり、シャーレイ。ルナ」

「た、ただいま……」

「う、うん、ただいま……」

二人ともやはり言葉の歯切れが悪い。それに、よく見るとシャーレイは胸が強調されていてエロイ。ブラをしていないからか少しの振動で揺れているようにも見えるし何より風呂上りというのもあつてエロイ。十四歳とは思えない体と表情がエロイ。おっぱい大きい。寄越せ。

なんて事を考えていると、シャーレイは顔を赤くして苦笑いを浮かべながら自分の着替えの入った鞆の元へそそくさと移動して中から下着らしき物を一式つかみ取るとこれまたそそくさと内風呂の脱衣所へ行つて何も言わずに籠つた。

「……ルナも下着着てないでしょ」

「は、恥ずかしいからやめてえ……」

「あはは……つていうか、ルナつて下着の替えないじゃん」

「うう……今日からパンツ履けないのは恥ずかしいよお……」

愛いやつめ、とひなたはグリグリとルナの頭を押し付けるように撫でる。それは自分を慰めるためでもあつたが、ルナは恥ずかしさから軽く目を回しながらされるがままだ。それがまた可愛い。

が、流石に下着無し、というのは恥ずかしいだろう。ひなたも忘れ

ていたから今は下着を着用していないため、軽く恥ずかしい。見られても相手は子供とシャーレイなのだからそんなに恥ずかしい、という訳でもないが、この格好で外には出たくない。そこでもし何かの理由で誰かに見られたら死にたくなる。というか見た相手を殺す。血を吸ってからジェノサイドバスターで塵も残さずに消滅させてやる。出来ることならジェノサイドバスターで消滅させる。

そんな物騒な事を考えていると顔の赤みが軽く失せたシャーレイが脱衣所から出てきた。どうやら無事に下着は着ることができたらしい。

「シャーレイ。下着を着たついでにルナの下着を買ってきてくれないかな」

「え？ 私？」

「実はボクも着るの忘れてたり」

と云って若干胸元を肌蹴させればあと少しでひなたの胸が完全に見えるくらいになる。それを見てシャーレイは若干顔を赤くしながら頷いた。

「あ、ルナも連れて行ってあげて。本人がいないとサイズとか確認できないうし」

「え、でも……」

「買うまではボクの下着でも着せればいいよ。少しぶかぶかだけど手で押さえたりしたら落ちないだろうし」

言って悲しくなる。違法ロリとほぼ同じ体系とか。

合法ロリだとは自覚しているが、こうやって改めて自覚すると凹む。不貞寝したくなってしまう。畜生と呟きながらシャーレイがひなたの下着を鞆から取り出すのを尻目に煙草を啜え火を付ける。この部屋は別に禁煙という訳ではないし普通に灰皿もあるので遠慮なく吸う。

ルナが下着を脱衣所で着ている間、待っているシャーレイに向けておつかいを頼む。

「シャーレイ、ついでにお酒買ってきて。カクテル系の甘いやつ」

「えー。ちっちゃい瓶のやつでいい？」

「ちよつと文句言いながらも買ってきてくれるシャーレイマジ天使」
「も、もう……」

調子のいいことを言っている自覚はあるがシャーレイの反応が楽しくてついついニヤケてしまう。やはりシャーレイは天使だ。結婚したい。

なんて事を思っていると、若干不満げな顔をしたルナが脱衣所から出てきた。

「……なんか不満げだねえ」

「う、上は大丈夫だけど……パンツが落ちちやいそう」

「シャーレイ、お酒。今物凄く酔いたい気分」

「はいはい。ルナちゃん、パンツは抑えながらでいいから行く？」

「う、うん」

「畜生！ 巨乳は滅びろ!! Aカップ以上は消えろお!!」

「それ私含めて七割以上の女の人が消えるよ!!」

「但しシャーレイは除くう!!」

「ひなたちゃんが何考えてるのか分からなくなってきたらやっただけど!!?」

Aカップ以下のひなたにとってはAカップ以上は忌むべき存在だった。シャーレイを除く。

まさかこうして巨乳を性的に興奮する対象ではなく忌むべき対象として見ることになるなんて思いもしなかった。やはり人生何があるかわからない。いや、本当に。

シャーレイが情緒不安定なひなたにせめて暴れないでね、と言告げてからルナと一緒に部屋から出て行った。流石に暴れないさ、と言いたかったが余り自信は無かったため苦笑いで見送った。

そして、部屋が静かになり、吸っていた煙草の火がフィルターの前まで来た。

「……もう一本」

誰もいない部屋で呟いて煙草を灰皿に押し付けて消火してから新たな煙草を口に啣える。余り煙草を吸わないでいると、またナーバスになって変なことを考えそうだったから。

別に、自分が貧乳だから、とか幼児体系だから、という理由でナーバスになるのではない。ルナの事で……自分の力に。だ。煙草を吸っていたらその気分も多少は晴れてくる。煙草の覚醒作用様様とも言えるが、それでもやはり考えてしまうものは考えてしまう。

ひなたの魔法では、ルナを救うことは出来ないだろう。一度回復魔法の親戚とも言える魔法の一つ、レジストの魔法を込めた魔弾をルナに噛み砕かせようとも考えたが、それはあくまでもその人に魔法を解除するという魔法であり、魔獣を体の外に出す力なんてない。一度やらせてはみるが、どうにもならないと考えていいだろう。

だが、今のひなた以上に心が苦しいのはルナの方だろう。己の命の長さを悟り、それでもひなたとシャーレイには悟られないように元気に笑顔で振るまっている。とても、苦しくて悲しくて辛くて怖い筈なのに、ああして歳相応の振る舞いと笑顔をばらまいている。ひなたよりも、心に余裕が無いのに。

「どうして、ボクは……」

主人公じゃないんだ。

その言葉は出ることはなかった。そんなもの、現実に存在するわけがないとわかりきっているから。

ご都合主義なんてない。この世は全て偶然と運で巡り巡っている。シャーレイと会えたのだったってただ運が良かっただけだ。生き残り続けたのだったって運が良かったからだ。ひなたが強かったからじゃない。ひなたが主人公だったからじゃない。ヒーローだったからじゃない。ヒロインだったからじゃない。

先ほどまでの可笑しな雰囲気での狂乱はもう出来ない。一人では、そんな気分にはなれない。だから、酒が欲しかった。二人が寝た後、自分の気持ちに誤魔化すための酒が。何も考えずにグツスリと寝れるであろう酒が。悦に浸って悪いことを忘れたまま泥のように眠るために、欲しかった。

前髪を握りつぶすように握りこみ、心のモヤモヤをそれで発散できないと思いついて大人しく煙草の灰を灰皿に落とす。

どうしようも出来ないことがこんなにも辛い。見ているだけしか

できないのがこんなにも辛い。これだったら、ミラにヘイト役を頼み、二人でミラを恨み続けた方が精神的には楽だったかも——そっちは別ベクトルで辛いと考えればすぐに分かった。

だから、今のひなたに出来る選択肢は、限られている。

ルナをミラに受け渡し、ルナが苦痛に苦しむ前に殺してもらうか。ルナの最後を見届けるか。ルナを考えれば、前者の事が一番なのかもしれない。苦痛に苦しむよりも、眠るように殺してもらおう。きつと、ミラの剣技ならルナが自覚する前に首を斬り飛ばす事だって可能だろう。魔法も使えるのなら、その魔法で気づかぬうちに殺してもらおう事も出来る。

だが、ひなたはルナに生きていてもらいたい。あんな幼い子が理不尽に死ななきやならないなんて間違っている、そう思っているから。だけど、解決策なんて思いつかない。魔獣の正体だって分からない。少なくとも、明日の昼までは、ルナが苦しまない猶予がある。その日までに手がかりがあれば、と思ったがそんな物は恐らく無いだろう。ルナの体には、可笑しい部分なんてなかった。魔獣が寄生しているであろう根拠も何も。だから、探したところで情報なんて見つかるわけがない。

駆除連合に頼んでルナに巢食う魔獣を追い出してもらおう事も考えた。だが、そんなピンポイントな魔法を使える人間なんて居るわけがないし聞いたことがない。だから、返ってくる言葉は二次災害が起きる前に殺せ、という冷酷な言葉だ。駆除連合で仕事を受けているから、聞かなくなつて分かつてしまう。

「……詰みだ」

これは、もう詰みだ。

ルナを助ける術は、ない。

気が付くと煙草はフィルター直前まで燃えており、吸える煙の量も少なくなってきた。その煙草を灰皿に押し付けるが、何時の間にか灰皿には灰と煙草が十本分ほど転がっていた。無意識に吸っていたのか、とひなたは驚き、煙草の箱を揺すって叩いて新しい煙草を出そうとするが、やはり空になっており新しい煙草なんて出てこない。

「……考え込むと煙草に逃げる癖出来ちゃったなあ」

空箱を握りつぶして新しい煙草を自分の鞆から取ってきて片手と口で封を切る。そして新たな煙草を口に咥えて煙を肺に落とす。肺に落とされた煙を吐き出すと煙草の覚醒作用が若干の快樂と気持ちよさをくれる。

完全に使い方が麻薬のそれだが、煙草なんて合法麻薬みたいな物なので今更気にしない。

新しい箱の一本を灰皿に擦り付け、新たな煙草を口に咥え、火を付ける。その辺りで丁度部屋の引き戸が開く音がして程なくしてシャーレイとルナが入ってきた。

「お待たせー……って煙草くさっ!？」

「す、すごい煙草の臭い……」

「あははー。おかえりー」

この短時間でこの量は流石に新鮮な空気を吸ってきたばかりの二人にはちよつとキツイ位の臭いになったらしい。確かに、若干臭いがキツイ様な気がしなくもないが。

「何本吸ったの……って、聞かなくても分かるか……」

「灰皿が剣山みたいになってる……」

「そんなもんだよ、喫煙者の灰皿って」

ケタケタ笑いながら煙を吸う。だが、シャーレイは軽く怒り心頭なよう。

「……煙草没収!」

「あぁ!？」

力づくで煙草を取られた。やはり、健康を気にするシャーレイにとってこの短時間で煙草を吸いまくったのは許せる事ではないらしい。さつき火を付けたばかりの煙草が灰皿に押し付けられ封を切ったばかりの煙草とライターが奪われた今、ひなたには新たな煙草を吸う手立てが無かった。

が、こうしてシャーレイとじゃれあっていれば悪いことを考えなくても済む。煙草もいらぬ。

「ほら、お酒!」

ちよつと不機嫌なシャーレイが酒瓶と取り出して渡してくれる。それはひなたの注文したカクテルのような果実酒で、家で飲んでいたりやつよりも飲みやすく甘くて美味しい酒だった。

「なんやかんやでお酒を渡してくれるシャーレイマジ天使」

「こつちの方が体に悪くないし……」

ひなたはそれをさっそく抱えて冷蔵庫の中に入れた。夜中に飲むのが楽しみだ。

「ルナ、あれは飲まないようにね？」

「お酒だから？」

「うん。ルナが飲むと捕まっちゃうから」

「はーい」

こうして話していれば、考えずに済む。

ひなたはナーバスな考えを思考の隅に追いやつて偽りない笑顔を浮かべた。全ては、明日だ。明日考えればいい。そう、明日に……

第三十三魔弾

その日はもう外には出なかった。シャーレイにとっては外はミラと会うかもしれない場所であり、ルナの下着を買いに行くときもなるべく小道を通り続けてきたため、行き帰りに時間がかかってしまっていた。ルナも自分からは動こうとはせず、ひなたはすぐに買ってきてもらった酒の封を開けてコップがなかったがためにラツパ飲みをした。

その結果、一時間もしない内に顔が真っ赤になったりしたが、吐くまで飲むことなくある程度酔ったらすぐに飲むのを止めた。

ひなたは酔いやすいものの酔っていてもテンションが高くなるだけで正気を失う事はほぼ無いため、テンションが高いだけでほぼ素面の状態で会話していた。そして、運ばれてきた豪華な夕食も食べて満腹になった腹を擦りながらひなたは返してもらった煙草を吸っていた。

「……食後の一服は違うねえ」

「もう、また煙草吸って……」

「ははは、今日はもうスパスパ吸ったりしないから」

最近ニコチンを摂取しないと気分が悪くなりかける自分がいるのが若干嫌な気分になるが、それでも吸っていないとニコチン不足に気が削がれるので吸わざるを得ない。吸血をして、食人をしたあの日から衝動を抑えるための喫煙がニコチン不足を解消するための術に変わってきてしまっている。

だが、手放せないものは仕方がない。手放せば衝動を抑えることが出来ないしニコチン不足を解消することもできない。これは仕方の無いことだ。そう、仕方がないったら仕方がない。

フィルター直前まで来た煙草を灰皿に押しつけて消して立ち上がる。

「どうしたの？」

「もっかい温泉行ってこようかなって。シャーレイ、一緒に行かない？」

「あー……私はいいかな。お腹いっぱいでもちよつと休みたい気分だから」

「そう……ルナは？　一緒に行かない？」

「行くー。また入りたい！」

「よし、じゃあ行こうか」

シャーレイはどうやら食事の余韻に浸っていたためか拒否したが、ルナの方は元気いっぱい温泉に行きたいと言った。

一人だとしても嫌な思考回路に至るかもしれないため、ルナがついてきてくれるのは嬉しかった。一緒に行くということではさつきと二人分のタオルを手に戻ってきた。が、どちらもまだ湿っていたため、これはフロントで変えてもらわないといけないな、と判断した。

「ルナ、手は繋ぐ？」

「うん、繋ぎたい」

「じゃあ、タオル持ってきてくれないかな」

両手があつたら、荷物を持って手も繋がられたのに。と浴衣の腕に通っていない左手を見る。この左手がったのなら、まだやれる事は沢山あったのでは、と思う。隻腕だという事が普通に出来る部分ができなくしてしまう。それがどうしてももどかしくて恨めしくて……

「……ひなたお姉ちゃん？　お顔、怖いよ？」

「あ、ああ……そんな顔してた？」

いけない。ルナがいるということなのにこんな事を考えていては。ルナが怖がってしまうかもしれないし何かを察してしまうかもしれない。考えないようにしないと。

もう温泉でミラに会うことはないだろう。だから、考えずにルナと一緒に温泉に入るだけにしなければ。じゃないと、本来心配する立場なのに心配されてしまう。余命短かな彼女に、要らない心配を与えてしまう。

だから、ルナが悟らないように笑顔を貼り付け、それを本心のものに変える。じゃないと、ルナにどうしようにも悟られる。

ルナと手を繋いで部屋から出てフロントへ向かう。そして、フロン

トでタオルの交換をしてもらってからやつと二人で温泉へと行く。脱衣所で浴衣を脱ぐと、ひなたはその下がすぐに全裸だった。

「あれ？ ひなたお姉ちゃん、パンツとかは？」

「あー……そういえば着るの忘れてたよ。そして着替えの分も忘れたというね」

「……あつ！ 持つてくるの忘れた！」

「部屋に帰ってから着ればいいと思うよ」

今から部屋に戻っても興が削がれてしまう。だから、温泉から出たらずぐに部屋に戻ればいい。そうしたら誰かに見られることもないだろう。それに、見られたらひなたが記憶が無くなるまでぶん殴り続けるから構わない。

ひなたはとつとと浴衣を脱ぎ去ってタオル片手にルナを待つ。ルナもすぐに浴衣と下着を脱いでからひなたと共に脱衣所と温泉を仕切る扉を開けた。

そして扉を開いてすぐ。温泉にここの客が浸かっているのが見えた。そして、すぐにその人達の視線がひなた達に行き、そしてひなたの左手に向かった。肩から切断された腕。傷口なんてもう無いが、それでも一部の人は気持ち悪いと思ってしまうだろう。ひなたは手で持っていたタオルで左手を隠すようにしてそのままルナに何も言わずに洗い場へ向かった。

「……お顔、暗いよ？」

「……ちよつと、ね」

適当な椅子に座るとひなたはルナにタオルを渡した。

「ちよつと、髪の毛を纏めてくれないかな。片手だと無理でさ」

「あ、うん……」

ひなたの暗いままの表情での無理した笑顔を見てルナは何も言うことが出来ずにひなたの髪の毛を大人しく纏めた。

「……ごめんね。やっぱり、興味本位とかで見られるの、慣れていなくてさ」

無くした左腕。服の上からなら物珍しさの視線だけで済むが、こうして全裸でいなくてはならない場所で晒してしまえば、どんな事を言

われるか分からない。シャーレイとルナは気味悪がらなかったが、他人がそう思わないという根拠なんてない。むしろ、自分の体は気持ちが悪いと自分ですら思ってしまうほどだ。

「……やっぱり、人と違うとき。ちよつと怖いんだよ。面と向かって否定されるのがさ」

臆病だと人は言うだろう。だが、人間なんてそんな物だ。特に、一度全てを失った人間なんて、臆病で臆病で……人から面と向かって拒否される事を一番に覚えてしまおう。だから、ついそれを零してしまおう。

自分の左手の跡を忌々しく撫で、ひなたは苦笑した。何時もは年上だから、お姉さんだからと粹がつてシャーレイを、ルナを引っ張るようになっているのにこうして皮が一枚剥がればボロが出てきってしまう。これも、シャーレイに依存してしまった原因だろう。拒否しない人に、依存して依存して……弱さを見せないようにする。

「……大丈夫だよ。ひなたお姉ちゃん」

そうして表情が段々と暗くなつていくひなたをルナが後ろから抱きしめた。何時の間にか、髪の毛は纏められていた。

「ひなたお姉ちゃんは強いから。きつと、大丈夫」

「ルナ……でも、ボクは……」

「大丈夫。誰かに嫌われても、ひなたお姉ちゃんには味方がいるから」
まるで子供をあやす親のように、優しく説くように耳元で囁きかける。

「怖がらないで。ひなたお姉ちゃんは、綺麗だから」

「……綺麗じゃ、ないよ。こんな穢れた体。穢れた、根源」

ひなたという要素を構築する根源の一つ。食人鬼。それを孕み続ける以上、綺麗な部分なんて、ある訳がない。それが構成する身体が、綺麗な訳がない。

「もう。そんなに卑屈じゃシャーレイお姉ちゃんの事はどうするの？」

「……」

「好きなんだよね？ 守りたいんだよね？」

「……」

会ってから丸一日も経っていないのに、バレている。それに若干の羞恥心を感じるが、それ以上に今の心は暗く、暗く沈んでいた。

自分を知らない誰かに否定されるという事は恐怖だ。言葉という見えない暴力で心を殺されるのは嫌だ。怖い。怖くて、怖くて。怖くて泣きそうになる。それがもう関わることのない羽虫の言葉であろうと、そういう人が居るといふ事実を認識してしまうと、継った人すらそう思ってしまったのではないかと疑心暗鬼になってしまう。それが、とても怖い。

シャーレイに依存している今も、そうして面と向かって否定されるのは怖い。

「……そんなんじゃ、わたしが居なくなっただ後が心配だよ」

「……………え？」

だろうね。そう返そうとした。だが、返ってきた言葉は予想外にも程があった。

居なくなっただ後。それが指すことは……

「今、なんて……」

「……好きだから。こんなわたしを助けてくれたひなたお姉ちゃんとシャーレイお姉ちゃんが」

「ま、待ってよ……」

その言葉、まるで。

「だから、時間はないけど、精いっぱいのお節介はしたいの」

「まさか、気付いて……」

「わたしの身体だもん。わたしが一番、わかってるんだよ？」

嗚呼、それは……それは、なんて……

「……先に温泉に浸かってるね」

残酷な、死刑宣告なんだ。

ルナは笑顔のままひなたから離れて洗い場から出て行った。ひなたは茫然としていたが、すぐにルナを追うために立ち上がる。が、一瞬の立ち眩みを覚えて壁に手をつく。

気付いている。自分が近いうちに死ぬことを。どうしようも出来

ないことを。本人が、一番わかってしまっている。そして、それは同時にひなたの心の中にあつた一筋の光が……ミラの言ったことは嘘でありルナはミラに命を狙われた哀れな少女ではないという物が確定してしまった瞬間だった。それを完全に理解してしまったことも、立ち眩みの原因だった。

すぐに頭を振って無理矢理立ち眩みを治すとかけ湯を浴びてから温泉に浸かっているルナの隣に座り込む。

「……事実、なんだね」

「……うん。ミラお姉ちゃんがね、シャーレイお姉ちゃんに気づかれないように教えてくれたの。ひなたお姉ちゃんに全部教えたって」「そっか……」

どうしようもない事実だった。ルナは助からないという覆す事の出来ない事実。

ルナの言葉はまるで死期を悟った人間のような、生者へ遺す言葉のような物だった。自分の私情を混ぜる事無くその人の事だけを考えたい優しい言葉。それがひなたの胸を抉っていく。

「……怖くないの?」

「……怖いよ」

ひなたはボソツと呟くように聞いた。ルナはそれに呟くようにして返した。

「お母さんはね、わたしの目の前で死んだの。ミラお姉ちゃんがお母さんを助けようって頑張ってたけど……駄目だった。見つかったのは、宿主を殺すって方法だけで……でも、ミラお姉ちゃんがそれを躊躇っている間に、お母さんは死んじゃって、それからお母さんを殺した魔獣は、わたしに……」

目の前で肉親が死ぬのを見た。それは人の心を壊すのには充分な事だ。ひなただって、恩人が死んだ事で心は折れかけ、復讐で心の中が真っ黒に染まってしまったのに。

この子は、それでも優しいままだ。生きることを諦めてしまったからこそ、彼女は共に生きるのではなく共に居てくれた人へ恩を返そうと……せめて、その人の助けになろうとしている。それが、とても悲

しくて、切なくて、泣きたくなった。

「それでね、ミラお姉ちゃんとそのお父さんはわたしに猶予をくれたの。死の三日前までに、未練を無くしてきてって」

「……」

「でもね、怖くて逃げちゃった。そしたら、ひなたお姉ちゃん達と会って……」

なんて悲しいんだ。たった数日しかない猶予を精一杯生きようとして……でも、どうにも出来ない知って。怖くて、怖くて、逃げ出してしまつて、こうして生きながらえている。

その期限も、一日しかない。ルナは、明日の夜には死んでしまう。明日の夜が、タイムリミットだ。

その時、ひなたは正常な判断ができるのか？ 自らの手でルナを楽にするか、ミラに託すか……ルナと心中するか。ルナが死ねば確実にひなたかシャーレイのどちらかが新たな犠牲者となる。

「……明日、きつとミラお姉ちゃんがわたしを迎えに来る」

「……」

「でもね、その後、ミラお姉ちゃんは一人だと壊れちゃうから」

「……壊れる？」

「うん。ミラお姉ちゃんって話すのが苦手なだけで、優しすぎるから」
その言葉を聞いて、今までミラがどうしてあんなに言葉足らずに言葉を投げかけていたのかがようやくわかった。あの子は、人に言葉を伝えるのが苦手なんだ。俗に言う、コミュ障。それもかなり重症な物だ。

そう考える真実と当てはめると、ミラの言葉全てに納得が言つてしまう。彼女は、ずっと一貫してルナを引き渡す事を要求し、あちらから攻撃をしかけることはなかった。むしろ、自衛のために剣を振るっていた。それも、鞘に入れたまま。

なんだよ、それ。と思わず呟いてしまう。そんなの、初対面の時に懇切丁寧に説明すればすれ違いなんてなく終わったことじゃないか。無意味に敵対することだつて、なかったのに。

「だからさ、ひなたお姉ちゃん。わたしが死んだらミラお姉ちゃんと

一緒にいてあげて？」

「……ミラと、一緒に？」

「うん。ミラお姉ちゃんつてずっと一人で……全部抱え込んでるから」

それを打ち明けられる友達もない。ただ一人で言葉足らずを自覚してヘイト役を引き受けて、ひなたとシャーレイの憎しみを一身に受け続けるつもりで……だけど、最後はひなたに全てを打ち明け、手を貸してもらおうとした。ルナの真実を伝え、ルナに苦痛を与えないために。

だが、それでも。ヘイト役とならなくとも、彼女は子供を殺したという事実耐える事が出来ないのだろう。子供に手をかけ、首を飛ばすという行為が心を圧迫し……壊してしまうのだろう。この一軒が、彼女の心を。

ひなたは自分の手を見る。

人を殺した事は、沢山ある。子供も殺した。大人も殺した。恩人も手にかけて。だが、それでも耐えた。折れそうな心を支えてくれたのは復讐心だった。そして、今は恩人の残した言葉とシャーレイだ。だが、手を見れば見えてしまう。赤色の染みが。助けてくれたと懇願した人の血が、正気を失った人の血が、恩人の血が、シャロンの血が。罪を忘れるなど嘲笑う。

それを、支えのない女の子が耐えられるか？

否。耐えられる訳がない。きつと、彼女は空回りする。ルナの母がなんでルナを巻き込んだと囁き、ルナはなんで死ななきゃならなかったの、と囁きつづけるのだろう。それが、彼女の心の中にしかない幻だとしても、それを真に受け続け……壊れてしまうのだろう。ルナは、きつとそれが分かっている。

「……お願い」

「……うん。ルナのお願いなら」

だから、引きうけてしまう。もう死にゆく少女の願いを、引き受けるしかなくなってしまう。

「……ありがと。後は、ひなたお姉ちゃんの卑屈が治せれば満足かな」

「卑屈って……」

そこまでジメジメとした性格ではないはずだけど、と言いたかったが今の状態はジメジメしていると言えるだろう。言い返す事は出来なかった。

ルナは暫く考えると、何か思い出したかのように言葉を紡いだ。

「自分を諦めないで」

出てきた言葉は、それだけだった。

「……自分を？」

「うん。自分は綺麗じゃない、とか自分は足手まといだ、とか自分は弱いとか……そんなことを思わないで。守るために戦う事をしてもらいけど、それで自分が死のうだなんて思っちゃダメ。絶対に生き残って生き残って……最後には笑顔で笑えるようにして」

「それは……」

自分に自信を持って。あるだけのハッピーエンドをつかみ取り、後悔を無くせ。彼女は、そう言った。

「それさえしてもらえれば、わたしは安心かな」

「自分を、諦めない……」

「うん。もつと自信持つて？ ひなたお姉ちゃんは綺麗だから」

もつと、自信を。それが今のひなたに一番重要な事だろう。弱くて弱くて、自分の体がコンプレックスで、酒と煙草とシャーレイに縋る事でなんとか自分という物を確保して。だけど、一人だと何も出来なくて。

そんなひなたを変える言葉。自分を諦めない。

弱いのが事実でも、決して諦めない。綺麗じゃないと決めつけない。そして、最後はシャーレイと共に笑いあう。そんなハッピーエンドを掴むため諦めない。それが、自分を諦めない事。

「……分かったよ。胸に刻み込んでおく」

「うん……」

ひなたにルナがもたれかかる。

こんな子供に説教されるなんて、自分が嫌になる。

が、それも今日までだ。これからは、ルナにこうして説教されなく

てもいいように強く生きる。自分を諦めずに生きていく。それを成すために、心を強くもつ。

ルナの死を迎えたとしても……彼女が安心出来るように精一杯の自分を見せて生きてハッピーエンドを掴み取る。ルナを乗り越えて、生きる。

もたれかかるルナの体温を感じながら、ひなたはそつとルナの体を抱き寄せた。自分を諦めるなど言った少女の体温を感じ、忘れないために。胸に刻み付けるために。

第三十四魔弾

ルナと共に温泉を出てから。既に子供にとっては夜遅いと言える時間だったため、ルナとシャーレイは二人で寝るための布団を先に敷き、二人で既に就寝していた。ひなたも最初はもう寝てしまおうかと思ったが、中々寝付ける事が出来ず、結局は煙草と酒を手に端に寄せた座椅子に座って偶々見える窓の外を見ながら酒を飲んでいった。

月見酒は乙なものだ。何となくそれを感じながら呆然と窓の外を見続ける。二人の寝息と外の月を肴に飲む酒は何処か美味しく感じ、しかし寂しく感じた。

ルナの言葉。それを聞きひなたは自分を諦めるなど……自分に対して卑屈になるなど言った。それに関しては全面的に受け入れなければいけないだろう。そうしないと、多分ひなたは何時か壊れる。シャーレイという抛り所に全てを預けてしまい、ひなたはもう人として終わってしまう領域にまで足をズブズブと入れ込んでしまうだろう。というか、その領域にもう片足突っ込んでしまってるのだから手遅れ感はあるが、それでもまだ全てを依存せずにはいられている……気がする。もう手遅れかもしれないけど。

自分を諦めないこと。それを胸にこれから先を生きていく。それがどれだけ難しい事か分からないが、自分が求めるハッピーエンドを常に追い求める。ひなたとシャーレイが生き残り、その周りも出来るだけハッピーエンドであり続ける。なんとも難しい注文だった。だが、それがルナの遺言のような物になるのなら……それを胸に刻み込んで生きていこう。自分とシャーレイの幸せのために。

「……シャーレイにはなんて言うべきかな」

だが、その前に一個だけ壁がある。

シャーレイに、ルナの事をどうやって説明するか、だ。これを説明できなければシャーレイはルナを離すことは無いだろう。話したとしても、何でそんな事を黙っていたのかと怒るだろう。

ひなたはシャーレイの悲しむ顔が見たくなかった。言う度胸が無かった。信じ切る事が出来なかった。だから、シャーレイに温泉から

戻ってきてと言うことは出来なかった。こんな事言ったら幻滅されるかもしれない。そう思うけど……そう思ってしまうから、言うことが出来なかった。

まだ、弱いままだ。シャーレイが傷つく事を怖がり……それ以上にひなた自身が傷つく事を恐れている。自分が大事な余り、度胸が出ない。

許してくれるかな。そんな不安が胸の中に募っていき、酒を飲む速度が上がっていく。気づけば、普通よりも小さな酒瓶はもう残りが殆どなく、残り一口程度になつてしまっていた。顔と身体の火照りも確かにいつもより酷い気がする。これは一旦寝て、明日シャーレイに全てを打ち明けた方がいいかもしれない。そう思い、ひなたは最後の一服として煙草を啜えた。

「……ひなたちゃん？」

そして、ライターの火を付けた所でシャーレイが起きた。彼女は寝ぼけ目を擦りながら煙草を啜え顔が真っ赤なひなたを見ている。

「……起きちゃった？」

「うん……」

きつと、布団が初めてで自然と目が覚めてしまったのだろう。仕方ない子だな、とひなたはライターの火を消して啜えていた煙草を箱の中に戻す。

その様子を見たシャーレイは小首を傾げながら上半身を起こしてまだハッキリとしていない意識のままひなたの方を見ている。その視線に困ったような笑顔を浮かべながらひなたはシャーレイの隣まで移動し、シャーレイの体を軽く押さえつけて再び布団の上に転がらせる。

「寝ていいよ」

「……んう」

最早人の言葉を発していないのに笑いを堪えながらも寝ころんだシャーレイの頭を撫でる。

「……大丈夫だから、大丈夫」

それは、自分に対しての言葉だったのかもしれない。シャーレイに

向けるという体裁を保った嘘偽りの言葉それを発しながらもシャーレイの頭を撫でていく。

シャーレイの寝ぼけ目が再び閉じかけた時。ひなたの左手が……左手のあった場所が疼いた。

「だい、じょうぶ……」

「……ひなたちゃん？」

そして、その疼きは徐々に痛みへと変わっていき、耐え難い痛みが左手から発せられる。

幻肢痛だった。一年前のあの日から絶えず夜に起こるもう無い筈の左手の痛み。昨日は寝ていたため、幻肢痛をスルー出来ていたが、こうして起きていては幻肢痛はどうしてもやってきてしまう。何時もなら素面で誤魔化す事も出来るそれだが、酒で心の内側が出やすくなっている今は違った。

痛みに耐える事が出来ず、左手の断面を抑えながら蹲る。あの日、剣で左手を切断された痛みが熱さと疼きで思い出すことを強制され、その痛み顔に顔を歪めて息を荒げて転げまわっても痛みは止まるどころか増していく。回復魔法も意味をなさないそれはただひなたが痛みにも何分も耐える事では消えることはない。

「ひ、ひなたちゃん？　もしかして、幻肢痛？」

「う、ん……」

荒い息を隠しながらも、しかし隠しきれずにシャーレイに打ち上げる。

最初はどうかとシャーレイは寝ぼけた頭で考えていたが、すぐに何かを思い出すと自分の浴衣を軽く肌蹴させた。何を、とシャーレイの行動に回らない頭で疑問を持ったが、すぐにひなたに何をさせようとしているのかが理解できた。

「血、吸って？」

「い、いの……？」

「何時もの事でしょう？　ほら、ルナちゃん起きちゃうかもしれないから」

シャーレイの頭はもう普段通りに回転していた。それ故に、ルナを

起こさないように小声でひなたに吸血をするように言うと、蹲らせていた上半身を起こしたひなたを抱き寄せて自分が下になるように押し倒させた。

いつもの吸血の光景。ひなたの長い銀髪がシャーレイの顔にかかり、くすぐったさを覚え、ひなたの荒くなつた吐息がひなたが発情して襲い掛かつてるようにも見えてしまい、シャーレイの何処とは言わないが、下半身のとある部分が疼く。

何となく、シャーレイは自分も興奮しているように思えてしまい、軽く顔を赤くする。だが、ひなたはそれに気付かずにシャーレイの首元に顔を埋める。そして、首筋にくすぐったさを覚えて数瞬。ひなたの犬歯がシャーレイの首筋の皮膚を突き破り、体の中に入って吸血を始める。それと同時に感じた痛みはすぐに快樂へと変わり、血を吸われる事に快樂を感じ始める。

「ん……あつ、ああ……」

「ふーっ………はあ、ちゅっ……」

シャーレイの小さな喘ぎ声が漏れ、ひなたの息を荒げながらもシャーレイの首筋に口づけをする音が小さく響く。それが何分か。シャーレイの下半身が次第に疼き、ひなたの痛みが収まってきて。

ひなたが自ら首筋から顔を離し、再び髪の毛の先がシャーレイの顔と体にかかる。ひなたの顔は酒によつて赤くなり、瞳は吸血によつて赤に。シャーレイの顔は吸血によつてもたらされた快樂によつて上気している。その状態で見合っていると、ひなたの方が先になんとかくの恥ずかしさを覚えてしまう。

「……ご、ごめんね」

「……」

恥ずかしがるひなたとそれを無言で見つめるシャーレイ。その瞳が何を思っているのかはわからないが、ひなたは何となく居心地の悪さを感じる。

「す、すぐに退くから。おやす——」

体を持ち上げ。シャーレイの上から退こうとした時。

ひなたの体がシャーレイの手によつて押さえつけられ、ひなたがそ

の力に負け倒れかける。そして、シャーレイの体がそれと同時に動き、二人の位置が一瞬にして逆転する。

「……えっ?」

ひなたの顔が間抜けなまでに困惑に包まれる。対してシャーレイの顔は赤くなっており、ひなたの酔っ払いの目とは別に、なにやら危険な……淫蕩を孕んだような眼をしていた。

その視線と現在の位置関係。なんとなくだがヤバいのではないかと、思ってしまう。主に体的な意味で。それに恥ずかしさやら妄想やらが絡まってひなたの顔が酒とは別の物で赤く染まっていく。こんな歳になって六つも年下の少女に押し倒されてこんな顔を赤くするのは何となく恥ずかしさの他にも色々と感じてしまうが、そんな妄想も次に出てきたシャーレイの言葉で考えられなくなってしまった。

「——私ね、吸血の後つてずつとムラムラしてたの」

「は、はい?」

それって、どういう事? と思ったのも束の間。シャーレイの手がひなたの胸元を伝って浴衣の中に入ってくる。

「あ、あの、シャーレイさん?」

「欲求不満の解消に付き合うって私言ったよね?」

「い、言いましたけど……」

何となくシャーレイが怖くて敬語になってしまった。だが、今のシャーレイにとってはそれは些細な事らしい。シャーレイの手が下着にも包まれていないひなたの胸を優しくまさぐる。だが、それにひなたの頭がついていけない。

「……つまり、私の欲求不満の解消に付き合ってもらってもいいよね?」

「しゃー、れい……?」

「正直、もうムラムラが限界なの。ひなたちゃんだってそうでしょ? 欲求不満で変なこと言っちゃうくらいに」

「そ、そうだけど……、怖いよ?」

そつと抜け出そうと腕を動かす。が、シャーレイが手首を掴んで体重の何割かをかける。それによってひなたの体が固定され、足を動か

しても体が動くことなくシャーレイの思うがままの状態になる。

シャーレイの視線に変な笑いが出て、身体の危険……というよりも、貞操の危険のような物を本能がビンビンに警告してくる。が、現状をどうにかする手段なんてなく、シャーレイに胸を揉まれてそれによる気持ちよさを感じてしまっている自分がいる。

「……食べちゃうね？」

「ま、待とう！一旦落ち着こう!!」

「もう無理。待てない。ひなたちゃんよりも私が限界」

「我慢して！ね!? シャーレイだって勢いだけで済ませるのは嫌でしょ!」

「大丈夫。ひなたちゃんの欲求不満も解消してあげるから」

「全然大丈夫じゃないんだけどお!!」

真っ赤な顔の二人。片方は顔が完全に発情していて片方は満更でも無いけど恐怖によって顔が軽く引き攣っている。

ひなたの微かな抵抗はシャーレイによって力づくでねじ伏せられ、ルナはそつと内風呂へ離脱し……夜は乱れて更けていく。

第三十五魔弾

チュンチュン、と鳥が鳴く声がする。その声に自然と己の意識が持っていかれ、何時の間にかひなたは目を覚ましていた。目を開けて見えるのは和風の部屋の天井。そういえば、温泉宿に泊まりに来たんだっけ、と思い出すと体を起こす。

片手だけで自分の体を起こすと、自分の体の惨状を見て軽く引いてしまう。というか、昨夜に何があったのかが思い出せないがために自分の現状が把握できていない。

「……何で全裸。しかも布団濡れてるし……」

浴衣は肌蹴るところの問題ではなく完全に脱がされている状態だった。明らかにナニかされたとは思えない惨状。しかし、周りを見ればルナがすやすやと一人で布団に潜って寝ており、シャーレイは何故か壁を正面にして壁と密着して寝ている。

本当に何があった、と思いつながら浴衣を改めて羽織なおして帯を結ぶ。とは言つても、片手なので結構四苦八苦しながらになるが。最初に受け取った時はもう結び目を絞めるだけの状態だったしルナと温泉に入った時も一緒に出て結んでもらった。だから、結構楽だったが、こうも解かれたら流石に結ぶのは口と足を使っても苦労する。

何とか汚くはあるが結び終え、一息つくくと、布団に寝ていたルナがもぞもぞと動いた。そしてそっちを見ればルナがすぐに上半身を起こした。

「……お、おはよ」

だが、ルナはかなり気まずそうな顔で挨拶をするとすぐに顔を赤くして視線を逸らした。

もしかして何か昨日やっちゃった？ と思つたが、顔を赤くして何を話そうか迷っているだけのように見えたため嫌われたわけではないと分かる。

一応、おはようと返すと、ルナは結構考え込んでいたが、小さく口を開いて囁くように声を漏らした。

「……昨日は」愁傷さま」

「……な、何のこと？」

本当に何があった。

だが、昨日はご愁傷さまと聞いた瞬間、昨日は何かがあったの思い出した。だが、細かいことはモヤのようなものがかかっていて思い出せない。そうしていると、ルナはひなたが覚えていないというのを何となく察してかなり悩んだ末に口を開いた。

「そ、その……シャーレイお姉ちゃんに、エッチな事されて……」

「……………あつ」

その言葉を聞いて完全に思い出した。

昨日、あのようにシャーレイに押し倒されたあの後。ひなたはシャーレイから逃げ出すことが出来ずに体を好きにされ、何度も犯された。しかも最後ら辺は軽く幼児退行して嫌だ嫌だと叫んでいた記憶すらある。恥ずかしい所を全部見られて触られ、限界なんてとうに超えているのに散々弄ばれ、最後にはひなたがもう耐えきれず気絶させられた。

それを思い出した瞬間、ひなたの顔が茹蟄のように真っ赤に染まる。耳まで真っ赤に染まる。そして涙目になる。

恥ずかしさやら何やらが混ざり合った複雑な感情が胸の中を渦巻き、思わず邪魔だったらしく跳ね除けられていた布団を手にとるとそれを被って布団に潜った。

「……シャーレイお姉ちゃんに色々されてエッチな声をいっぱい出してたよ」

「や、やめてえ!!」

普通に聞きたくない。しかも、九歳の女の子から。

性への知識がその歳からあるのか、というのは疑問だが、それを覚える前に恥ずかしさに消えてしまいたくなる。最初から最後までいのように犯されて、抵抗しようとも片手しか無い上にシャーレイの方が地力は強いという事実を押し付けられながら拘束され、最後は気絶させられて。思い出すだけでも恥ずかしくて消えてしまいたくなる。顔が赤くなつて体中が赤くなつていく錯覚すら覚える。

キスもされたし胸も揉まれまくったし大事な部分も触られまくつ

たし。布団が湿っているのも色んな液体が混ざっているからで。女性の体の快樂は男の時よりも凄いと聞いたことはあるが、それ以上に一年間溜め続けたせいでそういうのに敏感になりすぎていたというのもあつて。しかもそれをルナに見られていたのがもう何とも言えない。

自分で適当に処理する筈がシャーレイに気を失うまで犯された。もう訳が分からなければ恥ずかしくて声にも出したくない。

「だ、大丈夫だよ!? 見てないから!!」

「見てなくても聞かれるだけで恥ずかしいの!!」

「……そ、そうだね」

「う、ううう……」

肯定されるのも恥ずかしい。つまり、そういう声を大音量で漏らし続けていたという事だから。寧ろ隣の部屋に聞こえていないか心配になってくる。聞かれていたら……殺るしかない。

なんて思っていると、ルナがあつ。と声を漏らした。その声を聞いて一旦布団から顔を出すと、壁際で寝ていたシャーレイが体を起こしていた。

「んう……あ、おはよー」

「お、おはよう……」

「おはよ……」

ルナは気まずそうに、ひなたは羞恥心を押し殺すように答えた。

自分の上に乗って、手に痣が出来るのではないかと思うほどに強く手を握って布団に押し付け、そして体を蹂躪し尽くされた。その時のシャーレイの顔と行為がどうしても顔を見るたびに頭をチラつく。

何度拒んでも犯されて、その度に見えるシャーレイの蠱惑的でありながら獲物を甦る快感を覚えたような表情は今思い出しても背筋が冷たくなる。だが、その時の快感が、快樂がひなたの体に火を付ける材料として投下される。それを燃やす物は無いが、それがあつて何となく興奮してしまう。

だが、それが軽くトラウマにもなっているためなんとも言えない。快樂墮ちとかはしなかつたが、その寸前まで行っていたのは確実で。

シャーレイの体を見るだけでそれが想起されて軽く興奮してしまう体になってしまっている。

これ、治るのかなあ、と心配になるが何となく体に巣食う火照りを悟られないようにするため、布団の中に隠れる。下手するとまた襲われる。

「……あ、あれ？ ひなたちゃん？」

「私はこの対応は必然だと思っただけだなあ」

「うっ……だ、だって、ひなたちゃんが可愛かったんだし仕方ないよ……」

「だからって力づくで気絶するまでってどうなの……？」

「ううう……」

シャーレイはルナに場所を追われた結果、壁際で寝ていた。だが、それだけでルナの中の評価が変わるわけがなく、シャーレイへの評価は優しいお姉ちゃんから優しいけど鬼畜でエッチなお姉ちゃんへと変化していた。一緒に寝なかったのもひなたを犯し抜いた後の臭いがキツかったのと、自分も襲われたらたまらないと考えたからだ。

シャーレイは困ったような表情で布団に籠ったひなたを見る。それと同時にそーっとひなたは布団から出ようとしていたが、シャーレイを見つけると顔を恐怖に染めて布団の中に再び籠った。それに傷つかないといえば嘘といえるが、ひなたのそういう動作がシャーレイの中の加虐心を煽る。

思わず火が付きそうな自分の体を抑え、どうしようかと苦笑いする。

「い、一瞬あの時の顔してた……」

ルナが何か呟いているが気にしない。

まずは布団を片付けなければ。そののショーツとかも変えてもらわないと臭いもキツそうだ。だが、それをするには布団に籠っているひなたを引っ張り出さなければならぬ。

シャーレイはどうしようかと迷った末、ある行動に出た。

ゆつくりと布団に近づき、ニヤリと笑った。

「出てくれないと……犯すよっ」

ねつとりと、嫌らしく。冗談と思われないようにそこそこ感情を込めて。

きつと今のひなたにはこの言葉が一番効くだろうと思つて軽率に言つた言葉。だが、その言葉は……

「ヒイイイ!!」

効きすぎた。

ひなたは布団から脱兎のごとく飛びすと、そのままルナに抱き着いて彼女の背中側に回り込んだ。そして、その一部始終を見たルナはシャーレイにドン引きしている。

カタカタと震えながらルナを盾にするひなた。シャーレイ的にはそこまでトラウマになっていないと思つていたためのおふぎけだったが、昨日の事は予想以上にひなたの精神を痛めつけていたらしい。

「……あ、あれ?」

予想以上の反応に思わずへこむシャーレイ。しかし、ルナからしたらそれは必然であり、気絶するまでイロイロとやらかしたのだから考えればわかるでしょ、と軽く呆れていた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「……………シャーレイお姉ちゃん、今日は近寄らないでね」

「ひびい!」

最早シャーレイそのものがトラウマになりかけているひなた。その様子から色々複雑なシャーレイ。そしてそんなひなたを見てシャーレイの評価がガンガン下がっていつているルナ。もうこの空間はカオスの権化としか言いようが無くなつていた。

結局、その後はシャーレイが涙目で布団を片付け、臭いが酷いためシャーレイは一人内風呂に、ひなたはルナに連れられて温泉へと行き、体や髪を徹底的に洗つて臭いを落とした。

「いやー、ごめんねルナ。迷惑かけて」

「それはその……止められなかったわたしもダメだったし」

温泉に入ってサツパリしてからひなたとルナは酒を買いに行くという名目で外に出た。

ひなた自身がシャーレイに軽く恐怖を感じているのと、気まずいけれどもどちらかと一緒にいなくちやいけないというルナの利害が一致した結果の外出だったが、それだけでひなたの気分は大分変わった。シャーレイの顔は暫く見れないと思うが、普通に話すだけなら多分大丈夫なまでに回復し、ルナもその様子に一安心していた。

酒瓶をルナが持ち、もう片方の手をひなたと繋ぐ。実はシャーレイ以下の力しか持たないという衝撃的な事実が判明したひなたの手だが、ルナと手を繋ぐには弱すぎず、強すぎなかった。

まるで本物の姉に手を繋いでもらっているような錯覚にルナの表情は明るく、笑顔になっていた。

死の恐怖を一時的に忘れ、今を楽しむ。そうしないと壊れてしまいうような幼い心はひなたによって補強され、こうして笑顔を作れている。

「止められたら止められたできつと矛先はルナに行つてただろうし……」

「怖いよ!？」

ルナの性的な知識は一人で街の中をブラブラしているときに見つけた捨てられていたエロ本が元だったりするが、自分がその本のような事をシャーレイにされると考えるとゾツとする。というか、それを数時間前にたっぷりとされたひなたが不憫で仕方がない。可哀想な人、とついつい思ってしまう。

ひなた的にはもつとマイルドに。キスして互いが満足するだけで終わらせるような物が良かったのに、気が付いたらシャーレイに力づくで犯されていたというのは流石に恐怖でしかないストラウマ物なので、ルナの怖いという言葉は最もだった。

己が身体をキャパを超えた快感が襲うというのは最早一種の拷問だ。もしもシャーレイと恋人になったら毎回する時は気絶するまで。考えるとゾツとするし絶対にいつか人格に支障が出る。確実に男に

なんて戻らなくていいやとか思ってしまう。三大欲求って怖い、と思
いながらルナと手を繋いで歩く。

そして、温泉宿まで角を曲がればすぐそこ、という所で。

「……………あつ」

「うお!? ミラ!!」

何故かその角を曲がってきたミラと遭遇した。

そう、ミラとだ。

思わず驚き、ルナから手を離して起爆銃を抜きかけるが、すぐにミ
ラはもう敵ではないというのを思い出してその手を戻した。

「ビックリした……」

「……………つちも」

ミラの手には近くの店で買ったのかフランクフルトが握られてい
た。既に何本か食べたのか串がフランクフルトが入った袋から覗い
ていた。

「……………それ、もしかして朝ご飯?」

「……………そう」

と、言いながらミラは食べかけのフランクフルトを口に入れる。

それに一瞬何処か煽情的な物を感じたが、すぐにその思考回路を消
す。どうやら、シャーレイに調教されかけた分がまだ頭の中に残って
いるらしい。ミラはフランクフルトをひなたの目の前で食べ進め、食
べかけだったフランクフルトを食べ終わるとすぐに二本目を取り出
して食べ始める。

朝ご飯とミラは言っていたが、朝ご飯にしては結構重いものだし量
も多い。もしかして、見かけによらずに大食いなのかな? と思うと
何処かミラが可愛く思えてきた。

「好きなの?」

「……………かなり」

「へえ、意外。結構小食なのかなって思ってたし、好きなものもつと
アツサリ系なのかなって予想してた」

「……………果物も好き」

「女の子だもんね」

「……うん」

確かに、こうして日常会話を心に余裕を持ってしてみると、ミラはただ口下手なだけで悪い人間ではないと思える。そして、そんな少女が自ら嫌われ役を買って出ようとしている。その事実が少し悲しかった。

けど、こうしてミラの真実を知った今なら、そう考える事ができて、ミラと敵対するなんていう発想はもう浮かんでこなかった。

軽くそういう日常的な会話をしていると、ミラは買ってきたフラックフルトを食べ終わったのか、袋の上から串を片手で握り折ると、少し遠くのごみ箱に向かってそれを投げた。が、それは微妙に狙いを逸れ、ごみ箱の淵に当たって見当違いの方向へ向かう。それをひなたが起爆銃を抜いて撃つ事で軌道を修正してゴミ箱にシュートイン。それにルナとミラが拍手をしてくれる。

それに照れながら調子に乗ってガンスピンをした結果、すっぽ抜けた起爆銃がひなたの鼻っ柱に激突してひなたの苦悶の声が漏れた。ルナはそれを笑い、ミラも無表情な顔がちよつと笑顔に変わっていた。

そんな感じで少し硬かった空気が和んだ所で、ひなたは自己紹介をしていなかった事に気づき、ミラの本名も知らなかったため自己紹介をする事にした。

「そういえば。ボクはヒナタ・アカツキ。自己紹介してなかったからこの際しようよ」

「……ミラ。ミラ・バートリー・マイヤーズ」

一瞬ミドルネームを聞いて首を傾げたが、すぐにそれがミドルネームだと気が付いた。日本人だからか、ミドルネームを聞いても一瞬どいう事だ、と思ってしまう。が、これでやっとミラの本名が分かった。この際のミドルネームは苗字が二つつぽいし母方の姓かな？と勝手に思いながらもひなたは彼女の本名を記憶する。

ミラ・B・マイヤーズ。そう何度か呟いて間違えないように覚えてから改めてよろしく、と言う。ミラはそれに頷いて答えた。

「……少し、いい？」

「ん？」

自己紹介をしてからすぐ、ミラはひなたに声をかけた。それを拒む理由もないため、ひなたはそれに言葉を返す。

それを聞いて喋ってもいいと判断したのか、ミラは数秒経ってから口を開いた。

「……ルナの事」

それを聞いた瞬間、ひなたの表情が暗くなる。ルナも表情を暗くしてしまふ。

ミラの表情は変わっていないが、それでもミラは言葉を続ける。

「……今日が期限」

「……分かって、いるよ。ルナ本人からも聞いて、昨日の言葉が嘘じゃないって事も分かってる」

けど、ひなたの心の中にある感情がルナを死なせたくないと叫んでいる。こんな子供が死ぬなんて可笑しいと叫んでいる。だけど、もう救う事は出来ない。ミラのようなひなたよりも数倍強くて凄い人が救えなかった子が、たった一日で救える訳がないと知っているから。

理解はしている。だが、納得ができない。それが今のひなたの心情だった。ルナはその様子のひなたを見て自ら手をつなぐ。が、それでもひなたは胸の内のモヤモヤを取っ払う事ができない。

「……仕方ないこと」

その気持ちを汲んだのか、ミラは慰めの言葉をかける。それは、ミラが自分自身に言っているようにすら聞こえてしまふ。が、それでも納得しきれないのが人間という生き物だ。歯を食いしばり、左手で髪の毛を滅茶苦茶に掻き回そうとして、それが出来ないのに気が付いて。

ルナから手を離して彼女を抱きしめる事で何とかその癩癩にも似た感情を鎮める。

「……このままだと、ヒナタも死ぬ」

ひなたが死ぬのではなく、ひなたも死ぬ。もしかしたら、シャーレイの方が死んでしまふ。それがわかっているのに、もしかしたら希望があるのではないかと期待してしまっているが故に受け入れる事を

拒んでいる自分がある。そんな希望、ある訳がないのに期待してしまっている。

泣きじやくって解決出来ないと理解した筈なのに、受け入れる事が出来ないなんて。そんな自分の心の弱さを痛感しながらも、ただ頷く事しか出来ない。

「……………辛いのは、同じ」

分かっている。分かっているとも。ルナの話聞いてから、そんな事は。

彼女はルナの母を助けようとしていた。精一杯、焦って焦って、されども全力で。だけど、間に合わなかった結果、ルナという出なくてもいい犠牲を出してしまった。それが悔しくて辛いのは分かっている。

だけど、どうしても、どうしても。日本人として、平和ボケしたクソツタレな国でぬるま湯に浸かってきた人間としての感情が、それを認める事を許さない。もしかしたら希望があるのではないか、と様々なフィクションを見てきてしまったがために、無駄な希望を持ってしまっている。

そんな自分を嫌悪しながらも、ルナを抱きしめる手が離れない。

「……………ねえ、ひなたお姉ちゃん。わたし、シャーレイお姉ちゃんに本当のことを言ってくるよ」

「それは……………」

そうしたら、きつとルナは自らミラの元へと向かうだろう。それを止めようとひなたとシャーレイが阻もうと、もう恨まれないミラがそれを拒み阻む事でルナはその命を終わらせるだろう。それが出来てしまう布陣を、ルナがやろうとしてしまっている。止めないと、きつとルナは自らその命を終わらせに行く。ひなたとシャーレイにどうしようにもダメだった、と諦めさせ、ミラには罪悪感を植え付けずにミラが二人を止めている間に一人でひっそりと死ぬ。

それが分かっているから、抱きしめる手を離したくはなかった。離したら、そのままルナは死んでしまいそうだったから。ぎゅつと抱きしめて、逃げようとする光を押しとどめる。

「……ミラお姉ちゃん。後で剣を貸して」

「……なんで？」

「ミラお姉ちゃんに迷惑かけたくないから。近くの林で全部終わらせて来る」

「……ダメ」

「お願い」

「……絶対にダメ」

そう言うミラの目には何処か悲しさが浮かんでいた。

まるでもうすぐ泣いてしまう。そんな悲しみの淵に立っているようにも思えて、だけどそれをルナの手前、見せないようにと必死になっっているようにも見えた。

「ミラお姉ちゃん、お母さんが死んでわたしが死んじやうことを悲しんでるから。その状態でわたしを殺したら、壊れちやいそうだから」
「……いらぬ、しんぱい」

「だとしても。ミラお姉ちゃんの事が好きだから」

ああ、この子はなんて優しいのか。自分よりも人が傷つくのを恐れ、理不尽を涙を堪えて耐える。そんな聖人のような人としては壊れた心を持った、優しい子。だが、その優しさが報われる事はなく彼女は今日の夜中には命が終わる。それが分かっているからお悲しい。何でこんな優しい子が死ななきやならないんだとこの世に向かい呪詛を投げかけても罰が当たらないくらいには、この子は優しすぎてこの世界は理不尽すぎた。

ミラが剣を渡すことを拒むと、ルナはダメかあ。と小さな声で呟き、それを諦めた。ミラはそれに安心したが、ひなたにはその言葉がヤケに胸の中に引つかかった。

こういう時、優しい人はどうしたか。どうやって死んでいったか。理不尽に負け続け最後まで理不尽でその人生を不幸にも閉ざしていった人たちは映画や史実でどうやって死んでいったか。

少なくとも、ルナのような境遇の人間をフィクション、歴史の勉強共々でひなたは見たことがない。だが、そういう人の最後。それを考えながらルナの事を飲み込もうとすると胸の中に何か突っかかりが

出来てしまう。この程度じゃ理不尽は終わらない。そう言いたげな突っかかりが。

そんな事を考えるしか出来ない位に惨めで愚かだが、無力なら無力なりに、彼女の最後を寂しい物にはしたくない。そう思ってしまう。

「……取りあえず、ルナ。行つてきて。ボクは……ちよつと耐えられそうにないから」

押し殺していた悲しみが波のように襲い掛かってくる。そんな姿を見られてくれないから、とルナを無理矢理一人で宿のシャーレイの元へ行かせる。なるべく笑顔で、顔が引き攣らないように最低限の見てくれはある笑顔で。だが、その笑顔が上手く作っていたのかは分からない。もしかしたら、視線は下を向いていたかもしれないし歯を食いしばっていたかもしれない。

自分の作っていた表情を他者視点で想像することが出来ず、もしかしたら不出来だったかもしれない笑顔でルナの背中を押す。ルナはひなたの方を何度も何度も確認していたが、宿の入り口が近くなった辺りでひなたの方を見るのを止め、中に入ってしまった。それを見届けてから、ようやくひなたは表情に無理矢理張り付けていた仮初の笑顔が剥がした。その内側から出てきた素顔は、涙を堪えるだけの表情だった。

「……ボク、どんな顔だった？」

「……」

「……ごめん、変なこと聞いて」

余程酷かったのか、はたまた彼女がただ口下手だっただけなのかは不明だが、少なくともひなたが良い表情をしていなかったのだけは定かだった。

歯を食いしばりながら額に手を当ててぐしゃ、と前髪を握りつぶす。最早癖のようになったそれもやらなければマトモに思考を紡ぐことすら出来ない。情けない。二十年も生きておきながら、精神的にはシャーレイとミラよりも何十倍も脆い。日本という温室での育ちという欠点、ひなたの心をそうさせている。

少しでも心を落ち着かせようと煙草を吸おうとして、だけど今日、

腰には煙草を入れたポーチが無いのに気が付き、それにすら苛立つて髪を掻き毟る。

「ボクも、多分シャーレイも、ルナの最後には付き合うよ」

そうしないと、多分心の中で踏ん切りが付かないから。きっと、何時までもルナの事を心の中に留めて、死者に魂を引つ張っていかれるから。きつと、復讐に心を燃やしていた時のように、死に魂を惹かれていってしまった、最後には無様な死にざまを晒してしまうから。

「……相当辛い」

「今だって同じさ」

けど、ルナの最後を見届けないと、もつと辛いことになる。それが分かっているから、せめて彼女の最後を見て、心の中のモヤモヤを少しでも解消したい。

完全なエゴだ。だが、そうでもしない限りこの件に関しては踏ん切りを付ける事が出来ない。そう、心が叫んでいる。それがミラにも伝わったのか、ミラは少し視線をひなたから外してから頷いた。それがあるがとう、と伝えて何とか笑顔を作る。

その笑顔を見たミラは再び複雑な表情を作ってから、小さく笑った。

「……その笑顔」

「なにかな」

「……凄く、辛そう」

「……君もね」

二人の笑顔は、辛いものを噛み潰したような笑顔だった。

第三十六魔弾

ひなたとミラの二人は数分間、ルナの事を外で待っていたが、出てこないためシャーレイが泣いているのを慰めているか何かしているのだろうと察し、二人は近くの公園のベンチで座って時間を軽く潰す事にした。片方は浴衣で片方は今にでも戦闘しそうな服と武器。イロモノにも程があつたが、そんな外面を今さら気にする事なんてまずなかつた。

「……煙草」

「ああ、ありがと」

ベンチに座っていたひなたは席を外していたミラから新品の煙草を受け取ると早速封を切つて受け取つた。彼女の少ない言葉から察せれたのは、これは口下手で全部説明できなかった事、彼女の父がひなたに怪我をさせた事、剣でミラ的には手加減レベルだが、ひなたにとっては思いつきりのレベルで右手を叩いた事へのお詫びらしい。最初はひなたの方もじつくり話を聞かなかつたり攻撃したりしたから、と断っていたが、ミラの押しが強くて折れてしまった。

その結果が煙草一箱。何とも安い瀕死の代償だ。だが、今は煙草が一本でも欲しかつたため、かなりありがたい。一緒に買ってきてもらったマツチの火を付けてもらつて煙草に火をつけるとミラは火を握り潰して無理矢理消化した。かなりダイナミックな消化だった。

「熱くないの？」

「……私、氷魔法使い」

「ああ、もしかして手のひらに氷を作つたとか？」

「……その通り」

と、言つてミラは己の手のひらを見せた。そこには、多少溶けただけの氷が張り付いていた。どうやら、彼女は凄腕の剣士、ではなく凄腕の魔法剣士だったらしい。才能に嫉妬すると同時にこの世への不平不満を胸の内で呪詛のように吐くが、彼女の胸は昨日も見ただが絶壁だったため何となくの親近感を覚える。

しかし、幼児体系ではなくスレンダーとも言えるため、そこに関し

ては若干の嫉妬を覚えた。身長があるのをいいなあ、と思ったことは男の頃からあったが、胸があるのをいいなあ、と思ってしまう辺り、結構精神的にも女になってしまっているのかもしれない。

煙を吐きながらじつとこちらを見つめているミラの視線に何？

と返す。ミラは何も。と短く返したがどうやら煙草が気になっているらしい。視線で丸分かりだ。

「……吸ってみたら？」

「……私、未成年」

「誰も気にしないって」

どうせ一本だけだ。誰かに見つかったとしてもそうガミガミと説教なんてされないだろう。それに、ミラは普通に二十歳にだって見えるから見つかったところで何も言われはしない。煙草の箱を差し出すと、ミラは少し躊躇いながらも煙草を一本だけ拝借すると口で啜えた。

ひなたが煙草を吸うコツ等を軽く教え、ミラが煙草にマッチで火を付けた。

そして、すぐに物凄い嫌そうな表情を作ると咽た。

「けほっ」

「駄目だった？」

「……不味い」

「慣れると美味しいんだよ」

涙目で煙草の燃えて灰になった部分を氷のナイフのような物で切り捨てると残った部分をミラはひなたに渡した。やはり、初めの内というのは煙草はただ不味いだけの煙に過ぎない。が、それを何度か経験している内に煙草の味と臭いと癖というものが好きになっていく。今のひなたが正しくそれだ。

幸せと共に喫煙する量が増えていった結果のヘビースモーカーだが、それを後悔しているかと言われると否、という訳で。このままだと早死にしそうだなあ、と煙を吹かして悪いことを考えない。これがひなたの思う煙草の一番の利点だ。

一本を吸い終わり、すぐにミラの返してきた少し先端の無くなった煙草に火を付けて煙を肺に入れる。関節キスだとかは気にしない。

昨日、それ以上の事をシャーレイにやられたから。

「……ミラさ、これから行く宛てとかある？」

煙を空に向かって吐きながら隣に座るミラに聞いた。彼女はその言葉を聞いて無言で首を傾げた。

口下手に加えて無口だからこうして無言になつちやうのかなあ、と思いつながら煙草を噛んでいつも通り啜えながら言葉を発する。

「もし、行く宛てが無いならボク達と一緒に来ない？」

「……なんで？」

「ルナに頼まれちゃったからさ。それに、ボク自身も君を放つておけない」

一度右手の人差し指と中指の間に煙草を挟んで口から離してからわざとらしく煙を吐く。火から上がるような煙ではなく、わざとらしい広がり方をする煙。

いつか煙草の煙で隠し芸を仕込むのもいいかもしれない。空の青に消えていく白い煙を見送りながら言いたいことを頭の中で整理して完全に空に溶けていった煙を見送つてから灰を地面に落として足でそれを土の中に埋める。行儀は悪いがポイ捨てよりはマシだろう。携帯灰皿を持つてこなかったのが悪い。

「まあ、君つて道端で野垂れ死んでそうだし……なにより、優しいからさ」

「……別に、優しくくない」

道端で野垂れ死んでそうつていうのは否定しないのね、とひなたは苦笑いを浮かべながらミラの言葉をそんな事はないと一蹴する。

優しくなければこんなヘイト役を引き受ける事なんてできない。悪を背負つてでも犠牲を少なくようだなんて思うわけがない。小を切つて大を生かす。それをひなたは決して悪とは思わない。だから、彼女は優しいと。そう思った。だから、放つておけないとも。

「それに、一緒に来てくれるとボクも嬉しい。ボクつてシャーレイ以外とは交友無いようなモンだし」

「……ボツチ」

「二年前からね」

暗に友達が少なく寂しいから友達になつてください。ついでにルームメイトのような物にもなつてください。そうひなたは言った。それを汲んだのか、ミラはひなたの事を小さく友達いない人間、と軽く罵った。が、そんな道を好んで最近まで歩んでいたのは他でもないひなたなので苦笑いしながらそれを受け入れた。

靴の裏で煙草の火を消してから煙草の箱の中に吸殻を突っ込む。その間、ミラは少し難しい表情をしていた。が、ひなたがポケットの中に煙草を入れた辺りでひなたの方を再び向いた。

「……私、家無いから」
「ん？」

家がない？　つまりホームレス？　と思つたが、すぐに違うかと思考を改めた。

駆除連合で金を稼ぐ人間というのは家庭を持っていない限り家を持つことはまずない。依頼によつて各地を転々とし、場合によつては拠点すら変えるため、あまり家を持ちたがらない。ひなたのように一部を活動拠点と決めて家を買うような人間は結構稀な方だ。

だから、ミラも家は持つていないのだろう。恐らく、何処かの宿を転々として生きている。

「……パパもいないし」

「ああ、あの男の人？　なんかボクのような人種を恨んでいるみたいだったね」

「……色々あつた」

ひなたのような人種、というよりは吸血鬼と深い関わりもある元人間と言つたほうがいいか。ひなただつて自分がそういう種族の人間としては珍しい方面の存在だというのは自覚こそしている。

が、今度会つたらあの面をジェノサイドバスターで焦がしてやる、と思う程度には恨んではいる。アバラを折られた激痛は忘れない。

「……私もパパの手伝いしてる」

「なんだっけ。ヴラドなんちゃらの搜索？」

「……そう」

詳しい名前は忘れたが、そんな名前の存在を追つているとは言つて

いたような気がする。最早その時には意識朦朧で自分でも何を喋っているのか分からなかったレベルであったから。

「……ヒナタといれば見つかる気がする」

その言葉は、先ほどのひなたの提案を受け入れる。そう言っているようだった。

「……ということは？」

「……私もボッチだから」

「つまり？」

「……恥ずかしい」

つまり、一緒に来る、という事だろう。友達少なくて寂しいから、ひなたと一緒に行く。その言葉にひなたは思わず小さく笑ってしまった。笑われたミラはつい先日の鉄面皮はどうしたと言いたくなる位に顔を赤くして俯いてしまっている。

この子、口下手だと言われていた割には可愛い性格をしている。こうして見ると、初対面の時は結構無茶して悪役を引き受けていたのかな、なんて思ってしまったりもする。ニヤニヤしながら頭を撫でるとミラの顔は余計に赤くなっていつてひなたの手を振り払うと両手で自分の顔を覆った。かなり可愛い。思わずドキツとしてしまうくらいには。シャーレイにイジメられるんじゃないかと思ってしまうが、どうせその矛先はこっちに向くんだしいや。とシャーレイに関しては遠い目で諦める。

「じゃあ、これからよろしくね」

「……う、うん」

耳まで真っ赤なミラに声をかけると、今にも消えてしまいそうな声で反応してくれた。やはりこの子、可愛い。

その後、ミラを一通り弄ってお返しに腹パンを貰ってからひなたとミラは宿の中に入った。泊まることは出来ないが今日の夜まで部屋に居る程度ならいいだろう。

部屋に着くと、中からは二人のすすり泣く様な声が聞こえてきた。どうやら、ルナは自分の秘密を全部打ち明かし、シャーレイはそれに泣いてしまったらしい。それにつられて、ルナも。ひなたとミラはそれを壁にもたれかかって聞きながらどうした物か、と悩んでいた。

「……私、あの子に嫌われてるけど」

「分かってくれるよ。ミラは優しい子だって」

「……お姉さんぶる」

「こう見えても二十歳なんだよ？ お姉さんさ」

「……二歳上には見えない」

「自覚はしてるよ」

カラカラと笑いながら天井を見つめる。

これで、後戻りは出来ない。ルナはミラの手によってその生涯に幕を下ろす。魔獣というこの世界きつての理不尽の存在によってまだ何十年もある筈の人生を終わらせることとなる。

たった九年の人生。その最中に余命宣告を数日前にされ、死ぬことに。それがどれだけ怖くて恐ろしい事なのかひなたには想像することすら出来ない。だが、彼女を笑顔で見送らないとその人生は果たして明るく誇れる物になったのかと聞かれてもその質問を噛み潰すしかできないだろう。

仕方のないことだ。どうしようも出来ないことだ。そう自分に言ってもやはり悲しいものは悲しい。自然と目に涙が浮かびかけてしまうと、ミラが優しく肩を叩いた。その目は、同じく涙目。

ひなたよりも前にルナの母を助けようと奮迅した彼女。しかし、その努力は報われる事なくルナまで巻き込んでしまい、そのケジメを今つけようとしている。が彼女のほうが無力感と悲しみは大きいだろう。優しい彼女がルナの命をそう簡単に終わらせられる訳がない。三日の猶予も、きつと自分に踏ん切りを付けるための物でもあったのだろう。

大丈夫。と言いたげにそっとミラの手を退けると、ミラは頷いてくれた。

「……入ろうか」

「……うん」

ひなたがそう言うと、ミラはすぐに頷いてくれた。

鍵はかかかっていないため鍵を気にせず中に入ると、中ではルナとシャーレイが抱き合っ泣いていた。が、ひなたが入ってきたのを見ると、二人はすぐに袖で己の目を擦った。

「ひ、ひなたちゃん。おかえり……」

「……ただいま。ルナも」

「……おかえりなさい」

「…………おじやまします」

ミラは若干入り辛さを感じたため、小声でそう言ってコソコソと壁際に移動した。

「コミュ障かオイ。とひなたはツツコミをしたくなかったが、ひなたは改めてシャーレイとルナの前に座った。」

「……シャーレイ。ルナから聞いたよね」

「……」

「……隠すつもりはなかったんだ。ただ、言えなくて」

「ひなたちゃんは悪くないよ。誰も、悪くないよ……」

そう。誰も、悪くない。悪いのはルナに巣食う魔獣だ。それさえ居なければ、そう思ってしまう。

だが、その魔獣に向かってお前のせいで、なんて殴り掛かる事も殺すことも出来ない。それが出てくるのはルナが自然と死んだときだけで、それに向かって呪詛を吐きながら恨みをぶつけるなんて願いは叶うことは絶対ないから。

シャーレイから滲み出る悔しさと悲しさを感じながらも、ひなたは彼女に何もする事が出来ない。顔を伏せて涙を堪えるだけで――

「――けほっ」

その時、ルナが咳をした。

それと全く同時にミラが動いた。ルナの咳の際に口を隠した手をミラが無理矢理掴んで見た。

「……吐血」

ミラが小さく呟いた。それを聞いてルナはすぐにミラの手から己

の手を引つ張って取り戻した。が、ルナの口には若干の血が付着している。隠したとしても吐血をしてしまったという事はバレバレだった。

それにひなたはただ目を背ける事しか出来ず、シャーレイも息を呑むことしか出来なかった。

「……あと半日もない」

「……ごめんね。隠すつもりはなかったのに」

「……気にしない」

ミラはルナを安心させるために頭を撫でる。が、その表情が晴れる事はない。

死の恐怖。目に見えて襲ってきたそれに精神を苛まれているのだろう。だが、それは仕方のないことで責められる事ではない。が、慰めも効かないと知っているため、ただ無力感を感じるだけだ。

「……きつと、もう全身が痛い筈」

「そう、なの？」

「……痛いよ。今にも体がバラバラになっちゃいそうなくらい、痛いよ……」

ミラの言葉が本当なのかを確認すると、ルナは小さくそれを肯定した。

ルナの体を走る激痛。それはもう朝の内から起こっていた。だどいうのにルナはそれに対して弱音を吐くことなく耐え続けている。ミラはそれを知っているがためにただ目を伏せる事しか出来なかった。

そんなルナに何もしてあげることが出来ない。それがとても悔しくて辛くて。きつと、回復魔法も効かないのだろうと分かっているから余計に辛くて。

「……ねえ、最後に一つだけお願いしてもいいかな？」

そんな重い空気の中。ルナはそう言った。

拒む理由なんてない。なに？ と聞くとルナは少し無理をしたような笑顔で言葉を紡いだ。

「最後に、皆と一緒に風呂に入りたくない。露天風呂に、みんな一緒

で」

「……それくらい、お願いされなくても入ってあげるよ」

「うん。最後なんて言わずに、時間が来るまで何度でも」

「……………とうぜん」

「……………ありがとう」

そうしてひなたが立ち上がった。続いてミラも立ち上がってシャーレイも立ち上がろうとした。

そこでルナがひなたとミラに声をかけた。

「……ひなたお姉ちゃん。銃は置いていった方がいいよ。ミラお姉ちゃんも、剣は置いていかないと」

「……………確かに、そうだね。盗まれるかもしれないから」

貴重品を脱衣所に置いて行った結果、それを盗まれてしまったら間抜けだ。ルナの言葉に従って二人は銃と剣を机の上に置いた。

それをルナは見届けると、シャーレイに抱き着いてから口を開いた。

「ちよつと、シャーレイお姉ちゃんと話したい事があるから、先に行つてて」

「……………それは、ボク達には聞かれたくないこと？」

「……………うん」

「……………分かった」

ルナにも、色々とあるのだろう。ひなたとミラは先に温泉へと向かうため、ひなたはタオル、着替えを片手に、ふと酒や煙草を買いたいと思つた時用に身分証代わりに使える物と最低限の金、それから煙草と携帯灰皿を余分に持つて外へと出た。

そして、個室に残つたのはシャーレイとルナだけで、ルナはシャーレイに撫でられながら己の言いたい事を言うために、外で盗み聞きされないためにひなたとミラの足音が完全に聞こえないようになるのを待った。

そして――

「――ごめんね。大好きだよ、お姉ちゃん達」

――撃鉄が魔弾を打つ音が響いた。

第三十七魔弾

一足先に温泉の女湯の前に着いたひなたとミラ。ミラは先に受付で温泉に入るからと金を払い、ついでに着替えの下着と体を拭くタオルを受け取った。

そして温泉の入り口が見える位置に置かれたベンチに二人は座り、ひなたは一応持つてきておいた煙草を啜えて煙を吐いたり吸ったり。ミラにタオルと着替えを持つてもらい、片手で持った携帯灰皿に口だけの動きで灰を落とす。

しかし、この煙草も既に二本目。ミラに買ってきてもらった煙草の方から吸っているが、予想以上のペースにこれも明日までには吸い終わってしまうかもしれない、と察し、家から持ってきた煙草の方もカートンの半分位はこの旅行で吸い尽くしてしまうかもしれないと考えてしまう。が、まだ空になった煙草の箱は一個かそこらなのでそれは完全な気のせいなのだが。

が、既に一本吸い終わり、二本目ももう半分ほどまで吸い終わってしまったっている。ルナは先に行つて、と言っていたが、明らかに時間がかかりすぎている。あの場にいるのは戦闘能力のないシャーレイとルナなので、考えられる事ではないが、ここまでの道中で誰かに攫われたりしていても二人は抵抗が出来ない。

ルナの件で悪いことをずっと考えていてしまったからか。そんな有り得ない筈の悪い想像だけが膨らんでいく。二本目の煙草が何時の間にか根元まで火が来てしまい、慌てて伸びた灰をもうフィルター部分しかない煙草ごと携帯灰皿に入れる。

「……遅いね」

「……同感」

ミラは小さく欠伸をしてから言葉を返した。物静かな美少女、というよりは美人なミラは立っただけで何となく近寄り難いと思ってしまうが、欠伸という小さな行為だけでそれが半分ほど剥がれる。やはりガワがいいと何でも様になるなあ、と自分も見てくれは十分に美少女なのを忘れて思ってしまう。

若干クールな雰囲気の残念美少女と可愛い系美少女と文系っぽい美女。明らかに属性過多だし他人が見れば何で知り合えたのかと思うくらいバラバラだが、そういう事もまああっても可笑しくないだろうとひなたはどうでもいいことを考えながら三本目の煙草を口にす
る。

明らかに未成年のひなたが煙草を吸っている事に通行人全員が視線を向けてくるが、少し殺気を乗せて睨めば全員そそくさと去っていく。初見で二十歳だと見られた事なんてまず無いのが泣けてくる。

「……そういえば、ヒナタ」

「んー？」

「……未成年なのに煙草は危険」

「うん、それ今更過ぎないかな？」

そういえば彼女にはひなたの歳を言うのを忘れていた。

ちよっとお姉さんぶっているのか小さく微笑みながらミラは言うてくるが、ミラなんかよりもひなたは十分に年齢詐欺をしている外見だ。

「……一応成人済みなんだけど」

と、言いながらひなたは携帯灰皿を一旦仕舞ってからそれらを入れているポーチから身分証明証代わりの駆除連合のカードを見せた。

ミラはそれを見てから瞬きを何回かしてからもう一度それを見て、最後に目を擦ってからカードを見て持っていた着替えとタオルから手を放してしまい、それが全部床とベンチの上に落ちた。そこまでおい。とひなたは苛立ったが、まあ何も見せずとも信じたシャーレイが特殊とだけ思っておいてカードを仕舞う。

いそいそと着替えとタオルを拾うミラ。可愛いなおい。と思っ
てしまった。クールでカッコいい感じの雰囲気の少女がこうしてドジ
をしてその始末をしている時っていいよなあ、なんてひなたは思い
ながら携帯灰皿を再び手にもって灰を灰皿に落とす。そろそろ携帯
灰皿の容量がヤバイ。

「……外見詐欺」

「おう、そうだと。酒も煙草も結婚も意味深な方の夜遊びも出来る

女だとも」

ミラは初見の時から雰囲気等からギリギリ成人はしていないな、とは確信していたため、数分前の未成年という発言もスルーできたが、ミラの方は少なくとも年下、あつても同年代と思っていたらしく、まさか成人しているなんて、という心情の顔だ。

あ、この子予想以上に感情が表に出るな、とひなたはミラの印象を変えながら灰を携帯灰皿に落とす。

若干ニヤニヤしながらひなたは一旦立ち上がったミラに待ってて、と言うと近くの売店へ向かう。そこで温泉の中でも飲めるワンカッポの酒を買ってくるのとそれをミラに見せつけた。

「この通りちゃんと酒も買えるよ」

「……妖怪」

「アッ?」

「ご、ごめんなさい……」

流石に初めての罵倒のされ方に軽くキレるとミラはいつもワンテナンポ遅れて言葉を放つのにすぐに謝った。しかも、目を逸らして軽く頭を下げながら。

この子、ギャップ萌えが凄い。とミラの敵対しているままでは絶対に知ることが出来ない一面に心を軽く撃たれながらそんな事もう言わないですよ? と優しく声をかけた。

ミラのこのギャップ萌えがシャーレイに知られたら、もしかしたらシャーレイのドSな攻めの被害に遭うかもしれないなあ。そう思うと考えちよつと妄想すると何となく興奮してしまうが、同時に物凄い罪悪感を感じてしまう。やはり知り合いでこういう事を想像してしまうのは止そう、と反省してからもう根元まで減った煙草を携帯灰皿に落とした。

「……どう考えても可笑しい」

と、言いながらミラはひなたの頬を突いた。それにくすぐったさを覚えながらも突いてきたのに合わせて歯を食いしばって頬を自ら差し出し、ミラの指が関節とは逆方向に少しだけ曲がる。と、同時にひなたも自らの頬に若干の痛みを感じる。

「あうっ」

「何が可笑しいのかな？」

可愛いなこの子。と思いつつもワンカップを自分の隣に置く。

可笑しいと言われたが、何が可笑しいのかがさっぱり分からない。

四本目の煙草を吸おうかどうか迷っている内にミラが口を開いた。

「……肌とか、二十代に見えない」

「ん？　こんなモンでしょ」

「……気を付けてる？」

「全然。髪の毛だけは気を付けて洗ってるけど、他に関しては手付かずだけど？」

化粧なんてしていなければ肌に関して気を付けている訳でもない。本当に美容関係は何もしていない完全な素の状態だ。爪等は切りすぎないように気を付けていたりしているが、外見を見繕うために何かしていた事は無い。髪の毛だけはTSしてから自分でも綺麗だな、と思ったため傷めないように洗い方等を聞いて気を付けて洗ってはいえるが。

だが、確かにTSしてからすぐの時も何もしていないのにこんなに綺麗なのはもう完全に子供だからじゃないか、とか言われた気はする。が、体はちゃんと二十代だ。証明なんて出来ないけど、記憶が二十年分あるんだから二十歳だ。誰が何と言おうと二十歳だ。

「……世の中理不尽」

「な、何が？」

「……私は結構気を付けてるのに」

ああ、美容問題か。とひなたはミラの言葉を結びつける。

が、そうと言われても肌等に気を使ったことなんてない。一応、一か月ちよつと前までは体はエグイ位に傷だらけだったが、今はその傷跡は無くなった。

が、ふと気が付いた。魔法で傷跡を消したから肌が若返ったかのようには再生されたのではないかと。回復魔法は傷を細胞の活性化によって治す効果を持つ。だから、傷跡にかけた回復魔法は肌をキツチリ若々しく再生させたのではないかと。

と、考えたもののそれを維持する事もしていなかったのでそういう体質なのだろうと割り切った。

一応、ひなたの推測ではこの体は運動を止めた途端に横に大きくなるとなっている。今は最低限、現状と同じように体を動かせるように毎日筋肉の維持のための筋トレや走り込みはしているため、体型は変わっていないが、きつとそれを止めたら太る。栄養が送られる場所がないからきつと太る。

シャーレイもスラム時代は走り回っていたし今もその時の体力を落とさないように最低限の運動はしているし、ミラは言わずがな。だが、ひなたが思うにミラは食っても食っても太らない。

「……ミラって太りやすい?」

「……太らない」

「うん、やつぱは合ってた」

「……?」

やつぱりだ。多分、美容関係はひなたが一番で体の代謝はミラ、シャーレイはその半々といった感じだろうか。どこの三竦みだ。

そんなどうでもいい事を考えていると、ふとひなたが気が付いた。

「……シャーレイとルナ、遅くない?」

二人が遅すぎる。

ここに来てから十分以上。ひなたが既に煙草を三本吸ってそこから駄弁れる位には時間が経っているというのに、シャーレイとルナが遅い。遅すぎる。

それによくミラも気が付いたのか、表情は変わらないものの、纏う雰囲気が変わった。

もしかして、本当に二人に何かあったのか? だとすると、十分弱という時間が経過しているということはマズい展開に発展しているも可笑しくはない。人攫いが小娘二人を誘拐して数百メートル離れるのになんら造作もないレベルだ。

「……ボクが部屋を見てくる。ミラはここで待っていて」

「……二人で」

「気のせいだったら、二人とすれ違いかもしれないから。でも、もしボ

クが十分間で戻ってこなかったらここに来た道を踏んで部屋に来て。ボクもここに戻ってくる時は同じ道を踏んでくるから」

「……わかった」

ミラが不意を突かれて何かをされるよりも、ひなたが不意を突かれた方がマシだ。戦闘力はミラの方が数十倍ある。だから、もしもひなたが不意を突かれたとしてもミラはひなたに何かあったと察して全力の警戒をして不意打ちを食らわない筈だ。

ひなたはあくまでも囷。何もなければくたびれ損で済むが、何かあった場合はミラが捕まる方がリスクが高い。だから、リスクが低いほうのひなたが囷となる。

ワンカップをその場に置いてひなたは来た道を通って部屋に向かって走る。

道中、シャーレイとルナらしき人物を見つけたことはできなかった。これですれ違っているだけならいいが、違うのだとしたら本当にマズいかもしれない。ひなたも己の出来る最大限の警戒とシールドの魔弾を手に握って走る。が、道中で二人を見つけるどころか誰にも会わないまま部屋にたどり着いた。

部屋に入るために鍵のついた引き戸に手をかけるが、これが罨だとすると、開けた途端に何かマズい事が起こるかもしれない。そう思うと引き戸を引く手が止まってしまいが、それは気のせいだと己の気持ちを押し切って引き戸を引く。結果、何もなし。

そして、二枚目の、鍵のかかっていない引き戸を引く。

「シャーレイ、ルナ！」

二人の名を叫びながら中に入る。そして、その光景を見て顔色を変える。

部屋の中には、シャーレイが倒れていた。そして、テーブルの上には明らかに使われたのであろう起爆銃と何故か財布が転がっており、剣の方は完全に手つかずだった。

そして、ルナがいない。まさか、ルナが攫われたのか？ と嫌な汗が顔を伝うが、今はシャーレイだ。近くに寄ってみれば、ちゃんと息はしている。大丈夫だ、生きています。だとしたら、少し気になる事が

ある。ひなたは己の起爆銃を手にとってシリンダーを覗く。

シリンダーの中は普段は六発しつかりと装填している筈なのに一発、魔弾が無くなっていった。無くなっているのは、弾の配置的にシューターの魔弾。それも、すぐに撃てるようになっていたシューター。

もしかして。ひなたは有り得ないとは思えない光景を思い浮かべながらも気絶しているシャーレイの体を揺すって覚醒を促す。

「シャーレイ。シャーレイ、起きて」

少なくともシャーレイは生きています。そう確信したからこそ冷静を取り戻してシャーレイを揺する。

寝息を立てていたシャーレイはひなたの行動と言葉に意識を取り戻したのか、小さく声を漏らしてから目を開けた。

「……ひなたちゃん」

「うん、ボクだよ。大丈夫?」

「大丈夫って……いたっ!」

体を起こして目を擦ったシャーレイは痛むのか自分の頭を抑えて声を漏らした。

ひなたはすぐに回復魔法の魔弾を作成して気休めにもならないかもしれないが、シャーレイが抑えた部分にそつとそれを押し付けて、思いつきり圧迫することでそれを割った。これが即時傷を治すといった回復魔法ならもつとよかったのに、と思ったが無いものは仕方ない。

そして、触ってみて分かったが、頭の一部にタンコブのような物が出来ている。つまり、シャーレイは魔弾で頭を後ろから撃たれたのだろう。今この時だけ、ひなたの魔弾に人を殺せる威力がなくてよかったです。もしかもあったらと思うとゾツとしてしまう。

「あ、ありがと」

「これくらいなら。でも、何があったの? 後ろからボクの魔弾で撃たれたみたいだけど……」

それを聞くと、シャーレイは自分に何があったのかを思い返し、そして顔を青くした。

まさか、ルナの身に何か。そう思ったが、この現状的にはそれは有り得ない。あるとしたら――

「そ、その……ひなたちゃんとミラちゃんが行ってから少し経ってルナちゃんが離れて……」

「うん。それから？」

「温泉に行こうかってなって……着替えを用意していると、ルナちゃんがひなたちゃんの魔弾ってどれくらいの威力なのかを急に聞いてきたから、人が気絶する程度だよって答えたら……」

「答えたら？」

「ルナちゃんが……ごめんねって言って……それから、記憶がなくて……」

「……大丈夫。大体分かったから」

――ルナは、一人で死ぬ事を諦めていない事だ。

第三十八魔弾

シャーレイの話。そして、現在の状況からひなたはある程度の事は……いや、ルナが何をしたのかは察した。ルナは一人で死ぬために不意打ちだろうと対策出来るかもしれない、戦闘で食っているひなたとミラを追い出し、非戦闘員のシャーレイを気絶させる事によって確実に一人になれるように仕組んだ。まさかひなたもミラもシャーレイもルナがそこまでの強行手段を取るとは思わなかった。九歳の少女が死という現実を直視するだけでここまで成長するものなのか、と感心半分悔しさ半分ですぐにひなたは浴衣を脱いだ。

これからルナを探す。だから、浴衣よりも普通の洋服の方がいい。戦闘服は血塗れのままなので、適当な服を着てから足にホルスターを巻く。シャーレイにもその最中に探しに行くから着替えてくれとだけ言っておいたのでシャーレイもいそいそと着替えている。

ポーチも腰に着け終わり、改めて机の上に置かれていた財布の中を確認する。財布の中の有り金全部が取られている、という訳ではなかったが、ひなたの記憶と比べると僅かに金が減っている。安物の刃物なら買える程度の、僅かな金だ。

もしも自分の死体が見つからなかったとき、ミラの剣やひなたの銃を持っていったら迷惑になるだろうと思っただろう。何処かへ行く最中に包丁か何かを買ってそれで自殺を図るつもりだとは何となく察する事が出来た。

「……寿命が尽きかけた猫かよっ」

ミラの剣を抱え、予想以上の重さに体が傾くのを感じてからまだ準備をしているシャーレイを置いて部屋の外へと向かう。

「鍵よろしく！ 集合は……一時間後、この宿の前！」

「う、うん！」

ルナを見つけられなくても見つけられなくても一時間後には集合をしなければ確実に三人の捜索は噛み合わない。携帯電話があればこんな手間はいらないが、無い物を強請っても仕方がない。今はルナを止めないと彼女はきつと一人で死んでしまう。

そんな事、認められない。一人で最後に己の命を絶つなんていう悲しい最後、迎えさせる訳にはいかない。せめて、せめて。最後は笑顔で頑張ったねと言ってから眠るように行かせてあげたい。だから、見つけないと。見つけて、そんな悲しい最後を止めないと。

剣を抱えて走り、女湯の前へ。一人ボーツとしているミラがこちらに気付いたのを見てから剣を投げ渡す。ミラはそれを受け取り、目を白黒させていたが、ひなたの格好が浴衣ではなく明らかに動きやすい服になっているのを見て何かあったのだと察した。急いでミラは剣を腰に吊るしながら口を開いた。

「……何が」

「ルナが逃げた。一人で死ぬ気だよ」

「……………予想外」

「ボクもだ。裏をかかれたよ」

「……探さなきゃ」

「一時間後にこの宿の前で集合。そこで情報とかを共有」

「……わかった」

必要最低限の情報を知らせると、ミラはそこから大体の事を察して先に玄関に向かって走っていたひなたを追い抜いて宿の玄関から出てそのまま消えていった。明らかに人間を止めているその速さにひなたはビククリしながらも街へと飛び出す。

魔法の中には対象を感知する効果を持つ魔法があるが、ひなたのそれは範囲がかなり狭く、百メートル圏内な上に魔力のコスパも悪い。ミラも恐らく剣士をやっている事から魔法はそこまで使えないしシャーレイに関しては言わずがな。自らの足と目でルナを探すしかない。ふと上を見てみると、ミラらしき影が時々屋根から屋根へと伝って上空からルナを探している事が分かる。ひなたは刃物を扱っている店、その中でも日本という百円ショップのようかなり安いが質は良くない商品を買える場所を重点的に探す。

この近くに簡単に飛び降り自殺が出来るような崖はない。だとすると、自決手段は首を吊るか自らに火を付けるか入水。そして、包丁等の刃物で首か心臓を刺す。が、その中で焼身自殺と入水自殺に関し

ては焼身自殺は死ぬのに時間がかかり苦しい。だから、これを選ぶ事はまずないだろう。入水に關してはこの一帯には川や池は存在していないためほぼ不可能。だとすると、残っている自決方法の中で楽なのは首を吊るか心臓か喉を掻っ捌いての自決。だが、首を吊る事にはかなり面倒だしルナが首を絞めるためのロープの結び方を知っている上に実践出来るとは思わない。だから、きつと包丁を買ってそれで自殺する。そうとしか考えられなかった。

もしも包丁を買っている姿を目撃出来ればその時点で止める。そうでなければ……ミラとシャーレイに頼るしかない。

息を切らしながらも走って店と街を回り続ける。時々、人に聞き込みをしてルナの情報を聞き出す。

が、情報すら見つからない。それもその筈。ルナの特徴は現在の服は不明、九歳前後の平均的な少女で髪は金色。髪型も覚えてはいるが、ルナが髪型を変えていたらその時点で情報は倒錯する。と、なるとひなたは九歳前後の金髪の女の子、というこの街だけでも何十人の子供がヒットしそうな情報から有力な情報を見つけなければならぬ。ハッキリ言って不可能だ。

ならば包丁を買った店を特定すればいいと思うかもしれないが、それもほぼ不可能だし買った後の事を店員が知るわけがない。だから、ひなたはルナがまだこの街の中の何処かで死に場所を探している。もしくは死ぬための道具を調達している。そう信じる他無かった。

そう信じて街を走る。が、時は無情にも過ぎ去っていく。

そして、約束の一時間が経ってしまった。

「もう一時間……何も見つかってないのに……」

ひなたはルナの情報が欠片も見つからなかった事に焦燥感を感じながらもまずはシャーレイとミラと合流するために宿へと向かった。

宿の玄関では既にシャーレイとミラが戻ってきており、シャーレイは泣きそうな表情をしてミラは悔しそうな顔をしている。どうやら、二人ともルナを見つけたことは出来なかったらしい。少し遅れた事に謝罪しながらもひなたは二人を見て口を開く。

「……手掛かりは」

「……ごめんね」

「……全く無かった」

「ボクも……」

やはり。二人ともルナを見つけることは叶わなかった。

連絡手段の無い人間を見つける事はかなり難しい。どこに行くかも分からずに広い街の中を闇雲に探しても小さな少女が見つかる訳がない。この三人だっけこうして待ち合わせ場所を決めておかないと落ち合う事すら困難になってしまう。特に、今回に関してはルナが宿を出てから十分近く時間が経過している。そうなると、ルナの足でも行ける場所はかなり広範囲になるし、一時間経った今、ルナの足でも走れば余裕で街の外へだっけ行ってしまおう。

上から下から高速で駆け巡っけ探したミラも、地道に探したシャーレイも、ある程度の目星をかけたひなたも、情報を見つけれられないのは仕方ないと言える事だっけ。

それどころか、ルナがもう自殺を完了していても全く可笑しくない時間だ。発見したけど死体でした、なんて状態でも間に合わなかつた。やっぱりこうなっけしまった。としか思えないような時間が既に経過している。

だからといって搜索を打ち切るかと言われれば、否だ。探すに決まっけいる。せめて死体だけでも綺麗に埋葬してあげないと、悲惨すぎる。

「どうしたら……」

このまま闇雲に探しても見つからない。それが分かっけいるから焦燥感が募っけいく。どうしたら、どうしたら見つけることが出来るのか。そんな思いが自分の中に募っけ募っけ。思考回路の回線をそれが埋めていき、徐々に考えれる事が単調に変わっけいく。

頭を掻きながら何とかしないと、と考え続っけしていると、シャーレイが口を開いた。

「……ねえ、二人とも。ルナちゃんっけこうやっけ一人で死にたいっけ言っけた？」

「え？ あ、うん。確か言っけたよ」

ミラに剣を貸してと言つて、けれど断られて。ルナは一人で死ぬのを断念したはずだった。

「……その時に、どこで死んでくるって言つてた？　例えば、建物の中とか」

「どこで死んでくるか……？」

そういえば、そんな事を言っていた気がする。確か、その時、剣を貸してもらつて一人で死んで来ると言つたのは……

「……近くの、林」

そう、近くの林だ。

自殺現場を見られる事無く、誰かに見つけてもらえれば埋葬してもらえて見つけてもらえなければひっそりと土に還れる場所。自殺しても、誰の迷惑にもならないであろう場所。

森よりも木々は浅く、気軽に入れる場所。

「……もしかして、そこにルナが!？」

「その可能性はあるよ!」

一筋の光明が見えた。確かに、そこにいる可能性は捨てきれないし、現状唯一とも言える情報だ。だから、林を風潰しにしていけば、ルナが見つかるかもしれない。

「……走つて十分の所………林はある」

「走つて十分……きつとそこだ!」

きつと、悠長に遠い林へと向かう事はないだろう。その場合、見つかつて連れ戻される可能性があるから。それに、逃げる人間というのは近くの隠れ場に向かって走つて身を潜める。だから、そこにルナがいる可能性がかなり高い。

「ミラ、案内を!」

「………必要ない」

案内は必要ない。ミラはひなたの言葉をバツサリ斬り捨てると、ひなたとシャーレイの二人を小脇に抱えた。まるで軽い荷物を持つかのようにひよいつと二人を持ち上げた。

「………あれ?」

「………この方が速い」

と言ったミラ。

ああ、大体察したよ。とひなたは呟いた。シャーレイの表情もどこか諦めの境地に達しているように見えた。酔い止め飲んでおけばよかつたかなあ、なんて場違いな事を考えた直後、ミラが物凄い速さで走り始め、一息で屋根の上を上り、二人を抱えたまままるで忍者のように屋根の上を飛び跳ねて移動を始めた。

ああ、この子、予想以上に人外だ。と思いながら目まぐるしく変わっていく景色に気持ち悪さを感じていると、シャーレイの方からうえ、という汚いマーライオン化する寸前の声が聞こえてきた。ここで吐くと大惨事だよお、なんて思っているとひなたも気持ち悪さと顔から血の気が引いていく感覚を感じた。あ、これあと数分で吐くわ。なんて思っているながら二分ほど。どうやら街を覆う結界の外に出たらしく、地走に切り替えたミラが木々の前で立ち止まった。

大体走った時間は二分半程か。常人の四倍近くの速さで走っていたミラを改めてケンカを売っちゃいけない相手として認識しながらも優しく降ろしてもらおう。

「……………」

「お、おう……………」

思わず男っぽい言葉というか一年前はよく使っていた返事を返してしまう。

気持ち悪さを感じて口を手で抑えながらも目の前の林を見る。確かに、ここなら自殺には持つて来いとも言えるだろう。

「……………大きさは五百メートルくらい」

「小さいんだね」

「……………大体そんな感じ」

キロ単位ないだけで有情だ。これなら、ひなたの探索魔法でもなんとかなる。

すぐにひなたは倒れない程度に探索魔法を込めた魔弾を何発も作り出し、一発だけ残してミラに渡す。

「……………これは？」

「探索魔法の魔弾。これをこうやって手の中で碎けば周囲百メートル

にどんな生き物がいるかが分かるから」

言いながら、ひなたは魔弾を一発手の中で砕く。それだけでひなたの頭の中には周囲百メートルの中にいる生き物の種類とどこにいるかが分かる。今回の結果は人間は自分を含めた三人。そして、それ以外は虫や鳥等でルナだと思われる反応は一切なかった。

「ミラ、これで探してきて」

「……見つかったら、戻ってくる」

「お願い」

あとは、ミラ任せだ。申し訳ないとも思うが、ひなたとシャーレイでは時間がかかりすぎる。ここは、人よりも何倍も速く動けるミラに任せ、ひなたとシャーレイは結果が出るのを待つしかない。

もどかしい時間が、続いていく。

第三十九魔弾

ミラが林に入ってから数分が経過した。林を端から端まで己の目で探している訳ではないためそこまで時間はかからないと予想は出来るが、それでも百メートルまでしか効かない探索魔法でルナを探すのは時間がかかってしまうものだ。もしも居なかつたら、と思うと背筋が寒くなるが、それでもミラが見つけてくれるのを願うしかない。

煙草を啜えて進展のない状況に感じる焦りを抑える。こうしてミラに任せないと何もできない。そんな自分に苛立ちすら覚えてしまうが、それを覚えたところでひなたはもう自身の力をほぼ限界まで引き出しつくしたと思っっているし新たな魔法などを覚える才能すら無いためこうして歯がゆい気持ちでミラを待つしかない。

煙草でも隠し切れない焦燥感を煙草を噛むことで紛らわしていると、ふと横からの視線を感じて視線を投げた。その視線は勿論シャーレイ。彼女は暗い表情でひなたの方を見ていた。

「……どうかした？」

いけない。彼女の前でこんな事をしていたら彼女も要らぬ心配をしてしまうかもしれない。そう思いすぐに煙草を噛むのを止める。肺の中に溜まった煙を吐き出すために煙草を右手で摘まんで口から離すと、フィルターの部分にはキツカリと歯形が残ってしまった。このまま噛み続けていたら破れてしまうかもしれない。煙を吐いてから偽りの笑顔を浮かべてシャーレイに聞く。

だが、シャーレイは何も答えない。それに少しの不安と言葉に出せない感情を覚え、何となくの居づらさを携帯灰皿に煙草の灰と共に落とす。

ここでも無力感を感じてしまう。シャーレイの言いたいことを先読みして慰める事が出来たのなら、もう少し自分の事をプラスに評価できたかも知れない、と。だが、軽く情緒不安定で人でなしという自己評価を付けている状態でそんな事を出来たとしても、それをプラス評価に入れる事すら無いだろう。そんな自分が嫌になりながらも思いつきり地面に煙草を擦り付けて煙草が折れるのも気にせず消化

する。

それを灰皿に突っ込み、新たな煙草を口に咥える。ああ、こんなの、シャーレイの事をどうにか言える精神状態じゃない。一番年上で、一番年下のシャーレイを慰めなきやならないのに、こうして癩癩を起しかけている。そんな自分に苛立つて煙草の火を付けるより先に頭を搔き毟ってしまう。

「……………ごめんね」

「え？」

そうして精神が不安定な危険な人間ですよ、と態度で表すような事をして火を付けようとしたとき、シャーレイが口を開き、言葉を漏らした。

それは、謝罪の言葉だった。

思わず聞き逃しそうなそれを聞き取ったひなたはライターにかけた指を止め、火を付ける事を中断する。そんなひなたの様子を見てから、シャーレイは再び謝った。それはひなたの行動に歯止めをしてみたら、それに対する言葉なのか、それとも先ほどの謝罪の言葉の上塗りなのか。それはひなたには分からず、どんな言葉をかければいいのか分からない。

取り敢えずの一言を自分の行動の頭に付けてから火を付ける。揺ら揺ら揺れる火が煙草の先端を熱し、吸っている呼吸に加えて熱い煙が混ざってきた所でようやく煙草に火が付いたのを確認し、すぐにライターの火を消してから一度吸った煙を外へと吐き出す。

その一連の行動が終わるのを待っていたのか、煙を吐き出したひなたを見てから、シャーレイは口を開いた。

「……………私が、もっと注意していれば、ルナちゃんは……………」

ああ、そういう謝罪か。煙を肺に送りながらやっとな理解した。

彼女は責任を感じてしまったのだろう。ルナが一人で死ぬ機会を与えてしまったことに。こうして捜索に乗り出すことになってしまった原因作りに。

自分の行動のせいで一人の子供が悲しい死をたった一人で迎えようとしている。それがとても心を揺さぶり、締め付けて離れてくれな

いのだろう。泣きそうな顔で、苦しそうな顔で懺悔する彼女にかける言葉を胸の内を掘って探すが上辺のみの言葉だと思われるなげなしの言葉しか見つける事が出来ず、煙草を強く噛む。

だが、彼女に上つ面を取り繕うような言葉すらかけないのはきつと彼女の心を更に痛めつける。優しい彼女の事だから、声をかけられないうりもかけてもらわないと壊れてしまう筈だとすぐに考えを改め、胸の内から出てきた言葉を煙と共に吐き出す。

「……シャーレイのせいじゃない。誰のせいでも、ないよ」

いつか言った気がする言葉。いつか考えた気がする言葉。そんな言葉は果たしてシャーレイの心を癒してくれるのか。そんな気持ち一杯で一杯で、ひなたの心の方が押しつぶされそうになる。

ルナの死、それへの慟哭とこの世への恨みを吐き、そしてルナに慰められ、彼女を送ろうと決心しても、この心は弱くて脆くて、シャーレイの言葉と態度一つで潰れそうになる。力を得ても心は弱いままで……いや、弱くなってしまつて。苦虫を噛み潰したような表情は変える事が出来なくて。己を主人公と思つていないから、思えないから気の利いた言葉一つ浮かんでこなくつて。結局上つ面の言葉で場を濁して慰めようとする。奇跡をつかみ取る事すら出来ずにこうして苦痛に顔を歪めるしかできない。

二人とも、互いが辛くて悲しい事が分かっているから、この悲しみは共有こそ出来ても消すことなんて出来ないから。シャーレイもこれ以上自分を責めてもひなたが悲しむだけだと分かっているから、二人ともそれから先は黙るしかなかった。互いの言葉が互いに対してどんな棘を持つているのかが分からない以上、下手なことを口にする気なんてとても起きなかった。

深い溜め息のような物に交じつて煙が吐かれ、しかしその煙は溜め息のように重くはなく軽く空に上がつて消えていき。それが何度か繰り返えされ、ひなたの煙草が一本丸々消費されて。新たな煙草に手をかけようとした時、二人の前に無音で何かが降ってきた。

「……ミツ」

ひなたの声が聞こえる。

降ってきたのはミラ本人。彼女の手の中には既に魔弾は無く、しかし全速力で搜索してきたのだろう。玉のような汗を浮かべ息を切らしながら彼女は二人に近付いた。

「……見つけた」

「本当!？」

シャーレイが思わず声を荒げてしまう。自分に全てをぶちまけ、悲しさを隠し辛さと痛みを隠して悲しませないようにと微笑んだ少女を見つけた。それに喜びを感じる。

ミラの事が優しいと聞いた。彼女は悪くないと聞いた。だから、こうして嫌悪感なく話すことが出来る。彼女を頼る事が出来る。

『ミラお姉ちゃんの事、お願い』

そんな言葉をルナからかけられたから、彼女を嫌悪する気なんてなく、頼ってしまう。

ミラはその期待に応え、こうしてルナを見つけてくれた。ひなたとシャーレイを抱え、ミラは息を整える。

「……急ぐ」

「お願い、ミラ」

「私達を連れてって……」

「……任せて」

ミラが二人の言葉に任された、と返し、もう体力も辛い筈なのに、二人の間を抱えて一気に走り出す。木々の合間を抜けて、抜けて、飛んで、抜けて。まるで馬車なんて目じゃない程の速さで木々の合間を二人がぶつからないように抜けていきながら走っていく。

走り続けて走り続けて。一分弱の時間が経過して。ミラは時々立ち止まって方向を確認しながら息を切らして汗を流しながらもひたすらに走り続ける。その表情と必死さに、この人は本当に優しい人なんだ、とシャーレイは改めてミラという少女を理解しなおして、彼女にその身を委ねる。ひなたも、それがもう分かっているから、頼むからルナであってくれと願い、しかし両手を合わせて祈る事は出来ずに胸に手をやってクソツタレな神へと祈る。

そして、ミラの動きが止まり、二人が改めて地面に降ろされる。

着地し、前を見る。そこには、確かにいた。

「……ルナ」

金髪の少女が。いつ着替えたのか、私服に着替えて背を向けたルナは、ひなたの声を聞いて体を揺らした。

よかった。まだ生きている。死んでいない。

彼女がまだ生きていることを喜び……すぐにお別れになる事を思い出して泣きそうになって。しかし、この最後の会合に喜び、駆け出そうとする。だが、ルナの声が聞こえて、その足は止まった。

「……どうして?」

その声は、疑問だった。だが、本質は読み取る事が出来なかった。何かおかしい。それを三人が同時に感じて、咄嗟にミラが二人を守るように前に立ちはだかつて。それを音で感じたのか、はたまた別の理由か。彼女が振り返り、己の姿を見せた所で、三人は思わず絶句した。

「……どうして、来ちゃったの」

涙を、流していた。それと同じように、全身から血を流していた。包丁を握っていた。それを、首に突き付けていた。

自殺寸前。そう言える状態のルナは、今にも首に包丁を刺そうと力を込めていた。が、その力が首に向けて解放される事はなく、阻まれていた。それは、ルナの生きたいという願望から成るものではなく、もっと理不尽で理不尽で。この世を呪いたくなる物だった。

「……水、なの?」

「なんで、包丁を止めて……」

「……そんな、能力までツ!!」

血を流し、泣きながら己に包丁を突き立てるルナ。しかし、その首は、透明なゼリーのようなものに阻まれていた。それはルナの傷口から徐々に湧き出すように増えており、既にルナの手は包丁ごとそれに飲み込まれ、包丁を意地でもルナの首に通さないように。ルナを殺さないように包丁を押しとどめていた。

魔獣だ。ルナの体に巢食っていた魔獣だ。それが、あと少しだから。もう少しで期限だからとルナの肉体を殺させまいと自殺を阻ん

でいる。

それを見たひなたは絶望し、シャーレイは驚き、ミラは憎む。その魔獣を。クソツタレな存在を。

「……私が、楽にするー!」

「ミ、ミラ……!」

「もう、躊躇はしない……止めても、無駄ツ!!」

最早脊髄反射で言葉を放っているのか。一泊置いてから話す癖すら置き去りにミラは腰の剣を抜いた。今にでもルナを斬り殺す。そう言いたげな刃物のような雰囲気はひなたとシャーレイでも切り裂いてしまいそうで。

しかし、ひなたにそれを止める気はなくて。

「ダメ、ミラお姉ちゃん……これは、もう……!」

「ああああああああ!!」

辛い気持ちを押し殺した決意を口にミラは一瞬にしてルナへと肉薄する。

残像を残し消え、一瞬にしてルナの目の前へ現れるミラ。もう時間はない。それを今のルナから察し、別れの言葉すら言う時間は惜しいと言わんばかりのその斬撃はルナの首……ではなく、頭を、脳を一刀の元に両断しようとしていた。

全力の、躊躇いごと切り裂く一閃。それをルナへと浴びせる。それによってルナは一瞬にして絶命させ――

「……わたしを、殺させてくれない!」

「そ、んな……!?!」

――てくれる事は無かった。

透明なゼリーのようなそれは、一瞬にしてミラの剣を包み込み、絡み取り、衝撃を全て受け流した。その結果、ミラの一閃はルナに届くことなく、完全に防ぎ切った。

それを見て咄嗟に思ってしまった事は、一つ。この世界で、殆どの魔獣が獣の形をとり、自然界のルールに則っているこの世界で見たことも聞いたこともない、正しく特殊能力の一つ。

「物理攻撃の、無効化……?」

スライムのようなそれだから考えられるその特殊能力……スキルとも言えるそれを持っているのだとしたら。宿主を殺すまで物理攻撃から守るのだとしたら、それは余りにも残酷で憎い。

ミラはそれに驚きこそしたが、一瞬で魔法を発動。ミラの剣を冷気が纏い、それとほぼ同時にミラの剣を防ぐそれは凍り付き、力づくで剣を戻すように振れば凍り付いたそれは一瞬にして砕けた。が、こうなってしまおうと物理攻撃ではルナを殺すことは出来ない。だとすると、取れる手段は一つ。

魔法による殺害。

「ルナ……辛いだろうけど、眠っている内に殺してあげる！」

「ダメ……ダメなの!!」

最早誰の言葉すら聞く気はない。それを態度で体現したミラはルナから距離を取ってから剣を地面に突き立てる。直後、作られた蒼銀の魔法陣がこれからミラが何をするのかを物語っていた。

「……我が魔力を食らい出でよ、氷結の世界っ！」

「もう時間はないし……魔法でも、わたしは殺せない!!」

「だとしても！ フローズン・コフィン!!」

ルナの叫び。それをミラは聞くことなく魔法を発動させる。

フローズン・コフィン。その魔法名であろう言葉からどういう魔法なのかは察しが付く。きつと、ルナ自身を凍らせてその後には切り裂いて殺すつもりなのだろう。力を制御されている今のひなたの魔力全てを使っても足りない程の魔力を消費して発動した魔法はルナの足元から徐々に凍っていくことによってその名の通りの効果を発動した。

かかった時間は五秒ほど。足元から凍り付き、ルナは氷塊の中に閉じ込められる形で凍らされた。この時点でルナの意識はもう無いも同然だろう。

「はあ……はあ………なんで、こんな……」

ミラはそれを見て涙を流し、息を切らしながらも剣を杖代わりに立ち続ける。目の前の氷塊に閉じ込められた少女に悲しみを覚えて……絶望した。

氷に、ヒビが入った。

直後、氷塊は内側から砕かれた。最後の手段と言わんばかりの氷の魔法はルナを眠らせる事無くその役割を終えてしまった。

「……………え？」

信じられないと言わんばかりに目を見開いて前を見るミラ。そこには、氷塊を砕いたルナが……………いや、魔獣が。ルナの傷という傷から溢れ出たゼリー状の魔獣が。

「無理なの……………これは、もう止められないの!!」

泣きながら叫ぶルナ。その間にも、体のあちこちから血が……………いや、内側から肉が弾け、血と共に魔獣がそこから湧いてくる。きつと、現存していた傷口から出たあの魔獣が、氷を割ったのだと。そう気づいた。が、気づいたとしてももうミラには手立てなんて無くて。

だが、それでも魔法なら、とひなたがミラの背中から抱き着いた。「血を貰うよー!」

そして、吸血。ミラの許可を得ずに首筋に噛み付き、血を一気に吸ったひなたの目が紅に染まり、制約の一つが解放されたことよって魔力と魔法の威力が増す。それを感じてすぐに起爆銃を抜き、二つの魔力だけを込めた魔弾を作り出し、かみ砕く。

何時もの二倍の量での魔力暴走。それがひなたの体を内側から壊し、体の数か所が破裂して内側から血が噴き出す。が、それでもその魔力を銃口に纏め、人を殺せる位の威力をシューターに持たせる。「ぐうう!?!」

暴走する魔力に体を壊されながらも、悲痛な声をあげながらも。このままルナを魔獣になんて殺させやしないと銃を構える。せめて、知り合いの手で……………人の手で、人としてその生命を終わらせるために。

「ジェノ、サイドオツ! ブラスタアアアアアツ!!」

ジェノサイドバスター。その一段階上であり、ジェノサイドブレイカー以下の魔法。それをルナに向かって放つ。血をまき散らしながら、その反動を抑え立つひなたの起爆銃から銀色の閃光が空気を裂いてルナを呑み込まんとする。それは当たれば人間の肉体なんて蒸発させる事が出来るレベルの強さを持つ制約を一つ解放した後のジェ

ノサイドバスターの上に行く魔法。だから、これで殺せない筈がないと。そう信じ放った。

そして、銀色がルナを飲み込み、その後ろにある木も消滅させながら照射は続く。

数秒の照射が終わる。全身から血を流しながらも放たれたジェノサイドバスターは消え、そして視界が晴れる。そこにはルナが……「だから、止められないって言ったのに……っ！」

いた。いてしまった。彼女の前にはあの魔獣が盾のように広がっており、ジェノサイドバスターを完全に防いでいた。

それを見た瞬間、ひなたの中の何かが折れ、膝を付いてしまう。駄目だ、これ以上の魔法は人の肉を食わないと放てないし、他の魔法を放つための魔力も、体力もない。

「お願い、逃げてっ！ 今ならまだ間に合うから!!」

きつと、自殺と彼女を殺そうとする凶刀達が、魔獣の働きを活性化させてしまったのだろう。それとも、小さな体だったがためか、彼女のタイムリミットはその分短かったのか。ルナは自分の体を抑えながら蹲り、だけでも顔だけは三人の方をしっかりと見て、逃げてと叫ぶ。

ルナの体から吹き出る血が増える。もう魔獣は彼女の体を破裂させようと彼女の体を食らっている。それを止める術はもうなく、ルナが破裂するのを待つしかなく。

ミラにも、ひなたにも、もうこの場から退散するための力は、もう残っていないかった。

涙を流しながら訴えるルナの言葉に答える事が出来ず、ミラとひなたは何とか動こうとし、シャーレイは二人を何とか引っ張ろうとして。だけど、この場にある力は最早、使い尽くされていた。

そして——時間は来てしまった。

「逃げて……逃げてえええええええええええええええええ!!」

ルナが、全力で叫んだ。

それは断末魔だったのか、最後の願いだったのか。林の中に響く少女特有の高い声が響いた後――

――まるで、爆竹が一つ弾けるような小さい音と共に、ルナの体は木端微塵に砕け散った。

「あ……」

「う、そ……」

「……………い、や……」

血肉が飛び散り、ルナだった物が当たり一面に散乱する。

生々しい音が響き、肉だった物が、内臓だった物が、骨だった物が、それぞれ音を立てながら地面に落ちていく。

あっさりと、まるで風船を破裂させた時のようにあっさりと、ルナはルナだった物へと変貌してしまった。

人が破裂するという衝撃に吐き気よりも、ルナが苦痛に塗れ最後に悲痛な叫びを残し死んでしまった事が、三人の心を大きく抉る。あんな優しい子が、こうも情け無用で殺されたという事実が、三人の心を一瞬にして砕きかける。

そして、ルナのいた場所には。彼女がいた場所には、水たまりがあった。

血の水たまりではない。文字通りの水たまりが。

それがルナを殺した魔獣である事は一目瞭然で……それに対しての警戒心を抱く前に、それは蠢き、蛇のような形状へと変化すると一瞬でひなたの目の前へと肉薄した。

「……………へ？」

その魔獣が、嗤ったような気がした。

ひなたの目の前で。次の獲物はお前だと言わんばかりに。

あ、死んだ。そう頭の中が間抜けに判断したその瞬間。

「させる、ものか……ッ!!」

ひなたの襟首を物凄い力が引っ張り、魔獣と距離を取らせた。直後、ひなたの後ろからミラの足が伸び、その魔獣を蹴った。が、蹴った傍からそれはミラの足に吸収されるように入り込んでいく。

「ミ、ミ!!?」

飛ばされながら、叫んだ。

このままじゃ次の犠牲はミラになってしまおう。加速された思考の中でミラに向かって手を伸ばそうとして……だけど、後ろに向かっていく速さはそれを超えていて。

だが、ミラはその速さに慣れた人間。蹴り、己の足に異物が入っていくその感覚を感じながらも魔法を発動していた。

ミラの足が……利き足であろう、魔獣を蹴った右足が太ももの中間当たりから凍っていき、魔獣の全てが足に吸収される前に完全に右足は魔獣ごと凍り付いた。

第四十魔弾

「う、あ、ぐうう……!」

苦痛に呻きながらも、ミラは己のかけた魔法を完遂させる。

己の肉体を肉と血ごと完全に凍らせて魔獣を体に行かせないようにながら魔獣を氷の中に閉じ込めるといふその場で思いついた即席の荒業。ひなたを守るために咄嗟に行ったそれは成功をしたように、足に感じていた異物が入り込んでくるという感覚は体には無く、魔獣もこの状態なら魔法を内側から破壊する力がないのか凍り付いたままだった。

だが、体の一部が凍るといふ苦痛。足付近の血液は止まり、魔法を解除してもきつと右足が使い物にならないというのは直感的に理解できてしまった。

後ろへ向かって投げ飛ばしたひなたはどうやら助かったらしく、シャーレイに大丈夫だとだけ呟いてひなたを回収しに行ってもらっている。それはどうやら一分程度で終わったらしく、シャーレイはひなたに肩を貸した状態でミラの元に戻ってきた。

ひなたはミラの右足を見て思わず目を背けてしまった。それも仕方ない、とミラはその行為を咎めることなく、剣を地面から抜いて座り込む。

「ミラ……足が……」

「……体は、無事だから」

少なくとも死にはしない。無理をして微笑みながらミラは己のポーチから小さな瓶を取り出した。

多少の荒事では壊れないという素材で出来た瓶の中には緑色の液体……ひなたにも飲ませたミラと、彼女の父親しか調査方法を知らない秘薬が詰められていた。それを取り出したミラは、座った状態で剣を己の足に向かって構えた。

「ミ、ミラ……まさか!!」

「……ッ!!」

ひなたが何をするのかを悟り、止めるために手を伸ばす。が、ミラ

はそれを聞こうとはせずに剣が己の右足を斬れるように足と剣の位置を整えてから一息にそれを振り下ろし、己の右足を、無事な部分から切断した。

斬られた断面から血が噴き出し、ミラの右足が完全に切り離される。それにミラの顔が歪むが、すぐに彼女は秘薬を一気に煽る。それだけで徐々に右足の断面から噴き出す血は収まっていき、断面は塞がった。が、切り離された右足は再生する事無く、本当に断面から血が噴き出さないようになり、血がちゃんと体を循環するように体がそれに合った再生を行う。

回復魔法に加えてリジエネを加える秘薬はしつかりと体を生存可能な領域へと持っていき、苦痛も収まった。

「あ、足を……」

「……こうするしか、なかった」

切り飛ばした右足を更に魔法の水で覆い、万が一にも魔獣が脱出しないように強固な氷でそれを固める。後は、この右足は地中深くにも埋めておけばこの魔獣は外に出てくることはないだろう。

ミラはそれを片手に鞘に納めた剣を杖代わりに立ち上がった。

「……それより、ルナを……」

ミラは片足で跳ねながら近くの木に寄りかかり、視線をルナのいた場所へ投げた。

一瞬。正に一瞬で砕け、この世の物とは思えない死に方をした彼女の肉体の痕跡は、この一帯に微塵となって散らばった。彼女の亡骸と呼べる物は存在せず、赤に染まった三人と林が悲しさを漂わせる。

死ぬことは分かっていた。彼女がもう明日の太陽を見ることはないというのは分かっていた。だが、こんな。こんな死に方、惨すぎる。シャロンの時よりも酷い。人の……たった九歳の子供の死に方ではない。それを頭の中で理解し、悲しんでしまうから、遅れて涙が出てきてしまう。

惨くて悲しくて、辛くて悲痛な一瞬の別れ。断末魔すら上げる暇もなく体が内側から爆ぜる。そんな死に方、まともじゃない。だけれども、それを迎えてしまった彼女を。優しかった少女の亡骸とも言えな

い亡骸が散らばるこの場で出来ることは。

「……せめて、拾えるだけの肉片を集めよう。それで、埋めてあげよう。それくらいしか、出来ないから」

悲しみを押し殺してひなたは呟いた。シャーレイから離れて近くに飛び散った肉片と骨と内臓だった物を手で摘み取っていき、一か所に纏める。

最早どれがどの部位だったのかも分からない。ただ、人だった物がひなたとシャーレイ。そして、這つてでも動くミラの手によつてルナが最後に立っていた場所に積まれていく。三人とも、その肉片を決して汚いとも思わず、グロイとも思わず。吐き気を感じる事もなく……そんな心の余裕なんて持つことも出来ず、髪の毛がついたままの頭皮や目玉や歯すら、見つけられる限りのルナの体を見つけ、集めた。

吐くことなんて、言われなくても許さなかった。許せなかった。許されなかった。最大限の配慮と尊敬を持ち、ルナの遺体を積んでいく。

積み終わったのは一時間後の事だった。それでも、全ての部位を集めることなんて出来ず、多分内側から爆ぜた時に数センチ以下の肉片になった場所も何百か所もあるのを知っているから、自然と三人は手を止めた。集ってくる虫を払いながら、三人は無言でルナだった物を集めるのをやめ、血と肉がこびり付いた手でミラが剣で土を掘った。そして掘られた場所に肉と骨を埋めて。土を被せて近くにあった大き目の石を刺した。

彼女の母親も彼女と同じ道を辿ったのは知っている。だが、その人の亡骸がどこにあるのか、それとも埋められたのかすら分からない。だから、たった一人だけど、一人しかいない場所だけど、せめて空の上では休めるように。親子揃って休めるように。安らかな眠りを願ひ、墓を作った。

「……ルナの父親は、蒸発した。母親が一人でルナを育てた」

ずっと考えていたのか。それとも脊髄反射で喋っているのか。剣を杖に立つミラが饒舌に喋りだした。それは、ルナの家環境の事だった。

きつと、彼女の母親から依頼を受けたミラが、どちらかから先に聞いていたのだろう。彼女の目は伏せられていて見えないが、水滴のような物が見えた。きつと、泣いている。泣きながら……ルナの手前、それを見せたくないからそれを隠すために顔を伏せて、饒舌に喋る事で誤魔化している。それが声色から分かってしまったから、ひなたとシャーレイは何も言えなかった。

「……………」

「きつと、その父親はルナが死んだことに気づかないまま生きていく……だから、覚えていてあげて。この子の事を、死ぬまで」

それしか、死んでしまったルナに出来る手向けはないから。死んだことすら気付かれずに時が過ぎるよりは、覚えている人間がいたほうが、まだマシだからと。

ハッピーエンドなんてほど遠い、吐き気をするバッドエンドだけ。せめて、それが彼女への手向けになると信じて。そうするしかない。

「…………じゃあ」

ミラはそのまま顔を上げることなく一言だけ告げると、歩き始めた。それを見て、ひなたは声をかけようか一瞬だけ迷ったが、これは迷っては駄目だと決心して声をかけた。

「待つて。どこに行く気？」

振り返る事すら一苦労なのか、ミラは振り向かなかった。

何をする気なのか。それが分かるひなただから言えた言葉に、ミラは暫く何を言うべきか迷い、そして己の凍った右足を掴む手がわなわなと震え、そして彼女は目に涙を溜めた状態で振り返り、呟いた。

「…………足がないと、生きられない」

その言葉には、様々な意味が込められていた。

まず、前提としてミラは駆除連合での仕事で金を稼いで生きている。そして、戦闘スタイルは魔法使いではなく剣を使った剣士でありながら、補助として魔法を使う魔法剣士だ。そんな彼女が足を無くしたらどうなるか。まず、彼女のあの驚異的な速度での移動は出来なくなり、更に剣を振るときに力を籠める事すら困難になるだろう。そ

んな状態で戦えるのか、と言われたら無理だと言えない。

踏ん張る事も出来ず、移動する事すら出来ず、出来るのは腕力だけで剣を振るうこと。振り向くことも出来ないため、挟撃されようものなら成す術もないだろう。だからといって荒事以外で稼ぐ事はミラには出来ず、口下手で、足も無いのならどこもミラを雇ってはくれない。と、なると最早稼げるのは内職か体を売る事だけ。だが、それでも限界はいつか来る。

と、なると今死ぬか後で死ぬかの問題になってしまう。

それなら、後で命に意地汚くなる位なら、今のうちにひっそりと死んでしまいたい。それが、今のミラの心情だった。

勿論、それはひなたが一番分かっている。ひなたも最初は腕を無くして生き残ったときはこれから先どうすればいいのかと途方に暮れ、死んだほうがいいんじゃないかとも思った。だが、復讐心と旧式の起爆銃があつたから生きることを選択できた。ミラの戦い方的に、また戦うことを選択する事はできないかもしれないけれども……

「……ルナにもう会う気？」

この言葉なら、ミラをこの世に押しとどめておくことが出来る。

ミラはひなたの言葉を聞いて動きを止めた。こんな早くにルナの後を追ってしまったら、ルナがどう思うか。あの世でこうも簡単に出会って彼女は笑って迎えてくれるだろうか。

いや、そんな訳がない。泣いて悲しむ筈だ。何で来ちやったの、と。そして、ごめんなさいと泣いて自分が生まれたことすら後悔してしまう筈だ。

そんな事は分かっている。分かっているが……

「……じゃあ、どうしたら」

足を失って、自分で金を稼ぐことも、下手したら生きていく事すら出来ないのに、どうしたらいい。

体を売るなんて嫌だ。内職なんて限界が来る。だというのに、どうやって生きていい。どうやって、これから先ルナにあの世で会って、胸を張って生きてきたと言えればいい。

「ボク達と一緒に来て。一緒に、暮らそう」

一緒に、生きる。

だが、それは……

「……全部、頼りきりに……」

家事も、稼ぎも、何もかも。ひなたとシャーレイに頼り切りになつてしまう。

そんな彼女達がいつミラを捨てるかなんて分からないのに。いつ絶望に落とされるのか分からないのに、彼女達に頼りきりの生活をしてしまうなんて。そんなの、心の奥底でどうしても受け入れる事が出来なかった。

「大丈夫だよ、ミラちゃん。ミラちゃんが出来ない事は、私が肩を貸して手伝うから」

それが分かっているから、シャーレイのかけた言葉は全部任せて。ではなく、手伝うから、だった。

出来ないことを手伝って、二人三脚で生きていこうと。一緒に悩み、一緒に生きていこうと。全てを引き受けるのではなく、一緒にやっついていこうと。そう言った。

「ボクだって。片手しかないけど、肩なら貸せるから」

一人で生きていけないのなら、二人で。それでも不安なら、三人で。片手しかないから人に出来る当たり前の事の中にも出来ないことがあるひなただから、片足しかなくて当たり前の事が出来ないミラの気持ちは、少しだけど分かった。

それなら、頼つてもいい？ そう言いかけた。だが、それは迷惑になると。彼女たちに多大な迷惑をかけると、そう思ったから、手を伸ばすことはできなかった。

「……約束、したよね？ 一緒に暮らそうって」

「……そ、れは」

「約束破ったら、許さないよ」

言葉だけなら、怒っているようにも聞こえる。だが、それを口にした表情は、笑っていた。いいんだよ、と。この程度、負担にもならないから、気にしなくてもいいんだよ、と。表情で語る彼女に思わず心を惹かれてしまう。

「私はまだ余り話せてないけど……ミラちゃんは優しいって知ってるから。だから、私も一緒に生きていきたいって思うよ」

「それに、ミラが家にいるんなら最強の自宅警備員が雇えたって事になるし」

「もう、どうしてこういう場でふざけるの?」

「まあまあ」

優しい彼女たちの言葉に心が惹かれかける。

傷ついてしまった心が……もう死ぬしかないと思っていた碎けかけた心が、彼女達の言葉に依存しかけてしまう。彼女達を頼れば、もう自分一人の力では生きていく事なんて出来ないと思えて直感で分かってしまうから。ここが命の分かれ道だと分かっているから。

優しい言葉に延命をするかどうか、それを悩まされる。手を取れば、生きていける。だが、迷惑をかけてしまう。手を取らなければ、死ぬ。そこで終わり。

人に迷惑をかけてまで生きたいのか。それが頭の中で反響を続け、最後の一步を踏み出す事が出来ない。

「……ルナもそう願ってたから。ミラと一緒に居てあげてって」

「……ルナ、が?」

「うん、昨日ね。ミラはルナが死んだあと、きつと心が壊れかけちゃうから、一緒に居てあげてって」

それは、きつとルナの願いの一つでもあって……

「自分を諦めないでって、ルナは言ってたよ」

「……自分を、諦めない……?」

「今のミラなら、分かるよね?」

自分を諦めない。

ああ、分かるとも。今この場で、死を選ばずに強く生きろという意味をそれが持っている事くらい、分かるとも。だけど、それを成すためにひなたとシャーレイに頼りきりでもいいのか、と思ってしまう。「ミラちゃん。きつと、ミラちゃんが生きるのをルナちゃんは望んでいるから……だから、生きよう?」

「……」

「私もね、ひなたちゃんに拾われなかったらスラムの片隅で死んでたと思う。けどね、死んでいた方がよかったなんて、私は少しも思っていないから」

シャロンが死んで。あの場で自暴自棄になって、犯されていたら確実にシャーレイは今、やり捨てられて死んでいただろう。あの場で声を出して、ひなたに拾ってもらえたから、シャーレイはここにいて、それを、後悔なんてしたことはない。こうして辛い事はあったけど、それを嫌な思い出とは割り切っていない。シャロンの事も、バネにして生きている。

「大丈夫だよ。ここには、死んだほうがいいかもしれないって一度は考えた女しかいないからさ」

腕を失い、全てを失って。死んだほうがいいかもしれないと思ったが意地汚く生きて今この場に。十年以上の時と一緒に生きてきた家族同然の少女を殺され。全てに捨てられかけ、死んでもいいと思ったが拾われ、今を生きてこの場へ。

なら、足を失い、生きる術を失って。それでも、手を伸ばされたのだとしたら。その手を掴むことが死んでいった少女の頼みなのだとしたら。それを、望んでくれて背中を押してくれるのだとしたら。

「……なら、私に肩を貸してくれる？」

それを受け入れ、手を掴む事が。きつと、一番の選択肢なのだろう。

『もちろん』

こちらから伸ばした手を、強引にでも引いてくれる少女達の肩を借りる事が、きつと最善の選択肢なのだろう。

だから、これが依存なのだとしても。二人に捨てられれば生きていけないから、依存して生きていくという事とイコールになるのだとしても、構わない。それを望み、望まれているのだから。

今は剣を置いて。二人に肩を借りて生きていこう。生きていけば、きつといい事はあるから。

自分を諦めず、生きていこう。

あれから。林を三人で出てから、ミラは一旦自分の泊まっている宿へ戻り、荷物を纏めて後日合流するために一旦別れた。目を離したらミラがそのまま野垂れ死んでしまうんじゃないか、と思ったが、ミラは絶対にそんなことしないから、と断言して二人に宿まで送ってもらい、そのまま別れた。

そして二人は部屋に戻り。ルナの私物が死んだときに着ていた私服だけだったのを思い出して悲しくなりながらも。温泉に入ってからこの宿での最後の夜を送る事にした。

宿の人からは夕飯時にルナはどうしたのか、と聞かれたが、彼女の親が迎えに来たから帰した。と嘘をついた。それに納得してくれなかったため、言及はされなかったが、その夕飯は半分程度も喉を通らなかった。いや、食事そのものを体が拒否していたが、食わないと駄目だと無理をしてそれを食った。空の上から見ているかもしれないルナに心配はかけられないから、と。

「……寂しいね」

「……うん」

そして、就寝時。二人っきりの部屋は、本来二人っきりで泊まる筈だったのに、とても寂しく、広く感じた。ルナがいなくてこんなに寂しくなるものなのか、と思うと二人の瞳には涙が浮かんで。

煙草でも、酒でも消しきれないその悲しみは大きく、二人で抱き合いながらその悲しさを人の温もりを埋めようとして。それでもルナがいない悲しみはどうしても拭いきれなかった。

「……こんな悲しい時に場違いかもしれないけど」

ひなたが呟いた。

「……慰め方、一つだけ知ってるんだ」

シャーレイを強く抱きしめ、自分の体を寄せる。それが、体を動かして一時的にそれ以外考えられないようにする、という意味を持っているのは、何となくシャーレイも分かった。でなければ、その前に場違いかもしれないなんて言わないから。

シャーレイもひなたを抱きしめ、己の体を寄せ……頷いた。

「……また気絶しない？」

「多分、大丈夫だから」

「なら、お願いしようかな。じゃないと、眠れそうにもないから」

「……ボクもだ」

そして、二人はどちらからともなく顔を近づけ、唇を重ねる。

一度重ねた体だからか、抵抗感は無く。むしろ依存しあっている関係だから体の関係すら理性を持った状態で持つ事に違和感すら感じず、男を怖いものだと思わず生きてきた少女と元男だから男と関係を持つ事を嫌い、女と関係を持ちたい少女だからこそ。そこに抵抗感も何も感じる事がなく。

むしろ、恋人がするように、互いに愛情を持って。互いに愛し合っていて。体を重ね、夜は更ける。

悲しみを慰めあう夜は、きつとこの日だけでは終わらないだろうと、互いに変な確信を持ちながら。性欲に身を任せ悲しみを忘れ、慰めあう。

温泉旅行での一幕はバッドエンドにて幕を下ろした。

しかし、それは決して悪い思い出ではなく、いい思い出を生みつつも終わった。だから、この事件に嫌な思いなんて抱かず、ひなたとシャーレイは無事に家へと戻った。

その翌日。二人の住む街の馬車の停留所で。

「やあ、ミラ」

「……うん」

ひなたとシャーレイは片足の無いミラを迎えた。本当はひなたとシャーレイの乗る馬車で帰ろうとしていたが、それは本来予約制でルナを乗せて温泉街へ行つたときはイレギュラーだった、という事もあり、結局ミラは同じ日にひなたとシャーレイの家に行くことが出来ず、翌日の到着となった。

着替えと私物を詰め込んだのにも関わらずバック一つで済んでし

まう彼女の荷物はどうかも思えたが、思えばひなたもシャーレイも私物なんて出会ったときは全然持つていなかったのを思い出し、何も言うことが出来なかった。

そして、ミラを連れて家に着き。ミラの部屋として使っていないかつた既に掃除済みの部屋を割り当てて荷物だけ下してから改めて三人は居間で向き合って座っていた。

「……足がないけど、よろしくね」

「ごちらこそ。腕がないけどよろしく」

「腕も足もあるけど、よろしくね。ミラちゃん」

「……うん」

ミラの表情は初対面の時よりも何処か分かりやすくどこか可愛らしかった。

ルナは助けることは出来なかったけど、彼女の最後に残した願いはこうして叶えられている。同じ傷を持つ者三人。その傷を舐め合って生きていく事になるが、それでも構わない。両側に矢印のある棒が二本に増えるだけだ。それを人は共依存だと言うのかもしれないが、それで満足に生きていけるのなら構わない。異常だと言われてもねじ伏せる。

だから、今は。こうして三人で笑いあう時間を大切にしてい。きつと、この時間はずっと続いていくから。

三人での歪んでいるようでもただ依存しあっているだけの関係は、きつと。死ぬまで、ずっと続いていくから。

番外

ミラが家に来てから一週間の時が経った。その間、ひなたは稼ぎに向かい、シャーレイは家事に勤しみ、ミラは新しい家に慣れたりこれから住む事になる街をその辺で買ってきた老人用の杖を両手に歩き回っていた。暴漢が何かに襲われる可能性も思い至ったが、ミラなら片足でも暴漢如きに遅れを取るなんて考えられないからだ。彼女は魔法使いよりも威力も精度も低い魔法が使えるため、別に機動力が削がれても戦う力のない変に威張った男なんか数秒で戦闘不能に出来る。

そしてひなたの方は一週間フルで働いたため、三人でも二週間は生きていけるくらいの金を稼ぎ、ついでに三人分のお小遣いを稼ぐ事も出来た。それに加えて旅行で使わなかった分の金もあるため、暫くはニートしていても問題は無いだろう。

そんな金をシャーレイは受け取り、管理すると同時にひなたからひなたの分の小遣いを受け取り、シャーレイはある物の作成を任されていた。木材と金槌と釘。それから鋸や鑪を買ってきてもらって作るもの。それは家具等ではなくミラの生活を出来るだけ楽にするための物だった。

「えっと、これをこうして……あ、外れちゃった。じゃあここは接着剤を使つてつと」

家の庭で家事をし終わってからコツコツと材料を買い集めて道具を買い集めてミラとひなたが出かけている時にテキパキテキパキとそれを作っていく。こうして普通に物作りが出来るのはシャロンと暮らしていた頃、捨てられていた壊れた家具や木材で家具を作っていたからだ。スラムでの生き方がこうして現れているのは、あのクソツタレな場所で必死に生きていた事が……シャロンと生きた十数年が報われている気がして苦ではなかった。

太陽の日差しを浴びて汗を流しながら。しかし、それを拭く綺麗なタオルがあるという事実が今の自分はあるの街で生きていた時よりも遥かに裕福で幸せだという証拠で。その動作一つ一つが嬉しかった。

「ゴムで留めて、ここは釘で固定して……」

自分で引いた設計図を見ながら一つ一つ丁寧に組み立てていく。時々、釘が届かなかつたりするため接着剤で無理矢理くっ付けその周りを接着剤でまた固めて、そこに斜めから釘を打つてみたりで更にそれを強固にして。そんな感じの工程を一人でこなしていく。

既に作成から三日。それまではパーツを自分で削って鑪にかけて綺麗にしたりとある玩具を悪い笑顔を浮かべながら作っていたりとしていたが、それも今日で終わりだ。二本一セットのそれを手作り地完成させ、最後に接着剤が必要だった部分を自らの体重を思いっきりかける事で耐久性を確認し、少し難があると思えば再びそこを補強して。他の部分も壁にぶついたり殴つてみたり蹴つてみたりして一切悲鳴を上げなかったのを確認してようやく息を思いっきり吐いてそれを壁にたてかける。

「かんせー！ 疲れたあ……」

時刻は既に正午を回っており、気が付けば昼食を忘れて作業をしていた。それを思い出すと今更ながら腹の虫が鳴く。誰も聞いていないが、なんとなくの恥ずかしさに苦笑いを浮かべてから完成品を片手に家の中に戻る。家に戻るとタイマーで起動していた空調が火照つた体を涼めてくれる。

「ふう……ご飯作っちゃおっと」

汗を拭き、タオルを洗濯物を積んだ籠に入れてから台所へと向かう。今日のお昼は何にしようか冷蔵庫の中を覗き込みながら考えていると、玄関が開く音が聞こえた。

「ただいまー。あれ？ シャーレイいる？」

この声はひなただ。今日も魔獣狩りに行っていた筈だが、早く終わったのだろう。すぐに冷蔵庫を閉じてひなたに顔を見せに行く。

「おかえりー。今日は早かったね」

「案外近所での依頼があったからね。サクツと終わらせてきたよ」

ローブを脱いで壁にあるハンガーにかけてからベルトに着けたポーチと起爆銃を入れたホルスターをテーブルの上に置いてソファに寝転がるひなた。これがただ散歩してきただけなら少しは手伝っ

て、と文句を言うが、こう見えても数千キロ単位での往復と戦闘を済ませてお金を稼いだ後だ。そんな事は言えない。それに、こうして帰ってきたひなたのお世話をするのは嫌いではないためなんとも言わない。と、言うかこうしてぐでーつとしているひなたを見ていると、彼女の生活の大半を支配していると思えて何となく快感を覚えてしまっている。

ふと居なくなったら泣きわめいて自分を探して家事も出来ずにそのまま寂しく生きていく事になっちゃうんだ、と思うと彼女の生死を握っているみたいでゾクゾクする。最初は誰かと一緒にいたいから、捨てられてくれないから、という依存だったのいつの間にか彼女を支配してそのままずっと一緒に居たいという依存に変わってしまった。しかもシャーレイに自覚なし。

全ては温泉街でひなたを滅茶苦茶に犯しつくした辺りからだだが、それに関しても自覚なし。そしてひなたもシャーレイに依存してしまっているので逃げようとも思わない。win-winとも言えない何とも奇妙な共依存の関係が構築されている事にこの二人は気づいていない。

そこに二人に捨てられたら死ぬしかないミラまで加わっている物だからもう奇妙過ぎる三角形が構築されている。しかもそれがより良い形でガツチリ組み合ってしまったているのだから更に質が悪い。変な依存関係である。

「そういえばシャーレイ。お昼ってもう食べた？」

「今からだよ？」

「そうなの？　じゃあどうせだし食べに行かない？　見た感じ、あれも完成してるからミラも呼びに行きたいし」

と、言いながら部屋の中にあるシャーレイが先ほど完成させた物をチラ見する。ひなたが見ても、大分いい感じに出来上がっている。これはミラに渡す物なので、どういう反応をされるのかは分からないが、それでも嫌な顔はされない筈だ。それに、もしかしたら機動力を今よりも確保できて戦闘も魔獣との物ならこなせるようになるかもしれない。

シャーレイはひなたの提案に昼食は全くの手つかずだったため二つ返事です承し、ひなたは腰に財布を入れたポーチを着けた。そしてシャーレイはそのまま外に行こうとして、服が汗を吸って軽く気持ち悪いのと普通に汗臭いのでは、と思いつく外へ行こうとする足を止めた。「ちよつと着替えてくるね」

「え？ それ部屋着だっけ？」

「汗臭いから……さっきまで外で作業してたし」

「あー、なるほど。ごめんね、変なこと聞いて」

「ううん、それくらい別にいいよ」

先に一言言っておいてから階段を上がって自室へと向かう。

現在、この家は一階がほぼ共有スペースで二階がひなたとシャーレイのもう二人の私物を置くだけの部屋と化した各自室があり、そこに加えて二人の共有の寝室。それから空き部屋が一つと物置部屋になる予定の部屋が一つ。そして、一階の方にも一つ空き部屋があり、風呂もある。そして、一階に二つある部屋の内一つはミラの部屋になっている。もう一つは空き部屋だ。

女二人で住むには広すぎた家は現在女三人で住むには広い家になり、どつちにしろ広い家となった。ここまで広いのにひなたの金でどうにかなったのは完全に立地の悪さからだ、ここまでスペースを持って余すのならもう少し立地のいい場所の家を買った方がよかつたかもしれないと思ってしまう。

が、そんな事はつゆ知らず。全部ひなたにお任せで家を決めたシャーレイは自室に入ると服を脱いでから選択済みの外行き用の服に着替え、先ほどまで着ていた服を抱えて階段を下った。その服を洗濯籠に放り込んでからぱたぱたと少し急いで玄関で待つひなたの元へ。

「おまたせ」

「言うほど待ってないよ」

壁に背を預けて煙草を吸っていたひなたからはどこかクールっぽさが漂っていたが、シャーレイは特に気にしない。夜にあれだけ乱れるのだからもうクールっぽいという印象はシャーレイの中から完全

に抹消されているからだ。

ジーツとひなたを観察するシャーレイに本人が気が付き、どうかした？ と聞くが、何でもないと返す。煙草を啜えながらひなたはドアを開け、ドアが開いている内にシャーレイも中から出る。

外の日差しに思わず目を隠してしまうが、すぐにこの日差しにも目は慣れ、目を隠す手も必要なくなる。ひなたの吹き出す煙が空へ上つていき、気が付くとそれは太陽の日差しの色と同化して完全に目では見えなくなる。灰を携帯灰皿に落としながら歩くひなたの隣を歩き、街の中心へと向かう。よく見ても姉と妹……それも、シャーレイが姉でひなたが妹だが、こちら辺に住む人はもう煙草を吸って歩く銀髪の合法ロリの事を知っているため誰もひなたの事を咎めない。むしろすれ違うと挨拶してくれる。それに対してひなたは何時もども。と一言返すだけだが。

隻腕の銀髪合法ロリなんて探しても見つかるような物ではないため自然と周りに住んでいる人やこの街の人には知られている事だが、それでも知らない人の方が多数で、衛兵等とすれ違うと時々子供が煙草を吸うなど言われる。その時はいつも身分を確認できる物を見せ、黙らせている。

気付けばひなたは煙草を一本吸い終わって携帯灰皿に吸殻を落とすとそれをポーチに仕舞った。ひなたは何か思い悩んでいたりストレスを感じたりすると煙草を続けて二、三本と吸っていくがそれが無いときは基本的に手持無沙汰の時に吸ったりしてインターバルを置いている。だから、シャーレイが注意することも無い。

「ん？ あそこに居るの、ミラじゃない？」

「え？」

携帯灰皿をポーチに仕舞い、口が少し寂しいのかガムを噛み始めたひなたがモゴモゴと口を動かしている最中に少し遠くを指さす。そこには確かに老人用の杖を二本使って器用にバランスを取りながら片足で歩くミラの姿があった。

「ホントだ」

「丁度良かった。声かけていこっか。一緒にお昼食べれば食べよ

う」

「そうだね。それに、歩くのも少し大変そうだし」

「慣れればそうでもないんだけどね」

と、欠損歴一年のひなたがシャーレイに言う。

「そうなの？ と返すとひなたはそんなモンだよ、と一言返し、一泊置いてから自分の場合は腕だが理由についてを説明し始めた。

「まあ、簡単に言えば慣れちゃうのさ。ボクの場合は腕だけどね」

「そういう物？」

「そういう物さ。もつとも、幻肢痛は付き纏うけど、腕が無いならこうしたらいい。足が無いならこうしたら体を動かせるって体が自然と適応するのさ。幸いにも、人間は慣れるのが得意な生き物だからね」

その言葉にシャーレイは特に意を唱える事無く納得できた。

自分がスラムに身を落として生きていく事になってから。まず、親がいない生活に慣れた。次に、シャロンと生きていく生活に慣れた。次に、男共の下衆た視線の中で生きていく事に慣れた。腐りかけの食べ物を食べ事に慣れた。様々な事に慣れていった。そして、つい最近も。こうして、一般人同様の生活をする事に慣れた。

こうして環境に慣れていくこと。それが人間は得意なのだと言われると実体験を含めて納得できた。

ひなたはまだ謎が少しだけある少女だけど、きつと腕が無い生活に慣れて、今まで一緒に生きてきた人を失い、一人で生きていく事に慣れて。そして、復讐に生きること慣れてきたのだろう。そう考えれば、ひなたの言った言葉は全てが納得できた。

だから、きつとミラも慣れていくのだろう。この街で生きていく事と、足が無い生活に。そう考えれば、今はまだ慣れている最中で決して憐れみを持ってほしくない。納得ができた。彼女も必死なのだから。必死に新たな生き方に慣れようとしているのだから。

「……偉そうな事言っちゃったね」

「そうかな？ 普通に良い事言ったと思うよ？」

「うん、一言余計な言葉も無かったし百点の返し」

「付け足そうか？」

「冗談。じゃ、このまま見るのもアレだし、声をかけに行こうか」

軽口を叩き合ってミラの元へと向かう。こうして軽口を叩き合えるのは互いが互いを対等に思っているからで。それが何となく嬉しくてちよつとスキップしそうになりながらも前を歩くミラへと近づく。

ミラはゆつくりと歩きながらも後ろから近付いてきた二人に気が付くと振り返り、二人の姿を確認した。

「……どうしたの？」

相変わらずな表情作りの下手つぴさと言葉足らず。だが、その言葉に怒気等は感じられず、単純にどうしてここにいるのかを不思議がつているのがその無表情な表情の中にある小さな感情から読み取る事が出来た。

既にミラの細かな感情を言葉や無表情の中からある程度把握できるようにになったシャーレイがミラの疑問に対して答えを投げた。

「お昼を外で食べようってなったの」

「……いいね」

「でしょ？ たまにはね？」

発案者のひなたが人目につかないようにガムを包み紙に吐き出してから横やりを入れた。それを携帯灰皿に入れてる事からゴミを入れる袋を用意していないのを把握しちよつと笑いかけてしまう。後で捨てる時に大変かもしれないなあ、とは思う物の、シャーレイもゴミ袋なんて持ってきていないため何も言えなかった。

老人用の握る場所が一番上にしかない松葉杖のように使うには少し使いにくい杖で上手く体を動かしながらミラも二人に合流し、二人は彼女の歩く速さに合わせて並んで歩く。

太陽を受けながら歩く事数分。日本で言うところのファミレスのような店を見つけ、ここで食べようとシャーレイが提案した事でそこで食事をする事になった。三人でそこに入り、少し変な顔をされた物の気にする事無く案内された席に座った。きつと、隻腕と隻脚の客が来たことで吃驚したのだろう。その程度で不快には思わないしむしろ普通だと思ったため何も言わなかった。

ミラとひなたが隣り合って座り、正面にはシャーレイ。三人でメニューを見ながら何を食べるかを決める。

「……ボクは決まったよ。ミラ、後は選んじやって」
「……………」

選ぶのに必死なのか、ミラは返事をしなかった。それに何となく笑ってしまったがバレていないようだ。

ふと視線を投げるとテーブルの上に灰皿が置いてあったためそれを手繰り寄せてから煙草を取り出して火を付ける。そして最初の煙を吐き出してから灰を灰皿に落とす。そして煙草の臭いに気が付いたのかシャーレイがメニューから顔を上げた。

「あ、また煙草吸ってる」

「灰皿あったしね」

「身体に悪いよ?」

「腹をぶち抜かれたりアバラ全滅させられたりでもう身体に悪い事だらけだったんだから気にしない気にしない」

「そりやそうだけどさ」

「……それとこれとは話は別」

「そう言われると何も言い返せないかな」

だがひなたは煙草を吸う手を止めない。もうこれに関してはシャーレイも諦めているため全く……と声を漏らしただけで何も言う事は無かった。すぱーと煙を何回か吐いた所でシャーレイとミラも頼むものが決まったようで呼び鈴で店員を呼んだ。

店員は数十秒でやってきた。

「はい。ご注文をどうぞ」

「えっと、ボクはこれで」

「私はこれをお願いします」

「………このセット」

「はい。以上でよろしいでしょうか?」

「大丈夫です」

あたり触りの無い注文を行い灰皿の淵に一旦置いてあった煙草を再び啜える。どうやら、この煙草はミラが吸っているとでも思われた

のだろう。明らかに視線が煙草を行ってからミラの方を行っていたからすぐに分かった。ミラは同年代と比べれば雰囲気から大人に見えるため、成人していると思われるのだろう。胸は可哀想な事にひなたと同列だが。

ミラは自分が本来の年齢よりも年上に見られた事に気が付いていないため何も言わないが、ひなたは内心ケタケタ笑っている。自分が幼児体系だという事は忘れて、だ。

「ミラちゃん、今日は何処に行ってたの？」

「……駆除連合」

「あ、その帰りだったの？」

「……そう」

シャーレイとミラの会話を聞きながらひなたは笑いを軽く堪えつつ煙草を啜えている。この二人も最初は口数が少なかったが、今になってはかなり口数も増えてきた。ミラに対する誤解が解けてから、二人はやはり何となくの居心地の悪さに口を閉じている事が多かったがひなたが仲介する事で二人は普通の友人程度には会話を弾ませるようになった。

だが、最近というか温泉街から帰ってきてからシャーレイのひなたを見る目が明らかに獲物を見る目になっている時があったり、それを受けひなたに対して同情の視線を向けるミラだったり、少し関係が変化してきている気がした。

前回犯された記憶はないひなただが、その視線を受けるだけで背筋がゾクつとする。体は覚えていたため恐怖を覚えるのは必然だった。最近になって吸血を抑えてシャーレイを発情させないようにしたりするためか、煙草の本数は増えるわシャーレイにバレると襲われる可能性があるから家で一人で発散出来ないわでひなたも最近の生活は変わった。具体的には性欲が以前よりも増した。

ぼけーつとしながら煙草の煙を肺に入れては吐き出してを繰り返している、ふと目の前にミラの手があり、それが振られているのが見えた。そこでようやく意識を戻してミラの方を向くと、二人はどうしたの？ と言いたげな目をひなたに向けていた。

「あ、ああ……ちよつとボーつとしてたよ。で、なんだっけ？」

多分、何かしらの事をひなたに聞いたがひなたがボーつとしていたため、先ほどの行為に入ったのだろう。ひなたは煙草を一旦灰皿に置いてから二人が何を聞いていたのかを改めて尋ねた。

「……シャーレイが」

「私もやっぱり自衛位は出来た方がいいのかなって思つて。ひなたちゃんは どう思うかなって」

と、なると駆除連合の話から戦えた方がいいかもしれない、という会話に変わっていったのだろう。大体の会話の流れを頭の中で予想してからシャーレイの言葉に答える事にした。

ひなた的には危ない戦いに参加するのは反対だが、自衛するだけなら話は別だ。戦力的には半分以下にまで落ちたミラとそのミラと互角かそれ以下かのひなただ。それより弱かったとしても時間を一秒でも稼げればひなたもミラも手を打つことは可能だ。だとしたら出来た方がいいに決まつている。

「出来た方がいいかなつて思うけど……それで危険な事に首は突っ込んでほしくないって感じ」

「流石に危険な事はしないつてば……」

荒事はひなた。家事はシャーレイ。昔の夫婦のようだが、これは前から決めていた事だ。シャーレイもそれは分かっていると苦笑いしながら言っている。

だとしたら、ひなたは全面的に賛成出来る。だとすると、特に訓練せずに扱える武器としては……

「なら、銃とか使つたらどうかかな？」

「え？ 起爆銃？」

「違う違う。普通の銃。オートマチックピストルの事」

「……リボルバーじゃなくて？」

「あつちは反動がね」

この世界にもリボルバーはある。そして、起爆銃の最新型はオートマチックピストルだ。つまり、オートマチックピストルの機構は作れるという事であり、実弾を使うピストルも勿論存在する。

だが、この世界での銃はそれが最新型なので結構値が張る。この世界のリボルバーが地球でのピストル程度の威力であり、この世界のピストルは勿論それよりも貧弱なため威力はそこまでだが、それも弾である程度は補える。だから、余り反動も強くなくそこそこの威力を持つピストルが今のシャーレイのも使えると判断した。

それを察したのかミラも頷いた。この世界では基本的にサブアームはメインアームの射程と合わせた武器を持つためピストルを使う人間は少ないが、それでも高速で弾を飛ばす拳銃を持つのは牽制にもピッタリだ。ちなみに、ひなたのサブアームは己の魔弾を零距离爆破でミラはポーチの中のバタフライナイフだったりする。

「今度買いに行く?」

「じゃあ、行きたい。後、ホルスターはひなたちゃんとお揃いがいいかなあ、なんて」

「あつたらね? これも一年前のやつだし」

今日はローブを羽織っていないため足のホルスターは剥き出しだ。ミラがそれを見て確かに古い、とボソツと声を漏らした。今の型は確かデザインが少し変わっていた筈だ。別に古いからどうだ、という訳ではないが、ひなたはもうこれを使い慣らしているため、最新型に変える気はサラサラ無かった。

というか、旧式起爆銃を仕舞えるホルスターなんてそんなに多くないため探すのが面倒だった。今使っている起爆銃なんて十年以上前の型だ。もういい歳だったあの人が現役だった頃に使っていた銃なのだから、それ位は型落ちしている。マニアには堪らない逸品だ。

ちなみに、今旧式起爆銃を買おうとしたら新型起爆銃が十数個は買えてしまう。

「……旧式なのに綺麗」

「そりゃ、一応簡単なメンテはしてるし」

ミラが勝手に起爆銃を手にとって見ているが、別に不快には思わないため取り返したりはしない。それどころか褒められたため少し気分がいい。

もう十年前から使われている起爆銃なんて普通は結構ボロボロだ

が、細目に分解してはパーツごとにメンテして組み立てたりしているため細かい傷はあってもかなりの美品だ。大きなメンテは武器屋へ行かないと出来ないが、塗装の剥がれ等は自分でも何とか出来る。実は何回か似た様な色で塗り替えたりしているため、塗装ハゲはどこにもない。

「……デザインはカッコいい」

「でしょ？ 銀色と金色。結構好きなんだよね」

「……髪色と同じ」

「そ、そうだね……」

言えない。実は塗装ハゲが起きた時にもう全部塗り替えちゃおうとなつて塗り替えた際に元の銀色じゃなくて自分の髪色と同じ銀色を使ったなんて。本当はもう少し違う銀色が元の色だったなんて。

金色だけは元と同じ色なのにどうして銀色だけ違う銀色を使ったのか。自分でもわかっていない。多分適当だった。あははと乾いた笑いで誤魔化しながら最初に持ってこられた水を口に含む。

「……そういえば、ヒナタの髪の毛」

「ん？ 何かな？」

「……綺麗な銀色」

「そうかな？」

綺麗な銀色だと自分の外見を男時代の目線で見れば確かに思うが、ナルシストではないため余り声高らかに肯定は出来ない。この銀色の髪も元は膝下までであった超とその前に付く位のロングヘアであったが、それも一年前に炎に突っ込んだ際にチリチリになったためかなりバツサリ切った後だ。あれが無ければ今のひなたの髪形はその時と変わりなかっただろう。

地毛が銀髪なのは初めは驚いた。が、今はもう慣れた。というかこの世界はアニメや漫画のように結構地毛がカラフルなので驚いたら負けだ。

「ほら、もうすぐ来るからボクの髪の毛離して」

「……ん」

ミラに髪の毛を離してもらって少しボサボサになった髪の毛を片

手で直す。

「ほんと、ひなたちゃん髪の毛の毛って綺麗だよねえ……夜の結構乱れてた時とか——」

「シャアレイイ……？」

「ごめんなさい」

シャーレイが余計な事を言いそうだったのでピニのほつぺたに起爆銃を突きつける。流石にマズかったとシャーレイも思ったのかすぐに謝った。

だが、その言葉を聞いたミラが何か余計な事を察したのか何か微笑みながらひなたの肩を叩いた。

「……私はレズでも気にしない」

「おうその口閉じれ」

なんかミラが余計な事を言ったため顎の下から起爆銃を押し付けて無理矢理口を閉じさせる。あう、と小さな声が漏れて一瞬可愛いと思ってしまった。

「……た、ただ、私はバイだけど襲わないで………」

「だってさ、シャーレイ。襲ってあげなよ」

「今度ね」

「……………えっ」

シャーレイにロックオンされたミラが素で変な声を漏らす。これでの的が減るとひなたはニヤけた。

が、ひなたは気づいていない。的が増えてもどうせ気絶させられるまでやられる事に。

そしてシャーレイもシャーレイでレズと言われたのに何も言い返さなかった。これが男に近寄らずに生きてきた少女の末路だったとさ。

結局食事をしてから三人は何処にも寄る訳でもなくそのまま家へと帰った。

そして、帰った二人はミラについて数時間前に完成した物をプレゼントした。それを受け取ったミラは首を傾げた。

「……これは？」

作っていたのは一本の棒にそれを手に持ったための棒が一本飛び出し、更にそれを手に固定するためのベルトが付いた物。

「ほら、今の杖じゃ歩きにくいでしょ？ これなら体重を乗せやすいしそこそこ頑丈だし」

簡単に言えば杖だ。ロフストランドクラッチと呼ばれるタイプの杖で、松葉杖のように脇で挟んで体重を掛けるタイプの物ではなく片手で持ってベルト部分を手に巻き付けて固定する。これなら老人用の杖よりはまだ楽に歩く事も出来れば杖に力を込める事も可能だろう。

試しにミラが二本一セットのシャーレイお手製の杖を手に動いてみると、少し慣れないがちゃんと動いていた。

「……慣れるのに時間かかる」

「駄目かな……？」

「……全然。凄くいい」

「よかった……」

どうやら、ミラは気に入ったようだ。時々片手だけに装着して動いているが、それでも十分に動けるらしい。義足の無いこの世界ではこれが精いっぱいだが、ちゃんと動けるだけマシな方だった。

ちなみに、この杖はこの世界には売っていないためひなたの知識から生まれた物だ。

「……少し、出かけてくる」

「何処に行くの？」

「……手紙。忘れてた」

どうやら、誰かに手紙を出したいらしいのだが、出しに行くのを忘れていたらしい。ミラは少し明るい顔で外へと出て行った。

ひなたはそれを見送ってから酒でも飲もうと冷蔵庫に向かう。が、その足が止まった。

「……ひなたちゃん、後でござ褒美貰ってもいいかな？」

「ぐ、ぐ褒美……？」

ひなたが何時の間にか後ろに回っていたシャーレイの声を聞いて謎の悪寒を覚えると同時に足を止めたからだ。

確かに無理言って作ってもらったからぐ褒美を頂戴と言われれば断れないが、何故そこに悪寒を覚えるのか。ひなたはよく分からなかった。

そして、すぐにその悪寒の理由が分かった。

「じゃあ、夜にベッドの上で、ね？」

「ヒエツ……」

どうやら、今日の夜は平和に終わらないらしい。

第四十一 魔弾

ミラを家族として改めて迎えてから一か月程が経過した。ミラはシャーレイに作ってもらった杖を使いある程度は戦闘が出来るようになった。彼女の人外染みた身体能力はどうやら脳のリミッターを魔力で一時的に外す事で出しているようで、普段から怪力という訳ではなく普段はシャーレイと同じ程度の力しか無いためか、杖に関して壊す事なく毎日を平和に過ごしていた。

そしてこの日もそれは同じで、金は稼いだため何もすることのないひなたと家事をし終わって一時的に暇になったシャーレイとひなたと同じく金を無理に稼ぐ必要がないため何もする事がないミラがボーツと三人でソファの上に座って天井を見たり窓の外を見たり膝枕してもらったりとザ・暇人としか言えないような状態になっていた。

三週間程前にミラもひなたと同じようにシャーレイの毒牙にかかって気絶とまではいかないが、色んな初めてを奪われ玩具にされたが、それに関してのトラウマは既に克服し、ミラはひなたの膝に頭を落としていた。なんやかんやでひなたと一緒に居るのが一番落ち着くとの事だ。ちなみにひなたは死ぬまで残して置くんだろうな、と思っておいた体の中のとある膜をシャーレイに無情にもぶち抜かれ数日間歩き方が変になったと同時にシャーレイから無意識に距離をとっていた。もうそんな事はないが、あの日を思い出すと色々と複雑な気持ちになる。

「暇だねえ」

「何もする事ないねえ……」

「……………」

テレビも無ければゲームもない。読書の趣味も無いし仕事もない。そんな何もする事がない現状。口にそれを出したところで何か暇つぶしが出る平和を乱さない程度の面白い事が降ってくる訳がなく、暑いから厚いと呟いたのと同じ程度の言葉だった。

ひなたがシャーレイの肩に頭を預け、シャーレイはそれに何も言わ

ずに呆然と。なんやかんやでシャーレイの事が好きのままのひなたにとつては幸せとも言える時間だ。もし口を滑らせたら確実にシャーレイの玩具になって気絶するまで犯される危険性はあるが。煙草を吸いたいが膝の上のミラに灰が落ちたらいけないので代わりにミラの頭を撫でて手持無沙汰をどうにかする。

この世界にも季節の概念はあり、最近少し暑くなってきたから流石に三人でくつついていると暑い筈なのにこの三人は離れようとしな
い。

「何か暇つぶしの道具ってない？」

「何もないねえ」

「……………すう」

「ミラ寝てんだけど」

「いいじゃないじゃない」

静かに寝落ちしていたミラの頭を撫でながら呑気な子め、と軽く悪態突く。が、既に夢の世界に旅立ったミラにはそれが聞こえることなくこの暇な現状を共有する人間はひなたとシャーレイの二人だけになった。

鍛えているのに筋肉で固くないひなたの子供のような膝はさぞかし気持ちがいいのだろうか。ミラの表情は今まで見たことがないレベルで緩んでいる。せめて涎だけは垂らさないでよ？ と願うもののそれが叶うかどうかは神のみぞ知る。ひなたにはミラの頭を撫でるしか出来ない。

体重をかけられているシャーレイも動けなければ膝枕状態のひなたも動けない。どちらも動けない現状で果たしてどうするか、と考える。

「……………ミラちゃんをそつとここに寝かせて何かする？」

が、考えてもどうにもならないと思ったのかシャーレイがひなたにそう告げた。何か視線がかなり怪しいというか獲物を見る目になっている気がするのはいせいだろうか。

「何かって？」

念のために聞いておく。そう、念のためだ。ひなたが若干恐る恐る

といった感じで聞くと、シャーレイは少し黙った。そしてうんうんと唸って顎に手を置いて考えること数分。

結局何も思いつかなかったのか、それともそれは演技だったのか。ひなたの予想通りの答えがシャーレイからは返ってきた。

「……セ〇〇ス？」

「予想通りのクツソ酷い回答ありがとう。お断りだ色ボケ娘」

確かにこの三週間一度もしていないからひなたも溜まる物が溜まってきているが、それでもこんな真昼間から暇つぶし感覚でなんてお断りだ。確実に夜まで気絶コースが待っている。

何だか息を荒くしながら体重をかけてくるシャーレイから体を逃がすように反対側に体を動かしながらミラを撫でていた手でシャーレイの体を押し返す。確かに十四歳ともなれば性関連の事に関しては目敏くなるというか興味津々というか。そんな感じの年頃だが、流石に時間と場所だけは考えてほしい。真昼間から裸は流石に見られたくはない。

えー、と声を漏らすシャーレイを退けながらはてさてどうするかと外を見ながら迷う。このままじやもしかしたらこの間のプレイで使われた生活費三日分以上もかかったとかこういう手錠をかけられてベッドに直行させられるかもしれない。あの魔法の行使を不可能にする手錠をかけられたらひなたは勿論ミラすらシャーレイの好きなようにされてしまう。それだけは避けなければいけないが、そこまで強姦紛いの事はシャーレイもしないだろう。しないよね？ そんな風にビクビクしながらも体を戻したシャーレイの肩に頭を置く。

「……じやあ外でする？」

「青姦はもつとお断りだ」

流石にシャーレイの性欲に直結した思考回路はどうにかしたほうがいいかもしれない。爆弾発言に対して頭を引つ叩いて拒否の意を示してから何だかドツと疲れた気分になってしまう。

なんでこんな一分にも満たない会話で疲れているんだか。

「じゃ、じゃあキスだけでもお」

「なんでこんなに下半身に忠実になっちゃったかなあ……」

確実にひなたの欲求不満な物言いと吸血のセットのせい。それからひなたが夜は滅法弱い事が原因なのだが、本人はそれの五割程度しか理解していない。

なんで暇になったらキスなのかなあ、と溜め息を吐きながらもはいはい。と呟いてシャーレイの頭を抱くように寄せて己の唇と合わせ。これでまだ恋人の関係じゃないからなあ、とシャーレイの口の中に舌をねじ込みながら思う。

もうセフレとかそのレベルの関係になっている気がするのはいのせいで信じたい。

たっぷり十秒近くのディープキスをして唇を自然と離す。

「ぶはっ……………はい、おしまい」

「えー、なんか物足りない……………」

「あーもう……………」

だがキス程度ではシャーレイは収まらないらしい。ひなたの方も若干ヘソの下辺りが疼いているが、気のせいだと割り切って右手で髪の毛をかき乱す。

ここでじゃあ夜に続きをしようか、なんて言う物なら確実に気絶コース。だが、このまま放置していたら確実に夜中に寝ている内に襲われて気絶コース。どちらにしる気絶コースだ。

あれ？ これ、逃げ道無くね？ と気が付いてももう遅い。性欲で思考回路が麻痺しているシャーレイはもうそういう事をしたいたいと思えていないだろう。ミラを今生贄に差し出すというのも有りだが、そうしたらただ犠牲者が一人増えるだけで終わってしまうだろう。

だが、どうせならミラを生贄にして犠牲者増やしておくか。と謎の結論に至り寝ているミラを生贄にする事にした。

「我慢できないならミラで勘弁して。満足できないなら夜にシてあげるから」

死なば諸共。バイ発言をしたミラが悪い。膝の上で安らかな顔で寝ているミラを生贄に差し出す事にした。

「うーん……………じゃあ、それで」

ミラ、南無。心の中で合掌しミラの冥福を祈る。

シャーレイは懐から魔力封じの手錠を取り出すとミラの手に着け、両手を拘束した。もうこれでミラはシャーレイから逃げる事が出来ない。

「……………んあ？ 変な音……………えっ」

手錠をかけられた異音でミラが起きた。そして己の手が自由に動かないのを見てから己がこの後どうなるかを容易に想像して変な声を漏らした。次にシャーレイを見た。いい笑顔をしていやがる。今から犯してやると言わんばかりにいい笑顔だ。そしてひなたは目を逸らす。こいつ、売りやがったなど一発で分かった。

「……………後で気絶するまで犯してやる」

「やべえ……………」

ミラの恨みやら怨念やらが籠った言葉を受けてひなたが思わず声を漏らす。しかも結構ボソツと低い声で言ったためか普通に怖かった。これはもしかしたらミラを生贄にするんじゃないかと二人で逃げた方が良かったかもしれない。だが、あの状況でそれを提案しても逃げる事は不可能だっただろう。あの手錠をシャーレイは三つ程持っているし。

シャーレイに担がれてドナドナされていくミラを見送ってひなたはソファに座った状態で外を見る。ああ、これは平和といえれば平和だが、体が休まる事は無さそうだ。二階から聞こえるミラの嬌声に次は自分だという恐怖に煙草を啜えながらひなたはそつと家から出て行った。二時間もすればほとぼりは冷めるだろう。冷める筈。

「絶対帰ったら気まずいって……………ミラに関しては絶対に許してくれないだろうし……………」

近くの喫煙者用の憩いの場で煙草を吸いながら溜め息をつくひなた。空に昇っていく煙には目もくれずに死んだ目で呆然と前を見るだけ。

今戻ってもシャーレイがミラを犯している最中だろうしそんな場所に突入したら確実に巻き込まれる。が、どうせミラにやられるのだから変わらないと思う。

「祭られた後に犯されるかも……」

その場合はミラの物理的な力で何度も空を舞う事になるかもしれないが考えても考えても悪いほうにしか思考回路が進まない。これからどうするかを考えても何も思いつかない。というかこの先の事を思いたくないから何もする気が起きない。煙草を吸っていても悪いことしか思い浮かばないのは逆に珍しいと言わべきか。

スタンド灰皿に灰を落とし煙を吸ってからも煙草の先が数センチもない事をようやく自覚して最後に煙を吸ってから煙草をスタンド灰皿に落とす。二本目、とも思ったが流石にそんなに何本も吸う気は起きない。吸っていても悪いことを考えてしまうから。

何でこんな爛れたような関係になっちゃったかなあ、なんて思いながら立ち上がる。ローブも羽織らず半袖の部屋着同然の恰好で出てきてしまったからかちよつと気恥ずかしい。こうなったら適当な茶店で夜まで粘るべきかとポケットの中に入っていた小銭を取り出す。

「……………駄菓子しか買えないんだけど」

が、出てきたのは日本円の感覚に直すと一円玉や五円玉に近い硬貨が数枚だけ。確実に食材とか買った後に適当にポケットの中に突っ込んだお釣りだ。こんな小銭じゃ茶店で時間を潰すなんて出来るわけがない。小銭をズボンのポケットに再び突っ込む。レシートがあった。これでこの小銭がお釣りだということが確定した。物凄くどうでもいい。

忘れ物がないかを簡単に確認してから喫煙所を出る。何となくの手持ち無沙汰を感じ煙草の箱を手にとって適当に弄りながら歩く。どこに行くかなんて決めていない。ただの散歩だ。何かあっても起爆銃だけはいつも持つてきているからどんな相手でも逃げる程度は

「……………起爆銃忘れた」

いつも起爆銃がある場所を触ってようやく気付いた。ブーツと三

人でソファに座っている状態のまま出てきたからか起爆銃を寝室に置いてきたままだ。こうなってしまうと魔弾使いの戦闘力は半減どころの問題じゃなくなる。一般人とあまり変わらないレベルだ。

一応シューターとシールドはちゃんど丁寧に詠唱をして発動したら使えない事はないが魔弾にしたほうが何倍も強い。かといって魔弾にしたとしても撃つための手段がないし手で握り潰して発射するのも手が痛くて三発以上は使えないし。噛み割ったら口の中が大惨事だし。さっさと帰ったほうがいい。ものすごく帰りたくないけど。

もう一回ポケットの中の小銭を確認する。やはり見間違えという事はない。

「はあ……お財布くらい持ってこればよかった」

とは言っても財布も起爆銃も寝室なので取りに行くことなんてできぬわけがないが。

これはとつとと帰って――

「すまない、そこのお嬢さん。少しいいかな？」

「はい？」

家に向かって歩を進めようとしたとき。後ろから聞いたことのない男の声が聞こえた。しかも、その声はひなたにかけられた物らしく、横にも前にもひなた以外に人はいなかった。

めんどくさいなあ、と内心で思いながらも振り返ると、そこにはまるで二次元にしかいないようなイケメン従者だと思われる人間を引き連れてそこにいた。しかも、結構派手な服。まるで貴族だ。

一応この世界にも貴族はあるがこの街には貴族なんて住んでいないのは覚えている。というか貴族と呼ばれる身分が高い金持ちはここよりも、王城がある王都にしか住んではない。

「なんででしょうか？」

もしも本当に貴族だったら厄介だ。だからなるべくのをポーカーフェイスを作って下から出る。もう面倒ごとは勘弁してほしいと思いつつながら。

「この場所を探しているんだ。どこか分かるかな？」

と言いつつながら男は従者から受け取った紙をひなたに渡した。まさ

か道を尋ねただけ？ とキョトンとしながらも紙を受け取って内容を見る。そこには住所が書いてあり、それは今の場所とは正反対とも言える場所を指していた。この街は広い上に住所もややこしいから場所を勘違いしたのだろうか。道案内は面倒だからしたくないが、教える程度ならやぶさかではない。ちゃんと教える事にする。

「そうですね……このことは正反対の場所なのでまずここを真っ直ぐ行つて——」

わかりやすいように近くの目立つ建物を教えながら道を教えていく。そして一分程度で道を教え終わり、紙を男に返した。そして従者に何か言おうと従者は一人で走り出した。どうやら、先に確認しに行つたのだろう。

「どうもありがとう、綺麗なお嬢さん」

「いえ。この程度なら」

心にも思っていない世辞を、とひなたは内心で毒づく。隻腕の幼児体系の女なんて男からしたらそんなに魅力的ではないとわかつているから。

「ふむ……そうだな。礼と言つてはなんだが、近くの喫茶店で一つお茶でもしないか？」

ああ、面倒だ。面倒すぎる。なんでこんな見ず知らずの男と喫茶店に行かなければならないのか。ノーマルな夢見がちの少女なら受けるかもしれないが、生憎ひなたは外側だけを見たらレズで内側から見たら至ってノーマルな男。イケメンだからと言つてそんな誘いを受けける訳が——

「素敵な誘いですね。あまり時間はありませんが——」

——マテ。何を言っている。

この男について行つて何をされるか分からないのに何で口はこんな肯定の言葉を紡いでいる。とうかこの気持ち悪い口調はなんだ。何で思考回路がついて行くこともやぶさかではないと思ひ込んでいる。

マズい。何か分からないが精神的な何かが……ああ、こうして考えている間にも段々と思惑回路が麻痺して目の前の男が魅力的に見える

てきてしまう。頭がクラクラとしてこの男になら何をされても全然いいという感覚が芽生えて……

明らかに異常だ。いや、正常だ。これが暁ひなたという女としての思考回路としては正常で逆玉を狙う程度、女として普通だしこんな隻腕の女を貰ってくれる男なんて多分この人以外には――

「――い、いえ。なんでもありません」

思考回路が桃色一色に支配されそうになったが、僅かに残った正常な思考回路が先ほどまでの言葉を撤回し手の中に魔弾を生み出す。それを握り潰す事で一瞬で思考回路が正常に戻る。

握り潰したのはレジストの魔弾。つまり、己にかけられた魔法等の状態異常を解除するための魔弾。それを握りつぶしたことで思考回路がようやくマトモになったという事はこの男は……

「すみません。家で同居人が待つているので失礼します」

何をされたのかは日本人としての、ファンタジー世界に対する創作の知識を頼る事で大体分かった。

だから逃げる。これ以上この男と一緒になんていられない。この男は明らかに可笑しい。詠唱も魔法の発動のキーも口にせず魅了チャームの効果を持つ魔法……またはそれに近い魔法を使用する男なんて、明らかに裏に何かあるにきまつている。

処女はこの間シャーレイの手で散らされたが男に体を許すつもりなんて一切ない。だから帰る。シャーレイとミラが盛っているなんて知ったものか。

「――そうかい。それなら仕方がないね」

よかった。余りしつこくない男で。早口で失礼しますと捲し立てるとそのまま走って家へと向かう。

後ろから誰もついてきていないのを確認しながら男の視界から完全に外れたのを把握する。

「……目を付けられてなきやいいけど」

権力を使われたらひなたも流石に乗り切るのはキツイ。だから、もう二度と会いたくはない。また魅了に近い魔法を使われたらレジスト出来るかも分からないから、というのも一つの理由だ。ひなたは一

時的に足を止めたがすぐに再び走り出して家へと向かった。

だが、その懸念もすぐに忘れる事になる。何故なら。

「ただいまあ……ああ、酷い目に——」

「ひなたちゃん？ どこに行ってたのかな？」

「ビツ……!?!」

帰ってすぐに服が肌蹴たシャーレイに捕まったからだ。

ここから先は子供が見てはいけない行為が行われたとしか言うことは出来ない。

シャーレイとの行為は何とか耐えられたが直後のミラの報復で無事に気絶することとなる。現在、行為後の気絶率は百パーセントのままである。

第四十二魔弾

翌日。公共では言えないような事を昼にシャーレイにやられ夜にもミラに攫われてミラの部屋でやられ色々身体の一部や精神の大事な部分が削れているような錯覚を覚えてミラの部屋のベッドで起きた。勿論全裸で。

昨日はかなりハードなプレイを強要され本気で死ぬかと思ったレベルだった。その際に飛び散ったりした色々意味深な液体は乾いているか拭かれており起きてから体がネチヨネチヨするという事は無かったがやられまくって一日に二度も気絶したからか疲労感が途轍もないし下半身辺りにも違和感がある。

そして起きたのは昼過ぎ。勿論ミラは既に起きているらしく昨日ミラが脱いだ服はどこにもない。代わりにひなたの着替えが置いてある。私室から持ってきたのかシャーレイとの共通の寝室から持ってきたのか分からないが下着まで丁寧に置いてある。それに甘えて下着を着てから服を着る。

朝チユンならぬ昼チユンだがまさか自分がされる側になるなんて一年前は思ってもいなかった。しかも女の体を愉しみだしている自分がいる。一年も経てば人間って変わる物だなあ、なんて適当な事を思いながら服を着終わって部屋の外に出る。そしてそのまま居間へ向かうと、シャーレイが昼食を作っている音がした。それを聞いてから台所へと向かう。

「やつ、おはよ」

「あ、やつと起きたの？ もうすぐお昼だよ？」

そういうシャーレイの顔には若干の呆れのような物と嫉妬のような物が映っていた。これは絶対に夜の運動会に誘われなかったことを恨んでいる。3Pした所でシャーレイに気絶させられるまでやられるのは確実だから誘いたくはない。

ありがと、と昼を用意してくれているシャーレイに礼を言ってから台所を出ようとしたところふとミラがいつも座っているソファに座っていないのに気が付いた。一緒に寝てもいなかったし何処にい

るのがふと気になってシャーレイに聞くことにした。

「シャーレイ、ミラってどこ行った？」

その言葉を聞くとシャーレイは少し面白くないと言いたような表情をした。別に本命はシャーレイのまま変わらないのだからそんな顔しなくてもいいのに、とひなたは思ってしまったが、肌を重ねた相手が他人に抱かれ、自分よりもその相手を気に掛けるというのは面白くないのだろう。また抱かれるのはちよつと御免だが近いうちに彼女に対して何かしてあげないとヘソを曲げたままになってしまうだろう。

適当な物をプレゼントでもするか？　と思ってしまうがその程度でシャーレイの起源が直るとは限らない。どうした物かと考えてしまいが、そうして考えている間にシャーレイが口を開いた。

「駆除連合だって。お金稼いでくるって」

「え？　ミラが？」

最近では自宅警備員にでも転職したのかと言いたくなる程度には家にいたミラが自ら外へ。しかも、金稼ぎに行っている。ちよつと予想外だったが、彼女も駆除連合で金を稼いで生きてきた立派な人間だ。足が一本無くなったとしても魔獣程度が彼女を殺せるとは思えない。

だから心配こそしないが何で魔獣の狩りへ今更出かける理由が分からない。まあ、ただの小遣い稼ぎだろう。ひなたが稼いできた金の内生活費以外は小遣いとして分配もしているが、それでは足りない物を買おうと思ったのだろう。

何かマズいことでもあった？　と聞いてきた。勿論マズい事なんて何にもないため何でもないよ、とだけ返す。杖をついているから少し帰ってくるのに時間はかかるかと思うが、ミラ程の腕なら夕方までには無事に帰ってこれるだろう。ひなたですら今まで無傷で帰ってこれたのだから。

だが、そうなると久しぶりにシャーレイと二人きりだ。付き合っている訳じゃないからイチャイチャ出来る、というわけではないが少しシャーレイに甘える程度なら許されるだろう。

シャーレイが彼氏でひなたが彼女みたいになっている事には彼女

達は気づいていない。

「お待たせ。お昼出来たよ」

「あ、運ぶの手伝うね」

「うん。じゃあ、フオークとかお願い」

そう言われひなたは大人しくスプーンやフオークを入れた容器から二人分のそれを取り出しそれぞれの席に並べる。それと同じくらいにシャーレイが完成させた料理を並べる。今日はトマトソースの Pasta とサラダだ。イタリアンチックな感じがするが結構食生活が洋風よりなこの世界ではこれ位は普通だった。

箸もないためフオークを使う事になるがそれももう慣れた。それにしても、シャーレイの料理は日に日に上達していつている。今のシャーレイを指さして実はスラム出身だと言っても誰も信じる事はないくらいにはシャーレイはスラムで生活していたとは思えない位家事等が上手い。それもこれもひなたの家事をする効率が悪かったりしたせいなのだが、ひなたもシャーレイもそれを忘れている。もうこれが普通なのだ。

「ほら、食べようか」

「そうだね」

並べられた料理をどちらからともなくフオークで食べ始める。日本式でも海外式でも無く。宗教に入信している人もいるが居ない人も半々いる程度のこの世界ではいただきます、という習慣も無ければ食事の前に神に祈る習慣もない。せいぜい笑顔で食事を始める程度だ。

Pasta を口に含むと丁度いいトマトソースの美味しさと Pasta の食感が口の中を幸せにする。昨日の夜から水すら摂取していなかったためか余計にそれが美味しく感じる。

「……うん、美味しい。また腕上げた？」

「素材が良かっただけだよ」

素直に思った感想を口にするがシャーレイはそれを謙遜する。だが、シャーレイの料理の腕が上がっているのはこうして食事を口に運べばすぐに分かる。

もう店を出せばいいんじゃないかとすら思えてしまうがまだシャーレイは十四歳だ。少なくともあと四年くらいはそれは待たせておきたい。そもそもシャーレイにその気があるのかすら不明だが。「そういえばさ、ミラってなんでいきなり狩りに行ったの？」

一旦右手を止めてシャーレイに聞く。

それに対してシャーレイも手をとめてひなたの問いに答える。

「分かんない。多分、体が鈍ったりしないためだと思うけど」

「あー……そっか。確かに最近、ミラって運動していなかったもんね」確かに最近のミラはあまり運動をしていなかった。精々腹筋をしていたり逆立ちした状態で腕立てをしたりしていた程度だろうか。本当の最低限の体力と筋力を保持したままここ数週間生きてきた程度。今まで戦いを性分に生きてきたミラとしては外には外に出て狩りでもして体の調子を確かめたいのだろう。ひなたも最低限は体を鍛えているがたまには一暴れしたい気分になる。

「ボクもミラを追いかけようかな……って、どこにいるか分からないか」

「じゃあ、今日は家でゆっくりしてようよ。二人きりなんて久しぶりだしさ」

「……お、犯さない？」

「し、しないよお!! ……多分」

「こ、怖いなあ……!」

だが、元よりそのつもりだったため拒否する気はない。犯されるかもしれないとは思っているが、そこまでハードなプレイじゃなければ拒否する気はない。

冗談だよ、とシャーレイに一言言ってからサラダを口にすする。今まで口にした事がない、されど美味しいドレッシングが口の中に広がっていく。

「あ、ドレッシングってもしかして……」

「うん。今日新しく作ってみたの。どうかな？」

「凄く美味しいよ」

本心からの言葉。決して取り繕っていない言葉。それを聞いて

シャーレイは笑顔をこぼした。その笑顔に魅了されかけて思わず顔を逸らす。

ちよつとそれがバレかけてフォークを少し齧ってしまいがすぐにそれが行儀悪いと気づいてやめ、パスタを代わりに口に含んだ。シャーレイはそれに気づいているのかそれとも気づいていないのか。それは分からないが笑いながら彼女もパスタを口に含んだ。

そして数分経ってシャーレイの作ってくれた料理を食べ終わって。最後に水を飲んで乾いていた喉を潤した。

「美味しかったよ」

「ならよかった。じゃあ、持っていくから……」

「いいよ。ボクも持っていくから」

と言って自分の使った皿を重ねて片手で持ちあげる。もう片手で積んだ物を持っていくのに慣れたひなたは何の危なげもなくそれを持っていく。シャーレイはそれを止めようとしたが、別にひなたが持つて行つてはいけないという道理はなく、それはひなたへの侮辱にもなるかもしれないと気が付き、ありがとうと一言礼を言つてからそのあとを歩いて行つて自分の分の皿を水に浸けておく。洗うのは夕食の前か後だ。

そのまま二人で何も言わずにソファに座り、暇を持て余す。

ひなたはこの際に、とても思つたのか起爆銃を持つてくるとそれをソファの前のテーブルに置き、工具箱も一緒に持つてきてその中にあつた専用の器具で解体し始めた。どうやら、簡単な整備をするらしい。

「手伝おうか?」

「あ、お願いしてもいいかな?」

「うん。暇だしね」

「それもそつか。じゃあ、ここを抑えてくれないかな」

「えつと……こう?」

「そうそう」

片手ではやりにくい部分をシャーレイが手伝い、二人で起爆銃を分解していく。もちろん、弾は既に抜いてあるため暴発することはな

い。

分解し終わり、小さなパーツ群になったそれをひなたは手でとって一つ一つ確認し、汚れがあったりするものはそれを綺麗な布で拭く。シャーレイもそれを手伝い、小さなパーツはシャーレイが拭いていく。

「……あ、このパーツ、ヒビが入ってる」

「え、マジ？」

「うん。ほら、ハン」

そう言つてシャーレイが持っていたパーツをひなたに見せる。そこには確かにヒビがあった。それも、かなり大事なパーツに。

「あつちやあ……最近無茶させてたからなあ……」

ジェノサイドブレイカーしかり、ジェノサイドブラスターしかり。体に負担をかけるのも勿論だが、銃本体にだって負担はかかる。ここ数か月で切り札を何度も切っているのだからパーツにも限界が来てしまったのだろう。

「予備パーツはあるはず……」

一応、ひなたの工具箱には外装だけ用意したらもう一丁起爆銃を組めるくらいの予備パーツが揃っている。それくらいしないと魔弾使いはもしもの時に簡単に無力になってしまうから、という理由で予備パーツは揃えていたが、探してもヒビが入ったパーツの予備が見つからない。

シリンダーやトリガー、ハンマーといった大きな部品を外に出して工具箱を探しているが、やはり見つからない。

困った。旧式起爆銃のパーツなんて今は注文して取り寄せないと基本的に手に入れる事が出来ない。

あと一回や二回の戦闘なら全然耐えられるレベルだが、もう一度ジェノサイドバスターを使ったら確実にこのパーツは壊れてひなたが一瞬で無力化されてしまうだろう。もしもの場合に備えて起爆銃は万全の状態にしておきたいのに予備パーツが無いのはとても困る。

「うっそでしょ……無くしちゃった……？」

何度も工具箱を漁ってみるが出てくるのは関係ないパーツばかり

で。他にもない予備パーツも発見した。

見つからないパーツ達は確かにあまり壊れないから数を用意してないがまさかここまで無くなっているとは、と少し驚く。こうなること無い予備パーツも取り寄せた方がいいかもしれない。

「うう……仕方ない。このまま組み立てよう」

「え、いいの？」

「すぐに武器屋に取り寄せに行くからね。大きな戦闘が無ければいいけど……」

テキパキと起爆銃を組み立て何度か空撃ちをしてからそれをホルスターに納めて足に巻き付ける。ゴロツキ程度なら普通の魔弾で何とかなるため一応は装備しておく。一応だ。

「すぐ行ってくるけど、どう？ 一緒に行く？」

「あ、じゃあついていくね。ついでに銃とかも見てきたいし」

「ああ……そういえばシャーレイの武器を買うって言ったのに買ってなかったね。この際だしついでに見てこようか」

確か、拳銃も武器屋に売っていた筈だ。こういう時に買わないと忘れてしまうそうだから早めに買ってしまおう。

これくらいの値段だったはず、と頭の中で弾代と銃本体の値段、それからホルスター代にメンテナンス道具の代金を計算する。予想以上に高いため少し目まいがしたが、シャーレイの安全には変えられない。使ったのならまたすぐに稼いできたらいいと思いを切り替えて金がある現場で足りなかった、という事がないように財布の中に生活費を全て突っ込んでスリに合わないようにポーチと財布を紐で繋いでおく。

そしてシャーレイを呼び共に家を出てドアに鍵をかける。施錠もバッチリした所でようやく二人でお買い物タイムだ。

「今日は少し暑いね」

「もう暑くなる季節だからね……」

だが、汗をかくほどでも無い。一応、家の中では扇風機がついていたため、家の中は快適だ。

「もしかしたら汗かくかもね……汗臭くならないか心配だなあ……」

「もう既に色々アレな臭いがするけどね」

「それ早く言ってくれないかなあ!？」
結局、ひなたが一回シャワーを浴びるまで買い物はお預けとなつた。

第四十三魔弾

ひなたがシャワーを浴びて髪の毛をしっかりと乾かしてから武具屋へと向かった。武具屋は歩いて十数分程の場所にある。一応この街では一番の武具屋だが上にも下にも武具屋が無いため暫定的にこの街一番の武具屋になっっている。つまり行く場所がそこにしかない。防具屋もこの街では一番の防具屋しか存在しない。何でこの国ではトップレベルの街に武具屋と防具屋がそれしかないのかはよく分からないが、そのため行くところに迷うわけがない。

シャーレイと適当に駄弁りながら武具屋へと歩く。暑いと言われると暑いというレベルの気温と太陽の光に当てられながら、しかしそこまで汗をかくという訳でもなくただ武具屋へ向かって歩く。

途中、シャーレイが懇意にしているらしいスーパー等を通り過ぎていくと知り合いなのか戦友なのか、主婦らしき人達がシャーレイと話そうと近寄ってくる。シャーレイもひなたに一言断ってからその人達と色々と話している。ひなたはそれを後ろからジーツと見ている。「あら、そっちの子は妹さん？」

「こう見えても二十歳ですけど……っ」

そして決まって言われるこの言葉。隻腕という所は体を動かしてなるべく隠しているが、やはり背の低さからシャーレイの妹だと思われ続ける。アニメや漫画でこういう扱いをされている人を見ても笑いどころになるだけだがこうして自分が受けてみると若干イラついてしまう。

小さい背に絶壁レベルの胸はどうしてもひなたを本来の歳以下に見せてしまう。だから初見で間違えられるのは仕方のない事だがこうして口で言われると何とも言えない気持ちになっってしまう。まさか怒鳴り散らす訳にもいかなからグツと拳を握って我慢するしかない。時々起爆銃を見て玩具か何かかと思っただけで微笑ましく見てくる人がいるため余計にやるせなさを感じてしまう。やはりローブか何かを羽織ってくるべきだったかと今更ながら思っってしまう。

結局シャーレイは主婦の方々と数十分話し続けてしまい、肝心の武

具屋についたのは家を出てから三十分後の事だった。仕方ないとはいえ若干の疲労感を感じてしまう。

「ご、ごめんね?」

「別にいいよ。時間なんて余っているし」

別にこれから先予定が押しているわけでもなく何かしなければならぬ事もなく。時々金だけ稼いでくる以外はニートと変わらないような生活をしている以上、時間なんて余りまくっている訳で。如何に日本が慌ただしく、働くしか存在意義を証明できないまるで奴隷国家のような国だったかを実感させられる。

ひなたの労働時間なんて僅か数時間を数日に一回だけ。毎日八時間以上も働いてそれから残業までするのを週に二日以下の休みだけでこなすなんて異常だとすら思えてしまう。

だが、もうそんな国からは解放されて異世界に生きている以上、時間なんて今までよりも何倍も余っている。だからこの程度の事なら全く気にはしない。

「さて、レジに行つて注文しておかないと……」

武具屋に入つてすぐにひなたはレジへと向かう。基本的にパーツ等のメンテに使うような品は直接注文しないと買うことが出来ない。そのまま売っている時もあるが、そういう時は基本的にショーケースの中に入っているためどっちにしる店員の所に行かなければならない。

シャーレイは武具屋に入ったことがないのか周りを見ているからここで見ていてもいいよ。と言う。

「え? いいの?」

「うん。出来れば銃が置いてある場所に居てくれれば見つけやすいけど」

この武具屋は二階建ての結構大きな武具屋なのでかなりの武器が色んな場所に大量に置いてある。

剣や槍は勿論、弓や盾なども置いてある。二階には斧などが置いてあり、その中には銃も置いてあるらしい。大量生産品は地面においてる傘立てのような物に大量に置いてあり、どれも安い。その分性能は

お察しレベルだが、初心者の内なら全然使えるレベルだ。

チラッと値段を見てみるとひなたが一日で稼いでくる金が三日分程度だろうか。高い武器は簡単に一か月分とかを取り去っていくため値段的には全然良心的だ。

シャーレイが二階に上がっていくのを見てからひなたは一階のレジへと向かい、店員へと話しかける。

「すみません、ちよつといいですか?」

「はい、なんででしょうか?」

店員は中々親切だ。ネームプレートのような物を見てみるとそこには研修中と書かれていた。最近入ってきたバイト君らしい。

「ちよつと起爆銃のパーツを買いたいんですけど」

「起爆銃ですか? それはちよつと二階に行ってもらわないと……」

「あ、そうですか」

どうやら二階でなければ起爆銃は扱っていないらしい。

確かに、二階に拳銃等が置いてあるのだから普通に考えてみれば起爆銃も二階にしかないだろう。それなら一言礼を言ってから二階へ向かう。

二階では先に待っていたシャーレイがショーケースの拳銃を眺めていた。だが、その拳銃は高いものが沢山なので出来ればそこから欲しい物を選ぶのは止めてほしい。今持っている金じや確実に足りない。壁にかけてある安いやつにしてほしい。

「すみません」

そんなシャーレイを見てからレジの店員に声をかける。

店員は店主なのかバイトなのかわからないが結構丁寧に接客をしてくれる。

「なんででしょうか?」

「起爆銃のパーツを探しているんですが、置いてありますか?」

「起爆銃ですか……型は、どんな物ですか?」

型、と言われて旧式ですと言いかけたが、起爆銃にも普通の銃のように名前がある。ひなたはどんな名前だったか、と頭を悩ませてからもう実物を見せたほうが早いかと起爆銃を見せる。

それを見た店員、もしくは店主が顔を顰める。どうやら旧式となる
と話は難しいらしい。

「これは……ちよつと怪しいですね。この際ですし新型を買ったほう
が……」

やはり、そうなるだろう。もう旧式に関しては普通に探しても売っ
ている物じゃないしパーツに関して市場に出回っているか怪しい
ところなのだろう。暗に見つかからない可能性が高いと言われてしま
うが、次のひなたの言葉で顔を更に難しくした。

「ははは……左手がこれなんで……」

袖が通っていない左手。それを見てすぐにひなたがどんな戦い方
をしていたのかを理解する。

旧式起爆銃がまだ使われていた時代、この起爆銃のリロードはス
ピードローダー等を使ったりリロードが一般的だったが、中には二丁拳
銃のスタイルでひなたと同じようなリロード繰り返して戦っていた
変態も居た。だから、片手しかないひなたが旧式起爆銃を使っている
時点で戦い方の予想は容易だったのだろう。

「……少々お待ちください」

彼はそう言うのと店の奥に引っ込んでいった。やはり難しいのだろ
うか。

もしも旧式起爆銃のパーツを用意できないとひなたは毎回二十発
程度の魔弾だけで戦わなければならなくなる。マガジンでのリロー
ドなんて片手じゃ無理だし、マガジンが尽きればもう戦えなくなつて
しまう。今までは魔力が続く限り戦えていたが、旧式じゃなければそ
れも不可能になる。

ドキドキハラハラしながら待っていると、中から先ほどとは違う男
性が出てきた。ネームプレートを見る限り店主のようだ。

「すまない、待たせたな」

「いえ、別に大丈夫ですけど……」

問題は起爆銃のパーツがあるかどうかだ。

パーツがないと本当に困る。

「二応、旧式のパーツも幾つかはあるが……口頭じゃよく分からんか

ら解体させてもらってもいいか?」

「それなら別に」

「なら早速やらせてもらう。旧式なんてまた珍しいモンを……」

愚痴のような物を呟きながら店主が工具箱を取り出すと手早く起爆銃を分解し始める。

その手際は持ち主のひなたよりもいい。恐らく、まだ旧式が使われていた時代に起爆銃の分解をしたことがあったのだろう。すぐに外装を取り外し、どのパーツだ? と聞いてくる。

ひなたはその言葉を聞いてからヒビが入ったパーツを指さした。それを見た瞬間、店主の顔が一気に険しくなった。

「ここか……確かに壊れやすいっちゃ壊れやすい所だが……」

「予備パーツは持ってた筈なんですけどなくしちゃったみたいで……」

「そりゃ災難だったとしか言えんが……」

やはりパーツは難しいか、とひなたは落胆する。だが、返ってきた言葉は予想外の言葉だった。

「一応、用意する宛はあるが……」

「えっ?」

用意する宛があるなんて思ってもいなかった。

が、やはり表情はかなり難しそうだ。

「かなり高いぞ?」

「えっと……幾ら位ですかね?」

「こんなモンだ」

そう言われて見せられた電卓の上の値段は、かなり高い。今の新型起爆銃が数丁買えてしまうくらいに高い。これなら誰もが新型起爆銃を買うだろう。

「うう……だ、大丈夫です」

「すまん。もうコイツを扱っている場所ってのが少なくてな。もうマニア向けって感じになってプレミアが付いてんだよ。旧式を使っている奴ももう物好きしか居ないからな……」

「……一括で払います」

これは拳銃を買うのはかなり後になるかもしれない。この起爆銃の予備パーツも高い部品は基本的に貰った物だからここまで高いというのも知らなかった。苦虫を噛み潰したような表情で財布の中から金を取り出すとそれを渡す。店主はそれをちゃんと確認すると、紙を取り出してそれに何かを記載した。

「一週間後だ。こいつと交換って形にする。家族でも誰でもいいから持って来たら渡す」

「はい……お手数かけてすみません」

「こっちは金貰えるから別にいいんだがな……」

それはそうだね。と心の中で納得はするが、それでもかなり痛い出費だ。とほほ、と寒くなった財布をポーチに仕舞う。これはまた暫く金を貯めに魔獣狩りにいそしまなければならぬ。じゃないと生活すら厳しくなってしまう。

シャーレイを呼んで武具屋を出る。これは起爆銃以外のサブウェポンを考えたほうがいいかもしれない。溜め息を付きながらそんな事を思った。

第四十四魔弾

結局ひなたとシャーレイは起爆銃のパーツの取り寄せをしてもらってからすぐに武器屋から出て行った。もう拳銃を買うための金なんて残っていない上に今日分の食費程度しか財布しか残っていない。だからこれ以上の買い物をするなんて以ての外だった。

明日からはミラを連れて金稼ぎに行かなければダメかもしれない。基本的には魔弾をばら撒く地雷戦法でいいが、もしもの場合に起爆銃が壊れたらデッドエンド待ったなしだ。だからミラに協力してもらって護衛してもらおう必要がある。明日からはまた激動……とは言えないがそこそこ大変な一日が続くかもしれない。若干憂鬱だ。折角一週間以上連動して金を稼いでその金になるべく減らないようにせつせと時々働いて補充してきたのに。一瞬で金欠だ。

それでも戦う力が無くなるよりは遥かにマシではあるが。

「ごめんね、勝手にお金使っちゃってさ……」

「大丈夫だよ。家にまだ食材あるし、三日位ならこれでも全然平気だから」

「その優しさが心に痛い……」

事実を言っているだけなのか、慰めてくれているのか。どっちかはよく分からないが、その言葉が胸に痛いと同時に慰めてくれる。取り敢えずはシャーレイのこの優しさに甘えさせてもらおう。明日からは頑張らなくては。

大丈夫だから、と頭を撫でて来るシャーレイだったが、忘れてはならない。ひなたの方が年上だししかも男だ。自分よりも年下の女の子に頭を撫でられるなんてこっ恥ずかしいなんてレベルじゃない。顔に熱が籠っていきのがなんとなく分かりすぐにシャーレイ手を掴んでゆつくりと頭から離す。それが照れ隠しだと分かってしまったのかシャーレイは笑っている。それが余計に恥ずかしく、しかし出来る抵抗は無いも同然で顔を背けて真っ赤になった顔を隠すだけだった。

これも照れ隠しだ、と言わんばかりにシャーレイの脇腹を振り、

シャーレイが小さく悲鳴を上げた所でようやく精々した。が、これも照れ隠しだと知られているためどちらにしる顔が赤いのは隠せていない。

「……肉じゃなくて皮だけなのがムカつく」

抓ってみた感想だが、シャーレイに贅肉と呼べる肉は殆ど付いていなかった。ひなたも別に太っている訳ではないし太りやすい体質でもなく、また運動もしているため体系はキープ出来ているがそれでもシャーレイが殆ど運動していないのは知っている。少なくともひなたよりも運動していないことは。なのに贅肉が少しも付いていない事に若干嫉妬を覚える。

ひなたは太りやすくないだけで食っちゃ寝していたら普通に太る。なのに胸は据え置き。昔ちよつとそうしたら胸が大きくなるんじゃないかと思ったら腹が弛んだだけだったので泣いた。なのにこの子は大した努力もなく胸は大きく背も普通にある。スラム育ちなのにどうしてここまで差が付いた、と悲しくなってしまう。

「いたた……実は私、あんまり太らないんだよね。胸は大きくなるのに」

「うっせー!!」

「ひゃあ!?!」

思わずキレてシャーレイの胸に昇竜拳。しかし返ってくるのはシャーレイの胸の柔らかい感触だけでひなたの方のダメージの方が大きかった。

今なら血涙を出せそうだと思いつつながら自分の胸を改めて触る。ぺったんこだ。いつも通りにぺったんこだ。TS前の胸とあんまり変わらない位にぺったんこだ。

「……これが胸囲の格差社会」

テンションが上がったり下がったり。正に情緒不安定だが、もうシャーレイもひなたの情緒不安定に加えて貧乳コンプレックスには慣れっこなので苦笑いするだけだ。一部のマニアにはこの体系が人気なのは知っているし欠損というのも一つのステータスになるのは知っているが、男モテなんて一切考えていない上に折角女になったん

だからナイスバディーになってみたかったという色んな願望が渦巻いて涙が出てくる。

そんなひなたを見てシャーレイが再び頭を撫でる。そしてすぐにひなたが怒る。

「撫でるなーっ!!」

「はいはい」

うがー、といきなりキレるひなたをシャーレイは笑ってスルーして歩を進める。ひなたはそれにムツとしながらも付いていく。これじゃあどつちが年上なのか分からない。少なくともこの現場を見ていた人はシャーレイの方が年上、もしくは姉だと思っだろう。

金髪と銀髪の美少女姉妹。外見だけならパーフェクトだ。中身は壊滅的だが。

「くっそー……」

「そんなに拗ねないの。あ、そうだ。ちよっとお塩切らしちゃってるから買ってきていい?」

「別にいいよ? ってか、塩切らしてたんだ……」

「今朝使い切っちゃってね」

ひなたの中では塩と砂糖は結構切れにくい調味料というイメージだったので少し意外だった。が、やはり味付けには頻繁に登場するそれらは大量に買い置きしておかないと結構無くなる。一か月前に少しだけ買った程度だったので尽きるのは別に可笑しくなかった。

シャーレイは脳内マップと今の自分の居る大体の位置を照らし合わせて今何処にいるかを把握しどこのスーパーへ行こうかを決める。少し遠いが一番塩が安いスーパーの存在を思い出したのでそこへ向かうことにする。

ひなたが先に行く彼女の後について歩く。こういう事は全部シャーレイ任せなのでひなたは何も言わずについて行く。下手に口を出したら逆鱗をつついてしまう可能性もあるからだ。

最早台所はシャーレイの独壇場。ひなたじゃもう口を挟めない状態だ。勿論、ミラも。

一応ひなたが日本にいた頃の自炊で身につけた色んなレシピを教

えたりはしているが最早ひなたが作るよりも美味しい上にもうレパートリーは無くなったためひなたの日本人としてのアドバンテージなんて当の昔に捨てられてしまった。

「結構遠くのスーパーに行くんだね」

「そっちの方が安い。それにポイントカードもあるしね」

と言いながらドヤ顔で懐から何枚ものポイントカードを取り出すシャーレイ。この世界にポイントカードなんてあるのか、と驚愕しながらもう主婦みたいだな、と苦笑いして相槌を打つ。

まさかスラムで十年以上生きてきたシャーレイがここまで遅く生きれるなんて思ってもいなかった。シャロンも天国でそう思っているだろう。

「スラムじゃ小銭だって馬鹿に出来ない程だったからね。一ポイントを笑う者は一ポイントに泣くんだよ」

「その言葉どつかで聞いたなあ……」

ああ、日本だ。と思いついてもシャーレイのドヤ顔は止められない。取り敢えず両手の指の間に挟んだポイントカードをひたたくつてシャーレイのポケットにねじ込んでからドヤ顔のシャーレイの背を押す。こんな感じでちよつとウザい位にドヤ顔をかましてくるシャーレイだが、それすらもひなたにとつては愛おしい。何とも言えない気持ちを胸に抱きながらもシャーレイの手を取って歩く。それだけでも胸の内の気持ちをある程度解消出来ている気がする。

「どうしたの？ いきなり手なんて繋いで」

そんなひなたの様子が疑問になったのか、シャーレイが素朴な顔で質問する。それに対してひなたは咄嗟に出てくる言葉がなく、一言だけしか咄嗟に返す事が出来なかった。

「なんとなく」

これじゃあ素っ気ないだけじゃないか、と思つたらシャーレイは何かを察してくれたらしい。こういう要らない時だけ察がいいのはどうしてだろうか、とひなたは左手で頭を搔こうとしたが左手が無いのに改めて気が付き何となく胸にモヤモヤが溜まる。

「寂しくなったの？」

「懐は寂しくなったよ」

だが、シャーレイの言葉に軽口を叩けるようになるくらいには頭も働いた。その言葉にシャーレイは少しだけ笑った。その笑いが楽しそうに聞こえたのは気のせいか本当か。

「上手いこと言ったつもり？」

「まさか。ボクは詐欺を一つしか出来ないレベルの酷い口下手だよ」

「へえ、どんな詐欺？」

「外見詐欺。年齢詐欺とも言えるかな？」

「それは口下手でも出来ちゃう詐欺だね」

「その場で立っているだけの簡単な詐欺だよ」

冗談の叩き合い。それだけでも十分な充足感を得られる。

外見詐欺の部分は若干の自虐を込めたつもりだったがそれが汲み取られたのか否かは分からないがシャーレイも笑顔になっている。それだけで無い知恵を振り絞って完成させた冗談も報われるという物だ。

「あ、そういえば」

「どうかした？」

ふとシャーレイが声を上げた。この辺りであった噂か何かを思い出したのかは不明だがこうして声に出されると何となく気になってしまったため思わず反射的にシャーレイに聞く。

彼女はその言葉の前に大した事じゃないけど一言置いてから思い出した物を口にした。

「この辺りに新しく豪邸が建ったらしいよ？」

「この辺りについて……ここの土地って結構いい値段するよ？」

まさかそんな場所に豪邸なんて。相当な金持ちが引っ越してでも来たのだろうか。

「なんか執事さんとかメイドさんが沢山いるんだってさ」

「ふうん。メイドさんは見てみたいけど別に興味ないかな。金持ちなんて近づくだけで問題を与えてくる困った種族だよ」

「それは否定しないけど……」

否定しないのかよ。ひなたは内心でシャーレイの言葉に小さく

ツツコミを入れる。

「確か当主の人はワラキアって言って凄くイケメンで若い男の人なんだって」

「へえ」

全く興味が無い。そのせいか返事がかなり適当になってしまったがそれはシャーレイも同じなのかそれだけ。と会話を切り上げた。やはりこの子自分のせいで百合の道に目覚めてしまったのでは、と思うと罪悪感的な物が湧いてきてしまう。

ミラは自らバイと自白したため何ら罪悪感を感じないがシャーレイに関してはまだ十四歳なのに、という気持ちがある。

だがもうどうにもならない事なので気にしない事にした。男に走られるよりは女の子に走ってもらったほうが自分にもまだチャンスはあるし。

「でも、豪邸とやらは見てみたいかな？」

ふとシャーレイがそう言った。

確かにそんな気はする。野次馬根性と言うべきか。豪邸豪邸と噂されるくらいなら確かにこの目で一回くらいは見てみたい気持ちはするが、ここら辺でなるべく長居はしたくない。

と、言うのもここら辺は先日、あの魅了の魔法のような物を全くの予備動作無しでかけてきた男が教えてくれと言った住所の近くだからだ。もしもまたあの男が近寄ってきてきてひなたの理性が完全に消える位の魅了をかけられたら逃げられるとは思わない。しかもここには魔法に耐性なんてないシャーレイもいる。

だからなるべく会いたくはない。一応レジストの魔弾はいつでも割れるようにポケットの中に仕込んでおく。

「いや、ボクはいいかな」

「そう？」

「金持ちの家なんて大きいだけだって」

「そうかなあ？」

なんとかここを離れたいという気持ちはある程度伝わったようだ。じゃあ早くスーパールに行こうとひなたが声を出せばシャーレイは

何の違和感も持たずにそれに頷いた。これで後はスーパーに行つて
買い物だけ済ませて一安心――

「――おや、そこにいるのは」
とはいかないようだ。

後ろから聞こえた声に露骨に顔を顰めてすぐにもう一発のレジス
トの魔弾を生み出してシャーレイのポケットに忍ばせる。彼女はそ
れをポケットを一回叩いて確認する。

「これはどうも、先日振りですね」

嫌な顔は隠して笑顔で後ろから声をかけてきた先日、魅了をかけて
きた男に挨拶を返す。

男の一見好意的に感じる言葉と視線。そして一切の下心を感じさ
せないその視線は確かにこちら辺の奥様方には好意的に見えてくる
だろう。

シャーレイはひなたの露骨な猫かぶりに驚いているが、すぐに無言
で頭を下げるだけの挨拶を行った。

「この間は助かったよ。言われた通りに歩いたら無事に家に辿り着け
た」

「それは良かった」

大丈夫だ。まだ思考回路は普通だ。

まだ正常だ。この男は油断ならない相手でこんな男を魅力的だ
なんて一切切思っていない。まだ魅了はかけられていない。

早くこの男を振り切らないと。そんなひなたの焦りが伝わったの
かシャーレイの顔が若干の不安を帯びてくる。

「今日はどうかな？ 先日のお礼として、そっちの子も一緒にお茶で
も」

勿論、そんな誘いは断る。ついていったら何をされるか。

「そうですね。今日は急ぎの用も無いですし――」

その瞬間レジストの魔弾をポケットを叩く振りをして叩き割る。
その瞬間、勝手に動き出した口は止まり、若干ついて行ってもいいと
いう気持ちが消え去る。すぐさま新たなレジストの魔弾を作成しな
がら先ほども口にしかけていた言葉を訂正する。

「——いえ。今は買い物途中なので」

「……………」

どう出る？ ひなたは新たな魔弾を手に握った状態で相手の出方を伺う。

彼は暫し黙った後、すぐに口を開いた。

「そちらのお嬢さんはどうかな？」

「え、私ですか？」

急に話を振られてシャーレイが困惑する。その顔色が少し怪しくなりソワソワとした後に彼女はひなたの方を向いた。それに頷くとシャーレイは口を開いた。

「…………そ、それなら折角誘ってもらったんだし」

その瞬間、シャーレイのポケットの中の魔弾を見えないように握りつぶした。

「…………あ、あれ？」

そしてすぐにシャーレイが素に戻った。やはり、シャーレイの方にも魅了がかけられたらしい。自分の言った事と思考の支離滅裂さに自分でも困惑しているらしく口を抑えて呆然としている。

これなら、シャーレイをダシにここから逃げる事ができる。シャーレイの手を取ってひなたは口を開く。

「すみません。この子、ちよつと生理中で調子悪くって」

「おや、そうだったのか。それはすまない事をした」

「ここら辺のスーパーで生理用品が安いらしくって。あまり出歩かせるのも辛そうなのでお先に失礼しますね」

なんか結構エグイ下ネタをかました気がするがそんな一時の恥は捨てる。呆然としているシャーレイの手を取って男に背を向けて歩く。

「もしも何か入用があったら、この付近に新しく出来た家に来るといい。ワラキアという名前を出せばウチの執事とメイドが案内してくれる」

ワラキア。恐らく名前なのだろう。

こうやって名乗るといふ事は後ろめたさを一切合切感じていない

のか何かあったとしてもどうとでもなると思っているのか。少なくともひなたにはもう彼と関わる気は一切ない。適当に愛想を撒いて返事をしながらとつと男の視線から外れる。その際にもう一回レジストの魔弾を自分とシャーレイで割る事を忘れない。

先ほどの言葉から運行式の魅了をかけられる可能性があったためこうしてもう一回レジストの魔弾を割ったが自身に魔法がかかっている事を知るにはまた別の魔法が必要になるためそれが正解だったのかは分からないが少なくとも運行式の魅了はこれで打ち消す事が出来た。

「ひ、ひなたちゃん？」

「帰るよ、シャーレイ」

「そ、それはいいけど……さっきの人って」

「もう関わっちゃ駄目だ。ここにも近付いちゃダメだ。あの男は明らかに可笑しい」

「そ、それは分かるけど……さっきも思ってもない事を勝手に言っちゃったし」

「厄介な事になったよ、全く……」

これから先、何かに巻き込まれそうな気がする。変な確信を得ながらひなたは歯を食いしばる。

せめてシャーレイだけは絶対に守らなくては。右手に込める力が無意識の内に強くなっていくことに気が付かず、心配を形にしたような表情を浮かべるシャーレイの手を引き家へと帰る。

第四十五魔弾

シャーレイの手を引いて逃げるように家の近くへと戻ってきた。あんな場所に……あんな男が近くにいる場所にそう何十分も居たくはなかった。

あの男の視線からは劣情めいた物は感じ取る事が出来なかった。出来なかったからこそ、あんな男と一緒に居たくは無かったし顔も合わせたくはなかった。魅了をかけてくるのにも関わらず劣情が無い。有り得ない話だ。

明らかにあれは可笑しい。視線とやっている事の矛盾。それが生み出す気持ち悪さはシャーレイにも伝わっていたようでシャーレイ自身、魅了をかけられたという事に気付かず、しかし己の中にある気持ちとは正反対の言葉が出た事と男から感じる視線に劣情を含めない、しかし何処か含みのありそうな視線に嫌悪感を抱いただろう。

この世界の男は基本的に性に素直だ。娯楽の少ないこの世界では性行為そのものを娯楽として生きている人は決して少なくはなく、体を売って己の充足感を感じると共に金を稼いで生きる女もいればそんな女に貢ぐ男もいる。男は女よりも性欲は強い。それ故に、性を感じた男というのは女を抱きたいという気持ちを地球にいる男よりも強く抱く。だからどれ程の善人でも多少の劣情は視線の中に含める物だ。シャーレイはそれが特に酷い環境で生きてきたしひなたも元男という事でそういう視線に嫌悪感を抱いた事は少なくない。

だからこそ。そういう経験があるからこそ、全くの下心を抱かずに接してきたあの男が気持ち悪かった。女を性的な対象として見ない男なんて男の視線に敏感になって生きてきた二人にとっては気持ち悪い他無かった。

別に下心を感じさせないだけならまだホモか何かかと思えるがそこに魅了が加わったのだからもう駄目だ。その時点で二人にとっては気持ち悪い男でしかない。ホモ相手ならまだシャーレイがその女版なので少し気持ち悪いと思ってしまうかもしれないがお茶程度なら付き合う。体の安心が保障されているような物だから。だが、魅

了がそこに加わると何をされるか分かったものじゃないし気持ち悪い。

だから断った。全力で、全霊で。幸いにも相手は力で押しこなかったがこれから先、力で押し切られる事も考えたらもう二度と会わないように立ち回るのが正解だ。武器屋に寄ったら一目散に帰るのが正解だろう。

「ごめんシャーレイ。あんな男と喋らせて」

シャーレイの手を引いて歩きながら後ろのシャーレイを見る事無く呟く。その言葉はなんとか聞こえたのだろう。小さく大丈夫、と声が聞こえた気がした。

徐々にシャーレイもあの男が自分の精神に何かを仕掛けてきた結果自分の意志とは正反対の事を言ったのだと気づいてきている。魅了という物を知らないシャーレイはその程度で終わったが、それでも何でそんな物を自分に仕掛けてきたのか。なんで下心を感じさせない視線を持ったあの男がそんな物を使ってくるのか。

この世界の恐ろしさ。それを知っているからこそ怖くなる。底知れない相手と会話するという恐怖はこの世界では死に直結するか人生の終わりを意味する事だつて容易に想像できる。攫われて身売りさせられていた。借金のカタに娼婦にされた。気が付いたら身包み剥がされて森に放置させられていた、なんて事は頻繁ではないが時々耳に挟む暗い話だ。もしも魅了が使えたら言葉一つでひなたやシャーレイのような女を身売りさせれるのだから嫌悪感を抱くのは当然とも言えた。

流石に殺すから、という事はないと思うが見てくれは美少女な二人を好む男なんて幾らでもいる。魅了で引き入れて洗脳して身売りさせれば簡単に金が手に入る。そういう対象として見ていたかもしれない。だから余計に怖くなる。底知れぬ男というのが。何を考えているのか分からない下心を一切持たない男というのは。

暫く歩き近所のスーパーの前に着いた二人はそこでやっと手を離れた。

「シャーレイ、買い物ならいいで」

「う、うん……」

今日も、これからも。含めた意味は恐らく伝わったのだろう。シャーレイの声は少しもつていたが肯定の言葉だった。

あまり黙りこくって事務的な事しか口にしなかつたらシャーレイが不安がる。肯定の声に不安の色が滲んでいるのを感じ取ったひなたは一度心を入れ替えて深呼吸すると少しだけ無理をしているがもうあの男はいない。少なくとも今日、今この時ははもしもの可能性がないというのを飲み込み自信を安心させてから笑顔でシャーレイに声をかける。おそらく、これがシャーレイを安心させる材料になると信じて。

「じゃあさ、ついでにお酒を買ってきてくれないかな。ビールでもいいから」

少し無理をしているというのが察せられたのかは不明だ。だが、無理のない笑顔を浮かべて財布を持たせるひなたに対して今日は大丈夫だと多少の安心はしたのだろう。シャーレイは笑顔を浮かべて頷いた。しかし甘い酒しか飲めないのに何でビールとか言っちゃったのか。これが分からない。

それを見てよかった。と内心で声を漏らしてシャーレイにおつかいを頼む。せめて今日の夜は酒でも入れないと満足に眠れそうになり。そう思ったから酒を頼んだがよく考えてみたら家にまだ果実酒が残っていた。だが、どれもこれも度数は低いため追加注文を忘れない。

「あ、度数は高いやつで」

「安いやつでいいなら」

「飲めればいいよ」

こう言っておけば甘い果実酒を買ってきてくれるだろう。買ってきてくれないと困る。特にビールはまだ飲みなれていないからビールを渡されると余計に困る。多分ミラにも飲んでもらう羽目になる。ミラが酒を飲めるのかは不明だがこんな世界で逞しく生きてきたのだから酒程度グビグビイケるだろう。見た目は全然二十歳でも通るし。

ミラにバレたら一発殴られそうな感じがする事を考えながらスパーの中に入っていくシャーレイを見送る。そしてひなたはそのまま喫煙所へ。

少し不安定になっていつも以上に情緒不安定になりそうな心を落ち着けるために一服する。煙草を箱から出して火をつけ、息を吸いながら煙を肺に収める。そして吐き出した煙が空に昇っていくのを見ながら心が落ち着くのを感じる。周りの喫煙者は既にひなたの事は知っているため何も言わない。もうひなたはこの辺りでは銀髪碧眼の合法ロリとそこそこ知られている。

周りからの視線は特に感じないため一応周りに気をつけておきながら煙を再び吐き出す。一日十本とか平気で吸い始めたここ最近だが、やはり煙草はこんな腐った世界じゃほぼ必需品だ。嫌なことを一時的に忘れさせてくれるというのはそれだけでありがたい。あの男の事も忘れる事が出来て、しかしシャーレイとミラとの最近楽しかったことを思い出させて煙草の麻薬みたいな効果が気分を良くしてくれた。日本にいた頃は合法麻薬だとか金だけを食っていく嗜好品だとか言っていたがこうして喫煙者になると煙草は安易に手に入れられる麻薬であり悪いものを簡単に忘れさせてくれる道具だと。これは簡単に手放せない。少なくとも、この世界にいる以上は。

「ふう……何であんなのに目を付けられちゃったんだか……」

「……………ヒナタ？」

「うっひゃあ!!」

ボソツと呟いてから大体一秒ほどか。いきなり肩を突かれて変な声を出しながらちよつと反対側に移動してからようやくそちらを振り向いた。

そこには今日の出かけている筈の顔があつて。

「ミ、ミラッ？」

思わず間拔けな声で彼女の名前を聞き返した。ミラはその言葉に頷きだけを返した。

腰に着けているポーチはいつもよりも膨らんでいるように見えて何が入っているのかが気になったが後で聞けば分かる事だと一旦ス

ルーした。

口数の少ない彼女は杖を両手で付いた状態が少し疲れたのか喫煙所の壁に背中を預けた。しかしひなたはスタンド灰皿の都合上ミラの横に背中を預けて立つことが出来ないため煙草を吸いながらなるべくミラに近い場所に立つのが精一杯だった。

「今帰りなの？」

「……うん」

「どうだった？ 上手く動けた？」

「……あんまり」

「そっか。まあ仕方ないよ。暫くは杖をついた状態で戦闘できるように慣れないとね」

「……努力してる」

「知ってるよ」

ミラとの会話はひなたの話す言葉の方がかなり多いためミラの受け答えが淡泊に思われる時がある。が、彼女が無口だと知っていてこうした一言程度の言葉を話すのにも結構色々と思考していると知っているから別にそれは不服でも何でもなく、こうして喋っている事になんとかなくの可愛さを覚えてしまう。

もう半分ほどになった煙草を躊躇なく吸いながらミラを見る。どうやら慣れない杖での長距離移動に疲れたのか一旦杖を手から外して自分の手を揉んでいる。どうやって戦っていたのかは気になる所だが、大体は予想できるため特にこちらから聞くことはない。

何度も試行錯誤していたからかミラの服はかなり汚れており、土が付いていたり髪の毛に葉っぱや枝が巻き込まれていたり所々擦りむいたような傷があったりとしていた。その様子から何度も転んだのは簡単に予想でき、ミラでも片足になっただけでこんなに変わるのか、と不謹慎ながらも思ってしまった。

だが、このままだと風呂等で傷に染みて大惨事になりそうだというのは容易に想像できたためちよつとだけ治療するため回復魔法の魔弾を一つ生み出すと肩を軽く叩きながらそれを割った。小さな傷はそれで仮の皮膚が再生して塞がり、そこから発生していた痛みも引い

たのだろう。ミラは驚いた様子でそれを見た。

「これも魔弾使いの特権だからね」

無詠唱で魔法をポン、と味方にかける事が出来る。また、強化をかけるための魔弾を予め作成しておきそれを戦闘中に前衛が割ることで戦闘中に咄嗟に強化をかけること、また回復を魔弾を割るといった一つ一つのアクションで可能にする。しかも一度に割る数が多ければ多いほどその効果は高まる。

ミラはいきなり回復魔法をかけられた事にビックリしていたがすぐに礼を口にした。

「……ありがとう」

「いいっていいって」

通常時はこの程度の回復魔法しか掛けられないがそれでも喜んでくれるなら使った甲斐がある。

血を吸わないと魔弾十二発を作成するだけでも相当魔力を持っていかれるのに今日はレジストの魔弾二発と回復魔法の魔弾が一発。既に三発も作成したためか若干の気だるさを感じる。精神的な気だるさは寝るまで解消されないため若干モヤモヤするがそれももう慣れた感覚だ。

それに、自分の魔力全てを使うことが出来ない感覚という物にも違和感を感じてしまう。胸の中に蓋を仕込まれたような気分で自分の力全てを使う事が出来ないというのにも多少のモヤモヤを感じる。

口に出来ないようなそれにも慣れたがやはり魔法を己の魔力の限り使えない。ちよつとした魔法だけでここまで魔力を消費するというのは気分がいいものではない。シャーレイには分からないがミラは分かってくれるであろう感覚だ。

「……なんでここに？」

「ん？　ここにいる理由？」

「……家で吸えばいいのに」

急にミラが口を開いたが少し言葉足らずでひなたには伝わらなかった。が、ミラの次の言葉で彼女が聞きたいことがようやくわかった。

いつか口下手もなんとかしてあげたいが一拍置けばちゃんと言してくれる分、まだマシなんだろうなと思いつながらミラの質問にはしっかりと答える。

「シャーレイが買い物中」

「……なんで外に？」

「起爆銃のパーツを買いにね。しかも売ってないわ取り寄せ代がクツソ高いわで結構お金使っちゃったよ。具体的には明日の生活費が危うい程度には」

ははは、と陽気に笑ってはいるが結構な痛手だというのはミラもわかっている。

生活費何日分が起爆銃のパーツだけで溶けたのか。というか旧式起爆銃のパーツがどれほどレアなのか。ひなたの言葉で想像してミラは若干ゾツとしたがその解決策は既に用意してあった。

元々そのために持ってきた物だったが、これの解決になるのなら、とミラはポーチを開いて中に入った物を取り出した。

「……これ」

取り出されたのは袋だった。それを手渡されたため一応持つてみるとズツシリ重い。思わず落としそうになってしまっそうになるがそれを耐えてなんとか片手でそれを保持する。

「なにこれ？」

「……………生活費」

「……………お金？」

「……………そう。お世話になってるし」

そう言いながらミラがひなたの手から一旦金が入った袋を返してもらいひなたを招き寄せてから中を見せる。そこには確かに大量の金があった。紙幣ではなく硬貨ばかりだったがそれでもかなりの量であり、先ほどひなたが使った金位は入っているだろう。

「ど、どうやって稼いだの、こんな額」

「……………ちよつと遠くまで」

「ちよつと……………」

「……………二十キロくらい離れた場所」

「そこで？」

「……高い魔獣狩ってきた。沢山」

二十キロ。それは恐らく片道だろう。それを往復したら勿論四十キロ。フルマラソン一步手前レベルの距離だが彼女はそれを杖をついた状態でやらかしたのだろうか。どちらにしる片道二十キロでも往復二十キロでもかなりの距離でありひなたでは丸一日かけて行くレベルの距離だ。

確かにそれくらい離れたら魔獣もあまり狩られないうえで依頼も結構あるだろう。おそらく根こそぎ狩ってきたのが予想される。

だが、硬貨だけなのはちよつと分らない。

「どうして硬貨だけなの？」

「……そっちの方が使いやすいかなって」

「紙幣でいいのに……」

どうやらミラなりの気遣いだったらしい。嬉しいのやら嬉しくないのやらで複雑だ。

「じゃあ、半分だけ生活費にしようか。あとはミラの小遣いつて事で」
「……別にいい」

「ミラだって武器のメンテとか衝動的に買いたくなる物とかあるでしょ？ その時のために持っておきなつて。生活費ならボクも稼げるからさ」

じゃないと本格的にひなたが要らない子になる。ただの煙草を吸つて酒飲んで毎日ブラブラ暇つぶししているだけのニートな合法ロリになってしまう。

流星にそれは避けたい。というかその中で生きていたら色んな気持ちに押しつぶされてその内泣いてしまっそうだ。

そんな事は完全に心の中での隠蔽を済ませて袋を一旦ミラに返す。ミラは暫くどうしようかと視線をあつちにやったりこつちにやりたりしていたがひなたが言ったからそうしようとも思つたのか一回領いて一旦袋をポーチに仕舞つた。ひなたはそれに領いてもうフィルター直前まで吸つた煙草をスタンド灰皿に落としてミラと一緒に喫煙所から出る。

隻腕と隻脚のコンビという奇妙な二人組に周りは視線を奪われているがすぐにあの二人か、と気付くと視線を外す。特にミラに至っては明らかに高価で凄そうな剣を腰に吊っているため近寄りたくなくてないだろう。

「シャーレイが中で買い物しているから待つてようか」

「……荷物持ち？」

「それならボクがやるよ。お塩と酒だけだからさ」

「……………塩が着？」

「んなわけ。家に魚の干物があるからそれ。お塩は単純に切らしてたの」

「……………違うの？」

「ちげーよ」

本当に塩を着にするとでも思ったのかキョトンとしているミラの頬を右手の指だけで挟む。柔らかくモチモチしている。

「あう」

「おお、モチモチ」

「は、はにやして……」

頬を弄んでいるとミラは顔を動かしてなんとかひなたの手から顔を離そうとする。

が、ひなたはそれを離さずにと弄ぶ。なんだかこうしてミラに触っていると猫と戯れている気分になって和んでくる。

しかし、ミラはこうして何かされている時が一番かわいい。というか何かされた時の反応がいつものクールな様子とはかけ離れてギヤップ萌えのようなものを引き起こしてくれている。そのせいでずっとこうやって頬を弄んでいたくなってしまう。確かミラがシャーレイにやられた時も反応は女の子らしかったなあ、なんて思いながらもずっと頬を弄っていると流石にもうこれ以上は嫌だったのか手を使ってひなたの手を引っぱがした。

ああ、残念。なんて思っていると若干ミラが怒っているのか頬を膨らませているようにも見える。可愛い。

「……………お返し」

そう言いながらミラがひなたの頬を同じように手で挟む。が、
「ぎゅふえ」

力が強かったのかひなたの口から女らしくない声が漏れる。しかも地味に痛い。

「あつ」

「おおぅ……地味に痛い……」

「だ、だいじょ……」

「あれ？ 何してるの二人とも」

「……シャーレイ？」

「もふえ」

「あつ」

何が起こったのかを簡単に説明すると頬を抑えたひなたを心配してミラがウロウロしていたが、取りあえずひなたに大丈夫か聞くために手を伸ばした所、シャーレイが偶々出てきて二人を見つけミラがそれに反応した。その結果、手がズレてひなたの顔に。

結果ひなたからはよく分からない声が漏れた。ミラはどうしたらいいんだろうかとそのままの状態で固まり、シャーレイはよく分からないため呆然とするしかなかった。

「……えっと」

「うん、手を離してくれろと嬉しかったかな」

そう言いながらひなたがミラから半歩距離を取ることミラの手から逃れる。

「じゃ、シャーレイも戻ってきたし帰ろっか」

「……………そ、そう」

「なにがなんやら……」

そして何事も無かったかのように歩き始めるひなた。ミラは困惑しながらもそれに同意してシャーレイは何があつたのかよく分かっていなかったが取りあえず帰ろうと二人の後に続いた。

ちなみに、ミラはシャーレイに昨日犯され尽くして気絶させられたばっかりだからちよつとシャーレイと距離を取って移動していた。シャーレイはちよつと傷ついた。

第四十六魔弾

ちよつと気まずいような何とも言えない空気の中三人は家に帰宅した。それまでの間にシャーレイにはミラと合流した時の状況やミラの稼いできた金について話したが、これに関しては勿論半額はありがたく生活費として頂くがもう半分はミラの小遣いという事になった。昨日好きに犯されたからか若干ミラが視線をあつちこつちに泳がせたり言葉を詰まらせたりとしていたが半分強姦のようになった。昨日の事はミラの事では気まずくなる程度の事で済んだらしい。二度目だしそこそこ耐性も付いたのだろう。

帰ってきた時には世間的にはおやつを間食で食べるような時間。ミラは外で結構動いてきたためこんな時間でも普通に腹が減っており、ひなたとシャーレイも色々あったため小腹が空いていた。どうせ三人ともそれなりに運動するし太る事はないだろうとの事で帰つてすぐにおやつタイムとなった。ひなただけは酒盛りタイムを始めようとしたが、これに関しては今日は外出の予定は無いから特別、との事だった。

何時ものソファに三人で座って前に広げた菓子やらジュースやらを適当に食べる。勿論、腹いっぱいになって夕食が食べられなくなる、という事がないように節度を持ってだ。これで家にある菓子類は無くなったがこれらは各人の小遣いで買われているためその内増えるだろう。

「あー……お腹熱い……」

「うわ、顔真っ赤だよ？」

「んー？ そりや何時ものよりもキツイお酒だしね」

「……凄い違和感」

「それはボクが子供にしか見えないからかな？」

「……………うん」

「少しは言葉濁せよ」

適当に駄弁りながらも三人でぐだぐだと菓子を消費していく。その内段々とひなたの体が横にズレていってミラの肩に頭を預けるよ

うな形になり、シャーレイもそれに便乗してひなたの肩に頭を預ける。そしてミラはひなたの頭を肩に乗せながらも全く動じずに菓子をボリボリと食べる。

ひなたはそこまで酒に強い訳ではない。むしろ弱いくらいだ。だから普通としか言えないような度数の酒を飲んでもすぐに顔が赤くなる。その内アルコールが入った事による変な心地よさからかひなたを耐えれそうだが耐えると少し嫌な気分になり、耐えなかつたら心地よくなれる程度の眠気が襲ってくる。

既にコップ二杯分の酒を開けており、シャーレイに買ってきてもらった酒も残りはコップ一杯分程度。小さな酒瓶だったためその程度しか中身はなかつたが、段々と中身が無くなっていく酒に勿体ないような切ないような感情を抱いていた。が、いつの間にか一々コップに注ぐのが面倒だったのかとうとう酒瓶に直接口を付けてラツパ飲みを始めた。

「あはあ……ひゃひゃひゃひゃ」

「うっわ、本格的に壊れだした……」

「……酒癖悪い？」

「んなことあないよ。ぜんぜんよってないってばあ」

ケタケタ笑いながらおつまみを食べながら酒を飲むひなた。顔は真っ赤で肌も赤くなっている。外見相応には見せないような若干キツイ目つきもその面影を残さず、今のひなたは童女のようにしか見えない。ラツパ飲みをしてぶはあ、と一息ついてからつまみを口にする。そして何が可笑しいのか急に笑う。

何が可笑しいのやら、と思うが酔っ払いに何言っても無駄だというのは二人とも短い人生経験の中で既に学んでいる事だ。シャーレイはスラムで、ミラは同業者に加えて父親で。だからひなたはスルーして二人は菓子を食べる。まだ絡み酒をしてこないだけマシな方だ。顔を赤くしながらつまみを食うひなたに対して二人は溜め息を吐きそうになるが、こう見えても色々と苦労しているのだろうと無理矢理納得して無理に止めるような事はせずに適当に声はかけておく。その度に酔っぱらいの酔ってない発言が飛んでくる。

「あれ？ ひなたちゃん寝ちゃった？」

そんな感じで菓子も食べ終わってシャーレイとミラはやる事がな
いたためボーっとしていたらいつの間にかひなたが静かになっていた。
何かあったのかと思つてひなたの方を見ると彼女は酒瓶を片手で抱
えたままミラの肩に頭を預けて呑気な顔で寝ていた。もう酒瓶を抱
えて酔っぱらつて顔を赤くしている以外は完全に幼女そのものだっ
たため何となく二人が笑いかけたが起こしちゃうかもしれないとそ
れは何とか堪えた。

ひなたが寝息を立て、二人はそれを聞きながらも時間を無駄に使つ
て時々眠くなりながらも外が暗くなるのを待つ。時々どうでもいい
事を喋つて、時々無言になつて。そんな感じでひなたが起きないよう
に体制を時々変えてあげてとしていたらいつの間にか外は赤く染
まつて夕方になつていた。

「じゃあ私、お夕飯作ってくるから」

「……………うん」

「ひなたちゃん、お願いね。ご飯はこつちに持つてくるから」

「……………このまま？」

「起こしたら癩癩起こしそうで」

「……………そこまで子供？」

「時々幼児退行するからね」

確かに時々そんなひなたを見る気がするがそれも本当に時々で癩
癩まで起こしている所は見たことがない。なんやかんやでこの中で
一番年上だしまとめ役でもある。そんなひなたが癩癩起こしている
所は若干見たい気もするが、今のひなたなら癩癩起こした所でシャ
ーレイの一言でピタツと止まりそうな気はする。主に恐怖で。

それはどうでも良いとして、今どうにかしたいのは肩を枕にして寝
ているひなただ。もう二時間近く肩を貸しているから若干疲れて
きたというか肩に違和感が出てきたというか。出来るならすぐに退
いてもらいたいのが酔いも段々覚めてきたのか少し赤い程度の顔でこ
うも安心した顔で寝られると起こそうという気は削がれるしもつと
見ていたいという気分になつてしまう。

手持ち無沙汰になってしまった故か思わずひなたの頭を撫でる。サラサラな銀髪を梳くように撫でるとひなたからくすぐったような声を漏らす。その声を聞いていると昨晚売られた腹いせに色々と犯した時の様子をつい思い出してしまい若干ムラっつとしてしまうがここでひなたを襲ってしまうほどミラはシャーレイではない。性欲は我慢して抑え込む。

「……………ミラ」

「うえ!？」

そんな気持ちを抑えながらひなたを撫でているとひなた自身から声が上がった。そのせいでミラが大きな声を出してしまったがひなたはそれに対して何も言わない。

何でだろうかとひなたの顔を覗き込んでみるとひなたは目を閉じたまま。つまり、眠ったままだった。

起きていないか、とホッと一息つく。

「……………なにか、あったら……………」

「……………ん？」

「……………しゃーれいをおねがい……………」

何やら不吉な寝言を残してひなたは再び寝息を立て始めた。

その言葉の真意はよく分からないが、何かあったら、とはどういう事か。シャーレイをお願いという言葉は文面そのままの意味だろうが、その前の言葉にどんな意味が込められているのかが分からない。

何やら嫌な予感がするが、多分なんとかなる。ミラ自身、荒事は得意だし今の状態でも二人を守って戦う程度の事は出来る。もしもそれでも駄目な場合は父を呼べば大体解決する。だが、その場合は吸血鬼が絡んだ時くらいだろう。

だから、ひなたが死んだりする事は、本当に万が一が起きない限りないだろう。

「……………大丈夫。私が守るから」

頭を撫でながら呟く。きつと、大丈夫だ。この生活は壊れやしない。

そう、きつと。

第四十七魔弾

武器屋に起爆銃のパーツを注文してから大体一週間が経過した。その間に起こったことは特になく、平和な一週間だった。これもあの武器屋付近をウロウロしなかったからかもしれない。パーツはこれから一週間後に宅配で届けてくれるそうなのでこれから先、あの男……ワラキアと出会う事は絶対に無い、とは言えないが会う確率は極端に低いだろう。

もうミラに斬ってもらったほうが早く済む気がするがそれではミラが犯罪者になるため絶対にその方法は選択しない。本人がやると言っても阻止するレベルだ。それ以前にミラには話してはいないため気づかれるまでも無いのだが。

金もひなたとミラがまた稼いできて少しの間だったが金欠に陥った生活費はなんとか持ち直した。というか、前の倍近くまで稼いできた結果、一か月働かなくても問題ないレベルにまで至った。いくらなんでも稼ぎすぎではと思われるかもしれないが、この仕事は常に命の危険が付き纏う。ミラレベルでも油断の一つであつさり死んでも全然可笑しくない仕事だ。注意していればどうにかなるといふ物じゃない。それに、この仕事は何百という人の命を救う事にも繋がるかもしれない。それ故に報酬は普通の仕事に比べてもかなり高めになっている。それに、この仕事は場所や相手が固定されていない、ということもあるため、依頼によつてはあんまり金にならない時もある。

そんな仕事だが自分の足で日帰りが可能な場所が依頼にあつたため、二人は結構な勢いで金を稼げた。その結果が一か月分の生活費である。

そして金を稼げば残るのは圧倒的な暇だけ。学校も無ければ就職口も無く、周回をしなければ強くなれないぞと迫ってくるソーシャルゲームも無く暇つぶしのゲームもなく。どれだけ地球が忙しい世界だったのかがこの世界に来てからようやく分かった。この世界もこの世界で命の危険が常にあつたり治安が日本に比べて悪かつたりと欠点もあるが、それでもこの世界は穏やかだ。税もそこまで高くない

ため税がどうのこうのということもない。本当に平和だ。

「……………どうしてこんなに暇なんだろうねえ」

「単純にやることがないからだと思うよ？」

「……………ひまあ」

上からひなた、シャーレイ、ミラだが三人ともだらけきっている。日本なら三人とも暇すぎて携帯を弄ったりしているのだろうけど、生憎、この世界にはそんな物はない。あるのは本くらいだ。

だが、その本もこの世界だと結構いい値段がする。印刷技術はあるものの、基本的に小説はハードカバーのような物ばかりだし教科書のような物はそれよりも高いしで安いのはノート等の白紙の紙が纏まったもの程度だ。なのでそんなにポンポンと買えないがため、三人は今手持無沙汰でボーっとしている。ちなみに、ひなたとミラの私物に混ざっていた小説は既に回し読みが終わってしまったためこの家に三人が読んでいない本はない。なので本格的に暇だ。

家の使っていない部屋も暇つぶしに掃除し終わり家事等も全て終わってしまったためやる事がない。こういう人がこの世界には何人もいる。別に暇を潰すだけなら毎日駆除連合に出向けばよかったり三人で乱交でもしたらいいが、それがめんどくさかったり真昼間からするのは流石に嫌だったりと。そんな理由があるせいで暇を持て余すしか出来ない。

「何か食べる気も起きないし……………」

「何処かに出掛ける気もないし……………」

「……………体動かしたくない」

左に体を寄せたり右に体を寄せたりして時々体を動かしているがその程度だ。最近になって暑くなってきたがそれでもそれくらいしかやることのないためくつついている。それにクーラーもついていないため室内は快適だ。

なんでクーラーとかがあるのにテレビや携帯やテレビが無いのかと本当に疑問に思ってくるが、恐らく娯楽や移動に技術力をぶち込むより家の中の快適さを求めるのに技術力を全て注ぎ込んだのと石油が存在していないのがあるだろう。

油こそ存在しているがそれを燃やして燃料にするという考えが無いのだろう。それに、魔法という物が存在しているのが科学を邪魔しているのかもしれない。魔法の研究などもある分、化学力に全ての技術をつぎ込む事が出来ないのかもしれない。が、それは完全に想像の範囲だ。事実にはなりえないし想像の範囲を出るものではない。だが、暇つぶしでそんな事を考えてしまう分には今は暇だ。

車や携帯を知っているがその作り方なんて知らない。詳しく知らなくても独自に何かを応用してそれを作るといふ力も無いため作れない。ひなたは完全に戦闘に特化した力しかないからだ。

「スラムにいた頃は生きるのに必死だったからなあ」

「ボクも毎日復讐の事しか考えてなかったし……」

「……………いつも何処か行ってた」

三人とも、この日常を迎えるまではこんなに暇を持って余すほどの心を残していなかった。毎日攫われないように、衛兵に捕まらないように生きるのに必死で、復讐に生きるのに必死で、目的を持たずにただ毎日移動と戦いに明け暮れて。だから、それが無くなった今、趣味すら持たなかった三人はやる事が本当に無かった。

「……………買い物に行く?」

「何を?」

「明日の晩御飯」

「別にいいけど……………ミラは?」

「……………異論なし」

という事で暇つぶしに買い物に行くことに決まった。三人とも寝間着のまま着替えていなかったため着替えてから買い物に向かう事にした。一応着替えて余所行き用の服に着替えたが戦闘が出来る二人は戦闘服は着ておらず剣と起爆銃だけを持つての外出だ。

ひなたは財布すら持っていないため起爆銃と煙草しか持っていない。ほぼ手ぶらと言っても可笑しくない。ミラも起爆銃と煙草が剣とBナイフになったただけだ。

シャーレイだけ財布を持っているが特筆すべき物を三人とも持っていない。文字通りただ明日の夕飯の材料を買いに行くだけだ。本

体ならシャーレイ一人だけで済む事だが、完全に暇だったためひなたもミラもひつつ付いて行くことになった。

「で、何買うの？」

「えっと……お野菜とカレー粉と……お肉？」

「カレーでも作るの？」

「うん、そのつもり。どうせ暇だし、凝ったお料理したいから」

「……楽しみ」

夜のアレさえ無ければシャーレイは立派な主婦になれるのに、なんて思いながらも三人で近所のスーパーへと向かう。歩いて十分もかからない場所にあるそれは郊外付近にあるにしては大きめのスーパーだ。この時間帯は就労者は労働中なため、基本的に主婦であろう女性やそれに連れられた子供がいる程度。とどこどこにいる男性は基本的に主夫になった人か、ひなた達の同業者だ。たまに駆除連合で見たことのある顔ぶれがある。

だが、声をかける事はしない。そんな事したら面倒な事になるし相手の名前なんて覚えていないからだ。

ひなただって男の体でいきなりミラに声をかけられたらそういう面倒な思いを抱くだろう。だから、自ら声をかける事はしない。

そんなひなたはスーパーの前の喫煙所を目ざとく見つけると、ポーチの中の煙草を思い出し、なんだか凄く煙草を吸いたくなってきた。一日に吸う本数はミラが家に来る前とあまり変わらないが、それでも喫煙者だということは変わらない。無性にニコチンを摂取したくなってくる。

「……ごめん、ちよつと一服してから行くね」

「うん、わかった。あ、まだ煙草のストックってあったっけ？」

「あー……うん、まだ二箱くらいあるよ」

「大体六日分だね。じゃあ明後日辺りにまた買っておくから」

「ありがと。じゃ、ちよつと失礼」

そう言ってひなたは喫煙所に向かって歩いて行った。

シャーレイはひなたの喫煙を咎めるような真似はしない。会った時から吸っていたのだからそれがもうひなたを構成する一部のように

にも思えてくるし、少し煙草の臭いが混ざったひなたの匂いは嫌いではない。昔と比べて少し煙草の臭いが強くなったが、それでもだ。

煙草の臭いを体に付けて一緒に寝るひなたに対して一度も煙草の臭いをどうにかしてほしいとは思ったこともない。夜の行為をすれば汗と行為の臭いでそんなのは消える。いや、煙草の臭いがそれに交じり独特の何とも言えない臭いとなる。それを今さら否定することなんて、シャーレイには出来なかった。

だから、健康に悪いから、と一日に吸う本数を減らそうとはしているが、禁煙させる気はない。どうせ言っても止めないのだろうけども。

「じゃあ、行くっか」

後ろのミラに話しかけてスーパーの中に入る。

今日の晩御飯はハンバーグの予定だが、スーパーに入ったあたりでちよっとだけ気が変わった。どうせならハンバーグとカレーと合わせてハンバーグカレーにしてしまえばひなたもミラも喜んでくれるんじゃないかと。そんな気の変わりをミラに聞いてみる。

「ねえ、今日の晩御飯はハンバーグにしようかと思ってたんだけど、ハンバーグカレーにしちゃう？」

「……うん。いい案」

「よかった。じゃあ、そうしようか」

杖についてシャーレイに並走するミラに聞くと、ミラは少しだけ笑ってそれに答えた。やはり、美味しい物にはいつもは固い表情筋も動くらしい。最近は暇だから緩みっぱなしだったけど。

ミラの回答も得たことだし、とシャーレイはスーパー内を歩いて目的の物を探す。

カレーに入れる野菜、それから肉。そしてカレー粉とそれをルーにするために必要な調味料、そしてカレーと一緒に食べるパン等を買いきり、他にも今日安い特売品の中でも日持ちしそうな物も一緒に買っておく。ミラもそれについていき、シャーレイからこれを取ってきて、と言われるとそれに返事をしてすぐに取ってきてくれる。そのおかげで買い物がかかり楽になっている。

ひなたが居れば米が欲しい、とぼやくのかもしれないが、件のひなたはまだ来ない。きつと見当違いの方を見に行っているのだろう。既に一服の時間はとうに過ぎていくように感じるが、きつとすぐに合流する。

そんな事を頭の片隅で考えながらきらしかけていた調味料等も買い物籠に入れ、他にも明後日の分の朝食と昼食、夕食の内容も考えようせなら、とポイポイ買い物籠に入れていく。この世界にカートはないため入れていく度に重くなっていくが、途中から脳のリミッターを軽く外したミラに持ってもらい、シャーレイは代わりに杖を片方だけ持って買い物続ける。

そしてシャーレイがポンポン買うものを籠に突っ込んでいって、そして考えられる分の食料は買い終わった。

「うん、これで全部かな。お会計に行こっか」

シャーレイの言葉でそのまま会計を済ます。勿論、出す金は二人の稼いだ生活費から、だ。

なんだかこうして人の金で買い物していると悪い気がしないでもないが、それでも二人が生活費に、と渡してきてくれた分、そうやって申し訳なさを感じるのは間違いないんじゃないか、と思える。だから節約こそするものの、使うのを躊躇ったりはしない。

しつかりと金を払い、紙製の袋にそれらを入れてもらいミラと一緒に何個にも分けられた袋を持つ。ミラは一つ、シャーレイは二つ。ミラが一番重いものを片手で持ってその手に先ほどまでシャーレイが持っていた杖を吊るしているため、周りからは結構特異な目で見られていたりするが、ミラも足を失ってから刺さる視線には慣れた物だし、シャーレイもひなたといえるからそういう視線には慣れっこだ。

「……そういえば、ひなたちゃんは？」

「……おかし」

そして意気揚々とスーパの外に出た所で気が付いた。ひなたがまだ合流していない。

これじゃあスーパの中にひなたを置いて行ってしまいう事になる。それを思い出して中に戻ろうとするが、視界の端に小さくだがよく見

る銀髪が見えた。

「……あれ、ひなたちゃん？ 何でまだ外に……」

喫煙所の外にいる上に何でスーパ―の中に来ないのかが不審だったが、何処か様子が変に思えた。唯一の腕で顔を覆っているようにも見える。

それを心配してミラにひなたが居た、とだけ小さく告げて小走りひなたの元へと向かう。

「ひなたちゃんっ」

「……シャーレイ。ああ、ごめん、荷物持ち出来なくて」

ひなたの声は何処か暗かった。それに加えて表情も暗く、声も半音位低いように感じた。その様子にシャーレイが何かあったのか、と心配するが、ひなたはそれを見て無理をして笑った。無理をしているとハッキリ分かる位に、悲痛な笑顔で。

「そ、そんな顔しないで。ほら、一つ持つよ」

「あ、うん……」

ひなたが無理矢理シャーレイが持っていた紙袋を持つ。それと同時にミラが合流する。シャーレイが一応、とミラの杖を片方預かるが、シャーレイも初めて見るひなたの表情に困惑している。

「さ、行こう。早く帰ってこれを冷蔵庫とかに入れてない」と

無理をした笑顔でそう言うひなた。シャーレイが何か言ったほうがいいのか、と困惑していると、ひなたは一人で歩き始めた。それを見てシャーレイとミラがひなたの背中を追う。

が、すぐにひなたはシャーレイの後ろにいるミラの横へと並んだ。そして、ミラにしか聞こえない程度の音量でミラと言葉を交わす。

「ねえ。ヴァルコラキって、確かミラのお父さんが探していた吸血鬼だよ」

その言葉にミラが若干驚く。

確かに、初対面の時とかにちよくちよくその名前は出てきたが、まさかひなたの方から、こんな時に出てくるとは思わなかった。

それ故にいつもどおり一泊置いても言葉が詰まってしまった。

「……そう、 فقط」

「ミラは、それをボクと協力したら倒せる?」

いきなりの事にミラは困惑して今度こそ言葉を詰まらせる。

何で、ヴァルコラキの事をいきなり話すのか。いや、むしろ何故そんな事を聞いてくるのか。

ミラは何て言えば分からなかったが、もしもひなたがなら戦いに行こう、とでも言い出したらマズいので一応真実を告げる事にした。

「……無理。パパがいれば、ギリギリ」

足があつたころのミラと彼女の父なら、ヴァルコラキも楽にとは言えないが、苦戦の末に倒せるだろう。彼女の父の剣は不死を殺す特性を持った剣。ミラの持っている魔法を強化する杖代わりにもなる剣とはまた違った性質を持つ剣であり、当たりさえすれば真祖ですら殺せる剣だ。

だが、それを持つ彼女の父は今遠い街にいる。ここに来てもらうにしても十日以上は軽くなる。ミラと同様に頭のリミッターを外して全力で走ってきて、だ。それに、来てもらうには手紙を出す必要があるため、来てもらうには最低でも二十日はかかる。

「そ、つか……ごめん、変なこと聞いて」

その言葉を聞いてひなたの顔が暗くなる。

一体何があつたのか。それを聞くための言葉をミラは精一杯探したが、それを見つけたことは出来なかった。

そして沈黙を破る事が出来ず、彼女達は家へと辿り着く。

第四十八魔弾

三人が帰ってからという物、空気はお世辞にも良いとは言えない状態だった。それはシャーレイとミラには全くの原因はなく、ひなたの纏う雰囲気からだった。

ひなたが帰ってからという物、彼女は何処か思いつめた雰囲気を出してただ無言でウロウロとし、つい数分前に自分の私物置き場と化した私室へと入って何かゴソゴソとしている。いつものひなたらしくない、落ち着きもなければ異常しかない行動を繰り返していた。

それに対してシャーレイもミラも声をかけたが、その度にひなたは取り繕って無理をした笑顔を浮かべるだけ。力で問いただす事も気が憚られ、二人がどうしようかと迷っている内に彼女は私室へと入った。

それからシャーレイは夕食作りに入り、ミラはひなたが来ないしシャーレイは台所に立つしで一人になり、私室に入ってベッドに腰かけていた。

シャーレイはいきなりひなたがあんな風になり困惑している様子だったが、ミラはひなたとの少しだけ会話した事で何か彼女の身に予期せぬことが起ころうとしているという事を何となくだが察した。これはその会話だけから得たものではなく、もう十年以上戦ってきた彼女の戦う者としての直感とも言えるものから得たものであり、それが外れた事というのはそこまで多くない。

ルナの時もミラは何となくの嫌な予感を感じて彼女と母親の様子を見に行った。それには間に合わなかったが、それでも同じような予感がしている分、ひなたが手遅れな状態になる前に助けたいと思う。だが、今のひなたが口を開いてくれない以上、こちらからは推測するしか出来ない——といっても、大体何が関わったのかは推測することは可能だが。

「……………ヴァルコラキ」

ヴラド・ヴァルコラキ。ミラの母親の敵にして、真祖の一体。ひなたの口ぶりからこの吸血鬼が……いや、真祖が今のひなたの態度に関

わっているのだと大いに予想できる。でなければ、今のひなたの様子と先ほどの会話に納得が出来ない。

だが、そうだとしたら妙でもある。何故ヴァルコラキがこんな街に出没しているのか。いや、ヴァルコラキじゃなかったとしても吸血鬼がこんな街中でのうのうと生きている筈がない。ヴァルコラキは真祖の中ではまだ下から数えた方が早い程度の力しか持っておらず、真祖の中でも最強とも言えるブラッドフォードよりも遥かに弱い。だが、それでもミラレベルの人間を圧倒できる程だ。そんな存在、すれ違えばミラだって長年の感覚でこいつは可笑しいと気が付ける。

そうすると懸念されるのが。

「……この街には、私レベルすらいない」

つまり、ヴァルコラキ、もしくは吸血鬼とすれ違っても気が付けない程度のレベルしかない人間しかない、という事だ。

ミラは気が付いていないが、ミラレベルが居る街、というのは多くはない。数十の街を回ってようやく一人発見できるかという程であり、この街にはミラと同レベルの人間はいない。

故に、気が付けない。この街に入ってきた異物、吸血鬼の一種に。そして、ミラはそんな相手とは一度もすれ違っていない。だから気が付けない。この街にヴァルコラキがいるのか、奴が作った眷属でも存在しているのかが。

「……パパを呼ばないと」

だが、相手はどちらにしろ吸血鬼になる可能性が高い。もうここまて来ると手遅れな気もするが、それでも手を打たないよりは遥かにマシ。ひなたを狙った吸血鬼がシャーレイにも手を出さないとはいえない。何故ひなたを襲ったのかを一瞬間に思ったが、ひなたが他の吸血鬼から狙われる理由は一つだけだが心当たりがある。

ひなたがブラッドフォードの眷属だからだ。彼女はブラッドフォードを敵として見て敵視しているが、しかし彼女の中にはブラッドフォードの力がある。ひなたの力を封印するブラッドフォードの力が。それ故にひなたは他の吸血鬼から狙われる可能性が高い。ブラッドフォードに取り入るか、ひなたを人質にしてブラッドフォード

を殺すため。つまりは駒として。

これは完全な予想でしかないが、それでも幾ばくかは合っているだろう。そうになると、父を呼ばないときつとどうしようも出来ない。

不死殺しであり、ヴァルコラキを憎む強者を呼ばなければ。

ミラはすぐに手紙を書いた。内容は単純。ヴァルコラキの痕跡を見つけたから来てほしい。それだけだ。これだけで父は来てくれる。

ミラは杖を手にして立ち上がり、手紙に記入漏れがないかをしっかりと確認してから部屋を出てシャーレイに一言だけ告げてから家の外へ出て手紙をポストに出した。早馬で出してもらえるようにその用の切手やら印を付けたため、父の元に届くのは大体十日。それから父がここに来るまでは十日。計二十日の待機になってしまう。

これが気のせいであつてほしいと、ただひなたが興味本位でそんな事を聞いてきただけだという事を期待している自分がある。いや、そうであつてほしいと先ほどからずっと思っている。ポストに手紙を入れ、父をこの街に迎え入れたとして、ごめん気のせいだったと笑い飛ばせる程度であつてほしい。

不安がどうしようも無く募り、思わずポストを右手で殴る。脳のリミッターを外さずに放った拳はポストを破壊することなく、己の拳に赤い跡と火照るような痛みを伴うだけ。

「……お願い、神様」

最後のお願いでいいから。親しい人を、奪わないで。記憶にない母と、その母に未だ取り付かれている父。死んでしまったルナ。そして、新たに出来た親しい二人。

片割れたりとも、失いたくない。だから、願う。これ以上理不尽を自分の周りに振りかけないでくれ、と。

杖を壊れそうな程握り家への帰路につく。何とも言えない気持ちを抱にして帰宅すれば、既にシャーレイがいそいそとカレーをよそつた食器を並べていた。どうやら、手紙を書くだけ、そしてそれをポストに届けるだけで予想以上に時間を使っていたらしい。シャーレイはミラが帰ってきた事に気が付くと、少しだけ無理をしたような笑顔を浮かべた。

「あ、ミラちゃん。もうすぐだからひなたちゃんを呼んできてくれないかな」

「う、うん……」

言葉はすぐに出てきてくれた。だが、それはシャーレイの様子に少しだけ気圧されたから。彼女もひなたが何か思い詰めているのを察しており、そのせいでこんな風に無理をしたような笑い方をしているのだろう。隠すのが下手なのか、それとも感化されやすいのかは分からないがあんなにも優しい彼女をこんな表情にさせている元凶はいったいなんなのか。ひなたの気のせいだったり生理で意気消沈しているだけだったりならいいのだが、もしも本当に吸血鬼が関わっているとしたら、この問題にシャーレイを巻き込むことなんてできない。

シャーレイの様子に自分も気が滅入ってくるのを自覚しながら階段を杖を置いて壁の手すりに手をかけて一段一段上っていく。そしてひなたの部屋の前に着くと、そのまま部屋をノックした。勝手に入るには少し度胸が足りなかった。

ひなたはノック後すぐに部屋から出てきた。彼女の表情は今まで見てきた中でトツプクラスで暗い。ルナの時程ではないが、十分に何かを思い詰めている様子だった。

「……ああ、ミラ。なにかな」

「う、ごはん……」

「……そっか、わかった。先に行つててくれないかな」

淡泊。ひなたの言葉を言い表すのならその一言だった。

暗く、暗く。それ故にいつもは明るく謝罪の一言でも入れて共に来る筈なのに、彼女は端的にミラの言葉を理解した事だけを告げて部屋の中に戻った。

チラツと見えたひなたの私室は、やけに片付いていた。元々ひなたは私物が少ないほうだったとは聞く。彼女もミラと同じように昔は各地を転々としてきたが故に私物はバッグ一つに収まる程度でしかない。服もだ。

今のひなたの私室は、そのバッグに私物を全て詰めたかのように何

も無かった。

が、ミラはひなたの私室に入ったことはない。だから、あれが普通なのだろうと割り切って壁に手を当ててバランスを取りながら歩き、階段を降りて杖を回収すると居間へと戻った。

居間では、もう後は飲み物を中心に置けば配膳は完了する、という所まで来ていた。シャーレイはミラに気が付くと、ひなたが居ない事を一瞬疑問に思ったようだが、何も言わなかった。その様子に何か気の利いた事でも話せばよかったと思うが、そんな言葉は頭の中に出てこない。口下手という物はこんな所でまで災いしてしまう。唇を噛んでその場で俯くしか今のミラには出来なかった。

数分経ち、シャーレイが完全に配膳を終えた。

「座っておく？」

「……そう、だね」

シャーレイの取り繕った言葉に頷く。そして湯気を立てる食事を前にして待つこと数分。ひなたが階段を降りてくる音が聞こえた。そしてひなたがようやく居間に姿を現す。

「あ、ひなたちゃん……ん……？」

その様子を見てシャーレイが言葉を詰まらせる。ミラもその声に反応してひなたの姿を見て、息を飲んだ。

今のひなたは、何時もの部屋着ではなかった。戦闘服でもなく、ローブを羽織っていた。最近羽織る事の方が少なかった、己の体を隠すローブ。そして手には恐らく鞆か何かを持っており、顔は俯かせて表情を伺えない。それだけで今のひなたが異常だという事がハッキリと分かった。

「……ごめん。ボク、今日でここ、出てくから」

ひなたは小さな声でそう告げ、居間に入ることなく玄関へと足を向けた。

ここを出ていく。その言葉に呆然とするシャーレイとミラ。だが、居間への入り口から姿を消した所でシャーレイの方が先に意識を取り戻し、立ち上がりひなたを追う。ミラも杖を片方だけ持って最低限のバランスを取ってシャーレイの後を追う。

「ま、待ってよ！ 出ていくって……一体なんで!？」

シャーレイが今まで見たこともない表情で叫ぶ。必死さと辛さと驚きと悲しみと。様々な感情を胸の内に秘めた表情だと言うのはすぐに分かった。ひなたはシャーレイに対して振り向くことはしなかった。

代わりに、顔を見せずに小さく、小さく呟いた。

「……………結婚、するんだよ」

「……………へ？」

ひなたの言葉にシャーレイが声を漏らした。ミラもその言葉に驚いた。

意味が分からない。まさか交際していた男性がいたなんてのは考えられない。一日二十四時間を確実にシャーレイかミラの二人と暮らしてきたひなたに男の影なんて見えなかった。それに、ひなたがシャーレイに対して特別な想いを抱いているのはミラから見ても明らかだった。

だと言うのに、結婚。何がどうしてこうなったのか、意味が分からなかった。だが、何かが脳裏を過る。

「……………ど、ういう事？」

「そのままの意味だよ」

「あ、相手は!？」

「この間会ったでしょ。ワラキアって男」

「なんで!! ひなたちゃん……あんな男に近寄るなって!!」

「……………」

「答えてよ!!」

その言葉にひなたは答えなかった。だが、代わりに答えが出てきた。

魔弾。振り向きざまに放たれた魔弾がシャーレイの顔の真横を通って後ろの壁に当たり傷を付ける。それにシャーレイは一步、二歩と退いていき、そのまま尻餅を付く。

信じられない、という顔だ。ミラも同じような顔をしている。ひなたの表情は見ることは叶わず、シャーレイは酷く傷ついたような表情

をしている。

「……初対面の時言ったよね。君に付き合う道理は無いつて」

「そ、そんな……」

「だから、もう付き合わない。この家はあげる。お金もあげる。だから——」

そして、振り返る。その時、初めてひなたの表情を伺う事が出来た。

——泣いていた。顔を歪めて、悲しそうに。これが、一生の別れだと言わんばかりに、泣いていた。起爆銃をその場に捨て、魔弾と煙草を入れたポーチすらその場に置いて、そして最後にシャーレイに見えるように魔弾を一つだけ砕く。

レジストの魔弾。それを砕き、ひなたはドアノブに手をかける。

「——さようなら。大好きだよ、シャーレイ」

そして、外へと飛び出した。

シャーレイは追わなかった。追えなかった。茫然自失と玄関を見つめるだけ。

だから、代わりにミラが動いた。ひなたを追うために。

杖をつきながら全力で移動し、そしてドアノブを下げて力任せにドアを開く。

「ヒナタ!!」

叫ぶ。だが、既にひなたの後姿は米粒程度の大きさになっており、曲がり角を曲がったことによって完全に消えた。

もう、追うことは出来ないだろう。機動力を無くしたミラでは、地の利を得ているひなたを追い捕まえるなんて出来ない。

「……………くそっ!!」

行き場のない怒りを杖を地面に叩きつける事でぶつける。

きつと、結婚というのは嘘ではない——だが、手段だ。

恐らく、ひなたは吸血鬼か真祖にとつくに目をつけられていた。先ほどひなたが口に出したワラキア、という男の事だろう。その名前に聞き覚えはないが、恐らくそうだ。

ミラはそれに気づけず、何かしらのリミットを、今日迎えた。そして、ひなたは出て行った。相手の作戦にまんまとひっかけられて。

もう、ひなたを探す手立てはない。相手は吸血鬼、もしくは真祖。隠れるのだけは上手い。

「……………どうして、いつもっ!!」

気付くのが、こんなに遅い。

齒を食いしぼり、前髪を握りつぶす。

ひなたの起こしたたった数十秒の出来事は、二人の精神を傷つけるには、事足りていた。ミラを照らす月明かりが、何かの笑い声を届けているような気がして、ミラに無力感を叩きつける。それを払うことなんて、出来なかった。

第四十九魔弾

夢を、見た。とても嫌な夢で、今を構成するには必要な物で……この手で守れなかった物の、夢。

僅か一か月とちよつと前の事。まだ、足を失う前の事で、ひなた達と知り合う切っ掛けとなったあの事件。つまり、体内に寄生し、宿主を爆破しそして新たな宿主へと寄生するあの魔獣の起こした悲劇の回想。

「嫌なの！ 私はまだ生きていたい……ルナの成長を見届けて、ルナを見捨てたあの人の分まで、あの子に愛情を注いであげたいの!! 私にはまだ、やりたい事が……やり残した事がまだあるのよお!!」

「いやだよ……しにたくないよ……まだいききたい……! おかあさんみたいにきれいなおとなになりたいし、けっこんもしたいの!! おねがい……たすけて……たすけてよお……」

それは、ルナの母親と、ルナの声。彼女達は、決して今生に後悔を持っていなかった訳ではない。死を叩き付けられ、必死に解決法を模索してとうとうそれは存在しないと分かった時。それを告げた時、ルナの母は絶望にその顔を歪めて叫んだ。懇願した。死にたくない。ルナが一人前になるまで生きていたいと。

ルナは呟いた。やりたい事を。叫んだ。将来の夢を。助けるとミラにしがみついて呟いた。しかし、ミラにはそれをどうにかする術がなかった。父と共に方法を探し、探し、探し、しかし見つからなかった。そして宣告したのだ。

ルナの最期は、三人を死なせたくないという言葉だった。だが、その前に、確かに今への執着を口にした。死への恐怖に屈した。死にたくない泣き叫んだ。

彼女の母親もそうだった。死にたくないと呼んで、叫んで。しかし、最期はルナを巻き込まないためにルナの元から離れ、死んだ。それが無駄になったのは、特筆すべき事ではないだろう。彼女の最期を彩るために。

『——けて……』

声が、聞こえた。

それは、聞き覚えがあるようで、聞き覚えがないようで。

『たすけて……』

その声は、背後から聞こえた。

『たすけて……ミラ……しにたく、ないよ……』

肩を、触られた。

そうだ、この声は、ひなただ。

昨日、家を出て行ってしまったひなたの声だ。

思わず振り向いた。そして、そこにある顔を見て、凍り付く。

『いきりたいよ……シャレーレイとまだいつしよにいたいよ……たすけてよお……』

そこにある筈の眼球は無く。歯も半数以上は抜け落ちていて。銀色の髪は紅に染まって、半数以上が抜け落ちてスカスカになっていて。手の肉は削がれていて、頬の肉はどこかへ落としていて、骨はむき出しになって内臓はむき出しになって足は崩れかけていて心臓は動いていなくて体温はなくてアバラはいまそのばにおとしてちがしたたつていてなにもかもがたりなくてそんなひなたがそんなひなたがたすけをもとめていてだけどうごけなくて――

『ミラあああああああああああああああああああつ!!』

「ひいあああああああああああああああ!!?」

「あああああああああ!!? あ、ああ……あ?」

目が覚めた。

夢、それも特大の悪夢だった。

自室のベッドで叫びを上げながら上半身を起こして目を覚まし、そのまま暫く呆然とする。そして、ようやく先ほどの地獄のような光景が夢だった事を知る。そしてようやく一息ついたが、自室に入ってくる光は無く、未だに日が昇る前の時間だという事が嫌にでも分かった。

枕の傍に置いておいたりモコンで部屋の明かりを付けると、ようや

く息と動悸が落ち着いた。

「……………」

先ほどの悪夢に対して出てくる言葉はなく、昨日から感じている嫌な予感は更に強まるだけだった。

恐らく、あれは警告の一種なのだろうと想像する。ひなたを助けなるときっと手遅れな事になる。そういう、何かしらの啓示なのだろう。だが、抗う術なんて今は持っていない。悔しく思いながらも唇を噛むだけ。

結局、昨日のあの後はひなたを連れ戻す事は叶わず錯乱するシャーレイを宥めたが収まらなかつたため心が痛んだが腹に拳を入れて無理矢理気絶させて部屋へと連れていき、そのまま寝かせた。そしてミラ自身も心が落ち着くことはなく、ひなたが置いていった起爆銃をシャーレイの枕元に置いて暫く心を落ち着かせるために剣を研いでから寝た。

時計を見てみれば眠りに落ちてからまだ一時間程度しか経っておらず、しかし眠気は完全に飛んでいてしまっていた。まだ日が昇るまでには一時間程度時間がある。前髪を握りつぶし、杖を片手にベッドから起き上がる。そして部屋から出ると、何故か居間に電気が付いていた。まさか、シャーレイが起きているのかと思いき居間に入ると、そこには椅子に座ったシャーレイがいた。

「……………シャーレイ。起きたの」

「ちよつと、ね。嫌な夢を見ちゃったから……………」

シャーレイは俯いたまま椅子に座っており、その手にはひなたの起爆銃が握られている。その起爆銃を抱え込むように握り、その目には涙を流したような跡が見て取れる。どうやら、つい先ほどまで泣いていたらしい。

呆然自失で錯乱している状態から腹パン一発で抜け出せた事はまだ有り難い事だが、状況は嫌な雰囲気や暗雲が包み込んだまま。何をしたいのか分からない。どうしたらいいのか分からない。そんな思いがシャーレイには会った。

一緒に居てくれると言ってくれたひなたが自分を残してあの男の

元に嫁いでいった。それだけでシャーレイにとってはショックで。そして、ひなたなら大丈夫だと胸中で思い続けていた結果がこれだ。数時間前、ひなたの様子が可笑しかった時に問いただしておけば手は打てたんじゃないか、と思えば思う程泣きたくなってくる。

が、泣いたところで事態は好転しない。涙を拭いてくれるひなたは戻ってこない。そう思うと最早涙すら出てこなくて、胸の中にポツカリと穴が空いたかのような錯覚が全身を支配する。

体の関係も許してもらって、どこか無意識に思ってしまったのだから。何があってもひなたとはずっと一緒に居れると。

「ミラちゃん……どうしよう……」

今まで受動的に動いてきたから、動いてきてしまったから、自分でどうしたらいいのかを判断する事が出来ない。ひなたを取り戻したい。だが、そのための作戦や行動を想像する事が出来ない。

だが、それはたった十四歳の少女にとっては仕方の無い事。むしろ現状でどうしたらいいかをスラスラ言えたらその人は精神が化け物だと思えてしまう。だから、ミラは自分で考えろ、なんて言わない。小さくそうだね、と呟いてから自分の頭を回転させる。

「……シャーレイはどうしたい?」

「どうしたい……って?」

ミラの言った意味が少し分からない。どうしたいか、そんな自分ではよく分からない。

「……ヒナタを、どうしたい?」

「そ、れは……」

ミラが頭が殆ど働いていないであろうシャーレイに、先ほどの言葉を意味は同じなままシャーレイに分かりやすいように諭すように口にする。

その言葉を聞いてシャーレイは俯く。そんなの、決まっている。ひなたと共にいたい。ひなたと生きていきたい。あんな男に奪われたくなんてない。絶対に。ひなたと一生を分かち合い共有しあいたい。そんな気持ちで一杯だ。だが、ひなたがああして出て行ってしまった以上、こちらから手を出していいのかという気持ちや、もしひなたに

また拒絶されたら、という気持ちで心を支配して全ての言葉にフィルターをかけてしまう。

ミラの言葉に言葉を返せない。だが、その表情は口ほどに物事を語っており、ひなたが居なくなつて寂しいという気持ちで一杯一杯な表情をしていた。勿論、そんな事は表情を見なくても分かっているが、この門答でシャーレイが何処か躊躇してしまつていてというのが分かつた。

「……他人の事なんて考えなくていい」

「……え？」

ミラは俯くシャーレイに言葉を投げかける。

自分が説得したいのかどうしたいのかは分からなかったが、それでもシャーレイには元気を出してもらいたい。そう思ったから説得、なんとかして笑つてもらおうと言葉を投げた。

「……自分と大切な物の事だけ、考えればいい」

自分がどれだけ人として最低な事を言っているのかは自覚している。

だが、それでも大切な物を奪われて泣き寝入りなんてそんなの出来る訳がない。

ミラは助けたい。ひなたを、ここへと連れ戻したい。それを伝えるための言葉を、シャーレイに聞かせる。

「……シャーレイは、ヒナタが好き？」

「好き、だよ。大好き」

「……現状は、嫌？」

「……嫌」

「……なら、変えないと」

「どうやって」

「……暴力つていう素敵で無敵な手段」

「言つてる事最低だよ……？」

だが、シャーレイは小さく笑つた。しかし、ミラは本気だ。相手に暴力をぶつけて勝てるとは思わない。むしろ暴力で蹴散らされるのは恐らくこっちの方だ。何故なら相手は吸血鬼だと思ふから。相手

が人間なら暴力出来るが。

「……ヒナタを奪われたなら、奪い返す」

「出来るの?」

「……やるかやれないかじゃなくて……やる。シャーレイが嫌でも、私はやる」

そう、ミラはやると決めた。昨日、手紙も出した。既に打てる手段は打ち尽くした現状で、今さら止めますなんて出来ない。

だから、ひなたを取り戻すのを諦めない。それが死に繋がるのだとしても死ぬまで諦めない。既に、そう決めている。

「……シャーレイは?」

「私……?」

「……やるか、やらないか」

「……ミラちゃんは?」

「やる」

シャーレイの問いには即答だった。ひなたを取り戻す。それがどれだけ難しいと分かっているも諦めるつもりはない。シャーレイはその言葉を聞いて小さく笑った。

ここまで食い気味に即答してくるミラが珍しかった、ともあるがひなたをそこまでして助けたい、と思ってくれている事が嬉しかった。

そして、その気持ちに心を動かされ、シャーレイも決める。自分よりも付き合いの短いミラがやると言っているのに自分が迷っている。またひなたに拒絶されたらどうしようかと迷っている。力が無いからと迷っていてどうする。ひなたは泣いていたという。それならこつちが助けられないで誰がひなたを助ける。

「……私も、やるよ」

「……実行係は私だけだね」

「あはは……」

例えミラに頼り切りになるのだとしても構わない。ミラに協力する。ミラの言う事を聞き、ひなたを助け出す。ひなたを愛しているから。

「……シャーレイが立ち直った所で作戦を考える」

「私、そんなの考えられないけど……」

「……私が考える」

シャーレイを頼っていない訳ではない。が、そんな事を考えたことが無いであろうシャーレイに考えさせるなんて出来ない。だから、ミラが考えて実行する事となる。

そうして考える物の、ミラとてまだ十八歳の少女だ。ロクな物が思いつかない。

「……強行突破からの誘拐……いや、だめ」

そんな事、リスクが高すぎる。それに、もしもひなたに拒絶され、ヴァルコラキに襲われて逃げられたとしてもこちらはただの犯罪者となつてしまいひなたを取り戻す機会を二度と失ってしまう。

ひなたが事前に助けを求めてくれればまだ作戦の打ちようはあった。そう、あつたのだ。ひなたに二十日、何とかして時間を稼いでもらい父と共に特攻する。それに、早いうちに父に事情を説明できれば父の同僚やミラの知り合いを呼び寄せヴァルコラキ、もしくは他の吸血鬼を数で押しつぶす事も可能だった。

ひなたが相談してくれば、この問題はまだ幾分か楽に終わる事だったのだ。だが、ひなたの相談が無かったばかりに内通者としてひなたを送り込む事も敵わず、今ひなたがどんな状態かも探れず、完全に手探りの状態になり、相手がヴァルコラキと確定していないのも相まってヴァルコラキ退治という確固とした面目で相手の居城に乗り込む事が出来ない。

全てが遅かった。いや、これも相手の作戦なのだとしたらまんまと乗せられた。

恐らく、ひなたが相手の元へ行く決心をした……させられたのはスパーで買い物をしていた時だろう。ひなたに考える時間を与えない事で内通をするという考えを消させる。

いや、それでは不完全過ぎる。相手は脅したのかもしれない。もしも口外したらシャーレイを殺す、とでも。いや、他にもまだ可能性はある。

考えれば考える程そういう経緯を思いついてしまう。が、どつちに

しろそれは過去の事だ。一旦忘れる。

「……まずは、相手が誰か」

まずこれは仮定しておかなければならない。

シャーレイの言葉から分かるのは、相手は老人ではなく中年と青年の中間辺り、つまりはいい大人位の外見だろう。そして、名前はワラキア。最後に、これは重要な情報だが、太陽の陽の下を歩いている。

デイウォーカー。つまり相手は陽の光を弱点としない吸血鬼だ。この吸血鬼という過程も、ひなたの言葉から推測しただけなため、相手が人間の可能性もあるが今は吸血鬼と仮定する。

ただのデイウォーカーならまだ対策は出来る。ひなただっ行ってしまえばデイウォーカーの吸血鬼の仲間でもあるし、真祖程の力を持つていなければ今のミラ一人でも対抗は可能だ。ひなたが加われれば確実に勝てるとも言える。だが、ひなたはヴァルコラキ、と具体的な名前を出した。これはつまり、相手はヴァルコラキ本人かヴァルコラキレベルの真祖と言える。

ヴァルコラキは真祖の中では最底辺レベルとも言える。だが、真祖というのは通常の吸血鬼とは比べものにならない。吸血鬼十体以上の力を軽く使える化け物だ。足が無くなる前なら互角に戦えたが、足が無くなった今、父を呼ばない限りは真祖には歯が立たない。瞬殺とまでは行かないが、数分で殺されるだろう。

と、なると現状、ミラとシャーレイではひなたを取り戻せない。

だが、それでもまだチャンスは残っている。相手がヴァルコラキなら、の話だが。

「……相手がヴァルコラキなら、時間に猶予はある」

「え？」

そう、相手がヴァルコラキなら、少なくとも一週間二週間はひなたを無傷で取り戻す時間が用意できる。

「……ヴァルコラキは結婚式を挙げる」

「結婚式……」

そう、父の話でしか聞いた事はないが、ヴァルコラキは攫った女と体の関係を持つ前に結婚式を挙げる。これは相手が既婚者でも同様

で、結婚式という一つの儀式を終わらせる事によって相手の女にもう逃げれないという現実を突きつけて絶望させてから犯す……らしい。犯した後は、ヴァルコラキが今も嫁を作っている時点でどうなるか分かるだろう。少なくとも、ミラの母はもうこの世には存在していない。

そして、結婚式は大体一週間か二週間後に行われる。これは嫁にした女を愛する期間だ。手を出さず蝶よ花よと愛で、結婚式までひたすらに愛する。詳しい事は分かっていないが父から聞いた話によるとそうらしい。父はヴァルコラキに女を取られたり娘を奪われたりした被害者達に話を聞いていたためほぼ間違いないらしい。

この期間は本当にその時によって左右されるため正確な時は分からない。だが、教会を結婚式の場として使うのは確定しているため、その情報に関しては買うしかない。

「……情報屋に行く」

「情報屋に……？」

「……ワラキアの結婚式はいつかを調べさせる」

そう、ミラとシャーレイが嗅ぎ回ったら何かマイナスな事が起こるかもしれない。だからミラとシャーレイは手を出さず情報屋という偵察や情報収集を生きがいとしている人間に金を渡す事でワラキアという男、もしくはひなたという女の結婚式が何処で挙げられるのか、という情報を買う。

もしもワラキアがヴァルコラキでなければその時点で根底から崩れる作戦だ。だが、今は懸けるしかない。相手はヴァルコラキだと。

詳しく話していないため困惑しているシャーレイに一から十まで考えて練った作戦を話し、相手がヴァルコラキだと仮定して動く理由も話した。

「……分かった。それなら、後はミラちゃんに任せるね」

「……任せて」

「何かあったら、言ってね。荒事でも私はやるから」

「……頼もしい」

戦闘能力が無いシャーレイは基本的に留守番をする事になる。だ

が、シャーレイはそれに文句を言わない。

変にしやしやり出て困るのはミラだ。そして、それで死ぬかもしれないのは自分だ。今すぐにでもひなたを助けに行こうと言いたくなる気持ちに蓋をして我慢して作戦の実行をミラに任せる。だが、一言、例えそれが戦闘なのだとしても協力をすると口にする。

そんなシャーレイが何となく背伸びをした子供みたいで可愛く、ミラは微笑みながら頭を撫でる。

「……大丈夫。ひなたはちゃんと連れ戻すから」

ひなたには返していない恩がまだある。だから、手を抜いたりはない。

今持てる全力を尽くす。

それを誓いシャーレイの頭を撫でた手は、少し震えていた。

第五十魔弾

あれから三日が経った。作戦を決めたミラはそのまま家を出て行つては深夜に近い時間帯に帰ってきて再び明朝に外へと出かけていく。その際に置いていく金は今までミラが稼いできた額の倍以上はあり、ひなたと二人で手分けして依頼を受けていた時よりも多い額を稼いでは家に置いていった。その際、生活費に困つたらこれを使えと言われたが、シャーレイも数か月はこの家の家事全般をしているのだからひなたの置いていった生活費だけでも一か月二か月は余裕で持たせられる。

そんなシャーレイはミラからとある物を渡された。それは念のため、荒事に巻き込んでしまった時のためと言われたが、出来るなら使うときが来ない事を願う、とも言われた。

それは、拳銃だった。オートマチックの拳銃。リボルバー型ではなくマガジンを使うタイプの拳銃だ。その射撃練習もやっておけると言われたため、シャーレイはミラが出かけた後、家事をしてからこの拳銃で射撃の練習をしていた。

「狙つて……狙つて……」

庭に置いた的に向かって拳銃を構える。ミラが用意してくれた拳銃用のレティクルを覗き込み両手でしっかりと拳銃を構える。そして息を深く吐きながら手の震えを極力抑え、トリガーを引く。力で反動を抑えるのではなく上へと逃がしながら的をしつかりと見る。

排出口から出てきた空薬莖が地面に落ちた音を聞き、的の中心から大分逸れた場所に当たった弾丸を見ていい調子だと意気込む。

ミラからは的に当てられるようになればいいと言われた。それは、人間なら拳銃の弾が体の何処かに当たれば死にはしないが痛みで機動力を大分削げるからだ。だから体の何処にでもまずは一発当てられるようになれば相手は自然と機動力を削がれ、弾は当てやすくなる。そうして相手を削つていけば最終的には相手は死ぬ。だから、まずは一発。何処にでもいいから一発当てればいい。

「取り敢えず的の中心に当てられるようにならないと……」

そう眩き、再び的を狙う。そして、引き金を引いて弾を放ち、的に当たった所で再び引き金を引く。

それをほぼ無心で繰り返し、練習をする。

ひなたが居ないだけで今の生活は色という物の大半を失ったような錯覚を覚える。今まで楽しかった毎日が特に楽しくないと思えるようになって、暇だったのが充実していた時間も今やただ暇なだけで充実感なんて皆無だ。いつもひなたにくっついて遅くても夕方には帰ってきてくれていたひなたに甘えて、彼女はそれを嫌な顔せず受け入れてくれた。

それが無くなった今。ミラも深夜にしか帰ってこないため一日の大半を一人で生きるこの生活は全くと言っていいほど充実感はなく、つまらない。

もしもこのままひなたが帰ってこなかったら。もし、ひなたをここに戻らせる事が出来ないのであれば。シャーレイ自身、どうしてしまふのかなんて分からない。が、少なくともマトモな結末を迎えないというのは確かだ。ミラとだけでは埋めれないこの胸の内の穴はどうしようもなく大きくて埋める事なんて出来ない。

銃の中で弾が弾け弾丸が撃ちだされる。そして弾丸は的に当たり空薬莖が飛び出し、拳銃はホルドオープンの状態になる。それからまた引き金を引こうとした所でようやく弾が切れた事に気が付く。

新たな弾を詰めたマガジンを空のマガジンと素早く交換してスライドリリースレバーを解除してスライドを元の位置に戻す。これでリロードは完了し再び的に向かって照準を合わせる。

「……駄目」

だが、心がどうしても落ち着かず練習に集中できない。構えを解いて拳銃を降ろし足に巻き付けたホルスターに拳銃の安全装置をちやんとオンにしてから仕舞う。

幾ら撃っていたとしても無心で、何も考えずに撃っていたらいい練習にはならない。しっかり考えて撃たないとどうしたら当たるのか、次はどうやって構えたらいいかを考える事が出来ず、練習と呼べる物にはならない。

今撃っているのは練習用の鉛玉なので金がそれによつてカツカツになる事はないが、無駄遣いはどうしても避けたい。

「……ごはん、つくろ」

そう呟きながら一瞬でホルスターから銃を抜いて弾丸を放つ。しかし、弾丸は明後日の方向に飛んで行ってしまうだけだった。

ミラはこの日は駆除連合には行っていないかった。毎日深夜まで街の外を駆け巡つて金を集めてきた結果、情報屋で情報を買うには十分な金が僅か二日で揃つてしまったからだ。

その代償は目の下に来た化粧でも隠し切れないくらいの濃い隈だが、この程度でひなたを助けられるのならまだ安い物だ。スラムへと向かい躊躇うことなく中に入っていく。

隈が出来ているとは言つてもミラは外見は美女だ。剣を吊るしているからと言つてスラムの欲に塗れた視線は外れることは無い。ねつとりと絡みついてくる視線は不快で不快でイライラしてしまうが、一々そんな視線を向けてくる男共を斬り捨てていれば幾ら時間があつても足りない。

そんな視線が外れないのは主にミラが片足だけで杖を付いて歩いているからであり、足を払つて組み伏せれば好き勝手に出来るのではないか、とここに居る男の八割以上が考えているからだ。残りの二割は嫌な予感しかしないためすぐにその想像を止めて誰かが手を出すのを待っているか、ホモかだ。その二割の内八割はホモなのでちゃんと考えている男は一割未満、という事になる。

が、ミラはそんなのに気づかず、駆除連合で戦い生きていく事すら出来ず同じく戦えない人間に対してしか大きな顔を出来ず実力差すら図れなくなった馬鹿共に襲われたとしても無双出来るため一応気は張つておくが無視する。

「おい姉ちゃん、ちよつといいか？」

そして、馬鹿が数人で一塊になつてミラに話しかける。その一塊は

大体五人くらいだが、ミラにとっては足場の悪い岩場の方が脅威だ。寝不足と、実は女の子の目が重なって気が立っているため無視する。ひなた程重くはないがそれでもどちらかと言えば重い方なので腹が痛いわ眠いわポーチの中の金は重いわ足場がそこそこ悪いから歩きにくいわで結構イライラしていたが、それでも話しかけてきたから、という理由で殴って斬って去勢させるまではするつもりは無かったが、しつこいのなら話は別だ。

「おい、聞いてんのか」

そう言い、話しかけてきた男が後ろから肩に手を置く。

その瞬間、男の体が浮き、そのまま地面に叩きつけられた。地面がそれだけで陥没し、男の背骨にヒビが入る。

端的に言えばミラが男の手を掴んでそのまま片手だけで背負い投げするように一気に後ろから前へと投げられ一切合切の容赦なく地面に叩きつけられた。頭のリミッターを五割程度しか解除していないが、それでもこの男共を撲殺出来る位には力がある。

男を地面に叩きつけて男の手首を握ってしまった手を服で拭い後ろで呆然としている男の仲間を振り返り睨む。

「……殺すぞ」

十分な殺意と威圧を乗せて低い声で呟く。

その言葉には殺意と威圧以外にも自分の現状から発生しているイライラも詰まっていたが、男達はそれを知り得ない。

が、成人した男を片手で投げ、そのまま地面を陥没させるような少女を押し倒して好き勝手出来るなんて思えない。しかも、ミラは本当にイラついたからか剣を抜刀した。その明らかに高価そうで切れ味の良さそうな剣は男達を恐怖させる。

ミラはその剣を投げた男の顔のすぐ横に突き刺した。剣はまるで豆腐でも斬るかのように地面に吸い込まれていき、それを見た投げられた男はその恐怖に失神した。

「話しかけるな……っち見るな何も考えるな近寄るな。今度は殺す。この世に髪の毛一本すら残さずに殺す。犬の餌だ」

髪の毛一本残さず、というのは流石のミラでも不可能だ。だが、今

のミラはそれを可能にしてしまうんじゃないか、と思えてしまう程に殺意を撒き散らしていた。それを受けた男達は一瞬でミラから視線を逸らした。成人したそれなりに屈強な男を片手で投げ飛ばし、しかもそれで地面を陥没させるゴリラ女を組み伏せれる自信がある男なんてここには居ない。

ミラは舌打ちして苛立った気を晴らしながら投げた男の横を通っていく。その際、ゴミを見る目で男を見てから唾を吐いた。相当苛立っていたのがそれだけで分かる。

そのままミラは歩き去っていき、情報屋を探す。その間にも先の騒動を知らない男が突っかかってきたがその度に地面に叩きつけてやった。三回目は男をバチに、地面を太鼓の代わりにして太鼓を叩いていた。バチの全身の内八割程の骨に異常が生まれた。

そんな珍騒動を抜けてミラはようやく情報屋の住処であろう家に辿り着いた。ペンキがぶちまけられた家の前に立ち魔力をペンキに流し込んでいけばペンキがミラの魔力の色に、青色に発光する。

そして暫くして家の中から一人の男が出てきた。

「入りな」

「……邪魔する」

そのやり取りは、何処かひなたが来た時と似ていた。

ミラは情報屋の男の後に続いて隠れ家の中に入り、そして隠れ部屋に入ると男はソファに座り、ミラもその対面に座った。

「じゃあ、ビジネスの話しようか。ミラ・B・マイヤーズさんよ」

「……何処で名前を」

「俺等の間じゃ、ある程度強い人間はリストに入っている。それだけの事さ」

ミラのレベル、つまり人類の中でもトップクラスの実力を持つ人間の名前と顔は大半頭の中に入っているという。それが追っかけや暗殺の目的ではなく、単純に売り物として把握しているだけなのはミラも十分に承知しているため何も言わない。

こうして人の名前と顔、住んでいる場所を割り出すのも情報屋の商売だ。それ自体が金になる時というのが有り得る以上、知らぬ存ぜぬ

で通しては信用も落ちてしまう。だから、少なくともトップレベルの名前と顔は覚えておく。それだけの事だった。

それをすぐに理解したため何も言わずにミラは懐から金を取り出すとそれを男の前に置く。

「……依頼は幾つかある」

「……聞こうか」

まずは前金、と言わんばかりに出されたそれは、今日払うつもり金の内、半分だった。その量は、かつてひなたが出した金の量と同じ。それだけで前金。情報屋も表情を変える。

「……ワラキアという男。それから、ヒナタ・アカツキという少女の結婚式が何処で挙げられるのかを、情報が入り次第教えてほしい」

「金の割には、って内容だな。寝取られたか？」

「……大体合ってる」

男の方を、ではなく女の方を、だが。

それでも、この程度の情報は情報屋として握っていなくてはならない情報だ。

「……まだ情報は無いな。予約もだ。それに、行われた後って訳でもない」

つまり、まだ結婚式は挙げられていない。そして、暫くは挙げられない、という事だろう。ミラはそれに対して頷くと次の依頼を話してもいいかと目線で訴える。

その目線に早くしろ、という心がこもった頷きが返される。口に出さないのは、ここで下手な事を言つて美味い客を逃したくないからなのだろうか、どうなのかは分からないがそれと同時に何処からか菓子を取り出されたため、前者なのだろう。

好意と善意は裏を見ずに受け取り、出されたクッキーを一口で口の中に運びすぐに飲み込むと次の依頼を口にした。

「次に。ワラキアの本名を教えてほしい」

「……深くは聞かねえ。少し待ってな」

どうやら、ワラキアとミラの関係を疑ったらしいが、ここで根掘り葉掘り聞くのは間違っていると判断したのだろう。情報屋は後ろの

大量の引き出しを漁り、とある紙束を見つけると一通り目を通してからミラの前に投げた。

「本名、ワラキア・ヴァルコラキ。年齢不詳。出身地不詳。様々な情報がカットされてやがる」

「……ヴァル、コラキッ」

「……偶然だな。真祖様の苗字と同じなんてよ」

「……知っているの？」

「当然だ。人間の領域で色々やらかした真祖なんざ、俺の祖父の代から情報はある」

ヴァルコラキはやりすぎた。人間の領域で、自分の勝手を押し通し過ぎた。

だから、情報を集める事を性分としてそれに長けた立ち回りを続けてきた情報屋には一度ならず何度も人間の領域内でやってくれた真祖の情報なんて嫌にでも耳に入ってくる。

「……こいつの名前は、多分ヴラド・ヴァルコラキ」

「知っているさ。つい最近、真祖関連の依頼が欲しいって奴が居たんでね。真祖の情報は洗いなおしたさ」

それは、ひなたの事だ。

シャロンの件の時、ひなたは彼にブラッドフォードの事を聞いた。その結果は知らない、という言葉だったが、情報屋はそれを悔しく思った。

自分の知らない情報がある。あれだけの金を持った客をみすみす逃してしまった。そんな思いが彼を動かし、真祖の情報をかき集めさせ、過去の情報を洗い流させた。その結果、彼はヴラド・ヴァルコラキの事も改めて頭の中に入れた。だから、なんとなくだが分かる。つい最近この街に入ってきたワラキア・ヴァルコラキはヴラド・ヴァルコラキだと。

ヴァルコラキはナメ過ぎている。人間の情報網という物を。そこに混ざり情報を漁る情報屋という人間を。

だから、バレた。こんなスラムに居る男なんか。

だが、情報屋もワラキア・ヴラド、というのは今思い至った事だ。

そして、それが真実なのだろうと、ミラの表情から察した。一応、ミラの依頼はワラキアの本名なため、依頼に関しては既に達成している。だから、これからは雑談だ。

「言っておくが、俺からは動く気はない。俺は自分の身が第一なんですね」

なら、その情報を駆除連合か王国に持っていくか？

否だ。そんな事したらどんな報復が来るか分かった物じゃない。知っているだけ知っておいて、後は放置。それが情報屋を続けていく中での鉄則でもあり、原則だ。

ミラもそれは分かっている。

「そういう事さ。ワラキア・ヴァルコラキの本名は、恐らく数千年前から生きている真祖、ヴラド・ヴァルコラキ。そいつがこの街である銀髪の嬢ちゃんを嫁に取った」

「……なんで、ヒナタを」

「さあな。そこまでプライベートルな事は流石に知らんさ」

ひなたがどうしてヴラドの元へと行ったのか。それは情報屋にも分からない。

が、分かるのはワラキアとして動いたヴラドがシャーレイとミラの元から離れたひなたに何かを言った結果、ひなたの顔色が変わった、という事だけ。内容までは分からなかった。いや、収集できなかった。

それを聞いていた人間に聞き込みをしたが、全員が詳しく会話の内容を覚えていなかったからだ。ミラに言えば、それはヴラドの力だろう、と答えたが、情報屋もそれは思っているため舌打ちして収集を諦めるしかなかった。

「さて、雑談は終わりだ。もう無いか？」

先ほどの会話を雑談と済ます事で自分が情報を知らなかったことによる過失を無くす。

ミラもわざわざ揚げ足を取るつもりはないため頷いて次を口にする。

「……ヴァルコラキの家の見取り図が欲しい」

「あいよ」

ミラの言葉に情報屋は一言だけ返事をすると言き出しから紙を素早く取り出してミラに投げた。

そこには確かに家、というよりも屋敷の見取り図が書かれていた。どこがどんな部屋なのかは分からないが、それでも見取り図は分かりやすくまとめられており、恐らくこれを作った業者から直接貰った、もしくは模写をさせてもらったのだろう、というのは明白だった。

ミラはそれを受け取り懐に納める。

「……ヴラドの元へ言ったヒナタの詳細が知りたい」

「時間をくれ」

「……何時まで」

「三日だ。それまでに、昨日、今日、そして今日から三日後まで何をされたかを明白に教えてやる」

「………なら、それで」

この依頼はひなたの安否を確かめるための物。これは完全に潜入みたいな物になってしまいが、それも一応は情報屋の仕事ではある。だが、そんなプライベートの事まで情報屋は知らないため、それを知るためには暫し時間が必要だ。

遅い、という言葉を飲み込んで頷く。そして、最後の依頼を口にす
る。

「………最後は、口封じ」

「了解した。お前さんはここに来なかったし、俺は今日、この時間は適当な場所をうろついていた。問題ないな？」

「………問題ない」

そして、今日の事は誰にも漏らさない、という依頼。これでミラがここに居た事を証明する人間はいなくなる。そして、もしもヴアルコ
ラクがここを訪れても彼は何も答えない。

答えなかったとして脅される事も無い。

情報屋を殺せばどうなるか。それは、情報屋のネットワークを通じて様々な情報屋に殺された、という情報が届き、そして犯人の素性が
知れ、様々な裏の人間に暗殺等が依頼される。勿論、その中にはミラ

の父レベルのトップクラスの人間もいるし、それ以上の人間もいる。それが何十人も襲い掛かってくるのだから、例え相手がヴァルコラキでも死ぬ事となるだろう。

だが、これが探りを入れている時に見つかる、というヘマの後に殺されたのなら、そんな報復は無い。その場合はその情報屋は三流だった、と言われて終わるだけだ。報復は、あくまでも私利私欲で情報屋を殺した時だけだ。もし、ヴァルコラキが魅了や何かで聞き出したとしても彼は情報を吐かされた事を覚えているため相応の報復が待っているだろう。

これで根回しも完了した。ミラは前金を入れた袋の横に依頼料として今払える全ての金を置いた。

「満足か？」

「……もしかしたら、また来るかもしれない」

「じゃあ、釣りはその時まで預かっておく」

「……それでいい」

どうやら、今回の商売はお釣りが来るくらいだったようだ。だが、釣りはもらわない。超過した料金はまた来るかもしれないため、その時の依頼料として持つていてもらう事にする。来なかった場合は、彼の懐に収まるだけだ。

ミラは杖を手にして立ち上がる。

「……助かった」

「じゃあ、これからぐい鼻尻に頼むぜ。ミラ・B・マイヤーズ」

「……そのつもり」

そして、ミラは情報屋の隠れ家を出ていく。

これで打てる手は打った。後は時が来るのを待つだけ。その時に、ヴァルコラキからひなたを取り戻す。

ミラは獰猛に笑いながらスラムを歩いていく。ヴァルコラキを、母の敵を討ち、ひなたを助け出す事を思いながら。

第五十一 魔弾

情報屋に行った後はシャーレイに打てる手は打ったとだけ告げてその日は寝た。流石に三日間も睡眠時間が二時間以下の生活を送りながら何十キロも走ってきては剣を振るってきたため、脳のリミッターを自在に外せる以外は基本的に少し鍛えた人と同じ程度のミラでは限界だった。

それに、脳のリミッターをほぼ常時外して移動と戦闘を繰り返してきたため体の限界も来ていた。常時リミッターを外す、という事は常に火事場の馬鹿力を発揮している状態であるため、体への負担は洒落にならない。数時間程度ならその状態でも平気なように体を作っているが、十何時間もぶっ続けでそんな限界を超えた力を使っているのは流石に体も壊れる寸前だ。

だが、それでも今のミラは身体が壊れず、一日二日寝ればまた動けるようになる程度で済んでいる。それは単にミラの体運びが上手く、体への負担が最小限に済んでいた事と、相手がまだ格下ばかりでまだ体の酷使がマシなレベルだったからだ。

そんなミラが寝るベッドの横に椅子を置き、まるで看病するように座っているシャーレイはミラの身体の負担がかかっていたであろう場所に薬局で買ってきた湿布を貼っていた。ミラを裸に剥いてから。

そのため、もう脳のリミッターを外せないミラはされるがままの状態で裸に剥かれ、今は下着だけの状態だった。それでも、全身に貼られた湿布が何処か笑いを誘ってしまう。

「はい、これで終わり」

「……ありがとう」

だが、湿布が貼られている場所は、湿布を剥がしてみれば痛々しさでいっぱいだ。

全身の、特に酷使された場所に関しては青痣のような物と内出血のような物が重なり、肌が青かったり妙に赤かったり。明らかに体が内側から壊れかけている。そんな様子だった。

昔、まだこの戦い方のために体を作っていなかった時はこれも

しよつちゆうあつた事だが、それでもシャーレイからしたら一大事のレベルだ。それでもすぐに治る、と言っていたり平気な顔をしているのは、もう慣れてしまったからなのか、感覚が無いからなのか。それは分からないが、それでもこの力はミラを人類の中でもトップレベルの押し上げてくれた力なので、泣き言なんて言っていられないのだろう。シャーレイに服を着せてもらいながらミラは今朝がた、シャーレイに押しかけられ裸に剥かれる前に一応飲んでおいた秘薬の効果をじんわりと感じ、体が内側から癒されていくのを感じながら再びベッドに横になる。

「……無茶だけはしないでね」

「……大丈夫」

これ位なら、昔はよくやっていたから。そんな言外の言葉は通じなかったが、シャーレイは悲しそうな表情を一旦拭い去り、ミラの手を握る。

もしもミラが無茶をし過ぎて死んでしまえば、今度こそ一人きり。そんな恐怖にも似た感情が襲ってくるが、それでもミラだけは、ひなたを取り戻すまで、取り戻しても居なくなったりはしない筈、と信じて手を握る。ミラはシャーレイが悲しみに押しつぶされそうになっている、というのを何となく感じ取り、手を握り返す。

大丈夫。勝手に何処かで死んだりはしない。そんな気持ちを含めながら。

だが、それでも心配なのは変わらない。特に、この状態を見てしまつては、どうにもミラの事が心配になつてくる。

ひなたが何かを告げ、フラグを建てて死んでいくタイプだとしたら、ミラは己の中で自己完結型のフラグを建てて一人で死んでいくタイプだ。何処か犬と猫を思い出す気がするが、それ故に心配になつてしまう。

「……少し、寝る」

「うん、分かった」

朝に起きたがそれでも疲労故に眠気が取れないのだろう。ミラはそう告げると再び目を閉じた。暫くして寝息を立て始めたミラの手

に一応、逃亡しないように魔力を封じる手錠をかけてからシャーレイはミラの部屋をそつと出た。これで万が一にもミラがこの家を一人で、シャーレイに気づかれぬ内に出ていくなんてことは無いだろう。

部屋を出たシャーレイは、ひと今の時間を確認する。

今の時間は、もう一時間ちよつと経てば昼になる、といった時間で、昼食を作るのなら、丁度いい時間帯だった。が、今寝たミラが起きるとしたら、恐らく夕方かおやつの時間か。シャーレイは後でも食べられるような昼食を作るためにエプロンを手に取り、身に着けた。両足にあるホルスターを隠すように。

全ては、気が付くのが遅かったからだ。せめてミラに事前に何か相談しておけば……ワラキアの事を相談しておけば、こんな未来は変えられたかもしれない。ミラならば、その話を聞いて自分達の護衛をして、手を打っていてくれたかもしれない。

だが、それももう過ぎていった話だ。どうしようもない後悔は今も胸中を沈めていき、それを吐き出したくても吐き出せないからもう自由に行く事が出来ない外界を窓から覗む。

無理矢理着せられたドレス。絶対に履かないと決めていたスカートが着いた服。フリルの付いた、何処か可愛げのあるドレスは今の外見にはとても似合っているだろう。銀髪によく似合う、銀色のドレスは今の自分を完全な銀に染め、それでいて引き立ててくれている。無骨なローブと銃を持っていた頃とは打って変わって、何処かのお姫様にも見えるだろう。

同時に無理矢理着けられた、動くことの無いお飾りの左手も使えば完全に可憐な乙女であり、お姫様だ。だが、そんなのを望んでなんかいない。

「……シャーレイ………」

愛する人の名を呟く。何時の間にか足は勝手に動いて鳥かごのよ

うな部屋に小さく備え付けられた窓から外を見ていた。

屋敷の側を歩き去っていく通行人。はしゃぐ子供。野次馬の子供。それを見て、右手を握り込む。あんな風に外で、シャーレイと一緒に歩きたい。そんな想いを抱いていると、今の自分の有様が窓に反射する。

軽い化粧をされ、何時もはストレートに伸ばしっぱなしだった銀髪も鬱陶しくないようにヘアゴムで纏められ、そして腕の殆どが露出するそのドレスは余り日焼けしていない不健康そうにも見える白に近い腕を見せている。童話のお姫様みたいだと思おうと吐き気がする。

男を捨てたわけじゃない。男として生きる事を諦めたわけじゃない。完全に女であることを受け入れたわけじゃない。一年も足掻いて足掻いて、絶対に男に戻る。復讐を成し遂げて男として生きる。そんな選択をし続けた筈なのに、たった一手。たった一手、手を打ち損じたばかりにこんな服を着せられ、女としての自分を見せられている。それがどれほど屈辱的なのかはひなたにしか分からない。

薄い口紅を塗られた唇を噛み、俯く。男としての尊厳を捨てる事を強制され、男の元へと嫁ぐ。精神は体に引っ張られるとは言うが、まだ完全に精神を女にしていなひなたにとって、それは恐怖でもあり屈辱でもあり、様々な辱めを一気に受けさせられているような物だった。

「やあ、我が花嫁よ。調子はどうだね？」

「……………チッ」

そうして外を眺めている内に、ノックも無しにドアが開かれた。そこから入ってきたのは、あのいけ好かない男、ワラキア……ヴラド・ヴァルコラキだった。

ヴァルコラキはひなたを良い笑顔で眺めている。下から、上へ。舐めまわすようにネットリとその視線を向けるだけで不快感と羞恥心が己を襲う。男の時はこんな感情沸かなかったのに、と思いつつもヴァルコラキの視線を外そうと、精いっぱいの不快感を込めた舌打ちをする。

だが、それでもヴァルコラキは笑顔を崩さない。銀の少女を見てい

け好かない笑顔を浮かべたままだ。

「ふむ、あまり優れない、と」

「……優れてたまるか。とつとと出て行つてよ」

「これはこれは、手厳しい」

「誰がお前に絆されるか。いいから出ていって。こっちはもうすぐ生理なんだから、ストレスを与えないで」

「……ふむ、花婿の顔を見るのがストレスだと?」

「お前があの口説き文句で人の心を掴めた事があるんなら、驚きだ。どうせ魅了を使わなきゃどうにもならない癖に」

「どうやら、今回の花嫁は毒舌のようだ。これでは僕の心が折れてしまいそうだ」

「折れるハゲ」

ひなたはヴァルコラキに惚れた訳ではない。いや、惚れる訳がない。魅了を使って人の心を弄ぶようなクソ野郎に対して惚れる要素なんてある訳がない。

ヴァルコラキの方を向かずに窓に映るヴァルコラキに対して言った言葉は果たして皮肉になったのか、いや、なっている訳がない。この男は、既にひなたを手中に収めている。愛の矛先が向いている。向いてしまいが、この男はひなたを拘束する術を持っている。持つてしまっている。だから、ひなたのこの言葉も、無駄。時が来れば、ひなたはこの男に大切な物を捧げられてしまう。体も、命も。

それでも、心だけは捧げない。死ぬまで。だから、決して絆されない。飴を拒み続け、唾を吐いて死んでやる。

「そこまで辛辣だと……お別れの時が早まってしまいそうだ」

「へえ、それは精々する。あの世で呪い続けてやるよ、クソジジイ」

命が惜しくない訳ではない。だが、それでも、死んででも心だけはシャレーレイの物。それは変わらない。

「……そうかい。出来れば、心変わりすることを期待しているよ」

「フアック、クソヴァンプ」

出ていくヴァルコラキを中指を立ててお帰り願う。

お別れの時。それが指し示しているのはただ一つ。ひなたを殺す

事。

ヴァルコラキは女を奪い、そして結婚し、犯し、殺す。これを一つの趣味のような物にして何百年も生きてきた。それ故に、花嫁に対して持つのは愛情ではなく加虐心。愛を向けた女を犯し、壊し、殺す。この工程にしか楽しみを見いだせないクソ野郎。奴の従者は全員がヴァルコラキの眷属と化しているため、ヴァルコラキの犯行を止めることはない。殺した後はその死体を食っているから、でもある。

結婚式を挙げる、と言っていたのは確かひなたの死体の処理の準備が出来てから、と言っていた。だから、もう一週間か二週間かは先だが、逆に言えばひなたの余命は、それまでも言える。式を迎えれば、後は犯され殺されるだけ。反抗しようにも出来るわけがない。

「……これも、全部っ」

ブラッドフォードのせいだ。

ブラッドフォードがあの日、あの時、村を襲わなければ、ヴァルコラキに目を付けられる事はなかった。ヴァルコラキはひなたを犯し、壊すだけではなく、もう一つの事に利用しようとしている。

何処かに隠れたブラッドフォードを、ひなたを殺す事でおびき寄せ、戦い、殺し、真祖の王としての地位を確立する。ひなたは、そのための礎だ。ひなたはそんな他所でやってくれと叫びたくなるはた迷惑な抗争に巻き込まれ、殺されようとしている。はた迷惑な話だ。

そう、ヴァルコラキは元から……この街に来る前からひなたの事を狙っていた。つまり、ひなたは遅かれ早かれ、こうしてヴァルコラキの嫁として扱われる事が決まってしまうていた。ヴァルコラキの私怨の生贄にされる事が。幸運だったのは、今のひなたが女だった、という事だ。もし男のままならその場で殺されていた事だろう。

だが、どっちにしろ死ぬことは……ヴァルコラキの私怨で殺されるのは変わらない。変えられない現実だった。

「……せめて、シャーレイと恋人になりたかった」

体の関係だけじゃなくて、恋人に。この恋心を成熟させたかった。だが、それももう叶わない。吸血鬼の生贄となった今では、それはもう叶わない夢だ。

「シャーレイ……会いたいよお……しやーれい……」

壁に手を付き、その名を呼ぶと自然と足から力が抜けてしまい、立っていられなくなる。そして、自然とへたり込んで、壁に額を付けた。

もう会えない。その悲しみが胸を貫き、涙を流させていた。

最愛の人を思い、泣く。もう会えないと思い、涙を流す。

それを良しとせず、取り戻すために裏で動いているのが、その最愛の人だとは知らずに。

その三日後。ミラの元に一通の便箋が運ばれてきた。

それは情報屋からの物だった。

「……結婚式は、来週」

その中を見て、眩いた。

全ては、来週。ひなたが出て行ってから二週間が経過した日。その日に、全てが決まる。

第五十二魔弾

ただひたすらに銃を撃つ。その作業じみた行為に神経の全てを使い、無意識下でも練習通りの事が出来るようにと練習を繰り返す。的中心に穴が生まれ、その穴の付近に更に穴が出来ていく。それを無言で見守り、弾が無くなったところで懐からマガジンを取り出しロードを行ってからホルドオープンを解除してから再び狙いを澄まし引き金を引き的に新たな穴を作っていく。

それも数分が経てば銃は再びホルドオープン状態になり、すぐさま新たなマガジンを懐から取り出そうとして、手を止める。既に地面に捨てられたマガジンは今朝弾を詰めた数と同じ数転がっており、もう懐にはマガジンがない事を示していた。一応ホルドオープン状態は解除して足のホルスターに銃を仕舞う。そして逆の足に着けたホルスターから起爆銃を抜き……手を降ろした。

「……弾は限られてるし、撃てないかな」

シャーレイは呟き、腰に着けたポーチの中に手を入れる。

残された起爆銃と魔弾。その数は限られており、一応ミラも魔弾を作成することは出来るが、ひなたのように作りなれている訳ではないため、シューターの魔弾はあらゆる方向に飛んで行ってしまったりした。が、ミラが得意とする魔法……氷の魔法、ではなくその元となる水の魔法を発動させる魔弾は何とか用意出来た。

しかし、ひなたの作った魔弾は五十発程度しかなく、その中で常に使っていたシューターは五発程度と少なく、シールドはばら撒くための物が八発程あったが、それ以外はライトニングやバインド、エクスプロージョンばかりであった。

その魔弾が通常は零距离でしか使えない物だとは一応聞いていたため、使えない。特にライトニングはミラ相手に零距离で使っている所を見て、ひなた自身も痺れている所を見たため、自身では使えないと知っているため、起爆銃は使えない。お守り代わり、と言うのが正しいだろうか。

それに、起爆銃のパーツは色々と事情があり届いていないらしく、

まだ無理をさせれない状態であるため、使えない。ミラの作った魔弾は特に負担が大きいらしく

「……………飯、作らなきゃ」

ホルスターに起爆銃も仕舞い、一度ホルスターごと起爆銃を撫でる。だが、その顔はどうしても暗く、起爆銃をホルスターの上から撫でる行為は自分を慰めるためにしているようにしか見えなかった。

実際、それは合っておりシャーレイは無意識で自分を慰めようと、大丈夫だと言い聞かせるためにそれをしており、表情が暗いのも仕方のないことだった。

家の中に入り、自分の部屋に向かい練習着としても使っている戦闘服を脱いでから私服に着替え、一階に降りてからエプロンを着けて昨日から考えていた昼食を作るために冷蔵庫を開き食料を取り出す。そしてそれをキッチンに置いて包丁を手にした所で、ミラが台所に入ってきた。普段、料理はシャーレイに任せっきりのミラがこの時間帯にキッチンに入ってくる事は珍しいことだった。

「どうしたの？」

間食を作ったりする際に台所に立ったりする事はあるが、それ以外は片足立ちを強要されてしまうため、あまり台所に立たないミラがこうして台所に入ってきた珍しさに思わず声を出してしまう。

ミラの手には一通の手紙のような物が握られており、それを見せるように手を振ってから一言呟いた。

「……………四日後。ヒナタの結婚式が街外れの小さな教会で行われる」

「そ、れって……………」

結婚式。それは、ひなたを取り戻す最初で最後のチャンスであり、シャーレイの戦う時であった。

作戦はミラが情報屋に足を運んだ次の日に既に決めている。それには自衛のために訓練していたシャーレイが出ないと行けない位にキツイ作戦であり、ミラはあくまでも足に徹し、シャーレイがひなたを取り戻す役をする。シャーレイが望んだことであり、同時にそれがミラがサポートに徹する事で事故を未然に防げる可能性を増やす手立てであった。

ここでやらなくてはならないのが、ひなたの誘拐、そして説得。そして、万が一ヴァルコラキが襲ってきた時のシャーレイ、ミラの死亡の防止、そして下手人がシャーレイとミラである事の隠蔽だった。これを成して初めて今回の作戦の成功となる。

だったら、ミラがひなたを取り戻す役を務めれば、とも考えたが、ミラはヴァルコラキが襲ってきた時に不意打ちをかまし、シャーレイとひなたを救出する役がある。もし、ミラがヴァルコラキに正面から戦いを挑まれて志望したらシャーレイもなし崩しに殺される可能性があるからだ。ミラが動かないのは、これを考えたから。

こうして作戦を練ったのはいいが、それでもそれに失敗したら。ひなたを取り戻せなかったら、もうひなたを取り戻す算段は無いと言っても過言ではない。

最初に無茶だと言ったが、それでもそれしかないと考え、こうして無茶だと思った計画を実行に移そうとしている。

「……大丈夫。絶対に成功させる」

「うん……」

絶対に成功させなければならぬ。成功させるのだ。成功させなければ、ひなたは近いうちにヴァルコラキの心も体も犯され、殺される。それだけは回避しなければならぬ。

どんな手を使つてでも、ひなたを助け出す。それだけを考えて計画を実行させる。

「……細工は流々、準備は上々、後は仕上げを御覧じろ」

「それ、なんのセリフ？」

そう言いながらシャーレイは笑うが、それでもすぐに表情は暗くなってしまふ。何かの本で見たセリフを頭の中をグルグルと回しながらようやく思い出して口にしたが、それでもシャーレイの暗い表情を晴らす事は出来なかった。

それに対してミラは若干表情を暗くしながらも一応、シャーレイを安心させるために同じ便箋に入っていた紙の内容を口に出す。

「……今のヒナタの事も少しだけ分かった」

「……本当か？」

「……基本的にヒナタは一人で過ごしているらしい」
「基本的には？」

ミラの言葉の中で気になったのは、その言葉だった。
つまり、一人じゃない時間がある、という事なのか、と思い口にしたが次にミラが口にした言葉でその理由は分かった。

「……たまにヴァルコラキがヒナタと話をしているらしい……大体中指を立てられて青筋浮かべて去っているとか」

「な、中指って……っ」

その光景を簡単に想像出来るため思わずちよつと笑ってしまった。

こうして嫁いでいったのに中指を立てて夫を追い返しているという事は、少し心の中で懸念していた事……本当に心を奪われ嫁いで行った、という可能性が完全に無くなった事に喜びを覚えた、という事もあり、笑いがこみ上げてしまった。それはミラも同じで微笑んでいる。

これで全くの憂いなくひなたを誘拐する事が出来る。誘拐して、この街を離れるなりなんなりしてヴァルコラキから逃げてミラの父と合流し、報復がある前に体制を整え、ヴァルコラキを迎撃する。報復が無ければヴァルコラキは放置しておけば勝手にミラの父がヴァルコラキを討伐してくれるだろう。

「……パパも来週にはここに来れる」

「それで、この件は……」

「……ハッピーエンド。ただ、多分パパも暫くここに泊まる」

それは単純に、折角助けてもらったのに適当な安宿に泊まれ、なんて言いにくいからだ。それに、ミラとしても父には色々と話したい事はある。だから泊まってほしかった。年頃の少女しかいない家に泊まる、というのも父にとっては複雑かもしれないが。

「それなら、ちよつと夜は控えないとね」

「……あはははあ」

その言葉にミラは苦笑いを返す事しかできなかった。

一応、ミラの父には体の関係は秘密にしているのであまりバレたくないのは確かだが、声を控えた所で夜中の静かな時に色々やったら

小さくも声が漏れてしまいバレてしまうため、どっちにしろやるのを控えてもらわないと父から結構白い目で見られるかもしれない。

そこにミラも混ざった事があるとバレれば結構複雑な目で見られるかもしれない。一人娘がバイだと言ってそのまま同性の同居人の性処理に巻き込まれたなんて複雑に決まっているだろう。ミラも自分に子供が出来たとして、そんな爛れたような関係になりました、なんて言われたら複雑な気持ちになるだろう、としか思えない。

「……取り敢えず、あと四日は待機することになる」

「四日……」

「……だから、練習でケガしないように」

「分かった。怪我しない程度に頑張るね」

「……うん」

後は四日後の結婚式だ。一応、時間は朝ではなく昼頃らしいが、それでも時間が多く残されている訳ではない。すぐに心を戦いに備えさせないといけないだろう。

言いたいことを言い終わったミラが台所から出て行ったのを見届けてからシャーレイは出してあった食材をまな板の上に置いた。それを切る力が何時もよりも少しだけ強かった。

第五十三魔弾

四日後。その日は夜が明けてからすぐ、二人は目を覚ました。

一緒の部屋ではなく、各寝室で自然と夜明けすぐに目を覚ました二人はまず着替えをして、前日の内に用意しておいた今日の日のための道具達を収納したポーチを腰に着け、その武器を背負ったり足に巻き付けたりしてから居間に来た。

「……今日、だね」

「……うん」

二人とも、挨拶すら忘れ、確認する。

全ては今日。今日この日で決まる。

今日を失敗したら次は無く、今日成功したら後は何とかなる。いや、するしかない。どちらにしろ、今日をどうにか出来なければ、ひなたは帰ってくることは無い。永遠に。

既に用意するべき手は用意し、打てる手は既に打った。

まず、ひなたの誘拐。これに関しては既に準備を終え、作戦も決めているため後はぶつつけ本番の決行を待つのみ。次に、その後。これに関してはミラのコネを最大限に利用してどうにか馬車を一台、馬ごと借りる事が出来た。馬車は昨日の内に教会近くの林の中に隠してあり、そこには既にシャーレイ、ミラ、ひなたの三人分の変装用の着替えとアイテムが用意してある。これを利用して街の外へと脱出し、そのままミラの父との合流を果たし、ヴァルコラキの討伐へミラとその父の二人が向かう。その際、シャーレイはひなたを連れのまま逃げ回り、全てが解決し次第、ミラが二人に無事かどうかを伝える算段になっている。

もし、ミラ達が敗れた場合はシャーレイとひなたは遠方の、何処か適当な村に移住する事になった。シャーレイはこれに猛反対したが、ミラ自身、ヴァルコラキは母の仇なため、仇討ちを父と共に成し遂げたいがためにシャーレイの反対を拒否した。

やはり、親の仇というのはミラ自身、想像していたよりも憎んでいたらしく、どうしてもヴァルコラキの討伐は無茶だとしても参加した

かった。父と二人で。

そのため、シャーレイは強く言えなかった。が、代わりに絶対に帰ってくるようにと言い、それを許した。

最後に、もしひなたが全力で拒否して誘拐の失敗に終わったら。

考えていない。詰みだ。この場合は本当にどうしようもないため諦めるしか二人には手が無い。

夜に潜入して闇討ち？ ならば会場ごと爆破？ それとも帰っていく所を暗殺？ どれも不可能としか言いようがない。もしミラの父がこの場に居ればどれも出来たかもしれない事だが、ミラ一人ではどれも出来る訳が無く、暗殺に失敗して数分間戦った後にひなたが楽に食べられるサイズの肉塊になってしまうのが関の山だ。大丈夫やってみれば案外なんとかなるとかそういう次元ではなく、足が無いミラと真祖とでは文字通り次元が違う戦闘力の差がある。足がないミラが十人くらいいたら九人を犠牲になんとか勝てるかもしれないが、一人では無理。足があるミラで勝てる可能性はある、程度の相手なのだ。それを暗殺や闇討ち程度でどうにか出来る訳がない。

それ以前にミラが勝てない理由として、真祖の回復力を突破出来ない、というのもある。真祖に傷をつけてもすぐに回復されてしまいジリ貧になるため、真祖を殺すにはミラの父が持つ不死殺しの剣が必要なのだ。ミラの魔法を強化するための杖の役割を兼ね備えた剣ではどうしようもない。

だから、ひなたを攫えなかった場合の事は考えていない。考えられないのだ。

それを二人は改めて把握し、もう一度予定を頭の中に叩き込み、朝食を食べる。今は大体朝の五時であるため、二人が動くのは後八時間程先になる。眠気もないため二人は朝食をガッツリと腹に押しこんだ後、もう一度武器の点検や道具の確認に入った。

「弾はちゃんとした弾丸を……それと、魔弾もちゃんとセットしてスビードローダーにも……」

「……………うっとり」

シャーレイは己の武器である拳銃の弾を練習用の弾ではなくちや

んとした弾の入った物に変え、昨日の内にメンテナンスをしておいた銃に弾を込めたマガジンを入れ、スライドを一回引き弾をチャンバーに送って安全装置を入れてからホルスターに仕舞い、ひなたの起爆銃にもシューターを五発、シールドを一発リロードして起爆銃にしかない空撃ちのギミックで動作を確認してからホルスターに仕舞い、スピードローダーにも残りの魔弾をセットしておく。

起爆銃はまだ内部パーツを交換していない、というかまだパーツを取りに行っていないため一発でもジェノサイドバスターを撃てば壊れてしまう。だが、シャーレイにジェノサイドバスターは撃てないため壊れる心配はない。

そして、ミラの方は己の剣のメンテを行っている。メンテと言っても大規模な物ではなく簡単な物だ。刃こぼれが無いかを確認し、汚れが無いかを確認して綺麗な布で拭き、と本当に簡単なメンテだ。そして、その傷一つない刃を見て若干危ない人な感じの表情で己の顔すら見える剣を見て満足気に頷くとそれを鞘に仕舞った。

ミラはもうやる事はないため魔力を剣に通してみても杖として問題なく使えるかを確認したり魔力を体の中で動かして調子を確認したり、逆立ちの状態になって腕立てを始めてみたり、と色々としている。が、この行為は戦闘をする日の朝、何時もやっている、という訳ではなく、今日、落ち着かないから何かしていたい、という気持ちから落ち着くためにやっている事だった。

端的に言えば緊張している、という事なのだが、緊張をしない訳がない。

なんせ、今回の相手はヴァルコラキ。しかも、ただの討伐ではなく要人の救出に加えてその後の逃走、そして討伐まで一セットの数日に及ぶ作戦なのだ。一歩間違えれば要人……ひなたの死かミラ自身の死、はたまた三人同時の死が待ち構えている。ひなたを誘拐する、という時点でかなり無茶を利かせた作戦というのは分かっているが、それでもやらなければどうにもならない。

「……たった一人。守れなきや、ここに意味なんて」

今回は、前みたいな無茶をする訳ではない。

解決策の見えない救出劇を行うのではなく、解決策を用意した救出劇。死ぬのを見送るしか出来ない状態ではない。そんな状態なのに人っ子一人助けられないなんて、この力を持つている意味が無い。

だから、やる。やらなければならぬ。ひなたを、こんな所で殺していいわけがない。

己の顔を数回叩いて気合を入れなおし、再び逆立ち腕立て伏せを開始する。と、同時に二階でシャーレイが歩く音が聞こえ、すぐにシャーレイが階段を下りてきた。その音を聞いてからミラは両手をバネにして跳ね、そのまま片足と両手でしっかりと着地すると床に置いておいた杖を手にして立ち上がる。

それと同時にシャーレイがミラの元に顔を見せた。

「お待たせ。準備、出来たよ」

「……うん」

そう言うシャーレイの姿は、この間買った戦闘服の上からローブを羽織っている姿だった。どうやら、いつの間にか自分の分のローブを買っていたらしい。サイズもしっかりとシャーレイの体に合っていて、拳銃と起爆銃を収めたホルスターはちゃんと隠れている。

その姿に多少驚いたミラだが、確かに突撃を担当するシャーレイには姿を隠せるローブは必需と言えたかもしれない、と少し自分の作戦の立案、それから準備の甘さを認識しつつも領いた。これならしっかりとフードを目深に被っていれば顔を見られる事も無いだろうし危険も減るだろう。

「もう、行く?」

「……そう、だね。先に準備しよう」

シャーレイの言葉にミラは頷いた。そろそろ行ってひなた達が来る前に逃走経路の確認や馬車を引いてくれる馬の調子の確認、その他忘れ物の確認など、今日までにしておいた作戦の準備の再確認をしていないと、もしも足りないものがあつた時に手が打てない可能性がある。

一応、最低限の荷物はもう馬車に積んであるし三人と馬一頭の食料や水、その他に怪我をしたときや病気にかかった時のための薬は積ん

であるため馬車の方は問題ないとは思いますが、それでも万が一はある。その場で必要かもしれないと思う物もあるかもしれないのでそこら辺の確認もやはりしておきたい。

備えあれば憂いなし。備えは合った方がいい。かと言って馬が馬車を引けない程積んだら元も子もないが。

「ガスと水道の元栓よし。窓は全部閉めて裏口の鍵もかけた。泥棒が入り込む隙は無し」

「……クーラーも水道も切った。電気も全部消した」

「なら完璧。後は玄関の鍵をちゃんと掛けて……」

二人でしっかりと忘れ物が無いかを確認した後、家の中で付けっぱなし、出しっぱなしの物が無いかを確認してから二人で外に出てそのまま玄関のドアにしつかりと鍵をかける。そして、何度かドアノブを引っ張り、ドアが開かない事を確認してから泥棒がもう家の窓を割らない限り入れないようになっているのを確認して鍵をポーチに仕舞った。

「完璧。帰ってくるのは一週間後とかかな？」

「……分からない。けど、それくらいかと」

「もしも窓が割られてたら衛兵の所に行つてここもパトロールしてもらわないとね」

「……その泥棒は私が消す」

「消すって……」

二人してこんな事を話しているのは、緊張をなるべく抑えるためだ。

余りにもガツチガチに緊張したまま戦いに臨んではどんな事故を起こすかしかした物じゃない。恐らく、ヴァルコラキの前に姿を現すのは数分程度の事だが、その間にシャーレイが緊張故に失敗してしまつたらシャーレイの身に危険が迫り、最悪の場合、ひなたを誘拐するという前提条件すら満たせぬまま撤退してしまう可能性もある。もしも撤退が出来なければミラが一人でヴァルコラキに挑むという最悪の展開すら待っている。そうなってしまうたら、ひなたが協力し、人肉を食って全能力を解放してアシストしたとしても勝つことなんて

できやしない。

そんな相手の近くに突貫する。それがどれだけ怖くて恐ろしい事かはシャーレイにしか分からない。が、その恐ろしさとそれに対峙して戦闘になる可能性があるという緊張感を薄れさせるためのに、こういう他愛もない話は効果があつた。若干、物騒な方面に話が曲がつていたりはあるが、勿論冗談だ。精々半殺しだ。

「……さて、頑張ろうか」

「そうだね。なんとかして、ひなたちゃんを助けよう」

「……うん」

——そして、太陽はやがて二人の頭上を通過し、いよいよヴァルコラキとひなたの結婚式が始まる。

戦いの火蓋は、切って落とされた。

第五十四魔弾

午後の、結婚式の時間が来る一時間ほど前。会場である教会の前に一台の馬車が止まった。シャーレイとミラの二人はもちろんその馬車が止まった時、視界にその馬車が収まるような場所で隠密をしており、その馬車をパンと水片手に眺めていた。何で食べながらだったのか、と言われると単純に朝早くに朝食を食べたから腹が減った、としか言いようが無かった。

誰にもバレないように教会近くの林の木の上で待機していた二人は馬車が来る音を聞いて慌ててパンを水で胃の中に押し込むと、予め買っておいた双眼鏡で馬車を見た。ギリギリ見える、まるで貴族が乗るような馬車のドアが開き、中からはまず男が降りてきた。そして、それを見た瞬間、ミラは悪寒を感じた。まるで、背中に氷柱を入れたかのような冷たい感覚。その感覚から、相手が明らかに人間ではない、何か力を持った存在だという事が分かり、この時間、この場所に現れるそんな存在と言えばヴァルコラキしか居ないと判断し、あの男は真正銘ヴァルコラキだと理解した。

まるで二十代前半。いや、下手すると十代後半に思える外見。外見を見れば確かにイケメンと言えるが、シャーレイのようなレズな一般人は何も感じないにしろ、レズではない一般人が彼の姿を見たら少しはときめくであろう。それくらいに、ヴァルコラキの顔は整っていた。だが、ミラにとってはアレは畏怖でしかない。こうして双眼鏡越しに姿を見ただけで気圧され、今の状態では絶対に勝てないと分からされる。シャーレイは中指を立てながら双眼鏡を覗き込んでいるが、そんな事をヴァルコラキの目の前でやったら確実に殺される。幸いにもヴァルコラキはこちらの視線には気づいていないようだった。

「……ヴァルコラキッ」

自然とその声は出ていた。

最早確信したが故に言葉に出してしまったとも言えるが、それも仕方ない。

何故なら、ヴァルコラキは母の仇だ。魅了を使い、父から母を寝取

り、そして犯し尽くして殺した仇だ。そんな物を目の前にして憎しみを込めた声が出ない訳がない。いくら物心がつく前、記憶に母の顔が残る前に殺されたとは言え、親の仇だと知れば自然と憎しみが湧いて出てくる。

今すぐにも不意打ちで斬って捨ててしまいたい。そんな気持ちで一杯だが、自ら理性を捨ててひなたまで殺させる訳にはいかない。だから、今は理性で抑え込む。この怒りと憎しみを全て自制し、自分の座っている枝を握りしめる。

何時の間にかリミッターをぶつちぎっていたのか、木の枝は音を立てながらヒビが入っていく。その異音を聞いたシャーレイが落ちたらミラはまだしも自分は大怪我間違いなしなのでミラの肩を掴んで揺らす事で木の枝を握力だけで折るといふ普通なら考えられない現象を止める。

ミラはそれでようやく止まり、木の枝がまだ二人を乗せ続ける事が可能だと数秒待つて確かめてから再び双眼鏡を覗き込む。

ヴァルコラキは馬車の中から出てきてから暫く、馬車のドアの方へ向かって手を刺し伸ばしていたが、暫しして内側から出てきた手にそれを払われた。その数秒後に手を払いのけた緒本人が出てきた。

銀色の髪の毛に、純白のドレス。まるで何処かのお姫様のような、幼さを残した少女。つまりはひなただ。

「ひなたちゃん……綺麗……」

「……結構新鮮」

ミラの言葉の通り、今のひなたは今まで見たひなたよりも、女らしさでも言うべきものが増しているようにも見えた。

その理由は、今までスカートなんて一度も履かずにショートパンツや普通のズボンを履いていたひなたがスカートの付いた、フリフリのドレスを着ているという至極単純な理由だったが、軽く化粧をされた顔と今まで以上に整えられた髪の毛、更に隻腕を隠すための人の手と大差ない精巧な義手が今までどちらかと言えばボーイッシュだったひなたから女らしさを引き出している。態度は完全に今まで通りなのでホツとしているが。

ヴァルコラキの手を払い、一人教会の中に入っていくひなたの表情は暗く、重い物だった。少なくとも、今から結婚をする人間の表情ではない。それでも後ろから声をかけて着いてくるヴァルコラキに中指を立てて教会の中に入っていったひなたを見送ってから、シャーレイとミラは顔を見合わせた。

「全然、変わってなかったね」

「……何時も通り」

婚約者相手に中指を立てるような人間なんてひなたしか居ないだろう、と二人の意見は一致し、同時にひなたに遠慮なく誘拐が出来るかと改めて考えを固めた。双眼鏡を仕舞い、ミラが木の上から飛び降り、シャーレイは飛び降りてからすぐにバランスを取り、片足で立つミラの元に飛び降り、抱きとめて貫うとそのまま地面に降りた。少しふら付いたが、この程度でミラは倒れなかった。

「じゃあ、後は待機して突入を待つだけだね」

「……情報によると、後一時間で式が始まる。もう余裕はない」「大丈夫。準備はもう終わってるから」

何度も忘れ物が無いか確認した。何度も持っている物に不備が無いかを確認した。何度も作戦自体を確認した。準備は上々。仕掛けは流々。後は仕上げをビシツと締めてこの件を終わらせるだけだ。

ひなたを殺させたりなんてさせない。犯させたりなんてしない。今持てる全力を持ってひなたを助け、そしてまた三人でゆったりと余生を過ごすだけだ。

二人は配置に着く。シャーレイは教会の入り口に近い場所に陣取り何時でも突入出来るように待機し、ミラはその後方で支援の準備を済ませている。

そして、一時間が経ち——最初にして最後のひなたを奪還するチャンスが巡ってくる。

ひなたとヴァルコラキの結婚式は、ヴァルコラキの身内……いや、

彼が眷属化した従者達だけを招待し慎ましく行われる。

大きなイベント等は無く、形ばかりの結婚式。二人で入場し、誓いの言葉を言いあい、キスをするだけの、短く慎ましい結婚式。これはヴァルコラキが同じ場所で留まっていたは余計な事が起こってしまったかもしれないという懸念によりそうなっており、何人か前の花嫁との式を挙げた時からこうなっている。

確か、十人程前の花嫁か。とある男の元に居た花嫁を連れて結婚式を開いたらその男が花嫁を奪いに来た。その剣士の男は撃退し、花嫁は花嫁として最期を迎えたが、少し彼女の知人も招待したのが仇になった。そのため、ヴァルコラキはそれから花嫁の知人も呼ばないようになっている。面倒だから。

そうして多少無駄な事を考えたヴァルコラキだったが、既にその横にはひなたが居て、暗い顔でヴァルコラキの従者の前に立っている。既に入場は終わり、後は誓いの言葉を言ってからキスをするだけだった。

「どうしたんだい？ そんな表情をして」

「……頭沸いてんの？」

色々と心の中に募る物があり、しかし既にもうどうしようも出来ないから、ひなたはヴァルコラキに対して辛辣な言葉を並べて放つが、最早手遅れと言える領域に来てしまっている。

今日、この結婚式でこのクソ野郎に唇を奪われ、夜には犯される。それが嫌で嫌で仕方がないが、突きつけられてしまった条件がそれを拒み助けを呼ぶことを諦めてしまっている。精々出来る反抗という物がこういう毒舌と辛辣な言葉。そして決して絆されないという感情、憎悪の感情。

女の体になった事を心底後悔しながら死んでいく人生になるだろう。しかし、幸せだった時間というものは少なくはない。それを思い出し目の前の男に唾を吐いて死んでいくしかない。それしか出来ない。

既にヴァルコラキの息がかかった神父が何やらこの世界の結婚式の常套文句とでも言うのか、誓いの言葉とでも言うのか。ひなたに

とっては幸せ感なんて一切ない結婚式への説法のような物を口に出している。下らない、クソみたいだ。そんな気持ちも口に出してやりたいが、そんな事を口にして横の男にまた魅了された結果、この光景が最後に理性を持った状態で見た光景、なんていう展開は避けたい。

最後は自分の意志をもって死んでやると決めた以上、下手な真似はできない。

「それでは新郎、ワラキア・ヴァルコラキさん。あなたはこの女性を健康な時も病の時も富める時も貧しい時も良い時も悪い時も愛し合い敬いなくさめ助けて変わることなく愛することを誓いますか？」

「誓います」

よくもまあ心にも無いことを。そんな事を思い視線を地面へと逸らす。犯して犯して壊した後は殺して捨てる癖に。そんな事を思い何も無い地面を向く。

そして、次がひなたの番になる。

「新婦、ヒナタ・アカツキさん。あなたはこの男性を健康な時も病の時も富める時も貧しい時も良い時も悪い時も愛し合い敬いなくさめ助けて変わることなく愛することを誓いますか？」

冗談を言うな。そんな事を誓ってたまるか、と思うものの、横の視線が何やら怪しくなってきた。

言わなかったら無理矢理にでも言わせる。そんな視線を感じてしまう。

どうせ心の底から思っている事じゃない、上辺だけの言葉だ。適当に流してしまおうと半ば諦めた心で口を開く。

「誓い……ち、かい……」

だが、どうしても口淀んでしまう。

嘘だとしても、この男に対してそんな事を誓いたくない。そんな心がどうしても誓いますの一言を阻止している。

徐々に視線と共に顔が下を向いていき、ヴァルコラキの視線が厳しくなってくる。

「ちか、い……」

目を固く閉じ、口を開く。

もう逃げられない。観念しろという視線ともう逃げられない。諦めろという心が諦めたくないという心を押し込んでいく。そして、残りの言葉を、観念して口に――

「――誓わせない。そんな事、絶対に」

「……へ？」

物音一つ聞こえない会場に少女の音が響いた。

聞き覚えのあるその声が会場に響き、ひなたが顔を上げる。いつの間にか涙を流してしまっていたのであろう。少し歪む視界で後ろを向く。

その瞬間、かなり乱暴に教会のドアが蹴り開かれ、そこから現れたローブを羽織った人物が懐から何か丸い物を次々と取り出し、それを次々と協会の中に投げ込んでいく。それは地面に当たった瞬間に割れ、割れたそれからは白い煙が朦々と立ち上り視界を隠す。それはひなたの視界も同様で、隣のヴァルコラキすら見えなくなってしまふ。だが、その中でただ一つ、足音が聞こえてくる。

自分へと向かって来るその足音は、止まる事無くひなたの目の前でやって来て、止まったかと思うと煙の中から手が伸び、ひなたの右手を掴む。

「うわっ!？」

慣れないヒールとドレスによつてたつたそれだけでバランスを崩しかけるが、すぐにまた伸びてきた手がそれを支える。

「ひなたちゃん!」

「え、シャーレイ!？」

そして、ほぼ零距离まで近づいてきた下手人がローブを取り去ってひなたを引き寄せ小さな階段を無理矢理下らせる。

濃い煙の中でも互いの顔を確認できるほど顔を近くして、シャーレイはようやく掴んだ人物がひなたなのだ確認すると、すぐに説得に入る。

「ここから逃げよう! もう準備は出来てるから!!」

「に、逃げるって……」

「外に馬車もある。ミラちゃんのお父さんももうすぐ来る。だから、

一緒に逃げよう！」

時間はあまりない。近くにヴァルコラキが居る以上、死角からの攻撃が迫ってこないとも限らない。シャーレイは焦りを感じながらも自分の要件だけを捲し立てる。

大丈夫だと。策は万全だと。そう説得する。

「お願い、一緒に逃げて！ 後はこつちでなんとか出来るから！ だからっ!!」

涙を目に溜めながらシャーレイはひなたに縋りつくように叫ぶ。

シャーレイからひなたの表情を見ることは叶わなかった。顔を下げ、半ば頼み込むように声の限り叫んでいるから。

既に周りは騒がしく、この煙をどうにかするためには換気をしろ、という声が聞こえてくる。この煙は煙玉本体から煙が持続して出ることとは無く、一瞬だけが辺り一面に煙を散布して一瞬だけでも視界を遮るための物だ。だから、換気なんてされればすぐにこの煙は外へと逃げていき、やがてシャーレイの姿は目撃されてしまいうだろう。

もう残された猶予は少ない。今すぐにもひなたの手を引いてここから出ていかないと間に合わなくなってしまう。

言うことを言い尽くし、息を切らしながら縋り付くシャーレイ。ひなたはゆっくりと自分の肩にある手に手を当てた。それに対してシャーレイはようやく顔を上げた。

手を取ってくれた。信じてくれた。後はここから脱出して馬車に行きただけだと。

「——ごめん」

だが、返ってきた言葉は、予想していなかった言葉だった。

軽く、ゆつくりと肩から手を払われ、そしてその言葉が無情にも言い渡され、シャーレイは困惑した。

なんで？ どうして？ そんな事を考えている内にひなたは次の言葉を口にする。

「……ボクは、ここから逃げられない」

「な、んで!? 走って外に行くだけで……」

「それでも。ボクは、離れられない」

俯きながら点々と言葉を放つひなた。それとほぼ同時に、窓が開けられる音がして徐々に視界が晴れていく。

それは、ミラのシャーレイとひなたの回収の合図でもある。あと数秒も経たない内にミラはこの教会の中に入ってシャーレイを回収する事だろう。その手の先にひなたが居なければ……それまでだ。

「本当はね、嬉しかったよ。ここに来てくれた時……ボクを助けようとしてくれた時。凄く、ホツとした」

「それなら……一緒に逃げ……」

「だから、安心して死ぬるよ。最後にこうして会えただけで、満足だから」

食い気味に言葉を口にしたひなたがようやく顔を上げる。

その表情は、笑っていた。泣きながら、笑っていた。まるでこの世に未練は、悔いは無い。そう何の迷いもなく言える。そんな表情だった。

「ひなたちゃん……」

「でも、最後に……最後に、我儘をさせて？」

呆然とするシャーレイ。そんな彼女の首にひなたはゆっくりと手を巻き付け、そのまま彼女の体を自分の元へと引き寄せる。呆然としていた故か、ロクな抵抗が出来なかったシャーレイはそのままひなたに引き寄せられ、その勢いを少し殺した所で、ひなたと唇と合わせた。

たった一秒程度の短な、唇と唇が触れるだけの優しいキス。シャーレイが呆然としている間に行われたそれは、シャーレイがようやく自我を取り戻した所で終わり、そつと胸元を押され、後ろへと押しやられた。それに反応できず、たたらを踏んで後ろに後退すると、後ろに既に居たのであろうミラにそのまま抱きかかえられた。

「元気でね」

「そんな、嫌だよ！ 私、まだひなたちゃんと！」

「……もう、時間ッ」

既に煙はたたらを踏んで離れた距離にいるひなたの全身がハッキリと見える程度には晴れてしまっている。きつと、すぐ近くの従者にはシャーレイの顔が完全に分からないにしろ、体格や着ている物、髪

の毛の色等は見えてしまっているだろう。

今すぐ離脱しなければ、素性がバレてしまう。

ミラもひなたを抱えてここを脱出したい。したいのはやまやまだが、ひなたの後ろに既に何者かの影が見えているため、これ以上ひなたに近づくことが出来ない。ミラは歯を食いしばりながらもシャーレイを抱えると、ひなたに背中を向けた。その時にも、シャーレイは色々と言っていたが、それでもミラは一気に離脱するために足に力を込めた。

そして、煙の合間から外が見えた。片腕の杖にも力を込めてバランスを取りながら離脱するために一気に地面を蹴る。

「大好きだよ、シャーレイ」

その勢いのまま外へと飛び出す時、そんな声が聞こえた。

だが、その時には既にミラはシャーレイを抱えて外へと飛び出しており、振り向きざまに嫌がらせ兼復讐を込めて入り口から魔法を乱射して式場を滅茶苦茶にぶっ壊してからミラはそのまま追手が来ないように林へ向かって飛び出していった。

ひなたはそれを見送ると、目から流れていた涙を拭き煙が晴れ、代わりに氷の魔法が撃ち込まれて滅茶苦茶になった式場を見た。

「全く、よくもこんな目出度い日にやってくれた物だ」

「ボクは精々したよ」

「そうかいそうかい。で、愛しの花嫁はあの子達に着いていかななくて良かったのかい？」

「……クソ野郎が」

「花婿にそう言う物ではないよ」

散々になった式場の中。いつの間にか背後に立っていたヴァルコラキがひなたに声をかけた。

先ほどまで笑顔を浮かべていたひなたの顔は、既にそれを消し去り、ヴァルコラキを睨んでいた。

「これでは式は中止か……二度目をやる気なんて無いから、君の結婚式はこれで終わりだ」

「それはそれは光栄な事だね。こんな男との結婚式なんて挙げたくない

「なんてないからね」

「……その軽口が何処まで続くかな？」

「そりゃ、死ぬまで」

「ふっ……小娘が、いい気になるなよ？」

「黙れジジイ」

ヴァルコラキに対し中指を立てるひなた。その様子にヴァルコラキは少なからずの苛立ちを感じているようだった。

式を滅茶苦茶にされた挙句、式場を破壊されて中止にされた。その事實はヴァルコラキを苛立たせる位にはなってくれたらしい。二人に改めて感謝をしながらざまあみろと内心ケタケタと笑いながらひなたは立てた中指を折り曲げてから下に向かって親指を立てた。

ひなたが殺されるまでのカウントダウンは、着々と近づいてきていた。

第五十五魔弾

計画の根本からの破綻。それは、ひなたの身柄を取り戻すための機会を完全に失ったと言つても過言ではなかった。

ひなたを誘拐する所から始まる今回の作戦は、この誘拐を逃した時点でどうしようもなく破綻してしまつた。シャーレイの言葉でならひなたは着いてくるだろう、という安易な気持ちにより突撃班にシャーレイを選んだ訳だが、今になってひなたを無理矢理にでも攫つて来た方が良かったと後悔してしまう。

シャーレイとミラは一旦馬車の元まで逃げ込むと、もう馬車は不要になつたため、返しに行こうという事になつた。が、その際の言葉は僅か一言二言で、シャーレイは馬車の中で膝を抱えて蹲つてしまつている。ミラも正直、そうして拗ねていたい気分だったが、御者をしてゐるためそうは出来ない。

ひなたを助ける事が出来なかつた。その事実は容赦なくシャーレイとミラの心を砕きにかかる。

母を奪われ、そして新しく出来た大切な人の一人であるひなたまでも奪われたミラ。もう死ぬか体を捨てて無様に生きるかの二択を押しつけて手を差し伸べてくれた恩人とも家族とも言える少女を二度も奪われたシャーレイ。どちらもどうしようもない後悔と悲しみと怒りと、様々な感情が胸中で回りに回つてポツカリと穴を空けてしまつたかのようだった。

ミラはシャーレイを責めたりはしない。彼女達の会話はシャーレイ突撃後、すぐに入り口へ移動し待機していたミラにも聞こえていたからだ。ひなたは、シャーレイの助けを振り払つた。これは例えミラが行つて説得をしたとしても同じだつただろう。ひなたの気持ちを無視してでも誘拐する作戦を最初から立てておけばよかつた。ミラはこの失敗は自分のミスだと思ひ込んでいた。

だが、シャーレイはその反面、ひなたを説得できなかったのは自分のミスだと思ひ込んでいた。そのため、どうしようも無く淀んだ空気を馬車は纏つていた。

気が付けば二人は荷物に囲まれた状態で馬車の発着場の近くのベンチで仲良く並んで座っていた。どうやら、無意識の内に馬車を持ち主に返して荷物を下ろしてここまで移動してくる、という一連の動作を行ってしまっていたらしい。

「……………はあ」

「……………」

溜め息を吐いて地面を見つめるシャーレイ。何も言わずただボーツと空を見上げるミラ。まるでリストラされたサラリーマンのような暗い雰囲気を纏った二人は通行人から何も言わずに距離を取られる程に淀んだ空気を放っていた。

精魂尽き果てたとしても言うべきか、真っ白になったとしても言うべきか。このまま動かなそうなシャーレイと口から魂が出そうな位放心したミラは言葉を交わす事無く、胸中の絶望に吞まれていた。

今この場にタイムマシンがあるなら、二人は迷わず乗り込んで過去に飛び、ひなたを助けるまで何度も何度も時間遡行を繰り返す事だろう。そんなフィクションを考えてしまう位には二人は追い込まれていた。だからこそ、今の二人に不埒な目的で声をかけようものなら、何も言わずに斬撃と銃撃が飛んできてしまうかもしれない、と思える雰囲気醸し出していた。駆除連合での依頼帰りなのであろう体が鍛えられた男性すら声をかける事無く目を合わせようともせず去ってしまう程だ。きつとスラムでも今の二人は声をかけられる事も手を出される事もないだろう。

「……………どうしよう」

「……………」

「……………ごめん」

どちらかが声をかけても、声を返す余裕なんてない。ここにお気楽な人がいれば笑いごとにならない洒落でも言ってくれたのであろうが、二人ともそこまで何も考えていないお気楽ではない。きつとそんな洒落を言った途端、武器が喉元か眉間に突き付けられただろう。

それ位余裕が生まれない程度には、手詰まり。将棋で言うなら王手、チェスで言うならチェックメイトをかけられた気分だった。ここ

に起死回生の一手を投じれる程、二人の頭は回っていない。

いや、正確には何個か代案を思いついた。今からまた突入してひなたを攫ってくるだとか、ヴァルコラキの屋敷に今から突撃をかまして来るとか、夜中にカチコミをかけるとか、ヴァルコラキの暗殺とか。しかし、その全てが結婚式のような失敗を犯すとは思えなかった。いや、下手をしなくても確実に死ぬ。結婚式のような失敗では済まないのが目に見えていた。

仇討ちでは意味がない。助けなくては意味がないのだ。だが、そのための作戦を二十も生きていない小娘達では考えられる筈がなかった。そして、それを考えてくれる人脈も、金も、地位も、何もかもを持っていなかった。故に、詰み。もう出来ることは無いと言ってしまった。

「……これ、美味しいかな」

そうやってシャーレイはローブの下に着けている煙草を取り出した。その中にはひなたが面倒だからと入れていたのであろう安物のライターと数本の煙草が入ったままだった。

ミラはその声に気が付くと、シャーレイの方を一瞬向いたがすぐに視界を空に戻した。

不味いに決まっている。そう言いたかったが、好きにさせておいてあげよう、とミラはシャーレイの行動に口を出すのを止めた。どうせ、この辺りを見に来る衛兵なんて少ないし、今のシャーレイはローブのフードを被って顔が見えない状態だ。顔から歳を推測なんて出来やしない。それに、この状態の自分達に話しかけられるのなら話しかけてみるとすら思っている。

シャーレイは何となく、ひなたの煙草を啜えるとひなたの真似をしてライターに火を灯して煙草の先端を焼く。

が、思った通りに火が付かず、四苦八苦している。

「あ、あれ……」

時々火は付く物の、煙を吸える程度にならない。

ミラは四苦八苦しているシャーレイの煙草とライターを奪い取る。温泉街の時に教わった通りに煙草に火を付け、一回煙を吸った。

「げほっ……はい」

「あ、ありがと……」

そしてミラから煙草を受け取り啜える。

そういえば、ひなたから煙草を奪い取って吸ったこともあったわけ、と今更思い出したのも束の間。気道を通って己の中に入ってきた煙草の味の不味さやら肺に煙が入ってくる感覚やら、それが肺の中で重くのしかかっている感覚やらで久しぶりの煙草は前回と変わらず良いものではなかった。

「げっほ?! ぐほっぐほっ……やっぱり駄目かあ」

「……吸ったことあるの?」

「……結構前に、何度か」

大体、ひなたの差し金だろう、とミラは思った。大体その通りだ。煙草に咽たシャーレイは暫く火の付いた煙草を見てから、もう一度啜えた。そして、また肺に煙を入れて咽た。

「げほっ、ぐほっ……」

「……何で二度も」

「……これから先、ひなたちゃんを思い出せる物が煙草と起爆銃だけになるのかなって思うと……なんか、ね」

そう。もうひなたを取り戻す算段はない。二人にはもうひなたを取り戻すために出来る事なんてなく、後はひなたが犯され殺されるのを知ることなく生きていく事しか出来ない。

仮に、殺される前にミラの父が到着してヴァルコラキを殺したとしても。そうした場合、ヴァルコラキに犯され続けたひなたがまた前のように笑って一緒に生きていけるか。そう聞かれれば否としか言いようがない。きつと、助け出したとしても近いうちに自ら死を選ぶに決まっている。シャーレイもミラも、恐らくそうするから。

ひなたの精神がそこまで強くないのは、二人も知っている。強いのであれば、彼女は煙草と酒に逃げたりなんてしていないだろう。弱いからこそ、煙草と酒を使って人並みに立ち直ろうと努力する。最近はそのにせ〇クスも混ざったが、そうして自分が立ち直ろうとしている事を知っている。だから彼女を犯された後に助けたとしても、それは

無駄に終わるのだと、ただの仇討ちで終わるのだと分かってしまう。

「……もう、ダメなんだよね」

「……………」

「もう、むりなんだよね……」

「……………」

「もう……ひなたちゃんをたすけるの、むりなんだよね……」

徐々にシャーレイの声が震えてくる。それと同時に、体も少し震えている。いつの間にか煙草は燃えた先端が灰として地面に零れ、その上からは液体が落ちその温度を急激に落としていた。

「もう、ひなたちゃんに……あえないんだよね………」

その言葉への否定材料を、ミラは持ち合わせていなかった。

そうだね、という今のシャーレイをどん底に落とすような言葉を口にしようとしてしまったが、それは幸いにも口から出ることはなく、シャーレイの肩に手を置くだけに終わった。

それが引き金となったのか、声を殺しながら泣き出すシャーレイ。それにつられて泣き出しそうになってしまうミラ。このままシャーレイと共に大泣きしてしまいたい気分で、だけどシャーレイよりも年長なんだから、というくだらないプライドがそれを邪魔して。

もうどうしようもなく、悲しい現実を突き付けられそれを受け入れるまで泣くしかなく――

「しけた面してんなあ、お前ら。折角可愛いんだ。泣き止んだらどうだ？」

『……………え?』

第五十六魔弾

全ての始まりは、あの時。シャーレイにミラを売ってほぼ手ぶらで外へと出かけた時だった。あの時、ひなたはヴァルコラキに声をかけられ、目を付けられた。

が、あの時……最初に顔を合わせてしまう前からヴァルコラキはひなたの事を狙っていた。最初からヴァルコラキはひなたの身柄を我が物とし、殺す事でブラッドフォードへの下剋上を行うための手駒として確保する気だった。本当にはた迷惑な話だ。吸血鬼共の下らない地位争いに巻き込まれ殺される。ひなたの運命は、ブラッドフォードの眷属とされたその瞬間からそう決まってしまうていたのだ。

だが、それだけならひなたは抗った。だが、抗えない……抗ってはいけない事情が出来てしまったのだ。それが、結婚式の場でシャーレイの助けを拒んだ結果にも繋がる。

二週間前、三人で一緒に外出した時の事だった。あの日、ひなたはシャーレイとミラが店の中に入っていくのを見送ってから煙草を口に咥え肺に煙を落としていた。その一服は僅か数分で終わり、その後はシャーレイとミラに合流するつもりだった。が、その時にひなたは声をかけられた。かけられてしまった。

「やあ、いつかのお嬢さん。元気にしてたかな？」

「……たった今不機嫌になったけど」

店に入ろうとした所を声をかけて呼び止めたのは、当時はまだワラキアという名前しか知らなかった男……つまりはヴラド・ヴァルコラキだった。ヴァルコラキは如何にも無害だと言いたい位の笑顔でひなたに声をかけてきた。

その声を聞いた瞬間、煙草も吸ったことでかなり穏やかになっていたひなたの気持ちは一気に不機嫌になった。

相手を魅了して洗脳して何処かへ連れて行こうとする男に対して不快感やら何やらを抱くのは当たり前前の事だ。ひなたは片手を起爆銃に添えた状態でヴァルコラキの声に反応した。

「今日は早速だけだね。用があつて君に話をしに来た」

「へえ。要件だけ言ってさつきと帰ってほしいんだけど」

まだ、魅了にはかかっていない。起爆銃に手を添えながらひなたは手の中に魔弾を……レジストの魔弾を作成した。もしも魅了にかかったらこれをすぐに割って起爆銃を抜き、脅して金輪際関わらないように言質を取るつもりだった。

ひなたの挑発的な言葉に対してヴァルコラキは何の躊躇いもなく己の要件を口にした。

「君を我が花嫁として迎えたい」

「さつきと回れ右して帰れクソ野郎」

ヴァルコラキの言葉に対し、ひなたは若干食い気味に返した。

その言葉に対してヴァルコラキはやれやれ、と肩を窄めた。その様子に何処か驚いた様子も残念に思う様子もなく、この言葉を返してくるのはまるで予想範囲内だとも言わんばかりの態度だった。

だが、ひなたにとってそれはどうでもいい事であり、その時のひなたは困惑していた。

何故魅了をかけて来ない。魅了を使えばひなたがそれに気づく前にイエスと答えてしまう可能性は無きにしてもあらずだったのに、と。ただお茶に誘うだけで魅了を使い、婚約を申し出る時には魅了を使わない。その様子にひなたは大きな違和感と今すぐにミラの元へ行けという直感の悲鳴のような物を聞いた。

その直感に従えなかったのは、次にヴァルコラキが口にした言葉があったからだだった。

「やはり、ブラッドフォードの眷属を手中に収めるのは面倒だ」

「な、に……？」

ヴァルコラキは、ブラッドフォードの名を口にした。ひなたにとって、タブーとも言えるワードである、ブラッドフォードの名前を。

今でも憎み、殺し、復讐を果たしたいと思う仇敵の名前を目の前の男は口にした。そして、その眷属であるひなたを手中に収めるという言葉。この事から、ひなたはヴァルコラキの事を真祖の事を少なからず知るものと捉え、ブラッドフォードの情報をつかせるためにレジストの魔弾をポケットに仕舞い、起爆銃を握った。

「では、こうして私が真祖に関連する者だと分かせた故に、改めて自己紹介をしよう。私の名はワラキア……ではなく、ヴラド。ヴラド・ヴアルコラキ。これから一年後にはブラッドフォードを超え真祖の王となる者の名前だ」

「ヴアル、コラキ……ッ!?!」

その名前には、微かに覚えがあった。

一体何処でその名前を……いや、真祖の名前を聞いた。そう思考の海を手繰り、そしてようやく思い出した。

ヴラド・ヴアルコラキ。それはひなたをたった一撃で戦闘不能にしたミラの父であろう人物が口にした名前だと。つまり、ミラの父が探していた真祖。

それが、目の前に居る。ひなたは咄嗟に起爆銃を抜いた。だが、ヴアルコラキはそれを嘲笑い眺めているだけ。

「こうして改めて自己紹介をした所で、聞こう。我が花嫁となる気はないか?」

「断る」

ただでさえ普通の人間の花嫁になんてなりたくないのに、真祖の……それも仲間の父が探している敵の花嫁に自らなりに行く分けがない。起爆銃を構えた状態でひなたはヴアルコラキから徐々に距離をとる。

ミラを呼ばなければ。ミラを呼んでこの場を凌がなければ。周りにいた人間はひなたが起爆銃を構えた時点で何処かへ逃げており、それでも物好きな野次馬は離れた場所からひなたとヴアルコラキの事を見ている。見世物じゃないんだぞ、と叫びたかったが、少しでもヴアルコラキから目を離す訳にはいかない。ミラを呼んでこの場を凌がないと、最悪の場合はここで何も出来ずに死ぬ。いや、ミラがいなければ確実に死ぬ。

真祖の生み出すゾンビにすらギリギリ勝てるか勝てないかというラインなのに真祖本体を相手にして勝てる訳がない。自分の力を把握しているからこそ、助けを求めずにはいられなかった。

「……ならば仕方ない。少し、脅すとしよう」

「脅す……っ？」

そしてひなたがミラに助けを求めたため、ジリジリと後ろに下が
り、あと数十秒で確実に逃げられるであろうラインに到達するという所
でヴァルコラキが声を出した。

脅す。その意味はよく分かるが、一体どうやって。そう思った瞬
間、ヴァルコラキが指を鳴らした。

それと全く同時に、ヴァルコラキの後ろ……ひなたの視線の先で野
次馬をしていた男が真下から出現した紅い槍のような物に貫かれ串
刺しにされ、その野次馬が持っていた買い物袋が地面に落ちた。

「……………はっ？」

——人が死んだ。

少し遠く、十数メートル離れた場所にいた男が、悲鳴を上げる間も
なく地面から生えてきた槍に刺されて死んだ。

その事実を飲み込むまでにたっぷり十秒の時間を要した。そして、
その間にも状況は変わっていった。

地面から生えた槍に刺された男はそのまま溶けるように槍に吸収
されていき、男の姿は完全に消え去った。それを周りに居た野次馬は
ただ眺めているだけで悲鳴の一つを上げる事すら出来ない。ひなた
すら、いきなり出た異常な光景に脳を追いつかせる事が出来ていな
かった。

そして、誰かが尻餅を付いた瞬間、もう一度指が鳴らされた。

それが皮切りに、周りの野次馬達はまるでそこには誰もいなかった
のだと認識したかのようにその場から視線を外した。誰も、悲鳴すら
上げない。

「な、なにを……」

いつの間にかひなたの手は震えていた。そして、言葉すら震えてい
た。

反応する事すら許されず、一人の人間が死に、誰もがその事を覚え
ていない。

それはひなたに見せられた幻覚だったのかもしれない。だが、野次
馬の持っていた買い物袋は未だにそこにある。誰も気に留めないそ

れが、先ほどの男が死んだという現実を知らしめている。

「簡単な事さ。あの男を串刺しにして死体を消した後に周りの人間からあの男がここに居た、という記憶を纏めて消しただけだ。君以外から、だが」

その瞬間、ひなたの背中には冷や汗が伝った。

反応なんて出来るわけがない、逃げれる訳がない。ヴァルコラキが殺ろうと思えばひなたは今この瞬間にでも殺されるのだと、嫌にでも分かった。

「……べ、別にボクはここに居る野次馬が全員死んだ所で考えは改めない」

無関係な人が幾ら死のうがひなたにとつては関係ない。人の命よりも自分の命だ。その程度じゃひなたは揺れない。

見知らぬ野次馬程度では、だが。

「いや、違う。君が断れば……あの中にいる君の大切な友人達が同じような目にあう。ただそれだけさ」

これが、決着だった。

例えひなた自身が生き残ってもシャーレイとミラが死んでしまえば生きていく意味なんてないと思ってしまうだろう。片思いなのか両思いなのか分からない恋をしているシャーレイと、友人として、親友として、仲間として共に生きるミラ。彼女達を人質に取られては、どうしようもない。

「例え一撃目を避けられても私自身が殺す。ここで君が領き助けを求めても殺す。君が私の元から離れても殺す。果たして君の友達は急に地面から生えてきた槍を避けきる事が出来るかな？」

もう、ひなたにはどうする事も出来なかった。後は想像が出来る通り、起爆銃を下ろし、言われるがままにヴァルコラキの要求を飲み、その日の夜に荷物を纏めて屋敷まで来いという要求を飲ませ……後には二週間後の結婚式が来るまでドレスを着させられて毎日外を眺めるだけだった。もしもミラがヴァルコラキを倒せるのなら、助けを求めたかもしれないが、それを無理だと言われてしまった以上、ひなたはヴァルコラキの要求を全て飲み、代わりに二人には絶対に手を出さ

せない事を約束させた。

それ故に、ひなたはヴァルコラキの元から離れる事が出来なかった。逃げれば二人が死んでしまうと分かっているから。

「……シャーレイも、ミラも……無事だよね」

そして、時は結婚式後……その日の夜に移る。

特に美味しくもない夕食を食わされ、暫く後にひなたはヴァルコラキの私室へと連れていかれ、ベッドに座って待っているようにと言われた。つまり、夕食を食べてちよつとしたら頂かれるのはひなた、という事なのだろう。全く持って笑えない。

だが、もう諦めた事だ。貞操はシャーレイに色々とアレな事をされて奪われた。性行為の初めてと言える初めては大体シャーレイが奪ってくれたから、後は天井のシミでも数えて死ぬまでのカウントダウンをするだけの単純作業が待っている。ただ、それだけ。例え犯されようと知ったことじゃない。初めてはシャーレイに捧げられた。そして最後にシャーレイとミラに会えた。それだけで大分気が楽だった。

ベッドに座り、ジツと外を見る。ヴァルコラキの私室の窓は大きく、月がよく見えた。それと同時に、月明かりだけを明りにしていたからか、目が慣れて星々がよく見える。天井のシミを数え終わったらオリジナルの星座でも作ってみるか、なんて思ってしまう。きつと、くだらない星座ばかり完成する。

そうして特に緊張感もなく時間を消費し、ヴァルコラキがあまりにも遅いため遺書でも書いておこうか、とヴァルコラキの机の上にある紙を見て考えたところで、扉がノックもなしに開いた。

「待たせたね、私の花嫁」

「待ってねえから死ね」

入ってきたヴァルコラキに対して中指を立てる。最早恒例行事のようだが、それ故に最初はその動作に多少苛ついていたヴァルコラキも完全に無視している。

ヴァルコラキはそのままいけ好かない顔を変えずにひなたの前まで歩いてくると、徐にひなたの手首を掴んでベッドの上にひなたを押

し倒した。それに対してひなたは抵抗をしない。どうせ無駄だと諦めているからだ。そろそろ天井のシミを数える準備でもしようかな、と思っっている位だった。

「それじゃあ、夫婦としての愛を育もうか」

「勝手に育め。そして死ぬ。ボクの愛はシャレーイの物だ」

ぺっと唾を吐き捨てるがヴァルコラキはそれを避ける。そして自分に向かって降ってきた唾は勿論避ける。クソがつ、と悪態突いて天井に焦点を合わせる。

「それじゃあ、昼間は出来なかった愛のベーゼとでもいこうか。結婚初夜に初めてのキスというものも中々いいものだろう?」

「知らねーよクソ野郎」

そんな最初は聞きたびに何か言葉を返してきた毒舌も無視される。押し倒された状態で顎に手をやられ、そのまま少し持ち上げられる。そして、徐々に近づいてくるヴァルコラキの顔。それに嫌悪感を覚え今すぐにでも蹴飛ばしてしまいたくなるが、股の間に足をやられ、スカートを抑えられているせいで足を動かすことが出来ない。いよいよ年貢の納め時か、と思いきっさと天井のシミを数え始める。

どうせなら、男なんか唇を奪われなくなかった。そんな気持ちを抱えながら徐々に零距离へと近づいてくる唇から無意識下で逃げるように顔を動かす――

「やらせるかあああああああああああああつ!!」

物凄い音を立てて割れた窓にビツクリし、そっちへ頭を動かした。

「ふあつ!!」

ひなたが物凄い間抜けな声を発しながら窓を見る。窓は外側から完全に破られ、かなり大きな穴が生まれてしまっている。ヴァルコラキも予想外だったのか、押し倒していたひなたから手を放して一旦立ち上がりそっちを見た。

「いたたた……ひなたちゃん私の物! だから、絶対に渡さない!!」

キスなんて持っただけだ!!」

立ち上がりながら、そう叫ぶ人物を見てひなたは思わず叫んでし

まった。

「シャーレイい!!？」

「……迎えに来たよ、ひなたちゃん」

窓を割り突入してきたのは、力を持たないはずのひなたの最愛の少女だった。

第五十七魔弾

「迎えに来たよ、ひなたちゃん」

窓を破り突入してきたシャーレイは手に握っていたロープを手放し、足のホルスターに着けた拳銃を抜いてそうひなたに声をかけた。

予想外の来訪者。ひなたはそれに対して開いた口が閉じない状態だった。それもその筈、もう会えないと思った最愛の少女がまさか武装して窓を蹴破って突入してくるだなんて、思ってもいなかったからだ。かなりドヤ顔をして立っているが、突入時に切ったのであろう、腕やら足やらから流れている血だったり刺さったままの大きなガラス片があつたりと色々と台無しな感じは否めない。

「……これはこれは。望まない客が来たものだ」

ヴァルコラキは如何にも参った、といった感じの表情と仕草でシャーレイを見た。その視線には威圧やら殺意やら、並の人間ではその場で失神してしまいそうな程の圧力があつたが、シャーレイはそれを受けても倒れない。

既に覚悟を決めている。絶対にひなたを取り戻すまで、負けてなるものかと。どんな事があるろうが、意識を途切れさせないと。だから、今すぐにも失神してしまいそうな圧を受けながらもシャーレイは口を開く。

「客として来たつもりはないからね。ひなたちゃんを返してもらいに来た」

「二人でか？ ナメられた物だ」

「二人じゃない」

一人な訳がない。こんなミッションに一人で挑むわけがない。

その言葉を皮切りに、シャーレイが豪快に蹴り割った窓からもう一人の少女が入ってくる。

「ミラ……」

「……お待たせ」

片手に杖を携えた隻脚の少女、ミラ。彼女があまり音を立てずに窓から中に侵入してきた。その身のこなしや、隻脚でありながらも杖を

使い完全に衝撃を殺して着地をしたり、その後の一切隙のない抜刀からの構えにひなたは改めてミラの技量の高さを認識する。

恐らく、彼女たちはこの部屋の真上の屋根にロープを固定して壁を蹴りつつ徐々に降りてきて、勢いのある程度付けてから壁を蹴り、ロープで高さ調整をしてから窓を蹴り割って中に侵入したのだろう。今も部屋の中にあるロープがそれを証明している。何処かの特殊工部隊かよ、とひなたは笑ってしまったが、面白くない顔をしているのはヴァルコラキだ。一度ならず二度までも邪魔されたという事実は、真祖という生き物の何かプライドのような物に触れてしまったらしい。

「……小娘共が。死にに来たか」

「……死ぬのはお前だ」

「吠える物だ、人間風情が」

「そうやって大物感出すとすつごく小物っぽいけどね」

「……ほう？ この私を小物と言ったか」

「女の子を拉致って結婚させて犯す男が小物じゃなくて大物とでも？」

ただでさえ苛ついているヴァルコラキをシャーレイとミラが煽る。それに比例して顔を面白いくらいに動かすヴァルコラキ。もう小娘二人に煽られて苛ついている時点で小物臭しかしないという事実にはヴァルコラキは気付いていない。

その間にミラはこの部屋の内装やら広さやらを確かめる。

広さは、かなりある。ベッドと机、それから本棚しかないこの部屋はまるで貴族の私室かと思える程広く、ミラが存分に戦うには少し広さが足りない物の、十分に戦える位には広かった。家具に関しては壊したり足場に来るため場所やら大きさは予め覚えておく。

こうして突入した以上、戦闘は避けられない。ミラが前衛で、シャーレイが後衛。しかもミラはシャーレイが狙われないように常にシャーレイの位置やら何やらに気を付けて戦わなければならない。正直に言えばかなりキツイ戦いだが、やらなければもうチャンスは回ってこない。二人はそれを再認識し、改めて武器を構える。

「……いいだろう。ならば望み通り殺してくれる」

ヴァルコラキのガウンのような寝間着が紅色の魔力に包まれ姿を変え、まるで何処かの貴族のような派手な服へと変わる。完全に臨戦態勢だと、ヴァルコラキの全身からあふれるような魔力がそれを示していた。

シャーレイとミラもそれを見て気を引き締めなおし、ヴァルコラキとの対決に備える。

が、それに異議を投げたのはひなただった。

「ま、待て！ 二人には手を出さないって約束だろ!!？」

そう、ひなたは二人に手を出さないという条件でヴァルコラキに嫁いだのだ。だと言うのに、それを破られたら本当にひなたがシャーレイの助けを拒んでまで身を捧げた意味がなくなってしまう。

「知らんな」

「そ、んな……ふざけるな!!」

「知らんと言ったが？ 元々私が君の条件を呑む義理なんて無いからな」

「ぐ、うう……」

言い返そうとしても、どうせ全部理不尽な言葉で返されてしまう。だから、言葉に詰まってしまおう。だが、このままじゃシャーレイとミラが殺されてしまう。

しかし、ひなたに力はない。あるのは単体ではほぼ無意味な魔弾を作るだけの魔力と才能。これをどうしたって二人の助けになんてなりやしない。だと言うのに。ミラ自身が戦っても勝つのは無理だと言ったのに、大丈夫だと言わんばかりの自身の自身に溢れた視線を向けてくる。

何で、どうしても聞きたいがその答えを返す余裕は二人にはきつと無い。

「じ、地面！ 地面に注意して!! 槍が突き出してくるから!!」

「……大丈夫。分かってるから」

「任せて。後は、こっちで何とかするから」

じゃあせめて、とあの回避不可能とも思える攻撃に関して注意する

が二人は顔色一つ変えない。なんで、どうしてと疑問が頭の中をグルグルと回っていく。ヴァルコラキは余計な事を、と声を漏らしているから効果的ではあったのだと思うが、真祖の能力は底が知れない。

ブラッドフォードに下剋上を挑むのだからそこそこの実力があるのであろうヴァルコラキだ。かつてひなたが受けたコンボをそのままそっくり二人に浴びせる可能性だってある。それをひなたは見ているしかない。いや、起爆銃があつたとしても、真祖を相手に戦うという選択肢が出てくる物なのか、とすら疑問を持つてしまう。それ位に、今自分の近くで魔力を垂れ流すヴァルコラキの力は未知数であり、強大だった。

「……ヒナタが嫁いだ理由も分かつたし、遠慮なく戦える」

「予想通りだったね。ひなたちゃんを脅して嫁がせるって」

「……多分、眷属と自分の血を使ったデモンストレーションも合ってる」

「案外小物で安心してるよ」

「貴様等……ッ！」

えっ、デモンストレーション？ とひなたが頭の中で疑問を持つ。が、その答えをシャーレイとミラは口にしないまま武器を構えつつ移動する。

ミラがシャーレイの前に立ち、シャーレイはミラの斜め後ろへ。ヴァルコラキへの射線を通しつつ、ミラに前衛を張ってもらおう即席のフォーメーション。だが、二人しか居ないが故にこうしたフォーメーションになるのは必然とも言えた。

が、方や杖をついた状態の剣士。方や即席の銃使い。戦闘力的には不安しか生まれないメンツだった。それ故にヴァルコラキはミラの相手は多少手こずるかもしれないが、シャーレイに関してはただの雑魚。ミラに注意さえ払っておけば相手に勝ち目は一切ないと把握し、理解していた。

数百年以上生きてきた真祖故の観察眼。例え戦闘を好んでいなかったとしても戦った数はシャーレイとミラの遙か上に行く。そこから得た戦闘経験は二人の倍以上であり、ミラとシャーレイには万が

一程度にしか勝率は残されていなかった。

だと言うのに、剣を下ろさない。銃を仕舞わない。ひなたを助けるという確固たる意志の元、各々の得物は敵を捉えている。対してヴァルコラキは不敵に笑って二人を見ている。ヴァルコラキからしたら二十にも満たない小娘如きに苦戦するなんて思っただけなら居ないのだから。

「……疾ッ！」

そして、ミラが動いた。

鋭く息を吐き自身に気合を入れつつ杖と己の足を使いその場から飛び出し目にも止まらぬ速さで風を切りヴァルコラキへ向かって斬りかかる。が、ヴァルコラキはそれに反応する。

一瞬にして展開されたのは紅色の障壁。ひなたの使うシールドなんてペラッペラの紙程度の強度しかないと考える程強力な障壁。そこにミラの剣が激突した瞬間、紅色の魔力が暴風のように吹き荒れ、それに対抗するように青色の魔力が吹き荒れる。魔力には魔力を。そんな頭の悪いとしか言いようがない対抗によってミラは真祖の作り出した障壁と対抗している。

そんなミラの力を受け、ヴァルコラキの表情が軽く歪む。が、それだけ。障壁が一層強く紅に光ると、ミラの体が押し出され、そのまま弾き飛ばされた。直後、その障壁に銃声と共に弾丸が突き刺さる。

「硬ッ……」

「やっぱ効かないよねえ……」

ミラが弾き飛ばされた瞬間の隙。それを消すための弾丸だったが、やはり当たらない。だが、一応視線をシャーレイの方へ向ける事が出来たため、ミラは何とかかんとか着地をする事が出来た。

今のミラではこうした一撃離脱戦法しか取ることが出来ない。細かい位置調整と追撃、連撃はともじやないが素早く行うことが出来ない。そのため、一撃離脱しか出来ないのだ。

だが、今は耐える時だ。剣を構えて杖でバランスを取る。その最中、後ろにいるシャーレイにミラは目配せを一瞬し、シャーレイはそれに頷く。直後、ミラが動いた。

再び鋭く息を吐きミラが地面を蹴って高速でヴァルコラキへと肉薄する。そしてヴァルコラキとの距離が剣の間合いに入った瞬間、杖から手を放し腕から離れないようにしているベルトが辛うじて杖を手から離さず、杖は重力に従い地面へとその先端を下す。そして、ミラは両手で剣を握ると、そのまま力の限り振り下ろした。

「ハアアッ!!」

叫びながら剣を振り下ろす。先ほどの片手よりも体重と魔力を乗せた先ほどよりも更に重い全力の一撃がヴァルコラキの障壁と激突する。それだけで先ほどよりもかなり激しい魔力と魔力がぶつかった事による衝撃と風圧が部屋を荒れ狂う。

そんな人類トップクラスの少女と吸血鬼の頂点である真祖の力と力のぶつかり合いが繰り広げられる部屋の中、ひなたはこっそりと近寄ってきていたらしいシャーレイに手を取られた。ちなみに、ガラス片は既に抜かれており傷はミラから受け取っていたらしい秘薬を少しだけ飲むことで塞がっていた。

「こっちー!」

「う、うん……」

その言葉にひなたは拒絶の意を示そうか一瞬迷ったが、既にヴァルコラキの間で交わされていた約束は無碍にされている。ならば、シャーレイの言葉に従ってもどっちみち結末は変わらないと考え、その言葉に対して頷いた。その直後、ガラスのような物が割れる音が響いた。

ベッドの上を移動してシャーレイが入ってきた窓の方へと移動しながらその音がした方へ視線をやる。そこでは、つい先程剣を障壁へとぶち込んだミラが、その障壁を剣で砕き、追撃をかけている所だった。ヴァルコラキはその攻撃の威力が完全に予想外だったのであろう、かなり間抜けな顔を晒していた。

直後、その顔から股下までミラの剣がヴァルコラキを切り裂いた。
「ぐおおお!!?」

その攻撃を受け声を漏らすヴァルコラキ。夥しいまでの量の血が地面に落ちていく。

頭から股下まで真つ二つ。そんな人間なら確実に即死する攻撃を受けてなお、ヴァルコラキは声を漏らしていた。つまり、ヴァルコラキはその攻撃を受けても死んでいない。

ミラはすぐさま杖を握り後ろへ向かって飛び、着地をしてバランスを取ってから再び剣を構える。その後ろにようやくシャーレイとひなたも隠れるように駆け付けた。

「少々侮っていたみたいだ……まさか障壁を抜かれるとはな」

「……化け物」

「完璧な生命体と言ってもらおうか。私は人間のような脆弱な存在では無いのでな」

ヴァルコラキはやはりとでも言うべきか、生きていた。体を左右に分割されて尚且つ、意識を保ちながらも生きていた。ミラは噂程度でしか真祖を含めた吸血鬼の回復力を聞いたことが無かったが、こうして目の当たりにしてみると分かる。相手は正真正銘の化け物であり、今までのような感じで戦っているのは、絶対に何かしらのしっぺ返しを食らってしまうと。

これを不死殺し無しで殺したという人間の噂は一応聞いたことはあるが、一体どうやって倒したのかと胸倉掴んで問いただしたい気分になってくる。真つ二つにしても死なない相手をどうやって殺したのかが本当に分からない。

ミラは剣で駄目なら、と考え剣の切っ先をヴァルコラキへと向ける。

「……海より来たれ災厄の力。我が眼前の敵をその力をもって滅せよ」

「魔法か……猪口才な」

ミラが口にしたのは魔法を発動するためのキーとなる詠唱だった。それを聞いた瞬間、ヴァルコラキは鬱陶しそうにまずは己の体を再生させつつ付けてから手のひらをミラの方へと向けた。その間にミラの詠唱は完成し、魔法の発動準備が完了する。

魔力が剣を流れていき、杖の役割を持った剣が青色の魔力を纏い淡く光る。そして、それが一層強く光った瞬間、ミラの目の前の床から

夥しい量の水が出現し、目の前に水の壁を作る。

「タイダル・ウェイブ」

そして、ミラが魔法名を口にした瞬間、その水の壁は一斉にヴァルコラキの元へと殺到し、ただの水が質量の暴力と化す。ひなたが相手なら確実に防ぎようのない魔法。恐らく、名前の通り魔力で水を作り出し、それを津波のように相手に押し付ける魔法なのだろう。

ミラの魔法の適正は、本来は氷ではなく水。氷魔法は水魔法からの派生であるため、ミラは元より水魔法の方が得意なのだ。氷魔法ばかり使っていたのは、直接的な質量を生める分、そちらの方が使い勝手良かったからだ。だが、少量では目晦まし程度にしかならない水もこうして壁を作り波となれば立派な暴力となる。

「甘いー」

だが、その暴力は真祖にとっては兇戯に等しい。腕を振るい単純な魔力の暴力によってミラの作り出した津波は一瞬にして押し返され、波としての形を保てなくなりその場で弾け消えていった。が、その合間から今度はミラが飛び出してくる。

魔法の発動とほぼ同時に踏み込んだミラが障壁を作らせる間もなくヴァルコラキへと肉薄する。そして、次の瞬間にはミラは剣をヴァルコラキへ向けて振っていた。しかし、その渾身の一撃は金属の音を鳴らすだけでヴァルコラキの体に届くことは無かった。

「槍……っ」

「完璧な生命体たる私が武器を持たないとも思ったか？」

「……無論、知っていた」

一瞬間を歪めたミラ。その視線の先には真紅の槍を携え嗤うヴァルコラキが居た。

が、相手が近接武器を何も無い場所から生み出し振るう事なんて知らない訳がない。相手の言葉に言葉を返し、片手故に力が出ないため下がりつつ一気に剣を振りぬき、槍の上で刃を滑らせ、刃の切っ先が槍から離れ腕が下へ下がったと同時に牛戸へと飛ぶ。しかし、それを逃す訳がなくヴァルコラキがミラを追う。

それを見て舌打ちをしたミラが己の背中からその後ろの床まで魔

法で氷の台を作成し自分の体を支えさせると杖を手放し両手でヴァルコラキの槍を迎撃する。

真祖としての力を余さず発揮された脚力と腕力による渾身の突き。それをミラは受け流すのが現状困難だと判断し剣の先端部分の腹に手を添え、剣の中心で槍の矛先を受け止める。

が、片足がないミラではそれを受け止めきる事ができず、己を支えるために生み出した氷は一瞬にしてその役割を果たし終え砕け散り、ミラは突進の勢いをそのまま受け後ろへと吹っ飛ぶ。直後、轟音と共にミラの体が壁に埋まり、壁に亀裂が走る。

「ぐう!!」

しかし、その衝撃とダメージを受けてなお、ミラの体には痛みが走るのみで骨まで折れる事はなかった。片足と両手で上手いこと衝撃を分散させた結果ではあったが、それでも背中側からの悲鳴が激しい。恐らく、次同じことをされれば背骨にヒビの一つや二つ入るかもしれない。そんなダメージチェックにも似た思考を一瞬で終え、壁に埋まった状態で剣を構える。

その瞬間にはヴァルコラキが目の前に居た。

「やばっ………」

「遅い脆い弱いイツ!!」

直後、ミラの腹に槍が突き刺さり体と壁を縫い付けられる。

「ぐっふっ!」

「お仕舞だ、人間ツ!!」

「ま、だア!!」

血を吐き、縫い付けられるミラ。そのミラへと向かってヴァルコラキは新たな槍を手のひらから射出するようにして生み出した後にそれを握り、ミラの心臓へ向けて振るう。

それを甘んじて受けるミラではない。腹からの激痛に耐えながら魔力を体内から引っ張り出し即席で魔法を発動させる。剣の先端付近から氷を生み出し、それに刃を付け一気に伸ばし、槍のリーチを一瞬にして超えると半分ほどが氷の刃に覆われた剣を下から上へ、剣を振り上げる事によってヴァルコラキが槍を握っていた右腕を二の腕

から切り飛ばす。

切られた腕はそのままひなた達の方へと吹っ飛んで行ったが、そんな事を気にしている余裕なんてない。ヴァルコラキが舌打ちをしてから血が噴き出す右手を再生させる。噴き出した血が勢いを無くし空中で腕の形を作りそれが肉体を持つことで完全な再生を完了させるという見慣れない光景を見たミラだが、それを見届けていた訳ではない。

振り上げた剣の先端を一旦保持するのを止め折る事によってリーチを調節し、再び先端に刃を持たせてからヴァルコラキの体へと氷の刃を突き刺す。

「射出ー」

その言葉と同時に剣先から伸びていた氷の刃が丸々射出され、ヴァルコラキごとミラの対面の壁へと郵送していく。その間にミラは手を壁に当て、力づくで貼り付けにされて己の体を壁から引きはがす。そして、ミラが腹から飛び出す槍を剣で叩き切った後に己の背中から伸びる槍を掴み、小さく痛みを喘ぎながらも短くなつた槍を引き抜く。

「けっこう、きつい……」

息を切らしながら呟いたミラは地面に手と膝を付きながら片手でポーチから薬を取り出すとそれを服用し容器を投げ捨てる。その数秒後には腹から流れていた血は止まり、皮膚と肉が再生する。だが、槍が腹に刺さるとい痛みはどうにも耐えきれぬ物ではなく、しかも刺された際に内臓を突き破れたらしく、その余韻として傷は誤魔化してあるのに痛みが走って現在進行形で意識が朦朧としかけている。

対してヴァルコラキは反対側の壁まで吹き飛ばされミラと同じように壁に縫い付けられたのにも関わらずすぐに壁から脱出し己の体から飛び出す氷の刃を掴んで引き抜いた。

「片足の人間にしてはよくやる。誉めてやろう」

「……べっ」

満身創痍、と言うほどではないが大幅に体力を削られたミラとダメージが入っているのか入っていないのかよく分からないヴァルコ

ラキ。ミラは床に血の混ざった唾を吐きだし、なんとか杖を手にして立ち上がる。

人間対真祖という戦いを考えれば、この程度は簡単に予想ができる。傷を自力で全て治癒する術がなく痛みに弱い人間と、傷を自力で、瞬時に何の対価も無く再生できる真祖。こうして一進一退の戦いをしていけばどちらが先にダウンするかなんて分かりきっている事だ。

技量で人間が押せたとしても真祖は己の力でゴリ押ししていけば何時かは人間に傷を負わす事ができる。少しでも傷が付けば動きが鈍る人間はそれから何度もゴリ押しされて沈む。魔法での戦いを挑もうと、真祖の魔力は桁外れ。しかも真祖は自力で回復する。どうしても人間が後手に回ってしまう。

圧倒的な種族の性能の差。これがどうしてもヴァルコラキとミラの壁となってしまう。

「だが、これはどうかな？」

ミラが立ち上がったと同時にヴァルコラキが再生させた腕で指を鳴らした。それを聞いた瞬間、ミラはその場で身を振った。

ミラが身を振ると同時にミラの目の前から大量の槍が床から生えて襲ってくる。ミラはそれを身を振り即死、または重症に繋がる槍だけを避け、掠り傷程度の槍はその身で受ける。

一瞬にして全身から血を流すミラ。しかし、その全てが掠り傷。全ての槍をどうにかしたと判断した瞬間、ミラは剣を持った腕を振り目の前の槍を全て剣から出した魔力の爆風で折り飛ばしヴァルコラキまでの進路を作り出す。しかし、直後に指が鳴らされる。それを聞いたミラは顔を顰めながらもその場で上へ向かって跳躍する。

跳躍とほぼ同時。真下からは槍が生え、ミラを串刺しにせんとする。が、ミラが天井に手を付き、指を天井にめり込ませ下半身を筋力だけで持ち上げ天井に貼り付くと槍を伸ばすのがそこで限界だったのか、ミラから三十センチ程離れた場所で槍が停止する。

それを肉眼で確認した直後、ミラは天井から手を放し落ちながら目の前の槍を剣で叩き折り安全に腕で着地。そして、足が地面に付いた直

後、腕と足の力で一気に体をヴァルコラキの方へと射出する。

この間、十秒未満。ひなたが危ないと口にする前にミラは全ての行動を終わらせ攻撃に移っていた。その動きは、足を失っているのにも関わらずひなたの数倍速く、数倍力強かった。だが、その行動全てをヴァルコラキは予想していた。

「甘い」

——そう呟き、ヴァルコラキは指を鳴らした。

その音が鳴り響いた直後、ヴァルコラキの体のあちこちが起伏し、ミラが何が起こっているのかを判断しきる前に飛び出したミラへ向かってヴァルコラキの体から槍が生え、一直線に向かってきているミラを迎撃していた。

ミラがそれに気づいた時には、剣山のような槍が目の前を面制圧し、死を悟らせていた。

片足しかない現状で、この状態から後ろへ跳ね退く事は出来ない。剣を振ろうにも間に合わない。ミラの直感がそれを知らせ、本能が死ぬしかないと呼き散らしている。

言葉一つ放つ事も出来ず、なんとか足を動かしているが間に合う気がしない。ミラの世界が完全にスローモーションになり、槍が迫ってくる。目前まで迫ってくる死。それをどうにかしようと頭を働かせ——

「油断すんなったろうが、馬鹿娘」

声が聞こえた。

その直後にもう顔に突き刺さろうとしていた槍は急激に離れていき、ミラの体が逆再生をするの如く後ろへと吹っ飛んでいく。

吹っ飛んでいく最中、見知った男の後姿が見えて、それが見えた時には、ミラの目の前にあった槍が全てその男がミラの目にも止まらない速さで振るった剣によって叩き折られていた。

「何ッ……?」

「よお、久しぶりだなヴァルコラキ。テメエの命、取りに来たぜ」

「……パパ。いつの間に」

「はあ!? パパって……はあ!!?」

ヴァルコラキが驚愕し、男がヴァルコラキに向かってそう呟き、ミラがその人物の大雑把な詳細を口にし、ひなたが一度だけ見たことがある男の詳細を聞いて仰天する。

「そっちの嬢ちゃん、後は俺達に任せな。あん時の詫びもある。このクソヴァンプを殺して、助けてやる」

「貴、様……何者だッ！」

剣を構えひなたに向かって声をかける男。そして、直後にヴァルコラキからかけられた問いに男は答えた。

「俺の名は、イヴァン・マイヤーズ。ヴァルコラキ、テメエに殺されたマイ・B・マイヤーズの夫だ。思い出したか？」

彼こそが、ミラが救援を頼んだ男。彼女の父でありヴァルコラキを憎む者、イヴァンだった。

第五十八魔弾

何故ミラの父、イヴァンがここに居るのか。どうやって片道十日近くの距離をたった四日でこの街に着くことが出来たのか。その答えはたった一つ。「急いだから」という単純にして大雑把で意味の分からない言葉だった。

ひなたの誘拐に失敗し俯いて泣いていた二人に声をかけた人物。あれこそがイヴァン本人だったのだ。

「……パパ？」

「えっ!？」

「よう、久しぶりだな」

二人が間拔けな言葉を漏らした直後にミラが呟いた言葉によって、大量の荷物に囲まれて泣きべそかいていた少女二人にいきなり話しかけた不審者の素性は明らかになった。剣を携え、何処か飄々とした感じの雰囲気纏うイヴァンはそのままミラの隣に何の言葉もなく座ると、ミラの足を見た。

それを見てイヴァンは手紙で足が無くなったことを知っていたとは言え、一人娘の足が結婚前に無くなってしまった事にショックを受けたが、それまでの経緯を知っていたため最後まで面倒を見なかった自分の責任だと思い特に言及するのは止め、ミラを挟んだ場所で座っている泣きじやくっていた少女、シャーレイを覗き込むと声をかけた。

「君がシャーレイか？ 娘が世話になってるな」

「へ？ あ、いえ、そんな……」

そんな事を言われたのは初めてだった上にさつきまで泣いていたから困惑して適切な声が出てこないシャーレイ。そんな様子を見てイヴァンは小さく笑った後、ミラの頭に手を置いて無遠慮に撫で始めた。

ミラは撫でられて満更でもない顔をした……訳ではなく、予想以上に力の強いそれを受けて頭を撫でられるだけではなくシエイクされすぐにその手を叩き落とした。

「おつと……まあ、こんな感じの娘だが仲良くしてやってくれ。ちよつと口下手が過ぎるけどな」

「そ、それは……あはは」

その言葉に対する否定材料を持っていなかったシャーレイは小さく笑いながら頬を掻くだけだった。

まさか夜中は結構口下手じゃなくなってるとかそんな事を親の前で言う訳にもいかなかったためこうして笑って誤魔化そうとしたが、その作戦は成功だったようだ。イヴァンはその笑いを受けてああ、まだ口下手は治っていないんだなと察するとシャーレイが持っている煙草に目をやった。

それを見て、イヴァンは四日前に自らの元へ届いた手紙の内容を思い出した。

一緒に住んでいるらしいブラッドフォードの眷属の子がヴァルコラキの標的にされた。助けてほしいと。確か、その少女は煙草を吸っていたとも書かれていた。それらの情報から、今こうして泣きながら火の付いた煙草を手にとっていたシャーレイと、それを慰めようとして自分も泣きそうになっていたミラという現場も合わせ、二人はヴァルコラキの手からブラッドフォードの眷属の子を助けようとして失敗してしまったのだらうと察した。

「ミラ、現状を教えてください」

「……ん」

イヴァンの言葉にミラは答え、すぐに現状の説明を行った。

ひなたが二週間前、突然ヴァルコラキに嫁いだこと。そのひなたを取り戻すためについ先ほど行われた結婚式に突入してひなたの奪還作戦を開始したがそれには失敗したとのこと。そして、彼女はヴァルコラキの魅了を受けておらず理性を保ったままであるということ。

その他にも様々な状況をイヴァンへと説明すると、イヴァンは一つ領いて考え込み始めた。そんなイヴァンにミラは一つ質問をする事にした。

「……パパ、どうしてここに？ 早すぎない？」

「ん？ そんなモン、急いできたからだ。ちよつくら全力疾走を朝昼

晩無休でやってな」

「ええ……」

その言葉を聞いてミラは軽く引いた。

朝昼晩完全無休で全力疾走してたった四日。馬車ですら馬の交代等で朝昼晩ずつと移動しても十日かかる距離をたったの四日。明らかに人外としか思えなかったが、よく考えれば足があるミラでも同じことをしたら普通にそれくらいの時間で十日の距離を移動できると気付いたためそれからは何も言わなかった。

それに、よく考えれば自分よりも深くヴァルコラキを憎んでいる父の事だからそれくらいは事は軽くやってのけると考えておくべきだった。自分の父の事を予測できなかったことを何となく悔やんでいると、イヴアンが考え込んでいたため閉ざしたままだった口を開いた。

「よし、ミラ。お前ちよつと夜中にヴァルコラキの部屋に突撃して気をひきつける」

「キレそう」

そして出てきた無理無茶無謀の三つの属性が漏れなく付いてきそうな作戦を聞いて自然とミラはキレそうと口にした。キレそうと言ったが実際は結構キレている。

この期に及んで自分に無駄死にしてこいと？ そんな雰囲気ミラから漂っていた。

「い、いや、何も無駄死にしてこいって訳じゃなくてな？」

と、イヴアンが先ほどの作戦の詳細を説明しようと口を開いた。

「二応、お前の話から推測すると、タイムリミットは今日の夜なんだろう？ だから夜に決戦を仕掛けるのは当たり前なんだが……奴の従者ってのは俺達みたいに脳のリミッターは全部外してる訳だ。替えなんて普通に効くからな。だから、俺は正面から潜入して従者共を殺して来る。ミラにはその間の時間稼ぎをしてもらいたい訳だ」

その言葉を聞いてシャーレイは目を見開いた。

あの結婚式の場にいた従者達は全員がミラみたいに脳のリミッターを外した状態で戦闘が出来る。と、言うことはシャーレイやひな

たでは何もできずに囲まれて殺される可能性があったという事だ。

シャーレイにとつてはヴァルコラキにさえ見つからなければ何とかなると思っていた作戦だったが、その実は誰かに見られて襲われたらその場でデッドエンドというとても危険極まりない作戦だった。ミラもそれは予想外だったのか、顔を青くしている。流星に囲まれていたら腕の一本や二本は覚悟しなければならなかったかもしれない。そして、ヴァルコラキとの決戦の際にそれ等が襲ってきたらと考えると、イヴァンと共に戦ったとしてももしかしたら全滅する可能性が残されてしまう。

「どうだ？」

確実に危険なのはミラの方だ。従者達がどれだけ集まろうとヴァルコラキには届かない。そのためヴァルコラキの相手が一番危険だが、潜入し素早く従者全員を暗殺して援護に駆けつけるといふ真似はミラには出来ない。それに、ヴァルコラキを相手にする人間は確実に寝室へとダイナミック入室をかます事になるためその場にいるひなたを安心させる事が出来る人間が一番だ。

そうなれば、適任はミラ一人。そうなってしまう。

「……引き受けた。けど、持たせて五分」

「十分だ。けど油断はするなよ」

そう考えた所でミラは囁くとも言える役割を引き受けた。

「……けど、シャーレイも来てほしい」

「え？ 私も？」

だが、その後にミラは言葉を付け加えた。

戦えないシャーレイが戦場に赴く理由とこのを知りたかったが、ミラはすぐにその理由を話した。

「……もしかしたら余波でひなたが死ぬ。だから保護を」

「あー、そういうこと？ なら引き受けるね」

人外の領域にどっぷり浸かっているミラと真祖の真剣勝負。そこでひなたがウロウロしていたら間違つて……なんていう不幸な事故があるかもしれない。だから、シャーレイはこそこそとひなたの回収を行う係として任命された。

これにはシャーレイにも危険が伴うが、壁の四隅で待機していればその内終わるだろうと思っっているし、ひなたを安心させるには何やかんやで二人一緒の方がいいだろうとも思っただため断る理由は無かった。

「しっかし……してやられたな、ミラ。みすみすヴァルコラキを逃すなんて」

「……それは本当にしてやられた。けどどうしてひなたがついて行ったのか……相談してくれなかった理由が分からない」

「そんなモン、従者の一人を見せしめで殺したんだろ。地面から槍を生やして。んで、喋ったらお前らを殺すって脅した。そんだけだ」

「……それ避けれない」

「槍はヴァルコラキの血からしか生まれぬから指パツチンと血の位置で把握できる」

「……なら大丈夫」

そして、完全についてひなたが脅された時の種が明らかになった。

この推測は完全に正解であり、ひなたが脅されたときに見ていた野次馬はその全員がヴァルコラキの従者であり、ヴァルコラキが予め血を一滴垂らしておいた場所に従者を立たせ、その従者をまるで自由自在に槍を生み出せるとも言わんばかりに唐突に槍を出して殺す。

やった事はそれだけだったが、それでもひなたは種なんて分かる筈がなく、まんまと乗せられてしまった。これがミラが地面から生えてきた槍を見切ったトリックであり、ひなたが脅された一連をデモンストレーションと言った理由だった。

これをスラスラと言えるのだから、イヴァンは伊達にヴァルコラキを長年追ってきた訳ではなかった。

そうして作戦が決まり、ぶっつけ本番の作戦が行われる事となった。

本来はミラから突入するつもりだったが、キスされかけたひなたを見てシャーレイが我慢できずに突入するという珍事はあったものの、ちゃんとミラは時間稼ぎを済ませ、イヴァンは従者を全員殺して間に

合った。ちなみに普通にドアから入ってきた。

「よくやったな、ミラ。まだ立てるか？」

「……当然」

口を袖で拭きながらミラは立ち上がった。腹を貫かれた痛みは未だに襲ってくるが、無視できる程度の痛みだ。イヴァンはどうして血を吐くような傷を受けたのかが気になったが、現状それは最も優先度の低い物だと理解しているため、ミラの前で剣を片手にヴァルコラキと対峙するだけだった。

イヴァンの予想では、ミラは秘薬を一つ使ったのだろう。着ている服のあちこちが裂けていたりしているためそのリジエネ効果でかすり傷程度の傷はすぐさま治癒させたというのも分かる。そのため、ミラの回復手段はもう残り少ないのがハッキリと分かった。

ミラに渡した秘薬は一つ。そして元々持っていたらしい秘薬が二つ。対してイヴァンの秘薬は一つ。娘の安全をと思いついたが、少しだけ後悔している。もと持って来たら少しは余裕を持てたのに、と。昔、ヴァルコラキの前に立ったことはあったが、その時と変わらない圧力をヴァルコラキは持っている。

が、それを単騎で倒す事を目的に自らを十八年近く鍛えてきたイヴァンは、それを超えている。伊達に人類トップクラスとして名を馳せていた訳ではない。

「……ふん。塵芥が一つ増えた程度か」

「その塵芥が、テメエを殺す」

「やってみろ、人間が！」

「殺つてやるよ、真祖サマア！」

その瞬間、イヴァンの立っていた床が砕けた。

それがイヴァンがただ踏み込みヴァルコラキへと肉薄しただけと気づいたのはイヴァンの体がヴァルコラキの真ん前にあっただけから。それにはヴァルコラキすら気付かなかったように踏み込み、肉薄してから僅か一秒もかからずにイヴァンはその手に持っていた愛剣を、この男を殺すために手に入れた切り札でもある不死殺しを振るう。

その不死殺しがヴァルコラキが予め張っていた障壁へと叩き付け

られる。

直後、赤い魔力の暴風だけが吹き荒れる。が、それも僅か一瞬。叩き付けられたコンマ一秒後には障壁は叩き壊され、その刃はヴァルコラキへと届かんとしていた。それをヴァルコラキは一瞬、片手で召喚した槍で防ぎ、叩き折られる一瞬の間に己の血から槍を生やし、イヴァンを攻撃する。

それに気づいたイヴァンは自らに切っ先が届く前に半身をずらして回避、真横を通り過ぎた槍を剣で叩き折り、再びヴァルコラキを攻撃しようとするが、ヴァルコラキが先に魔力の本流を叩き付けイヴァンを吹き飛ばし距離をとる。

十秒にも満たない攻防戦。その中でヴァルコラキは冷や汗をかいた。

この男は、ヤバい。明らかに人間というカテゴリを超えている。

「チツ……クソが」

「……貴様、どうやって障壁を」

「んなモン、腕力一つだ」

ミラは障壁を叩き割る際に己の魔力を剣に乗せて単純な攻撃力をブーストしていた。しかし、イヴァンは違う。単純に己の腕力だけで魔力で出来た障壁を叩き割った。

技量も力も、全盛期のミラを完全に凌ぐほどの強さ。そんな父の本気にミラすらポカンとしている。まさか自分が障壁と叩き割るまでに一秒以上かかった障壁を紙を斬るみたいに一瞬で叩き割るなんて思いもしなかったからだ。父はヴァルコラキ相手でも勝てるかもしれない腕を持っていると思っただけなのに、その力はミラの想像以上だった。

ミラですら父の本気は数える程度しか見ていない。本気を出す必要が無いからだ。前に見たのが数年前だったが、明らかにその時とはレベルが違う。

だが、一応イヴァンの父はこれでも人類最強ではない。人類最強は別に居り、イヴァンはその次席とも言えるトップクラスの中に名を連ねる。一応、ミラもそこに名を連ねていたが、明らかにイヴァンと

は差があり過ぎる。

「……人外が」

「あんがとよ。お前のお陰だぜ？ 人外になろうって決めたのはよ」
「ならばその力を抱いたまま死ぬ！」

「戦闘なんざ数える程度しかしてないボンボンに負けるわきゃねえだ
ろうがよ!!」

ヴァルコラキの言葉の直後に目の前に紅色の魔法陣が作り出され、
そこから深紅の魔力のビームが放たれる。

ひなたのジエノサイドバスターと似たような魔法だった。が、それを
イヴァンは一刀の元切り伏せ、一瞬にして再びヴァルコラキの元へ
と肉薄する。が、今度は瞬時に作り出した魔法陣が同じようにビーム
を放つ。それをイヴァンは再び斬り捨てるが、三度目のビームを撃つ
ための魔法陣がイヴァンの目の前にあった。

やべっ、と声を漏らすイヴァン。そして魔法陣が煌いた直後、イ
ヴァンは首根っこを何か掴まれて真横に吹き飛ばされた。

「……油断大敵」

それを行ったのはミラだった。横に吹き飛んで壁に当たるイヴァ
ンと改めて剣を構えヴァルコラキに斬りかかろうとするミラ。だが、
一瞬イヴァンの方へと目を離していた隙に目の前に魔法陣が作成さ
れていた。

「……うっそん」

ヴァルコラキが嗤う。流石のミラとてあのビームを受けて無事で
居られる確信はない。サーツと顔の血が失せていくのを感じる。そ
して魔法陣からビームが放たれようとしたその瞬間。

「ジエノサイドブレイカー」

背後から放たれた紅の砲撃がヴァルコラキの魔法陣と、それを掲げ
ていた腕を消滅させた。

「チイツ!!」

「ボクを忘れてもらっちゃ困るんだけど？」

ヴァルコラキが一旦ミラから距離を取り血で己の腕を再構成する。
そしてミラは後ろから聞こえてきた声を聞いてその場で振り向いた。

「きつきのクソ不味い飯代って事で一つね」

後ろ、シャーレイの前に立つひなたが、骨らしき物を啜えた状態で不敵に笑っていた。その瞳は闇の中でも光って見えるような明るい紅に染まっており、体から漏れている魔力も銀ではなく紅に染まっていた。そして、彼女が着ている服もほとんどが血に濡れていた。

ジェノサイドブレイカー。本来放つことが出来ないそれを放った。それはつまり、ひなたは人肉を食ったという事だった。ミラも話程度には聞いていたのでいきなり魔力が増え魔法の威力も上がったひなたに対して疑問こそ持たなかったが、その人肉は何処から確保してきたのが気になった。が、今ひなたが啜えている骨の出所はひなたの言葉から大体察した。

ヴァルコラキの肉を食った。腕一本分だが、それでもひなたが力を取り戻すには事足りたのだろう。使った分の魔弾を補充してからひなたは模造品の左手を外し、何時もの隻腕の状態にしてからシャーレイから受け取ったらしい右手の起爆銃を構えた。

「援護するよ、二人とも。魔弾使いの本職は、フルバックだからね」

「……助かる、ヒナタ」

「あいててて……まあ、嬢ちゃんはなるべく自衛に徹しててくれ。援護は最低限でいい」

「了解。さて、クソみたいな旦那様へのDVの時間だ」

「この、人間どもがア……ッ!!」

イヴァン、ミラ、ひなた対ヴァルコラキ。この場の全員の運命を決める戦いが改めて火蓋を切られた。

第五十九魔弾

普段、ひなたは一人で戦っているため接近戦を仕掛ける事が大半だが、前衛を得たなら彼女の役割は自然と決まってくる。それは前衛からの攻撃が来ない場所から一方的に援護を仕掛けるという後衛、しかも絶対に前衛と何があっても立ち位置を交換しない援護専門のポジションとなる事だ。

魔弾使いがたった一人で戦うこと自体本来は間違っている事だったため、これが本来の立ち回りとも言える。故に、ひなたは普段以上に戦いやすく、また後衛を得て戦った経験が少ないミラを一撃離脱主体の後衛に比較的近いポジションに置きひなたの護衛兼切り込みをするポジションとし、前に出るしか出来ないイヴァンがヴァルコラキとの接近戦を挑むという戦い方に三人は瞬時に切り替えた。

この世界に来てたった一年しか経っていないひなただが、最初に学んだ立ち回りを十全に果たせない訳がなく、ヴァルコラキに対して嫌がらせを行っていた。

「ジェノサイドバスター・マルチレイド」

魔弾を一つ噛み砕き暴走させた魔力を一点に集めそれを分裂させたビームを放つ。何十にも分裂したジェノサイドバスターはヴァルコラキを様々な方向から襲う。が、パワーアップして人体程度なら消し飛ばせるようになっていたとは言え、所詮はジェノサイドバスターを分裂させただけの小手先の技。ヴァルコラキが発生させた障壁が何十ものジェノサイドバスターを防ぎ消滅させる。

が、それを張ることに集中したヴァルコラキにミラが突貫する。一瞬にしてヴァルコラキへと肉薄したミラが障壁に剣を叩き付け、魔力で威力を補強して障壁を叩き割る。が、叩き割られた時にはヴァルコラキはビームを放つための魔法陣を作成しており、それをミラの眼前へと置いた。が、それはミラの後ろから放たれた魔弾がミラの頭を撃つ事によって無理矢理転ばせ難を凌がせる。

「わりー」

「……許さん」

勿論、手加減された魔弾だったためミラの頭が吹き飛んだりその部分があがっていたりとかは無かったが、痛いものは痛い。ひなたは何時もの調子を取り戻したのかケタケタ笑いながらリロードをしており、ミラはそんなひなたを見て一言呟いた。が、それはただふざけているだけで二人の口角は若干上がっていた。

女三人寄れば何とやらと言うが、二人でも十分だった。イヴァンは口下手な娘がこうして仲良く人と話している事に感慨深い物を覚えただが、忘れてはいけない。今は戦闘中だ。イヴァンは溜め息を付きながら倒れたミラの首根っこを掴んで後ろに放り投げ、ひなたに向けられていたビームではなく、気絶させるためなのであろう魔力の奔流を魔力に乗せた斬撃で叩き斬る。

「茶番は後におけつての」

そう呟きイヴァンが振るわれた槍をいなくす。そして、二槍の手数で圧倒しようとしたのか新たに腕の中で槍が作成される。が、それは作成された直後にひなたのジェノサイドバスターによって矛先を消滅させられる。ナイス援護、とイヴァンは呟き舌打ちしているヴァルコラキの槍を剣で叩き折り、そのまま剣を振り上げる事によってヴァルコラキの腕の切断を狙う。

が、ヴァルコラキはそれをバックステップで避け、魔力そのものを固めて魔弾のような物にしてからイヴァンへと投げつける。プロ野球の選手真っ青な速度で投げられたそれは横から放たれたひなたの魔弾によって相殺こそされなかったが軌道を無理矢理曲げられ壁を壊すに終わる。それを見たイヴァンは口笛を軽く吹いた。

魔弾使いとてここまでの剛速球に魔弾を当てるのは結構至難の業だが、ひなたはそれをやってのけた。イヴァンはその所業に一言声をかけようとしたが、ひなた本人が呆然としていたためまぐれだったんだろうなあ、なんて考え苦笑いをするしかなかった。

その僅かな間にミラがヴァルコラキへと突貫しており、ヴァルコラキへと斬りかかった。

それをヴァルコラキは避け、お返しに魔力をそのままぶつけてミラを吹き飛ばしたが、ミラは吹き飛ばされる際に手から何かをヴァルコ

ラキへ向かって投げつけた。ヴァルコラキがそれが何かを確認する前にひなたがジェノサイドバスターでそれ等を打ち抜く。

撃ち抜かれた物はそのまま消滅する事なく、ジェノサイドバスターの中で効果を発揮した。

紅の砲撃の中から紅の鎖が飛び出し、ヴァルコラキの体を何重にも縛り上げる。ミラが投げたものはバインドの魔法を仕込んだ魔弾だった。が、縛られてから気づいたのではもう遅い。ミラは吹き飛ばされて転がった状態でポケットから再び魔弾を取り出し、ヴァルコラキへと投げつける。ひなたはそれを余裕を持って撃ち抜いた。

そして、撃ち抜かれた一瞬の後、爆発。エクスプロージョンの魔弾はヴァルコラキの顔面付近で爆発し、バインドで縛られていたヴァルコラキを吹き飛ばした。

「ぐげえええええええ!!?」

悲鳴を上げるヴァルコラキ。それもその筈、ヴァルコラキはエクスプロージョンの魔弾によって顔半分を消し飛ばされていたのだ。

死なないとはいえ、脳を半分消し飛ばされる感覚。例え痛みをシャットダウンされようが再生するまでの間、何かしらの行動に支障が生じる事だろう。思考回路だって半分以上は消し飛んでマトモに物事を考えられていない状態の筈だ。イヴァンは爆風の中から現れた頭が半分消し飛んだヴァルコラキを見て一気に肉薄する。

このまま首を斬る。剣を構え真横へとそれを薙ぎ払う。が、ヴァルコラキは悪運がいいのか丁度剣を振ったタイミングでバインドが解け、倒れこみ髪の毛を数本斬られるだけに収まった。

運がいいやつめ、とイヴァンは舌打ちを一つ。だが、もう一回は外さない。一度振り抜いた剣を振り抜いてすぐに構えなおし改めて刃を倒れこんだヴァルコラキへと振るう。が、その剣はヴァルコラキの体から槍が生え、それを絡めとるようにして防いだ。

「チイツ!」

「ぐうああああ……やってくれたな、家畜共がア!」

そして、その一瞬後にヴァルコラキの頭部は完全に再生した。イヴァンは腕力だけで剣で槍を破壊して剣を開放しバックステップで

下がる。それとほぼ同時にひなたの方からジェノサイドバスターが放たれヴアルコラキから生えていた槍の、イヴァンに破壊されなかった分を消し飛ばす。が、消し飛ばされてすぐに槍は再生しイヴァンへと迫る。

が、それはミラが前に割り込み剣を振るうことで叩き折っていき、ミラが再び投げたエクスページョンの魔弾をひなたの魔弾が打ち抜くことで起爆し、一気に槍を破壊して折った。そして出来た隙でイヴァンは一旦後退し、ミラもそれに続く。ひなたはその際にリロードを終わらせ何時でも弾を撃てるように構えておく。

「くっ……魔弾使いがここまで厄介とはな」

「……けど魔法使いの方が応用効くし威力も高い魔法を使える」

「ミラはボクをデイスリたいの!!」

「いや、事実だしなあ……」

「泣くぞ?! 終いには泣くぞ!!」

マイヤーズ親子にデイスられた事に軽く涙目になるひなた。魔法使いの方が応用も効けば威力の高い魔法を使えるのは事実だが、魔弾使いは完全無詠唱で魔法を使用できるメリットがある。が、それだけだ。

ひなたとてそれは自覚しているが指摘されると色々と傷ついてしまいうし泣きたくなってしまふ。

「何処まで我を馬鹿にするか……ッ!」

「こっちのペースを作るのにはこうやってふざけるのも手の一つってな」

と、イヴァンは言ったが、ひなたとミラはその言葉に頷けなかった。片方はそうやってペースを作る前にボコられる人で片方は口下手故に口八丁手八丁で相手からペースを奪えない人。色々と欠点しかない二人だった。

イヴァンはそつとそれを視線を向けて察し、改めて声を出した。

「こっちのペースを作るためにはなんだってするさー!」

「優しくしないでいいから!!」

「……泣きそう」

しかし、そうしてペースを作りヴァルコラキの冷静さを消そうとしていたが、ヴァルコラキの様子は今までとは一風変わっていた。

こちらの言葉の一つ一つに面白く反応していたヴァルコラキだったが、全くと言っていいほど反応しなくなった。

「くくく……」

「何をツ……!」

そして、ヴァルコラキは俯いたまま笑い始めた。その様子に今までペースを握っていた三人が気味悪く思い、同時に何かあるかもしれないと一瞬で思考を切り替え、ミラとひなたがすぐに攻撃できるように意識を切り替えた瞬間にイヴァンがヴァルコラキへ向かって突貫していた。

「企んでやがるツ!」

正に刹那の合間にヴァルコラキへと突貫したイヴァン。そして剣を一瞬にしてヴァルコラキへ向けて振るう。

が、その一瞬の合間にヴァルコラキは動いていた。

腕がイヴァンの攻撃よりも早く変体。そのまま肉塊が辛うじて腕の形を保っているような不気味な物へと変化するとそれはイヴァンの攻撃を腕をそのまま飲み込む事によって防ぎ、そのままイヴァンを振り回しひなたの方へと投げつけた。その速さはひなたの反応速度を超えており、ひなたはイヴァンの衝撃を逃がす事が出来ず共に吹き飛ばされ、壁に激突した。

「うぐっ!?!」

「があっ!?!」

呻くイヴァンと悲鳴を上げるひなた。

どちらの方がダメージが大きかったか、なんて決まっている。ひなたという肉のクツションを介したイヴァンではなく、イヴァンの体重に加えその速さをその身で受け、受け身すら取れずに壁とサンドイッチにされたひなたの方だ。しかも、イヴァンが己の体に最低限とはいえ鎧を纏っている。その重さも加えられ、ひなたの小さく前衛ではないため柔い体が悲鳴を上げた。

体が押しつぶされていく感覚と胸骨が折れていく感覚。最早慣れ

てしまったとも言えるため折れたのがハッキリと分かり、同時に襲ってきた激痛が己の胸の内の内臓にその胸骨が刺さっていくのを無理矢理に自覚させる。

己の危機故かスローになっていく知覚の中、激痛にひなたは血を吐き起爆銃すら落とし壁を背に座り込む。

イヴァンはすぐに己の体に襲った感覚からひなたの方がダメージがデカく、また放っておけば確実に死ぬる重症になったのを察知し、ひなたの上から退く。

「ぐっ……おい、大丈夫か嬢ちゃん！」

「あ、ばら……おれがふっ!!？」

言葉の途中で血を吐くひなた。その様子と言葉からイヴァンはすぐにひなたの内臓に折れたアバラが刺さっているのを把握し懐から秘薬を取り出す。

「飲めっ！ 薬になる！」

「あり、がと……」

秘薬の入った瓶をひなたはイヴァンの手で飲ませてもらい、何とか嚥下する。それと同時に痛みが引いていき先ほどまで苦しかった呼吸も楽になってくる。

ひなたの呼吸が安定していくのを呼吸の音から把握したイヴァンは視線をヴァルコラキへと戻した。

そして、一つ舌打ちをした。どうやら、状況は結構悪い方向へと進んでしまっているようだった。

「……なるほど、あれが本気ってわけか」

イヴァンの視線の先。そこに居たヴァルコラキは、先ほどまでと同じ姿ではなかった。

全長は三メートル以上にまで巨大化し、まるで狼に蝙蝠のパーツを移植したかのような奇妙な姿。いや、吐き気すら催すその姿にイヴァンは生理的嫌悪感を抱き、ひなたはそれを見た瞬間猛烈な気持ち悪さと吐き気を催した。ひなたが横にいるシャーレイを見るが、彼女もひなたと同じように吐き気を催したのか手で口を抑えていた。

そして、その真正面にいるミラも手で口を抑える、とまでは行か

なかったが、それでもヴァルコラキの姿を見て顔色を青くしている。
「ううう……神話生物か何かつての……」

ひなたは襲ってくる吐き気を飲み干しながらなんとか立ち上がる。
あんなものの嫁になったなんて一生の不覚もいいところだが、今はそんな事を考えている場合じゃない。

日本にいた頃は巨大化は負けフラグだとか散々言われていたが、こうして相手を目の当たりにすると一概にそうとは言えない。相手は巨大化し적이がデカくなつたとも捉えられるが、ヴァルコラキはイヴァンを掴んで投げ飛ばした。つまり、イヴァンの速さについて行ける程の敏捷性をあの巨大な体に秘めている。それが分かっているだけでも、戦況はひっくり返ってもおかしくはなかった。

「よくも侮ってくれたな……殺してやるぞ、人間ども」

「うっせえDV夫」

ひなたは血の混ざった唾を吐きだし起爆銃を拾い上げて構えた。

どうやら、今回の戦いはまだ分からないらしい。

第六十魔弾

ヴアルコラキの変身。それは四人を大いに驚かせたが、ひなたにとって、それは予想外であつてこそ、想像しきれていないという訳ではなかつた。何せ、日本での吸血鬼は確かに人型ではあるが、吸血蝙蝠とも言える扱いをされている。蝙蝠の羽を持ち、眷属は蝙蝠。そんな吸血鬼が何とも言い難い姿をした生物に変身するのだから、アニメで見なかつた訳ではなく。

無辜の怪物、とでも言うべきか。本来血を飲む怪物としてのみ描かれていたドラキュラがその話を曲げ、膨張され流れ着いてきた。その中で原典にもある能力として怪力無双、そして変幻自在という物がある。

吸血鬼の王たる真祖の力の中にこれらが無いのは不自然であり、変幻自在の能力でこうして変身したとしても何ら不可思議な事はなかつた。いや、もしかしたら変身後の姿が本来の姿なのかもしれない。それが変幻自在の能力で人間に変身し、何百年も若い体で好き勝手やつてきた。

しかし、それはあくまでも想像の域を出ない。今やるべきことはこうして妄想しているのではなく、目の前の怪物を、ヴアルコラキの討伐である。イヴァンも最初は惚けていたがすぐに剣を片手にミラの前へと移動し、ミラもそれを見てからようやく意識を戻す。が、それまでの数秒が完全な隙となつてしまう。そんな隙を突かれないうちに小細工するのはひなたの仕事だ。

イヴァンが飛び出す前に魔弾を三つ生み出し、それを噛み砕く。魔弾の中に内包された魔力が己の中を駆け巡り、そこに己の魔力を加えた魔力の塊を銃口の前に生み出し、引き金を引きシューターを放つ事でその魔力を開放する。

「ジエノサイドブレイカー・マルチレイド」

ごっそりと己の内の魔力が消えていく感覚と共に一本一本がジエノサイドバスター並みの拡散ビームがヴアルコラキへと殺到する。もう残りの魔力は半分を切っている。ジエノサイドバスター系の魔

法を乱発しているのが魔力の消費を早めている。もう後ジェノサイドブレイカーを撃てるのは三発程度だろうと己の魔力を把握しつつ、ジェノサイドブレイカーの行く先を見守る。

が、一本一本が素の状態のジェノサイドバスターよりも威力が高いジェノサイドブレイカー・マルチレイドはヴァルコラキが目障りと言わんばかりに振るった手によって全弾掻き消されてしまう。それに対してひなたは盛大に舌打ちをすると同時にヤバイ、と冷や汗をか

く。ジェノサイドバスターが効かない。つまり、今のヴァルコラキに効くのは少なくともジェノサイドブラスター並みの砲撃という事。ブラスターなら後八発は確実に撃てるが、バスターなら十五発は撃てた。つまり、それだけひなたの援護の手段がなくなっていくという事だ。

マルチレイドを掻き消されたのを見てからひなたはすぐに引き金を引き、シューターを四発放ち、シールドを目の前に展開する。紅に染まったシューターがヴァルコラキへと向かうが、最早ヴァルコラキはそれに対して何もしない。その身で受け、ダメージをくらう。が、とても目に見えるダメージが入っているようには見えない。

が、そうしてひなたが一瞬ずつヴァルコラキの気を引いた甲斐もあり、ミラとイヴァンは再起動し、完全に戦闘態勢に入った。ひなたは自身の仕事を一応完遂出来たことに一息つき、あれほど邪魔をしたのにこちらを率先して潰そうとしてこないヴァルコラキに対しても安堵した。

ヴァルコラキが先程の、マイヤーズ親子がフリーズしている間にひなたに肉薄して殴ってきたらひなたが避けきれずにザク口になってしまう可能性があった。それをしてこなかったのは、慢心か作戦か。はたまたまだひなたの事を諦めていないのか。どれかは分からないが、それでもヴァルコラキと正面切って殴り合いたくはない。例え左手が健在で全魔力を使える今のよう状態であっても、だ。

「ミラ、仕掛けるぞー！」

「……最初から全力！」

再起動した二人が言葉で作戦を伝え合う。作戦と呼べる物ではないが、それでもイヴァンはミラの動き方を一から十まで把握しているしミラも同様だ。親子だからこそ、余計な言葉はいらない。そして、ひなたとの連携はイヴァンは長年の経験でひなたの援護を察し、ミラは既に頭にひなたの戦い方を叩き込んでいるため問題はない。

それ故に互いが互いを信頼し全力をもって動くことが出来る。ひなたも聞こえてきた二人の会話から後衛として、前衛の二人の動きを頭の中で何パターンも想像し、その全てのパターンに対して有効な援護を頭の中で弾き出す。たった一年ちよつとという短い期間、ずっと一人で戦ってきたひなたがこうしてフルバックで有効な援護を出来るのも、マイヤーズ親子の常識を超えた戦闘能力と、魔弾使いとして戦っていくと決めた時、恩人たるバーニーからの教えから成るものだった。

魔弾使いとして基礎中の基礎。後衛での二対一、もしくは三対一での援護方法。それを最初に基礎として習ったからこそ、戦いの大半を一人で済ませてきた現状でも後衛を務める事ができる。

「ッ!!」

イヴァンが鋭く息を吐き、空気に溶けるようにその姿を消し、その一瞬後にヴァルコラキの背後、頭から股下まで真つ二つに出来る位置に出現する。魔法か何かかとは思いますが、もしかしたら小手先の技術なのかもしれない。

イヴァンがその剣を振り下ろす。が、その直前にヴァルコラキはイヴァンの動きに反応し、剣先がその頭に触れた瞬間にはイヴァンの体を横から降った拳によって吹き飛ばされた。

「ガッ!？」

「……背中を見せた」

イヴァンが血を吐きながら吹き飛ばされるが、既にひなたが着地点に向かって走っている。彼女は治療もできるとミラは知っているため即死じゃないのを目視で確認しつつ、背中を見せたヴァルコラキへとイヴァンのような技ではなく、単純な自身の身体能力を使って肉薄する。そして、斬撃の範囲内に入った瞬間に振るわれるミラの剣。

それはヴァルコラキの体を一刀両断、とはいかなかったものの、かなり大きな切り傷を作り出し、血を噴出させた。ミラはそれを魔法によって瞬間的に冷凍させ、血液のよる魔法が使われないように工夫し、再び剣を振るう。が、すぐにミラの直感がそれはマズいと訴え、それに従い杖と足を使い体を後ろへと飛ばすと、ミラの斬った場所から槍が伸び、ミラを襲った。

もしも追撃をしていたら串刺しにされていたかもしれない。背中に冷たい物を感じながら剣を振りつつ下がり槍を叩き折っていく。

そして吹き飛ばされたイヴァンは壁に叩き付けられていたが、ひなたがすぐに彼に駆け寄った。

「これをー」

近寄ったひなたが彼の状態を確認し、骨こそ折れていないが相当なダメージを受けたのが見ただけでも分かったため、これならまだ助けられると察してイヴァンの体に回復魔法の魔弾を彼の体に六発押しつけ割る事によって回復をかける。

イヴァンの体が頑丈だった故か回復は六発で十分であり、イヴァンは若干咳と共に血を吐きつつも立ち上がり置いていた剣を手にし構えた。

「いっつつ……油断した。サンキュ、嬢ちゃん」

「それよりも。アイツは……」

礼を言われるひなただが、そんな事は今はどうでもいいと言えた。その理由は、真正面で今もミラが対峙しているヴァルコラキの事を懸念していたから。変身したヴァルコラキは明らかに速さが増している。力の方も、こうしてイヴァンが一撃で倒れた以上、そこそこ上がっているのが容易に分かった。それをイヴァンとミラが、最早一瞬気を逸らす程度しか出来なくなったひなたの援護だけでどうにかこうにか勝てるのか、というのが今の懸念だった。

イヴァンとミラの腕を信用していない訳ではない。だが、それ以上に変身したヴァルコラキはひなたにとって脅威となっていた。が、イヴァンはそれを聞いて大丈夫だ、と呟いた。

「デカくなった分斬りやすい。速さでも、まだ俺達が何とかできる域

だ」

さつきは油断していただけ。そう言うイヴァンは若干胡散臭かったが、それでもそう豪語するのなら、信用するしかない。ここでこの戦闘の要でもあるイヴァンが死んだらひなたも、ミラも……そして、シャーレイも死んでしまう。それ故に、今は彼の言葉を信用するしかない。

「そんな分けだ……これ以上、パワーアップされる前に殺す。全力で仕掛けるぞ」

これ以上を許さない。そのためにここで殺す。

これ以上のパワーアップがあるとすると、ここに居る三人ではどうしようもなく殺される可能性が出てきてしまう。それを頭の中に思い浮かべたからこそその言葉だった。

イヴァンとて、このパワーアップは予想外だった。何故ならヴァルコラキが人の姿を脱ぎ捨てるなんて情報は一切聞いていなかったからだ。そんな聞いていない事をされた以上、もう一回、もう二回と聞いていることをされるかもしれない。だから、これ以上遊んでいる余裕はない。ここで仕掛ける。

「……ボクはどうすれば」

「目を潰してくれ。あの魔法でな」

あの魔法。それが一瞬何なのかが分からなかったが、すぐにそれがジェノサイドブレイカーなのだと分かった。だが、それは連発できる物ではなく、ひなたの切り札的魔法だ。

「流石に連射は出来ないから一発だよ」

「十分だ。秒単位で時間を稼いでくれれば十分だ」

「秒単位……結構キツイ事を言ってくれるね」

ヴァルコラキ相手に秒単位の時間を稼ぐ。これがどれだけ難しい仕事なのかは二人とも把握していた。だが、稼がなければヴァルコラキを殺す一手を打つことが出来ない。それが分かっているからひなたも首を縦に振らざるを得なかった。

チャンスは、恐らく何度かあるだろう。だが、一度目を防がれたら二度目のチャンスを物に出来るか、と言われれば怪しいものがある。

つまり、チャンスは実質一度のみ。その後のチャンスは運が良くなければやってこない。ひなたはそのチャンスを物にさせる一番槍とも言える。その大役に冷や汗を掻きながらも頷き、三発の魔弾を噛み砕く。それと同時にひなたの起爆銃の銃口に魔力が集まっていくのをイヴァンは察し、ひなたの肩を叩く。

「頼んだ」

「何とかするよ」

いや、何とかしなければならぬ。緊張感に胸中を支配されながらも深呼吸を一つして起爆銃を構える。

「ミラは？」

「合わせせる」

「させるって……まあ、そうしなきゃ駄目なんだろうけど」

息を一つ吐き、銃口を向けつつイヴァンへと視線を向ける。こちらはまだもう撃てる、という意思を乗せたその視線をイヴァンは受け取り、一瞬でミラの傍へと向かい、一言二言、小声で会話をしていた。その最中、ミラがこちらへと視線を向けてきたため、ミラもこちらの意思に気が付いたのだろう。ならば、後はやるだけだ。

大きく息を吐き、照準をヴァルコラキの頭へと向ける。

チャンスは一度。これを物にしなければどうしようもなくなる。だから、絶対に外せない。

「……ジエノサイド、ブレイカーツ！」

気取られないように小さく息を吐くように叫び、引き金を引く。先ほどまでは己の制御下にあった魔力が離れていく感覚と共に意識が落ちかける。が、それを歯を食いしばって耐え、ジエノサイドブレイカーの行く末を見守る。

頼む、当たってくれと願い……

「ぬう!？」

その願いは悲しく、ジエノサイドブレイカーは外れた。いや、厳密には当たったのだが、それはヴァルコラキの顔の半分、更に半身の幾ばくかを消し飛ばすだけに終わった。

しまった、とひなたはすぐに第二射のため魔弾を生み出そうとす

る。

が、その前にミラが動いた。

元より稼ぐ時間は秒単位で十分。それ故に、顔の半分を消し飛ばした時点でそれは成せている。後はマイヤーズ親子の腕次第。ミラは一瞬だけひなたに視線を向け、すぐにヴァルコラキへと向ける。

「……斬るッ！」

顔が消し飛んだ方からミラが大雑把な軌道で一気に距離を詰める。

ミラの仕事は、腕を斬り飛ばす事。厄介な防御をさせないためだが、逆に言えばそれしか出来ないため、ミラはそれを請け負った。

ひなたが稼いだ時間。常人には僅か過ぎるその時間はミラにとつては十分な隙となる。

杖から手を放し、両手で剣を握り片足だけで飛び、ヴァルコラキの腕を狙う。

「甘いわッ!!」

「っ!」

だが、そうして突っ込んできたミラをヴァルコラキは己の両目でしっかりと捉えていた。

そう、両目で。

「再生っ……!?!」

そう、ヴァルコラキは顔半分が吹き飛んでからミラが仕掛けるまでの僅か一秒にも満たない時間のうちに顔半분을再生させた。ミラすら、気が付けない速度でだ。

それ故に、ミラが同様ゆえに剣筋が、剣を振るう速さが落ちてしま

う。そんなミラを見てヴァルコラキは嘲笑う。ここでミラを一撃で殺し、後はイヴァンとシャーレイを殺す。勝ち筋が見えたが故の傲慢な笑い。ヴァルコラキの、僅かに残っている傷口から槍が伸ばされようとし、杖から手を放しているミラではもう避ける事が不可能ゆえに、ミラはどうにかして生き残るために全神経を集中させ。

「当たってえ!!」

それ故に、ひなたからも離れ、既に戦闘からはフェードアウトした

筈の少女の声と、それと同時に聞こえてきた二回の火薬が爆ぜる音に気が付けなかった。

「なあっ!？」

ヴァルコラキが気づいた時には、それは……シャーレイの拳銃から放たれた銃弾は目の前にあった。秒単位ですらない照準合わせで放たれた二発の弾丸はヴァルコラキの両目に当たる軌道を取っており、その弾丸の速度はヴァルコラキの両目を十分に潰せる程だった。

完全に勝ちを確信していた。いや、シャーレイという矮小過ぎる存在を放置し忘れてしまっていたからこそ、こうして油断し、ひなたがジェノサイドブレイカーを撃った直後に放たれていた銃声を、シャーレイの声を聞き逃してしまっていた。

偶然。正に偶然の出来事だったが、一人の少女が起こした偶然は完全に勝敗を逆転させた。

「馬鹿なアアアアア!!」

二発の弾丸はヴァルコラキの両目へと吸い込まれ、そして飲み込まれていった。それを証明するかのように噴水の如く目から吹き出すヴァルコラキの血液。それと同時に視力が失われ再生を一瞬で行おうとも噴出した血が邪魔で前は真っ赤に染まっている。それ故に、生やした槍はヴァルコラキの目の出血を見てから急いでブレイキをかけたミラには当たらず、地面を抉るのみ。

目の前を通っていく槍に冷や汗を掻いたミラだが、すぐに動き出す。魔力を乗せた斬撃で一気に目前の槍を斬り飛ばし一瞬にしてヴァルコラキの懐へ。

「ハッ!!」

そして一息でヴァルコラキの腕を肩から斬り飛ばし、ヴァルコラキの視力が戻ったところにはミラはもう片方の手も斬り飛ばしていた。

両手を斬り飛ばされたヴァルコラキ。更にミラはついぞと言わんばかりにヴァルコラキの両足を斬り飛ばし、心臓へ向けて剣を投げ、心臓を投げた剣だけで貫き、体を貫通させる。

そして、達磨となったヴァルコラキは一瞬で体を再生させようとするが、その一瞬は致命的な隙。イヴァンが見逃す訳がない。

「あの世で殺した女達に裁かれる、クソ野郎」

「馬鹿めツ！ 例え首を跳ねられようと——」

そして、ミラの後ろを走り、ミラが両手両足と心臓を潰した時には既にヴァルコラキの目の前へとその身を踊りだしていたイヴァンがヴァルコラキの首が跳ねる。

更に跳ねた首をイヴァンは空中で十字に切り裂き、四分割する。

ヴァルコラキは首を跳ねられても生きることが出来る。それ故に、イヴァンは何か別の、真祖に対する特攻武器を取り出してくるのかと思っていた。それ故に、イヴァンの持っている剣そのものが真祖に対する特攻武器だとは思っていなかった。

思い込みが生んだ最後とも言えた。

「馬鹿はお前だ。コイツあ、不死殺しなんだよ」

地に足を付けたイヴァンが剣を鞘に納める。

それと同時にヴァルコラキの体は地に落ち、四分割した頭は生々しい音を立て床に血の水たまりを作る。

首を跳ねられたヴァルコラキの体は動くことなく、また頭もそれ以上何かを喋る事は無かった。

「……仇は取ったぜ」

イヴァンは、小さく、しかし噛み締めるように呟くと、不死殺しの柄から手を放した。

ヴァルコラキの討伐は、この瞬間に叶った。

第六十一 魔弾

「……はふう」

ひなたは約二週間ぶりの我が家のソファに座り今まで張りつめていた気をようやく解いた。

ヴァルコラキを殺してから、ひなたとシャーレイとミラは真祖を倒したという実感が沸かずに呆然としていたが、イヴァンは後始末は自分でやるから、とひなた達を一旦家に帰した。

彼が今回の事の後始末を全て引き受ける、というのは何時もの三人なら申し訳なくて手伝うのだが、ひなたに関しては体と命の危機であつたし、シャーレイとミラは明朝からずっと起きて気を張り詰めていた事、更にここ数日の疲れが祟つてもう正常な判断をする事が出来ず、それに頷いた。

ヴァルコラキの死体を目の前にしているイヴァンを置いて三人は夜道をフラフラと歩き特に会話もなく家に辿り着き、ひなたが一番にソファに座り込んだ。

「疲れた……」

「……………」

そして、その隣にシャーレイがボヤキながら座り、ミラに至つては無言で座つた。

そうして三人でソファに座り、ポーツと天井やら目の前やらを見て、ようやくひなたは実感した。

「……帰つて、これなんだ」

ヴァルコラキに脅されてこの家を出てから、もうこの家に帰る事はない。そう思っていた。そう思わざるを得なかった。また戻れる。いつかきつと戻れるなんて思っていたらその僅かな希望を潰されたときと一緒に心を潰されると分かつていたから、現実を受け入れ死ぬまでの間を気楽に何も思わずに生きていこうと、そう思っていた。

だから、こうして二週間ぶりの家で三人一緒にくっついていてる事が、もうこの生活を脅かす脅威は消し去られたのだという実感に繋がりに、ようやく涙が出てくる。

大声で泣く体力すら無いため涙を流すだけ。だが、それでも十分にこれからまた三人一緒に暮らせるのだと実感し、死ぬ必要が無くなつた事に対する安心感を感じ。両隣の温かさを感じて。それ故に涙が止まらない。

「……ひなたちゃん。煙草、吸う？」

「……うん。吸う」

シャーレイはそうして泣くひなたに対して何か言うことなく、そつと懐のポーチから煙草の箱を取り出し、ひなたに手渡した。

一本だけ減つた煙草だったが、ひなたは特に何も言わずに箱から一本の煙草を取り出すと、ライターで火をつけた。二週間の間、吸うことが出来なかつた煙草の煙を肺に入れて、その味に懐かしさすら覚えて吐き出す。

「……よくそんな不味い物を」

「慣れれば美味しいんだってば」

何時か言ったような他愛もない言葉をミラと交わす。

そして何度か煙を吸い、灰を落としたかと思つたが灰皿が近くになり、気が付いた。まさかこのドレスの上に落とすわけにもいかない。いや、所詮ヴァルコラキが渡してきた服なので落としてもいいのだが、明らかに高価なそれに灰を落として焦がすなんて真似は金銭感覚は一般人なひなたにはする事が出来ず、仕方なく携帯灰皿に煙を落とす。

「……シャーレイから血の匂いがする」

「突入の時に色々と刺さつたからね……何気に痛かつたよ」

「……お馬鹿。私が先に行くって言つてたのに」

「我慢できなくて」

「ふふっ」

ふとひなたが呟いた言葉から会話に繋がる。

会話の流れからひなたは体の一部にガラス片を生やして血をドクドク流しながらキメ顔をしていたシャーレイを思い出して軽く笑つてしまう。その時はときめいたが、よくよく考えればシニール過ぎる光景だったのは全く否定できない。痛い中キメ顔をしていたシャー

レイ自身、シニールだなあ、と思っていたため笑われても笑い返すしか出来ないのだが。

だが、こうして間抜けとも思える会話をするだけで帰ってきたと実感できる。

そう考え、ふとあの言葉を言っていないのを思いだした。今言わないとタイミングを逃しそうなのでひなたは煙草を口から離して口を開いた。

「そういえば」

「何？」

「……何かあった？」

「ただいま」

『……おかえり』

ひなたの呟いた言葉に、二人はお決まりの言葉を返した。

こうして、ひなたはシャーレイとミラの元に帰ってきた。もう、災禍たるヴァルコラキは消えた。

後は三人の平和な日々が続いていくだけ。また事件があるかもしれないが、無ければ延々と三人はこの家で山も谷もない普通の生活をしていく。

帰ってきたという実感と共に吸う煙草は、何時もよりも美味しく感じる事が出来た。

「あ、じゃあ今日は三人で寝ようよ。で、三人でベッドの上で第二ラウンドでも……」

『台無しだよ……』

そして何時も通りなシャーレイに対し、ひなたとミラは溜め息を零した。

結局疲れていたから三人ともベッドに潜ればすぐに就寝したのだが。

翌日のお昼頃。ひなた達は家に客を一人迎えていた。

客と言っても、それは昨日共闘したイヴァンなので特に凝り固まった挨拶等はなく、用事があるから来たというイヴァンの言葉を聞き三人はイヴァンを家に上げた。

ちなみに、この家の場所はミラの手紙に住所が書かれていたため分かったようだった。

「まあ、改めて。昨日は色々とお疲れさん」

「それはこっちの台詞だよ。助けてくれて本当にありがとう、イヴァンさん」

「俺にとつちや助けるのはついでだったんだが……まあ、一人娘の友人だからな。助けないわけにもいかないさ」

昨日は嵐のように現れてそのまま何も言わずに別れたため、二人は改めて挨拶をし、言葉を交わしていた。

一応、イヴァンが急いでこの街に来た理由の中にはひなた救出の意味合いもあった。それは正義感から来るものではなく足を失ったミラと共に居てくれる友人である彼女をヴァルコラキに渡してはミラの親としては失格だと思っただから。ただでさえ放任主義でミラとは一年に数回顔を合わせる程度なので親失格とも言えたが、せめてこういう時だけはいい格好をしたいという父親としての威厳からでもあった。

もし攫われたのがひなたやシャーレイではなく別の誰かならイヴァンは急がなかっただろう。

「で、だ。ヴァルコラキの首だが、ここの駆除連合に昨日のうちに持って行った」

「……大丈夫だったの？」

「ん？ ああ、ヴァルコラキはしっかり死んでいたし、駆除連合の方にも元々言っておいたから営業時間外でも何とかあった」

ミラの言葉足らずな問いに関してイヴァンはいつも通り考えられる回答を全て答えることでミラを納得させた。

「まあ、それでだが。ヴァルコラキの討伐報酬が出されてな。綺麗に四分割するって事で持ってきた」

そう言い、イヴァンは話を区切ってから彼の持ってきた本題とも言

える物を口にした。

それはヴァルコラキを討伐した事によつて出された特別報酬とも言える物であり、金の入った袋をイヴァンは己の持っていた鞆から四つ取り出すと、目の前のテーブルの上に置いた。

明らかにミラとひなたがでも簡単に稼ぐ事が出来ないくらいの金が入った袋が四つ。三人はよくわからないとでも言いたげな表情で目の前の袋を見ている。

「ちなみに、袋の中はざっとこんな感じだ」

イヴァンは呆けている三人の目の前に報酬を四等分した際の一つの袋に入っている金額が書かれた紙を見せる。それを覗き込んだ三人は目が飛び出そうな程に驚いていた。

何せこの家が後二軒以上は買えそうな程の大金がその袋の中には入っていたのだ。それが、三袋。これから十年近くは遊んで暮らせるレベルの大金が三人の目の前にあった。スラム出身のシャーレイも、性根は一般市民のひなたも、大金を稼ぐ事は普通にあったミラも、流石にこの量の金を一回で稼ぐのは初めてであり、無言で驚くことしか出来なかった。

「まあ、一つ目はこんな感じだ」

「い、いやいやいや！　なんで綺麗に四等分!？」

「そりや、俺とお前ら四人だし」

「だ、だってボクは捕まって足引っ張ってたし……」

「私も最後に一回撃っただけ……」

ミラに金が渡るのは疑問も違和感もないが、ひなたとシャーレイにとってはこれは明らかに過剰とも言える報酬だった。

ひなたはヴァルコラキの脅しの真偽を判断することが出来ず騙されて捕まって足を引っ張っただけだ。シャーレイに至っては最後に銃弾を撃っただけで後は置物だった。

そう自分を評価しているからこの報酬は過剰であると思えていなかった。が、それを聞いてイヴァンは溜め息を一つついた。

「あのなあ……まず、そっちの魔弾使いの嬢ちゃん。後衛と回復を兼ねるっただけで俺たちは大分楽に戦えたから十分に報酬を払うに値

する。それに、捕まった件に関しては仕方ない。あれを初見で嘘と見破れなんて誰も不可能だ。次に、そっちの嬢ちゃんに関しては、最後の弾丸。あれが勝敗を決したんだ。だから報酬を貰っても可笑しくない」

イヴァンの言葉は二人の行動をちゃんと評価した物だった。

ひなたが後衛をする事で隙を作っていた。これは前衛にとつてはともありがたい事であり、一瞬であろうと隙を作ってくれる後衛というのはイヴァンやミラと言った一秒すら命取りとなる戦闘をする人種にとつてはとも有り難い事だった。

そして、シャーレイに関しても、だ。シャーレイの直感だけで撃つたのであろう弾丸はヴァルコラキの目に直撃していた。あれがなければミラは死んでいたしそれが原因で戦線が瓦解し全滅していたかもしれない。それを救ったというのはある意味でこの場にいる全員よりも活躍したと言っているのと同義だった。

だが、それでもイヴァンとミラの分と同じだけの金をもらう理由にはなっていないと喚く二人だったが、次にイヴァンの発した一言で押し黙った。

「もしもお前らが受け取らないならミラに押し付ける」

「……ちよっ」

流星にそうされるとひなたとシャーレイにはどうする事も出来ない。口下手なミラとイヴァンが話し込んでしまえばイヴァンが怒涛の勢いでミラの反論を押しつぶして金を押し付けてしまう事だろう。二人は流星にミラにいらぬ迷惑をかけるわけにはいかないと思いき、結局金を受け取った。

「よし。で、次だ」

ようやく金の行き先が決まった所でイヴァンは次の要件を口にし始める。

「ヴァルコラキを倒した件だが……これは俺とミラの二人で倒したって事にしようと思う」

イヴァンは結構真剣な顔で二件目の要件を口にした。

それは、ひなたとシャーレイの功績を完全になかったものとし、金

で揉み消させてくれという手柄の横取りもいい所な話だった。ミラはそれに対して何かを言おうとしていたが、何かに気が付いたのか開きかけていた口をすぐに閉じた。

ひなたとシャーレイはイヴァンの言葉を聞き、こう答えた。

『別にいいけど』

「軽っ!？」

二人はそれをあつさりを受け入れた。流石にこれに関して少し揉めるかもしれないと思っていたイヴァンだったが、まさかここまであつさりを受け入れられるとは思ってもいなかった。

だが、よく考えれば金を受け取らなかった二人の謙虚さ故に二人がこう答えるのは予想の範囲内と言える物だった。

「……いい、一応理由だけは話しておくな?」

二人のあまりにも軽い承認を受けたイヴァンだが、苦笑いを浮かべながら説明はしておくべきだろうと思ひ、すぐに手柄を横取りする理由を口にした。

「まあ、簡単に言えば嬢ちゃん達に要らん手が伸びないようにするためだ」

「要らない手……?」

「引き抜きやらお見合いやら……そういう、自分達の勢力圏内に囲おうって思う連中に目をつけられないようにするためだな」

「あー……なんかよくあるやつだ……」

ひなたはその言葉を聞いて頭を抱えた。

確か日本に居た頃に読んでいた小説でそんな話があった気がする。名声を上げすぎたが故に様々な組織や家から好条件と共にこっちに付け、という条件を叩き付けられる話。それを拒み続けた結果、暗殺やら強姦での既成事実の作成と言った強硬手段に出る人間の話。

ひなたはそれを聞いてようやく自分たちがそれに似たような立場になるかもしれない状況にあるというのを理解した。

何せ、真祖であるヴァルコラキの討伐に参加して生き残ったのだ。特に、ひなたは後衛として十全な活躍をし、シャーレイは起死回生の一発を撃った。それだけでもこの世界では評価され、何としてでも己

の勢力下に収めようとする人間が出てくるのだ。

「魔弾使いの嬢ちゃんとは分かったか。まあ、そんな感じだ。お前ら三人、この家でのんびりと生きていたんだろ？　そうすると名声が邪魔だから俺とミラで全部受けちまおうって訳だ」

「……なんで私も」

「お前は慣れてるだろ？　昔からやんちゃしてたしな」

「……そうだけど」

ミラは自分も名声を受ける事に異議を発したが、確かにミラもそういった輩の対処には慣れている。トップクラスとして活躍していけば嫌にでも名声はついて回る。そうするとミラをどうにかして自分達の傀儡にしたいと思う人間が出てくる。

子供のころから名声を浴びて誘拐未遂にあつたり強姦未遂にあつたり暗殺未遂にあつたりしてきたミラはそういった輩からはとつくにもうどうにもならないと諦められており、新たにミラに手を出そうとしてくる人間が居たとしてもミラはそれを全部どうにか出来る程度には力を持っている。

それに、ミラは真祖ヴァルコラキを追っていたイヴァンの娘だ。今更真祖を倒した所で真祖殺しとでも呼ばれる程度で普段と特に変わらない扱いだろう。だからミラは渋々だが頷いた。

ちなみに、そうやってイヴァンとミラが口論している間にひなたはシャーレイに現在の自分達の状況を説明していた。その説明を聞いたシャーレイは笑顔で手柄を持って行つてとイヴァンに言った。シャーレイにとって、手柄よりも金よりも何よりもまずはひなたが優先されるから、当然とも言えた。

そんな訳で名声は八割がイヴァン、二割がミラという感じで駆除連合に伝えられる事となった。

そして、イヴァンの話は大体終わり、最後の話となる。

「最後にだが、俺、近くに家買うから」

「……へ？　この街に住むの？」

「ああ。ヴァルコラキも殺したしやる事なくなったからなあ……そろそろ定住するのもいいかと思つたらここの近くの空き家があるのを

知ってたな。丁度いいしそこをかうかってなってな」

「……それなら何か起こっても安心」

「起こらないのが一番だがな。何か起こったら守ってやるから安心しろ」

最後の話はご近所にイヴァンが引越してくるという話だった。まあ、それは至極どうでもいいとも言えたのでひなたとシャーレイは何かあったらお願いしますとだけ言ってその話は終わった。

「んじや、そろそろお暇するわ。何せ駆除連合のお偉いさんから呼び出されてるしヴァルコラキの死体を教会に届けにやらんし不動産にも行く必要があるし根回しの必要もあるし……何気に忙しいからな」

「ああ、うん。本当になにからなにまでありがとう、イヴァンさん」

「良いってことよ。まあ、ヴァルコラキの討伐に関わらせてくれたせめてもの礼だ」

イヴァンは去り際にかげられたひなたの言葉にそう返すと、そのままサツと家から出て行った。

イヴァンが去ってから暫く、家の中は静まり返り、三人は顔を見合わせた。

この机の上のお金どうしよう、と。

「……………取り敢えず二階の物置に置いておこうか」

「そ、そうだね……これ、使い切るの何年後になるんだろ……」

「……………暫くはニート」

結局最後はグダグダになってしまった今回の騒動だが、今の三人にとってはこれが一番いい雰囲気とも言えた。

二週間、全てを諦め生きてきたひなたと、彼女を助けようと奮迅したシャーレイとミラ。彼女達が余計なシコリもなくまたいつも通りの日常を送るのは、これくらいグダグダ感が丁度よかった。

「じゃあ、この後はお昼にしようか。ひなたちゃん、何か食べたいのがある？」

「食べたいもの？ そうだね……」

二週間ぶりのシャーレイの手料理。それが食べられる当たり前と

も言える幸せを感じながら、ひなたは昼食の注文をした。
「じゃあ、カレーで」

番外2

ヴァルコラキの一件から一週間が経過した。

時の流れは早い物でついこの間帰ってきたと思っただけ既に一週間もの時間が経過していた。ここまで時間を早く感じてしまうのは単にひなたが歳を取ってしまったという事なのかはたまた学校も何も無い時間を家の中で充実して生きていたからか、それとも単純にひなたがそういう体質なのか。どれかはよく分からないが、一週間の時間は三人を何時もの日常に溶け込ませていた。

ヴァルコラキの件は公では出されない裏の案件として処理された。真祖が街の中に居たとあってはこの街が一瞬でゴーストタウン化してしまう恐れがあるからだ。既に討伐されたとは言え、第二第三の真祖が現れないとは限らない。完全に大人の事情が混ざっていたが、頼りになる大人が近所に引越してきた事もありひなた的にはどうでもよかった。そのためかひなたは何処から漏れた噂か分からないがたった二週間で結婚詐欺を行った悪女だとか夫を毒殺した畜生とか色々と尾ひれの付く噂が付いてしまったが、別に周りから嫌われようがシャーレイとミラの二人と一緒に居られるならそんなの気にもならなかった。

もう男が寄り付かない？ 大いに結構。こちとら同性愛者だと煙草を啜えながら笑い飛ばしてしまう位にどうでもいい尾ひれだった。一応、駆除連合と街のお偉いさんがどうにかして噂を根も葉もない事実だと葬ろうとしてくれて嬉しいが、そんな事よりも煙草一年分をくれた方がまだ嬉しかった。もう常連となったスーパ―では大変だねえと苦笑しながら同情される位にはひなたの人望は存在するからだ。この噂を信じているのはひなたに目を付けて何時かナンパでもしてやろうかとか考えていた下半身に脳みそが付いた男共と根も葉もない噂で人を口撃するのが大好きな女共だけだからだ。だから痛くも痒くもない。

そんなひなたさんはヴァルコラキとか言う降って沸いた問題が自分の死亡以外で片付いたためか、色々と気が抜けていた。というより

うのだ。

その結果、シャーレイとミラはボーつとしている事が多くなり、ひなたは何故かマッサージチェアを自分の小遣いで購入して使っている。

そんな事するなら働いて金を稼いでもつと蓄えを、と思われる事が多い……というかイヴァンから言われていたが、そうしない理由とも言えない理由は一応あった。

不安だった。シャーレイを一人家に残す事もそうだし、三人バラバラで外に行くのも。三人一緒じゃない事に不安を覚えてしまうようになってしまい中々離れる事が出来なかった。家の中だったり一緒に買い物に行く程度なら大丈夫だが、歩いて一分以内の場所に居ないと焦燥に駆られたり不安が押し寄せてきたりと色々と手遅れな状態になってしまっていた。その結果三人一緒のベッドで寝る事になったりして夜中の行為の回数が増えたりしたがそれはどうでもいいだろう。

生活費として回した金が尽きる前にこの生活をどうにかしなければとは思っている物の、何の脈絡も無しに依存先を奪われるという現象は予想以上に心に深い傷跡を残していたためか、どうにも一年以上はこのままな気がしてならなかった。

「ああああ……あ、終わった」

そうしてひなたがマッサージチェアに物理的に揺らされていたが、マッサージチェアは急にその動きを止めた。それがタイマーによる自動的な停止だとすぐ気が付き、もう一回、と先程のリプレイを再生するのではなく椅子から降りた。

右手を回して少しだけ違和感のある右肩を自分で解すと机の上に置いてあった先日買い物してきた時に買った本を手にとるとそれを片手に隣り合って座っているシャーレイとミラの隣に腰を下ろし本を読み始めた。これも最早何時もの如くなのでシャーレイとミラが特に何か言う事も無くシャーレイはそのままミラの肩に頭を乗せて昼寝を始め、ミラはコーヒー片手に読書をし、ひなたは煙草を啜えながらシャーレイにくっついて読書をする。

「……本に灰落ちるよ」

「慣れてるから平気」

「……私が困る」

「大丈夫大丈夫。まだ二回しかやらかした事ないから」

「……あの汚れって」

「あはは」

本は基本的に回し読みしているため、誰かが汚すと誰かが困ってしまうため結構慎重に扱っている。この場合ひなたが煙草の灰を本に落とすとミラとシャーレイが困ってしまう。

もう完全なヘビースモーカーのひなたにそう言っても彼女はその言葉を右から左に聞き流してしまう。ひなたが帰ってきてからすぐに好きなだけ煙草を吸わせたのが間違いだったかとミラは溜め息を一つ零し膝の上に置いてある本のページを捲る。ひなたは一度煙草を多く吸うと次の日からその時の本数に合わせて吸ってしまう大変困った癖を持っているため、現在のひなたの一日の煙草消費量は一箱に限りなく近い状態だった。

健康に悪いし肺は真っ黒になると悪い事尽くしなのは分かっているが止められない止まらない。煙草の味を知ってしまうとどうしてもそれを止めるなんて事は出来なかった。ヴァルコラキの屋敷に居る時も一日過ぎた辺りから彼女の体は煙を求めていたりした。

「……あ、ちよつとお酒持ってくるね」

読書に耽って既に何分か。ひなたは新しい煙草を啜え火を付けようとしたが、唐突に本を机の上に置き立ち上がるとそのまま一言告げて台所へと歩を進めた。それを見てミラが若干呆れた様な視線を向ける。

「……真昼間から。しかも毎日」

「ちよつとだけ欲しいじゃない?」

「……まあ、いいけど」

完全に駄目人間の道を爆走しているひなただった。

だが、この世界で駆除連合で生計を立てている人間の仕事の無い日の昼間なんて何処もこんな物であり、酒場に行かないあたりひなたは

まだ大人しい方だった。それはミラも分かっているため、その程度ならとお咎めなしで見逃す。

台所で彼女は片手で器用に果実酒をコップに注ぐとそれを片手に戻ってきた。

「……そういえば」

「んー？」

そうして戻ってくる間に一口だけ酒を飲んでいたひなたにミラが唐突に言葉を投げかけた。

「……スカート。なんでいきなり履くようになったの？」

会話の種は、今のひなたの服装だった。

上は何時も通りのシャツだ。だが、その下は何時も着ていたショートパンツではなく、ミニスカートだった。何時も何やかんやで二人に勧められても断ってきたひなただったが、ここに帰ってきてから買った買い物でひなたは急に自分のスカートを洋服屋で見繕ってくるに勝手に購入し、部屋着にした。

シャーレイとミラ的にはショートパンツよりはそつちの方が女の子らしくていいと思っっているのだが、何時も頑なに断ってきたひなたがいきなりスカートを履いているのは少し違和感があった。

「あー……なんか、慣れた？」

「……慣れた？」

それに対してのひなたの答えは、簡素な物だった。

ヴァルコラキの館に居る際、ひなたは何時もドレスだった。そのためスカートに慣れてしまい、最初は恥ずかしかったがシャーレイとミラに救出される頃にはもうどうでもいいやと思うようになっていた。別にスカートを履いたところで男の自分が無くなる訳でもないしと思いい、もう二人にはドレス姿を見られているからと思いい切って購入に踏み切った。

何だかシャーレイと会ってから自分が徐々に女の子してきたという気がしないでもない。というか男の頃の名残がもう殆ど消し去られている。TSして男の惚れる元男の気持ちってこんな感じで徐々に男の頃の名残を消されていたのかなあ、なんて時々考えているが少

なくとも今のひなたはシャーレイとミラという美少女に囲まれているため、特に考えないようにしていた。

「まあ、色々と心境の変化があったんだよ」

「……ドレスも着てたし」

「ありや着せられたんだよ。まあ、それが切欠なんだけどさ」

「……そっちの方が可愛いと思う」

「そ、そう？」

こうして可愛いと言われて無意識に照れながら喜んでいる自分も居る事だし。

精神は肉体に引つ張られるとかよく言われるがその通りなのかもしれない。

「そ、そういえばシャーレイってよく寝るよね」

そうして照れていると何だかミラから生暖かいような視線を感じたのでそれを遮るかのようひなたは話題を変えた。その話題は今のシャーレイの事であり、彼女の寝つきの良さについてだった。

シャーレイはよく寝る。昼寝をたつぷりとしても夜中にはしっかりと寝る。ひなたやミラは戦いに身を置いていたため、何時でも寝て何時でも起きれるように訓練してどんな時、どんな所でもしっかりと寝て何かあれば寝惚ける事無く起きるとい癖のような物も付けている。

だが、シャーレイは違う。彼女はそんな訓練していないし寝起きはそれはもう寝惚けまくっている。寝惚けまくって隣に寝ているひなたとミラに襲いかかり、朝っぱらからひなたが気絶しミラが疲労困憊という珍事件が先日あった位だ。それくらい寝惚けるし普通の女の子なシャーレイがここまで寝つきが良いのはちよつとひなたは疑問に思っていた。

「……スラム出身だから？」

「スラム出身だとしても……あー、大体わかった」

ミラが口にした事をひなたは口に出してリピートし、彼女の思っている事を大体察した。

「スラムも確かに寝れる時に寝ないと最悪死ぬからね」

「……それにしても寝起きが弱すぎるけど」

スラムに善意なんて一握りしか存在しない。シャーレイのような少女は悪意に搾取される対象だ。

だが、搾取されないように、自由を奪われないようにするには、大人から逃げ切る体力と身体能力、そして寝不足という自身の体を十全に動かせない要素を消すための睡眠は重要だ。

だから、寝れる時に寝る。そう考えればシャーレイが暇つぶし感覚で寝るのは至極当然とも言えた。にしては寝起きが酷すぎるが。

「ボク達も寝れる時には寝るけど……ここまでは寝ないよね」

「……明らかに寝すぎ」

もう特技に昼寝でも書けるレベルでシャーレイは寝つきが良かった。

二人は若干呆れた様な顔をしたが、すぐに笑って各々の本に視線を落とした。

そして段々と時は過ぎていき、陽は落ち、夜は暮れ、当たり前のように次の日へと繋がっていく。そんな、怠惰とも言えてしまう、平和な日常。

番外3

起爆銃。

ひなたのメイン武器にして替えの効かない相棒でもある。ヴァルコラキの件が起こる前にひなたがそのメンテをした結果、パーツにヒビが入っていたのは記憶に新しい。が、実はヴァルコラキ戦が始まった際、そのパーツはヒビが入ったまま交換されていなかった。その状態でひなたはヴァルコラキとの戦闘に入り、ジェノサイドバスターもジェノサイドブラスターもジェノサイドブレイカーもバカスカ撃ちまくった。しかし、起爆銃はその酷使の中何とか故障する事無く己の役割を果たしてくれた。

が、それでもパーツにヒビが入っていたのは事実。その状態で無理をさせて何やかんやでパーツ交換もメンテも忘れてボーっとしている事三週間が経過した。

ふと気が付きパーツを受け取りに行つたはいいが、一か月も来店しなかつたひなたに対して少し違和感を感じた店主が起爆銃の解体を若干無理矢理に行つた。そうして判明した事が――

「まさか銃全体が自壊寸前だったなんて……」

そう、外装も細かい所にヒビが入り、内部パーツに至っては殆どのパーツがボロボロだった。

限界が来ていた状態で何発もジェノサイド系統の切り札を撃ちまくっていた弊害だった。あと一回でもジェノサイドバスターを撃とう物なら本当に銃がバラバラになってしまふかもしれない、という所まで起爆銃はボロボロになっており武器屋の店主にひなたはド叱られた。正座までさせられて説教された。

一応ひなたにも事情はあると分かっていたから数分の説教で終わったが、それでも武器は大切にしろと念を押され、ついでに限界になったパーツの全交換もされた結果、金が面白いように飛んで行つた。それこそミラの剣を本格的なメンテに十回は軽く出せるレベルで金がすつ飛んで行つた。その程度で何とかなるからまだ良かったが、もしも壊れていたらひなたは部屋に引き籠るレベルでショックを

受けていただろう。それ位に色んな思いが詰まった武器だったため、金で何とかなるのならまだ安い方だった。内心ではヴァルコラキこの野郎と地獄に送られた真祖へ向かって中指を立てていたが。

「ひなたちゃん居ない間に私がやっておくべきだったかな」

「大丈夫だよ、大丈夫……多分、あの戦闘で銃全体にかなりの負荷がかかっちゃっただけだから」

今まで数回しか使ってこなかったジェノサイド系統をもう一生分かと思える位に撃つたのだ。あそこまで酷使したのならこの結果は至極当然とも言えた。

流石にこの歳になって異世界に来ても説教されるとは思っていなかったひなたはかなり疲れたような表情をしており、何時もはしっかりと伸びている背筋は今は丸まって猫背になった状態だ。ある意味ヴァルコラキ戦よりも疲れたと言ってもいいだろう。完全に過言だが。

成人してからの初説教に何となくの胃痛を感じながらもそうした疲れを紛らわすためにポーチの中を漁る。理由は何時ものように煙草を吸うためだ。

煙草の箱を取り出して中の煙草を一本、箱を動かしたり指で叩いたりして箱から出し、口に咥える。そしてライターも取り出した所で箱の中に携帯灰皿が入っていないのによやく気が付いた。箱を覗き込んで中に携帯灰皿が入っていないのを自分の目で確認してから箱をポーチの中に戻すついでに携帯灰皿がポーチの中にないか確認するが、中には財布があるだけで携帯灰皿は入っていなかった。

「……どうかした？」

「あー、いや。ちょっと携帯灰皿を忘れたっぼくて……」

と言いなながらも携帯灰皿を何処へやったか、頭の中の記憶を漁っていると、丁度昨日に携帯灰皿がいっぱいになったので掃除して、そのまま放置していたのを思い出した。それから携帯灰皿を触った記憶が無いので完全に家に忘れてきているのだろう。

自分が軽く無能に思えて頭を抱える。それに、さあ煙草を吸うぞ、と意気込んで吸えない時のもどかしさは結構辛い物がある。目の前

で好物をお預けされているような気分だ。

だが、ふとこの付近にスタンド灰皿が付いた公園があるのを思い出した。トイレの近くに無造作にあった筈だ。

「ちよつと近くの公園に寄っていいかな?」

「いいけど……ちよつとは我慢したら?」

「ははは、もう無理」

シャーレイと会う前なら一日一本だったんだけどね、なんて言いながら既にひなたの足は公園に向かっている。それを見てシャーレイもミラも溜め息を吐いた。

「……私もちよつとお花摘んでくる」

「あ、じゃあ公園の入り口で待ってるね?」

早く早くと足を動かしているひなたの後ろでミラがシャーレイにそう言っていた。目の前のヘビースモーカーがついでにもう一本、とかしないための見張りか、それとも丁度行きたくなくなったのか。どっちかはひなたには分からないが今は煙草の方が優先度が高かった。

そうこうし歩いて一分二分。公園に着いた三人はひなたが喫煙に、ミラがトイレに、シャーレイは公園の入り口で一人待つことになり、ひなたとミラは行く場所が大体一緒なので二人一緒に歩いていた。

「……煙草、少しは我慢しないと」

「いやー、我慢出来たら禁煙なんて言葉生まれないよ」

「……シャーレイがヒナタとのキスは煙草味って愚痴ってた」

「それは……我慢してもらうしか」

一日に二十本近くは吸うようになってしまったひなたとキスして煙草の味がしないのは食事の後か寝る前に歯を磨いた後くらいだ。それ以外は大体煙草に手を付けているため昼間だろうが寝る寸前だろうが基本的にひなたの唇は煙草味。この世界の煙草は一箱二十五本入りだが、日本なら一日で一箱。充分に吸い過ぎだった。

日本に帰る事が万が一、億が一にもあればきつとひなたは金欠で悲鳴を上げ続ける事だろう。だが、この世界の煙草は安いたため今のひなたは特に困っていない。

「じゃ、ボクはとつと吸ってくるから」

「……一本だけ」

「流石に外でそんなスパス吸わないよ」

トイレの前でミラと一旦分かれてひなたはトイレのすぐ近くにあるスタンド灰皿の前に立つてようやく煙を吸い込む。

煙が肺を満たしていく感覚に何とも言えない心地よさを覚えながら少し吸って生まれた灰を灰皿の中に落とす。悪い事も一切の間だけは忘れて自分の口から出てきた煙が空に昇り消えていく様子を見届ける。

思えばこの世界で煙草を吸い始めてもう何か月も経った。その間に色々あつて、何かある度に一日で消費する煙草の本数は増えていった。日本に居た頃は金の無駄だから吸わないとか言っていた記憶があるがこうして触れてみてしまえば一発で堕ちた。もう煙草は友達、人生から切つて離せない存在になってしまった。

きつとこれから一生煙草とは付き合つていくんだろなあ、なんてどうでもいい事を考えながら煙を吸い、ふと入り口で待っているであろうシャーレイに視線をやる。

何時も恥ずかしい目に合されているから視姦でもしてやろうかと思ひ視線を向けると、何やら見知らぬ男二人がシャーレイに話しかけているようだった。道でも聞かれているのか？ と思つたがシャーレイの表情を見るに何やら困り果てているらしく、男二人は結構いけ好かない表情をしている。よく見れば武器らしき剣を吊っている事から駆除連合で生計を立てている人間らしい。

時々シャーレイに触ろうとして避けられている所から、調子に乗つてナンパでもしに来た、という所か。男達の立ち回りを見てみると、そこまで腕の立つ人間という訳でもなさそうで、ひなた一人でもどうにかかなりそうだしミラが戻つて来たら文字通りぶん投げられてお星様になりそうな男達だった。

だからミラが来るまでシャーレイに耐えてもらう、というのを一瞬考えたが、どうにも惚れた子に手を出されるのはちよつと頭に來たらしく、ひなたは煙を吸うのを中断し煙草をスタンド灰皿に突っ込んでからシャーレイの元へ向かった。

「いいじゃん、ちよつと遊ぶだけだしさあ」

「だから間に合ってますつてば……」

「へーい、その彼女お茶しなーい？」

もう完全なナンパだった。しかも結構しつこいらしく、シャーレイの表情はもうミラを呼んで荒っぽく終わらせてもらおうか、なんて考えている顔だった。一歩間違えれば血が流れていたかもしれない。

ひなたもナンパっぽい感じでシャーレイに後ろから声をかけた。これは完全におふざけだが。

「へ？ あ、ひなたちゃん？」

「だいじよぶ？ 変な事されてない？ されてたらぶつ殺すけど」

「だ、大丈夫だよ……ちよつとしつこいだけで」

とは言っているが相当疲れた顔をしている。もうちよつと細かくシャーレイを見ておくべきだったか、と若干後悔した。

起爆銃が手元にあったなら今すぐにでもジェノサイドバスターでぶつ飛ばしている所だが、今はそれが手元にない。なので手八丁口八丁で退散してもらおう事にする。

「ん？ なんだこのガキ」

「黙れ短小」

「短っ……!?!」

喧嘩を売られたのでジャブとして中指立てつつ一言。

まさか相手は一言目で喧嘩を売られるとは思っていなかったのか見るからに精神的ダメージを受けているようだった。まさか完全に外見が子供のひなたからそんな煽りが帰ってくるとは思ってもしなかったのだろう。

「ナンパしないといけないレベルまで女が寄ってこない時点でもう論外だからお帰り願えるかなあ？」

「こ、このガキッ！ 舐めた口叩きやがってッ！」

「だって事実だし？ 強ければ勝手に女なんて寄ってくるのに寄ってこない時点でお察しだよねえっ！」

中指を立てながら挑発するひなた。こちらが口喧嘩でリード出来れば後はこっちの物だ。相手が手を出してきたのなら法の名のもと

に衛兵を引つ張つてきてしよつぴいてもらうだけだ。とは言っても、どうせ手を出された所で丸腰のひなたでもどうにか出来る程度の男達なのだろうけども。

相手が手を出せないのを良い事にこのまま煽り続けるのも別にいいが、これはこのナンパ男達を無視して公園の中に入ってミラがトイレから出てくるまで完全に無視し続けるのが一番いいかもしれない。そう考えれば後は実行に移すだけ。シャーレイの手を掴んで引つ張る。

「公園に入って待つてようよ。あまり人目に付きたくないし」
「そ、それもそうだね」

ミラさえ戻つて来たらシャーレイを連れてパパッと帰れる。余り面倒事に発展させたくないため煽りはしたがそれだけで済まそうとシャーレイの手を引つ張つて公園の中に入る。

「お、おいっ！ 勝手に話終わらせんなよっ！」
だが、そうやって自然とフェードアウトしようとしたひなたとシャーレイの内、シャーレイの肩を男の一人が無理矢理掴んで止める。

それを見てしまったひなたは。

「人の女に手え出すなよ」

そう呟きながら振り返り、すぐに相手を確認した後足振り上げた。

振り上げた足はシャーレイの肩を掴んだ男の股の間をそのまま通つていき、ちよつと気持ち悪い感触を残しつつ男の息子を直撃した。その痛さを知っているから加減する、という事は一切なく全力で蹴った。

そうするとあら不思議。男の顔色は一瞬で青くなり、そのまま自分の玉を抑えながら蹲った。自分でやって痛そうだなあ、と思つたが自業自得だとその思考を一蹴した。

「なっ!? こ、このガキッ!?」
「うっさい」

ついでにその連れが突つかかってくるのでひなたは威圧感丸出し

で男に近づいた。

先ほどの攻撃でビビったのか男は一步引きながらもひなたをなるべく威圧感を込めて見下す。が、それ以上の相手に威圧された事なんて腐る程あるので全く引かずにひなたは右手を伸ばした。

「うっ!?」

伸ばす先は、男の股の間。つまりは息子一式が付いた部分。そこをガツシリ掴んで潰れない程度に握りしめる。他人の逸物を握るなんて今までも無かったのでかなり嫌悪感が沸いたためすぐに手を離れた。

そして、耐え切れずに膝立ちになり自分の息子一式を抑える男に精いっぱい嫌悪感やらを込めた見下しをしながらトドメの一言。

「…………この粗チンが」

「ぐふっ……………」

この一言で男は完全に沈黙。何も言わずにそっと相方の男に肩を貸して立ち上がると、そのまま無言で去っていった。

「ペッ！ 一昨日来やがれ」

「よ、容赦ない…………」

唾を吐いて哀愁漂う背中を睨むひなた。それを見てちよつと男達が可哀想に思えたシャーレイ。

ひなたが男だからこそ分かるダメージの高い攻撃をしたのだが、想像していたよりもそのダメージは大きかった。右手をプラプラと動かしながらひなたは公園へと戻る。

「ちよつと汚物触ったから手洗ってくる」

「あ、うん。ありがとね」

「いいっていいって」

流石に他人のアレを握るのは初めてだったし何気にショックは大きかった。というか、握った時の感触が気持ち悪くて吐きかけた。

が、それ以上にちよつとショックだった事が一つだけあった。

「ガキかあ…………そっかあ、ガキかあ…………」

自分のフルフラットな胸を見下ろしながら手を洗うひなたの姿は哀愁に満ち溢れていた。その背中を丁度トイレから出てきたミラに

見られ首を傾げられたりしたが、それは些細な事だ。

なんやかんやでここに転生してきた時よりも女らしくなってしまうているひなたであった。多分、その理由はシャーレイに夜中襲われているのが九割を占めている。

数日後。三人が買い物をしに外に出た時の事だった。

「……あそこに何かいる」

ミラが何かを発見した。指を指して何やら汚物を見る様な目で見ているため、二人ともついついそっちを見てしまった。

その先に居たのは。

「お願いします！ 俺を罵ってください！」

「ママ、この人いきなり何言ってるの？」

「見ちゃいけません！ ほら、帰るわよ！」

「ああっ！ 一回だけ、一回だけでいいんです！ 一回だけ！ 先っちよだけ!!」

幼女に土下座して罵ってもらおうとしている何処かで見た気がする男だった。

『うつわあ……』

それを見たシャーレイとひなたは勿論ドン引きした。

が、ひなたの心の中にはちよつとした罪悪感が生まれた。ちなみに、風の噂だとその男の相方だった男はSM専門の風俗に通っているそう。

この世界も案外業が深いんだなあ、とひなたはその光景を見ながら苦笑いするしか出来なかった。

「あ、そこの方々！ どうか俺を罵って……」

「ヒッ!? く、来るなッ!!」

「あひいっ!?!」

ちなみに、その後ひなた達の方へ向かってきたためミラが撃退しましたとき。

番外4 ひにやた

ヴアルコラキの件から二か月程が経ったある日。その日は昼をちよつと過ぎたらで買い物に行こうという事で三人は家の中でゴロゴロしていた。その中で昨日の夜中にミラが多くまで久しぶりの剣のメンテをしていたからか昼が近くなってもまだぐっすり夢の中だった。

それ故かある悲劇が起こった。

「ああああああああああああああ!!?」

「ふあつ!? なにごと!?!」

太陽が真上に近くなってもまだ夢の中だったミラ。しかし、彼女は階下から聞こえてきたひなたの悲鳴のような声に無理矢理意識を覚醒させられた。

涎を垂らしながら折角いい夢を見て暖かい布団の中で眠っていたのにひなたの謎の悲鳴にたたき起こされたミラは一瞬夜襲か強盗かと疑いながらも袖で垂れていた涎を拭いてから杖を片方だけ手にして大急ぎで階下のひなたが居るであろう居間へと向かう。途中で階段から転げ落ちた。痛かった。

そして転びそうになりながらもミラは居間へと転がり込んだ。

「なにかあった!!?」

半分寝惚けた状態で声を荒げながら器用に走ってなんとかひなたを見つめる。

悲鳴を上げていたひなたは何かとんでもない物を見たといった表情をして頭を抑えており、シャーレイの表情は活き活きとしていた。

まさか真昼間からシャーレイにレ○プでもされかけたか? と思うがそれだとあんな悲鳴を上げるとは思えない。まさかハゲた?

と失礼な事を考えたが家の中でも風呂でもひなたの髪の毛がそうボロボロ抜け落ちている所を見たことは無い。

右手だけで頭そのものを抱えるようにしており、まるで何かを抑えつける様な感じだった。

まさか髪の毛を食われた? とシャーレイの方を見るが流石に髪

の毛を食べる程シャーレイは人間を止めてはいない。

「み、みらあ……」

「……ど、どうかした？」

涙目でこちらを見てくるひなたを見て一瞬加虐心が煽られるが今はそれどころじゃない。何があつたのかをちゃんと聞かないといけない。

が、こちらを向いたひなたを見た時、何時もと違う違和感を感じる。何か、ひなたに余計な物がある、気がする。

ひなたの腰辺りまで伸びた長い髪の毛。そこに紛れるように何かがある。明らかに髪の毛ではない毛で包まれたナニかが、彼女の腰辺りから伸びている。

「……にゃんかはえたあ」

そう言いながらひなたがそつと右手を動かした。

そして、彼女の頭から右手が除かれた瞬間、それは見えた。

彼女の銀色の髪の毛と同じ色をした毛に包まれた、三角形の物。見つめると時々少しだけ動いてひなたのどうしよう、という表情が加速していく。

そして、彼女の腰から伸びている物。それは彼女の頭から生えている物とセットになるものであり、その二つが彼女の可愛らしさを引き立たせている。その物体の名前は。

「……猫の耳と、尻尾？」

「うう……」

つまるところ。ひなたがひにやたになつたのであつた。

「ふかーっ！」

「……ヒナタ、落ち着いて」

猫の威嚇のように尻尾と耳の気を逆立たせてシャーレイに怒りを向けるひなた。そんな彼女の前に正座させられているシャーレイ。ひなたを何とか落ち着けようとしているミラ。ミラが起きてから

たった数分でこの家は大分カオスになっていた。

「渡された飲み物に薬混ぜられてたんだよ!? 流石にボクも怒らずにはいられにゃいよ!!」

「いやー、可愛いかなと思って」

「可愛いかにゃと思って、じゃにゃいよ!!」

とある日の真昼間から起こった珍事件。

その真相は結構早くシャーレイ自身が吐いてくれた。と、言うのも種は簡単にシャーレイが先日、皆と外へ出かけた時に怪しい出店で買った、人間に猫耳と尻尾を生やす薬を今日ふとした思い付きでひなたに飲み物に混ぜて渡して飲ませた。それだけだった。

そんなシャーレイのせいで猫耳と尻尾が生えたひなただったが、結構怒っていた。流石に飲み物に薬を混ぜて飲まされて怒らない程ひなたは聖人じゃないし、その薬の副作用的な物で「な」を発音すると自動的に「にゃ」になってしまったせいで違和感が半端じゃない。それに、これでは外に出かけられない。イヴアンだろうと見られたら恥ずかしすぎる。

急遽パンツルックからミニスカに履き替えた時に一応何処から尻尾が生えているか見てみたが、尾てい骨から尻尾は生えていた。そして、尻尾を触ってみるとくすぐったかったり気持ちよかったり何だか不思議な気持ちになった。耳の方も同じだ。

「……ヒナタ」

「ふかーっ……ん?」

「……リピートアフターミー」

「へ?」

「斜め七十七度の並びで泣く泣く嘶くナナハン七台難なく並べて長眺め」

「にゃにゃめにゃにゃじゅうにゃにゃどのにゃらびでにゃくにゃくにゃにゃやくにゃにゃはんにゃにゃだいにゃんにゃくにゃらべてにゃがにゃがめ……ってボクで遊ぶにゃあ!!」

「……可愛い」

ちよつと興味本位でひなたで遊んだミラだったが、よく噛まない

なあ、とちよつと思つた。ひなた自身もそれは思つたがそれ以上に遊ばれた事に少しお怒りだつた。

まあどちらにしろシャーレイの方へのお怒りが強いため威嚇はシャーレイに向いたままなのだが。しかし、そうして威嚇されている緒本人はひにやたにメロメロらしく先ほどからちよつと目が危ない色をしている。多分、性欲マシマシなシャーレイの事だからベッドの上で鳴かせたい、なんて思っているのだろう。

別にひなたの貞操の危機だ、とかは思つたりもしない……というか既に貞操なんて奪われているが、ここでシャーレイの好きにさせたら確実にひなたが気絶コースに持つていかれるため取り敢えずはひにやたをひなたに戻す方法を先に聞き出す事にした。

「……シャーレイ。どうやったたらヒナタは戻る？」

威嚇しているひなたの首根っこを掴んで持ち上げる事で静かにさせてからシャーレイに猫耳尻尾を生やす薬の効果が切れる時間を確認する。

「十二時間だつて」

「……結構長い」

片手で何とか解放されようと暴れるひなたをプラプラと揺らしながらさてどうした物かと考える。

半永久的な物なら確実に解毒薬のような物も売られる筈なので、ぐにでも戻せたが、時間制限があるとなるとそれはもう待つしかない。

今日は買い物に行く予定だつたが、下手に今のひなたを外に出すと要らぬ噂が流れる可能性がある。それに、イヴァンに会ったら確実に弄られてひなたが軽く傷つくか発狂してイヴァンに喧嘩を売りかねない。何時もの情緒不安定に加えてどうやら猫として気性の荒さも加わっているらしいのであまりトラブルの元を作ると後でひなたが拗ねかねない。

「……取り敢えずヒニヤタには煙草を与えておこう」

「ひにやたつて呼ぶにゃー！」

首根っこを掴んだ状態でひなたの口に煙草を突っ込み口も封じて

ひなたを落ち着かせる。どうやら効果は抜群だったようで煙草を口に突っ込まれてからひなたの動きが完全に無くなった。

はてさて、どうするものか。このままシャーレイに引き渡せば確実に時間まで気絶していてくれるが、流石にこの二人がやっている家の中で暇を潰せと言われても色々と困る。

「……ヒナタ？」

「うにゃー……」

本人にどうしたいか聞いてみようと声をかけたが、駄目だ。首根っこ掴まれた状態で和んでやがる。というか猫化している。どうやらひなたが飲んだ薬はただ単に猫耳尻尾が生えて「な」が「にゃ」に変化するだけじゃないらしい。

時間経過で徐々に猫化が深刻になっていたりしないよな？ と少しシャーレイの飲ませた薬に疑問を持ちながらも本人に喋らせるために一旦煙草を没収する。

「にゃ？」

「……何かしたい事ある？」

「したい事……？ 特ににゃいかにゃー」

「……外に行きたいとかは？」

「強いていうならさかにゃが食べたいかにゃ」

「……アカン、色々猫になりかけてる」

もうこのまま首根っこ掴んだ状態で放置しておいた方がいいんじゃないかとすら思えてきた。

没収していた煙草をひなたの口に戻して再び考える。魚は確かひなたが買っていた酒のつまみの中に干した魚があつた筈なのでそれを与えておくことにするが、ひなたがやりたい事がないとなるとこのまま家に居るのが一番かもしれない。性欲の獣がいるが、それはまあ……ひなたに逃げてもらう事にする。

「あ、これ凄くいいアングル」

と思っていたら何時の間にか目の前から性欲の獣が居なくなっていた。それに気づくと同時に自分の後ろから奴の声。振り返ると、そこにはひなたの下着をローアングルで観察する変態シャーレイの姿が。

今のひなたの恰好はミニスカの状態で首根っこを掴まれて吊るされているためしゃがんで下から覗き込むとそれはもう絶景だ。更に尾骶骨辺りから伸びる尻尾がスカートの中から出ているためスカートの一部がそれで持ち上げられひなたの下着が更に見やすくなっている。

それにミラが気が付き思わずドン引きし、そして次にひにやたが気が付いて顔色が徐々に赤に染まっていく。

「でも、ひなたちゃんに黒色の下着って余り合わないような……」

「散れ変態ッ!!」

次の瞬間、ひなたが火事場の馬鹿力なのか分からないがミラの手を跳ねのけて着地すると、そのまま振り返ってミラですら反応できない速度で右手を振るった。

そしてシャーレイの顔に刻まれる四本の線状の傷跡。

つまるところ、思いつきり引っかいた。シャーレイを。ひにやたが。

「いっだああああああああああつ!!」

「ふしゃーっ!!」

そして顔を抑えて地面をのたうち回るシャーレイ。もう女として色々台無しである。そんなシャーレイを猫のように片手両足を地面に付けて毛を逆立たせて威嚇するひにやた。あーもう滅茶苦茶だよと己の顔を抑えて天を仰ぐミラ。

取り敢えずは気が立ったひにやたを落ち着かせる事から始める事にした。変態は後回しだ。

「ゴロゴロ……」

「……もう完全に猫だよこれ」

「前が見えねえ」

何とか気が立ったひにやたを落ち着ける事に成功し、ひにやたはミラの膝を枕にして撫でられてご機嫌。そんなひにやたを見て溜め息

を吐くミラ。何処から仕入れてきたのか分からない位大きなバンドエイドを顔面に張り付けられ顔が完全に隠れたシャーレイ。もう色々とカオスである。

どうやらシャーレイはひにやたの警戒対象に入ってしまったらしく、少しでもシャーレイがひにやたを触ろうとすると即引つかかれて威嚇されてしまう。現在のひにやたに触れるのはミラだけになってしまった。百年の恋も冷めるといふ物なのか猫化した影響なのかは分からないがシャーレイにべた惚れだったひなたがここまでシャーレイを警戒するのは違和感が半端じゃなかった。

サラサラなひにやたの髪の毛や耳を撫でるのは確かに癒されるのだが、夜までこれでは少し疲れてしまう。というか元に戻った後にちやんと人間らしく振る舞ってくれるのが心配だ。

「私もひにやたちちゃん触りたい……」

ベリベリとバンドエイドを剥がして痛々しい傷跡を見せながらシャーレイが呟いた。

取り敢えず可愛くなるだろうから、という理由でひなたに菓を飲ませてひにやたにしたのはいが、それで触れなかったら意味が無い。そっと手を伸ばすがひにやたはすぐに反応して威嚇してくる。

しよぼんとするシャーレイだったが、所詮は自業自得なのでミラも慰めたりはしない。

そんなカオス空間でミラがひにやたを撫でていると、インターホンが不意に鳴った。誰か来客の予定はあったか？ と今日の予定を思い出すのが特に思い浮かばない。そう思っていると玄関のドアが開いた音がしてすぐに来客が姿を見せた。

「うっす。飲みに来た……なんじゃこりゃ」

来客はミラの父であるイヴァンだった。手には酒瓶が幾つか指の間に挟まれており、この家で夜中まで飲み続ける気なのが目に見えていた。

が、流石にこの状況を目にしてちよつと引いていた。

「……パパ、今日は、その」

ひなたがひにやたなのでまた今度に。そう言おうとしたが、その前

に机の上に酒瓶を置いたイヴァンがひにやたに近寄っていた。

「何だこりや。尻尾と耳？ 変なプレイか？」

そう言いながらイヴァンは何の遠慮も無くひにやたの尻尾を掴んで引つ張った。

「ふぎやつ!!？」

「お、おお？」

いきなり尻尾を掴まれ、さらに思いっきり引つ張られた事によりひにやたが小さく悲鳴を上げる。それに驚いたイヴァンが尻尾を掴んだまま少し驚く。

早く離れた方が、とミラは口にしようとしたが、ふとイヴァンの視線が尻尾の方に向いているのが見えた。いや、尻尾ではない。尻尾の生えている方。引つ張られた事で少し見えているスカートの内側をイヴァンは見ている。

「……パパ？」

「あ、いや、その……黒は合わねえんじゃないかなと思ってだな」

きつと見る気は無かったのだろうが、流石に年頃の女の子のスカートの中を見てこれは無い。ひにやたも顔を真っ赤にして涙目になりながらイヴァンを睨みつけている。

ミラはそつとひなたの頭の上に置いてあつた手を退けた。

「……やつてよし」

「うにゃああっ!!」

「え、ちよ、おい何する止めいっでえ!!？」

そして始まるひにやたVSイヴァンのキャットファイト。

それを見ながらミラはそつとイヴァンを追い出す用意をした。

その日の夜。ミラとひにやたは二人でベッドに潜り込んでひにやたはミラの腕を枕にして寝付いた。ミラもそんなひにやたを撫でながら寝付いた。

そしてシャーレイとイヴァンは。

「……深夜のお外って、寒いですね」

「……そうだな」

ドアの外に締め出された状態で正座させられていた。そして、その首には『私達は女の子の下着を覗いた変態です』と書かれたプラカードが下がっていた。

結局この二人は夜が明けるまで家に入るのを許してもらえず、次の日に猫耳が消え猫要素が無くなったひなたによる制裁のジエノサイドバスターで何とか許してもらえたのだった。ちなみに、ひなたのシャーレイへの好感度はちゃんと猫耳が生える以前に戻った。

第六十二魔弾

ヴァルコラキの起こしたひなたへの恐喝、そしてそれを利用した思惑は失敗に終わった。それによって三人は再び平穩を手にし前と同じような日々を謳歌し始め、既に三か月の時が経過した。

ひなたももうすぐ二十一歳の誕生日を迎える時であり、既にこの世界に来てから約一年半の経過していた。日本と比べれば少し不自由で娯楽も少ないこの世界での生活は半分以上が復讐に生きた黒い日々だったが、それ以外は明るく楽しい日々が大半だった。

この世界に愛着が沸いた、という事ではないがシャーレイとミラという大切な人が出来た以上、彼女は完全に復讐を諦めた。恩人とこの世界で初めて知り合った人たちを野生のラスボスとも言えるブラッドフォードに殺されたが、痛感してしまったのだ。真祖と人間の差という物を。いや、ひなたと真祖の差を。

真祖の中では比較的に弱いらしいヴァルコラキにすらひなたは勝てなかった。脅され、殺される所だった。なのに、ブラッドフォード相手に立ち回れるか、仇を取れるのかと聞かれたらそんな物は無理だと誰もが豪語する。それはひなた本人もそうだ。

だから、諦めた。完全に復讐を諦めシャーレイとミラと共に生きていく事を選択した。

しかし、だ。ヴァルコラキは気になる事を言っていた。

ブラッドフォードへの下剋上。つまり、この付近にやってきたヴァルコラキとブラッドフォードの抗争。それがひなたの中で一つの懸念を生んだ。

ブラッドフォードはこの付近に隠れ潜み、またひなたから大事な物を奪おうとしているのではないかと。

それを懸念したひなたはミラから殴ってでも止められないように一人でこっそりと調査を始めていた。

「……街から五キロ、南の方角。ブラッドフォードの気配なしと」

森の中でひなたは魔獣が消えていくのを目にしながらそう呟いた。チェツカーに倒した魔獣の名前が刻まれていくのを見届け、チェツ

カーをポーチに仕舞い再び起爆銃を手に持った。

依存度が高くなりシャーレイとミラから離れられなくなったのがヴアルコラキの件の直後。それを数時間だけならどうにか出来るようになったのがつい先週の事だ。近所に引越してきたイヴァンがようやく離れられるようになったか、とひなたとの酒の席で笑い飛ばしていたが、その方法はかなりの荒療法だった。

簡単に言えばシャーレイに一日の間に自分達を捕まえたら一日中シャーレイの言いなりになってあげるとミラと共に提案し全力で逃げるといふ犯されるか犯されないかが決まる究極の鬼ごっこを実施したからだ。そうしてひなたとミラは作戦通りに別方向へ逃げ、シャーレイがそれを追った。その結果ミラは捕まったがひなたは何とか逃げ切り三人は数時間程度なら離れ離れでも平気なようになった。ミラは翌日ずっとベッドの上で喘がされていたが。

そんなミラの尊い犠牲を得て依存を抜け出したひなたは予め考えていたブラッドフォードの調査を依頼を受けるついでに行っていた。真祖の気配に二週間近く触れていたからか真祖が近くなれば自分も吸血鬼としての末端である以上すぐに分かると思っているからだ。勿論、それは相手にも伝わるだろうが、気付いたら後ろへ向かって全力疾走したら追ってこないだろう、追って来ても駆除連合が動いてくれるからこちらは受動的な動きで問題ないだろうと高を括っていた。

それ故のワンマンでの調査だったが、北から始まり北東から回っていき既に南へ。五キロの範囲を調べていたが一向にブラッドフォードは見つからなかった。

だが、見つからないなら見つからないでそれは良い事だ。もしも付近に居たのなら、それはシャーレイとミラにも危険が及ぶ可能性があると言う事。これはそれを未然に防ぐための調査であり見つからないなら見つからないで困る事など一切なく、逆に喜ぶべきなのだ。

「さて、帰ろうかな。もう帰ったらいい時間だし」

起爆銃を片手に呟くとひなたは街の方角へ歩を進める。自分の足の代わりになってくれる乗り物なんて持っていないため勿論徒歩だ。バイクや車がこの世界にあればもつと遠くに行けたりもつと早く

帰れたりするのだが、無い物ねだりは出来ない。煙草を吸いながら自然に囲まれて歩くしか、ひなたには移動手段が残っていないかった。ミラやイヴァンなら飛び跳ねたり人間を止めたとしか思えない高速移動で五キロ程度ならすぐに移動できるがひなたにあの親子の真似事は出来ない。大人しく歩く。

一日で十キロの移動。中々にいい運動になる。既に慣れた移動距離だがそれでも歩き続ければ疲れるのは変わりないしそれに加えて魔獣とのガチンコの戦闘、駆除連合への報告も混ざれば帰ったころには結構へトへトだ。だが、そうして稼いできた金は中々の物で後十年もこんな生活を続けていれば寿命まであの家で普通に暮らすぶんには問題ない位の資金が溜まるだろう。だが、毎日という訳ではなく自分の気分で休みの日は作るため四十後半までは駆除連合の世話になる事だろう。それまでにバイクや車が開発されればいいのだが。

環境破壊防止と銘打って煙草の灰を持ってきた携帯灰皿に落とす。もう慣れきった動作を何度も行い、そして一本を吸いきると携帯灰皿に吸い殻を落とす。今日も元氣だ煙が美味かった。

そうして歩いている内にまた口元が恋しくなつて新たな煙草を口にする。最近は煙草をよく吸うようになってしまったからか基本的に外に居る間は歩き煙草をして煙を吸っては吐いて。それを繰り返している。なのでシャーレイ達と出かけていると時々持ち合わせている煙草が切れてしまったりしてしまつているため最近には既に空けた箱と新たな箱の二つをポーチに入れて持ち歩いている。ライターは最近、ここまで吸うのならとちよつと高くていいライターを購入した。今まではかなり安物のライターを使つていたため煙草の箱と一緒に入れられるサイズだったが、大きくなつてしまつたためポーチと一緒に入っている。忘れたりしたら煙草が吸えないので地獄だ。

ただ、火をつけるだけの道具にそれほどの価値があるかと言われれば無いので完全に金持ちの道楽のような感じになっている。

そうして歩く事大体一時間半。ようやく街の近くまで戻ってきた。中々遠いが慣れてしまえば多少の疲労感を感じるだけだ。むしろ今まで筋トレすらサボり気味だったのでここまで歩けるのはかなり体

力が落ちたとも言える。復讐に生きていた時は一日以上歩いていた時もあったからだ。

ようやく見えた街に一息ついてもう何本目かの煙草を携帯灰皿に突っ込んで新たな煙草を用意する。それに火を付け新たな煙草の煙を肺一杯に吸い込み吐き出す。この心地よさだけはどうしても忘れられない、なんて思っていると目の前に見知った顔が見えた。

「ん？ 嬢ちゃんじゃねえか。奇遇だな」

「あ、どうもです、イヴァンさん」

現れたのは近所に引越してきたミラの父、イヴァンだった。彼とは助けられ助けての仲だったが、ひなたが酒を飲めるのを知ってから飲み友達にシフトチェンジした。大体一週間に一度のペースでイヴァンは酒を持参してひなたと飲み明かしている。最初はシャーレイがイヴァンはひなたを酔わせて襲う気なんじゃ、と怪しんでいたが、イヴァンは亡くなった妻、ミラの母親のマイ一筋な上にひなたのような幼児体系はお気に召さないらしく全く手は出さなかった。寧ろ、酒の席で時々漏らすひなたの弱音等を受け止めてやる人生相談役のようになっていた。

そのためかひなた的にはイヴァンは頼れる大人という枠に収まっており、イヴァン的には手のかかる二人目の娘みたいな枠に収まっている。そのためか仲は結構良好だ。その内ミラもひなたとイヴァンに混ざって飲むようになるのだろう。それをイヴァンは何気に楽しみにしている。

「ここに居るってことあ……あれか。依頼か」

「はい、丁度帰りなんです」

「そうだったか。俺も今から依頼なんだ」

「珍しい」

「たっけえ酒買いききたんだよ……ってな訳で二十キロ先に湧いたドラゴン狩ってくるが、着いてくるか？」

「ボクに死ねと」

「ははは、冗談だよ。じゃ、俺はとっとと狩って来るわ」

「頼みますからハマして死なないでくださいよ？ 遺骨とか集めにい

けませんし」

「ドラゴン程度なら欠伸してても狩れるっての」

そんな軽口を叩き合ってからイヴァンはんじゃ、とひなたに声をかけて霞に消えるようにしてその場から消えていった。どうやら体術の一種であるらしいそれは一回教えてもらったがとてもじゃないが習得できなかった。ミラも幼少期にやろうとして出来なかったらしい。

そうして去っていったイヴァンだったが、ドラゴンを狩るという事は明日明後日辺りはイヴァンがドラゴンの肉をツマミとして持つてくることだろう。高級な牛肉みたいでとても美味しかったのを覚えている。

ちなみにひなたがドラゴンとタイマンをすると大体一分くらいで胃の中に送り込まれるか潰されるか骨まで焼き尽くされる。つまり絶対に勝てない。それを一人で片手間程度に狩ってくるイヴァンはやはりミラの父親なんだな、と実感させられる。ちなみにミラが両足があつた時に行ったイヴァンとの模擬戦は全戦全敗だったらしい。食人後の全力のひなたでも今のミラと互角に持ち込めるか怪しいのに万全だった頃のミラを圧倒するなんて頭可笑しい。

それを成している脳内リミッターの解除だったが、ひなたがやった結果酷い目にあつた。具体的には全身肉離れと筋肉痛と肋骨全骨折で無事に天に召されかけシャロンとルナと再開してきた。どうやらひなたの肋骨は定期的に折れる運命らしく直った直後にもう一回試したらもう一回折れた。もう一回シャロンとルナと会ってきた。もう来るなど言われた事は覚えていない。やはり文字通り血を吐く程の努力をしたイヴァンと生まれた頃からそうやって動けるように体を調整して完成させたミラの真似事は十年近くの間が必要だと言う事を痛感した。

というか十年程度である二人の領域にたどり着ける技をそう簡単に教えてもいいのかと聞いたら別段隠す気もないらしく気にしていなかった。最近シャーレイが筋トレしているのは気のせいだと信じたい。シャーレイがアレを身につけたら確実に毎日犯される。もし

かしたら孕まされるかもしれないなんて謎の電波も受信した。

そんなちよつと前の惨劇とこれから来るかもしれない惨劇と謎電波の受信を思い出しながらもひなたはようやく街に到着。短くなつた煙草の灰を携帯灰皿に落としながらひなたは駆除連合へと向かう。

最初は主人公のつもりだった。だけど蓋を開ければ自分なんてこの世界で生きる人間の、その中で更に木っ端程度の存在で、今持ちうる過去の経歴なんて汚点以外の何物にもならなくて。だから自分がヒーローなんて思うのを止めてこうして自分達に降りかかるかもしれない脅威を最低限の被害と自衛だけを目標に察知する事を望んでいる。

あんな能力やこんな能力が再現できればなんて思っていたがそんなのは勿論不可能で、あんな力やこんな力があればなんて思ってもそんな物が適当に作った小説のようにぽつと出で沸いてくる訳もなく、あんな漫画やこんな小説の能力があれば、なんて思って結局それは妄想のまま終わって。現実という物の残酷さとこの体の貧弱さと自分の精神の脆弱さを思い知らされるだけに留まって結局は自分でも自覚できるような情緒不安定な元男の出来上がり。そんな事を思い出してしまうのもあるし単にヤニカス化したというのもあるし悪い事を思い出したいくないしで結局は煙草を手放せなくなっている。

「……あーやだやだ。これじゃ何時か鬱になるよ」

唯一の右手で髪の毛を掻き上げてそのまま癖で頭皮を掻きそうになったが、なんとかそれを理性で止めて髪の毛を握りつぶすだけで抑える。こうして頭を癩癩だけで掻きむしるのは前から治らない癖だ。

新たな煙草で心の中を落ち着かせながら道を歩く。そして目の前にニヤニヤした大柄の男が現れる。ああ、どっかの街から流れてきた当たり屋の類か、とひなたは溜め息を吐きながら右手をそつと起爆銃へ向ける。そうしながらも一応面倒は嫌なのでそつと道を斜めに歩くと男は当たり前と言わんばかりに向かう先へ追従してくる。

外見だけは隻腕というのを除けば十分に美少女。それが煙草吸って歩いている物だからそれも一緒に使って脅せば何とか許してもらおうとひなたが下から出るとでも思ったか。しかも今はローブを羽

織っているため隻腕も見えていなければ起爆銃は見えていないからひなたが荒事で生計を立てているとも思われていない。

こちら辺に住んでいる人間はひなたに喧嘩売ったら病院送りも有り得るので喧嘩を売ってこないが別の街から来た人間はもう諦めるしかない。

そうしてこんな外見じゃなければ、と煙草を吸いながら溜め息を吐いていると案の定ひなたの半身に相手の半身……というか体格の関係上肩から下の部分に当たる。一応煙草は逆側に啞えて本当に怪我させるといふのは避ける。

「おっと、ごめんごめん」

ひなたは適当に言葉を放って歩き去ろうとする。

が、既に分かっていた恐喝がひなたを止める。

「おい待ちやがれ」

「黙れ下衆」

その言葉にひなたは起爆銃から放たれる魔弾で返した。訳も分からずに魔弾で額を撃たれた男は気絶こそしなかったがその衝撃で地面に仰向けで倒れた。

ひなたは起き上がられないように胸を足で踏みつけながらその額に起爆銃の銃口を向けながら煙草を吐き捨て魔弾を一つ噛み砕いて銃口に魔力の塊を作りながら口を開いた。

「ここでボクにこれ以上絡むか何でもありませんって一言言つて何もされないか。 Dead or alive? 」

「な、何でもありません……」

「相手の力量も分からないのに喧嘩売るなよクソ虫が。あと、これもボクは二十歳だ。そこから辺で恐喝しようつたって無駄だからな」

最大の威圧とゴミを見る目で男を見てから舌打ちをしてから行き場を失ったジェノサイドバスターを吐き捨てた煙草に当てて蒸発させる。

ちよつとマイナスな事を考えていたからか色々荒つぽかったのは非として認めるが当たり屋をしてこようと思つた相手が悪いのでこれはやり過ぎじゃないと自分に言い聞かせてから魔弾をリロード

して新たな煙草を啜える。別に治安が悪いとか何とか言うつもりはないしあんな人間を寄せ付けない案を持っていない訳ではないが標的にされる人の気持ちにもなつてほしい物である。あしらうのが面倒だ。

右手でとうとう頭をガシガシ搔いてしまつてからやつと駆除連合に辿り着きとつとと依頼の達成を伝える。それと引き換えに金を貰つてやつと帰れる。

「ようアカツキちゃん！ 一杯やつていかねえか!？」

「あー、遠慮するよ。一人だと潰れた時大変だしね」

「俺が介抱してやるつての!」

「うっせえロリコン！ 今度ミラ同伴で飲むから今日は帰る!」

その帰りに駆除連合にくつつ付いている酒場で顔見知りの男が飲み誘つてきたがそれを断つて駆除連合を出る。ちなみに声をかけてきた男は熟女趣味でひなたの事を性的な目で見てきた事は一度も無いため友人程度の付き合いはそこそこしている。本当に性的な目で見てきた人間とはひなたは付き合いを持たないのでひなたは結構ガードが堅いとか既に付き合い合っている男がいるとかレズだとか実は元男で今は女として生きている変態とか色んな噂がある。その内の一つは当たっているしもう一つは一部否定するが大体合っているので広めるのは止めてほしい。

美少女も色々と大変だと溜め息を一つ吐きながら帰路を歩く。その最中で先ほどの当たり屋男とすれ違ったがイイエガオを浮かべて起爆銃を見せつけたら何も言わずに去つてくれた。そうして数分歩いて辿り着いた家のドアを開ける。

「ただいま〜」

「あ、おかえり」

ちよつと疲れているからか語尾が伸びてしまつたがそれはご愛敬。夕飯の準備は済んでいるらしくシャーレイはソファに座つて本を読んでいた。何だかシャーレイを見た瞬間に彼女に孕まされるぞとか変な電波を受信したが気のせいに過ぎないのでそのままローブを脱いで起爆銃を適当な場所に置いてからソファにダイブしシャーレイ

にそのまま抱き着く。

「ひゃっ!？」

「ああ……疲れたあ……」

抱き着いてからズルズルと身体を移動させて結局シャーレイの膝に顔を埋め、その心地よさに癒される。シャーレイはビツクリこそしたが拒否せずに甘えてきたひなたの頭を撫でる。その心地よさに駄目になりそうになる。

「どうしたの？ 何かあった？」

「いや、何も……ただちよつと疲れたから」

「そうなの？ まあ、それならいいけど」

別に無かった事は無いのだが、当たり前屋が絡んできた程度なら何も無かったという分類に十分入るので特に何も言わない。

そうしてシャーレイに甘えながら猫のようにしているとふとシャーレイの首に目が行った。

そういえば最近シャーレイから吸血していないなあ、と最近の夜を思い出して考える。夜中は何時も吸血衝動が限界になつて吸血する前にシャーレイから襲われるそのままミラも寝ているのに襲われてるし幻肢痛が来ても吸血させてと言う前に胸を揉まれてそのまま行為に移行させられて気が付いたらミラも襲われてて幻肢痛は消えているし。あれ、最近襲われる頻度多すぎ？ と思つたが前からこうだったと思ひ込んで吸血の事に戻る。

最近血を吸つたのが何時だったかと思ひだすと、直近の記憶がヴァルコラキの腕を食つた時だけ。吸血鬼っぽいけど実は吸血鬼じゃない食人鬼寄りの吸血鬼なのに血を吸つたのがそこまで前つて、とひなたは自分の構成要素である物の一つが最近薄い事に気が付き苦笑い。

だが、今なら吸つてもそのまま行為に持ち込まれないんじゃないかと思ひシャーレイに聞く。

「しゃーれいいい……」

「んー?」

「血い吸わせろお」

「え? 別にいいけど?」

「やったぜ」

許可を貰ったのでひなたはシャーレイの体を這いあがってそのまま首筋に齧り付く。

「んっ……」

なんだかシャーレイから色っぽい声が出た気がするが気にしない。そのままシャーレイの首筋に付けた傷から血を頂く。

シャーレイの血は何だか、甘い。甘くて、美味しくて、病みつきになる味だ。ミラの血も一度だけ吸ったが、ミラの血も甘いがシャーレイ程ではなく、あっさりとした感じだった。ヴァルコラキの腕ごと吸った血は不味かった。鉄分オンリー。吐き気がした。しかも何だか蟹の食べられない所みたいな味がした。

久しぶりのシャーレイの血の味に喉を潤しつつ自分の中の吸血衝動が満たされていく心地よさを感じシャーレイの味を楽しむ。ああ、美味しい。美味しくて、甘くて、ずっと吸っていたい。だが、そのまま吸っているとシャーレイが干からびるのでシャーレイが貧血にならない程度で吸血を止める。

「ぶはっ……美味しかったよ、シャーレイ」

「ん……」

「……シャーレイ?」

吸血を終えて顔を上げたが、シャーレイの様子が可笑しい。密着していた体を離してシャーレイの顔を見てみると、シャーレイの顔は真っ赤だった。

あれ? と疑問に思うがすぐに思い出す。

そういえば最初に関係を持ったとき……というかシャーレイからレ○プされた時、自分は何をしていたか。というかシャーレイに何をしたか。その時シャーレイから何を言われたか。

確か、吸血される側って発情するんだって、と思いだしたが時すでに遅し。シャーレイは本を投げ捨ててひなたを抱きしめるとそのままソファの上にひなたを押し倒した。

「ぎゃああ!!? 気づくの遅かったし逃げるのも遅かったああ!!?」

「はあ、はあ……吸血してきたって事はそういう事だよね!? 誘って

るんだよね!？」

「ちよ、そういうコトは夜にして!? 吸血は単純にしたかっただけだから!!」

「え!?! セツ〇スしたかったから!？」

「突発性難聴止めようか!?! そんなもって服脱がすな股に手を伸ばすな胸揉むなあ!!」

吸血によって発情したシャーレイがひなたを押し倒して服に手をかける。ひなたの目は吸血によって紅に染まっていたがシャーレイに押し倒されて涙目になっている。

アカン、これ夕飯前に美味しく頂かれて明日まで気絶コースだ。そう確信したひなたはすぐに抜け出そうとするが勿論抜け出せない。シャーレイの方がひなたよりも力が上という残酷な現実は変えられなかった。

「ほ、本当にそういうのは夜寝る前じゃないと——あっ」

そしてひなたはシャーレイに美味しく頂かれ、途中で帰ってきたミラがレ〇プ目のひなたをどうにかして救出しましたとき。

第六十三魔弾

何とか吸血からの行為を気絶寸前に終わらせ夜中にまた頂かれ結局気絶した日の次の日。つまりイヴァンが暇つぶし感覚でドラゴン狩りに向かった翌日。朝から腰が痛かったり疲労感を感じたりと結構キツイ朝を迎えたひなたはこの日は狩りにもブラッドフォードの調査にも向かわずに家でゆつくりと疲れを取る事にした。

だが、そういう名目で家で待機しているのは何だかニートをしているみたいで落ち着かなかったので適当に散歩しつつも街の中でブラッドフォードの情報を集め続ける事にした。

とは言っても街の中で集めれる情報なんて高が知れているためひなたは疲れた体と痛い腰と下半身に鞭を打ってスラムへと向かった。何故ここでスラムかと言えばそれは情報屋が存在するからで情報屋なら何かしらの情報を掴めるかもしれない、と思ったからだ。何もないなら何も無いでいいのだが、何かあった場合はその場で即避難計画を練って隣国までイヴァン同伴で亡命する事も考えなければならぬ。

イヴァンならブラッドフォード相手でも何とかなる、と普通なら思うかもしれないが、一度ブラッドフォードの相手をしたひなたなら分かる。アレはどうしようもない。倒せるとか倒せないとかの次元を超えている。野生のラスボス、なんて言葉じゃ生ぬるい。野生の裏ボス。そこまで言えるのだ、あの真祖は。

だから、早めに逃げる算段を付けるためにブラッドフォードの情報を何かされる前に集める必要があった、のだが。

「……すまん、ソイツの情報はこっちでも入ってねえ。いや、仕入れようとしたら無理だったって言うべきか」

「あー……ごめん、こっちも無茶言ったのは分かってる。でも何か情報が入ったら教えてほしい」

「それなら問題ない。一応、金は先払いになるけどな」

「大丈夫。これに関しては金に糸目をつける気はないからね」

大事な人達と自分の命を金で買えるのなら安い方だ。そう頭の中

で結論付け今回のために用意していた自分の小遣いを払う。その額はやはりと言うべきか、あの家を買える位の金だった。

それを渡すと情報屋は満足そうに頷いてそれを受け取った。これを持ち逃げされる可能性は無いと断言できるが、情報が入ってこなかった場合はこの金は意味を成さないが、それでも保険のような物だと割り切れば何の気兼ねもなく払う事が出来る。

こうして金を払った以上、情報屋は絶対に依頼を守る。だから、ブラッドフォードの情報が入ればその一時間後には家のポストに手紙が入る事だろう。その手紙の自身を確認したらすぐに逃げられるようにしておけば後は何も問題はない。

「じゃあ、この依頼は内密に。その口止め料もその中に入っているから」

「それは勿論。お客の信頼こそが俺達の生きる道なんでね」

「信用しているよ、情報屋」

「今後もぐい鼻屑に、嬢ちゃん」

勿論、これからも使つていくつもりだ。

使える物は遠慮なく使う。それが金を使う物だったとしたら、そのための金は何の遠慮も無く小遣いから捻り出す。それで命をどうにか出来るのなら安い物だ。なんて言ってみるが既に小遣いが底を尽きかけているためどうにかしてまた金を溜めていかなければならない。暫くは駆除連合漬けの日々が続きそうだった。

情報屋の隠れ家を出てスラム特有の性欲塗れの男共の視線に晒されながら溜め息を吐きつつ歩いていく。そうして歩いてスラムから出てやつとあのウザったい視線の群れを抜ける事が出来たとホツと一息を着いて右肩を回しながら家に煙草を啜えて煙を吸っては吐いてを繰り返しながら向かう。

歩き煙草を日本でしていたら外見もあつて絶対に何か言われるだろうけど、そうした煩わしいのがないのはこの世界の良い点だな、と考えながらこのパワーバランスがぶっ壊れた世界の良い点を探し当てる。

生きるだけならこの世界は本当に理不尽が多すぎる。具体的には

真祖とか真祖とか真祖とか。それはひなただけだと各方面から言われそうだが、今のところ命を失いかけた事件が九割程真祖に関連しているのでひなた的には真祖がキツイとしか言えない。

そんなどうでもいい事をポーっとしながら考えていると丁度イヴァンが引越してきた近所の家の前をすれ違った。一人暮らしだと言うのに家が広い。一回だけお邪魔したが一人暮らしなのにひなたの買った家位広かった。稼ぎの差を見て自分って本当に矮小な存在だなあ、なんて思ったのは仕方ない事だろうか。

ちよつと嫌な事を思い出して憂鬱になりながらイヴァンの家の前を通り過ぎようとすると、丁度そこでイヴァンが家から出てきた。

「あっ」

「ん？ おっ、嬢ちゃんか」

「ども」

家から出てきたイヴァンの手には袋が握られていた。昨日の事から察すると、恐らくその中はおすそ分けのドラゴンの肉だろう。ちなみにドラゴンの肉は出回らない貴重な肉なので今からでも涎が止まらない。

「丁度昨日狩ってきたドラゴンの肉を分けに行くつもりだったんだが」

「有り難く頂きます」

「そうしてくれ。俺だけじゃ腐らせちゃう位あるからな」

そう言ってイヴァンは手に持っていた袋をひなたに渡してきた。それを片手だけで受け取るとそれはどっしりと重い。片手だけだと思わず落としてしまいそうになった。

大体十キロ前後だろうか。確かに三人いるからそこそこ量を食うが、それでも女三人が食う量なんてイヴァン一人と半分程度の物だ。ミラがそこそこ食べるがそれでも年頃の少女より少し多い程度しか食べないためこれだけあると消費しきるには腐らせるギリギリまでかかるだろう。もしも本当にギリギリになったら残りは干し肉行きだ。この世界に冷蔵庫があつて本当によかった。

「んじゃ、渡すモン渡したし俺は用事済ませに行くかな」

「何かあるんですか？」

「いやな？　なんか駆除連合の上から変な招集をされちゃって。俺なんかしたかなあ……」

駆除連合の上層部からの招集。そう聞くと嫌な予感しかしないが、ひなたもかつて魔獣をジェノサイドバスターでオーバーキルしてちよつと近くの街の家の屋根を削るという事をやらかしお説教目的で招集された事もあったので特に身構えはしない。

「街一個滅ぼしてもしました？」

「いや、俺もそこまで人外じゃねえからな？」

「ええっ!？」

「おいオーバーリアクションすぎ……おい、何だよその顔。冗談だよな？　冗談で言ったんだよな？」

勿論、冗談なのだが余りにもひなたが迫真の演技をしたため本気でひなたがそう思っているように受け取られた様子。ひなたは笑って冗談ですよ、と告げるとかなり訝しい目で見られた。本当に冗談だったば。

何だか元は同性だったからかイヴァンとは結構話が合う。流石に下の話には付いて行けない風な事を言っではいるけども大体の話にはついて行けるため時々シャーレイにイヴァンとの関係を怪しまれている。本当に本命はシャーレイだけだ。ミラも好きだが。

後、まだミラとの体の関係はイヴァンにバレていない、筈。時々イヴァンが責任取れとか言ってくるが本当に気が付いていないと思う。思いたい。バレたら殺されるかもしれない。一人娘がレズの毒牙にかかったと知ったらイヴァンが何してくるかなんて想像できないからだ。

「じゃあ、ボクは帰りますね。お説教、頑張って耐えてください」

「うへえ……五十近くになってお説教とか勘弁してくれよ……」

ひなたはその言葉に苦笑で返してから最後に肉の札を改めて言って家に帰った。

家に帰るとシャーレイがすぐに出迎えてくれた。

「おかえり〜」

「ただいま。あ、途中でイヴァンさんからドラゴンの肉貰ってきたよ」「あ、そうなの？　じゃあ今日の夕飯はこれかな……って、当たり前のようにドラゴン狩ってくるよね、あの人……」

「そりゃあの人、人類トップクラスですし」

最初は驚いていたが、今じゃお裾分けのドラゴン肉と聞いてもあまり驚いていない。ミラですらもう狩るのには十分な準備が必要なのにそれを片手間で狩ってくる。やはり人類トップクラスは元男の隻腕魔弾使いとは訳が違う。

自分もアレくらい強かつたらなあ、と妄想はするが魔弾使いがあそこまで強くなれるなんて前例が一切ないため諦めるしかない。前例が無いけど努力次第で、とか言えるほどひなたは歴代トップクラスの魔弾使いになった覚えはない。

「ミラちゃんのお父さんだもんね……いいなあ、あんなお父さんが居てくれて。私のお父さんは産まれてすぐの幼女をスラムに捨てるド畜生のクソ野郎だったからね!!」

「物凄いいい笑顔で酷い自虐は止めて。どんな顔してどんな言葉を返せばいいか分からなくなる」

そして良い笑顔で放たれたシャーレイの自虐にひなたは微妙な顔をするしかない。シャーレイは本当に気にしていないが、ひなた達のようなその当時の心情を把握しきれない人からしたら笑えない言葉だ。

しかし、ひなたももう自分を産んで育ててくれた母親と父親にはもう会う事が出来ない。いや、もう肉体すら変わってしまった両親が育ててくれた要素は精神しかないのだが。それでも育ててくれた両親ともう会えないと、辛いから忘れていた事を思い出すと軽くホームシックになってくる。

最近はずっと女らしくなってきたままでいるひなただが、まさか両親も知らぬところで息子が娘になって年下の少女に処女まで奪われているなんて予想だにしていなかっただろう。自分ですら聞いただけじゃ信じられない事ではあるのだし。

「はあ、実家に帰りたい……」

「実家とかもう覚えてすらないよ！」

「だから自虐止めろや！」

ちよつとホームシックになってふと思った。

こうして異世界に強制的に転移させられたはいいものの、日本での今の自分は一体どんな状況になっているのだろうか。

行方不明だろうか。多分行方不明だろう。それはそれでいいのだが自分のPCはどうなっただろうか。友人達はふざけて言ったHD内のデータ全消去をしてくれただろうか。ついでにあっちの世界に忘れていったスマホの画像フォルダとか整理しておいてくれただろうか。

こうなると分かっていたらPCもスマホもデータを全削除しておいたのに、と溜め息を吐く。どうせ暁陽太という男はもうどの世界にも存在していないのだし、削除して困る物でもない。日本でつるんでいた友人達に真実を告げても信じてくれないし信じてくれた所でどうせやらせてくれとかふざけて言ってくるに違いない。

日本の事を思い出しただけで憂鬱になってきた。だから情緒不安定とか言われるのだが。

「取り敢えず、ドラゴン肉の保管とかお願い。ボク、ちよつとアルコールと煙キメてくるから」

「言い方！」

多少の仕返しも込めて酒飲んで煙草吸ってくるだけの事ををかなり酷い言い方で告げてから冷蔵庫から果実酒を取り出してついにつまみとして前に作ったドラゴン肉の干し肉の余りを右手にソファに座る。

「はあ……至福の一時」

最早駄目人間を極めているとしか言えない真昼間からの酒と煙草。その贅沢を味わいながらひなたはふと考える。

イヴァンが説教されに行ったわけだが、ここ最近は何だか色々不穏な事が続いている。シャロンの事もそうだし、ルナの時に見た未だに情報が無い水の魔獣。そして、ヴァルコラキ。真祖繋がりが二つに明らかに前例のない事件が一つ。

何か裏で動いているのでは？ そんな想像を働かせた結果、ひなたの第六感何かを告げ、悪寒が走ったが、きつと気のせいだろう。今までの第六感の働きっぷりを考慮しこれは気のせいだと結論付けそのままひなたは嫌な想像を酒と共に飲み込んだ。

第六十四魔弾

翌日。ドラゴンの肉は美味しく頂き余った分は冷蔵庫へと保管しひなたは何時も通りに駆除連合へとむかった。その理由は勿論金稼ぎであり昨日使った金を取り戻すためでもあったのだが、何処か駆除連合の中が何時もよりも騒がしかった。噂でも流れているのかと思いきや耳を立てようとするとするがとてでもないが聞こえない。

今朝はミラが朝早くから出かけており、見送る事すら敵わなかった。それを寝起きの状態で朝食だけ作って見送ったシャーレイによると、ミラの表情はかなり険しく、家を出てからすぐにイヴァンと合流し何処かへ向かったとの事。理由を聞いても全部決まったら話す、とだけ言つて何も教えてくれなかったらしい。ちよつと訝しんだらしいシャーレイがひなたに相談してきたが、ひなたにも何でそんな事をしているのかは分からなかったため首を傾げるしかなかった。

しかし、駆除連合はそんなミラ達の様子と比例するかのよう騒がしくどこもかしくもワイワイガヤガヤ。とてもじゃないが気にしないという訳にはいかなかった。

噂を聞こうとしても周りが五月蠅くて聞き取れやしないので一昨日ひなたを飲みについた男を目ざとく見つけるとひなたはその男へ向かつて歩を進めた。

「やっほ」

「ん？ ああ、アカツキちゃんか」

男は何時も飲んだくれてるのに今日だけは酒を手を持っていなかった。それだけで何か可笑しいと思つたが、内容を聞いてみなければ分からない。取り敢えず、この男はこの騒がしさの理由を知っているのだつたので躊躇なくその理由を聞いてみる事にした。

「この騒ぎ、一体何？ ミラも今朝早くに出ていったし……」

「ああ、知らないのか？ ……まあ、アカツキちゃんも駆除連合員だし別にいいか」

「どうやら、この情報は駆除連合員でないと知らない情報らしい。よっぽど外部に漏らしたらマズい情報なのか。」

だが、この世界は案外平和そのものだしそこまでの脅威が来るとは思っていないのでひなたは一応驚きはするが笑いながら逃げる準備に入るための心構えをしてからこの駆除連合全体を揺すっている情報を聞くことにした。

しかし、その情報はとてもじゃないが有り得ない事だった。

「隣国が全部滅んだ。しかも、たった一晩でな」

「……は？」

その言葉はひなたを驚かせるには十分だった。

この国の隣の国。それはかなり強大でこの国と同等レベルの国だ。ひなた自身、足が自らの足しか無かったので結局行く事は無かったが、陸がかなり広いこの国には一つの大陸にヨーロッパやアフリカレベルの大きさを持った国がゴロゴロとある。そして、この国は東西南北全てを国で囲まれている。

しかし、そんな広い土地で戦争をしたら幾ら魔法があるこの世界でも色々大変なので貿易をする事で戦争を避け続けてきた。

そのため隣国とはかなり仲がいいのがこの国なのだが、その周りの国が全て滅びた。地球風に言うなら中国、ロシア、カナダが一つの国と戦争し、その三つの国が一晩にして滅んだと言われるレベルだ。

そんな事を言われればひなたとて開いた口が閉じない。というか信じられない。冗談だと言って笑い飛ばしたい気分だが、それでもマヤーズ親子が朝っぱらから出払っているという事は駆除連合が国の問題に関わっているという事だ。でなければトップクラスの人間をそう簡単に招集しない。

「それで、今お偉いさんがトップクラスの連中と作戦会議中だ。依頼も一旦受けられないからどうしようもなくてな……」

「だからミラも……」

「そういうこつた。つたく、何があつたんだか……」

まさか魔獣が一気に進行してきた？ いや、魔獣程度ならそこまでの大参事にはならない筈だ。魔獣程度なら幾ら数が居てもイヴァンのような人間が幾らでも討伐する筈だ。それに、トップクラスだからと言ってイヴァンレベルが世界に数人しかいない、という訳ではな

い。彼レベルならこの世界には百以上いる。隣国とこの国だけでも三十か四十は居る筈だ。

だと言うのに、滅んだ。しかも一晩で。かなりの面積を誇る国が、一気に。

訳が分からない。そんな事が出来る戦力がこの世の何処にある。そう考え、一つだけ思い至った。それが出来る戦力を。いや、それを成せる種族達を。

「……真祖？」

人間なら不可能。だが真祖なら？

結論から言えば可能だ。ブラッドフォードだけでも一つの国を一晩で落とす程度造作もない。そのブラッドフォードが真祖を集め率いたとしたら？

十体も真祖が居れば各国に三体ずつ配置して残り一体を遊撃にしたら国なんて一晩でそれ位落とせるだろう。ヴァルコラキなんてまだ真祖の中では弱い方だ。それ以上が三体襲ってきたら、それこそ国何て一晩も持たない。

あの地獄のような光景が国全体に広がった。それを想像するだけで息切れをして動悸がして吐き気が襲ってくる。今まで語ってもうこちらから手を出さなければ見ることは無いと思いついていた光景がもしかしたらこの国全体で見えてしまう。その被害者の中にはシャーレイと、ミラも。

そう考えてしまうだけでトラウマとしてあの時の記憶が刺激されて今すぐこの場に吐きたくなってしまう。

「お、おい、どうした？ 顔が真っ青だぞ？」

「な、何でもない……何でもないんだ……」

いや、きつと考え過ぎだ。きつと気のせいに決まっている。

そう信じ込んで込み上げてきた吐き気を何とか飲み込み煙草を口に咥え、火を付ける。

心を落ち着けるために煙草を吸おうとしたが、目の前で揺れる炎と紙と葉が焼ける臭いがあの時を想起させてしまい思わずせき込み吐きかけてしまう。

「ごふっ!? げほっ、ごほっ!」

「ほ、本当に大丈夫か!」

「だ、大丈夫。咽ただけだから……」

煙草すら吸えないか。ひなたは自分の心の弱さを嘆きながら火を付けたばかりの煙草を携帯灰皿に突っ込む。きつと、今この状態では血を吸う事も見る事もままならないだろう。あの時に見た、聞いた、嗅いだ物全てがトラウマとなって襲い掛かってきている以上、それを抑える手立てがない。

唯一のメンタルケアが出来る煙草すら今はトラウマの想起の原因となってしまうている。いや、今の自分の体そのものがトラウマになってしまっても可笑しくない。これだから情緒不安定な女の心は、と深呼吸しながら何とか落ち着きを取り戻す。

「まあ、なんだ。逃げるにしても周りがアレだしな……こっそり逃げれるようにしておいた方がいいかもしれないぜ? 俺も女房達と逃げる用意しておくからよ」

「あー……本当にその通りだ。今のうちに馬車の予約でも取っておこうかな」

「あ、でもマイヤーズちゃんも逃げるんなら多分国が馬車出してくれりぜ? なんかトップレベルの奴等の家族と知り合いは国の避難所を使えるらしいからな」

「何それ、ずるい」

「代わりに死ぬまで戦えって事だよ」

家族の心配は排除してやるから戦って来いと。一瞬なんだそれ、と思ったがよく考えれば勝たなきや家族も死ぬのだしそれまでに事故で死ぬという事が無いのなら家族のためにとと思う存分戦える。

よく考えられている、と素直に思った。そして、男の言葉を訂正するのならミラが戦わなくても戦っても国はどちらにしろひなたとシャーレイの分の避難所を確保してくれる。どうせイヴァンはミラを避難させるしそれに応じあかったらその権利はミラがひなたとシャーレイに流す。そして受けたとしてもどうせならひなたとシャーレイも、と二人と一緒に避難する。

自惚れているのでなければそうなってくれるだろう。そうしてくれると信じている。体を重ねた関係でもあるのだし。

「まあ、そっちも頑張れや。こっちも何とか頑張るからよ」

「うん。何かあったらボクの名前を出してイヴァンさんを頼っておいて。アンタはボクの唯一とも言える飲み友達だし、悪いようにはしない筈」

「分かった。詰んだら迷わず助けてもらう事にするよ」

一番なのは勿論そんな事態が発生しない事一択なのだが。しかし現実と言うのはそういう甘い物を見逃してくれない時がある。だから、それ等を回避できるように精いっぱい対策を練っておくのが一番だ。

昔のひなたなら確実に無視していた、もしくは一人で勝手に逃げていた案件だが、今はそこまで冷酷ではない。すぐに帰ってシャーレイと一緒に荷物を纏めて逃げる準備をしておくのが一番だろうか。いや、その前にミラが戻ってくるのを待たなければならない。ミラも一緒でなければ駄目だから。

若干キリキリしてきた胃を抑えながらひなたはその場を去る。なんだかこの世界に来てから精神と胃が半年以上休まった試しがない。というかもしれない。三か月の三か月が最長かもしれない。どれだけ濃い一年半を過ごしてきたんだ、と自分のTSしてからの人生の濃さに驚愕する。

確かに昔はこうだった物語の主人公的な感じで問題に巻き込まれて自分の手でそれを解決していく生活を夢見ていた時はあったが、チート能力も何も無ければこんなの辛いだけだ。幾つ胃があっても安心できない。あるだけ胃潰瘍になって血を吐く未来しか見えない。頼むから心と胃に安らぎを、とクソツタレな神様に願いながらひなたは駆除連合を後にしようとする。

が、しかし。今願いを馳せたクソツタレな神様は心の安らぎを今しばらく許してくれないらしい。

「おっ、よかった」

そんな声を聞いた。その声は最近聞き慣れたイヴァンの物だった

が、いきなり背後にイヴァンの気配と声を感じたため吃驚して一瞬心臓が止まりかけた。冗談だが。

そうして声を聞いた瞬間、ひなたは後ろから首根っこを掴まれてそのまま持ち上げられ、イヴァンの肩に米俵のように担がれた。

「えっ？」

「はい嬢ちゃん確保。何も言わず着いてこい」

「いや、ちょよ!？」

そして何か言う前にひなたはイヴァンに担がれてドナドナされる。せめて事情だけでも話してと担がれた状態で抗議する物のイヴァンはどこ吹く風と言わんばかりに何も聞かずそのままひなたを駆除連合のカウンターの奥まで連れていき、明らかに関係者以外立ち入り禁止の場所へと連れていくと通路の途中にあつた部屋にひなたを担いだ状態で入った。

その部屋の中でイヴァンに何かされるといふ可能性は一切考えていないが、いきなり連れていかれた事でもう内心ビクビクであり、まさかミラと体の関係を持った事でキレたか？　と思ってしまうぐらいだ。

だが、そうして連れ込まれた部屋の中は一言で言えば会議室だった。

真ん中に大きな机があり、それと対するようには置かれた椅子には色んな人が座っている。老人だったり明らかにミラとかイヴァンレベルで強そうな男だったり女だったりミラだったり。

「あ、ミラだ」

「……なんかごめん」

そうして沢山ある椅子の中の一つに座っているミラは担がれて入場してきたひなたを見て申し訳なきそうに顔を逸らしてから一言謝った。多分、こうして運ばれてきた状態を見て言っているのだろう。気にしなくてもいいのに。

「えっと……取り敢えず降ろしてほしいんですけど」

「ああ、わりいな。要件はこの爺さん方から聞いてくれ」

「イヴァンさんも爺さんですよ」

「お前笑顔で毒吐きやがったな晩年チビガキ」

取り敢えず何も聞かされずに担がれて運ばれた恨みとして軽く毒を吐くと、イヴァンにちよつと雑にミラの隣の空いていた席に座らされる。そしてその隣にイヴァンが座る。どうやらひなたに爺さんと言われたのが少しシヨックだったらしく、しきりにそうかあ……俺も爺さんって歳かあ……と嘆いている。

まだ五十代じゃないんだからそこまでの歳じゃないとフォローしようかと思っただが自分の撒いた種でもあるので放っておいた。

「……マイヤーズよ。そろそろ茶番は止せ」

「はいはい。ったく、ちよつとは気を楽に持てよ、ご老人」

だが、そうしてイヴァンが拗ねているとテーブルの上座に座っている老人がイヴァンに向かって声を投げかけた。その声は威厳に溢れているような声をしており、今自分はこの空間の支配者なのだ、この中で一番偉いのだと証明しているような声だった。

最も、イヴァンは特に何も思わないらしく何時も通りの軽い声色だった。そんなイヴァンを老人は睨み付けるが、それをするだけ無駄だと判断したのか溜め息を一つ吐いてそれ以上言うのを止めた。

「まあよい。で、だ。その小娘がそうなのか？」

「ああ、間違いない。コイツがあ最強の真祖、ブラッドフォードの被害者、真祖の眷属だ」

なんて事をサラツと言ってくれてるんだこのオツサン、とひなたは叫びそうになったがその前に会議室が喧騒に包まれる。うるさっ！

とひなたは思わず右手で右耳を塞いだが、それでもうるさい。

そうしてちよつと嫌な顔をしているひなたにミラがこつそり顔を近づけて耳打ちをした。

「……ごめん、ちよつと付き合っつて。手は出させないから」

「別にいいけど……取り敢えず、守ってね？」

自分で言っつておいて情けないがミラにこの場は守ってもらわない。イヴァンにも視線を投げると、彼は任せると小さく呟いてくれた。

何だか今回もひなたは巻き込まれてしまうらしい。最近巻き込ま

れたばかりだなあ、と吐いた溜め息は小さく消えていった。

第六十五魔弾

喧騒はそう早く収まる事はなかった。大体一分か二分か。ひなたとしてはかなりボーっとする時間が長かったためかこの時間は五分にも十分にも感じた。そんな喧騒の中でひなたは適当に欠伸をしながら周りから何でこの場に呼ばれたのかの要件を聞くために時間を無駄に消費する。

そうして何分か。ようやく静かになった室内ではひなたが一番注目を浴びていた。きつと、ひなたが形だけのブラッドフォードの眷属である事をバラされたからだろうか。いや、そうに違いない。真祖の眷属です、なんて自己紹介したら嫌にでも注目を浴びるに決まっている。イヴァンにちよつと不安を込めた視線を送るが、イヴァンは顔の前で両手を合わせるだけ。そしてミラに視線を向ければミラも申し訳なさそうに視線を逸らすだけ。

この親子使えねえ、とひなたが額に青筋を浮かべた所でずっと黙っていたらしい最初に口を開いた老人が再び口を開いた。

「……この小娘が本当にブラッドフォードの眷属だと？」

「昨日まで、ここ百年活動したって記録があるのはヴァルコラキとブラッドフォードだけだ。んでもって、嬢ちゃんはブラッドフォードに村を焼かれてる。去年にたった一晩で滅んだ村があつたら？ あの村の生き残りだ」

ふとイヴァンにその事を話したっけ？ と疑問に思ったが、そう言えば酒の席でぼろつと口にした記憶がある。ミラにはヴァルコラキの件の前から全部話したが、イヴァンに対しては少しだけフェイクを混ぜた。

自分は孤児である事。路銀が尽きてフラフラしている所を拾われ、その先で魔弾の使い方を学びながら生きてきたと。その結果やつてきたブラッドフォードにそこを焼かれて今現在に至る、と。ミラには記憶喪失でそれ以前の記憶が無いと嘘を吐いている。

それを思い出すたびに憎しみが沸いてくるがどうせ沸いたところでぶつけられないしぶつけたらぶつ殺されるしでどうしようもない

現実と区別しきっているし今はトラウマ化して思い出すだけで吐き気がするからあまり話題に出さないでほしいのだが、どうやらそれは許してくれないらしい。今こうしてひなたが物思いに老けている間にイヴァンは周りの人間から嘘ばっかりとかでたらめ言うな、とか色々と言われている。

「イヴァンさん、これ、実践した方がいいんじゃない？」

「それもそうだな。ほら、俺の血を吸え」

「オッサンよりも女の子の血の方が美味しいんでミラからいただきませう」

「血なんて変わらんだろうが……ミラ」

「ん」
イヴァンの血は吸った事ないが何だかこつてりしてそうですぐに飽きが来そうだったので前飲んだ時美味しかったミラの血を頂く事にする。

伸ばされた手を右手だけで掴んで口を開き、そのまま吸血鬼特有の皮膚を簡単に突き破れる犬歯でミラの肌を傷つけて血を吸う。飲みきれない血がミラの手を、ひなたの口を伝い、口の中が一瞬にしてミラの血の味で満たされる。

何だか、前に吸った時よりも遥かに美味しい気がする。あつさりとしていて、尚且つ深い甘みが喉を潤してくれる。シャレーイの時とはまた違った、ゆっくりと時間をかけて飲み干したい。そんな味の血を楽しみながら必死に溢れてくる血を喉へと流し込んでいく。が、時間にして十秒程度でミラに頭を掴まれて強制的に吸血を中止させられた。

「おわっ。もうちよつといいじゃん」

「……後で」

そう言えば、今は自分がブラッドフォードの眷属である吸血鬼である事を証明するために吸血しているんだって、と吸血の快楽で忘れてしまっていた目的を思い出して紅に染まった目を見せる。

それを見た人間は血を吸ってひなたの力が増した事、そして目が紅に染まった事、吸血鬼特有の気配があふれ出したのを感じてひなたが

確かに吸血鬼の一人である事を認めた。ようやく話が進むか、と溜め息を一つ吐いて口に付いた血を少し下品だがローブで拭う。

「この通りの元人間の現吸血鬼兼食人鬼に何か御用？」

「おい、マイヤーズ。このガキが吸血鬼だってのは分かったが、コイツをここに置いておいていいのか？ いきなり暴れるかもしれないぞ」

冗談止してくれ。ミラとイヴァンに挟まれている状況で急に誰かを襲ったら確実にこの人外二人に捕獲されてしまうよ。

「嬢ちゃんの今の実力が見切れないのか？」

「いや、そんな事は無いが……」

「安心しろ。嬢ちゃんはどう落ちかと言ったら食人鬼の気が強い。吸血鬼としての能力は皆無に等しいし全力でも今のミラに届かない。それに、欲求とも上手く向き合えているし問題は起こさねえよ」

確かにそうだし褒めてくれるんだろうけど同時に結構ボロクソ言ってくれるなこのオツサン、と睨むが相手の言いたい事は分かるのでひなたは何も言わない。こんな街中で吸血鬼が我が物顔して住んでいる、なんて聞いて警戒しない方がどうかしている。ひなただつていきなりこの子あまり力は無いけど吸血鬼なんですよほら。なんて言われて女の子を目の前に差し出されたら怖い。

「……でだ、小娘。お前に聞きたい事がある」

「いいけど……ブラッドフォードの情報も真祖の情報も持ち合わせてないよ？ 眷属つてのも形だけだし、ブラッドフォードを主として認めてなんかいないし。むしろ仇敵」

「そうか」

どうやら聞きたいのはそこら辺だったらしい。どうしてブラッドフォードの情報が欲しいのかは分からないが、ふとイヴァンがひなたの事を漏らした、というのだけは分かった。

ブラッドフォードの眷属なんて肩書はあるがブラッドフォードは仇。主として下から見上げた事も尊敬した事もない。むしろ厄介な制約をかけて半殺しにして村を焼き払ってくれたクソ野郎でしかない。

「ならば、ブラッドフォードが襲来した時の事を覚えているか？」

「……トラウマとしてなら覚えてるけど？」

覚えていない筈がない。忘れるとしたらそれは今の自分が壊れてしまった時だけだ。

「隣国が全て一夜にして滅んだ、というのはいもう聞いたか？」

「聞いたよ。とつても悲惨だね。だから今すぐ逃げたいんだけどさ」

「ならば儂の質問に答えろ。そうしたら報酬として一級の避難所を関係者分くれてやる」

「破格の報酬だね。勿論、答えるよ」

ミラから避難して、と言われる前に避難所を確保できた。これならこの後すぐにでも避難の準備をしてシャーレイとミラを連れて逃げる事が出来るだろう。ミラが残ると言ったら説得に骨が折れそうだが、それでも駆除連合が用意する一級の避難所ともなればそれこそ政府の重鎮とかが使うような場所になるだろう。

「質問は簡単だ。ブラッドフォードが襲来した時、空はどうなった？」

空？ 空なら、ああ、覚えている。あの時の光景は全て覚えているとも。

「……急に。そう、本当に急に空が曇った。夕立か何かかと思ったら、急に雲が動いた。そうしたら、空は青じゃなくて紅に染まってた」

ああ、そうだ。空が急に、本当に急に紅に染まったんだ。

それを皆が呆然として見ていた。そして、これは天変地異の前触れだと騒いで、ひなたもそんな異常事態を見て避難しなきゃと動いて。

駄目だ。それ以上は吐き気がする。思い出したくない。あの地獄の光景を……全ての終わりにして今の始まりの記憶は、そう簡単に想起したくはない。あの時の地獄は今でも心を潰そうとして来るのだから。

「紅、か……その後は？」

思い出したくない。思い出したくないんだ。

顔を青にして目を伏せる。それを見たミラがそつと背中を擦ってくれる。大丈夫だと一言伝えてからその後の事を口にする。

「……村の外に居た人が、戻ってきた。でもその人は頭が欠けていた。その人を見て皆が腰を抜かして、気が付いたらその人は村の人を食べ

始めたんだ。でも、食べてすぐに口を離して、こっちへ向かって来て、ボクはなんとか迎撃した。けど、気が付いたら食われた人が動き始めた。何とかその人達を止めたけど、気が付いたら周りがその人見たいな正気を失った食人鬼になってて……それで、まあ色々あって、村から逃げようとしてたら空からブラッドフォードが降ってきた」「濁した部分で何があった」

「……………家族同然の人を手にかけてお涙頂戴ストーリーでも聞きたい？」

「……………すまん、少し繊細さに欠けた」

「別にいいよ……………まあ、その後はブラッドフォードに喧嘩売って半殺しにされて腕斬られて眷属化させられて村にポイ捨てされただけ」

思い出しながら何度も襲ってきた吐き気を我慢して何とか喋りきった。

何時間も見続けたあの地獄を簡単に説明しきったが、かなり精神をすり減らしていたらしくひなたは机に突っ伏してしまいたい気分一杯だった。

だが、それを気合で止めて深呼吸しながら吐き気を抑える。流石にこの場で吐いたら色々マズい。女として死ねる。

「……………質問は以上だ。だが、一応は告げておこう」「聞いておくよ……………」

出来ればこのままトイレに行ってげー吐き出してきたい。けど、何か言う事があるらしいので取り敢えずは聞いておくことにする。

「昨夜、ここまで逃げてきた人間の証言だが……………真昼間に空が紅に染まったらしい」

「……………は？」

空が、紅に？

それは、つまり、あの男が、あの真祖が。

「質問は以上だ」

「あ、うん……………取り敢えずボクをもう巻き込まないでくれればそれでいいよ」

何であの男がこの国の周りの国をたった一夜で滅ぼしていったのか。何で今まで黙っていたあの男が急に動き出したのか。それは分からないが、ひなたはただ逃げるだけだ。あんな災厄の権化みたいな物を相手にしたくななんてない。そんなのはこの国を守る義務がある人間とそれに賛同した偽善者のやる事だ。力を持たない小娘がやる事ではない。

「それで、アカツキだったか。避難所に関してはマイヤーズの娘と共に選べ。今日中に資料を送っておく」

そして、あちらの方もひなたが混ざってもただ邪魔になるだけだと思っているのか、或いは元からひなたが戦いに参加する事を考慮していないのか。どちらかは分からないがこれ以上持ち合わせていない情報を引き出そうとはしてこなかったし戦闘に参加しろとも言ってこなかった。

「ああ、ありがとう。助かるよ」

「では、儂からは以上だ。帰っても良い。マイヤーズの娘もな」

「……私も？」

「足を失った小娘に頼る程軟ではないという事だ」

どうやらこの爺さんは結構厭つくかなり威厳のある声をしているがかなり良い人らしい。ひなたはその言葉を有り難く受け取って立ち上がったが、気分が悪いせいかふらついてしまう。

ミラに肩を貸してもらってなんとか普通に立ち上がり、礼をしてから会議室を去る。

会議室を出たひなたはすぐにミラにトイレへと連れて行ってもらった。そして、今朝食べたばかりの消化されかけた朝食を吐き、なんとか気分を回復させ、未だに騒がしい駆除連合を出た。

「……ヒナタ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫。大丈夫、だよ……」

実は少し大丈夫じゃない。

今回の騒動、ブラッドフォードが動いている。それだけでひなたにとってには恐怖足り得る。

もしかしたら避難しても無駄なんじゃないか。人類は自分を含め

て全員真祖に殺されて滅びる運命なんじゃないか。そう思うと恐怖しか襲ってこないが、それでも今はイヴァン達なら真祖相手でもきつと何とかしてくれる。そう信じて待つしかない。

取り敢えずは、家に戻ってミラと一緒に避難所を決めるとしよう。地中か海上に避難所があればいいなあ、と考えながらミラの隣でフラフラしながら歩いた。

第六十六魔弾

「と、いう訳でこの家は一旦放棄して問題が全部収まるまでは避難所暮らしになるから」

帰ってからすぐにひなたはシャーレイに今起こっている問題とそれに対する自分たちの行動について説明した。完全に事後承諾ではあるがそれでもシャーレイは何一つ文句は言わなかった。いや、言ったところでどうにもならない問題なのだと言われれば彼女自身ちゃんと分かっているのだろう。

スラムに捨てられた時から始まりシャロン、ルナ、ヴァルコラキ。それぞれの種が違うようで同じような問題に巻き込まれてきた彼女だからこそ自分達に出来ない事は出来ない、関わらなくていい事には関わらないと判断して逃げる。その冷静な判断が出来ていた。特に今回は国レベルの問題。個人の問題じゃない以上、一般人として行動するのが一番だというのは分かっている。だからこそひなた達に対して文句は一つも言わなかった。

「そんな大変な事になってたんだ……」

そう一言だけ、シャーレイは感想を漏らした。確かに大変な事だが大変の一言で済ます事は出来ない位にはヤバい問題なのだが、一般人にとってはその程度の感想を抱くに済む。むしろそれ以上の感想が沸かなかつたのだろう。ヴァルコラキの時のように脅威を目の前にしたならまだしも、股間きした程度ならこれ以上の感想はどうしようにも沸かない。

当事者でない以上物事を深く受け止められないのは仕方が無い事だ。ひなただってブラッドフォードが関わっていなかったらこの問題に対しても楽観視してイヴァンのような人間がどうにかしてくれるだろうと思っ込んでいたかもしれない。いや、思っていた。イヴァンに拉致られてあの会議室で事の始まりを聞くまでマイヤーズ親子に丸投げでも別にいいだろうと、そう思っていたから。

だが、シャーレイに無理に事の重要さ、もしかしたら人類絶滅の可能性すらあると言えば彼女を変に焦らせてしまう可能性があるため

今は避難しておけば大丈夫だと伝えておく。もしもイヴァン達が敗れたらその時点で人類終了が確定してしまうのだが、そこら辺は考えない方が身のためだろうか。もしも場合は自決だって視野に入れないと死ぬより酷い目にあってしまうかもしれない。人間を面白半分て殺すブラッドフォードの事だ。死ぬより酷い目に簡単に合わせにくる可能性なんて幾らでも考えられる。

「取り敢えず、荷物は纏めておいた方がいいかな？」

「あー、そうだね」

「……明日避難所を決めるから。すぐに出れるようにしておいて」

「多分一週間以内に迎えが来るからね」

もしかしたら避難所を決めた翌日には迎えが来るかもしれない。その時になってまだ準備が出来ていませんとなったら色々迷惑をかけてしまうかもしれないし忘れ物も大量にしてしまうかもしれない。

持っていくものは娯楽品は本を数冊程度だが、恐らく一か月以上。もしかしたら二か月三か月と避難所暮らしになるかもしれないので生理用品等も持っていかなければならない。シャーレイとミラは月の物は軽いがひなたがかなり重いので結構準備は必要だ。それに、ひなたの場合はライターのおイルや煙草等もあるのでそこそこ荷物が嵩張る。一つでも忘れれば致命的とも言えるだろう。特に生理用品。

「じゃあ、大体私が纏めておくね？ あ、ご飯とかは？」

「……一応馬車に非常食はある。それ以外は持ち込み」

「あ、そうなんだ。避難所の方は？」

「……行った事ないけど、食料は配られた筈。調理は無理」

調理が無理なのはトラブルを避けるためだとか。変に料理を出来る人が身内の料理だけを作っていたら嫉妬の目とかそれを羨ましいと思つて何かしらの行動に出る人間が出てきてしまう。それを防ぐために調理場は基本的に無いそうだ。

避難所での食事は基本的に避難所のグレードによる。ひなた達の行く避難所なら恐らく普通の料理が食べれるだろうとの事。それに、避難所に個室もあるらしく三人で一部屋だが十分に広い部屋を借り

れるらしい。やはり国が運営するだけあって立派な避難所なのだろう。もうホテル並みに。

シャーレイがパタパタと二階に上がっていく音を聞いてひなたとミラは目線を合わせた。

「……どう思う?」

ひなたの言葉は避難所にケチを付ける言葉ではない。

単純に、今回の問題についてだ。今回の問題はここ数百年以内で一番とも言える位に大規模で危険度も高い問題であることは間違いないだろう。それを人間だけの手で、イヴァン達のような限られた人間だけで解決出来るか。そうひなたは言外にミラに聞いた。

それを聞いたミラは少し顔を顰めた。その表情を見るだけでもあまり旗色は良くないと言うのがすぐに分かった。

「……最悪の場合も考えないと」

「まあ、最終手段は三人で自決? 海にでも身を投げる?」

「……そうなる」

やはり、そうなるか。サラツと言っているが死ぬのは怖い。いざその時になって出来るか、と言われれば今この場で答えることは出来ない。

だが、最悪の場合。つまりは人類の敗北を考えれば自決が一番楽な手段になるだろう。イヴァン達が負ければ人間は真祖の家畜かそれ以下に収まる。それをどうにか出来る存在何てこの世には存在しない。他国には人類最強と名高い人間も勿論存在するが、それがブラッドフォードを倒せるのか、と聞かれても分からない。もしかしたらその人類最強が倒してくれる可能性もあるがそれがブラッドフォードを倒すまで家畜として生きるなんて真つ平御免だ。

特にひなたに至ってはブラッドフォードの眷属。もしも眷属を操る能力等を持っていたらシャーレイとミラをその手にかけてしまいかもしれない。かけさせられるかもしれない。そう思えば自決が一番精神的にも肉体的にも良い。

「……一応、身投げよりは楽な死に方は用意しておく」

「一応聞くけど、それって何?」

「……安楽死」

「まあ、確かに身投げよりも楽に死ぬそうではあるけども……」

薬を飲むのに躊躇がある分、そっちの方がキツいかもれない。だが、身投げとどっちがキツいかと言われたら迷うところだ。所詮死に方に楽もクソも無いので薬を飲むかフライハイをする覚悟を決めなくてはならないのは同じだが。どっちも覚悟さえ決めてしまえば何があろうと同じである。

ひなたもミラも少しミスをしたらそのまま死んでしまうかもしれない界限で生きている分、死ぬ覚悟は一応出来てはいるが、いざ自らの手で自分に引導を渡すとなるとやはり怖い。死という人生で一度しか味わえない上に味わったが最期もう二度と目覚める事が無いそれが怖くない訳がない。

「取り敢えず、現状維持のまままで居ようか。シャーレイには……一応、秘密で」

「……そうだね。無理に怖がらせちゃいけないし」

シャーレイにどう伝えるかは、現状は保留という事にしておいた。変に希望を潰して怖がらせるよりはギリギリまで伏せておくか、あるいは内緒で薬を渡してシャーレイに知られる事無く一緒に眠るのが一番だろう。いや、そうしないとこっちの精神が持たない。そう感じたというのが一番だろうか。何時も笑ってくれているシャーレイが居なくなればこっちの方が参ってしまう。

完全に二人のエゴでしかないがそれでもこのエゴでシャーレイに希望を持たせる事が出来るのなら、それはそれでいいだろう。

この会話が聞かれていたら確実にこれから先空気が悪くなるが、今シャーレイが色々と物を纏めている音が二階から聞こえているためこの会話が聞かれているという事は一切ない。

「……じゃあ、薬買ってこよう」

「売ってるんだ、安楽死薬……」

「……コネで買ってこよう」

「ミラのコネってホント広いよね……」

「……この道十年以上だからね」

「それもそっか」

こんな物騒な界限で十年も生きていれば確かにそれなりのコネが出来上がるだろう。ひなただつて一応独自のコネはある。とは言つても何処かの街の店で少し割引が入ったりちよつと入手困難な物を入手しやすくなったたり本来は売られていない物を買わせてもらったりできたりと、ミラ程万能なコネでもないが。

全部復讐に身を焦がしていた時に作ったコネなのであまり良いコネとも言えないが、それでも無いよりはマシ程度だ。

「……買う時なんて説明しよう」

ミラはボソツと呟いてから家から出ていった。その顔は何処か疲れ果てたサラリーマンのような顔だった。

ここに来たばかりの時はほとんど表情が分からなかったのに今はミラの表情はかなり分かるようになった。ミラ自身表情が柔らかくなっているというのもあるが、それでもかなり表情は柔らかくなった方だ。

切欠と呼べる切欠は思い出せないが、ヴァルコラキの件の前にうっかりミラが夜中の行為を覗いてしまいシャーレイにバレてそのまま押し倒された時から少し表情を読みやすくなった気がする。

最近は三人一緒に寝ているせいかよくシャーレイに襲われてるよなあ、とそこから連想して夜中の爛れた生活を思い出し溜め息を吐く。もう寝室の窓は開けて寝られない。

「……酒飲もつと」

そうしてちよつと自分たちの夜中に呆れのような物を感じ、そしてこれから先の暗雲に憂鬱を感じたためついつい酒で全部を飲み干したくなってしまう。

もう慣れた手つきで果実酒をコップに注いでからそれを煽る。果実の甘さの中にほんのりと混ざるアルコールの苦さが美味い。こつちの酒と煙草が日本の物と比べてどうかは分からないが、美味ければどうでもいい。どっちもこつちの世界に来てから楽しみ始めた物であるのだから。

ちなみに、ひなたは未だにビールを飲めない子供舌である。

「ひなたたちちゃん、荷物纏めるのって時間かかっても大丈夫？」

そうして一人で酒盛りをしているとシャーレイが二階から降りながら声をかけてきた。

荷物か、と考えそれなら明日以降でも大丈夫だな、としっかりと判断してから声を出す。

「んー、大丈夫だよ。少なくとも明日までなら」

きつと避難所の知らせが来るのは明日以降。そして届けを出してそれを受理され、迎えが来るまでにはきつと一週間かかるとミラと二人で予想している。だから、荷物を纏めるのに五日程かかってしまっても全然問題は無い。

その声を聞いて分かった、と答えながら一階に降りてひなたの前に姿を見せたシャーレイが小さく声を漏らした。

「あつ……真昼間からお酒飲んでる」

「まあ、偶にはね？」

これで不安が紛れてくれるなら、と飲んだ酒だが、大分いい方向に精神を持って行ってくれている。煙草に關してはまだ少しトラウマを刺激してくるため今気持ちを落ち着けるには酒しかなかった。

それを知らないシャーレイは少し頬を膨らませたが、仕方ないかと小さく息を吐くとひなたの座っているソファの隣に腰を下ろした。

「……大丈夫、だよな？」

そしてシャーレイが小さく、囁くように呟いた。

それがひなたへ向かって投げられた疑問だという事はすぐに気が付いた。

「また、この家で三人で暮らせるよね……？」

こういった問題をどうにも出来ないからこそ、頼るしかない。聞かない。

ひなた達のように諦める用意をしてこなかったからこそその不安を聞いてもらいどうにかして払拭してもらおうしかない。それが分かっているが、それでも言葉には詰まってしまう。

酒を飲むふりをして少しだけ考える時間を取り、考えがまとまった所でコップを口から離す。

「……うん、大丈夫。きっと大丈夫だから」

出てきた言葉は、先程までミラと話していた内容とは打って変わって前向きな言葉だった。

せめてシャーレイには笑顔でいてほしい。そんな願いを込めて呟いた言葉はシャーレイをどうにかして安心させてくれないか。そんな願いも籠っていた。

だが、それでも不安で。何処かシャーレイの笑顔に翳りが生まれてしまうのではないかと不安で体をシャーレイに寄せ、預けてしまう。

「そう、だよ。大丈夫、なんだよね」

シャーレイの言葉には、少し不安が混ざっているようにも聞こえた。聞こえたが、ひなたは何も返す事が出来なかった。

辛い。大丈夫だと胸を張って伝えられない事が。自分に任せておけば安心だ、と言えない事が。力が無い事が。

目線を落として自分の持っている色の付いた液体を見る。先ほどまで気を紛らわせてくれていた液体は、今は何処か頼りなく見えてしまい、つい一気にそれを飲み干してしまった。

煽った酒は何処か苦味が強かったような、そんな気がした。

第六十七魔弾

その日の夕飯は、少しだけ物静かに感じた。やはり、シャーレイには酒を飲みながらの会話で少しこの状況が好ましくない方向へ進んでしまっているというのが分かってしまったのか。いや、確実に分かってしまったのだろう。酒に身を任せても不安に押しつぶされかけている人間の言葉なんて分かりやすい物だ。きつと、シャーレイが同じ内容をミラに聞いていても、イヴアンに聞いてもシャーレイは同じように何かを悟った事だろう。

つまりは、遅かれ早かれ、逃げようが逃げまいがシャーレイにはバレてしまう事だった、という事だ。彼女はやはり何処か鋭いところがあるし、優しすぎる所がある。心配をかけまいと健気に笑っているが、それでも胸中の不安はとてつもなく大きいだろう。

何かがあればひなた達のように抗う事も出来ずただ蹂躪されるしかない弱い人間でしかない以上、この状況は怖くて怖くて仕方ない。だが、それを慰めるための言葉を持っていないがために黙るしかない。下手な励ましはただその人を傷つけるだけに収まってしまいうからだ。ミラもそれを見て仕方がないか、と視線を落とすに収まった。そうして各々で荷物を纏めたり必要な物を買ってきたりと準備をしている内に何時の間にか夜は更け、何時も寝ている時間になった。最初はミラがベッドに潜り込み、次にひなたがベッドに潜り込んだ。

シャーレイは物置の方で色々と物を整理しているらしく、二人がベッドに潜り込んだ後でも物置の方から若干の物音が聞こえてくる。それを聞きながらひなたとミラはベッドの上で眼を閉じていた。

「……ヒナタ、起きてる？」

「……起きてる」

そうして早く寝てしまおうと思った時、ミラがひなたに言葉を投げかけてきた。

その声を聞いて最初はそのまま寝たふりをして寝付いてしまおうかとも考えたが、無視なんてしたくなかったため一瞬の間を空けてか

らミラの言葉に答えた。

ずっとベッドに潜りこんでいたひなたが黙り込んでいたからかもう寝ていると思っていたらしく、ミラは少し驚いたような雰囲気を出していた。そっちから声をかけてきたんじゃないか、とひなたはちよつと笑いながら寝返りを打ってミラの方を見た。ミラも同時に寝返りを打ったようでミラもこっちを見ていた。

「……ヒナタは、心配?」

「心配って……そりゃね。全部が全部心配で仕方ないよ」

こんな状況下で心配が無い訳がない。

もしかしたら避難する前にブラッドフォードが動いてこの街が数時間で灰だけになり人間は皆死んでしまうかもしれない。それが避難の最中に起こるかもしれない。イヴァン達が敗北するかもしれない。避難所から真つ先に燃やされて死んでしまうかもしれない。

色んな心配がある。心配が無い方が可笑しい。今この世は心配事しかないから。

むしろ、今の状況は幸運なのだ。隣国全てが滅んだのにその間にあつたこの国が未だに滅んでいない。何でかは分からないが、こうして周りの国が滅んだというのに生き延びているという事が、既に幸運なのだ。

だから、心配事が尽きる訳がなかった。

「……だよね」

それはミラとて同じだった。

幾ら父が強いと分かっているても今回の件は次元が違うと言ってもいい。

真祖ブラッドフォード。奴の戦闘力は未知数だ。未知数であると同時に天井知らずとも言える。だから、不死殺しの剣を持つイヴァンだとしても、勝てるかどうか分からない。いや。不死殺しが効くのか、不死殺しを当てる距離まで近づけるのか、切り結べるのか。それすら分からない。

何せ相手は一夜で国を亡ぼす化け物だ。人間が竜巻を相手にして竜巻を蹴散らすような、無理無茶無謀な戦い。それが今回の戦いだ。

しかも、ミラは今回唯一の肉親を失うかもしれないのだ。母を真祖に殺され、父すらも真祖に殺されるかもしれない。それが心配でない訳がない。ひなたとはまた別種の恐怖を抱いてしまっているのだ。

「……大丈夫。多分、大丈夫だから」

そんな不安に駆られて表情が曇っているミラを見て、ひなたは根拠のない励ましをしながらそっとミラに近づいて彼女を右手だけで抱いた。

ミラはそれに少しだけ驚いていたが、すぐにミラの両手はひなたを抱きしめた。かけられた言葉が根拠のない物だと分かってはいるが、それでも今は彼女にかけられた言葉が自分の不安を軽くしてくれていた。

「イヴァンさんならきつと大丈夫だから、ね？」

「……ん」

根拠のない言葉。それでも、人の温もりに包まれながら聞いた言葉は不安を軽くしてくれる。彼女のお世辞にも厚いとは言えない胸に顔を埋めながら小さく呻くように一言だけ肯定の声を漏らした。

何時もは年下っぽいのにこういう時だけはお姉さんっぽい。そんな彼女のギャップのような物に少し慰められながらひなたの自分よりも少しだけ高い熱に安堵する。

「……薄いし痛い」

「悪かったね……っ！」

それ故かちよつとだけ本音を漏らしてしまった。それに対してひなたはちよつと額に青筋を浮かべながらもミラを抱きしめる。心なしかちよつと抱きしめる力が増して鼻に彼女のアバラがゴリゴリと当たって痛いしその間にある筈のクッションが少ししか無いのにちよつとした悲壮感を覚えるが、ミラも同じような物なので自虐にも繋がる言葉はあまり口にせず、ただ痛い痛いと言きながらひなたの背中をちよつと叩く。

だが、こんなちよつとしたじゃれあいでも胸の内の心配は忘れる事が出来る。ミラは己のアバラでミラの鼻にダメージを与えようとして来るひなたに対して力で対抗しながら小さく笑う。

気が付けばミラはそのまま寝てしまい、ひなたは拗ねてミラに背中を向けた状態で寝付いた。

真夜中。ふとひなたは目を覚ました。

寝付いてから大体一、二時間位しか経っていないのを体内時計で何となく察しながらも右手で体を起こした。

「……トイレ」

布団を体の上から退かしながらまだ少しだけ覚醒していない頭で自分がこんな時に目を覚ました理由を把握し、ゆっくりとベッドから降りる。その時にベッドに目をやるとミラが何時の無表情からは想像できない程の柔らかい表情で寝付いているのを見てからトイレへ向かう。

寝ぼけ眼を擦りながらトイレに入り用を済ませてからトイレから出る。その時に付けた電気を消すのは忘れない。

見る人によっては子供用のパジャマにしか見えない寝間着の左袖を余らせながらフラフラと再び寝室へと向かう。が、目を擦りながら歩いていると、物置の部屋から明かりが漏れているのに気が付いた。

一瞬、まさか泥棒か？ と身構えたがふと寝室でシャーレイを見なかつたのを思い出した。

そういえば寝る前にシャーレイが物置で物を整理していたのを思い出した。まさかこんな丑三つ時まで物を整理しているのか、と思いつつ寝室を素通りして物置へ。

物置のドアを開けるとまず最初に光が目に入り、その眩しさに思わず目を細める。それから数秒して徐々に目が慣れていきようやく物置の中が見える。物置は最後に見た時よりもかなり整理されており、物を入れる棚ではシャーレイが物置の方を向いた状態で寝落ちしていた。整理している間に眠気に負け、膝立ちの状態で寝落ち。そのまま態勢を崩して横になったのだと想像出来た。多分合ってる。

ひなたはそんな様子のシャーレイを見て少し笑いながらそつと

シャーレイに近づき肩に手を乗せシャーレイの体を揺らした。

「シャーレイ、起きて。そんな所で寝てたら風邪ひくし体が痛くなるよ」

少しだけ強くシャーレイの体を揺らし続けると、大体十秒位だろうか。シャーレイが小さく抗議の声を漏らしながらも目を開けた。そしてすぐに見えた明かりに目を細めた。

「うう……まぶし……」

「ほら、シャーレイ。起きて」

どうやらかなり眩しいと感じているようで目を開けようとしないうちにシャーレイの上に覆いかぶさるように体を動かし明かりをカットしてからもう一回シャーレイの体を揺らす。そうしてやっとシャーレイは目を開けた。

「うあ……おはよ」

「まだ夜中だけだね。ほら、ベッドに行こ？」

「……んう」

だが、それでも寝起きが弱いシャーレイは自分の状況が把握しきれしていないのか動こうともしない。それを見て仕方ないなあ、と声を漏らしてからシャーレイのテオ持って引つ張り、無理矢理シャーレイの体を持ち上げる。そしてすぐに顔面から床にダイブしそうになるシャーレイの体を支えて物置から出て電気を消す。

一応目は開いているがひなたにされるがままのシャーレイはひなたに連れられてそのまま寝室へ辿り着いた。

「ほら、寝よつか」

「んー……」

シャーレイはひなたの声に従ってそのままベッドで横になり、すぐに目を閉じた。

やっぱり寝起きが相当弱いなあ、と思いながらもひなたもシャーレイの体を超えてベッドの真ん中、ミラとシャーレイに囲まれた場所で横になり、自分の体とシャーレイの体に布団をかけた。

さて、寝るか。とまだ残っている眠気に従って目を閉じて体の力を抜いた瞬間、目の前のシャーレイがかなり覚束ない手つきでひなたに

向かって手を伸ばし、ひなたの体を探り当てるとそのままひなたを抱き寄せた。それにビククリして目を開けたひなたの前に待っていたのはシャーレイの歳の割には豊満な胸であり、服の上から分かる柔らかさがひなたの顔を包んだ。

息が出来ないという訳ではないが息苦しいのでちよつと身じろぎをして楽に呼吸が出来るように自分の顔を動かす。

「……ずっと、一緒だよ………?」

そうして何とか楽に呼吸が出来るようになったとき、そんな声がシャーレイから小さく聞こえてきた。

ひなたはそれを聞いて少し口角を緩めながら右手だけでシャーレイの体を抱いた。

「勿論。死ぬまでずっと一緒だよ」

その声にひなたは答えてから再び目を閉じた。

シャーレイに抱かれながら見た夢は覚えていないが、それでも寝心地はとても良かったし暖かかった。きつと、この暖かさは死ぬまでずっと離す事は無いだろう。

そう、死ぬまでずっと。

第六十八魔弾

翌朝。一度夜中に目が覚めてしまったからか若干寝足りないと思ってしまった。

ベッドから上半身を起こすと既にシャーレイの姿は無く、階下から朝食のいい匂いがする。対してミラの方はまだ寝ており幸せそうな寝顔を晒している。

夢でも見ているのかな？　と思いつながら右手で彼女の頬を突くと丁度いい肌の弾力で指が軽く押し返される。ミラと寝るようになってから暫く経つが、ミラの寝顔を観察したのはこれが初めてかもしれない。ベッドの上に投げ出された彼女の手は程よく筋肉が付き引き締まっており、手のひらには剣を握り続けてきたからか豆とタコが沢山だ。ひなたの手も銃を握り続けてきたため同じような物だが、それでもミラと比べればまだまだだ。

生まれてからずっと戦ってきたミラとは違い、この世界に来てから戦い始めたひなたの手はまだ外見相応らしさを少しだけ残していた。やはり、自分が弱いのは努力の差もあるんだ、とミラと自分の生まれ育ってきた環境の違いを改めて自覚しながらも右手と両足でベッドの上を這ってベッドから降りる。

まだ何時も起きる時間よりも少し時間がある。だから無理に起こさずともシャーレイに起こされるまで寝かせておこうとミラを起こす面倒をカットした自分に言い訳しながら寝室内にあるタンスから着替えを取り出して寝間着から着替える。既に慣れた片手での着替えを終え、未だ少し慣れないスカートを履いてから部屋を静かに出る。

少しアクティブに動けば下着が見えてしまうという下半身の防御の薄さも外なら羞恥心があつてあまり履きたくはないが、家の中ですらまだマシだ。見られるのは少し恥ずかしいしシャーレイにスカートの裾を摘ままれて中を覗かれた時は思わず引つ叩く位には恥ずかしかつたが、それでも家の中で位女の子をしててもいいだろうと吹っ切れた結果だ。それに、まだシャーレイやミラに見られる程度なら他

人に見られるよりも万倍はマシだ。

寢室を出て欠伸をしながら階段を降りていく毎に階下から漂ってくる朝食の匂いは強くなってくる。その匂いに釣られるように空腹を訴えてくる己の腹を右手で抑えながら居間に顔を出す。

「おはよー」

「あ、おはようひなたちゃん」

少しの眠さを含めた声を挨拶として出せば、シャーレイの元気な声が返ってくる。昨日の不安を押し殺したような声ではなく、何時も通りの元気な声だった。

よかった、あまり暗く事態を呑み込んでいないみたいだ、と彼女の言葉を聞いて安心しながら一、二か月程前に勝ったばかりのマッサージチェアに座ろうとする。が、ふと机の上に目をやると、そこには数枚の紙が纏まって置かれていた。マッサージチェアに座る前にそれを覗くと、どうやらそれは先日話された避難所への案内用紙だった。

避難所へ赴く際の処遇やら何やらが沢山書かれた紙を退けると、避難所の説明が書かれた紙と、どの避難所を希望するかの申込用紙が三人分あった。

「シャーレイ、これは？」

「郵便受けに今朝入ってたよ」

と、いう事はあの爺さん達は約束を守ってくれたらしい。人数分申込用紙はあるしどの避難所も説明の前に口外無用と書かれている。

説明の用紙だけを抜き取りマッサージチェアに置いてから自分のカップにコーヒー、ミルク、砂糖を注ぎ、マッサージチェアの肘掛にそれを置き用紙に目を通す。

避難所の種類は計三つ。少ないとは思ったが、元々存在自体一般人には知らされていない避難所だ。余り数多くは無い、という事なのだろう。こういう避難所の存在を知っているのはひなたのように情報屋等を通じて少し裏に触れた人間かミラのようにトップクラスにまで自らを鍛え上げて功績を遺した人間だけだ。

目をザッと通した結果、まず一つ目の避難所は地下にあるらしい。ここから馬車で三日と割と近い場所にあるらしく、普段は立ち入り禁

止区域として指定されている坑道がその入り口だとか。次は普通に地上にある。ここも普段は立ち入り禁止だが、仮住居とは思えない位の普通の一軒家が立ち並んでいるらしい。そこを街を覆う結界を数倍にまで強度を高めて更に認識疎外の魔法をかけてミラレベルの人間を数人衛兵として雇った場所らしい。これは避難所なのか？と一瞬ひなたは首を傾げてしまった。ちなみに、ここは馬車で約二十日程かかる。

そして、最後の一つ。これは何とまあ、ここから馬車で一週間の場所にある港から更に船で三日の場所にある海上。ここに結界を張って更に認識疎外に人払いまで張って作った海上避難所だ。数キロもある人工島に巨大な建物を作成し、そこを避難所になっているだとか。これ、魔獣一匹近寄らないのではないだろうかと思えてしまった。現代日本ですらこんな作れるか分からないのに、流石ファンタジー。と呆れやら称賛やらが混じった溜め息を吐いてからコーヒーを一口。まだ苦かった。もう少し砂糖とミルクを入れておくべきだった。

「……まあ、この中なら海上かなあ」

理由としては、単純にブラッドフォードから距離を取りたいからだ。

地下でもいいのだが、魔法一撃で地震が発生、そのまま生き埋めになりました。なんてのが想像できてしまうから却下。街っばい避難所も海上に比べれば十日分も距離は離れているが、これは何だかすぐに発見されて血祭……なんて気がする。それに、移動中にブラッドフォードが動いてこの世とオサラバ、なんてのも容易に考えられる。そう思えば海上の方がブラッドフォードにバレないかもしれないし、距離も丁度良く取れる事だろう。それでも見つかったら笑顔で身投げか毒薬しかないが。

そういえば、毒薬と言えば、既にミラが昨日の内に買ってきた。今はミラの私室に置いてあるが、避難の時はそれをこっそり持っていく事になる。使う事なく捨てるのが一番なのだが、今のうちにその薬を飲み込む覚悟をしておいた方がいいだろう。その場で躊躇してしまおう、なんて事がないように。

「……朝っぱらから考える事じゃないね」

そんな思考を無理矢理コーヒーと共に胃の中に流し込んで息を吐く。

さて、そろそろ朝食の時間だろうか、とシャーレイの動きから察してカップを机の上に戻して二杯目のコーヒーを用意しながら起きてからすぐ感じていた尿意の発散のためにトイレへと向かう。

「あ、ひなたちゃん。ついでにミラちゃんを起こしてきて」

「え？ あ、あー……」

トイレに行きたいから代わりにシャーレイが、と言おうとしたが、よく考えれば今シャーレイは配膳の途中だ。というか配膳しているのだからミラを起こしに行ける訳が無い。何時もはひなたとミラを起す前に配膳を終えているが、今日はひなたがいる。となると、ひなたに事を頼むのが普通だ。

まあつまりだ。ひなたはミラを起こしに行くという手間を自ら作ってしまったという事だ。

何でそんな二度手間を作ったんだ、と数分前の自分を恨みながら頬を搔いてひなたは部屋を出る。

「お花摘みのついでで良ければ」

そんな言葉を残して。

結局、ひなたは無駄な階段の往復を今朝の運動に追加するのだった。

時刻は少し過ぎてお昼過ぎ。

既に朝食、昼食と食事は終わらせておりシャーレイは夕飯と明日の朝食昼食の買い物へと向かった。

家に残っているのはひなたとミラのみ。二人は避難所の案内の用紙の前で唸っていた。と、言うのもその理由は二人の行きたい避難所が違ったからだ。

ミラは地下。対してひなたは海上。シャーレイは何処でもいいと

言っていたため会話には参加していないがそれでも二人の間の意見の行き違いは少しだけこの会話を難航させていた。

「……ヒナタはどうして海上？」

「そりゃ、他二つに比べて生存確率が高そうだから」

「……海上は逃げ場がない」

「地下だって入り口は一つだけだよ。そこを占拠されたら逃げられない」

「……むう」

それに、ひなたにとって地下の避難所というのは少し印象が良くは無かったというのもある。

創作が多々あった国で生きてきたひなたは地下で起きる事件から始まる、もしくはそれが話の最中にある創作物を見てきた。何かしらのアクシデント……例えば地震等で地下が崩れて生き埋めになったり入り口が知らぬうちに崩落して酸素不足になったり怪獣の光線が入り込んでそのまま中の人間が焼け死んだり。対して海上の物を舞台とした物は余り見たことが無い。時々殺人事件等を見たが、それでも地下よりは何となく印象が良い。

対してミラが海上を選んでいない理由は、遠いからだった。

移動の最中と言うのは護衛も付かないため危険が付き纏う。その時にブラッドフォードが動いて三人が見つかり、そのまま殺されるか死ぬより酷い目に……という事も十分に考えられる。だから、なるべく避難所へ早く転がり込めるように一番近い地下へ、と考えていた。ひなたの場合は地下に行く危険性、ミラの場合は海上への移動の際の危険性を考慮した考えをちゃんと言い合ったからこそ、どちらも困ったように唸るしか出来なかった。

お互いの意見がちゃんと筋が通っているからどちらもそれはそうだけど、と言うしかない。

「……どうする？」

「どーしよっかねえ……」

紙を目の前に溜め息を零す。はてさて、どうしたものかと。

ひなたからしたらミラの言う事は最もだ。近い方がブラッド

フオードに移動する際に襲撃されるかもしれない可能性を少なくする事が出来る。が、もしも見つからなかったとしても避難所を発見されれば確実に殺される。

対して海上なら発見される可能性を少なくする事は可能だろう。まさか海上に逃げたとは思われまい。だが、その際の移動日数が長い。そこで見つかったら本末転倒だし会場でも見つかったらこれまた死亡確定。ちなみに街の方は日数も長いし見つかったらどうせ逃げ切れないしで即候補から外れた。

「……でも、やっぱ地下の方がいいかな」

「……その心は」

「移動時間とか安全面とかその他諸々」

だが、よくよく考えれば避難所が襲われたらどちらにしるおしまいではあるし、真祖が結界の類をすり抜けてきた事例もつい数か月前にあった。というか被害に会った。

そう考えれば海上に居ようが地下に居ようが結界があるうが変わらない訳で。そう思うと移動距離が短い地下行きの方が海上よりもマシに思えてきた。地下の避難所にも勿論全盛期のミラレベルに近い人間が警護に当たっている訳だし、地下ならもしかしたらその場を下に向かつて魔法で掘っていけば見つからずに事をやり過ごせる可能性もある。

そうやって色々と考えた結果、ひなたも地下の方がいいんじゃないか、と思えてきた。身投げで自殺という手段が取れなくなるが、どっちみち毒薬はあるので死に方は海上だろうが地下だろうが同じだ。

「……まあ、ヒナタがそれでいいのなら」

「じゃあ、地下行きで」

「……分かった」

地下行きと言うと日本で見た千年近く強制地下労働を強いる漫画の言い回しっぽくてちよつと思ふ所があったが、取り敢えずは地下の避難所へ行く事が決まった。書類にもしっかりとそう記入し記入漏れが無いが、名前を書き間違えていないかを確認だけ済ませます。

「……うん、大丈夫。じゃあ、書類を出してくる」

「ボクも行くか？」

「……すぐ帰ってくるから」

「分かった。じゃあお酒飲んで待つてるね」

「……真昼間からのお酒はちよつと控えて」

ミラは少し困った表情を浮かべると、書類を何回か折ってポーチに仕舞いそのまま家を出ていった。

駆除連合までの距離はそこそこある。帰ってくるのは大体二十分後位か、それが三十分後位か。ミラの移動力からしたら後者だとは思われるが、どちらにしろ十分以上は帰ってこないだろう。だからひなたはこれから誰にも文句を言われず飲酒タイムだ。

座っていた椅子から立ち上がり冷蔵庫を開け果実酒を取り出し、予め作っておいた非常食兼おつまみの干し魚と一緒にマツサーヂエアの肘掛に置き干し魚を着に酒を呑む。真昼間から飲む酒の味に一息吐きながら干し魚を齧る。丁度いい魚のうま味と骨が口の中に刺さる感覚。齧る場所を間違つたと気づいたがそのまま骨ごと干し魚を噛み千切つて口の中で噛み砕く。

「あー……至福」

アルコール特有の苦みと果実の甘さを味わいながら干し魚を食う。シャーレイがもうすぐ帰ってくるだろうが、きつと帰って来たら何か言われるだろう。その時は……まあ、これは三時のおやつだと言つて見逃してもらおう事にしよう。

この胸の不安はこうでもしないと忘れそうに出来ないから。しかし、それはどうしようも出来ない物。かつて己を襲つたブラッドフォードという意思を持った天災とも言うべきか、とにかくひなたのような人間では太刀打ちが出来ない物を見てしまい、今それが自分達の平和を乱そうとしているからこそ、この胸の不安はどうしようもなく肥大していくばかりで拭えなかつた。酒を飲んで気を楽にしてもそれを完全に拭う事は出来ずどうしても不安は付き纏う。

先日は一番年上という既に消えかけている見栄で二人を慰める様な事を言つたが、三人の中でこの事態をどうにもならないと諦めているから何時ブラッドフォードが襲ってくるかという不安に一番怯え

ているのはひなただ。

ブラッドフォードは強い。シャーレイには大丈夫だと言った。ミラにはイヴァンがどうにかしてくれると言った。しかし、ひなたにとってのブラッドフォードは己が討つ仇でもあり、恐怖の象徴でもある。慰めた手前二人の前で泣き出すような真似はしなかったがそれでも不安は強い。いや、諦められないとも言えるが。

もしかしたらイヴァンがブラッドフォードを倒してくれるかもしれない。だが、ひなたは一回ブラッドフォードと対面し、戦っている。それ故に何となくだが分かってしまう。ブラッドフォードはイヴァンよりも格上なのだ。それが何となくだが察せてしまっているから、どうしても酒に逃げてその恐怖とも言える不安から逃げている。逃げないと自分が潰れてしまいそうで、全てを投げ出してしまいそうで。

荒れていないのはシャーレイとミラという精神安定剤があるからだ。多分、二人が居なかったら今頃ブラッドフォード探しに躍りになって数日後にはのたれ死んでいるだろう。

この世界はクソだ。クソゲーと無理ゲーを混ぜ合わせてミキサーにぶちまけたような、優しさを暴力でねじ伏せていく理不尽が大手を振って歩いているような世界だ。いや、何処の世界もそうなのかもしれない。力こそ正義。正義こそ力。そんな世界で最強を名乗れない時点で自分の生活を老後まで確保して悠々自適に生きるなんて無理な話だったんだ。

酒の力を借りても沸いてくる嫌な考えをつまみの干し魚を食らう事で少しだけ忘れ、後は全て酒で嚙下する。畜生、と呟けば嚙下した筈の物が再び沸いてきて、その繰り返しだ。これをどうにかするには寝るしかない。しかし、ここで寝てしまえば夜中に寝れないから眠れない。嫌なサイクルにハマってしまい何とも言えない気持ち胸中にしたまま酒を煽る。果実酒の甘さと干し魚の味が妙に合わない。もう少し苦めの酒を用意しておくべきだったかと後悔しながらもチビチビ酒を飲み進める。

「ただいまー」

「あ、おかえり」

「いやー、帰ってくる途中に凄く遠くに雨雲みたいなのが見えたから焦ったよー。すぐに洗濯物取り込まないと」

袋が擦れる音を鳴らしながらドアが開けられシャーレイの声が聞こえてきた。買い物に出ていたシャーレイが帰ってきたことで負のスパイラルにあつた己の胸中に光が差し込む。

この悪い事を一旦忘れる方法は酒を飲む以外にもある。それはシャーレイやミラと一緒に居る事。二人と一緒に居れば多少の悪い事は忘れられる。この不安も二人と一緒に忘れてスルーすることが出来る。二人と居るだけで最高とさえ言えてしまう。心の支えとも言える彼女が顔を見せ、自然と笑みが漏れる。酒と摘まみを置いてから玄関に居るであろうシャーレイに顔を出す。

彼女は両手で持つには少し多いくらいの荷物を玄関に置いて一息ついているシャーレイを見て少しは荷物を肩代わりした方がいいと判断して彼女の元まで行き置いてある食料品が入った荷物を片手だけで持てる分だけ持つ。

「持つてくよ」

「あ、ありがと。じゃあ、台所まで運んでくれる？」

「オーケー」

シャーレイの言葉に従ってシャーレイの先を歩いて台所まで食料品を運ぶ。

このまま冷蔵庫に食料品を入れる所までやってあげたいが、そこら辺はシャーレイしか分からない事なので置いておくだけにする。彼女には家事関連の事を全て任せてしまっている。少しは手伝いたい気分ではあるが隻腕のひなたが手伝うと逆に時間がかかったりシャーレイが苦勞したりする事がある……というかあったので食料品の収納とこの後のご飯の用意を任せてひなたはマッサージチェアに戻る。

「あ、またお酒飲んでる」

「バレた？ まあ、こういう時位でしか飲まないからいいでしょ？」

「ちよつと顔が赤いなあつて思ったら……潰れないですよ？」

「そこまでお酒弱くないからね?」

「えー?」

「うっわ信用されてないや」

とは言ってみるがひなた自身酒に強いとは言えない。いや、寧ろ弱い方に入るため文句は言えない。なので度数の低い甘い酒をジュース代わりに飲む程度だがそれでも十分に酔えてしまう。今でさえほんのり頬が赤くなっているなのでこれ以上度数の高い酒を飲んだりしたら顔が真っ赤な茹蛸状態になって変なテンションになってしまう事は間違いないだろう。

こんな時期なのでそうしてヤケになってみるのもいいとは思うが、それだとシャーレイとミラに酔っ払いの介抱という面倒を押し付けてしまう事になる。流石にそれはしたくない。

残っていた酒を一気に飲み干して空になったコップを流しに置き、軽く洗う。その際にチラツと食料品を片付けているシャーレイを見たが、やはり半年もこの家の家事を任せていたからか手慣れており鼻歌を歌いながらせつせと自分で決めた区画に合った食品を手早く収納している。それを見ているととてもじゃないが半年前までスラムで生きていた少女とは思えない。元々そうやって家事を趣味にして生きてきたと言われた方がしっくりと来る。

そんな彼女の様子を見て、聞こえてくる鼻歌を聞き何の曲だっけかと思いつながらマッサージチェアの方へ戻りちよつとずつ食べ進めていた干し魚に一気に齧り付いて口の中に入れてから食べられない部分はそのままゴミ箱へ。

「あ、ひなたちゃん。ついでに馬車で食べる食料も買っておいたからね」

「んぐんぐ……じゃあすぐに取り出せるように纏めておいてくれる?」

「わかったー」

干し魚を飲み込んでからシャーレイに指示を出す。

着々と避難の準備は出来てきている。これなら迎えが来たらすぐに荷物を片手に馬車に転がり込むことが出来そうだ。

あと準備が出来ていないのを考えるが、もう私物は必要最低限纏めておいたし食料もチラツと見たが水も含めて買い込んだ。残りは本当に当日の己の身だしなみ程度だろうか。

破滅が迫ってきている中での限られた穏やかな時間を感じながらひなたはマツサージチェアに座った状態で空を見た。今日も憎らしいほど青く見下してきている。だが、それが見えている限りはブラッドフォードが襲ってくる可能性は皆無とも言えよう。今の青は平和の象徴とでも言える色だった。

このままずっと、青が自分達を見下ろしてくれたらいいのに。ついそう考えながら右手に顎を乗せて空を見上げる。

すると、窓から見える空の端に先ほどまでは無かった黒い雲が見えた。ああ、そういえばシャーレイが帰ってきてからすぐに雨雲が見えたと言っていたな、と思い出しながら後ろを慌ただしく歩いていくシャーレイの足音を聞く。ボーっと空を見上げながらあの雨雲ドス黒いなあと思う。

「……そういえばあの日もこんな雲が一気に空を——」

——そう、こんな感じの、雲が、すぐに、空を。

シャーレイは何て言っていた？ 遠くに雨雲が見えたと言っていた。今見える雨雲はひなたの視線の奥の方に見える物ではなく、ひなたの真上を通るようにして流れてきている雲だ。

これがシャーレイが買い物から帰る途中に遠くに見えた、だって？ それだと、可笑しい。この雲の速さは明らかに可笑しい。外は風が吹いているが、雲がそこまで高速で移動するような暴風ではない。

こうして考えているうちに雲は有り得ない速度で青を塗りつぶしていく。この速さも、有り得ない。速い、速すぎる。

これじゃあ、あの時と同じ……あの日と同じじゃないか。

「う、そでしょ……ただの雨雲だよ？ ただの雲なんだよね？」

祈る。椅子から立ち上がり窓を見上げ空を見ながら、この雲から雨粒が落ちてくることを祈る。

あの日見た雲は雨を一滴も降らさなかった。

——あの日の光景が脳内を駆け巡る——

だから、これはきつとタダの雨雲なのだ。

——雲がすぐに移動し、雲が切れた所からは紅色に染まった空が見えた——

シャーレイがこの後、結局洗濯物が間に合わなかったよと笑って愚痴りながら濡れた洗濯物を取り込んでいる。そんなこの後を脳裏に浮かべてそう信じ込む。

——紅に、紅に。全てを壊した紅を思い出し、吐き気が催してくる。己のトラウマを想起させられる——

そして、その祈りは届かなかったのか。ひなたの真上から雲は晴れていき、空はその色を見せる。

——その色は紅で、全てを壊しつくし嘲笑ったあの時と全く同じ色合いをしていて——

「あ、ああ……」

雲が、全てその姿を消して、それは姿を現した。

あの日、一年半前のあの日、ひなたから全てを奪い去っていく序章ともなったあの紅色の空が。

「う、そだ……こんなにはやく、なんで、どうして、いやだ、またボクはあいつに……」

あの日の記憶が今まで以上に鮮明に脳内に浮かび上がってくる。

次々と動く屍と化していく村人達。それを殺す事しか出来ない自分。掠れ低くなった声で食わせると発狂しながら組み付いてくる優しかった人達。それを泣きながら撃ち殺す自分。仲の良かった老夫婦の死。それを見る事しか出来なかった自分。怒りに身を任せ真祖と戦い、負けた自分。そして見た灰に埋もれ、血に塗れ、真祖の笑い声で蹂躪された村。それを涙を浮かべただ泣き叫びながら見る事しか出来ない、非力な女——

「いやだ、いやだいやだいやだいやだ——ううっ?!」

想起されたトラウマが心を抉り、精神がそれに耐えられない。

そうして起こした体の反応は、胃の中の物を吐き出させる事だった。

第六十九魔弾

「……ヒナタ、大丈夫？」

「……………ごめん」

「ひなたちゃん……せめて何か食べないと……」

「……………多分、吐いちゃうから」

紅に染まった空。それを見たひなたの反応は自分で思っていたよりも遥かに重い物だった。

トラウマに心を抉られ胃の中の物を吐き出してしまった後、ひなたは一時的に発狂して外へと飛び出した。それを止めたのはひなたの吐く音を聞いたシャーレイであり、家を出て数メートルの所で何とかシャーレイがひなたを止め、そのままどうにもならなかったため抱えて家に運び込み、そのままソファに寝かせて組み付き、落ち着くのを待った。

そうしてひなたは何とかして落ち着いたが、代わりに今まで何とか保っていた心の余裕を全て失ってしまい、部屋の隅で膝を抱えて蹲っている事しか出来なくなった。多少は物を胃に居れようとしたが、固形物を食べたらずぐにそれを吐いてしまう始末であり、水ですら飲むだけで大分体力を消費してしまう。

そんな状態のひなたをシャーレイが心配しない訳が無く、紅に染まった空を見て焦ってパニックになりかけていたミラもひなたの様子を見て一瞬で落ち着きを取り戻した。

不安になっていた自分達に対して大丈夫だと慰めてくれた彼女がここまでやられてしまっている。それを見てようやく、今回の事件は彼女にとってどれだけの重荷になっているのか、ブラッドフォードという存在がどれほど彼女の心を抉りとっていった存在なのかを表していた。

怖い。また全てを失う事が怖い。その気持ちだけが大きくなり、そして常に頭の中での光景がフラッシュバックを続けている。もう少し平静を保っていられるつもりだった。しかし、現実は予想以上にひなたの心を容赦なく砕きにかかってくる。頭の中で見知った顔

が死んでいく度に心を恐怖が染めていき体が震える。腕を斬られてボロ雑巾にされたあの時を思い出し今は無い左手が幻の痛みを訴える。

今こうして部屋の隅で蹲っているのも、そのせいだった。

背中を晒すのが怖い。背中からあのゾンビが、ブラッドフォードが襲ってくるかもしれないから。背筋を張って立っているのが怖い。あの恐怖達が自分を見つけて襲い掛かってくるかもしれないから。

だから、部屋の隅で背中を壁に預けて蹲っている。こうしないと最早自我を保っている事すら無理だった。

「……どうしよう、ミラちゃん」

「……余り刺激しない方が」

そんなひなたに対してシャーレイとミラが出来る事は少なく、今は無理に立たせて移動させるよりも余り声をかけず刺激しないでいた方がいいと判断してひなたの側には居るが必要以上に声はかけない。そうやって時間を消費していく事にした。

しかし、ひなたがこうして塞ぎ込んでしまっている。そして、何時も青い空が紅になり、とうとうブラッドフォードが何時襲って来ても可笑しくないこの状況。家の中の空気が時間経過と共に悪くなっていくのは火を見るよりも明らかだった。

ひなたは時々小さく悲鳴を上げ体を震わし、シャーレイはそんなひなたを見てどうしていいか分からずただ俯き、ミラも自分には何もできないと分かっているから歯を食いしばって俯くだけ。それ以外にどうしようも出来ないのがもどかしくもあり苛立ちにもなっていた。

そうして時間は無駄に消費されていき、気が付けば紅に染まった空に徐々に黒が混ざっていき、何時もは黄色に染まっている月が紅に侵食された状態で空へと昇った。それを見て何時もは食事をする時間だとようやくシャーレイは気が付いた。

「……ミラちゃん、何か食べる？」

「……いらない」

「ひなたちゃんは……」

「……」

ミラは食事を拒み、ひなたは言わずがな。かく言うシャーレイも今は食事が喉を通りそうには無かった。

このままじゃブラッドフォード以前にこちらの精神と胃が持ちそうにない。ギスギス、とまでは行かないがどんよりと湿ったような雰囲気に晒されてこちらも参ってしまいそうだった。

「……もう寝る?」

となれば、もう寝てしまったほうがいいだろう。でないところの暗い雰囲気にやられて参ってしまいそうだし何か変な気を起こしたり変な事をしてしまいそうだ。

その言葉にミラは静かに頷いて同意を示し、ひなたは何も反応をしなかった。だが、このまま彼女をここに放置していくのは危険すぎる。またひなたが発狂して外にでも飛び出したら確実に見つかる事は出来ないだろう。だからここは引っ張ってでも彼女をベッドまで連れていく事にした。勿論、立つてくれるのが一番なのだが。

「ひなたちゃん、ベッドに行こう?」

「……」

シャーレイがそう諭してもひなたは反応しない。

仕方ない、とシャーレイはそつとひなたの両膝の裏に手を回し、もう片方の手で彼女を抱え込むように抱き、そのまま持ち上げる。所謂お姫様抱っこだが、今のひなたを持ち上げるにはこの持ち方が一番楽だった。

持ち上げた彼女の体は思った以上にも軽く、その重さが腕一本分だというのにはすぐに気が付いた。

抱き上げられたひなたは暫く動かなかったが、階段を登ろうとした所でそつとシャーレイの首に手を回した。

「……失望した?」

そして、そつと呟いた。

その言葉の意味をシャーレイは暫く自分の中で考え、その言葉が今のひなたの様子。つまりは紅の空を見て発狂し塞ぎ込んでしまう程の弱い自分に対してだと気が付いた。

それに勘づき、小さく笑うとシャーレイは少しだけひなたに己の顔を寄せた。

「そんな訳ないでしょ？　どんな事があっても、私はひなたちゃんに失望なんてしないよ」

「……………ん。ありがと」

シャーレイの言葉を聞いてひなたは少し表情筋を緩めた。

もう既に知っている。ひなたが弱い事なんて。

強いが、弱くもある。良くも悪くも人間らしさを捨てきれていない。それがひなただ。恐らく、三人の中では一番人間らしい精神を持っている。だから好きになった。だから彼女とずっと一緒に生きていきたいと思った。

彼女を抱き上げる力を少しだけ強めて寝室に入り、そつとひなたを寝かせる。ひなたはすぐに布団を探り当てるとそれを被り、そのまま潜り込んだ。やはり、まだ自分を外界に晒すのは精神的に辛いらしい。だが、それもまた可愛らしいと思いきやシャーレイは寝間着に着替えるとひなたの被っている布団の中に半分無理矢理潜り込み、自分の体を丸めて抱えるようにして横になっているひなたを見つけるとそのまま抱きしめた。

「おやすみ、ひなたちゃん」

「……………おやすみ」

二人で抱き合いながら目を閉じる。が、眠りに着く前にもう一人が布団の中に入ってひなたを後ろから抱きしめた。

「……………忘れられた」

「あ、あはは……………ごめんね？」

「……………すう」

「……………ヒナタ、もう寝てる」

「え、嘘。はやっ」

ミラに言われてひなたが目を閉じてすぐに眠りに着いているのが分かった。何時もシャーレイの方が早く寝ているためひなたがここまで早く寝るのは意外だった。

が、よく考えれば彼女は今日、精神的に疲弊しきっていた。もしも

一人で寝ていたらきつと眠れない位には外に恐怖していた。だが、シャーレイと抱き合つて人肌を感じながら目を閉じたから安心して眠れたのだろう。早く意識を落とせたのは単純に疲れていたからか。理由はどうであれ、ひなたは今こうして眠りに着けている。夢見は恐らく良いとは言えないだろうが、それでも寝ないよりは遥かにマシだ。シャーレイはそつとひなたの髪の毛を撫でるとその後を追うように目を閉じた。

「……あ、実は私、あまり眠くないから眠くなるまで何か話でも——」
「すう……すう……」

「くっぴー……」
「……………えっ、マジ？」

ミラ・B・マイヤーズ。彼女は空気の読めるいい女である。しかし、今回はそれが仇となつてしまったのであった。

結局彼女はそつとベッドを抜け出し全力で体を動かし、眠気を催す程疲れてから汗を流し、もう一度ベッドに潜り込んだ。ひなたの体は暖かかった。何だか子供を抱きしめている気分になつてしまったのは内緒だ。

気が付けば空の紅い朝だった。

そんな奇天烈で二度と来てほしくない嫌な朝を迎えひなたは温もりに抱きしめられながら目を覚ました。

夢見が良い訳では無かった。というか夢を見なかった。それくらいにひなたはぐつすり眠りに着き、今こうして目を覚ました。目を覚ましてすぐに目に入ったのはシャーレイの寝顔で、彼女越しに見える空は紅に染まつている。

ああ、あの紅の空は夢なんかじゃなかったのか。僅かに期待していたそれは見事に裏切られた。ついでに言えば窓から差す赤色の日差しが目に悪い。だが、そう考えられる分、昨日よりも幾分か心に余裕が持てているという事だろう。自分でそう考えるが、紅の空が自分に

押し付けてくる恐怖とトラウマのフラッシュバックは収まらない。起き上がろうと体を動かした直後に襲ってきたフラッシュバック。特に、恩人であるあの二人の遺体を思い出してしまい、言葉に表せない程の不安を覚え思わずシャーレイに自ら抱き着く。

暖かさに包まれている。しかし、体の底から湧き上がってくるような冷たい恐怖が己を掴んで離さない。怖い。怖い。もう嫌だ。誰か助けて。そんな気持ち胸を一杯にして自分の心を、体を冷たくしていく。

幾ら力の限りシャーレイに抱き着こうと、彼女の暖かさに身を預けようとそれは消される事が無く、ひなたの体を震わせる。

「んう……ひ、なたちゃん？」

そうして思いつきり抱きしめてしまったからか。シャーレイが目を覚ました。ひなたが幾らこの中で一番力が弱いと言っても、最低限の近接戦は出来る様な筋力や体の鍛え方はしている。だから力の限り彼女を抱きしめてしまえば眠りに着いている彼女を起こしてしまうのは必然とも言えた。

だが、シャーレイは青い顔をして自分に抱き着き震えているひなたの様子を見て何時もは覚醒までに時間がかかる頭をすぐに覚醒させ、そつとひなたを抱きしめた。抱きしめられたひなたは少しびっくりしたのか大きく体を震わせたが、シャーレイが抱きしめ返してくれたのを察してその顔をシャーレイの胸に押し付けた。

「ぶ、めん……こわくて、どうしても……」

「……大丈夫。私はここに居るからね？」

「うん……」

やはり、一晚寝たくらいでは彼女の心はどうにも出来なかった。この紅の空をどうにかしない限り彼女はずっとこの状態だろう。

だが、せめて食事位は出来るようになってもらわないとひなた自身の体が持たない。後で消化に良い物でも作って水と一緒に食べさせないと空腹でも、脱水症状でも倒れてしまうだろう。特に脱水症状を移動中などに引き起こせばほぼ詰みだ。塩と水をちよつとずつ飲ませれば何とかなるが、塩なんてそう持ち運ぶ気も余裕もない。だか

ら、最低限水分補給は出来るようになってもらないと駄目だ。

かと言って無理矢理食べさせたり飲ませた結果、吐き出してしまおうと彼女の体力を消耗させてしまおうと倒れる時期が早まってしまおう困った物だった。

だが、今は。

「……ミラちゃんが起きるまで、一緒にここにいよっか」

「……うん」

彼女を安心させるために、抱きしめてあげよう。

優しくひなたを抱きしめ、自分の体で紅の朝日を隠す。少しでも彼女の心を安らげるために。

第七十魔弾

紅に染まりながらも地を照らす空。それは見る者を全員不安にさせ、その中の一部。今回の件がブラッドフォードによって引き起こされていると知っている者は決戦の地が近いと覚悟を決めている。

しかしその中で唯一、ブラッドフォードの直接的な被害に会い尚且つ生き残っているひなたが一番精神的なダメージを負っていた。

起きてすぐにシャーレイに背負われて毛布を羽織った状態で一階に降りたひなただったが、降ろされてすぐに部屋の隅へ逃げ、そのまま毛布を被った状態で動かなくなってしまった。やはり、寝ただけでは治らない。少し期待していた分もあってシャーレイとミラは小さな溜め息を漏らさざるを得なかった。

が、一つだけ進展はあった。毛布を被った状態ならシャーレイかミラにくっ付いた状態で移動が出来る。ひなたが腕に抱き着いてくるが、ちゃんとひなたを拒まずにいれば彼女は動いてくれた。それに、食べ物も完全な固形物はまだ食べられないが粥ならなんとか食べることが出来た。食べ過ぎると吐いてしまうが。

そうして何とかひなたに物を食べさせ飲ませて移動させてをしながら時刻は既に昼。外を見ても空が真っ赤なので目に悪いが、その中でも光っている太陽は自分たちの真上を超えていた。

「…………ごめん、迷惑ばっかかけて」

「だ、大丈夫だよ。気にしてないから」

「…………今よりもヒナタの生理中の方が面倒」

ミラの言葉で思い出されるのは月の日でぶっ倒れて腹を抱えたまま腹痛やら頭痛やらで苦しむひなたの姿。女の体なんてクソ食らえと呟き続けながら腹の痛みに耐え、そして一人では立つことすらままならない痛みのためシャーレイとミラが色々世話をして。それでピークを過ぎると今度はひなたが四六時中イライラしていたりちよつとした事でキレかけたと思っただけで謝ったり、と思っただけいきなり騒ぎ出したり。何時もの情緒不安定に拍車がかかってしまう。

ちなみにミラはシャーレイ同様軽い方なので偶にひなたに軽い人には分からないでしょうねえ!! と叫ばれたりする。なので今のひなたよりも月の日のひなたの方が結構面倒なのだ。

「……いや、ほんとごめん」

「わ、私も生理中は結構不安定だしお互いさまだよ」

「……シャーレイが不安定な時って見た事ないんだけど」

「……………」

シャーレイとミラが月の日の時はそこまで変化はない。というかほぼない。本人は少し不安定でイライラしていたり少し落ち込みやすくなっている、とは思っているらしいがひなたからしたら別に何時もと余り変わらない。ちよつとイラついてるかな? とは思ってもそれだけだ。

気が付いたらなってるし気が付いたら終わっている。ひなた的にはそれが羨ましかった。

「……ボクもなあ、軽かったらなあ……生理痛があんなに辛いなんて知りたくなかったなあ……」

「あ、あははは……」

「……女に生まれた不幸」

月の日なんて知らねえ取り敢えず性欲解消だと夜中に耽っていただけの男の時代が最早懐かしい。というかもう二度と戻ってこないだろう。

そう考えるとただでさえナーバスな気持ちがあつとナーバスになつてくる。

それをどうにかして忘れるためにシャーレイの膝の上に対面になるように乗ってそのまま抱き着く。何やかんやでこれが今のひなたにとつては一番の精神安定剤なのだ。ミラでもいいのだが、ミラだと少し胸の脂肪が少ないため実際に抱き合うと何だか幸福感が少しだけ下がる。

「……今喧嘩売られた気がした」

「……売ってない」

胸に関しては何なたがどうこう言えるものではない。この三人の

中だとひなたが一番小さいのだから。

シャーレイが山、ミラが緩い坂、ひなたが平野。ミラは改めて自分の胸をなで下ろし、起伏を殆ど感じられなかった事にため息をついた。

「……でも、少しは元気になったみたいでよかった」

少し頬を膨らませていたミラが小さく笑いながらそう言った。

確かに、今のひなたは昨日と比べたら元気がある。と、いうよりもまともに会話が出来ているため昨日よりも大分マシな状態になっている。シャーレイもそれには気が付いているようでそつとひなたの頭を撫でる。その優しい手つきと温もりに安堵したせいかな瞼が若干落ちてくるが、そのまま寝落ちてしまうということがないように目を擦ってからシャーレイの膝の上から退いて彼女の肩に頭を預ける。

確かに昨日よりも多少は元気があるが、それでも脳裏ではあの光景たちが今でもフラッシュバックを繰り返している。例え愛する人と抱き合おうと肌を重ねようとこのトラウマのフラッシュバックからは逃げる事が出来ない。

今でもシャーレイとくっ付いているからこうして会話する余裕も持っているが、離れればまた昨日の二の舞だ。外に何て出たら更に酷い事になるのは間違いない。

「……明日、避難所へは行けそう？」

「……頑張る」

ミラの問いにひなたは是、とは答えず言葉を濁した。

昨日、届け出を出したばかりではあるが、お上はたった一日で受け入れ態勢と馬車の用意を終わらせてくれるらしく、明日には家の前に馬車の迎えと万が一の時のための護衛を一人出してくれるらしい。

その護衛は女性らしいが、ひなた達とは別の馬車に乗るらしく、基本的に顔を合わせる事は無いだろう。精々馬の交換や深夜等に顔を合わせて世間話をする程度だろうか。最も、今のひなたを見せてしまうと煽りの材料になってしまう可能性もあるためひなたは一回も顔を合わせるつもりはないが。

「……じゃあ、私は出かけるから」

ミラは太陽の位置を窓から確認すると大体の時間を察し、出かける
と告げた。

行く場所は駆除連合であり、そこで今も作戦会議を続けているイ
ヴァンに会いに行く。

明日にはこの街を離れ、三人はこの問題が解決するまでは避難所暮
らしを強いられる事となる。その時間でイヴァンが死ぬ可能性とい
うのは大いにあり、イヴァンとミラが死に分かれてしまうと事にな
る。

だから、悔いが無いように今日、ミラはイヴァンと話をしに行く。
もう二度と会えないかもしれない。そんな思いを胸に押し留めて、最
後になるかもしれない親子の団欒を。

「あ、もうそんな時間？」

今朝、それを伝えられたシャーレイとひなたはそれを止めるなんて
事はしなかった。むしろ、今日はそのままイヴァンとずっと一緒に居
てもいいと告げた。

だが、ミラはそれを断った。理由として彼女はひなたが心配だか
ら、と笑いながら言ったが、恐らく真意はそれではない。

一日も一緒に居てしまったらきつと別れが辛くなる。もう二度と
会えないかもしれない。それを理解してしまっているから別れを惜
しまないために、後ろ髪を引かれなかったために数時間だけ会って話し、
食事をして別れる。それが一番、最後の別れを惜しまなくて済む方法
だと思っっているから。

「……うん。ヒナタの事、お願い」

「分かってるよ。行ってらっしゃい」

ミラは最後にひなたの頭を少し撫でると、杖を両手で持って外へ出
かけて行った。

あとは親子水入らずの時間だ。二人が関与する時間ではない。

「……ひなたちゃん、暫く寝たら？」

シャーレイは顔色が著しくないひなたの頭を撫でながらそう言っ
た。

朝食を食べるだけで彼女は結構な体力を使った。このままだと昼

食を食べる事は出来ないだろう。だから、昼食は寝て体力を回復させて夕食だけを食べたかどうか。

そんな思いを込めた言葉は半分くらいはひなたに伝わった。が。「でも……」

ひなたが寝てしまえばシャーレイは動けない。きつと、寝ている間でもシャーレイが離れてしまえばひなたはすぐに耐えられなくなってしまう暴れてしまうかもしれない。

だから、それだとシャーレイが辛いと思ひ否定の言葉を口にしようとした。が、シャーレイは笑顔でその言葉を大丈夫だから、と遮った。「こう見えても三日間何も食べずに走り回った時もあったんだよ？

お昼くらい全然余裕だよ」

シャーレイは笑顔で大丈夫だと告げた。

が、頭の中を巡るのはお世辞にも良いとは言えない記憶で、シャロンと一緒に何処からか沸いてきた分からない人身売買組織に追われて三日三晩何も食べず飲まずで大人の男達から逃げ続けた記憶がリフレインする。

あの時はつらかったなあ、としみじみと思ひながらひなたの頭を撫でる。

「……そう言うんなら、甘えてもいい？」

「うん、全然いいよ」

最終的にシャーレイの言葉にひなたは甘え、彼女の膝の上に頭を落とすとした。

そして、目を閉じてから大体一分位か。彼女の吐息は何時の間にか寢息へと変わっていた。一度食べ過ぎて吐いてしまったせいかなり体力を使っていたらしい。その時の吐瀉物はシャーレイが掃除した。腐った物をシャロンと共に食べて吐いた経験が何度もある彼女にとってその程度は別に苦では無かった。

そんなひなたの母親代わりとも言える事をして、今もこうして膝を彼女の枕代わりをしているシャーレイは優しい笑顔でひなたの頭を撫でる。長くて綺麗な銀色の髪が指の間を流れ、くすぐったそうなひなたの声を聞く。

こうしているだけで暇なんて忘れる事が出来てしまいそうだ。そう思いながらシャーレイは天井を見た。

「……お腹空いたなあ」

しかし、大丈夫とは言った物の空腹は襲ってくる。

少し判断を早まったかなあ、と思いながらそれを忘れるためにひなたの頭を撫でるのだったが、腹の音で彼女が目を覚まさないか。それだけが現在の悩みだった。

「……パパ」

「ん？」

駆除連合の奥、先日ひなたが拉致された会議室から少し離れた場所でミラはようやく己の父であるイヴァンを見つけた。

彼は何処か疲れた表情をしており、寝ていないのか目の下には隈を作っていた。彼の表情から見るに大体三日位は寝ていないし喧騒の中に身を置いている物だと思われる。手にはコーヒーらしき物が入ったコップがあり、真っ黒なそれはコーヒー特有の匂いを放っていた。

彼は煙草を吸わない。だからストレスを一時的に忘れる方法としてはこうして休憩がてらに酒を飲む事しか知らない。だが、こうして常に警戒態勢である事から酒ではなくコーヒーを選んだのだろう。

「……寝不足？」

「まあな。外がこんなんだ。いつ奴さんが来ても可笑しくない」

ミラを前にした顔は何処か強張っており、ヴァルコラキよりも遥かに強いと思われるブラッドフォードを相手にしなくてはならないという緊張感と恐怖が娘を前にしても気持ちを溶かす事を許してくれないらしい。

真祖という人間を超越した種族。それに技術と能力でどれだけ迫れるかが人外との勝負になる。ヴァルコラキは今の状態で十分に迫ることが出来た。だが、ブラッドフォードに迫れるかどうかは実際に

対峙してみない事には分からないし彼の切り札とも言える不死殺しの剣がブラッドフォードにも通用するのかが分からない。それが人間と言う枠を超えた彼に恐怖を刻み込んでいる。

「……なあ、見てみるよ。手が震えてやがる。こいつは本格的にヤバいって体が分かっちゃまつてるんだ」

イヴァンが己の手を見ながらミラにそう呟く。

彼の手は細かに震えていた。父のそんな弱音を聞くのは初めてでミラは狼狽した。が、父も人間だ。恐怖くらいするんだと思えば父が今まで以上に近く感じれた気がした。

「……パパなら大丈夫だよ」

だが、せめて何か声をかけたい。そう思つて慰めにもならないであろう言葉を彼にかける。

イヴァンはその言葉を聞いて少し黙り込むと、笑顔を作つて礼を言ひミラの頭を少し乱暴に撫でた。だが、ミラにとってそれは懐かしく、嫌な気は一切しなかった。

「なあ、ミラ。お前は俺より早く死ぬなよ？」

そうして撫でながらイヴァンはミラに囁いた。

その言葉は、愛する妻に先に旅立たれた彼の気持ちに籠っていた。こんな腐つた世界で一人で居たくない。娘の死なんて聞きたくない、見たくない、知りたくない。彼女が元気に生きているという事だけを知りたい。だから、せめて自分が死ぬまで死んでほしくない。出来る事なら天寿を全うしてほしい。

子育ての方法が分からなくて彼女を一人にし続けてきた男の言う事なのか、と言われても彼はそうだと肯定する。これは一人の親として、娘を持った男としての当然とも言える感情だ。娘の幸せを願う、一人の親としての。

「……うん」

「そうか、良い子だ。やっぱお前は俺の自慢の娘だよ」

彼は本当は心配だった。一人で寂しくないか。仲間が出来ないのに大丈夫か。変な男に付いて行ってないか。そんな心配と戦いながらもヴァルコラキを探る事を優先していた。

足を失ったと聞き、あの時もつと一緒に居てやるべきだと思った。後悔してしまった。

だが、あの時の子が。ブラッドフォードの眷属の少女が彼女の友となり、仲間となってくれた。彼女と共に生きていくから足なんて気にしていない。そう聞いて少し安堵した。そしてその後に出会ったミラは、友を失い悲痛な表情をしていて、それを解決した後はとてもいい笑顔をしていた。イヴァンですら、数回しか見たことが無いほどの、良い笑顔を。

ミラからヴァルコラキの事を聞いた時、イヴァンは急いだ。ヴァルコラキを殺すために。

だが、今回の被害者がミラと関係のない人間だったら、恐らくそこまで急ぐことは無かっただろう。あそこまで急いだのはミラの友が被害者だったからだ。だからこそ、あそこまで急いだ。そして、間に合わせた。それくらいにまで、イヴァンはミラの事を大切に思っている。そして、彼女の友であり家族になってくれたひなたとシャーレイも。

だから、彼女達を守るために戦う。もう二十年も生きられないであろう命を使い、若い命を守る。そう覚悟を決めても、やはり怖い物は怖い。

「……パパ、また会おう?」

「また、か……」

「……うん。それで、一緒にお酒飲む?」

だが、この言葉が活力となる。

そうだ、まだミラと一回も酒を飲みあっていない。娘が成人する所を見たいない。

だったら、まだ死ねない。

「……そう、だな。お前と酒を飲みあうまで死ねるもんか」

彼の楽しみの一つは、マイと夜中に酒を飲みながら笑いあう事だった。愛する人から酒を注いで注がれて笑いあいながら飲む酒はとても美味しかった。

もう十何年も前だが、その味は今でも覚えている。忘れられない。

忘れるものか。

だから、それを愛する娘と共に。それを遂げるまでは、死ねない。

「……だから、勝って」

「……任せろ。絶対に勝って、お前を迎えに行く」

ミラを抱きしめ、誓う。告げる。ブラッドフォードを下して見せると。

今の顔は、少しみっともないから見せる事なんて出来ない。だが、声は告げれる。思いの丈は伝えられる。

「……待ってる」

少し口下手で、でもそれが可愛らしい自慢の娘の声を聞き、再びこの声を、温もりを感じるために戦うと誓う。

これは、そのための涙だ。

第七十一 魔弾

馬車が来たのは翌朝のまだ陽が上りきっていない時間帯だった。

だが、常に何かあればすぐに起きれるように訓練しているミラはそれにすぐに気が付き早々に精神的に参って起きれなかったひなたと普通に起きていないシャーレイを起こして元から纏めておいた荷物を持った。

もうこの家には帰ってこれないかもしれない。帰ってこれるかもしれないが、何かしらの爪痕が残っていても全く可笑しくない。空き巣が窓などを割って中を漁るかもしれない。そんな不安を残しておきながらも今は外へと出るしかない。だから、最後は思い切りをよくして家を出ることにした。

「……じゃあ、行くよ」

「うん。ひなたちゃん、大丈夫？」

「……なんとか」

まだ一人では不安定になってしまったためシャーレイにくっ付いているひなたは最近を着ることがなかったローブを羽織ってフードを深く被っている。毛布の代わりとして使っているが、昔から使っているためか毛布よりも安心感は強かった。それでも一人きりにはならないが。

女三人分の荷物は男性よりも少し多く、ミラが両肩からバッグをぶら下げ、ひなたは軽いものを詰め込んだ手提げバッグを肩からかけつつシャーレイに右手だけで掴まり、シャーレイはリュックを背負いその他大量の荷物が入ったバッグを持っている。ひなたはリュックを背負えない上に唯一残っている右手でシャーレイに掴まっていないといけないため必然的に荷物の分け方はこうなってしまう。

最初はひなたももつと荷物を多めに持つと言っていたが、それでシャーレイと離れてしまい発狂してしまえば元も子もないためそれを防ぐためにこうした。それに、力仕事ならシャーレイとミラで十分だった、というのもあった。

そんな訳でミラは家のドアにカギをかけ、ちゃんと自分の私物が

入ったバッグの中にカギを入れる。

「嬢ちゃん達、とつとと乗りな。上から急いで避難所に届けろって言われてんだ」

「……分かった」

「二応ケツが痛くならないようにクッションは三つ敷いておいたから使いな。あと、一人煙草を吸うって聞いたから灰皿も用意しておいた。灰を落とすなよ?」

馬車の御者である男性は中々サービスが良いようだ。ミラが馬車の中を覗いてみると畳んで紐で縛られた布団が三つ。そして馬車の端の端に魔獣が寄り付かないための結界を発生させる装置とランタンが固定されて置いてある。本当にサービスが良い。流石駆除連合の上の方が頼んだ馬車だ。サービスがかなり良い。

「途中で馬の交換とか御者の交代とかするけど、基本的には止まらねえから夜中とかは中の布団で寝ておけ」

「……そうさせてもらう」

「まあ、大体三日後のこの時間には着いている予定だ。暇だろうが我慢してくれや」

口は少し悪いがそれでも面倒見がいいのだろうか、はたまた仕事だから猫を被っているのか分からないが、言葉の節々から御者の男の、人の良さと言える物が伺える。

男は懐を弄ると煙草の箱を取り出し、それを啜えるとライターで火をつけた。どうやら、彼も煙草を吸うらしい。御者席の一部は改造されてお灰皿が取り付けられていた。

「ふう……お客に喫煙者が居ると気軽に吸えるからいいや。一本吸うか?」

確かに喫煙者がいる中でなら堂々と吸ってもそこまで文句は言われないだろう。現にミラもシャーレイも男に対して文句を言うつもりはない。煙草の臭いや煙なんてひなたが散々家の中だったり外だったり隣り合って歩いている時にお構いなしに吸っているため慣れたものだ。

だが、男が差し出した煙草の箱。それはひなたではなくミラに向

かっていた。明らかにひなたがこの中で最年少だと思われるしミラが成人済みの女性と思われる。

何時もはあまり表情を変えないミラが結構な苦笑いを見せてそつと指先をひなたに向けた。

「……吸うのはあっち」

「え？ いや、だって……」

「……あの子、今年で二十一歳。私は十九」

「……世界って広いんだな」

男はミラに苦笑いを返して煙を吸った。そして指先を向けられたひなたは特に気づくことなくシャーレイに引っ付いていた。確かに、何時ものクールさが少しは残っている状態ならもう少しマトモに信じられたかもしれないが、今のひなたは外見相応の少女そのものにか見えない。

つまりだ。今のひなたは何時もよりも子供っぽく見られていた。

煙草の煙が馬車の色に白を混ぜる。ストレスの解消、精神の安定、そのどれもに手を貸してくれる合法麻薬とも言える煙草の煙を吸い肺にそれを貯める。息を吐けば肺から煙が吐き出され、代わりに胸の内、肺の中に息を吐くだけでは取れない重いものがあるような錯覚に陥る。

しかし、それも慣れたもの。煙が与えてくれる安心感は頭の中の悪いことに対して一時的に煙をかけてくれる。それでも完全にフラッシュバックを防いでいる、という訳ではないためシャーレイかミラの傍から離れられない。

「もうボクはニコチンとタールが無いと生きられないんだ……」

「……完全に中毒」

「ヤニカスなんて実質薬中だよ……」

そう頭の中で理解していても止められないのが煙草なのである。

この世界に来てからの劇的な環境変化やブラッドフォードが押し

付けてきた特大のストレスと吸血衝動を忘れたいからと吸ってみた煙草がここまで効果的で尚且つ手放せない物だとは吸い始めた頃は思いもしなかった。

最初は一日一本。吸血衝動が来たときにだけ吸っていたが今や趣味にまでなつてしまひそうだ。もしもこのまま日本に帰つたらこの世界よりも味や種類が沢山あるため自分に合う煙草を探すという名目で色んな種類の煙草を買つてしまひそうだった。

それに、こうして吸っているのはシャーレイもミラも煙草を嫌っていないから、というのも大きい。もしもシャーレイが煙草は嫌だ、と言えば煙草は止めていたかもしれない。代わりに吸血回数が増えてシャーレイに襲われる回数が増えただろうけども。ミラの場合も同じだ。そのせいで今や肺が真っ黒なのだろう。自分の胃や腹の中身は見たことがあるが胸の内までは見たことがないため断言は出来ないが。

自分の胃や背骨を臓物を見たことがあるのに生きていくというのは明らかにおかしいが、それはシャロンの腹パン（強）のせいなので仕方ないといえば仕方ない。

閑話休題。

ひなたは煙草の灰を灰皿に落とし、短くなった煙草を啜える。

馬車の中に灰皿が備え付けてあり固定されているのは嬉しい誤算だった。お陰で煙草を遠慮なく吸える。

「だけど、これのお陰で少し楽になったかな……」

煙草を吸っている間は多少だが精神が安定する。少なくとも二人にくっ付いたまま吸っていればトラウマのフラッシュバックも和らいでくれる。

煙を肺に落とし、もう吸えなくなった煙草を灰皿へと捨てて新たな煙草を嫌な事を思い出させる頭を振りながら取り出し、火を付けて吸う。新たな煙草の煙に落ち、メンソールの味が舌と喉に残る。そして肺から吐き出し、吸い込む煙の温度でメンソール独特の爽快感が強調される。それがまた気持ちよく、そして煙の効果で悪いことを思い出す事を抑制してくれる。

こうして煙草を吸えば分かる。人間が麻薬というこれよりも強力
で中毒性のある物を手放す事なんて出来やしないと。

「でも、これから後三日なんだよね……」

シャーレイがそう呟いた。

後三日。空が紅に染まってから四日以上の時となる。その時まで
ブラッドフォードが動かないとは限らない。いや、むしろ既に動い
ていたとしても不思議ではないのだ。

この三日の間にブラッドフォードの無差別爆撃だろうと人間を一
人一人探し出して塵殺だろうと、どちらにしろブラッドフォードが動
けば三人に生き残る術はない。それがシャーレイにとつては心配
だった。それを慰めるのは何時もひなたの役目だったが、今のひなた
はポンコツ、というよりも機能不全を起こしまくっている。だから、
それを慰めるのは必然的にミラの役目だった。

「……大丈夫。根拠は無いけど……きっと間に合う」

「そう、だよね……」

やはり、この中で唯一暴力に抗う術を持たない存在であるシャーレ
イにとつて、この状況は何時もよりも恐怖が増しているのだろう。

勇気という名の蛮勇で己の中の恐怖を塗りつぶしていたヴァルコ
ラキの時とは違い、今回はこの恐怖を蛮勇で塗りつぶすための手段を
持たないシャーレイは己の中の恐怖とずっと戦い続けるしかない。
ひなたのように折れてしまった心ではなく、まだ折れていない心を
持っているがために。

「あー、お客さん。ちよつといいかい？」

「……なに？」

そうしてミラがシャーレイを慰めている中、御者台の方から声が聞
こえてきた。

その声に対応するのはやはりひなたではなく、ミラ。

「ちよいと煙草が切れちまってね……一本くれませんかね？」

そうやって三人の乗る荷台の方へ顔を出した御者の持つ煙草の箱
は確かに空で、御者の顔は少し申し訳なさそうな笑顔を張り付けてい
た。

だが、煙草関連はひなたの物だ。ひなたが嫌だと言えばあげられない。

そのためミラがひなたの方へ視線を投げると、ひなたは自分の鞆から自分の煙草を一箱取り出すと、それを御者に向かって投げた。それを少し驚きながら受け取る御者。

「一本で良かったんだがなあ……まあ、あんがとさん。お礼に快適な旅路をプレゼントしてやるよ」

「煙草を吸いたいののは、お互いさまですから……」

「それもそうか。こんな空じゃ、どうしても不安になっちゃうからな……」

御者は御者台に戻りながらそう呟き、暫くしてから煙を吐く音が聞こえてきた。

「……不安なのは皆一緒なんだね」

「……仕方ない」

こんな空じゃ、何時も陽気な人だろうと気が滅入る。

特に、真祖の魔の手がすぐ傍まで迫っていると知っている人なら。

第七十二魔弾

馬車での旅は、前と比べてとても快適とも言えた。

予め用意しておいた食料やら何やら。それに加えて馬車内の備品がある上に馬車自体に衝撃を軽減するための処置がしてあるらしく、クッションや布団の上なら衝撃はあまり気にならなかった。それでもひなたが日本にいた頃に乗っていた車に比べればまだまだ衝撃はあるが。

一般的な馬車よりも遥かに乗り心地のいい馬車に乗って一日が経過した。その間に御者は一旦交代……ではなく新人らしい御者が先日乗っていた御者の代わりに馬車を動かし、その間に初日の御者は就寝と休憩。そして夜中いっぱい新人に動かさせた後に再び初日の御者が馬車を動かし始めた。その間に食事やら煙草やらは補給できたらしく、今でも三人のいる荷台には御者が煙を吐く音が聞こえてくる。

ひなたも昨日からずっと煙草を吸っており、昨日だけで二箱も煙草の箱を空にしていた。一応荷台にはランタンがあるのでそれを使って本などは読めるのだが、あまり沢山新しい本を買ってこなかったのを読み続けてしまうとすぐに読み終わってしまい暇になってしまう。なので時々読んでそれ以外の時間は寝たり食事したり喋ったりと暇を潰していた。

ゲームなどがあれば、積んであったゲームを消化するのにはピッタリな時間だったのだが、無い物に関してグチグチ言っても仕方がない。

「……それで、その時パパが井戸に落ちちゃって」

「えっ……なにそれ聞抜け……」

「……昔は一般人だった」

「あ、私も落ちたことあるよ?」

「よく死ななかつたね……」

「人間って案外頑丈だから」

「……普通死ねる」

今は食事時でも読書の時間でもないため、三人はそんな毒にも薬にもならない他愛もない会話を繰り返していた。

ひなたの表情にはやはり翳りがあるが、それでも二人とも会話が楽しくないという訳ではないため心からの笑顔を浮かべていた。こんな精神的に参ってしまっている時でも見捨てずにこうして一緒に居てくれる人達がいる。それすらも今のひなたにとっては救いだった。

そうして話していると、馬車が少し今までとは違う揺れ方をした。何かあったのかと思ひミラが御者に聞こうとする前に御者の方がひなた達の方へ顔を見せた。

「やばい、魔獣が近づいてやがる！」

その声は、危機感を孕んでいた。

今、魔獣避けのための結界は正常に作動している。少なくともこの世界で移動の際は馬車を使ってきたミラの目にも、この中では魔法を主体とするため魔法や魔力の知識に長けたひなたにも、装置はしっかりと問題なく動いているようにしか見えなかった。

「えっ……？」

「……結界は作動している筈」

ミラが改めて装置を触り、ひなたが結界を発生させるための魔力を使う機関等を外から見てみるが、特に違和感はなく、装置は正常に作動していると言えなかった。

しかし、馬車に魔獣が近づいてきているのは確かなのだろう。御者台の方から馬を見ると、馬は今にも暴れだしそうな雰囲気醸し出していた。ミラは舌打ちをして馬車の中にある己の剣を手を取った。

「……私が仕留める。ひなたも、馬車の外に出てシャーレイを守って」

「わ、わかった……」

杖を片手に剣を抜き、馬車から飛び出すミラ。ひなたもシャーレイの手を握ってそれに続き、起爆銃のシリンダーの中の魔弾を一回全部排出させ、シューターが二発、シールドが四発の守りに特化した構成へと変化させる。

そして御者は馬を落ち着けさせるために御者台に戻った。

「ミラが馬の前に立ち、ひなたとシャーレイは馬車の横で馬車を背にした状態で何時でもシールドを使えるように待機する。」

「そうして完全に臨戦態勢を整えたとき、この馬車に近づいてきていた魔獣が姿を現した。」

「……狼型が十匹。熊型が五。なんでこんなに」

「落ち着け、落ち着きやがれっ!」

「ミラが現れた魔獣たちを視界に入れ、そしてこれ以上周りに魔獣が存在しないことを気配で察知し、目の前の魔獣に集中することにする。」

そして後ろの馬はどうやら魔獣たちを見てしまった事により動揺しているらしく、かなり五月蠅く動き回っている。ひなたとシャーレイが馬に蹴つ飛ばされなかが心配だったが、ちゃんと暴れ始めてた辺りで馬車から少し離れた場所で自分の背中にシールドを張った状態で警戒しているようだったので安心した。

「……すぐに決める」

「駆除連合の一員として、そのトップクラスとして名を馳せた少女にとつて、目の前の敵は足一本が無い程度、ハンデにもならなかった。」

「魔力を剣に宿した状態で片足を前に、杖をその一歩後ろに配置し、一瞬の溜め動作の後に魔獣にも、人にも視認が困難な速度で魔獣の群れの中に突っ込む。そして、剣に纏わせた魔力を氷に変換し長く鋭い氷の刃を生成すると、それを体を一回転させながら振るった。」

「それに魔獣は反応する事が出来ず、一秒にも満たない時間で十五体の魔獣は体を真っ二つにされて消えていった。」

「……終わり」

「この戦い方は少し魔力の消費が激しく疲れるためあまりしたくはなかったが、逃したらひなた達の危険に繋がるし、足を失ってしまうかもしれない。だから、こうして多少の消耗は覚悟で相手を切り飛ばす事を選んだ。」

「剣の先に生み出した氷を消し、馬車の方を見る。これで馬も落ち着いてくれた事だろう、と。」

「だが、馬は未だに暴れており、この場を全力で逃げ出そうと必死に」

なっている様子だった。それを御者は止めようと必死に手綱を動かしているが、馬が暴れだすのも時間の問題だろう。これは一旦馬を気絶させて落ち着きを取り戻させないといけないかもしれない、とミラは荒っぽい事を視野に入れた。

「……え？」

——その時、どうしてかシャーレイの発した小さな言葉が耳に届いた。

馬が五月蠅い中でシャーレイの声は間違いなく離れた場所にいるミラに対しても聞こえており、その声が呆けているような、啞然としているような、絶望したかのような。そんな、良くないニュアンスを含んでいるように聞こえた。

いや、良くないニュアンスを含んでいるようにしか聞こえなかった。

どうしてか。どうしてそんな声を出すのか。脅威は今しがた排除したのに。今こうして切り払ったばかりなのに。

——ほう、我に気が付けるか——

その瞬間、どれだけ自分が愚かだったのかを察した。

脅威は排除した？ 馬鹿を言うな。馬の、動物の感性は、危機感は今らかに人間を超えている。馬が動揺しているのに人間が動揺しない理由なんて、決まっている。馬には分かる、野生の直感とも言える物が死を悟らせた時だろう。

そして、それが目の前にいる時。

——気配は殺していたのだがな。だが、良からう——

後ろを見た。いや、正確には、己の後ろの空を。

そこには、居た。

金色の髪を風に任せ、裏地が赤の黒いコートを羽織った、赤色の瞳の男。

その背中には一対の蝙蝠のような翼があり、その体からはまるで余剰にあるからこそ無駄にしていると云わんばかりの真紅の魔力が溢れ出している。

見た瞬間に分かった。あれは、人間ではどうしても立ち向かう事な

なんて不可能だということ。いや、この世のどんな種族だろうとあれには敵わないということ。あれこそが、世界最強であり、この世に舞い降りた絶望そのものだという事を。世界の生み出した理不尽そのものだという事を。

「……久しいな、我が眷属よ」

その男の名は。

この理不尽と絶望を詰め込んだような存在の名は。

「ブラッド……フォード……」

「そうだ、我こそが真祖にして真祖を超えし者。ブラッドフォードだ」
真祖、ブラッドフォード。

第七十三魔弾

真祖ブラッドフォード。その名は知る人ぞ知る。

本名は分からず、かつてブラッドフォード伯爵と呼ばれていた最強の真祖。その活動頻度は他の真祖よりも早く、そして短い。にも拘わらず名が知れているのは何故だろうか。

簡単だ。強かったからだ。

圧倒的にして無慈悲。理不尽と絶望を織り交ぜ、この世界に生きる者の頂点となるべくして生まれたと言っても過言ではない力も持ったそれは人間がその才能と限界を突破させようとも敵わない。例え真祖が束になろうとも、あの真祖にだけは敵わない。そう言われる程の、圧倒的な強さ。それを持つのがブラッドフォードだ。

一度戦ったひなただから分かる。あれには絶対に勝てないと。力を持たないシャーレイにも分かる。あれには絶対に勝てないと。人間としての限界を超えたミラだからこそ分かる。あれには絶対に勝てないと。

「まさか我の尻尾をほんの少しではあるが掴むとはな」

「あ、あ、ああ……」

恐怖で声が出ない。

かつて仇を取るためと固めた心は仇を前にしても戻ることはなく、むしろ碎かれる。

あれには勝てない。逃げろ、なりふり構わず逃げろと本能が叫ぶ。

この場にいる全員が、逃げないと死ぬと悟っている。しかし、逃げ出すための足が動かない。奴から発せられる尋常じゃない威圧感がそれを封じ込めている。

「あの若造が余計な事をしたせいかな？ まあ、よい。あれを己が力で解決したのは称賛に値する」

「わか、ぞう……？」

「確か、ヴァルコラキと言ったか。奴に殺されるようなら我が引導を渡してやっていたのだがな。だが、それを乗り越え我の尻尾としたことは褒美を与えても良い事だ」

つまり、ひなたがヴァルコラキにみすみす殺されるような事があれば、その前にブラッドフォードがやってきていた。

そんなのひなただけのバッドエンドじゃない。あの街に生きる全ての人間にとつてのバッドエンドだ。

「そして、その娘。まさか我が眷属と運命を共にするとはな。貴様のような活きのいい小娘は暇つぶしのグールの素材に丁度良かったために狙っていたが……我が眷属への称賛はそこにもあるな」

その言葉は、ひなたとシャーレイが初めて出会った時の事を言っているであろう。

だが、その内容はシャーレイへのショックが一番大きかった。

「ねらつて、いた……？　じゃ、じゃあシャロンちゃんは……」

「シャロン……？　……ああ、あの娘か。死んでいなければ最高のグールとなつたであろうな」

「お、まえが、シャロンちゃんを……」

「間違つてはいない。いや、事実だ」

自分が狙われていた、という事実ではなく、シャロンがこの男の手によつてあんな姿に変えられた。

察してはいた。明らかにあの時、ひなたが吐かせたバックの存在。それがブラッドフォードだという事は、なんとなくだが察してはい

た。だが、改めてそれを事実だと肯定され、その仇が目の前にいるという事実がシャーレイの中に怒りと憎しみを募らせる。だが、それをつけるには至らない。至れない。ぶつけた所で自分が気づく前に肉塊に変わることが分かっているから。

「ふむ、心地よいな、その憤怒は」

その怒りと憎しみを受けてもブラッドフォードは何の気にもしていない。

一々、シャーレイ程度の木っ端を気にかけている暇はない、という事なのだろう。

「しかし、あの実験で作りに出した魔獣のバックには気が付けなかったようだな」

「ま、じゆう……？」

ひなたが何とか声を捻り出す。

魔獣。気が付けない。そのキーワードから探り当てたのは、ミラと初めての会合を果たしたとき。あの時、ひなた達の傍にいた一人の少女は体内に水の魔獣がいた。それは解決策を見出す事もできず、目の前で見殺しにしてしまい、最終的にミラが己の足を犠牲にしたあの魔獣。

「あれは我が百年程前に何匹か作って離れた魔獣だったのだがな」

「……なん、だつて？」

「だが、あれは我とて予想はしていなかった。仕方のない事だろう」

つまり、あの魔獣は。あの悪魔のような魔獣は、ブラッドフォードの作り上げた、本来この世界には存在しない魔獣だという事。

だとすると、あの男は、ひなたがかつて暮らしていた村の人たちとシャロンの仇だけではなく。

「……お前が、ルナを……あの親子を！」

罪もない、小さな少女と、その母親を殺した仇。

恨みが、憎しみが、怒りが募り、それが口に出した言葉に乗る。手にした剣が震える。

しかし。

「——だとしたら？」

「っ……」

その剣が振るわれる事はなかった。

ブラッドフォードの圧倒的な威圧感により、心が折れかけ、剣を振るうにまで心が至らない。

「……刃向かわぬか。我が眷属はそれでも刃向かったのだがな。つまらん」

そう呟くブラッドフォード。

その手には、いつの間にか刀身も柄も何もかもが真紅の剣が握られていた。

「ならば、斬ってしまうか」

そうブラッドフォードが呟いた瞬間、ミラの心が死んだ。

刃向かえない。立ち向かえない。抗えない。あれには死ぬしかない。逃げることも耐え忍ぶ事も、何もかもが不可能なのだ。心が察してしまい、生きることすら諦めてしまう。

ブラッドフォードが降りてくる。ああ、あの足が地に付いたら自分は死ぬ。そう確信してしまう。

そして、ブラッドフォードの足が、地に付く。

「——ジエノサイドバスター・マルチレイドオツ!!」

しかし、ミラは死ななかった。

後ろから放たれた銀色の数多の砲撃がブラッドフォードの足元へ着弾したから。

その直後にミラの体が後ろへと引つ張られ、更に腹に衝撃が走って一気に後ろへと吹き飛ばされる。その衝撃が魔弾による一撃であり、人を殺せるような威力は乗っていないかった。だが、それ故に後ろへ吹っ飛ぶだけで済む。

「ミラ、シャーレイを連れて逃げてツ!!」

それを行ったのは、他でもない。この状況で一番絶望を感じ、動けない筈のひなただった。

彼女が歯を食いしばり、ミラに背中を向けている。折れた心を無理矢理補修し自らの足を動かし、蛮勇で己の中のすべてを染めて、大切な人たちを守るために戦う。

「男が、女守れずにどうするってんだよ!!」

ひなたが叫びながら二つの魔弾を生み出し噛み砕く。

しかし、その瞳は翠のまま。つまり、吸血も食人もしていない素の状態のひなただ。そんな彼女がブラッドフォードに勝てる訳がない。

ひなた自身、それは分かっているが、それでも立ち向かわざるを得なかった。ミラを守るために。

「ジエノサイドブラスターツ!!」

今の体には過剰な程の魔力の循環。それを行ったことで体内の魔力がごっそりと削られ、更に無理をしたことで体中から血が噴き出す。

だが、知ったことか。今は二人を逃がすための時間を稼ぐほうが先

決だ。

起爆銃の銃口から銀色の砲撃が放たれる。それが未だに立ち込める粉塵の中へと消えていく。しかし、撃って尚ブラッドフォードの声は聞こえず、しかし殺ったという手ごたえもない。

体中に響く痛みには耐えながら第二射のための魔弾を作ろうとして。

「弱い」

自分の横を何かを通り過ぎていった。

それと同時に後ろの方で何か大きい物が崩れる音がした。振り返ると、ひなたの真横の地面には何か鋭利な物が地面を削りながら通って行ったような跡があり、その先にある馬車が、真つ二つになっていた。馬と、御者ごと。

血が舞い、馬車だった物が倒れる。明らかに全盛期のミラすら超えた斬撃。いや、イヴァンすら超えているだろうそれを見て、ひなたの背中を冷たい物が走った。あれが当たっていたら、間違ひなく死んでいた。ひなたの真後ろのミラとシャーレイごと。

「ふむ、少し手先が狂ったか」

その声は、ひなたの真後ろからした。

ひなたは今振り向いている。つまり、ブラッドフォードが居た場所とは正反対の場所を向いている。

つまり。

「今度は外さぬ」

真後ろには、ブラッドフォードがいる。

「しまっ——」

その瞬間、己の腹に凄まじい衝撃が走り、景色が前へ向かって流れていく。

「ぎゃっ!?!」

「うぐうっ!!!」

そして、その後すぐにシャーレイとミラの声が聞こえ、景色が流れていく速度が一気に失われ、自分の体がそこで止まったとようやく認識する。

だが、それからすぐに体に力が入らない。口から暖かい物が流れて

くる。息がし辛い。腹が熱い。

「ひ、ひなたちゃん!!？」

「ヒナタツ!!」

そこでようやく、今の自分が後ろに居たミラに抱えらえるようにして止められた事を把握し、ブラッドフォードが剣を振りぬいていることを把握し、そして視線を下にやって、ようやく。

ようやく、自分が腹から臓物をまき散らしながら吹き飛んでいた事を把握した。

「げふっ……」

痛みよりも、意識が失われていくような感覚が先に来た。

痛みは、結局来ない。痛みよりも、自分の体から暖かいものが流れ落ちていく感覚と意識が今にも落ちてしまいそうな感覚。そして、もう何回目かも分からないこのままでは自分は死ぬという確信。

腹に大きな傷を受けたのはこれで何度目だったか。と考え始めてしまう位には、今のひなたは死にかけていた。走馬燈も流れ始め、自分の体が指先から冷たくなっていくのを感じる。

ミラとシャーレイが何か叫んでいるが、徐々に聞こえなくなっていく。目も段々と見えなくなっていく。

視界が黒に塗りつぶされていき、自分が今どういう体勢なのかすら分からず、何も聞こえず。これが死なんだな、とゆつくりと自覚していく。

だが、自分の口の中に冷たい何かが流れ込んでくる。

それが喉を通って、斬られた胃に流れ込むと、そこから痛みまでの熱が発せられ、徐々に体の感覚が戻っていく。

そして、体感で十秒もしない内に腹の激痛を認識し、それが徐々に収まっていき、体の内側から流れていったものが戻ってくる感覚がある。

「げふっ、ごはっ!!」

そして、口から何かを吐き出した。それが血なのだとは自覚したのは、己の口に手を当てて、それを目の前に持ってきたからだだった。

視界も戻った。感覚も戻ってきた。なら、聴覚も。

「ヒナタ！ しっかり！ 意識を保って！」

「ひなたちゃん！ 死んじやだよ！」

戻ってきた。二人の声が聞こえる。

どうやら、ぎりぎり死の世界に両足をつつ込むことは回避できたようだ。と、なると口に流れてきたのはミラの持っている秘薬だろうか。あれは確か回復魔法よりも強い効果を発揮したはずだ。

そう考えながら大分楽になった体を起こす。

「ああ、大丈夫。なんとか死なずに済んだ」

二人に自分は何とか無事だと伝え、立ち上がる。

全身から流れた血に加えて腹から流れた血のせいで全身が真っ赤だ。だが、こんなのよくある事。むしろ死にかけて蘇生するまでがノルマだ。後ろのホツとしている二人には悪いがノルマ達成、と心の中で思いながら口の血を拭い、前へ出る。

目の前にはブラッドフォード。あいつの視界をどうにかしないと逃げられない。逃げられなければ、死あるのみ。

「ふむ、加減を間違えたか」

「普通死ぬっての……」

「そうか。まあ、その程度些細な事だ」

些細な訳あるか。こっちは死にかけているんだ。

目の前の仇を睨みながら心の中で反発する。

「今回は褒美を授けに来たのだがな。その娘を斬る事で忘れていた」

「なに……？」

褒美？ 何を言っている。

そういえば、最初のほうに褒美に値するとかそんな事を言っていたような気はするが。

ひなたが怪訝な顔をしていると、ブラッドフォードが剣を何処かに消し去り、ひなたの方へ手のひらを向けた。まさか、魔法で攻撃か？ と自分の考えられる中での手を思い浮かべ、シールドを張るために起爆銃を構える。

しかし、魔法は一向に撃たれない。が。

「ひゃっ!？」

「なに、これ!!？」

声は後ろから聞こえた。

まさか、後ろの方から何か、と振り返る。

自分の真後ろでは、シャーレイとミラが深紅の……いや、血液で出来た檻の中に一人ずつ入れられ、空へと浮かばされていた。シャーレイは完全に思考回路が停止して困惑しており、ミラは己の剣で檻を破壊しようとしているが、弾かれるだけで有効打を打てていない。

その檻はブラッドフォードの方へと向かっていき、いつの間にか宙へ浮いていたブラッドフォードは二人の入った檻を左右に携えた。

「まずは二択だ。この二人を生贄とすれば貴様の命だけは保証しよう」

「な、に……?？」

二人を見殺しにすれば、ひなたは助かる。ブラッドフォードはそう言っている。

そして、もう一つ。

「もう一つは、我が城へこの二人を迎えに来い。そこで新たに二択の選択肢を与えよう」

「ふ、ふざけるな!! 今すぐ二人を——」

「反抗するなら、この場でこの二人を殺すが?」

「ぐっ……」

そんなの、実質死にに来いと言っているようなものだ。

奴の城になんていったら、命が幾つあっても足りない。なのに、それを唯一の選択肢にするとすることは、ひなたが道中や城の中で惨殺される所を酒の肴にでもするつもりなのだろう。

「ひなたちゃん、私たちの事はいいから!」

「ヒナタは生きて!!」

「と、言っているが……果たしてどうする?」

「そんなの……」

二人は、もう自分は助からないと踏んでいるのだろう。だから、唯一生きるための選択肢があるひなたを生かそうとしている。だが、ひ

あなたにとって二人は居なくてはならない存在だ。二人が消えればひなたにとつては生きながら死ぬと言つても過言ではない。

二人が居ない世界で生きていくなんて、地獄だ。それなら、まだ三人一緒に死んだほうがマシだ。だけど、二人は生きろと言っている。言っているが、自分の意志はどうしても変わらない。

「貴様には我が城が見えるようにしておこう。期限は一週間だ」

その言葉と同時に、馬車が進む道の先の方に何かが見えた。

城だ。今まで見えていなかったが、大きな城が見える。歩いて一時間もいない内にたどり着けるような場所に城が出現した。あれがブラッドフォードの城だと言うのなら、本当にブラッドフォードはあの街のすぐ傍にいた事になる。

一週間という期限は、ひなたが一人で生きると決めた後の心変わりを想定してだろうか。それとも反抗するための武器を集める期間を想定してだろうか。

「一週間はこの娘達の命は保証してやろう。しかし、城には貴様一人で来い。さもなければこの二人も貴様も殺す」

これでイヴァンに頼るといふ選択肢は完全に潰えた。

ひなたには、生きながら死ぬか、死ぬかの二択しか与えられなかった。どちらも、死だ。

「では、返事は行動で示すがいい」

「ひなたちゃんだけは逃げて!!」

「私たちの分も、生きて!!」

そう告げると、ブラッドフォードは消えた。空に溶けるようにして、消えていった。

同時にシャレーイとミラの入った檻も消え、ひなたは一人となる。

風が流れる音だけが響き、二人のいない完全な孤独感を味わう。その中で。

「……そんな選択肢、一つしかないじゃん」

その中でたった一人。ひなたは呟いた。

選択肢？ そんな物に迷っている暇はない。ひなたは崩れた馬車から今の自分に必要な最低限の物を拾い集めポーチに入れ、御者の人

に手を合わせて一言謝ってからジエノサイドバスターで腕を焼き切り、食う。

味は、良くも無く悪くも無く。シャロンの時のような美味しさはなく、ヴァルコラキの時のような不味さもなく。可も無く不可もなく。しかし、人の肉は己に力をくれる。手の肉を食い切り、食えない部分を吐き捨て骨を埋め、目の前の城を紅に染まった眼で睨み付ける。

「ああ、死に行つてやるよブラッドフォードツ!!」

ひなたは今から、死に行く。

第七十四魔弾

たった一人で歩く道。心細さと寂しさと後悔で押しつぶされそうになり、自然と息が切れ胸の鼓動は右手で抑えていても早くなっただけ。

緊張？ いや違う。自ら死に行くという事が分かっているから心が押しつぶされそうで、また折れてしまいそうで。だけど、迎えに行かなくては。二人と一緒に居たいから、これから先一人で生きていくことなんて出来やしないから、死に行く。しかし、死を恐怖しい人間なんて居ないから、どうしても心の中が押しつぶされそうになっってしまう。

怖い、怖い。だけど、行かないと。そんな思いが無理矢理ひなたの足を動かす。

今にでも見えない何かに押しつぶされそうになりながらもひなたは歩く。歩き続ける。走るための体力はとづくに使い果たし徐々に体力を回復させてはいるが、呼吸は一向に元に戻らない。自分が使える中で一番効果が高い肉体強化の魔弾を撃ち込んだが、それでも体力も速さも足りなかった。血に濡れた衣服は重く、それも体力と速さを奪っていく原因となり体力は際限なく削られていく。

肉体的にも限界は近いが、それでも大分近くなってきた城を目の前に、それを目印にして歩き続ける。

だが、そうしてたった一人で魔獣避けの結界もない外を歩いているのに、血の臭いが嫌になるほど広がっている筈なのに魔獣は出てこない。

何時魔獣が草木の陰から飛び出して襲い掛かってきても可笑しくはない状態なのにその時が分以上歩いてもやってこない。

が、やってこないならそれでいい。その時間分シャーレイとミラに近づくことが出来る。前へ進むことが出来る。今は一歩でも、一秒でも早く前へ進めるのならそれでいい。

「はあ……はあ……くそ、絶妙に遠い場所に……」

ブラッドフォードの城は何とも絶妙に嫌な距離にある。

見えている分近く感じていたが、それは完全な勘違いでかなり離れた場所からもしつかりと見えるほど大きいだけだった。やっぱ人生なんてクソゲーだと恨みつらみを口にしながらただひたすらに歩く。そして何分か歩いて。ようやく城が目の前に見えた。

ようやくだ。疲労困憊で、べたついた服は乾き始めて動きづらく、しかも基本的に白や銀だった服が赤黒く染まってしまっている。やはり血塗れの状態はどうしても慣れない。慣れてしまうのはダメなのだ。頭の中で理解はしているが。

そうして重い体を引きずりながら歩いて。目の前には城門が見えた。

「城門……如何にも貴族的な人間が大好きそうな城だことで」

そういうえば曲がりなりにも伯爵だっけか。と呟きながら城門の鉄格子を蹴っ飛ばして開く。

が、蹴っ飛ばしても開かず、金属の堅い音が響くだけで城門はビクともしなかった。城門を蹴った足が痺れて痛み、蹲って鉄格子を蹴った右足を抑える。

蹲りながら城門の鉄格子を見るがちやんと開く、ハズ。開かないところを蹴っ飛ばしていたらかなり恥ずかしい。

ちよつと顔を赤くしながら蹲っていると、城門から金属が擦れるような音が聞こえてきた。

その音に気が付いて城門の方へ視線を戻すと、城門は第三者の手で開けられていた。

「えっ……っ？」

第三者……熊型の魔獣の手で。

「くそっ、やっぱ魔獣の巣かよッ!!」

ひなたは傷んで痺れる足で地面を蹴って城門から距離を取り、起爆銃の銃口を向ける。

出方を見るか？ それともこちらから先制を仕掛けるか？ 思考回路を完全に戦闘用に切り替えて集中する。

ここまで無事に来たのに死ぬわけにはいかない。せめてシャーレイとミラを最後に一目見るまでは野垂れ死ぬわけにはいかない。

だが、そうして構えているが、目の前ではひなたの中の常識では考えられない光景が起こっていた。

熊型の魔獣がひなたに背を向け、城の中へと戻っていったのだ。その光景にひなたは目を白黒させる。まさか魔獣が目の前の人間を放置するなんて考えられないからの軽い思考放棄だったが、完全に魔獣が見えなくなってからひなたは急いで城門をくぐった。

「今の何だったんだろう……」

ひなたは城に入り、城内の庭的な物にある道歩く。

何故こうも新設に道歩くのかと言われれば、何となくだがそうしなければいけない気がしたからだ。もしかしたらひなたのブラッドフォードの眷属としての本能のような物がそれを選択させているのかもしれない。

素直に道歩き、何事もないまま城の入り口に辿り着く。

今度は足を痛めないように右手に起爆銃を握ったままドアノブを掴み、引く。が、ビクともしない。押してみる。少し体重を乗せればドアはヤケに簡単に開いた。

——そしてドアを開いて見えた光景にひなたは再び絶句した。

「ま、魔獣が……」

魔獣が、壁を作っている。

城に入ってすぐ。まるで魔獣がひなたが城の中を迷わないようにと言わんばかりに自らの肉体で壁を作っており、ひなたに対しては敵意を晒してこない。本当に、ただひなたを目的の場所へ導くためだけにそこに在るかのようにだった。

そんな異常な光景にひなたは絶句しながらも、害が無いのなら構わないと自分に言い聞かせて魔獣が作った道の真ん中を歩いていく。右手の起爆銃は何時でも使えるようにちゃんと構えながら歩く。

だが、魔獣は襲ってこない。

そんな不気味さに肝を冷やし背筋に冷たいものを感じながら道を歩く。時々ひなたの実力じゃ歯が立たないレベルの魔獣が見えるのが本当に怖い。襲われたら死ぬる。

だが、襲われたら死ぬるが襲われなかったら無傷。最終的にひなた

は明らかに大きな扉のある場所へと案内された。

中が一体どうなっているのか分からないが、少なくとも血の臭いはしない。シャーレイとミラの血の臭いも。彼女達の血は吸ったことがあるので流れ出ているのなら分かるが、それが分からないということとは彼女達は宣言通り手を出されていないのだろう。

それに安堵しながらもひなたはそつと道中に見たドアよりも一回り二回り大きなドアに手をかける。

きつと、これを開ければもう戻れない。死ぬしかない。それを改めて自覚しなおし、これは自殺にも似た物なのだど理解しながら、覚悟を決める。

息をのみ、冷や汗を掻きながら、ひなたはそのドアにゆっくりと力を込め、押した。

扉を、開ける。

そして目の前にあった光景は、やはり予想通りと言うべきか部屋の中はアニメや漫画でよく出てきそうな謁見の間の間ようになっており、前方に広がるレッドカーペットの奥には玉座に座ったブラッドフォードの姿があり、その両隣にはシャーレイとミラが別々の赤い……いや、血で出来た檻の中で力なく倒れていた。

「シャーレイ、ミラッ!!」

「やってきて早々女の心配か。まあよい」

誰がお前なんか笑顔で挨拶なんてしてやるかよ、と心の中で中指を立てながら前へと歩く。少なくとも檻の中にいる二人は死んではない。眠らされているだけなのだろう。本当に手を出されていなかったのを自分の目で確認し、ほつと胸を撫で下ろしながらも起爆銃の銃口をブラッドフォードに向ける。

「二人を解放しろ」

「あまり急かすな。手元が狂うぞ?」

「っ……」

加減が狂う、というのは確実にシャーレイとミラを殺す、という事なのだろう。それが分からない程ひなたは今の状況が見えていない訳ではない。

歯を食いしばって今にでも出てしまいそうな手を抑え、ブラッドフォードの動きを見るしか出来ない。無力な自分に歯がゆい思いをしながらもシャーレイとミラがブラッドフォードの言葉通りに解放されるのを待つ。

ブラッドフォードはシャーレイとミラが眠る檻をどうやっているのかは分からないがひなたの前まで動かすと、指を鳴らして檻を消した。二人はそのまま重力に則って落下するのではなく、ゆっくりと地面に落ちた。ひなたはすぐに戻ってきた二人の安否を己の手で確認するが、ブラッドフォードに何かされた痕跡も一切なく、ダメージらしいダメージも負ってはいなかった。二人に手を出さなかったことが不思議で不気味だった。

どうして餌でもある人間を捕らえて何もしないのか。魔獣をけしかけないのか。

ブラッドフォードにとって自分達は取るに足らない存在だからだろうか。いや、それとも希望を与えておいて一気に絶望に叩き落すつもりなのかとブラッドフォードを睨み付けるがブラッドフォードはひなたを玉座から見下すだけ。

「ん、う……」

「ふぁ……？」

そうしてブラッドフォードを無言で睨んでいるとシャーレイとミラが目を覚ました。

二人は目を紅にしたひなたを起き抜けに見て、ひなたの視線の先に居る者を見て、寝ぼけて少し纏まっていたいなかった思考が一瞬にして纏まった。

「ひなたちゃん!？」

「え、あ、おはよう」

「…………おはようじゃなくて」

「どうして来ちゃったの!？」

二人は、自分達は何をどうしても死ぬと思っていた。いや、理解していた。だから、せめて一人生き残る事が出来るひなたには自分達を見捨てても生きてほしかった。

だと言うのに彼女がまた自分達の前に姿を現している。それが何を示しているのかはひなた自身から聞かなくても、ブラッドフォードから事情を問い詰めなくてもすぐに分かった。彼女がブラッドフォードの出した提案の内、ひなた自身も死ぬかもしれない選択肢を取ったと言う事が。

「……せめて、生き残れるなら生きてほしかった」

これでは完全に無駄死にだ。ミラの毒薬も結局意味を成さなかった。いや、使う暇すら無かった。もしかしたらこれから死ぬよりも酷い目に合うのかもしれないが、それでもひなたが生きているという事実だけでそれにも耐えられると思っていた。

なのに、彼女がここに来てしまったらその決心を固めた意味も。

「生きれたとしても、さ」

ひなたが視線をしつかりとブラッドフォードからシャーレイとミラに戻した。

その目には少しだけ涙が溜まっており、紅の瞳は涙で潤んでいた。

「やっぱ、二人が居ないと生きている意味も無いし、耐えられないよ」完全に二人に依存してしまった心は自分の命を犠牲にしても二人と一緒に居る。その選択肢を取る事を強要した。いや、きっと依存していなかったとしてもひなたはこの選択肢を取っていただろう。

それ位に、今のひなたにとってシャーレイとミラの存在は大きく、そして離れられない物へと変わっていた。

「ふむ。そろそろ本題に入りたいのだが？ 我が眷属よ」

「……ああそうかい」

だが、これ以上言葉を交わす前にブラッドフォードが口を挟んだ。その声には何処か呆れのような物が含まれていたが、そんな物を気にしている程ひなたには余裕は無かった。

シャーレイとミラの前に立ち、二人を背中に回す。何かあれば、一秒でも長く彼女達を守れるようにするために。大切な物をこれ以上

目の前で壊されないように。

「貴様はこの世界で生きるといふ選択を取らなかった。ならば、ここで新たに選択肢を与えよう」

「……苦しんで死ぬか、今ここで死ぬか？」

「それでは在り来たり過ぎてつまらん。が、一つはそれに近いな」

ブラッドフォードはその場で指を鳴らした。

その音を聞き、ひなたは何かしたのかと周りを警戒したが、音を聞いて数秒経ってから自分の体の中に違和感を感じた。

その違和感は徐々に大きくなり、自らの中から何かが消えていく。そうとしか言いようがない感覚が己の胸の内から自分を襲ってくる。が、その違和感が徐々に小さくなっていくと同時にある事に気が付いた。

自分の中にある大きな枷が消えた。その枷は見える物ではなく、そしてブラッドフォードと最初に戦った時に付けられた物。つまりは食人をしなければならぬという枷が消えた。

「一つは、我とここで戦う事だ」

「……だからってボクの枷を外したのか」

「途中で弱くなられてもつまらんからな。だが、もう一つの選択を取ればまた枷は付けさせてもらう」

もう一つ？

確か、ブラッドフォードは死ぬ事を一つの選択肢と言ったが、そういえばもう一つの選択肢をさっきから口にしていない。

死ぬ事ではないのなら何だろうか。妾にでもなれと言うのか、それとも真祖となって仲間になれとでも言うのか。だが、どっちの道もお断りだ。後者は待遇によっては考えなくもないが、仲間にはなりたくない。

一体どんな選択を突きつけてくるのか。嫌な汗を掻きながらひなたは無言でブラッドフォードの言葉を待つ。

「もう一つの選択肢は——」

——その娘達と元の世界へ帰る事だ——

第七十五魔弾

——その娘達と元の世界へ帰る事だ——

——言っている意味が分からなかった。

元の世界？ 帰る？ 最初は何を言っているのか理解できていなかったが、すぐにその言葉から思い出した。

地球。ひなたが元居た世界であり、帰るとい言葉が当てはまる世界はそこしかない。

地球に帰れる？ 二人と一緒に？ 二人とあの平和ボケを起こしそうな世界へ帰る？

出来るのか、そんな事が。そんな選択肢があるのか、この期に及んで。

右手でまだ握っていた起爆銃が床に落ちる。後ろのシャーレイとミラにはその言葉の意味が分かっていないようだが、ひなたにとつては衝撃的とも言える選択だ。

「そ、そんな事出来るわけ……」

「出来る」

「どうしてッ!!」

思わず声が荒くなる。

出来る筈がない。そんな、世界を渡るような魔法、ある訳が無い。

「……空間転移の応用だ。世界の壁程度、越えられない訳がないだろう」

「それはっ……」

ひなたの中で空間転移なんて名の付けられた魔法は異世界まで転移出来る様な代物では無かった筈、だ。

色んな小説を見て、ゲームをやって、アニメを見て。その時に出てきた平行世界への移動を可能としたのは世界を渡るために必要な専用の魔法だった。中には空間魔法で済ませている物もあったが、そういうものは大抵特殊な条件があったり大昔に潰えていた。

それをたかが真祖のブラッドフォードが出来る訳が。

「貴様の中の常識は知らぬ。平行世界への干渉は出来る。いや、出来た」

「こ、根拠は……」

「我がブラッドフォードだからだ」

そう言われて思い出す。

ブラッドフォードは真祖を超えた真祖だ。ならば、出来るのではないかと、思ってしまう。が、まだ足りない。信じるにはまだ要素が足りない。

「じゃ、じゃあボクの元居た世界の星の名前は！出来るのならその程度言える筈っ!!」

言えないだろう。そんなピンポイントで自分の居た世界の情報を。

ひなたはそんな都合のいい話を信じたくない。後で絶望何て見たくない。そんな一心でブラッドフォードの言葉を否定するために言葉を荒げ――

「地球。確か、太陽系第三惑星だったか？ ついでに言えば貴様はダイガクセイとやらをやり、二ホンとやらのトウキョウという街に住んでいたのだったか？ 魔法も無くカガクのみで成長したとは何とも奇妙な世界よな」

合っていた。

ひなたはここに来る前は日本の東京で平凡な大学生をしていた。

知られている。完全に。

「ひ、ひなたちゃん？」

「……一体何を話して？」

「い、いや、その、それは……」

そうして動揺している中でシャーレイとミラに声をかけられる。

二人にはまだ話していない。話すつもりも必要も無かったこと。かつての暁陽太を知らず、今の暁ひなただけを知っている彼女達に、あの世界の事は話さなくてもいいと思っていた。

だが、この選択肢は二人にそれを告げる事となり、二人はもう二度と生まれた世界の地に足をつける事が出来なくなる。かつて自分が味わった気持ちを二人に押し付けてしまう事になる。

そう考えると言葉は濁り、どもり、口から出ず。

「なに、我が眷属はこの世界の出身ではない。魔法の無い世界で生き、この世界へと来た迷い人というだけだ」

「え……？　じゃあ、ひなたちゃんは……」

「……異世界の人？」

「え、あ、そう、だけど……」

「ああ、だから名前とか変わってるんだ……」

「……アカツキなんて姓もヒナタって名前も聞いた事なかった」

二人の反応を見てホツとする。知られるのが異世界人という事だけではよかった。

ここで実は異世界に居た頃は男でしたとか言ったら確実に軽蔑されそうだが、そこまでは言われなくてよかった。ブラッドフォードが何だかニヤニヤしているので絶対に気づいていやがる。もう今この場でぶっ殺してやりたい気分が収まらないが実力差的にも種族的にも殺せないためグツと堪える。

奴はやはり人間の価値観から見たら唾を吐きたくなるくらいには性格が捻じれて歪んでいる。頼むから誰かアイツを殺してください。『して、どうする？』

ニヤニヤと笑いながらブラッドフォードが再度問う。今は恐らく機嫌がいいのだろうから何度か聞くが、もう少し時間が経てば不機嫌になってこちらを一瞬で殺しに来るかもしれない。

かと言ってシャーレイとミラを地球にご招待……というのもあまり気が乗らない。地球はこの世界と比べて戸籍やら学校やら仕事やら何やらで面倒この上ないし、何よりもう二度とこの世界には帰れない。もう二度と、自分の産まれた世界に帰れない。

それを思い知らされた時の絶望感や虚無感はひなたが一番知っている。知っているからこそ、二人にはその時と同じ気持ちを味わってほしくない。

「……そ、れは」

言葉が詰まる。

地球に帰る事にイエスと答えれば生き残れる。しかし、ノーと言え

ば確実に死ぬ事となる。だが、後ろの二人の事を思えばイエスと首肯は出来ない。けれどもノーとも言えない。

「……私は、ひなたちゃんに付いて行くよ」

「シャーレイ……」

答えようとしなない。いや、答えられないひなたに向かってシャーレイが声をかけた。

判断は、ひなたに全て任せる。彼女はそう言った。その眼には後悔なんてない。そんな思いが籠っていた。

「……私も。それに、ヒナタの産まれた世界には興味がある」

「ミラ……けど、そうすると……」

「……もうパパには会えない」

ミラもひなたに付いて行くと言った。しかし、それはもうミラはイヴァンには会えないということ。

肉親との永遠の別れ。生きているのに会えないという悲しみもひなたは分かっている。きつと、地球に戻ったとしてもひなたは自身の両親に会う事は出来ないだろう。だからこそ、ミラには自分と同じ気持ちには味わってほしくなかった。

シャーレイはもう自身の肉親は唾吐いて中指立てる程度の存在に成り下がっているのかもしれないが、ミラとイヴァンはそんな関係ではなく、仲の良い親子だ。そんな二人を引き離すのは流星に自身のエゴでは決められなかった。

「……ここで死ぬよりはマシ。生きていけば、また会えるかもしれないから」

だが、ミラは笑ってそう言った。

生きていけば、また会えるかもしれない。もしかしたら地球の方で異世界に行くための術を見つけた事ができ、偶然にも再びこの世界に来れるかもしれない。ミラがイヴァンとの永遠になるかもしれない別れを受け入れられたのはこの考えがあったからだろう。

彼女は自分よりも何倍も強い。力も、内面も。

「……だから、ヒナタ。一緒に生きよう」

「死ぬよりは絶対にマシだよ」

「……うん、そうだね」

そうだ、この選択肢は死ぬよりも遙かにマシだ。

それに二人とも腹を括ってくれた。なら、ここで自ら死に行く選択肢なんて、ない。

「決まったか？」

「……決まったよ」

そうだ。だから、この二択は。生きるか死ぬかの二択は。

「——ボクは、二人と一緒に元の世界へ帰る」

例えこの世界に永遠に足をつけられなかったとしても、生き残る。

仇を見逃し、更には仇の温情を得る。これに屈辱感を与えられないと言ったら嘘だが、今は二人と一緒に生きる事がひなたの中の一歩だった。

ブラッドフォードはその言葉を聞きニヤリと笑うと指を鳴らした。その音に共鳴してひなた達の立つ床に深紅の魔法陣が浮かび上がった。それと同時に自分の中に枷のような物がかけられる感覚がした。きつと、再び食人の制約がかけられたのだろう。

「ならば貴様らを異世界へと飛ばそう。あの世界は少々規則が厄介らしいからな。厄介な面はこちらの方で調整しておいてやろう」

「……なんでそこまで」

「眷属の旅立ちに対しての主からの贈り物だ」

ひなたが少しブラッドフォードを訝し気な視線で見ると、その間にも深紅の魔法陣の光は強くなっていく。

その光に少し目を細めると、シャーレイがそつとひなたの右側から彼女に抱き着いた。そしてミラもそつとひなたの左側から彼女に抱き着いた。

二人の暖かさを感じてひなたはそつと目を閉じた。徐々に体が軽くなつていくような感覚がしてくる。

二人には何時も迷惑をかけてばかりだ。今回も、特大の迷惑をかけてしまった。

けど、きつとそれを帳消しに出来るくらいに向こうの世界での生活は楽しいのだろう。命の危機に怯えることは無く娯楽は多く、金の稼

ぎは少し苦難すると思うが、それでもこのファンタジーとは名ばかりの弱肉強食の腐った世界とはおさらばできる。

ああ、でも平和ボケしそうなくらいに平和な世界での生活は、きっと、今まで以上に――

ひなたの意識は、ニヤけるブラッドフォードの前で、完全に無くなった。

最終魔弾

エンジンの音がする。

久しぶりの異音。自然界から鳴るはずのないその音は徐々に沈んでいた意識を現実へと浮上させていく。

エンジンの音が響きタイヤがアスファルトを転がる音がして、その音が大きくなったと思っただけに小さくなっていく。一年半前までは日常と化していた音だったが、最近では聞くことが無かったその音に少し苛立ちを感じながらも目を開けると、ようやく自分の状態がどうなっているのかが分かった。

「えっ？ ……あ、ああ」

俯きで寝かせられていた。場所は、どこだろうか。寂れた四角の部屋の中だと言う事は分かったが、あの世界にこんなコンクリートで出来た部屋は存在しない。

少し視線を動かすと、そこには同じように寝かせられているシャーレイとミラの二人の姿があった。二人とも目立った傷は無く、ミラの杖も同様に転がっていた。その杖の側には茶色の封筒が置いてあった。

少し寝惚けた頭で何があったのかを思い出し、ようやく今の状況と記憶が合致する。

ブラッドフォードの手によってひなたを含めた三人は異世界……ひなたが元居た世界へと帰還を果たした。それを実感しながら頭を振り、封筒を手取る。

「……開けない」

右手だけでそれを開けようとしたが中々開かず、苛立って口も使って少し下品に封筒の封を破る。

そして中を見てみると、中には色々な書類が入っていた。ひなたの女としての戸籍謄本、更には本来この世界には無いはずのシャーレイとミラの戸籍謄本であった。他にはひなたの両親らしい聞いた覚えのない男女の名前が書かれた戸籍謄本とひなた、シャーレイ、ミラのパスポートに加えてシャーレイとミラのビザ。

その他にも何やら大量の金が入っていると記入されていた通帳やら住所が書かれた紙やら鍵やらが入っていた。ちなみに住所は東京でひなたが陽太だった頃の実家がそこそこ近い場所だった。が、今の場所が分からないしこの住所の場所は一回も行ったことがないため分からなかった。

「うっわ、至れり尽くせり……」

ひなたの名前はしつかりと『暁ひなた』と書かれていたし通帳の名義もひなたの物だった。中には目が飛び出そうになるほどのお金が入っており、思わず吹いた。ざつと億に到達する位は入っていた。どうやらまだ日本円の金銭感覚は崩壊していないようで何よりだったが、とりあえず通帳はそつと封筒に戻した。

ふと自分の服装を見てみたが、あつちの世界で最後に着ていた服をそのまま着ていた。血は付着していなかったが、起爆銃はそのまま足のホルスターに仕舞われていた。そして魔力もちゃんと感じ取れたため体に変化は無かった。

「……さて、じゃあ二人を起こすかな」

現状何が手元にあるかもわかった所でひなたはまだ気絶しているシャーレイとミラの二人を起こす事にした。

「なんかどっこも電気が付いてる……」

「……クルマって便利そう」

シャーレイとミラの二人は起きてすぐにひなたに頭がパンクしない程度の情報を伝えられ、困惑しながらも一応受け入れた。シャーレイは夜なのに光り続ける街に興味を持ち、ミラは外から聞こえる車やバイクのエンジンの音に興味を示しひなたからの説明を受けた。

が、それでも全てが分かったと言う訳ではなく、後でまた色々説明を試みたりしなければいけないかもしれない。いや、しないといけないだろう。

そして、戻ってきて改めてひなたが驚いたことが一つ。

「それにしても、ボク達が若返っているとは……」

「……シャーレイと同一年」

そう、学生証やら戸籍謄本を見てみた結果、ひなたとミラは若返っていた。そのためかミラの身長はシャーレイと変わらない程度になっており、ひなたはただでさえ無い身長が更に数センチ削れていた。泣ける。

ひなたは約六年ほど、ミラは五年ほど。つまりはシャーレイと同一年となっており、学生証はシャーレイと同じ物だった。その学生証はシャーレイと同じ中学校の物であり、つまりひなた達は同級生。中学生から日本での生活をスタートする事となる。シャーレイとミラはあつちの世界にある事にはあった学校に行けず、学校に行ける事に喜びを感じているようだが、ひなたからしたらまた中学生からか……と落ち込まざるをえなかった。

一年半も勉強していなかったのだからきつと中学生の頃の範囲何て忘れている。ついでにコンビニに煙草を買いに行けない。酒も飲めない。あつちの世界で知った数少ない娯楽を全て封じられてまた学生。本当に人生クソゲーだ。今頃自分達をここに送り込んだ仇の真祖はニヤニヤ笑っているに違いない。滅べ。

「あーつと……あつたあつた」

そうしてひなたは少し落胆しながら久々のアスファルトを歩き、そしてようやく三人で歩きながら探していた場所を発見する。それは日本で二十四時間営業している中々にブラックだと聞く職場、コンビニだった。

なんでコンビニを探していたかと言えば、コンビニのATMやコピー機、他には新聞等を使えば日付けや時間が分かるかもしれないからだ。ついでに交番の場所を教えてもらって警察に家の住所までの道案内も頼もうかと思っている。あとは通帳のと一緒に会ったキャッシュカードである程度の金を下して食事を買っておきたいというのもあった。

「じゃあ、二人は待ってて」

「え？ 一人で大丈夫？」

「危険なんてないから大丈夫だよ。何かあってもここなら魔弾使いで
も何とかなる程度だし」

例え強盗が来たとしても今のひなたなら楽勝だ。

魔弾を使う、というのもあるが、ひなたの身体能力や運動能力はス
ポーツ程度なら過不足なく行えてしまう程度には高い。それ位は無
いとあの世界ではこんな華奢な体で戦っていけないのだ。そういつ
た地の才能が一定以上ある人間が駆除連合で狩りを行う権利を得る
事ができ、それ以外の連中はドロップアウト。あそこはそんな世界
だ。

だから、例え成人男性が拳銃持って襲い掛かってきてもひなたは一
人で対処できる。もし撃たれても痛みを食いしばって耐える事だっ
てできる。即死は勘弁だが。

ローブをしっかりと羽織ってもう無い左手を見られないようにし
てからひなたはコンビニに入ってしまった。

お決まりのいらっしやいませ、という言葉の後に結構視線を感じ
る。単純に銀髪碧眼というのが珍しいのだとは思うが、恐らくそれ以
上にひなたが外見だけは可愛いから見てしまっているのだろう。中
身は残念だが。

「えっと、時間は……」

外は今真つ暗。そんな中で時計を見れば、時刻は夜の九時。それ故
にかまだ人がちらほら居る。何人かはひなたを見ると二度見したり
している。どうだ可愛いだろ。

ここで一発ゴムでも買って行ってやろうかとイタズラ心が芽生え
たがそれは止めてATMが二十四時間やっているのを確認してから
キャッシュカードを入れ、暗記しておいた暗証番号を入力しざつと五
千円ほど金を引き出す。それをポーチに入れ、それから新聞を確認す
る。新聞の日にちと今の時間を照らしあわせて新聞の日にちよりも
一日先だと頭で理解し、学校へ行く日が後二十四時間と数時間後だと
いう事を頭の中に叩き込み、コンビニの籠を持って適当に店内をぶら
ついて漫画を一冊と食料を一旦籠を地面に落としてから入れてを繰
り返し、お会計へ。

「えっと、合計で……」

合計金額を聞き、ポーチから札を取り出すのが、五千円を一気に取り出してしまふ。仕方ない、と口で必要枚数を啜えて残りをポーチに仕舞い、レジに出す。

「ごめんね。左手が不自由なもんで」

明らかに外国人な外見をしたひなたが流暢に日本語を話したからか、それとも左手を隠しているのが手が不自由だったと判明したのが衝撃的だったのかは分からないが、店員は大丈夫ですと一言言って札をレジに仕舞いお釣りをひなたに差し出す。

それを右手で受け取り、ポーチに仕舞っている間に店員は品物を袋に二つ分けて入れてくれた。そこそこ多かったので仕方ないっちやあ仕方ないが。

「あの、大丈夫ですか？」

「連れが外にいるんで。あ、あとこちら辺に交番つてあるかな？」

「交番でしたら……」

交番の場所を教えてもらい、札を言ってから軽く袋を二つ持つとそのままコンビニを後にした。

そしてコンビニの外で手持無沙汰に待っているシャーレイとミラに袋を持った手を上げて自分の存在を知らせてから小走りで二人に駆け寄った。

「あ、帰ってきた」

「いやー、遅くなってごめん。取り敢えず、食べ物とか買って来たからお腹空いてるなら食べて」

そう言つてシャーレイに袋を持ってもらつて中を漁り、取り出した食べ物がある程度ミラに渡してからシャーレイにも渡し、そこでひなたが袋を再び自分で持つ。自分で持っている袋の中に手をつ突っ込んで中の物を取り出せないのは中々に辛い事だったが、慣れるしかない。

隻腕での生活も一応慣れていたが、それはあつちでの生活での事。日本での生活で隻腕の生活なんて初めてなので一年半前まで出来た事が簡単に出来ないのは少しもどかしくもあった。

「じゃあ、交番……えっと、あつちで言う衛兵の人がいる場所へ行こうか。道を聞いて教えてもらわないと」

「……それ、衛兵の仕事？」

「まあ、色々と変わってるんだよ、こっちの世界は」

衛兵は主に戦う事が仕事だった。が、警察は違う。そこら辺の感覚の違いも矯正していかなければならない。今思えばあの二人もそうやって常識がすれ違っている自分を何とかしてくれたのかもしれない。

時々大学生らしき人や帰りのサラリーマンらしき人達とすれ違いながら交番へとようやくたどり着く。その間にシャーレイとミラは初見殺しなコンビニ製品の開け方に四苦八苦し、ひなたを笑わせてくれた。ついでに海苔を知らなかったりライスボールことおにぎりを知らなかったりしてひなたの腹が大激痛。シャーレイとミラに引つ叩かれた。

鋼板を前にひなたが二人にコンビニの袋を任せて警察に声をかける。

「すみません、ちょっといいですか？」

「ん？ 何かな、お嬢ちゃん」

案外警察の人は物腰が柔らかく、丁寧な人だった。

「えっと、この住所の場所に行きたいんですけど」

そうやって取り出したのはコンビニで買っておいたコピー用紙にこれもコンビニで買っておいたボールペンで書いたひなた達の家らしき場所の住所が書かれた紙だった。

警察官はそれを見てからああ、この場所ならと言い、交番の中にあつた地図帳のような物を取り出し、ひなたの前で広げて見せた。

「えっと、この交番がここで、この道があれだから、この道をだね……」

どうやらここからそう遠くは無いらしく、数十秒の説明を要したが大体の道は把握した。シャーレイとミラの方を振り返っても、二人とも一応道は暗記したらしく頷いていた。

「はい、分かりました。ありがとうございます」

「気を付けて行くんだよ。それと、あまり暗い時に歩き回らないよう

に」

「以後気を付けます」

警官の言葉に少し適当な言葉を返してからシャーレイとミラに合流、住所の場所へと向かう。

「……こつちの衛兵は青い服なんだ」

「だから衛兵じゃないんだけどね……まあ、こつちの世界はあつちの世界程物騒じやないからあまり気を張らないでいいよ」

「っていうか、こつちの世界の言葉、あつちと同じなんだ……」

「……そういえば」

とかなんとかシャーレイとミラが言っているが、それはひなたが一年半前に経験した事だ。まさか言葉が通じるとは思っていなかった。ので意思疎通は何とかなり、しかし筆記の方が完全に別の文字と化していたため覚えるのに苦労した。

が、言語が同じなら文字もそれに照らしあわせて覚える事が出来たので何とかなった。ちなみに、二人はサラツと日本語を読んでいたため納得いかない。あの真祖、絶対に今あつちの世界でゲラゲラ笑っているに違いない。モゲろ。モゲて女になってしまえ。自分と同じ目に合え。あと力の九割九分失ってしまえ。

そんな呪詛を異世界へと飛ばしながら歩く事数分。電気が付いている一軒家が並ぶ中で明かりがいない一軒家を発見した。表札は『暁』。間違いない、ここがこれからのひなた達の家だった。家、なのだが……

「なんか外見がボク達の家とそっくりなんじゃが」

「……っていかそのままそっくり」

「可笑しいなあ、何で異世界に来たのに我が家に帰ってきた気分になれるんだろう……」

明らかに外見があつちの世界でひなたが買った家にそっくりだったのだ。というか無駄に広がった覚えのある庭もあるのが見える。なんだか地球に帰ってきた気がしない。

三人で妙な感覚に包まれながら封筒に入っていた鍵……ではなくあつちの世界で使っていた鍵を試しに使ってみると、開いた。三人で

驚きに見開いて互いの顔を見合った。これ、あの家じゃね？と。

そしてドアを開ける。なんか見慣れた光景が……というか最後に見た家の中の光景が見えた。

「ええ……」

「……これさ、一回家に入って出たらあっちの世界とかない？」

「というかブラッドフォードに会ったあたりから夢じゃないの……？」

しかし残念ですが現実。一回家の中に入って出てもそこは見知らぬ外の世界が広がるだけで、あっちの世界の要素はこの家だけだった。

三人で何とも微妙な顔をしながら家に入り、靴を脱いで口を開く。

『おかえり』

『ただいま』

おかえりとただいまを言い合って。何だか可笑しくて三人で笑って。

これから先三人での地球での生活が始まる。きっと、あっちの世界よりも退廃的に生きていく事は出来ないかもしれないけど、多分笑顔で暮らす事は出来る。

魔獣や真祖なんて居ない平和ボケした世界で笑いあって。

嫌な事もあったけど。良い事をこれから先一緒に作り合いながら、

三人の足跡は――

あとがき

はい、少し物足りないかもしれませんがこれにて『魔弾使いのTS少女』は完結です。半年にも満たない程度の期間でしたが、お付き合いいただきありがとうございます。

と、いう訳であとがきです。ここからは裏設定だったり没設定だったり色々と言っちゃいますよお!!

なのでまずはひなたを保護した老夫婦に関して。この二人、実は過去に色々と事件に巻き込まれた末に結婚したRPGで言うなら初期メンバー的な扱いの人たちでした。その話の中では結構色々ありました。……まあ、これは書く機会があれば、ですかね。ひなたを拾って世話するというお節介を焼いた理由もここにあるので。

まあ、簡単にこの設定をぶっちゃけますと。

「ひなたと同じような子と出会い、共に戦った事がある」と言う事です。

実はこの作品、没にした設定とかを過去の事にしてたりしているのでブラッドフォードの過去とか色々とありますしひなたについても幾つかバラしていないし本人も知らない設定にしてある裏設定が幾つもあります。そこら辺も書く機会があれば、ですかね……ただ、そうなるとひなたは主人公から降格されます。悲しいなあ……

次にルナ&ミラに関してです。彼女達のひなたに出会う前の話は番外2として書くこうと思いましたが断念しました。これは本編で大体説明した事しか書かないので必要ないかな、と思ったからです。それ以外の理由はありません。断じて面倒だったとかではありませんとも、ええ。

それと、ミラに関しては何時かの前書きで語りましたが彼女は元々ルナ共々永久離脱組の予定でした。が、そこら辺からヴァルコラキの話を考えていたので流石に戦力が足りないため、足を無くして味方仕様にならざるを得ないから参戦となりました。

では、ミラに関してもう一つ。

彼女、原案では敵でした。名前がその名残です。

元々は『カーミラ・マイヤーズ』という名前で登場予定で、ひなた&シャーレイ&ルナを拷問にかけてルナ死亡&ひなたがまた死にかけるという話でしたが、カーミラの強さがミラと同一だったためひなたでは勝てないと判断し、急遽名前を『ミラ・B・マイヤーズ』に変えて性格も変更、その他諸々変更してお助けキャラとしてイヴァンを加えました。

じゃあミラのミドルネームのバートリーは何処から来たかと言いますと……まあ、カーミラの元ネタから察してください。元は拷問キャラだったんです。

では、次はヴァルコラキですね。こいつに関してはイヴァンを考えた際に同時に考えたキャラです。それだけです。

こいつのやろうとした事はブラッドフォードへの喧嘩です。それだけの小物です。大体本編中で語ってます。裏設定とか特にありません。強いていうなら女好きってだけです。

ちなみに真祖の中だと下から数えた方が早い程度。

で、最後に最終章。これはミラの話を考えていた辺りから結末は決めていました。こちら辺で完結させよう、最後は日本に送ろう等々。結末とその間の事を決め、戦闘の発生もしないと分かっていたので戦闘は殆どない話に仕上がりました。

ここの裏設定は……まあ、色々かね？

ひなた達の日本での暮らしは第一魔弾Afterというタイトルにして書いていきます。完結は特に考えていないのでこっちは気分次第で終わる感じですね。

そういう訳でこの話は無事にハッピーエンド。いやー、よかったよかったです。

それでは皆様、またAfterの話でお会いしましょう。でわでわ。

真・最終魔弾

ブラッドフォードの城の中に何人もの人間が踏み込んできた。

その気配は己の手の中にある水晶を覗き見ていたブラッドフォードにはすぐに伝わった。城の中は己の体内とほぼ同様。そして、そこへ配置している魔獣達はブラッドフォードが暇つぶし程度に造り出した物。外に巢食う魔獣達のレプリカ、クローンと言える生命体だが、それでもその力は軽くオリジナルを凌駕している。

ブラッドフォード自身の細胞等を使い強化した特別製だ。それを倒せる人間なんてそうはいない。いない、のだが一人の人間が魔獣達を切り裂きながら突っ込んでくるのが感覚的に分かる。

特別製の魔獣。何が特別かと言えばブラッドフォードを含めた真祖特有の不死性を得た魔獣なのだが、それを一刀で斬り捨てている。それが持つ意味は、その人間が『不死を殺す』という概念を封じ込めた武器を持っているか、単純に不死に対する特攻を神か何かから授かっているか。恐らく、前者だろう。昔その剣を片手に猪武者をしてきた人間は見たことがある。だが、五月蠅かっただけで数秒で肉塊へと変わったが。

その時の剣は確か、何処かに放置してきた。それを拾ってきたのだろう。恐らく、あの若造を滅した男だろう。ブラッドフォードは己の玉座の後ろへ視線をやり、小さく笑いながら指を鳴らす。そうすると自分の後ろのモノはカーテンによって隠される。

それと全く同時にブラッドフォードの待つ玉座へ続く扉が人間にしては一瞬。しかし、ブラッドフォードから見れば人間にしては速い、程度の速さで切り刻まれ、崩れ落ちる。

その奥に居るのは、修羅。

普段は優しい父としての顔を持つ男が、憤怒を。そして、誓いを秘めた目を持ち、それを体現する表情を浮かべて血を滴らせながら現れた。

名を、イヴァン・マイヤーズ。

「ブラッドツ、フォードオオオオオオツ!!」

イヴァンの姿が霞のように消えていく。

その一秒も経たないうちに。いや、コンマ一秒後にイヴァンの姿はブラッドフォードの目前へと出で、不死殺しの剣を振るっていた。

その剣を楽々と手のひらから放出した魔力で作りに上げた障壁で防ぎながら思い出す。

あの剣の銘は何だったか、と。確か、『知り合いだった錬金術師』がそれを自慢げに見せてきたのを覚えている。それが紆余曲折あり他人の手に渡り続けて……それが今ここににある。

確か銘は。そうだ。

「インモルターレ」

「何、を……ッ!!」

「その剣の銘だ」

あの錬金術師しか知らない言葉だったのを覚えている。確か、意味は不死だったか。

不死殺しに不死の名を付ける、というジョークだったのは覚えている。もう摩耗しきった記憶を漁りながらブラッドフォードは片手間にイヴァンを障壁の魔力を爆発させる事で吹き飛ばす。

イヴァンはその程度では傷一つ負わず、再び霞のように消えて扉の前で姿を現した。

奇妙な体術を使う。素直にそう思った。イヴァンが十年以上の年月をかけて生み出した体術はブラッドフォードにとって『奇妙』の一言で終わってしまった。

「して、何用だ？」

「ミラを、俺の娘を何処にやりやがったッ!!」

ブラッドフォードの問いにイヴァンは食い掛かるように答えた。

イヴァンは昨日、それを見つけた。真つ二つになった馬車とミラ達の荷物。そして御者の男の片腕の無い死体とおびただしいまでの血痕。それは明らかにミラ達が襲われて何かあったという事だ。

あそこら辺一体の魔獣や害獣は片足しかないミラでも後れを取る事はない。しかも馬車には魔獣避けの結界を張るための装置もあり、それは馬車が真つ二つになったにも関わらずしっかりと動いていた。

なのに、何かがあった。

イヴァンはその近くにあったブラッドフォードの城からこれはブラッドフォードの仕業だと目を付けた。そう考えるのが、妥当だった。外れていたとしてもどちらにしろブラッドフォードは倒さなくてはならない敵。下してからミラを見つけにいくまでだった。

イヴァンの怒りに染まった声を聞いてブラッドフォードは笑った。笑わざるを得なかった。

この男は、まだあの娘が……眷属を含めた娘たちが『生きています』と思っている。生きて何処かにいると思いついて。死んでいると思っていない。

「くくく……」

「何笑ってやがる……ッ!!」

剣を握る手から血が滴っているぞ？ と笑いながら指摘してやるが、イヴァンは気にした様子はない。

ブラッドフォードは笑いながら先ほど仕掛けたばかりのカーテンを開けるために指を鳴らした。

その音に反応し、カーテンはゆっくりを開いていく。

「貴様の探している娘とやらは」

カーテンが開き、その奥にある物に目をやり、イヴァンの顔が面白いように青白くなっていく。その様子に笑いを隠し切れない。

そして、カーテンが開ききり、その奥にある物を見せて。

「そこで『死んでいる』三人のどれかか？」

啜う。

そこにあったのは、一つのカプセルだった。中の様子が見えるカプセル。

その中には三人の少女が眠っていた。銀髪隻腕の少女と、金髪の少女と、そして隻脚の少女。その三人とも、あれだけド派手な攻防を一回したのにも関わらず眠っている。

いや、眠っていて当然だった。その三人にはあつてはならない物があつたから。

あつてはならない物。それは、左胸に大きく空いた空洞。本来心臓

があるべき場所にある空洞。そしてそこから流れていかない血と、三人の病的なまでに青白くなってしまう肌と顔色。

銀髪隻腕の少女に抱き着くように眠る二人の少女。三人の少女は穏やかな顔で寝ているが、息をしていない。

死んでいる。それがイヴァンには分かった。分かってしまった。

「そ、んな……」

イヴァンが膝から崩れ落ちる。

そのカプセルには、自分の娘が……ミラの姿があったから。彼女の左胸にもあつてはならない筈の空洞があり、そして息をしていない。

そんな彼女が抱き着いているひなたも、ミラと同じように反対側から抱き着いているシャーレイも。その二人も息をしていない。死んでいる。

「ああ、貴様の娘は滑稽だったぞ？　少し口車に乗せてやれば抵抗なんぞしなかったからな」

思い出されるのは先日の光景。

ひなたに、己が眷属に元の世界に帰してやると提案して、それにまんまと乗って。

後は簡単だった。魔法陣っぽい物を出して三人を同時に気絶させ、心臓を抜き取る。それだけで三人は死んだ。だが、死体の処分はしなかった。色々やる事があつたからだ。

「くくく、平和ボケした娘達だったぞ。異世界へ行く方法などありはしないのにな」

三人を殺したあと、ブラッドフォードは空へ上っていく三人の魂を掴まえた。

異世界へ送る事は出来ない。しかし、その魂に直接夢を見せる事によつてそれを疑似的に可能とする。最も、三人にとつてそれは夢だと思いだす事など不可能であり、誰かの魂を潰すか話してやればそれはそれは面白い光景が見えそうだ。

殺すが、夢は見せてやる。それが、ブラッドフォードがひなたに対して与えた『褒美』だった。

「しかし、我が眷属も愚かだったな。とうとう自分がこの世界に来た

理由も分からずに死んでいくとはな」

「……嬢ちゃんか？ どういう事だ」

イヴァンがブラッドフォードの独り言に反応する。

そう、ブラッドフォードはひなた自身が知らないひなたの秘密を知っている。

「簡単な事だ。我が眷属は我が直々にこの世界へと魂を呼び寄せた。所謂召喚という奴か？ それをとある娘の魂に上書きしただけの事。これは元々奴の肉体ではない。別の人間の肉体に押し込んだだけの物だ」

ひなた自身が知らない、ひなたの体の秘密。

それは、ひなたの体は彼女が生まれ直した結果得れた物ではなく、元からあった体に憑依融合する形で得た者だった。ただそれだけの事だった。

ひなたの肉体の元の所持者である少女はひなたの魂を上書きされ記憶を封じられ消え、軽く融合している状態だ。ひなたが徐々に女の姿に慣れ、言葉使いに慣れ、性の事にも徐々に慣れ、そして服装も女の物を受け入れていったのは男としての魂に少女の魂が融合していた結果だった。

ひなたの男としての魂……つまり今のひなたの大部分を構成する陽太の魂は異世界からぶっこ抜いてきた。この魂ぶっこ抜きは、簡単に言えば召喚した。適当な魂を異世界から召喚した結果、陽太の魂は召喚され、ブラッドフォードの娯楽に利用された。肉体ごと世界を超えされるのはそれこそ神にしか無理な事だが、魂だけなら実態を持たないため簡単だった。

そうしてぶっこ抜いてきた魂を今のひなたの肉体に上書き、というよりも陽太が八割、少女が二割程度の比率で混ぜた。ついでに魂をぶっこ抜いてから記憶を覗き、召喚直前に着ていた服やら荷物やらを作って着せたり持たせたりした。その時にブラッドフォードは地球の存在を知ったのだ。

そうして魂を混ぜられ産まれたのが『暁ひなた』という少女だった。彼女が会話だけ出来たのは、陽太の魂ではなく少女の魂の影響だっ

た。そして、文字を早い段階で覚えられたのも、その少女の魂があったからだ。

そして、彼女の運命を自分が笑えるように、そして試練を与えるために自分が動いた。

彼女を保護した人間の居る村を焼き、彼女の体を傷つけ、そして自分への憎しみを募らせながらも少女の魂が程よく馴染んだであろう頃合い……つまり半年前に彼女が訪れるであろう街の少女に手を出し自分の尻尾を掴ませ、後は成り行き。今回空を紅にして手を出したのは、ブラッドフォードが自分も適当に動くか、と思ったからだ。もしもブラッドフォードがひなたが死ぬまで放置しておくか、と思えばひなたはこの世界で笑顔で天寿を全うした事だろう。

つまり、彼女……暁ひなたはブラッドフォードが暇潰しと娯楽で産み出された少女であり、そしてブラッドフォードの暇潰しと娯楽で死んでいっただけの、悲劇のヒロインだった。それだけの事だ。

最も、暁陽太の魂を銀髪の少女の魂と混ぜてその体を使ったのも理由があつたのだが。

「……つまり、だ。我が眷属も、貴様の娘も、我が楽しむためだけの駒だった。それだけの話だ」

「て、めえ……何様のつもりだ……ッ」

それを聞いたイヴァンの怒りが有頂天を迎える。いや、とつくに迎えている。

今にでも斬りかかりたい衝動に駆られ、剣を握る手からは力を込め過ぎたためか血が流れている。

「我は我だ。それだけの事」

「そう、かい……!」

「うむ。付け加えるなら、貴様の娘の魂は美しいぞ？ この水晶に閉じ込めているのだがな。銀と金、そして青……貴様の娘は青色だ」

「こ、のっ、クソ野郎がああああああああああッ!!」

とうとうイヴァンが動く。

ブラッドフォードは笑いながらそれを迎撃する。

人間を超えた人間と、真祖の戦い。それを見物する者は居らず、た

だ玉座の後ろにカプセルに入れられた三人の少女の死体があるだけだった。

彼女達の魂は夢を見る。見続ける。

異世界の、地球で暮らす夢を。

彼女達は気が付けない。それが夢だと言う事を。ブラッドフォー
ドのさじ加減一つで崩壊してしまう世界に住んでいると言う事を。

だが、彼女達は幸せなのかもしれない。死んでも尚、ずっと一緒に居られるのだから――

A f t e r 第一魔弾

あの剣と魔法のファンタジー世界からこの魔法が無い世界に戻ってきてから約数時間。新たな家、というよりも明らかにあっちの世界から持ってこられた家に辿り着き、家具の配置は殆ど変わらず、しかしそのどれもが現代風になっているのを確認し私服の類も現代日本で着られる物になっているのも確認した。

そして家に入り、机の上をふと確認して見つけたのは三台の携帯端末、スマートフォンだった。

銀、金、青の三色の端末の内、銀の端末を触ってみると、それはロツクがかかっておらず、プロフィール欄を見れば自分の名前で登録されているのを確認した。今現在テレビを見て興奮しているシャーレイとミラの分は、恐らく金色と青色の端末だろうかと確認してみれば予想通りで金色がシャーレイ。青色がミラだった。

「シャーレイ、ミラ」

二人に声をかけ、二人の端末を投げ渡す。

二人ともそれを落とすという事は無く普通にキヤッチし、スマホをまじまじと観察している。ひなたはそれを見て少し笑いながらマツサージチェアに座ってスマホを見る事にした。見た所、スマホは見た事が無い型だったが、小さく端末側に彫つてある端末名を調べてみればひなたが異世界に行っている間に発売された最新型らしく、性能はかつてひなたが使っていた端末よりも遥かに上だった。

一年半離れただけでこれかあ、と少し感心しながら一年半前はよく見ていた動画サイトを覗いてみると、昔見ていた動画の続きが一気に更新されていたり自分の好きなアニメの二期が始まっていたり逆に完結していたり。中々変わっている事が沢山あつて目新しさが沢山だった。対してシャーレイとミラはひなたの真似をしてスマホの電源を入れ、小さな液晶が光った事に驚いて端末を落としかけている。何だか面白い。

しかし、右手だけ。しかもかつての手よりも遥かに小さい手でスマホを操作するのは少し疲れる。具体的には画面端まで指が届かない。

これはスマホの音ゲーも出来ない可能性もある。

少し日本の楽しみが失われた事に溜め息を吐いてからひなたはマッサージチェアから立ち上がった。

「……さて、二人にテレビとかスマホの使い方教えないと」

取り敢えず、二人が最近の若者のように簡単に端末の使い方を覚えてくれるのを期待する事にする。

二人にスマホの使い方を教えたりテレビを見る方法だったり何故テレビの中に人が入っているのかとかテンプレ的な事を聞かれたり何故かこつちの世界に来てから行方不明だったミラの剣だけ物置にぶつ刺さってたりとかあり、結局この日の就寝は十二時を軽く超えた。

そして翌日は七時に起き、この辺の地理を得るために三人で出かける事にした。

「……剣を持たないのが違和感」

「そりゃ、こつちの世界じゃ銃刀法違反になるし……」

「武器を持って歩けないって不安だよね」

「そこまで治安は悪くない……筈」

勿論、ミラは剣を置いて、だ。彼女は出かける時は大抵剣を腰に吊っていたので剣を持って出歩かないのに少し違和感を感じているようだった。

対してひなたは部屋の中にあつたロングスカートを履いて足に起爆銃入りホルスターを見えないように巻いてからシャツの上に着る。ちなみにシャーレイは特に違和感なく着替えた。やはりミラのような人間が一番違和感を感じれるようだ。

それに、自分達なら日本人であろうと外国人であろうと襲ってきた所で撃退できる自信があるので違和感こそあれど危機感を持つていないが。ミラもそこら辺聞いているのでサブウェポンのBナイフを

持ちだす等もしてない。

そして三人で駄弁りながら歩く事数分。三人はまだ少し騒がしい中学校に辿り着いた。

「ここは？」

「明日からボク達が行く事になる学校。で、合ってるよね……？ うん、合ってる」

「すっごい大きい……」

あつちの世界では学校程大きな建物はそれこそ城や何かしらの組織の本部程度だったのでシャーレイは圧巻としている。ミラは城を何度か見たことがあるらしく特に驚いてはいない。が、ここが学び舎だと言う事には驚いているらしい。

さて、これからどうしようかと思っているとふと視線を感じる。どうやら、今は休み時間らしく学校の窓からこつちを見ている数人の生徒が見えた。やはり金髪はともかく銀髪はそこそこ目立つらしい。あまり視線を向けられたくないので携帯で次に行きたいところを調べてから二人に声をかける。

「行く。なんか視線感じるし」

「え、あ、うん」

「……珍しいらしい？」

「金髪はそこそこ見るけど銀髪なんてそうそう見ないからね」

それに、シャーレイとミラが可愛いから、というのも……いや、無いだろう。自分達は遠くの物を見るためにそこそこ視界を遠方に合わせる訓練だったりをしているため相手の顔も服装もそこそこ細かく分かるが、相手からは三人の人間が居る。その中で一人は銀髪と言う事しか分からないだろう。

取り敢えず携帯を使って写真を撮られる前に退散する。この学校に来るのは明日からだ。

欠伸をしながらひなたは二人を連れて比較的家から近いスーパーに向かう。今日の昼食夕食の買い物のためだ。朝食は抜いた。

「……誰も武装してない」

「そりゃ犯罪だし」

「……不思議」

何度か人とすれ違ったがその誰もが武器を持っていない。それに対してやはりどうしても違和感を感じてしまうミラ。ついでに二人はすれ違う人が老人だったりそこそこ若い程度の男女ばかりなのが疑問らしい。

「まあ、こんな平日の昼間に歩いているのなんてそれこそ暇な大学生か定年後のご老人程度だよ。イヴァンさん位の人は全員働いてる」
じゃあ魔獣はどうしているんだ、とミラが聞いてきたが居ないと一蹴するととても驚いていた。やはりあつちの世界からこつちに来ると色々な違いに混乱してしまいうらしい。ひなたもあつちに初めて行った時は混乱しまくったので少し面白そうに笑いながら混乱しているミラを観察する。ちなみにシャーレイはあつちへフラフラこつちへフラフラしているためつ先ほどからひなたが手を掴んで何処かへ行かないようにしている。

そして学校から離れて歩く事数分。

「そういえば、ひなたちゃん。髪の毛伸びてない？」

「え？ ああ、そういえば。まあ、去年まではボクの髪はこんななんだし」

「そうだったの？」

「まあ、焼けて焦げちゃったからちよつと切ったんだけどね」

昨日の風呂でも感じたが、ひなたの髪の毛が実はこつちに来てからかなり伸びている。具体的にはあつちの世界で目覚めた時と同じように膝下まで銀色の髪が伸びている。正直に言っただけかなり長くて重い。が、前から髪の毛は結構長い方だったので今さらだ。

髪の毛は長くなつたのに身長は少し縮んだ。若返つたと思えば仕方ない事だが納得いかない。一応魔法を使えば自分の外見程度誤魔化せそうなので文句は言わないが。魔弾使いナメるな。弱いけど。

「で、取り敢えずここがこつちのスーパーね」

「……あまり変わらない？」

「そだね。そこまで変わらないよ」

こつちのスーパーもあつちのスーパーも大した違いはない。ビ

ニール袋があちらには無いがこっちでは貰える、程度の違いだろうか。後は売っている物の違いだったり。そこら辺は家事担当のシャーレイに慣れてもらおうほかない。

シャーレイとミラを連れてスーパーをぐるっと回ったり適当に何か買ってみたりしてこっちでの買い物の一連の動作を軽く覚えてもらってから三人はスーパーを後にする。と、そこでふとあっちの世界から引き続き使っている自分の財布の中身が結構軽くなっているのに気が付いた。

昨日の夜、そして今朝の朝食はコンビニの物で済ませ、そして今もスーパーで買い物したので昨日下した五千円がもう二千円前後しか残ってない。

「あ、金が溶けてる……取り敢えずコンビニ行っていかな？」

「コンビニ？ ああ、昨日の」

「……何するの？」

「お金をもうちよつと多めに下してくると、お昼買ってくる」

少し手数料がかかってしまうが、ひなたの通帳にはかなりの量の金が入っている。それこそ億単位で。

もしかしたら高校卒業までに消え去ってしまうかもしれないが、ひなたとミラはどうやら事故で手と足を失ったと言う経緯になっているらしく障害年金が二十歳以上で確約されているので、まあそれまでに金を使い切らなければ働くだろうしどうにかなるだろう。ちなみに義手義足も作ってくれるようにはなっているらしい。ひなたの端末にそこら辺の事が大体書いてあった。

それはさておき、三人はコンビニへ移動した。

「着いてくる？」

「……じゃあそうする」

「中も見てみたいし」

昨日見たく外で待っているかと聞いたが、二人ともついてくるようだった。

じゃあ、とひなたは周りに人の目が無いのを確認し、更に監視カメラなどが無いのを確認してから起爆銃を足のホルスターから抜いた。

「……起爆銃？」

「実は昨日、こつちでも煙草が買えるようにするために新魔弾を作りましたね」

そう言っただけひなたは何度か起爆銃を空撃ちすると空へ銃口を向けて引き金を引いた。

すると、起爆銃の銃口から銀色の魔力が広がっていき、ひなたの体を包んだ。それから数秒も経たないうちにひなたの体が見えなくなるほどの銀色の魔力が晴れていき、ひなたがその中から姿を現した。

十九歳の頃のミラよりも大きくなって。

「成長した!？」

「……合法ロリじゃなくなった、だと……?」

「誰が合法ロリだおい。あと、これただの幻影。ボクの体に魔力で膜を作って成人女性っぽく見せているだけだから触られると簡単にバレル。ってか魔力持つてる人なら何となく分かる筈」

「……ほんとだ」

「へえ……あ、触れない」

これがひなたがこつちでも煙草を買うために編み出した魔弾、幻影魔弾だった。

十四歳の姿では煙草を買う事が出来ない。すると必然的に禁煙を強いられる事となり、そんなの許容できるか! と憤慨したひなたが寝る前と今朝で必死に構築して完成させた新たな魔弾だった。

だが、その幻影は薄っぺらく、触る事すら出来ない視界だけを誤魔化すだけの物であり、自分の上に違う姿を被せる事しか出来ない欠陥魔法だ。しかも魔力を持つてる人なら感覚で分かっってしまう。

そんな魔法でもこつちでは十分に効力を発揮する。完璧な作戦だった。

「そんな訳でコンビニヘゴ」

幻影魔弾によって成長したひなたが二人を引き連れてコンビニヘ向かう。

入店し、店員の少しやる気のない声を聞きながらひなたは二人を連れてATMの元へ向かう。そしてキャッシュカードをシャーレイに

渡して彼女をATMの前に立たせる。

「ほら、やってみて」

「え、あ、うん。えっと、確か……」

シャーレイにはATMの使い方を一通り教えている。何せ彼女は家事担当。ついでに財布の管理も彼女に任せる気満々なのでATMの操作も覚えてもらわないとならなかつた。なので、今朝の内にシャーレイにはATMの使い方を口頭で説明している。実践は今からだ。

シャーレイがATMと格闘している間にひなたは三人分の食料をミラと共に買いに行く。ミラに荷物を持たせてしまう事に対して心が痛くなるが、今この場で幻影魔法を解除する訳にはいかないのでミラに買い物かごを任せて自分は誰も見てないのを確認して幻影魔法が不自然に発動していないかをミラに見てもらいながら商品をかごに入れていく。一応、幻影魔弾の効果は本体の動きに合わせて違和感ないように動く、という風になっているがやはり人前で使うのは初めてなので結構冷や汗ダラダラだ。

ミラに買い物かごに商品を入れる仕草は特に不自然じゃないと言ってもらい、ホツとしながらレジの前へ向かいかごをミラから受け取ってレジの前に置く。

「あ、あと……あー、百十番を五つ」

「では年齢確認のご協力をお願いします」

お決まりの台詞と共にレジの画面が切り替わる。貴方は二十歳以上ですか云々と書かれているが、ひなたは迷わず画面のボタンをタッチ。そして無事に煙草の購入に成功した。

店員が袋の中に煙草を入れている所を見ながら一息吐き、袋の回収をミラに任せてひなたはシャーレイの様子を見に行くことにした。シャーレイはどうか金を下ろせたようで金とカードを片手に胸を撫で下ろしていた。

「シャーレイ。出来た？」

「わっ!? び、びっくりした……」

そのびっくりした、というのはいきなり声をかけられた事に対して

なのか今のひなたの姿に慣れていないからなのか。どちらにしる触られたら色々とマズいので触られなかっただけよかった。

「で、どう？ 覚えた？」

「うん、大体は。結構簡単なんだね」

「まあ、指示通りにしたらいいだけだしね。じゃ、ミラが袋受け取ってくるまで待とうか」

ひなたとシャーレイが並んで歩く。シャーレイは今のひなたの姿に慣れていないのか何度もひなたの方を見ていたが、それを気にせずに丁度袋を受け取ったばかりのミラと合流する。どうやらあちらも難なく終わったらしい。まあ、ここらへんで何か問題があったらそれこそこれから先不安しか残らないので少しホッとした。

片手だけにいくつかビニール袋を持ち少しバランスを崩しかけている彼女を見てすぐに袋を一つひったくる。

「あっ」

「少し重かった？」

「……ちよつと袋が手に食い込んで痛かっただけ」

あー、とひなたは声を出して同感する。

重いものを入れた袋を持った時の袋が指や手に食い込んで発生する痛みはどうやらミラも痛いと感じるレベルだったらしい。だが、もう既に慣れたらしく、すぐにバランスよく杖を使って歩き始めた。

ひなたとミラを見て店員が少し不安そうな目を向けているが、今更なので気にしない。それに、あつちに居た頃はひなたもミラももっと重いものを持ち上げたりしていた。

そうして少し手間のかかった買い物を終えてひなたとミラは入り口付近の雑誌や漫画、それとPOSAカードを物珍しそうに眺めているシャーレイと合流する。

「何か気になるものでもあった？」

「いや、本が安いなあって。あと、このカードは何なのかってのも……」

「そのカードは……まあ、そのうち」

POSAカード。つまりは携帯やパソコンに金を突っ込むために

使うカードだが、ひなたにとってあれはゲームの課金に使うためのカードなのであまりいい印象がない。何度あのカードを買いに走ったことか。

シャーレイもこっちで生きていくのだとしたらその内知ることになるだろう。それを大量に使うような子にはなつてほしくないが。

「さて、一旦家に帰ってお昼食べようか」

「あ、その前にこの……えっと、漫画？ 買ってみたい？」

「別にいいけど……渋いの選んだね……」

シャーレイが手に取ったのはひなたが生まれる前から人気な鼻が長いキャラが金を稼ぐために博打やビルとビルの間の鉄筋を渡ったりする漫画だった。どうやら、最近また一番最初からコンビニで一気に話を纏めた本を出しているらしく、シャーレイが手に取つてのはその中で一番最初の物だった。

中々渋い物を手取るなあ、と思いながらシャーレイに金を渡してレジへと向かわせる。

それと同時に一人の客が来店する。ふとひなたはそつちへ視線を向け、少しその客に違和感を感じた。なんだか、落ち着いていない。あっちの世界で少しは感覚が鋭利になったからこそ分かったことだが、気のせいかもしれない。そう思いながらミラの方を見ると、彼女はそつとひなたに起爆銃を抜けるように合図していた。どうやら、ミラにもあの客は怪しいと思われるらしい。と、なれば黒だろう。きつと、コンビニ強盗かなにかだ。

こんな真昼間からよくやる、と思う。いや、昼だからこそやるのか。下手したら深夜よりも若い世代が少ない昼間を狙つて。

ひなたはそつと起爆銃を抜く……事はせず、そつと男の後ろを着いていく。察したミラも。

そしてシャーレイがレジで本の入った袋を受け取つて男の横を通り過ぎ……ようとした時、男がシャーレイの首に手を回し、そのままシャーレイを拘束すると男はレジの店員へ向けて懐に仕舞っていたらしいナイフを向けた。と、同時にひなたが走り出した。

「おいお前！ とつとと金を……」

「黙れオラア!!」

男が何か言う前にひなたの飛び蹴りが顔に突き刺さる。そして男は吹っ飛び、ナイフがどつかへ飛んでいく。

その瞬間に男の拘束を抜け出している何気に反応速度やらが人並みを超えているシャーレイ。追撃に杖をぶん投げるミラ。倒れたところに顔に杖が突き刺さった男。

「あー、なんでいきなりトラブルに巻き込まれるんだろう」

ひなたは右手で髪の毛を握り潰すように掻き乱しながら男を何度も踏みつけてそのまま気絶までもつていく。

そしてひなたが杖を回収して。

「よし逃げよう」

「……合点承知」

「え、ええ!?!」

逃げ出すひなたとひなたよりも速く杖でシャカシャカ移動するミラ。そしてシャーレイも困惑しながらもダツシユで二人に着いていく。

明らかに面倒ごとを引き起こすというのがわかっていたための逃亡だった。絶対にこの後警察の事情徴収が待っているためそんな面倒なことに巻き込まれないように逃げ出したのだった。

が、数時間後に監視カメラの映像からミラの身元が即判明し、芋づる式で被害者のシャーレイも見つかり、ひなただけは身長が明らかに違ったためそっくりさんという事で見逃され、ミラは厳重注意、シャーレイはどういうことがあってあんなことになったのかを聞かされ、結局この日は昼に何もできなかった。

「……解せぬ」

「仕方ないね」

「もう、二人とも。明日の準備するよ?」

そしてこの世界にやって来てから三日目。ようやく三人は学校へ通うこととなった。

A f t e r 第二魔弾

翌日の朝。

その日は学校への初めての登校日。転入する日とも言えるが、今日の予定は特に他の学生と変わらない時間に学校へ向かい、教室ではなく職員室へ行き、そこで話を聞いてから転入の挨拶をして授業……らしい。

そしてひなた達の扱いだが、ひなたは親の事情で海外に住んでいたが、自身の我儘と親戚の引越しが被ったためあの家に引越してきた帰国子女となり、シャーレイとミラはそんなひなたと仲が良く、ひなたに引越付くように海外から転入してきた、という感じだ。ひなたとミラは事故で手と足を失ったという事や内二人は外国人という事もあり、どうやら三人は本来別々のクラスに入る予定が特別処置で同じクラスに転入するらしい。

その他にもひなたとミラは体育は自由参加だったり色々であるのだが、そこら辺はひなた自身完璧に把握していない。どうせ体育だろうが何だろうが自分達なら大抵のことはそつなくこなせる自信があるからだ。

だが、それ以前の問題が一つ。

「まさか生きている内にセーラー服を着ることになるとは……」

今のひなたは少女。男ではない。なので学ランではなくセーラー服を着用することになる。スカートには既に慣れたひなただが、それでも普段外に出るときはボーイッシュな物を好んでいるため、その顔はあまり機嫌がいい物とは言えない。それにスカートの内側を見られるという危険性も付き纏ってくる。

別に見られても、とは思うのだが好んで見せたいという訳ではないし、学生だった頃のように振る舞っていたらスカートの中が見えてしまう可能性も。

セーラー服を着てから渋い顔をしていたひなたは暫し考えて、思いついた。

そうだ、何時ものショートパンツを見えないように履こう、と。つ

いでに足にはホルスターと起爆銃。これは一時間ごとに自分で幻覚魔弾を押し付け割ることで隠す。見つかったら面倒なことになるとは変わらないしこれが足にないまま何時間も外にいたら結構不安になる。

ベルトでしつかりとショートパンツとスカートがずり落ちないように固定してから鞆の中に忘れ物が無いのを確認してから部屋を出る。自分の体を見下ろすとセーラー服を着ている自分の姿がある。それに違和感を感じないことは無いのだが、何だか女物の服を着ることに慣れてしまった自分がいる。

溜め息を吐きながら階下に降りれば既に自分と同じデザインのセーラー服に身を包んだシャーレイとミラがいる。

「お待たせ……」

「あ、やっと来た」

「……遅かった。何かあった？」

「なんでも……」

何だかコスプレしている気分で少し恥ずかしいし二十一になったのにまた若返って中学校、というのに多少どころではない不満がある。再三の溜め息を吐いてから行こう、と二人に声をかける。

セーラー服のまま外に出るという行為に少し顔を赤らめながらも昨日通った道のりを辿って三人並んで学校へと向かう。

「そういえば」

そうして三人並んで歩いている最中にシャーレイがひなたに声をかけてきた。

どうしたの？ と中身のない左袖を軽く振りながら聞くと、シャーレイは少し言いづらそうにしてから考えていた事を口にした。

「その、ほら、私って勉強とか生まれて一度もしたことないし……色々大丈夫かなって」

「……私も」

聞かれたことは、まあ最もな事だった。

二人は小学校なんて行くことなくこの年齢まで育っていた。片方は生きるのに必死でそんな余裕はなく、もう片方は既に物騒なことを

して金を稼いできたため勉強なんて必要がなかった。なのでいきなり中学二年生の勉強を、それも途中からしろと言われても出来やしな
いだろう。

しかも、掛け算とか割り算とか言われてもきつと二人は理解できない。そういった計算は日常生活で必要なためしてきたが、三角形の面積とかそんな事を言われても何のことかサッパリだろう。

「そこら辺はボクがカバーするよ。都合よく三人一緒のクラスだし何とかするさ」

だから、そこら辺はひなたが全力でカバーする。

今更中学校の勉強とか言われてもきつと思いつけない部分も多数あるだろうが、それでも元々は大学まで行った身だ。何とかするしかない。それが二人をこの世界に連れてきてしまった自分に付きまとう責任だろう。

そうになると、学校に通いながら小学校の数学や理科の問題集でも解いてどうにか学んでもらうしかない。それまではひなたが教科書などを読み込んで予習するしかない。幸いなのは国語や英語はどうしてか簡単に書けるし読めるらしく古文までサラサラと読めていたため、ここはノータッチでも問題はないだろう、ということだ。

シャーレイとミラがホツとして胸を撫で下ろし、再び学校へ向かって歩を進める。

歩いている最中、視線を時々感じながらようやく学校へ辿り着く。学校の敷地内に歩を進めると更に視線を感じた。やはり銀髪は目立つらしい、と思ったがどうやらシャーレイもミラも視線を感じているよう。

恐らく外国人と片手片足が欠損した少女、というのも視線を集める要因になっているのだろう。特に片足が無く杖を付いているミラは結構注目されている。ひそひそと可哀想、とか聞こえてくる。

「……この国は陰口が好き？」

「少なくともあっちよりは」

やり方が陰湿なのが多い、とも言えてしまうが。

視線を感じながらもそれを全て無視して学校内へ。靴箱は空いて

いる場所を使えとあの紙に書いてあったのでそこにローファーを入れて代わりに鞆の中から上履きを取り出してそれに履き替える。シャーレイとミラはかなりめんどくさそうにして、更にミラは杖の先を綺麗な布で拭くこともしていたためかなり嫌な表情をしていたが、これもルールだと大人しく履いていた。面倒な文化ばかりな国で本当にごめんなさい。

片手だけで謝ってから次は職員室へ……の予定だったが、ふと思っ

た。

職員室、何処だ。

「……ヒナタ？」

「いや、ボクもこの学校は初めてだし……」

そういえば校内の地図とか無かった。多分あったとしても見逃している。というかスルーしている。

どうしよう、困った。むやみやたらに歩き回っていても絶対に職員室は見つからないだろうし魔弾でエリアサーチ紛いの事をしても分かるとは思えない。つてか魔弾使っているのを見られたら色々面倒だ。いや、面倒なんて物じゃない。引越し退去ものだ。つてか今人の目あるし。

はてさて、どうしたものかと悩む。暫し昇降口で悩んでいると、目の前に大人の女性が来た。

「あ、もしかして暁さんにランフォードさんと、それとマイヤーズさん？」

「え？」

いきなり名前を呼ばれて疑問の声をあげるひなた。

声をかけてくれた女性。つまりは先生の方へ視線をやると、大体二十代後半か三十代前半辺りの女性が色々な物を抱えた状態で突っ立っていた。

「あ、合ってた？」

「え、あ、はい、まあ……」

いきなり声をかけられて少し困惑するひなた。自分ってこんなにコミュ障っぽかったっけ？　なんて思いながらも困惑している心を

無理矢理沈静化させる。

自分が情緒不安定だということには自覚はあるが新たにコミュ障かもしれないなんていう事実にし少し困惑を残しながらも至って平静を保ちながら教師の言葉を聞くことにする。

「もしかして職員室が分からなかった？」

「ええ、まあ」

「なら私に着いてきて。あなた達の担任だし、歩きながら話しましょう？」

どうやら声をかけてきた先生は自分達の担任だったらしい。

担任って？ と聞いてくるシャーレイに小声で学校内のクラスの一つを受け持っている責任者みたいな物だ、と教えてから担任の後を追って歩き始めた。

担任の背は十九歳の頃のミラとあまり変わらない感じで女性としては大きいほうだろうか。なので見逃すという事はなくしつかりとその後ろを追随していく。そうして歩いている内いつの間にか階段をミラに合わせてゆつくりと上がってから二階にあつたらしい職員室に着いた。その間に担任の自己紹介を軽くされ、名前は一応記憶した。

「えっと、確か教科書とかは先に買ってるんだっけ？」

「あ、はい。必要なものは大体」

大体、と言ったのはもしかしたら家になかったが必要だったものがあるかもしれないからだ。だから、後で買いに行けるように、気付けませんでしたと言えるように全部買っておいたとは言わない。

担任もそれは分かっているのか無い物があつたら誰かから借りてね、と言ってくる。

こういう問答はひなたがやると先に言っておいたのでミラもシャーレイも職員室の中を興味深そうに眺めるだけに終わっている。そんな二人を見て担任は小さく笑った。

「外国と日本って結構違うでしょ？」

「え？ えっと、はい。あんまり見たこと無かったので」

「あら、日本語上手いのね。まだ朝のホームルームまで時間があるか

らゆつくりと見ていつてね」

外見が外国人なシャーレイが結構流暢な日本語を口にしたのが素直に感嘆に値したのだろう。担任はシャーレイにそう言うと言書類を纏め始めた。ひなた達は流石に立ちっぱなしは辛いだろうと言うことで他の教師が持つてきてくれた椅子に腰を下ろした。

時々やつてくる生徒がこつちを見て興味深そうにしているが大抵すぐに用事を済ませて職員室から出ていく。特に現状視線を集めているのはひなただろうか。座っていると案外足がないミラよりも腕がないひなたの方が目立っている。

そうして人が出ては入ってきて、出ては入ってを繰り返しているうちに予鈴がなる。その音にビックリするシャーレイとミラ。一応話はおいたがやはり実際に聞くとびっくりしてしまったのだろう。「じゃあ、行きましようか」

出席簿を手にした担任がひなた達を先導する。その最中ですれ違った教師達が挨拶をしてくるので一応挨拶を返す。

だけどハローと言われると少し困惑してしまう。自分たちって英語圏から来たことになってるのか？　なんて思いながら自分たちのクラスである2-Cに到着する。教室の中からは生徒たちの話し声が聞こえてくる。

「私が入ってきてって言ったら入ってきてね」
「分かりました」

そう告げて教室の中へと入っていく担任。暫くして教室の中が静かになり先程の担任の声が聞こえてくる。

暫く、と言っても数分程度だが暇になる。ひなた達は自然と顔を合わせた。

「……そういえば転入後の自己紹介とかあるんだけど、考えてる？」
「え？　そんなのあるの？」

「一応ね。まあ、あつちでの事はあまり言わないように」

つまりシャーレイは最初スラムで住んでいました、とかミラは魔獣狩って生きていました、とかそういう物を口に出さないでくれ、という事だ。あとシャーレイに関しては夜中の事も。これは特にキツク

昨日の夜から言っておいた。

それはシャーレイもミラも分かっているので黙って頷く。

だが、こうなるとひなたも一応何か考えておかなければならない。が、何も思いつかないので取り敢えず愛想笑いだけして印象だけはよくしておこうと少し小癪なことを考える。

そうして色々と考えているうちに担任から入ってきてくれと呼ばれ、それに返事だけしてひなたから先に中に入る。

入ってすぐに教室の中の生徒からおお、と声が聞こえてくる。が、すぐにひなたの左袖に腕が通っていないのを見ると一瞬中の空気が凍った気がした。え、先生そういうこと先に言っておいてくれなかったの？ と担任を見つつ指示に従って教壇の前に立つ。

続いてシャーレイが入ってきてもう一度声が上がリミラが入ってきてまた空気が凍る。露骨だなあ、なんて思いながらも担任の言葉を待つ。

「はい、じゃあ自己紹介よろしくね」

その言葉にじゃあ自分から、と二人に自分を指さして聞いてみると頷いてくれる。

「えっと、暁ひなたです。この間こっちに戻ってきました。仲良くしてもらえると嬉しいですよ」と、満面の愛想笑い。

まあこんなモンだろうとチラッとシャーレイとミラを見てみると何だか有り得ない物を見たって感じの顔をしている。いや、これくらいの愛想笑いはいいでしょ？ と思うが果たして。

「シャーレイ・ランフォードです」

「ミラ・B・マイヤーズです」

『この人猫被ってます』

「何でそういう事言うかなあ!!?」

指差しながら言われた言葉に思わず声を荒げてしまう。

何やかんやで転校最初の挨拶はグダグダになった。

A n o t h e r エ ン ド ル ナ生存√

ルナの体の中にいる水の魔獣。それはルナの体の中に巢食い、時が来たらルナの体を爆散させ、次の宿主へと移る。この世に存在する魔獣の中では、トップクラスに厄介であり、極悪な魔獣だった。

そして、その魔獣は宿主を守るために自身の体を構成する水を使い、宿主を守る。そんな光景を、ルナが転んだ際に見たひなたは、ふと思った。

「ねえ。この水、全部吸い取ったらどうなるのかな？」

水は斬れない。水はルナの体の中に居て、ルナの体を常に守っている。

なら、ルナの体に針を刺して、それを迎撃してくる水を全て注射器で吸い取ってしまったらどうにかなくなってしまわないか？ とひなたは提案した。

そんな馬鹿などルナは言う。流石に無理だとミラは言う。しかし、やってみなきやわからないとひなたがどこからか持ってきた注射器をルナに刺して。

「……ねえ、水吸い取れたんだけど」

水は吸い取れてしまった。しかも、その水は自分の意識を持っているのか、うねうねと注射器の中であごめいている。

その瞬間、四人が黙った。

え？ こんな簡単な方法でいいの？ と。対処のしようがないと思っていたこの魔獣の対処法って、こんな簡単な者でいいの？ と。徐々に注射器を破壊しようとして膨らむ魔獣を、注射器ごと魔法で凍らせたミラは、そつと自分の財布から大金を取り出し、シャーレイに手渡した。

「……えつと、シャーレイ？ だっけ。この金でありつたけの注射器買ってきて。大至急」

そして、ひなた&ミラ（注射器装備）VS水の魔獣という何ともシユールな戦闘が始まった。

約三時間も長い戦闘を経て、なんとかルナの中にいる水の魔獣は

全て吸いきる事が出来たが、ひなた達の足元には凍った注射器が大量に散乱していた。ずっと注射器で水を抽出していたひなたは疲労困憊。十数キロにまでなった注射器を運んできたシャーレイは現在進行形で凍った注射器に埋もれ、魔力を使いつくしたミラはうつ伏せでぶつ倒れ、何もしなかつたルナは暇で寝てしまった。

そして、全部が終わってから三人は気が付いた。

適当なチューブを巨大な注射器に繋いで一気に吸い取ってしまった。ばこんな疲れなくても良かったんじゃないかと。だが、そんな事は後の祭り。三人はそのまま力尽き、次の日まで気絶していたのだ。

そんなちよつと間抜けな事があってから早くも二年が経過した。

ひなたとシャーレイの家には流浪していたミラが二人の言葉によつて住むことになり、ルナも親がいないためひなたとシャーレイ、そしてミラが引き取って育てる事になった。

そんなルナも十一歳になり、ひなたは二十二歳。ミラが二十歳でシャーレイも十六歳になった。少しだけ大人となったシャーレイと、晴れて成人になりちよつと成長した二人だが、ひなただけは二年前と変わらぬ合法ロリ状態だった。

そんなひなたはどこぞの平行世界同様、ほぼ毎晩シャーレイに抱かれ犯され、ミラも時々巻き込まれ、ルナだけは唯一汚れを知らない状態だ。ヴァルコラキとかいう輩が平穩を乱そうとかしてきた時もあったが、ルナを救ったという話を聞き、様子を見に来たイヴァンが見敵必殺で会ってから一時間ほどで殺したため特に印象には残っていない。

それ以降ひなた達は何か問題に巻き込まれるでもなく、平穩そのものの日々を過ごしていた。

そんなある日のルナ。

「じゃあひなたお姉ちゃん。遊びに行ってくるね」

「あいあい。楽しんでおいで〜」

いつも通りひなたに遊びに行くと言え、家を出ていく。

仕事の無い日は基本的に真昼間から酒を飲んでるか煙草を吸いながら起爆銃のメンテナンスをしている。こうなったのは大体一年前からで、ミラが住ませてもらっている以上金は稼いでくると言っていて、時々二日三日家を空ければ一年は普通に暮らせそうな金を稼いできて、シャーレイは家事担当なので朝の早い時間帯は買い物に向かっている。

そしてひなたは何もすることがない。できないと言った方がいいか。金、家事。どっちも埋まっているためひなたは時々お小遣い稼ぎに依頼をこなすか家でボーっとしているかの二択だ。一応家主なのでローンの支払いはひなたがやっているのだが、それを差し引いてもひなたは今、暇な時間が多い。

一応、ひなたも何かやることを見つけるため家で小説を書いていたりするのだが、まだ実っていない。が、いい感じになってきているらしいので近々デビューするかもしれない。ひなたの書く、日本のような異世界の話はそこそこ人気があるようだった。

「ふっふっくん」

鼻歌を歌いながらルナが歩く。

二年前に命の危機を脱してから、ルナは明るくなった。母を失ったのは悲しかったが、いつまでも引き摺っていられない。折角生き残ったのだから、母の代わりに精一杯生きないと。そう、助かったその晩に決めてから、毎日を全力で楽しんでいる。

しかも、ルナは魔法の適性があつた。まだ魔力は少しばかり少ないが、魔力を鍛えながら歳をとっていけば全盛期のひなた以上の魔力を得られる程度の素質があることが判明したため、今はひなたに魔弾と魔法の使い方を。ミラにも魔法と、それから剣の特訓を付けてもらっている。

ひなたは、あんな感じのニートになり、しかも弱い事には弱い、魔弾使いの中では中堅以上には位置する程度の実力はある。そして、魔弾使いというのは魔法にも精通しているため、魔法もミラみたいな魔

法剣士よりも分かりやすく教えることができる。ミラも魔法を嗜み、剣を主流としている魔法剣士だ。魔法も多少なら教えられるし、剣に関してはバツチリと教えられる。

そんな師に恵まれた彼女は恐らくこれから先、大物になるとミラは言う。イヴァンも、時々様子を見に来ては、ミラ以上になるかもな、とルナを褒めてくれている。

人生のどん底を乗り越えた彼女の今は、とても輝いていると言えた。

「ふんふふく……あれ？」

そんな彼女が、近道にと通った路地裏で何かを見つけた。

路地裏を通ってガラの悪い男や人攫いに絡まれかけても、彼女はもういい意味でも悪い意味でも人類トップクラスの人外の一人、ミラの身内だと知られているので絡もうものなら後で死ぬよりも残酷なナニかが襲ってくるのは分かっている。だから、誰も絡みにいかない。

それ故にルナには路地裏で見つけたものを手に取ってみてしまう程度の余裕があった。余裕を持っていてしまった。その落ちている物は本で。その本は、俗にいうR―18な内容を多分に含んだ物で。

「えつと……わつ、こ、これ……」

丁度性的な事に興味を持ったルナにとっては大分危ない物で。しかも、その内容はノーマルなものではなくちよつとアブノーマルで。同性愛についてが書かれています。

ついでに言えばそれがGL。ガールズラブに関しての濃厚な物が書いてあつて。

「……こ、これ、ひなたお姉ちゃんとかシャーレイお姉ちゃんがやってる事だよね」

本来なら、こんな歳の少女が見たらショックを受けたかもしれないが、彼女は九歳の頃にひなたがシャーレイに犯されて気絶している所を見ているし、こつちに来てからも何度か夜中に起きると見てしまうときがある。最初は、シャーレイがひなたを苛めているのかと思つたが、ひなたが気持ちいいとか言っているし普段から仲もかなりいいのでそんな事はないとは思つた。ミラも時々拉致られてきて強制的

に混ぜられていたし。

だが、その行為が一体何なのかは分からなかった。唯一分かったのは、あれは大人のしるかやっっちゃダメな行為だという事。ボカして聞いてみたら動揺したひなたからそうやって言われたから。

「……え、えっちな事、なんだよね」

そんなエッチな行為ではあるが、この世界においてその知識を蓄える方法はあまり多くない。

偶々そういう事を小耳に挟むことや、小説などで知るか、親から聞いてしまうか、偶々その行為をやってしまったそこから色々知ってしまうか。シャーレイは偶々触った結果知ってしまったタイプであり、ミラは小耳に挟んでから小説を読んで知ったタイプだ。ひなたは言わずがな。

そしてルナに関しては、未だに無知。しかし、ひなたとシャーレイ、時々ミラがやっていることが今の自分には早い事だという事だけは分かっていて。

「……………」

そんな未知でありながら既知であるものだから思わずルナは読み進めてしまう。

どうしてそんな物が落ちているのかは分からないが、しかし好奇心旺盛でありながら未知の解読は楽しみとも言える年頃のルナはペーヅを捲る手が止まらない。心臓が高鳴って自分が悪い事をしているという自覚を持ちながらも、手が止められずにいる。

そんな中でふと思う。そういえばひなたと最初に会った時。彼女に対して自分が何も知らずにやったことを。

「あつ……………」

あの時の彼女の様子や自分のやったことを思い返して、そして赤面する。

ひなたは、ルナの行為で。

「ん？」

そうして顔を赤くしながらも本を読み進めていく中。彼女の後ろに近寄る一人の人影。ルナはそんな陰に気が付くことができずに本

を読み進める。

人影はそつとルナに近づき、そして彼女の肩に手をかける。

「何してるのさ、ルナ」

「わあ!!?」

ルナはいきなり声をかけられ、反射的に本を閉じて自分の背中で隠しながら振り返る。

そこに立っていたのは。

「ひなたお姉ちゃん……?」

「そだよ」

もうルナとあまり身長が変わらなくなってきた成人済みの隻腕の女性、ひなたがそこには立っていた。どうやら部屋着から適当に着替えて来ただけのようで、この二年間で伸びて、三年前、彼女がこの世界に来たばかりの時と同じように膝下を超えて足首に届く寸前の綺麗な長髪は少しボサボサで、何となくあった方が知的に見えるし小説家としてそれっぽいからと家でだけかけ始めた伊達眼鏡もそのままだ。

ルナはそんな彼女を見て、先ほどの本と自分の記憶で恥ずかしくなり顔を赤くするも、なんとか平静を装う。

「ど、どうしてここに……?」

「本屋への近道だからね。資料集めだよ、資料集め」

どうやらルナが出てすぐに家を出たらしい。ルナは笑いながらそれを聞き、ひなたに見つからないように本を適当な場所に置いて隠した。

「そ、そうなんだ。じゃあわたしはもう行くから!」

「あいよ。沢山遊んでおいで」

ルナは吐き捨てるようにそう告げると、そのまま走り去っていった。それをひなたは手を振って見送り、すぐにルナが立っていた場所に立った。

そしてすぐにルナが隠した本を見つけた。生憎、目の悪さが命取りとなる事を生業としてきた彼女にとっては子供の知恵程度の隠蔽はほぼ無意味であり、彼女が何を持っていたのかは分からなかったが、

何かを隠したのだけはすぐに分かった。なのでそれをサツと発見したのだが……見て若干後悔した。

「うわ……エロ本。さてはどっかの子供が買ったけど、結局恥ずかしくなつてここに捨てたか隠したか」

ひなたはどうしてここにそんな本があるのかを推測しながら中を読む。

読んで、後悔した。

「……これ、ルナの教育的に大丈夫か……？ いや、年齢的には別にいんだけどさ。ボクだってそんなぐらゐの時には知識はあつたわけだし」

これでルナが性的な事に興味を持って誰かと適当に……なんてことは無いだろうが、それでも自分たちの行為がそういう事であり、更にそういう関係だというのはバレてしまっただろう。初回はルナに思いつきりバレていた訳だし。

溜め息一つ吐き、本を放り投げてから起爆銃を抜いてジェノサイドバスターで本を塵に返す。

これはちよつと悪い予感がする、ともう一度溜め息を吐いてから彼女はルナが走つていった道を通つて本屋へ資料集めに向かうのだった。

夜中。ひなたは寝室ではなく、あまり使っていない自室で小説を書いていた。

資料を読んで試してみたい事。書いてみたい物が増えた彼女は今日は徹夜で小説を書こうと決め、シャーレイには後で寝るからと告げ、自室で一人ペンを握っていた。

隻腕故に文字が書きにくく、更にはかなり汚い文字にはなつてしまっているが、文明の利器であるタイプライターは隻腕故にペンよりもかなり遅くでしか書くことができず、パソコンなんて便利な物は存在しないため結局手書きとなるのである。

しかし、それでも今日は良い感じだった。自分の中の妄想と、現代の知識がよい感じに混ざり合ってこの世界の創作でも滅多に見ない科学だけが発展した世界でのSFファンタジーが繰り広げられている。これはもしかしたらいい作品になるんじゃないか、なんて自画自賛しながら書いていると、急にドアから音が鳴った。

誰かのノックだ。それに気が付き、ひなたはすぐに書く手を止めた。

「誰？ 入っていいよ」

まさか拒むわけがない。ひなたは扉の前で立っている人を招いた。

大方、何かを相談しに来たミラか、それとも夜食でも作ってきてくれた愛しのシャーレイか。どっちかを想像しながら一人で扉が開くのを見て、そして驚いた。

そこに立っていたのはルナだったからだ。

「ルナ……？ どうしたの、こんな遅くに」

一応置いてあるソファに座るようにルナに言い渡すと、彼女はどのようにか顔を赤くしながらソファに座り、その横にひなたが座った。

「どうしたのさ。誰かと一緒に寝たいのなら寝室に行けばいいのに」

ルナは自室を貰ってそこで寝ているが、怖い夢を見たり過去の事を思い出すと時々ひなたとシャーレイの寝室か、ミラの部屋に行って一緒に寝るときがある。だから、今日も怖い夢でも見たのかと思ったのだが、それならひなたの自室には来ないはずだ。そもそもルナがひなたとシャーレイの自室に訪れる事はほぼ無いため相当珍しい。

「そ、その……」

彼女はもじもじとしながら、顔を赤くしてひなたから視線を逸らす。

何かあったのか。よく分からないが、ひなたは一応眠気覚ましに淹れておいたコーヒーを飲みながらルナが話をするのを待つ。ルナは暫くして意を決したのか顔を赤くしながらも口を開いた。

「わ、わたしに、えっちな事してほしいの!!」

「ぶっ!!」

そしてコーヒーを吹き出した。

ルナの言葉を聞いた瞬間、ひなたはすぐに開いたままだった自室のドアを全力で閉じ、コーヒーを机の上に置いてからタオルで自分の口を拭いた。

「ル、ルナ!? 一体どうしたの!? いやホントにどうした!」

「わ、わたし、その……今日えつちな本読んじやって……それで、その……興味……」

「オーケーオーケー! それは分かった! 分かったから落ち着こう!! 落ち着いてさっきの言葉を撤回して寝よう!!」

落ち着くのはお前だ、とツツコミ役が居ればきつとそう言っただろう。それぐらいにひなたは焦っていた。

眼鏡を外し、赤くなつた顔を隠そうともせずルナの肩に手を置きながら説得するひなた。しかし、ルナの見解は変わらないようだった。

「だ、だって……ひなたお姉ちゃん、いつもシャーレイお姉ちゃんやミラお姉ちゃんといつちな事してるし……」

「そういうのは好きな人とじゃなきゃしないの! 結婚してもいいって思う人と大人になってからしか!」

子供を産んでもいいと思つた人、というのも付け足そうとしたが、流石にひなたは二人の子供と言えど孕みたくなくてないのでぐつと堪えた。

だが、ひなたの言葉はそれでもちゃんとしている。娼婦やサキユバスなら考えも違ってくるのだろうが、一般的な意見としては間違つてはいない。こういうのは大人になってから結婚してもいいと思うような好きな人とするのが普通だ。だから、ひなたの言っていることはこれと言つて間違つてはいない。いないのだが。

「わ、わたしはひなたお姉ちゃんの事が好きだし……それに、シャーレイお姉ちゃんといつもしてたじゃん!」

「ぐっ!」

大人になってから、というのを言わなければよかつたと思つた。

シャーレイはああ見えてもまだ十六歳。ルナと会つた時は十四歳だ。ひなたがロリコンのレズという中々に業の深い大人の烙印の一

つを押されるには十分な年齢だし、ルナの言う通りシャーレイは大人という歳ではない。

だがそれでも。

「ルナ。ああいうのは本当は女の子同士じゃやらないの」

「でもひなたお姉ちゃんはしてるじゃん」

「それはボクが異常だからだよ。普通、女の子は男の子が好きになるものなの」

普通なら、男は女を好きになるし、女なら男を好きになる。それとは外れる事を異常とはなるべく言いたくはなかったが、しかしルナの性癖をこの歳から歪めるなんてできるわけがなくひなたは異常という言葉を使う。

彼女が恋人として男だろうと女だろうと連れてきたとしても、認める気はある。だが、それを自分たちにぶつけてくるのは流石に考えられなかったし、受け入れるには抵抗があった。何せ、ルナはまだ十一歳。ひなたとは二倍も歳の差が存在するのだ。そんな少女を手籠めにしたなんて、流石に業が深いにもほどがあるし天国の恩人の方々に申し訳が無い。ついでに別世界で今も生きているであろう両親にも申し訳ない。

ロリコンのレズという烙印がより一層深くなってしまふ。

だからこそ、今はルナを一旦拒絶する。そのためにキツイ言葉も、普段言わない言葉も言わない。そのつもり……なのだが。

「いやー！ わたしは本気なの！」

「本気って……でもルナはまだ若いんだし、ちゃんと考えて」

「わたしはひなたお姉ちゃんが好きなの！ あの時、ボロボロでミラお姉ちゃんに狙われて、助からないって言われたのに一生懸命わたしを助けようとしてくれたひなたお姉ちゃんが！」

ルナの記憶の中にあるひなた。背中を見せ、体も心もボロボロになっても、しかし最後まで一切諦めようとしなかった。そして、ミラとイヴァンという人外二人に狙われても自分の身よりルナの身の心配をして立ちはだかったひなた。当時の彼女の背中は今でもルナの脳裏に焼き付いているし、明らかに面倒の塊で会ったルナに対して辛

そんな顔を見せなかつた彼女は、ルナの心の中に火を付けるための着火剤としては十分な物だった。

こんな世界だからこそ、彼女の行動はどんな男よりもカッコよく、そして強く見えた。それをあの本を読んでから友達と遊ぶ間に自覚し、そして今のルナの行動に結びつけた。

「そ、んなこと言われても……」

だが、ひなたはシャーレイが好きだ。シャーレイに惚れている。

恋人、と呼べるのかは分からないがそれを証明するような行為はしているし、シャーレイもひなたが好きでそういう事をしている。告白と呼べる告白はしていないが、それでも実質恋人のような関係になっているのは事実だ。もしも同性婚ができるのなら、流れでしてしまう程度には二人の関係は深い。

だからこそ、ルナの言葉を素直に受け取れない。ルナを無理矢理突っぱねるか受け止めるか。その二択しかひなたにはない。

「ボクは……そんな、ルナに好きになってもらうような人間じゃ……」

「むう！　えい!!」

「あだっ!？」

そんな二択の中、どちらかを決めあぐねる中、ルナは煮え切らないひなたに飛びかかり、そのままひなたを押し倒した。身長が同程度な二人だからこそ成立した押し倒し。急に押し倒されたひなたはそこまで積極的な行動に出たルナに驚き、ルナはひなたを押し倒してしっかりとひなたの手を押さえつけた。

「嫌でも無理にしちやうもん。いつもひなたお姉ちゃんってこうやってシャーレイお姉ちゃんに押さえつけられてるし。ひなたお姉ちゃんが嫌でも無理矢理しちやうもん!!」

「いやいや……まずルナには無理だよ。ほら」

「あっ」

だが、押し倒されたところで歳は二倍近く離れた子供と大人。それにひなただって鍛えているのだから子供のルナに手を押さえつけられても簡単に動かすことができた。例えこのままどこかを触られても適当に起き上がってルナから離れる事は可能だ。

故にひなたはこの状況には特に動じない。しかし、同時に困っている。

ここまで本気だとは思わなかった。この表情は、確かに一時の感情や何かで作れるような物じゃない。きつと、本気で自分の事を好いているのだと分かってしまう。

「はあ……ルナ、落ち着こう？ ルナは焦りすぎてるよ」

ひなたはそつとルナの頭に手をやって、自分の薄い胸板の上に彼女の頭を乗せてからゆっくりと彼女の頭を撫でる。

「どつちにしろ、こういう事はルナには早いよ」

「……でも、わたし、ひなたお姉ちゃんの事が好きだし」

ルナの言葉をだから、の一言で遮り、そして上半身を起こす。

そのままそつと首を動かしてルナの唇に唇を合わせた。ただそれだけの軽いキス。

「今はこれで我慢して、ね？」

ひなたの取った行動は、先延ばし。

一時の感情で決めるのではなく、ルナの決意を今は水に流して時間が経ってから。それを笑顔で告げる。

「へ？ え、あ……う、うん」

そしてルナもキスに流されてそのままひなたの言葉に同意してしまう。同意してすぐに、キスされたのだと自覚して顔を真っ赤にしてひなたの胸板に顔をうずめた。

どうしてこうなったんだろう。ひなたはそう思いながら天井を仰ぎ、自分の胸を弄ろうとそつと手を動かし始めたルナの頭に手刀を落とした。果たしてこの選択は良い事だったのか悪い事だったのか。

きつと、十一歳の女の子にキスをしてそれっぽい事を言ってしまった時点でギルティなのだろうと、ひなたは一応自覚していた。

それからというもの。

「ひなたお姉ちゃん、行ってくるね！」

「あいあい。気を付けるんだよ」

ルナはあの時のようにひなたに迫ることはなくなった。ただ、ちよつと困ったことが起きた。

「……ひなたお姉ちゃん、いつものしてよ」

「うっ……わ、わかったよ」

どこかへ出かけるときはいつもひなたにキスを迫るようになったことだ。一度拒否したらわんわん泣かれてしまったせいでもう断るにも断れなくなってしまった。

仕方なく彼女にキスをする、彼女はいい笑顔でそのまま外へ出ていく。それを手を振って見送り、天井を見上げる。

どうしてこうなったと。そしてやっちまったと。そう思いながら。

「これはどういう事かな、ひなたちゃん？」

「……説明してもらおうかな、ロリコンさん」

そして後ろからいい笑顔で自分の肩に手を置いてきた二人にはどうやって説明すべきか。

少なくとも、いずれ大きな選択を迫られることになるのは目に見えるので、ひなたは過去の自分の行為を若干悔い、そしてルナの告白を突っぱねなかった自分を恨むのだった。

ミラ前日譚

これは、ひなた達とミラが出会う、僅か数日前の事。

ミラはとある依頼を駆除連合にて受けた。それは、とても意外な物であり、報酬も高額であり……魔獣の専門家が投げたという奇特的な依頼だった。

己の中の魔獣を退治してほしい。それは、最早意味が分からない言葉だったが、ミラとしてはどうせすぐに終わるだろう、という樂觀的な心情だったため、特に何も考えずにその依頼を受けた。受付ではミラに対して本当にいいのか、という視線を投げた受付嬢が居たが、いつも通り無口なミラはそれを気にせずに手続きを終わらせた。

そして、受付でその他の簡単な説明を受けた。

どうやら、この依頼をした女性はつい先日、水のような魔獣が人の内側から爆散させたのを見て、逃げようとした所水の魔獣が彼女を襲い、己の中に入ったと言う。正直に言えばアホらしいし、どんな夢物語だと言いたかった。だが、駆除連合はそんな視線を受けてとある言葉を漏らした。

それは、最近変死体が多く発生しているとの事。大体、一週間に一度のペースでまるで内側から爆発したかのような死体が大量に出現しているらしい。最初は腹を内側から爆発させられたかのような死体だったが、それは後々酷くなっていき、つい最近は全身が爆発した死体が出てきていたらしい。

何でこんな事を教えたのかを聞けば、どうやら今回の依頼はそれと直結しているのではないかと考えているらしい。が、駆除連合はあくまでも依頼を斡旋するだけの存在。そんな推理を元に今回の依頼をした女性を捕縛するという手配は取れないらしい。使えない権力しか持たない存在だ、とミラはそれを聞いて思ったが、今何を言っても変わらない。依頼を受けたという証だけを貰い、ミラは件の女性の住居へと出向いた。温泉街の外れ付近にある家に女性とその子供は住んでおり、ミラは一人そこへと向かい、インターホンを鳴らした。

「はい、どなたで……貴女は？」

「……依頼を受けた」

ミラは端的にそう言うとは出てきた女性に向かつて紙を見せた。それは依頼を受けたという証明であり、それを見た女性はまるで何かに安堵したかのように息を漏らすと入ってくださいとミラに告げた。

それに対して特に疑問を持たず、ミラは女性の言われるがままに家の中に入った。

「……お母さん？ そのお姉ちゃん誰？」

「お母さんのお友達よ。ちよつとだけお話しするから、お外に行つてくれない？」

「えー、なんで？」

「いいから。今日はルナの大好きな物を作つてあげるから」

「……わかった」

女性の子供、ルナはその言葉を聞いて家の外へと出て行つた。ミラは良かったのか、と視線で聞くが、女性は俯くだけ。

「……簡潔に聞く。要件は」

「依頼に書いてあつた筈だけど……」

「……信じられない」

「本当の事よ」

「……」

ミラはその言葉を聞いて言葉を詰まらせた。夢物語と現実の区別が付いていないのかと溜め息を吐きたくもなつたが、女性は自らの言葉を訂正することはなかった。

言葉を話さない分、人の態度に関して少しだけ鋭い故か、女性は嘯いているようには思えなかつた。が、どちらにしろそんな魔獣の存在は十年以上駆除連合で戦ってきた身でも聞いたことも見たこともない。そんな危険な魔獣がいれば、確実に駆除連合が動いて見つけ次第率先して殲滅にかかるための依頼を出している筈だ。

だから、信じられない。今までの常識があるからこそ、この言葉を信じることが出来ない。

何も言わぬままミラは居間の椅子に座らされ、その対面には女性が座り、お茶を出した。

「……どっちにしろ、依頼。精一杯は尽くす」

「そう……ありがとう、優しいのね」

「……仕事だから」

その優しいという言葉はこの夢物語に付き合った事に対する事なのか、突拍子もない事を信じてくれたと信じた事に対してなのか。

どちらにしろ、受けてしまった依頼だ。精一杯は尽くさなければならぬ。お茶を一口啜り、考える。

「……………心当たり」

「え？」

「……………一週間前の、変死体」

「……………ああ、私の前の犠牲者の事」

一週間前、もしくはそれ以前に発生した変死体について心当たりはあるかどうかを聞いた。その結果は、是。

その言葉にミラは薄く反応する。

まだ夢物語を口にするかと。だが、そういう相手からの依頼というのは幾らか引き受けたことはある。まだ短い人生の中でそういった面倒な輩の相手をしたことは、少なくない。妄想から守ってくれと言ってくる薬中故に幻覚を見ている男。恋した男の手足を斬ってでも連れてこいというヒステリックな女。犯罪に手を貸せと言ってくるグループ。その他諸々。トップクラスとして名を馳せる事も悩みどころなのだと思うってしまうくらいには、ミラの人生は少し濃すぎた。そうした物が、ミラのこの人格を作り上げたとも言えてしまうのだが。

「……………前の犠牲者？」

だが、こういう時に無為にしてしまうと相手がヒステリックを起こす可能性がある。そうした場合、無理に傷つけてしまつては自分の名に傷が付く。そうした場合、これからの人生困るのは自分だ。

何せこの家業は信用で成り立っている節もある。特に、こうした人からの依頼については。よっぽど相手に異常がある場合でもない限り、依頼主に手をあげるのはこれからの人生に苦勞を作る可能性がある。特に、こうして一度依頼を受けて署名してしまつた以上は、よっ

ほどのことが無い限り断るのは論外だ。

故に、話は聞く。それからこの先の事を決めればいい。幸いにも、この女性……スプラウト婦人はこれと言ったヒステリックは起こしていないようではあるし。

「偶々私が出かけた時に苦しそうにしている人を見つけたんです。なので、介抱しようと思ったたら急にその人が……」

内側から爆発したと。

信じられてたまるか、とミラは小さな溜め息に乗せて心情を溢す。

そんな事をする魔獣なんて聞いたことが無い。もし本当にその魔獣が居るのなら、今頃凶鑑にはしつかりと名前が載り、対処法などが見つけられているはずだ。それに、この変死体はつい最近から見つかり出した物。新種の魔獣がそんな事をしている、なんて言われても信じられる訳がない。

「……証拠がほしい」

もしこれが夢物語なら、証拠なんて出てこない。

だからそう告げる。証拠が出てこなければ、これは夢物語だと言っ
告げてこの家を出る。後は駆除連合でいつも通り、変な依頼だったと
告げて断る。後はいつも通りだ。

きつと出てこない。そう確信めいたものを感じながらミラは証拠
が出されるのを待つ。きつと一時間待っても出ないだろうと思っ

だが、スプラウト婦人は立ち上がると、そのままどこかへ歩いてい
き、そして戻ってきた時には包丁を手にもっていた。

何を、と思った矢先、彼女は自分の首に包丁を突き立てた。

「っ!?!」

注意していれば、手を掴んで止められた。だが、それを急にやられ
てしまったのは、いくらミラでも対応はできない。包丁はそのまま彼女
の首に突き刺さり、鮮血が舞う……ハズだった。

しかし予想は外れた。

スプラウト婦人の首には、水のような物が急に浮かび上がり、それ
が包丁を受け止めて彼女の首を守っている。そんな魔法は聞いたこ
とが無い。存在するのなら、ミラ自身が使っている。

「これが証拠です。私の体は、この魔獣によって常に守られています。体が爆発するその時まで」

「……」

まさかそんな事が、と戦慄する。

だが、目の前のことは現実だ。試しにミラが全力で彼女の薄皮一枚を傷つけようとしたが、結果は同じ。氷の魔法を使って生み出した針を射出しても、それは簡単に防がれた。きつと全力で斬れば魔獣もろとも斬る事は可能だと思う。だが、ここでそんなスプラッタを起こす気にはなれなかった。

宿主を守る魔獣。そんな存在聞いたことが無い。最早聞いたことが無い、前例のない事だらけだ。

「……どうしてそれが内側から爆発すると?」

だが、もしかしたらその魔獣は宿主を一生守り続けて寄生するだけの生物かもしれない。

それなら生かしておく口実にはなる。放っておく名実になる。

しかしスプラウト婦人は縦に振り、自分の腕を見せた。

「これに寄生されてから、常に体中に痛みが走っています。そして、時間が経つごとに魔獣はわたしの体から出てこようとしているのです。それに、体のどこかを傷つけられたのか、今日血を吐きました」

彼女の腕には、いくつもの傷が走っていた。

その傷が刃物や爪による自傷及び他傷ではない事はミラは一目で分かる。腕にできた、まるで内側から裂けるように走っている傷。それが普通では生まれえない傷であること。そして、それを覆い隠すように先ほどの水が覆っている事。そして、その傷は今もゆっくりと、目で見ても分かるか分からないか程度だが、広がり続けている。

そして、スプラウト婦人が一つ咳をすると、そこからは血が飛び出す。

「きつと、爆発をしなくても、私の体は真つ二つに裂かれる事でしょう。そして魔獣は私の体から出て、次の犠牲者を生む」

「……嫌な夢を見ている気分」

思わず頭を抱える。

これが悪夢じゃなくて何と云うか。

こんな魔獣を、剣を振るうしか能がない自分がどうしろというのか。

「寄生されてから二週間が限界です。何となくですが、分かります」

「……期限は」

「三日です。その間に、この魔獣をどうにかするか……私を見捨てて、ルナの事を……娘の事を、どうにかして一人前になるまで育ててもらうのが、依頼です」

三日。その期間はあまりにも短い。

だが、依頼は既に受けてしまった。そして相手の言葉が妄想や幻覚幻聴の類ではないとすれば、やり切るしかない。やり切らないと、きつと自分の信用が落ちてしまうから。

「……精一杯は尽くす。でも、子供の方はあまり力になれない」

きつと、施設に入れて自分か父が責任者になるのが精一杯だろうとも告げる。いや、きつと責任者になるのも子供の態度次第では断る可能性がある。サラツと依頼の内容が付け加えられているが、ミラの思考は既にこの魔獣をどうするかにシフトしている。

だが、そんな言葉をスプラウト婦人は受け入れる。それで構わないと彼女は首を縦に振った。

暗にミラの言葉は、貴女の事は諦めると言っているのと同義だった。だが、それでも構わないと彼女は首を縦に振るのだ。きつと、ミラが同じことを面と向かって言われれば、こんなにあっさりと首を縦には振らない。故に、息を呑んで立ち上がった。

「……早速調べ物をしてくる」

「お願いします。ですけど、一度だけでいいですので、娘の事を一目見に行ってくださいませんか？」

更にその言葉を聞いて、ミラは察した。

この人は、未来を諦めている。生きる可能性がゼロに等しいのだと分かっている。いや、きつと今日までの経過で理解させられているのだ。

きつと、元から助かることを期待していない。

「……分かった」

それを察して、理解できて、そして飲み込めてしまいがゆえに、頷く。

そしてスプラウト婦人はルナを呼ぶ。その声に応えてやってきたルナは、これから天涯孤独になるかもしれない身としてはまだ小さい。いや、小さすぎる。

ミラも子供の内……いや、産まれてすぐに母を失い、父親であるイヴァンの手一つで育てられてきた子供ではあったが、ルナはそれ以上に厳しい現実に直面するだろう。若干の魔力は感じられることから、魔法使いとして生きる事は可能かもしれないが、この歳まで荒事を知らない子供が、そんな急に戦いに身を投じれるわけがない。

故にミラは、同乗した。彼女にこれから襲いかかるであろう困難に。

「……私はミラ・B・マイヤーズ。よろしく」

「え、えつと……ルナ・スプラウトです！ よろしくね、ミラお姉ちゃん！」

ぎこちない笑顔で挨拶すれば、ルナもそれに笑顔で応えてくれる。いい子だね、とだけ言って彼女の頭をそつと撫で、ミラは一旦宿に戻ってイヴァンと相談するために背中を向けた。それをスプラウト婦人は止めず、ルナは帰っちゃうの？ と無邪気な言葉を投げかける。

用事があるから、と小さく返し、自分を見送りに追ってきたスプラウト婦人に質問を投げる。

「……父親は？」

「蒸発しました。それをルナは知りません。いつか帰ってくると信じています」

ルナが居ないから聞いてみたが、案の定だった。妻がこんな状態なのに仕事に行く男なんていない。いるのだとしたら、その男は人でなしだ。だから、父親は蒸発したか死んだのだらうと思った。

案の定の結果に、ミラは何も言わなかった。

「……何とかしないと」

そして、ミラはこの日から二日間、イヴァンと共にこの魔獣をどうにかするために奔走した。

三日以内に帰ってこれる距離を走り回り、自分の疲労なんて知らず、そのまま走り続け、イヴァンに諦めろと言われても諦めずただただ我武者羅に走った。

だが、成果は得られなかった。

何の成果も得られず、どうしたらいいのかもわからず、ミラは温泉街に戻る。

魔獣の名称すら、対処法すら何も分からず。ただ分かるのは。思いつくのは、彼女を自分の全力をもって殺し、魔獣を宿主であるスプラウト婦人ごと葬るか、自分の魔法で彼女を氷漬けにしてあの魔獣の対処法が分かるまで彼女を冷凍保存……もしその対処法が分からないのなら、未来永劫、彼女を凍結して封印するという手だけだった。それが、今まで荒事をして生きてきた彼女ができる最大限の、スプラウト婦人を人間として殺す手段だった。

それを伝えるためにミラはイヴァンと共にスプラウト婦人宅を訪れる。

しかしスプラウト婦人は表に出てこない。

「おいミラ。この家……：：～」

「……おかしい」

もしかしたら出かけているのか。そう思い、そつとドアノブを握るが、鍵はかかっていたいなかった。

どうして。そう思いながらも一言謝り、ドアを開ける。

——そして感じとったのは、強烈な血と肉の臭い。悪臭とまで言えるそれが、家の中から漂ってきたのだ。それを嗅いで、ミラは顔色を青くする。

「つ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～」

ミラが家の中の悪臭元へ向かって走る。

最悪の事態だけは避けてくれ。せめて、あの子を……：：：：～託されたあの子だけは無事でいてくれと願い、そして悪臭の元……：：～恐らく寝室であ

ろう場所にミラは辿り着いた。

そして、絶望した。

「みら……おねえちゃん？」

その部屋には、血に濡れたルナと、何か爆ぜた跡があった。

部屋のベッドから赤色の何かが飛び散り、壁に、床に、窓に、天井にこびり付いている。それが血と肉で、ルナはそれを真正面から被っているのを知り。そつとルナの手を取って剣で薄皮一枚を傷つけようとした。

結果は、それができず。水の膜がそれを防ぐだけだった。

「そんな……そんな、事って……!!」

スプラウト婦人は、時間を見誤った。

いや、もしかしたら水の魔獣が意図的に時間を短くしたのかもしれない。

結果、宿主はスプラウト婦人からルナへと移行した。たった九歳の、幼い少女が余命を突き付けられたのだ。それがどれだけ残酷か。父が蒸発して、母が死んで、次は自分が。たった九歳の身に降り注ぐ絶望としてそれは大きすぎる。

でも、どうにかしないといけない。これ以上の被害を食い止めるために手を打たなければならぬ。

きっとスプラウト婦人よりも小さな彼女は、二週間近い時間生きる事は許されないだろう。いや、きっと見積もる時間は短い方がいいと思ひ、調査をイヴァンに全て投げてミラはルナに聞けることを聞いた。

結局二日かかったが、ルナはこう言った。

「よくわかんないけど……体の中で、何かが大きくなっていくの。どれくらいのパース？ えつと……多分、あと五日あれば、わたしの内側全部に広がると思うの」

ピツタリ一週間。それがルナに残された時間だった。

だが、何も言わずに最後の日。何も知らない彼女を殺せば全てが終わる。きつと、それが彼女の尊厳を守りながら彼女を殺す唯一の方法だと。そう思つて。

しかし、ミラは気が付いていなかった。ルナはスプラウト婦人の死ぬ瞬間を見ており、その原因があつた魔獣にあることを知っていると。五日の内に自分は母と同じ結末を辿るのだと分かっていると。

それを理解したのは、それから二日。ルナの余命が三日になった時。ミラはスプラウト婦人の言葉から得られた情報をもとにルナがこれから数日以内にどうなるかを推理し統計を弾き出した日の事だった。

「……ルナ、今日も来た……あれ？」

宿からルナの家に通い、四日目。せめていい思い出で彼女の人生を締めくくろうと思ひ、彼女に会いに来たミラは、もぬけの殻になったスプラウト宅を見て声を出した。

そしてミラはルナの書置きを見つめる。ごめんなさいとだけ書かれた書置きと、開けたままになったルナの寝室の窓。消えている彼女の靴。それだけ見れば、ルナがこの家から逃げ出したのだと理解した。同時に、彼女はまだ死にたくない。死にたくなくて、どうにかしたくて、今我武者羅になつているのだと。その全部を、たった一枚の書置きから悟った。

だが、そんなルナを放っておけない。放っておけば、彼女は……

「……ルナ、今追うっ！」

ミラは走り出す。イヴァンを呼び、そしてルナの消えかけている足跡を追い、走る。まるで死期を悟った猫のように逃げ出したルナを追うために。それでイヴァンからの手伝いは終わりだと言ひ、無茶を言つてルナを共に探した。

そしてミラは数時間後にルナを見つめる。ひなたとシャレーイに保護されたルナを。きつと、彼女は夜通し走っていたのだと悟つて。

ミラは、悪役になつてでも。この行動が間違つているのだとしても、彼女のために彼女を殺す。そう覚悟し、自分に敵対心を向ける少女達へと剣を突き付けるのだつた。